TC# 266232

East
Asian
Library

HP
95
J2 A35
v.6
no.5
(1933)

UNIVERSITY OF CALIFORNIA-LOS ANGELES
L 010 452 681 9

9-1248

富士

大正五年九月十五日第三種郵便物認可　昭和八年四月三日印刷納本
昭和八年五月一日發行（毎月一回一日發行）　富士　第六巻　第五號

大増頁——讀物大特輯

面白痛快傑作選

五月號

痔疾はなぜ治らぬか？……

◇誤つた療法、凡藥によつて痔の解決は至難なり
◇不治を憂ふる前にまづ正しき療法を會得せよ

痔疾は難病の割合に治り易い病氣である、それが五年十年と苦しんでゐる人が多いのは、多くは實際に即した治療法の正しい知識を知らぬ爲である。療法正しからずして痔疾の治る筈がないではないか……否むしろかうした姑息な手當が病氣をズンズン惡くするのである。

正しき治療こそ全治の第一歩也

しからば痔疾の正しい療法とはどんなものであるか、それにはまづ痔疾の原因、症狀、攝生、餘病との關係、季節によつて違ふ手當等の一切を知るべきで、しかる後正しい治療法を行はねばならぬ。

明快に光明を指示するもの

本書は痔疾一切の原因症狀治療法を最も平易懇切に説明し、ナゼ治らぬか、どうすれば治るかを明快に指示すると共に、同病者の僞りなき全治體驗記を併せ編輯せるものにして本書一讀は百藥に勝つて貴下を痔疾の苦痛より救ふ第一歩たることを確信す、切に一讀を乞ふ。

光明を指示する痔疾征服の羅針盤

四六判美裝

無代頒布

七十頁冊子

頒布方法

ハガキに富士讀者なる旨明記して左記へ申込め、一人一冊宛無代にて贈呈す。速かに一讀して病苦を逃れ、健康の光を仰ぎ給へ！

申込先　東京市日本橋區本町一丁目
玉置合名會社頒布係

富士五月號目次

△百合（表紙）……廣田百豐筆
△羅馬使節（折込口繪）……前田青邨筆
折込口繪「羅馬使節」解說……美術界主幹 浦崎永錫
△集ひ（原色版）　△花と蝶（寫眞版）

◇富士グラフ（グラビヤ及びオフセット版）……
△鯉幟（尾上柴舟歌）……一　△評判畫報……二
△可愛いですね……六　△紙上封切内外優秀映畫……八
△友邦シャム……一〇　△熱河討伐……二七　△熱河畫報……二八
△非常時美談行脚……三〇　△三陸大震災畫報……三四

◇ビクトリヤ女皇謁見の思ひ出……下田歌子……五五
◎青い空から（民謠）……大關五郎……三五
◎愛國者の歌……三上於菟吉……七六
◎程度問題（滑稽詩）……サトウ・ハチロー……一四六

戰線に散る聖い愛の花
屻れる花束……長田幹彦……三六

米海軍の策戰や如何に
米國太平洋艦隊……平田晋策……二六

熱血に躍る大義の旗擧げ
新田大草紙……大佛次郎……八〇

◎五寸釘寅吉とはこんな男……岩崎榮……一八二
◎三ブちゃんとヨーヨー（漫畫）……小寺鳩甫……一一四
◎無軌道船長（漫畫）……田河水泡……四三〇

冨士漫畫大笑館

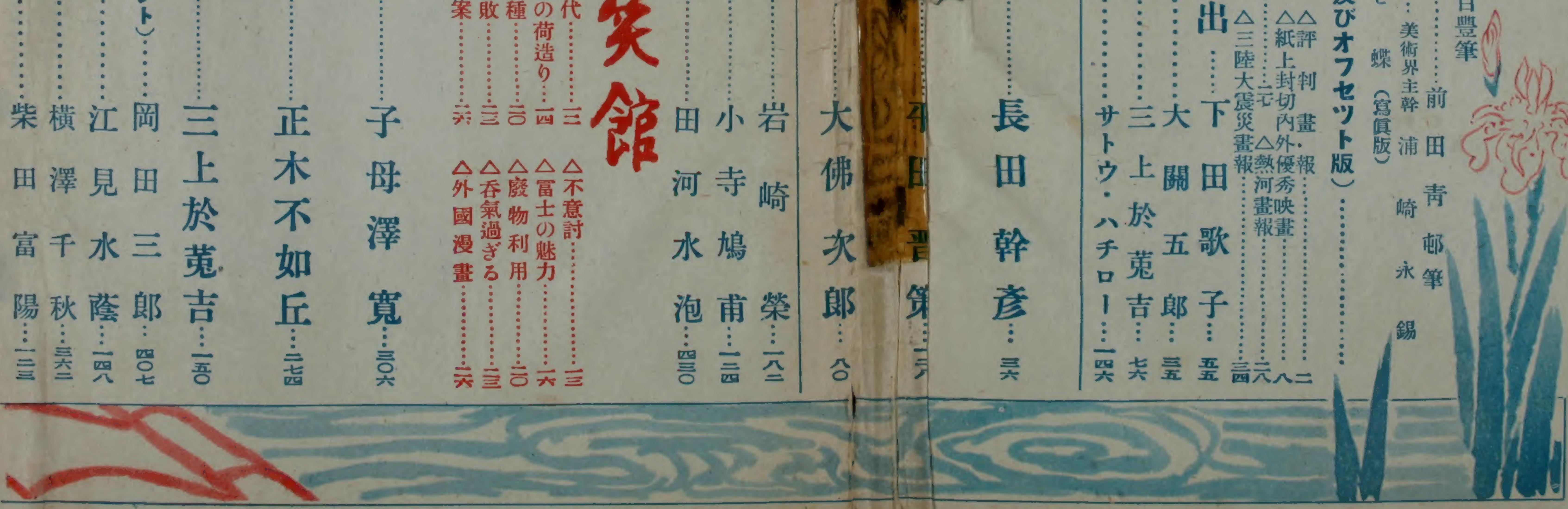
△釣ナンセンス……二　△ヨーヨー時代……一三　△不意討……一三
△女給戰術……一四　△ドロボー様の荷造り……二四　△冨士の魅力……一六
△五月の漫景……一八　△癪の種……二〇　△廢物利用……二〇
△女の引力……三　△惡戯の失敗……二三　△香氣過ぎる……二三
△騷動の起り……二四　△これは名案……二六　△外國漫畫……一六

娘十八天晴れの仇討ち
霞む峠ざんげ猿……子母澤寛……三〇六

ダイヤに絡む謎の貴婦人
ダイヤを落した女……正木不如丘……二七四

熱情の嵐、櫻田の血吹雪
森五六郎……三上於菟吉……一五〇

△煙草は御遠慮（ユーモアコント）……岡田三郎……四〇七
△大佛より大きな手（奇人物語）……江見水蔭……一四八
△目玉武士と我慢男（逸話）……横澤千秋……三六三
△蒙古王の草鞋（奇談）……柴田富陽……一二三



善は滅びず（林唯一畫）……佐藤紅緑…六〇
伊達事變（齋藤五百枝畫）……白井喬二…二四六
東京哀歌（山川秀峰畫）……加藤武雄…三八八
風流活人劍（羽石弘志畫）……野村胡堂…三六四
薔薇色の道（寺本忠雄畫）……中村武羅夫…四三六
愛の復讐（嶺田弘畫）……天狗太郎…四一二
晴曇（大橋月皎畫）……久米正雄…一七六
地に爪跡を殘すもの（細木原青起畫）……佐々木邦…二二
すてうり勘兵衛（鰭崎英朋畫）……村上浪六…一九二
蒼眸黑眸（富永謙太郎畫）……菊池寛…三四八
◎地獄極樂野球戰（マンガコント）……水島爾保布…一四四
◎櫻滿開（コント）……正木不如丘…一七四
◎甘井羊閑（短篇落語）……正岡蓉…三〇二
◎浮世川柳（川柳漫畫）……谷脇素文…一八八
◎笑話選……三二〇　◎藝界噂ばなし……三四四
◎娯樂室……三八四　◎愛讀者倶樂部……四五六

特輯 笑の探檢隊……三二四
△にせと本もの（漫畫）……冬木ゆか…二一九　△どつちの手柄（漫畫）……林京太郎…二四三
△思案に過ぎて（漫畫）……四〇九　△木火土金水（落語）……四五四　△偉人名家曰く集……一七四
△漢學者（寸篇落語）……三〇三　△豆知識……一〇八　△戀の玉章……一四九
△お金に因んだ話……三六三　△娘評判記（滑稽掛合）一八七　△動物づくし（歌訓）…一四五

大特輯 面白痛快傑作選
秋田蕗譽の饗宴（新作講談）大島伯鶴…四六四
思ひ詰めた男（新作落語）桂文治…四八〇
虚實混線珍婚記（ユーモア小說）益田甫…四八六
浮かれ蛸（落語喜劇）浮世亭多苦樓…五〇五
日本一の飯炊（講談）大河内翠山…五一二
◎愛國歌大募集……七八

Digitized by the Internet Archive
in 2014

https://archive.org/details/fuji65unse

羅馬使節（早稻田大學藏）

名物語 傑作畫譜（裏面の解說參照）

前田青邨畫

羅馬使節

『美術界』主幹　浦崎永錫

日本使節來る！

永遠の都ローマは今、薔薇の花の眞盛りなる三月二十二日（一五八五年）の金曜日、寺々の鐘は鳴りひゞき、家々の窓には美しい壁掛敷物がかけられて、青や赤や黄やいろ〳〵の色が綾なして居ります。遙かに、太鼓や喇叭の行進曲が聞えて來ます。人々はみな外に出て、東の國からはる〴〵と訪ねて來た日本の使節を迎へようとひしめき合つて居ります。――

天正十年正月、切支丹に歸依した九州の大友宗麟、大村純忠、有馬晴信の三大名は、羅馬に使節をおくることになり、此の選に當つたのが、十五歳になる少年伊東祐益（ドン・マンショ）、同年輩の千々石清左衛門直員（ドン・ミカエル）、この二人が正使、中浦ドン・ジュリアン、原ドン・マルチーの兩少年が隨員、日本名不明の邦人二名と都合七人。宣教師のワリニャーニ師、パテレンヌニヨ・ロドリゲス、通譯チエゴ・メスキータ等が案内役となり、長崎を出帆しました。其の頃の歐洲行は、今とちがつて、帆船に乘つて、貿易風を利用して行くのですから、容易なことではありません。丁度、日露戰爭の際バルチック艦隊が、極東に向つて來た航路を逆にすゝんで、ローマにつく迄、滿三年一ケ月と二日かゝつて、二萬餘浬の航程を終つたのであります。國を出る時は十五歳の少年も、もはや十八歳となつてゐたやうなわけ。朝から日本使節を待設けてゐた羅馬市民が、彼等の姿を北門ポルタ・デル・ポポロに見出したのは、其の日の夕方でありました。

『おう、何といふ立派な少年ぞよ』

みな聲をあげて賞めそやした。近衛騎兵が大旗小旗をひるがへして先頭にたつと、美しく着飾つた貴族や外交團や、緋の衣をつけた僧侶や、音樂隊が、それからそれへとつゞく――そのあとに、純白の肥馬にゆつたりと跨つた凛々しき日本美少年が、桃山風の美しい裝に、黄金づくりの太刀佩いて、威風あたりをはらつて進んで參ります。市民は使節に向つて、パラ〳〵〳〵と散華します、果ては感極まつて泣出すものがあります。全く畫に見るやうな美しさ。行列が法王廳につくと、サンタンゼロの城から砲兵隊が一齊に祝砲を發射しました。

法王グレゴリウス十三世は、この時八十餘歳の高齢でしたが、少年使節が法王の足元に禮拜するのをかう抱き起して、

『よく訪ねて參られた、どんなに待つてゐたか知れぬぞよ』

かう云ひ乍ら、親子のやうに其額に接吻しました。長い間待ちに待つた東方の使節が、到着したので、八十餘の老法王は、餘の喜と餘の感動との爲に、急に病牀につきました。老法王の貴賓である少年使節は、まことの父のやうに仕へ、夜も寢ないで看病をしたと申します。

到頭、法王は永遠の眠にとらはれました。法王が使節を子のやうに憐れみ、使節が、法王を父のやうに敬つた双方の情愛は、傳へて美談となつて居ります。

少年使節は、新法王の即位式に列し、六月三日羅馬を出發することになりました。二月餘滯在してゐたことになりますが、さて途中各所を見物して歩いて、旺んなる歡迎をうけつゝ、彼等が、長崎の港へもどつて來たのは、一五九〇年七月二十一日（天正十八年六月十六日）でありました。數へると丁度八年五ケ月餘、隨分長い旅でありました。しかし彼等が、若年の身をもつて異國に使し、日本は犯す可らざる國であるぞ、東洋一の文化の開けた國であるぞ、雄々しく美しく芳しき國柄であるぞと云ふ事實を中歐人の頭腦にきざみつけたことは非常なもので、彼等は期せずして、近世外交史上を花々しく粉飾したものであります。

彼等の功も亦大いなるかな。（本文は濱田青陵氏著『天正遣歐使節記』による）

×　　×　　×

此畫の作者前田青邨畫伯は、明治十八年一月二十八日岐阜縣恵那郡中津川町の出生、三十四年以來梶田半古畫伯に師事しました。大正元年文展第六回で三等賞をうけられ、大正三年に日本美術院同人となり、今日に及んで居ります。此の『羅馬使節』は、畫伯の傑作といはるゝもので、昭和二年院展第十回展覽會に出品し、畫壇の大喝采をうけて、院賞に値する名作だと評判されたものであります。後に、同じ筆致で『洞窟の頼朝』をかいたが、これも有名な大作であります。

（寫眞前田青邨畫伯）

集ひ

お山の大将が緊急會議を招集してゐるぞ。大きいのや小さいのや、鼻の低いのや、どん栗眼。御覽、顏つき手つきの無邪氣さ、はて何事がおこつたのやら。

此の繪はメリー・バシキルチエフ女史（一八六〇―一八八四）の筆、一八八四年の佛國美術展覽會に出品され、全歐洲の人氣を呼び、女史の死後、國家に買上げられ、現在ルクセンブルグに保存。

この繪に就いては女史の當時の日記を見るとよく分る。

『四月四日、木曜、吉日。一番年上が十二才位、一番年若いのが六才位、向ふを向いてゐる一番丈の高いのが巣を持つてゐて、他の子供達が色んな恰好をして、眺め入つてゐる。この繪は全く平凡な描寫かも知れないが、この子供達の頭の恰好、顏付きは實に面白く描けてゐる』と―。

女史の生涯は二十四年の短いもので、ヒステリー的激情に惱まされた不幸な天才の一人であつた。

花と蝶

懸賞當選　千葉　石川春光寫

岩里別府淋藥

りん病

亡國病を撃滅せよ

待望の治淋藥

聲望海外迄普し

りん病や消渇は感染力強く、根治し難いため國民の元氣を消耗せしめる亡國病として恐れられてゐるのに年々増加する一方なのは適當な治淋藥を用ひなかつたからです。豫防が第一、然し若し不幸にして本病に罹つたら早速評判の岩里別府淋藥を飲む事です。本藥服用後直ちに化學的作用を起して強力無比な殺菌素となり、尿道や膀胱内の淋菌の巣を一ぺんに全滅せしめねばおかない威力を待つてゐます。迷ふは損、内地海外の夥しい全快報状が何より雄辯な證據です。

知名新聞雜誌推奨　東京朝日、東京日日、大阪朝日、大阪毎日、富士、講談倶樂部、實業之日本、主婦之友及全國知名新聞廣告御參照を乞ふ。

（此雜誌名記入申込者に限り淋病治療書無代進呈）

藥價　一急性用（黒箱）一週分　三圓
　　　一慢性頑固症用（赤箱）一週分　五圓

送料　前金無料代金引換　廿八錢　海外五十錢
振替下關八九四〇

特約店募集（先約各町村一ヶ所限り、藥店に限らず）

家傳秘藥なれば支店特約店以外には販賣せず

製造發賣元　合名會社　岩里天然堂　別府市鶴水園

別府溫泉で出來た一回試用有効的確
別府皮膚藥　藥價　三十錢・五十錢・一圓　注文切手代用にても可

別府溫泉で名高い家傳秘藥

地方配給所

東京市麻布郵便局前	岩里天然堂
大阪市上六大軌東一丁	岩里天然堂
名古屋市外布袋町	岩里天然堂
清水市辻町江尻驛前	岩里天然堂
岐阜市長住町一丁目	岩里天然堂
神戸市蓮池通一丁目	岩里天然堂
奈良市三條町	岩里天然堂
廣島市段原町的場通	岩里天然堂
下關市竹崎町一丁目	岩里天然堂
福岡市博多上洲崎町一	岩里天然堂
福岡市博多千代町交叉點東	
長崎市[illegible]町六七	岩里天然堂
鹿兒島市西本願寺横	岩里天然堂
宮崎市瀬頭町ガード際	岩里天然堂
高松市[illegible]通	岩里天然堂
高知市金子橋	岩里天然堂
京城府西大門二丁目	岩里天然堂

大特約店

東京市本郷區駒込	大日本雄辯會講談社代理部
同上野驛前湖仙旅館横	壽助堂
同東京驛前海上ビル	共生堂藥局
同麹町區有樂町三一	日比谷藥局
同神田區花房町一	山崎帝國堂
同澁谷停車場前	鈴井藥局
同本所區錦糸堀終點	梅原藥局
同日本橋區水天宮前	キク藥局
同神田區表神保町十	神田藥局
市内王子町郵便局前	小林藥局
同　龜戸町天神通	美天房藥房
同　高圓寺驛南通	アサヒ藥局
同　武藏小山驛前	西川藥局
同大森町京濱電車學校裏	ツル藥局
川崎市東田公設市場前	ポチ堂
橫濱市伊勢佐木町	加藤回陽堂

橫須賀市中[illegible]目五	石渡藥局
同　南旭町二三	内藤藥局
札幌市狸小路	三河屋菓子店
小樽市奥澤町五丁目	菊池商店
旭川市三條通六丁目	太田牛兵衞
十勝國帶廣町本局前	林商店
函館市松風町	齋藤延壽堂
室蘭市港町	山本平治
石狩國瀧川町五丁目	照本藥舗
青森市長島町	三勝堂藥房
弘前市中土手町	ミヅキ商店
山形市七日町	渡邊藥舗
秋田市牛島町	北島呉服店
秋田縣扇田町	城・金之助藥房
盛岡市仁王内丸大通	菊屋藥房
仙臺市南町	豐田商會
宮城縣古川町	ウメツ商店
福島市荒町	キモト藥店
水戸市上市元山町	フジヤ商店
宇都宮市大工町大通り	福田天狗堂
埼玉縣熊谷町	齋藤藥局
群馬縣草津温泉場	釜屋百貨店
桐生市新宿通り一	髙島藥局
栃木縣相生町西側	福田天狗堂
静岡市七間町三丁目	市川商店
静岡縣焼津町	須久藥店
岡崎市欠町	大原藥局
新潟縣三條町三ノ町	稻葉別府堂
新潟市本町通り	中部藥局
長岡市本町二丁目	吉村藥局
富山市古鍛冶町	小松日昇堂
同[illegible]中町	野口商店
甲府市櫻町四六	齋藤藥局
長野縣松本市六九町	木下喜久一
上田市海野町	齋藤天籟堂
[illegible]市岸川上	菊西館
福井縣武生町	澤田一二三屋
福井市神宮寺	山田藥店

名古屋上前津電停南	小島屋藥房
同中區榮町四丁目	内藤藥局
同　廣小路縣廳前	水谷大生堂
豐橋市西宿	白井木工場
大垣市馬場町	ホシ藥店
津市北町	橋本藥局
四日市市西町	金田商店
京都市東九條東寺道	第一藥局
京都府福知山職人町	福知藥局
大阪市浪速區[illegible]町二	性保堂藥房
同梅田阪神前	トミヤ煙草店
兵庫縣洲本町四	いぬねこや支店
同縣城崎溫泉	伊藤勘商社
岡山市城下電停	石原書店
廣島市小網町電車道	戸川藥品部
呉市中通五丁目	鎌田幸風堂
下關驛前山陽道	ヒラタ藥局
米子市茶町	勝見藥店
德島市富田橋筋	横山光榮堂
香川縣善通寺町	桑島藥店
丸龜市風袋町	須藤商店
福岡縣飯塚市東町	丸林大藥房
同行橋町	ミヅヤ藥舗
大牟田市三川局前	ロングサン藥店
若松市辨財天通	井上藥房
八幡市枝田五條橋	若松屋
小倉市魚町四丁目	岩中藥店
門司市棧橋通二丁目	松永藥房
大分縣杵築町	河野商店
熊本市寺町停留場前	熊本藥局
佐賀市東魚町角	田中昭明堂
佐世保市本島町	山崎西生堂
鹿兒島縣大島郡東方村	楢藥店
臺灣屏東街市場後	屏東第一藥房
臺北市西門町	積商行
釜山驛前	古原藥舗
元山府本町二丁目	岩坪商店
大連市監部通三三	天然堂藥局
撫順東三條通	ハレルヤ藥房

愉快痛快

これぞ諧謔小説の至宝

見よ、一世の快男兒、次男坊正晴君の大活躍!!

生れぬ先から逆子で、家中を震駭させた次男坊正晴君は、生れ乍らの脱線家である。而も活動家で、熱血兒おまけに金持の息子で、首と生活の心配が要らない。

次男坊

縣會議員を毆りつけ一躍男をあげた正晴君

大增刷出來!!

或は村長の養魚池を總攻撃して優等賞を棒にふり、或は賄征伐の大將となり、或は親友の戀に大奔走、或は辯護士を撲つて職員會議に呼出され、或は就職試驗で詮衡委員をあべこべにやり込めたり親友の妹に戀をし

(御申越次第圖書目錄進呈)

大評判

嫁取婿取 外五篇

嬉し恥かし！華かな結婚行進曲!!

一家族を引連れて、電車に乗つたら「修學旅行ですか」と車掌に云はれたと云ふ子福者の家庭に、次々と起る嫁取り、婿取りの五彩まばゆき結婚行進曲、――嫁取婿取の外短篇六篇いづれも一度讀んだら忘れられぬ大傑作！

佐々木邦先生大傑作

この期を逃さず即刻お求めあれ！

書店賣切の場合は直接本社へ

定價一圓五十錢
（送料十六錢）

て喜劇を演ずる等、世の中のあらゆる者に恐れず突貫する。而も喧嘩する度に榮轉する恩師、此の師に中學から〇〇高校まで親しく薫陶を受け天才いよ／＼腕を揮ふ。眞に傑作中の大傑作!!

その他の大傑作

▲奇物變物・夫婦百面相・外四篇
▲珍太郎日記・文化村の喜劇・外五篇
▲愚弟賢兄・ゴンドラ村・外七篇
▲凡人傳・親鳥子鳥・外六篇
▲のらくら倶樂部・主權妻權・外六篇
▲脱線息子・村の成功者・外六篇
▲負けない男・美人自叙傳・外四篇
▲ガラマサどん・夫婦者獨身者・外五篇
▲人生漫畫帖・ぐうたら道中記・外二篇

どれでも好きなものをお選び下さい
何れも定價一圓五十錢（送料十六錢）

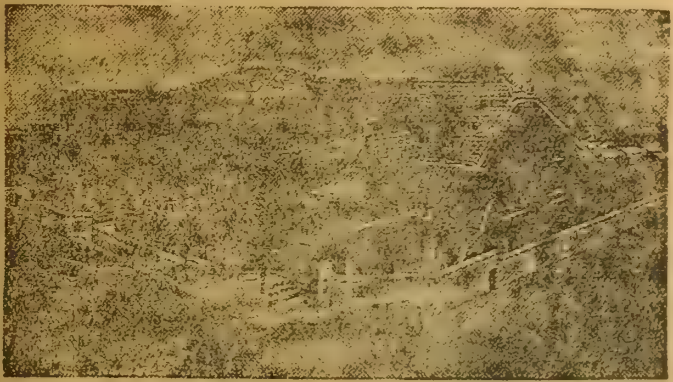
東京本郷 大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

醫學博士六十餘名實驗證明推奨

男生殖器弱小を强大に

短日の間に驚くべき發育
機能强健の物理療法器

現代醫學界の劃期的斬新なる**物理療法**の代表的發明品と云はれて海外にまでも名聲日に高き**專賣特許「ホリツク眞空水治器」**は、形は小さく輕便であるが、効力は非常に大きい、局部へ直接に、自分で輕便安全に秘密に、一日一回、一回僅かに五分間づつ使用すると、目前忽ち理學的眞空吸引力により局部へ血液を滿潮的に流集せしめ血肉細胞の活躍により神秘驚嘆すべきエンツンデエング作用を起し、一回毎に著るしく發育する寸法が本器のメートルへ數字的に實現し、同時に手淫、過淫の害、遺精、夢精、早漏、陰萎、〇起力減退、局部彎曲を回復して從來內服藥では數百圓の藥價を費しても効なかりし、生殖器の弱小を强大化し生殖腺ホルモンの內分泌を旺盛にし、腦力記憶力を增進して實驗界に好評湧くが如し、一生涯に青年時代は再び來らず、直ぐ實行せられよ。



內容外觀共に完備せる東京新療法研究所

生殖器短小は內服藥では發育せず

ホルモン劑でも內服ではダメ

近頃內服賣藥のみにて生殖器が長大に發育するが如き廣告をなす者あり、無責任なる賣藥業者の好言に注意あれ。

包莖は無血無痛切らずに治る

包莖は從來手術して切取るより他に治療の仕方がなかつたが、**專賣特許ホリツク包莖安全器**で短期間に無血無痛人にも知られず、絕對安全に整形となる、包莖は淋病梅毒に感染し易く不潔で大害あれば速かに本器で根治せられよ。

專賣特許登錄商標

◇**ホリツク眞空水治器** 金四圓五十錢

◇**ホリツク包莖安全器** 金三圓五十錢

送料 內地二十一錢、臺、樺、鮮、滿、五十錢
代金引換十五錢增、治療器名並に代引と詳記の事

◇**生殖機能强精內服劑ポルチヨン**

半月分金三圓廿錢 一月分金六圓 送料各十五錢

無代進呈 非賣品 圖入說明書 實驗例付

內容〜性の新知識と告白文、ハガキで申込次第個人名義で秘密に送る

東京市芝區神谷町西の十八
東京 新療法研究所
電話 芝 三一三一 振替東京七七三九

大阪市北區堂ビル西の四階
大阪支部 東京新療法研究所
電話 北 八二六八 振替大阪五七九九

冨士グラフ

男子を空に知らせて風渡る五月五日のきよき晴かな

尾上柴舟

評判画報

川畑文子さん

アメリカに生れてアメリカに育つた若き吾等のジャズ舞踊家、文子さんの名は餘りにも有名だ。歌つて踊つて、ニッポン・ムスメの萬丈の氣を廣く全米に轟かせて、近く憧憬の故國を踏んだ。その踊りが如何に異色あるもので、他の追從を許さぬものであるかは今更言ふまでも無い。踊りがヂョセフイン・ベーカー、歌が名優デイトリッヒに似てゐると言ふので大變な人氣。

『踊りは十二才の時から始めました。元元體育と趣味とから出發したものですから、今後共その積りで勉強させ度いと思ひます……』

語るお母さんの背後にかくれて、今年漸く十七才の文子さんは、

『わたし日本語はなせませんの……』とつゝましく微笑んだ。（寫眞上は素顔）

セニョリタ・グラナドス嬢

スペイン舞踊とギタアの名手、麗人グラナドス嬢が、近く來朝、東劇で公演するといふので、――今や到る處で話題の中心となつてゐる。嬢はスペインの首都マドリッドに生れ、今年未だ二十五歳。スペイン特有の情熱的ダンサーとして、その美貌と共に、本國及びフランスに於て、絶讃を博してゐると言ふ。

さきに來朝したアルヘンテイナ嬢及びテレジイナ嬢に、勝るとも劣らない名舞踊家で、ベルギー、オランダ、イギリス、その他、各國各地より招かれて、日も猶足らぬ多忙さを極めてゐるといふ。一日千秋、嬢にかけられた待望こそ強い。

と愛嬌が
日は二匹仲よく日向ぼつこと洒落

アイリン・ウエアー嬢

アメリカでは毎年、各州選出の美人の中から、ミス・アメリカ一人を選出する事になつてゐる。ウエアー嬢こそ、一九三〇年に花々しく當選した評判の女性である。後に雑誌バニテイの服装寫眞のモデルとなつて廣く讀者に見えてゐたが、今度フォックス社に見出され、一躍名優の地位を築きあげてしまつた。今日は申すまでも無く、その姿態全部が明朗な美に輝いてゐる。嬢の第一回主演評判の『チャンドル』は近く日本で封切りの豫定。

松隈陽子さん

最近歸朝された松隈陽子さんは、過ぐる日桑港市主催のピアノ競演會に、二千六百十五名中から、見事選まれて第一等の榮冠を贏ち得た程の天才ピアニストである。お年は未だ十三歳、可愛らしいお嬢さんだ。『全く偶然でした。日本人で此の選に入つたのは最初なので、私達より同胞の人達が喜んで下さいまして……』お父さんは、感慨無量の面持で、日米親善の意味深い處を語つて下すつた。（寫眞は桑港市長より贈られた記念のトロフイを持つ陽子さん）

于鳳雲さん

今春女子醫學專門學校を卒業した于鳳雲(二十三歳)さんは、新興滿洲國が生んだ最初の女醫である。女史は錦州に生れて、旅順師範學堂女子部を優秀な成績で卒業、後奈良の女子高等師範學校に學んだが、中途より志をかへて上京今日に及んだのである。
『未だ何も分らないのです、當分東京にゐて病理學の研究を續け度いと思ひますの……』女史の面には一杯の希望が溢れてゐた。やがて滿洲醫學界の權威者となることだらう。

フランシス・パーキンス女史

米國民主黨新大臣の一人として、救世主の如く仰がれてゐる女勞働長官、それが今評判のフランシス・パーキンス女史(五十一歳)である。
コロンビヤ大學の出身で、夙に社會學者として聞え、一九一〇年ニューヨーク州の消費者聯盟の執行書記長及び同州産業局長を歴任し、勞働問題の研究に名を輝かしてゐる。『ニューヨーク工場に於ける生命の危險』その

上——于鳳雲さん
下——パーキンス女史

懸賞當選

上——久保雅俊寫
下——森本清次寫

此のすました山羊君の顏を見てやつて下さい。滿點の色男振りですが、いくら氣取つても、御愛嬌の首の瘤とあの嗜き聲が、あなたを臺なしにさせますよ。

犬猫も只ならぬ仲——だがこの睦まじさはどうです。まるで兄弟か夫婦のやうではありませんか。ワン君とニャン孃の共同戰線で、內外相呼應して家の番をしたり、鼠退治でもしさうですね。

可愛いですね

懸賞當選
上・森本清次寫
下・久保雅俊寫

春の日の無聊に、カンガルー君が動物園の片隅で角力を始めました。行司が無いので、立直つては組み、組んでは離れる大立廻り。さてく何時果てる勝負やら…。春は日長だどちらもしつかり負けずにおやり。

豚と言へば、すぐに穢ないものと、脂肪肥りを聯想しますが、満更さうでもありませんね。目から鼻、口にかけて、何處かユーモアと愛嬌が隠されて居るぢやありませんか、今日は二匹仲よく日向ぼつこと洒落てゐます。

内外優 新封切上

——巴里祭——

これは『巴里の屋根の下』『百萬』『自由を我等に！』等を發表して、萬丈の氣を吐いた鬼才ルネ・クレエル監督の手にかゝる第四回目の作品である。

梗概——七月十三日、フランス革命記念日の前日です。巴里下町の裏通り、狹い露路の向ひ窓から、タクシー運轉手ジャンと、花賣娘アンナとが顏を見合して微笑んでゐます。アンナはジャンが大好き、ジャンもアンナが大好きでした。でもジャンにはポーラと呼ぶ街の女がついて居たのです。

その翌晩七月十四日。ジャンの部屋にはポーラの派手な着物が脱ぎ捨ててありました。悲しい心で家へ戻つたアンナには、思ひがけない母の死が待つてゐたのです。それから——。奇しき運命を辿る三人の物語です。

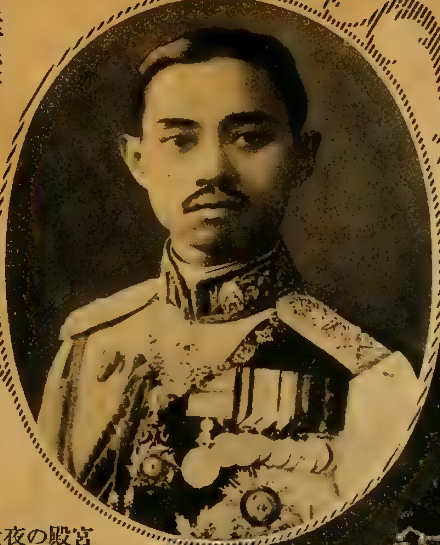
（以下略）（寫眞上右、ジャンに扮せるジョルジュ・リゴウ。左、リゴウとアンナに扮せるアンナ・ベラ。下はポーラに扮せるポーラ・イルリイ。）

秀映写

片岡千惠藏獨立第一回作品「國定忠治」子母澤寛原作、稻垣浩監督。寫眞は千惠藏の忠治と高津慶子の松葉屋小花。

（二）松竹特作「港の日本娘」、寫眞上は黒川砂子に扮せる及川道子と、その戀人ヘンリーに扮せる江川宇禮雄、寫眞中同じく及川道子。原作・北林透馬、監督・清水宏。

友邦シヤム



シヤム國皇帝陛下

シヤム國皇后陛下

宮殿の夜景

シヤム國

正門より見たる宮殿

ジユネーブの國際聯盟會議に於て、我が國は飽くまで頑張り通し、日本魂の眞骨頂を發揮して、遂に聯盟の脱退を見るにいたつた。四十二對一の光榮ある孤立だ。この際日支以外に加はる唯一の東洋の獨立國シヤム代表の棄權は、我等の東洋の爲めに大いに氣を吐いたものであり、これによつて我々は強い民族的自覺と、大きな力とを更に與へられた。――東洋は東洋で――大亞細亞聯盟の曙光も見えた。山田長政の古い昔から修交淺くない我等の友邦シヤム!! 共に東洋平和の爲めに正義の旗を押し立てよう。

大石良雄

武者小路實篤先生著

見よ不朽の名著と眞にこれ!!

興味深き讀物として、歌舞伎劇の獨參湯として、幾百年來我が國民に親しまれ、慕はれて來た赤穗浪士快擧の眞相と、この一黨を率ゐてよく日本武士道の本領を發揮した大石良雄の風丰を傳へ、感激無比。

著者は語る―

自分が大石を愛するのは、彼が復讐の仕方の内にあらはれたる人間性に對してだ。復讐その事よりも、寧ろ死を前に見た男の一年有半の生活、心づかひが面白いと思ふ。私は、その人間大石の美しさ及び大石を通して、人間それ自身にふれることを主にして、これを書いたつもりである。

日本人は大きな悲しみの中に最も美しき、最も強きものを見る。大石良雄の生涯こそは正に悲劇の中に生れた人生最高の傑作である。巨人良雄が赤穗一藩の大悲運を一身に負うて立上つた姿、それは誠に男らしい勇敢なものであつた。亡き君を思ふ忠節の志、別れ行く藩士の行末までも憶ふ仁愛の情、或は叛き去る部下にさへも溫い思ひやり、或は血にはやる同志の人々を、巧に慰撫統御する寛度、而も一世の誹謗と嘲笑の中に、千辛萬苦、遂に曠世の一大事を決行した彼の沈着、豪壯の氣宇、誰か巨人の非凡なる心魂にふれて感銘、感激せずにゐられようか!

息詰る面白さ！涙する感激！

巨人良雄の高亮にして典雅なる大人格は、大復讐の一擧以外に、その四十餘年の生涯の到る處に異彩を放つてゐる。彼は封建武士道の掟に一身を捧げた他の一面に於て、江戸文化華やかなる元祿時代の武士らしい、明るい和やかな、人間味溢るゝ生活を樂しんだ。こゝにも亦後世人の魂を打つ尊い教訓を見逃してはならない。

古來この偉人は幾百冊の著書に描かれてゐるが、その何れもが遂に描き得なかつた大石の眞價を冷徹、明快な筆致に寫し出した名篇がこれである。

讀者悉く熱狂！素晴しい大賣行です

四六判函入布裝美本
武者小路實篤先生裝幀

定價一圓三十錢
—(送料十錢)—

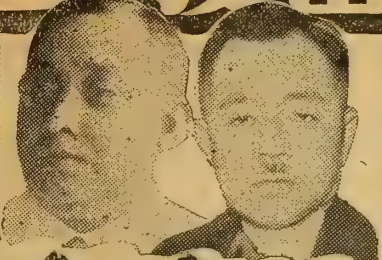
東京本郷駒込坂下町
(振替東京三九三〇)
大日本雄辯會講談社

見よ！大奮發！三大

空の戰爭を語る座談會

男子見よ！ 婦人見よ！ 非常時日本の國民一人殘らず見よ！！

日本はどの方面から空襲されるか？日本が萬一外敵より空襲を受けた場合帝都は一體どうなるか？如何なる方法で空襲爆撃が行はれるものか？防空の最善の方法はどうしたらよいか？等々をはじめ、世界各國の防空設備、實際空中戰となつた場合の處置、その他、空の戰爭についての新兵器の發達等について加藤海軍中佐、龜井海軍中佐、白銀陸軍少佐、小川太一郎、平田晉策等々斯界の權威者が語る大卓見！全同胞必讀の大文字！



▲アジアモンロー主義　駒井徳三

滿洲國建設の大偉業を完成した筆者が、今や病癒えて、祖國日本に訴ふる悲壯な大文字！

▲聯盟を脫退するまで　竹内克巳

國際聯盟に臨み、松岡全權の悲壯なる活躍を眼のあたり見たる筆者の劇的大記錄！全國民一人殘らず讀め！

▲印度革命志士縱横談　ラス・ビハリ・ボース

聽け！祖國を救はんと幾度か死生の巷を彷徨する三十年に亙る熱血兒ボーズの赤誠の叫を！

▲政治家で出世する五ッの型…伊藤金次郎

▲米國艦隊とその主腦者…水野廣德

▲現代サラリーマン學…伊藤重治郎

▲スヰトホーム訪問記…池田三郎

▲私設秘書となりて荒木陸相の一日を見る…中村正常

▲現代名士漫畫訪問…さぶろ

▲評判夫婦物語…仲田千秋

特輯つき

現代 五月號

◎四月十二日發賣！ 定價五十錢（送料三錢） 大日本雄辯會講談社

▲地震と津浪……國富信一
多年の貴い研究から得た秘材を科學的に語る興味と知識横溢の大讀物！

▲十年後の極東……池崎忠孝

▲愛國勞働號を繞る石川造船所の美擧……松澤正雄

▲毛利特高課長出世傳……山田靜蔚

▲靈界の巨人川合信水苦鬪傳……柳井正夫

▲齒に物着せぬ人物月旦……石山賢吉

▲職業婦人氣焰集

▲金の漫談

▲好もしい理想の夫

▲時局と女性

第一特輯 世間話

讀んで氣持のよい人の噂、聞いて面白い各界の消息、文藝、政治、外交、軍部、材界、婦人等々、各方面に亙っての面白くて爲になる話澤山！現代人必讀の大特輯と評判

第二特輯 近頃の問題

最近の興味ある社會的問題、喫緊の時局問題を拉し來って、夫々の權威者が如實にその眞相を物語ると共に、鋭い批判を加へた近來稀有の大特輯！全同胞悉く讀め！

第三特輯 時局に對する國民訓

現在は何としても非常時である。此秋、各界一流の名士、權威者が擧って實生活に即した具體的の生きた實例を擧げて、各人の決意を促した本特輯は正に近代人必讀の金字塔である。

此外 政治あり經濟あり、軍事あり外交あり、素晴しく面白い小說あり漫畫あり、トテモ大評判！

小島政二郎先生會心の大傑作!!

新版義士銘々傳

定價壹圓六十錢

四六判美本（送料十四錢）

讀書界人氣の焦點！

白熱的大歡迎！　破天荒の賣行！

我が文壇隨一の講談通たる小島政二郎先生が、渾身の努力を傾けて完成された昭和出版界稀有の大讀物！　從來の義士傳とは全然その趣を異にし、血を通はせ肉をつけ、生きた人間としての義士の面目を遺憾なく發揮す。

見よ！この颯爽たる筆力！これ程豪壯雄大を極めた新味ある義士傳は無い

息づまる面白さにさすが講談通の大文豪と讀む人悉く感嘆せざるなし。

「金さん、濟みません、帶を直す間ちよつとこの子を抱いてゝ。」

子供を膝に抱き取つた金右衞門なぜかあからんだ顏を伏せたものゝ、海棠雨の袂をハラリと返してお太鼓を撫でさすつてゐるお艶の、流石の金右衞門もの雨に濡れた風情とも云ふべき凄艶な魅力に、頭の尖から足の爪尖までくすぐられるやうな戰慄を感じた。

（仇、吉良家の繪圖面を覘ふ岡野金右衞門苦心の一節）

賣れる〳〵重版又重版の大盛況!!

●只今增刷出來！即刻お求め下さい。

發行所　東京・本郷　大日本雄辯會講談社

（振替東京三九三〇）

御申込次第圖書目錄贈呈

富士漫畫大笑館

釣ナンセンス

『ヨー、これはお隣りの先生、奥さま御同道の魚釣りとはいゝですな。どうでした、獲物は？　ヤ、ヤ、これは大漁々々、すばらしいですな。こんなに釣れたら、嘸かし愉快でせうな。一體そのどちらへお出かけでした。なる程。……』

『だめだね。隣の先生でさへ、あんなに釣つて來たのに、この僕が一つも釣れないなんて、どうかしてゐるよ。アヽア、すつかり腐つちやつた。……』

『あら?!　あんた。あれ、あれ御覧なさいよ。お隣の御夫婦もきつと、あすこで釣つていらしつたに違ひありませんわ。』

『ナ、ナ、なーる程！』

水島爾保布畫

ヨーヨー時代

繪・近藤日出造

不意討

繪・清水對岳坊

漫畫 女給心＝女給戰術

『明日の晩、貴郎一人で來て頂戴ね』
この名セリフをこつそり囁かれた彼氏、天下の色男乃公一人と、いい氣持で翌晩行くと
『おや君もか？ 君もか？』B氏、C氏、D氏も御入來、貴郎一人の鉢合せ。だが彼女たるものはしやア／＼して、『まア皆さんお揃ひでよーとそ』

ドロボーサマの荷造り

宍戸左行畫

戦術

『あなた今晩一しよに送つて下さらない、あたし××町の獨身アパートですの』ワザと、そつと來てそつと囁く。獨身アパートの一言にホクソ笑んだ彼氏、カンバンまで悠々鎮座、チップも相當にはずんでいざ御歸館、圓タクを呼んだまではよかつたが、彼女は貴女も貴女もと朋輩をウンと詰めこんだ、これ彼氏がチョカイを出さぬ防禦戦法。

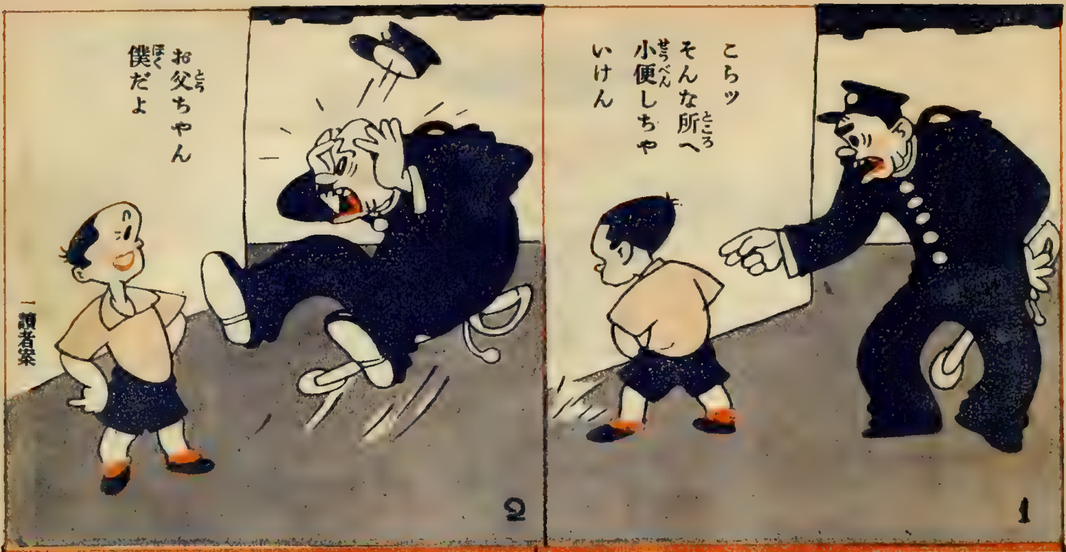
やつとアパートまで送つたら、別の男が下駄と雨傘持つて彼女を待つてゐた。『どうもありがーと』彼女は尻でお辭儀して行つちまつた。

田中比左良畫

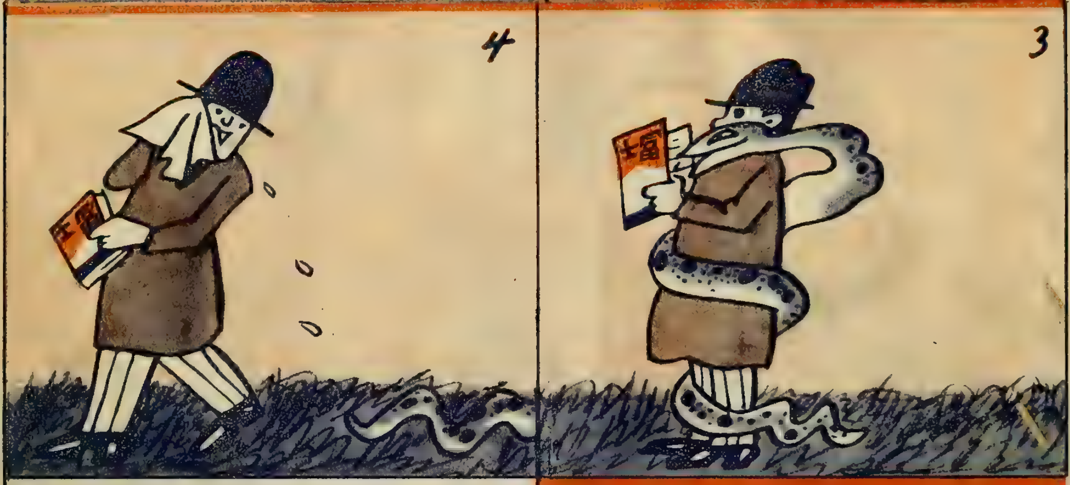
← 次頁へ續く

富士の魅力
靜岡　内田定二郎案
2
紳士……富士はステキに面白い
蛇……一呑みにしてくれん
監督『ウムッ素敵々々その驚いた顔は滿點その調子々々
5
コラシヨ
6
シッカリシメロ

繪・佐川珍香



繪・中島菊夫



蛇……なる程富士は面白い

蛇……いや 滿足 滿足

募集……漫画になる案を募る。御名案を御期待します
採用案には薄謝を呈す

五月の

鯉幟は勇ましくて日本男子のシンボルだ
眼に青葉山ホトトギス初鰹……サア一ぱい
酒はよし肴はよし眺はよし全く素的ですな
お父さん金魚は喰べられないの？
金魚 金―魚―
マアこれは〳〵おそろひでさあどうぞ〳〵
アリヤリヤ折角丹精した草花をこの野良犬め！
オーイポチ公！ボールを何處へくはへて行くんだ
蛙が鳴いてゐる……また五月雨になりさうだワ
ヤアセルの着物の肌心地よさどれ一廻りして來るかな
サア早くセルの着物にお着更なさいまし
家の中にチットしてはとてもゐられぬ陽氣だ

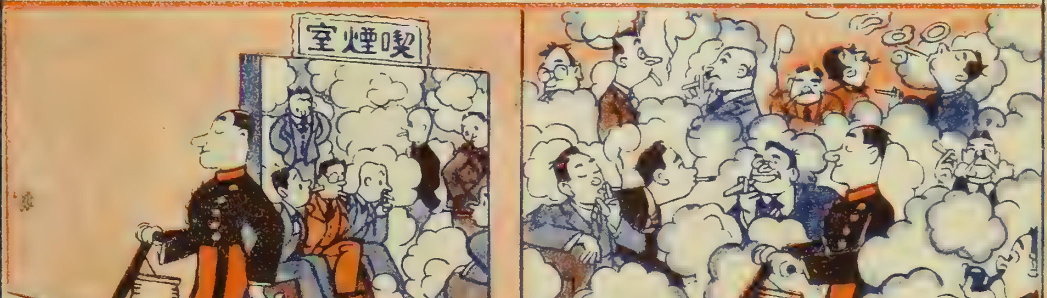
漫景

浪さん蕨狩りは樂しみですネ
もう夏場所の大相撲も始まるよ
アララボールが雲がくれしちやつた
躑躅に藤、牡丹、菖蒲も今が盛りよ
イヨー今度は素晴しく大きな奴がかゝつたらしいぞ
あんまり天氣がいゝので家中してやつて來ましたよ
僕お腹が空いちやつた何にか喰べたいなア
あの蛙が池の中へ飛び込むと一句出るんだがなア
いゝ陽氣だなア外を歩いてゐると汗ばんで、もう初夏だ
どうだ青葉若葉の溪谷の旅にでも出かけようか
もうすつかり葉櫻になつて毛蟲が出て來たよ

小野寺秋風畫

癖の

廢物利用

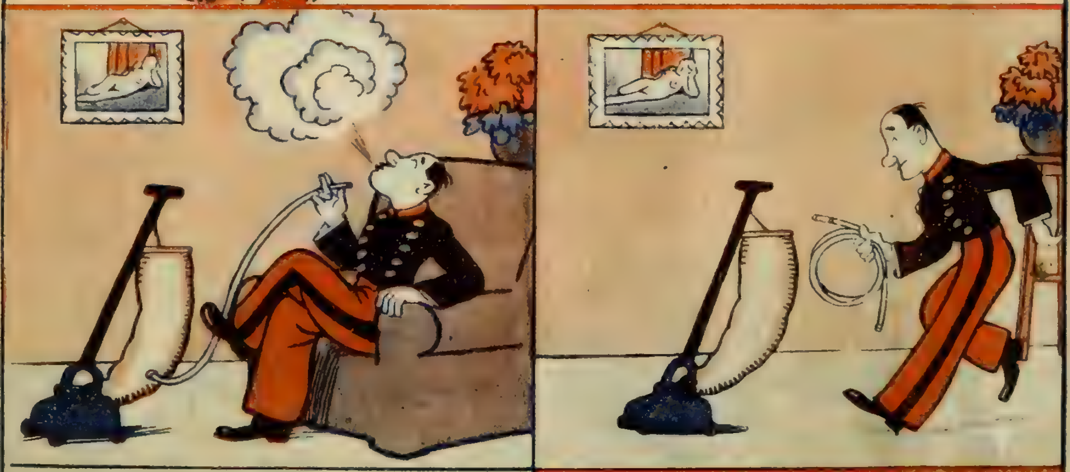


ボーイ……たんまり集つたわい
中にはステキな葉巻もあるぞ

ボーイ……喫煙室の吸殻集めも僕の
役目の一つさ

種(たね)

繪・長崎抜天



チヘッ我輩獨得のパイプで……

煙草のカクテルと來ちや、ちよいと乙さね

繪・新關青花

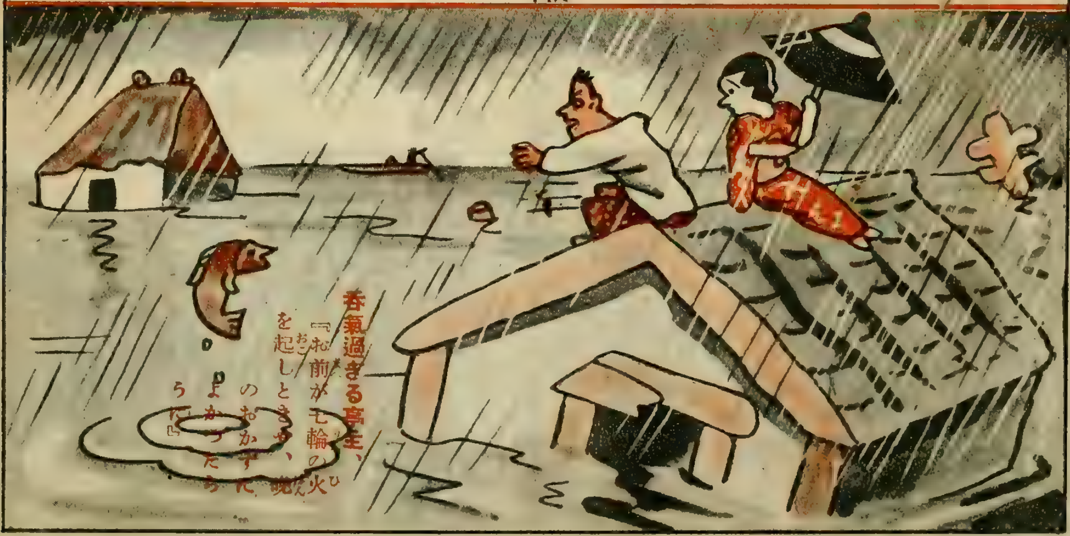
女の引力

助りはしたが良夫の頑張つてゐる間は・
一向救助船が來て呉れません
奥様は考へて
夫君のワイシヤツを御自分のお召物と代へましたら…
それ婦人の遭難だと許り舳艫相銜んで救助船此の通り

繪・中島菊夫

惡戯の失敗

前川千帆畫



繪・中島菊夫

騒動の

1
おやタバコがなくなつちやつたぞ
そそつかしさうなやつだな
2
オバアサン、バツトを一つください
3
おやアリヤこれやたいへんだ
4
おしりをはしよつておひかけませう
オヤオバアサンキガヘンニナツタノカナ
5
おやまあどこへいつたらう
どうしたバアサン
6
?
ナンダナンダ
ナンダカシラナイケドタイヘンダヨ
7
つりせんさぎだつてよしつかまへてやれ
オヤ
どろぼうらしいぞ
8
おれがつかまへる
トーフやもサカナやもサカやもみんないつてしまつたよ、こまるね

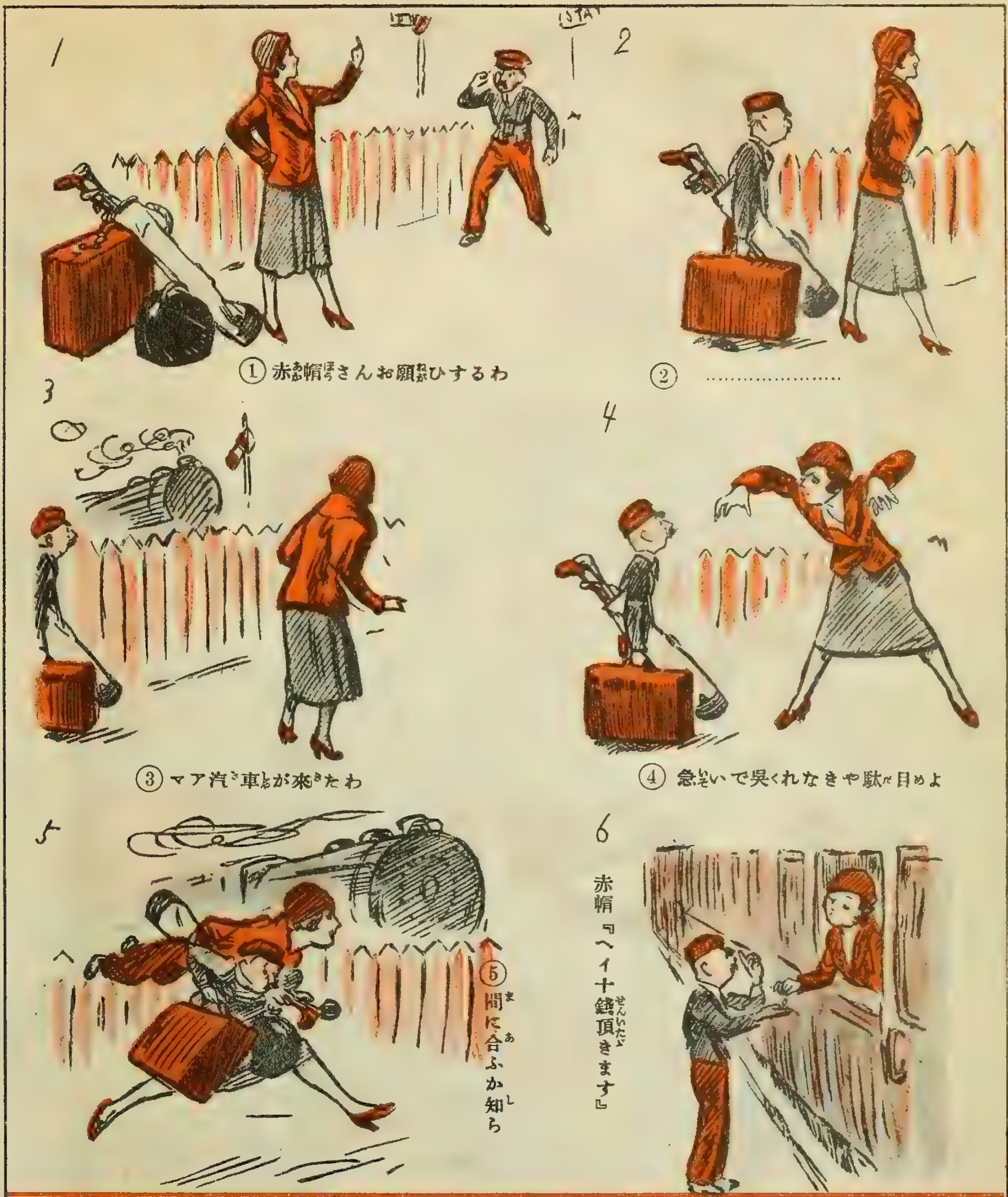
起り

もうチンドンやはやめてみにゆかう
わしもゆくよおい
とにかくたいへんたいたい
これがほんとのやじうまさ
チイサンやまつておくれよ
なにくわじだつてをかしいなけむりがみえないちやないか
ギャングだギャングだたいへんだ
なにがなんだかわからなくなつた
バウヤモイクンダ
あつあんなところにゐたよ
まあやつとつかまへたね
さんせりんのおつれをわすれましたよだんな

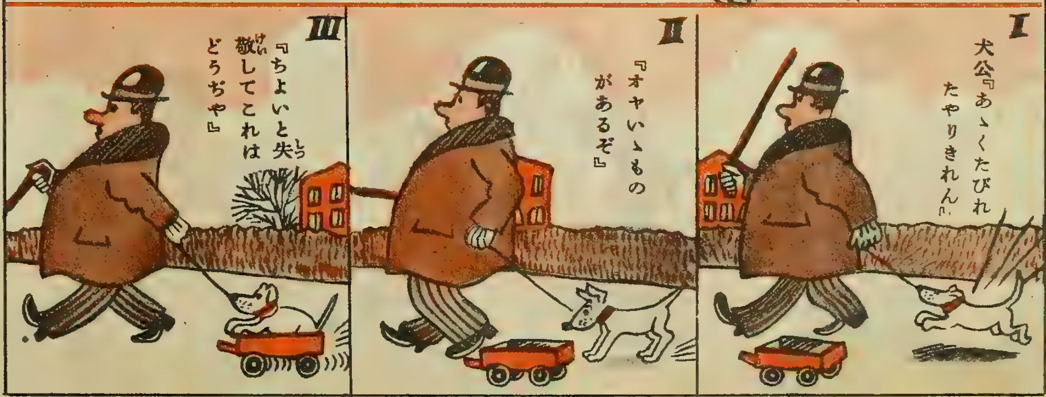
新關青花畫

外國漫畫

（この繪は左から右へ数字の順に御覧下さい）



これは名案



熱河討伐

↑寒風を突いて雪中を前線に向つて進軍する早川〇隊

↘雪の中に小憩する早川〇隊

熱河畫報

熱河に住む男が、附近の町へ出かける時の服裝です。即ち日本で言へば、一寸した外出着に當るものです。顔には矢張り一抹の精悍な氣が殘つてゐます。→

これは熱河の離宮です。金を惜しまず作られた豪華の程がよく覗はれます。←

→熱河の大佛寺です。

→熱河省内に散在する蒙古包と稱する部落民の住家です。

大喇嘛を信仰してゐる熱河では、斯うした墓を作ります。磚を階段式に組立てて、その層を九段にし、一見ピラミツドに似てゐます。←

→熱河省内に於ける旅人の野宿です。駱駝がゐるのも熱河らしい感じを添へてゐます。

非常時美談行脚

國際愛のア國代理公使

過ぐる日路傍に倒れて苦悶中の重傷者を、通りかゝつた一外人が、己れの自動車に擔ぎ込み、赤坂見付前田病院に手當を依頼して、あとから送金までしたと言ふ美しい國際愛話が有りましたが、この人こそ、アルゼンチン代理公使モンテネグロ氏でした。

氏はかくれた美談の持主で、今までにも、ルンペンに惠んだ數々の溫情は、數へるに遑ない程です。公使の秘書小野清長氏は語る。『あの新聞が出た日でした。すつかり意氣銷沈して、眞蒼な顏をした一人の婦人が訪ねて來まして、是非公使に會はして呉れと言ふのです。段々とその來意を聞き訊して見ますと、その婦人は、ある大きな惱みの後に、今朝死を決して、遺書を認めようとして机に向つた時、傍の新聞でふと公使の美談を眼にし、此の人にお目にかゝつて、お話を頂いたら、何か蘇生の道があるだらうと、瞬間死を思ひ止まつて、わざ〳〵來られたのでしたが、公使は生憎の不在、私からよくとりなし、明日を約して歸つて頂きました。翌日その婦人はすでに心を決して、小石川の積善寮に行つたさうですが、公使は逢へなかつたのを非常に殘念に思つて、早速死の不徳を諄々と說いた長い手紙と共に、御自分のサインをした寫眞を送られました…』と。圖らずも公使の美談は二重に人を救はれたのである。(寫眞上は素顏、下はサムラヒ姿に扮した公使)

煙草の銀紙五貫目

『これを何等かのお役に立てて下さい』

さう言つて、東京新場橋署へ、煙草の銀紙五貫目を持ち込んだお婆さんがある。時局柄非常な評判となつたが、當の上野千代（七十歳）さんは語る。『六十三歳の時でした。兩方ともひどい乳癌になつたのです。醫者だ藥だと、隨分騒いだのですが、一向に直る様子も見えないのです。もう六十三だし、どうなつても仕方ないと思ひましたので、醫者の藥はピツタリ止めて、日頃信心して居りますお祖師様に——もう私は六十三歳ですから、此の病が命取りに出たものならば殺して下さい。若しさうでなかつたら娑婆に居る間は痛みが抜けますやうにと、命をお任せして、髪も落し、三週間の願をかけたのです。とその中に、不思議にも痛みが無くなつたのです。有難いことです。それ以來と言ふものは、雨の日も風の日も、たとへ雪が降つても、毎日夜の明けない中に、歩いて御詣り致しました。あんまり早いので時々お巡さんに咎められた事なども御座います。銀紙は、その往復の道で、拾ひ集めたものです。何のお役にも立ちませんで、お恥しい次第です……』と。

七十歳とは言ひ乍ら、未だ矍鑠たるもので、孫達への縫物に餘念がない。

（寫眞上は、昨年お禮詣りに、身延山に行つた時祖師堂前で撮したもの、下は、お孫さん達との幸福な集ひ）

傷病兵の『若いお母さん』

鈴木歌子（二十二歳）さんは、愛國婦人會の事務員ですが、滿洲事變以來、事務所がひけてから毎日陸軍病院へ見舞つて、甲斐々々しく傷病兵のお世話をしたり、自分の乏しい財布をはたいて、傷病兵を慰める爲の福引を作つて贈つたり、兵士の送迎に飛び廻つてをられるので、兵隊さんから、『若いお母さん』として、感謝の的となつて居ります。かくれたるその功により、昨年二月七日、愛國婦人會の創始者奥村五百子刀自の二十七回忌に當り、本野會長より表彰狀を授けられたと伺ひました。『雜誌や新聞に發表される事は、私の意志に反しますから……』と歌子さんは、容易に口を開かうとしませんでしたが、『凶作地の第八師團に屬する悲壯な兵隊さんを、品川驛にお送りしてから、多少なりとも自分の手でおつくしし度いと思つたのです。お母さんが何時も私を勵まして下さいますし、退院した元氣な方々に、時折街でお目にかゝつたり、「なつかしいお母樣に厚く御禮申上げます」などと、親切なお手紙を頂いたりした時は、もう本當に嬉しくて泣き度いやうです』と極めて謙遜な態度で語つて下さいました。「寫眞は足先を失ひ、兩手と顏に負傷、その上左眼失明のお氣の毒な勇士、騎兵曹長原田一誠氏に、おやつのうどんを差上げてゐる歌子さん（上）と素顏（下）です」

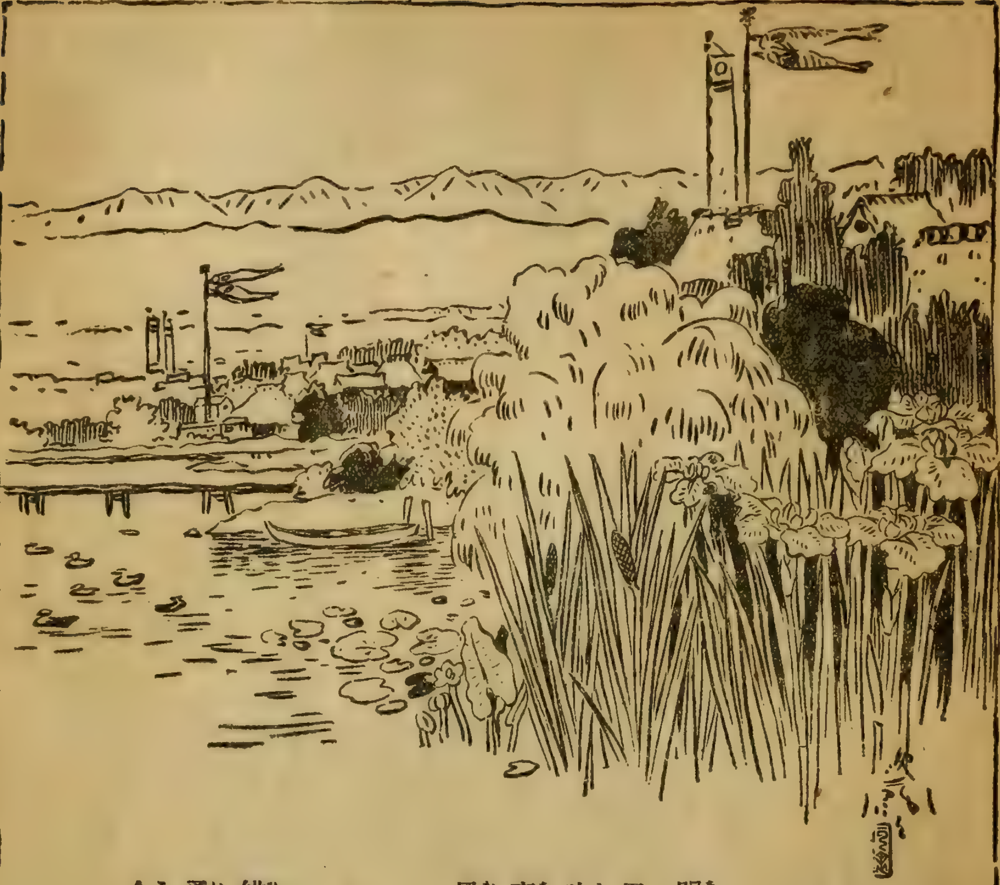
失明兵士の救ひの神

東京第一衛戍病院の傷兵慰問に來ては、全くの奉仕心から、失明の兵士達に點字教育を授けてゐる奇特な外國婦人がゐます。米國人でミス・コールフイールドと言ふ人。あちらの大學を卒業後、故國で七年間日本人に語學の教授をしてゐたが、大正十二年大好きな日本に來てからは、日本娘を養女に貰つて、府立第五中學の會話（英語）の教師を勤め、お母さんと三人仲睦まじい家庭を營んで居られる。お宅を訪れると『私は幼い頃から目が不自由でしたので、盲人教育には特に關心を持つて來ました。で滿洲事變の起つた時、武藤獸醫總監閣下に御相談して、早速衛戍病院の方へ御紹介頂いたのです。中年になつてからの盲目は、どんなに淋しく且不自由な事でせう。×

×私が慰問旁〻點字を教へて居りましたお一人の兵士は、もう退院なされたし、只今居ります關野さん（盲目兵士）も一通りは覺えました。關野さんには職業として編物が一番よいと存じますので、盲人用の編物機械を米國に聞き合せて見る積りです。近い中に廣島の病院から澤山の負傷兵が來られるさうですから、若し目の不自由な方がありましたら、是非お世話さして頂きます……』と溢れるやうな温い心を、流暢な日本語で語られました。（寫眞上は盲目兵關野文二郎氏、下はミス・コールフイールド）

三陸震災畫報

まだはだ寒い三月三日午前二時三十二分頃東北、關東、北海道の太平洋岸に突如大地震が襲來し深夜の夢を破られた。震央は福島の鹽屋沖と目され三陸地方は殊の外激しく、激震後大津浪に襲はれ家屋は流失し火災をさへ起して大慘状を呈した。寫眞は當時の慘状を物語るもので、上は岩手縣釜石町鄕社尾崎神社境内に津浪の爲めに打揚げられた漁船である。



青い空から

大關五郎

明けりや
五月よ
吹き流し
青い空から
風が吹く

サラ、サラリコ
風が吹く

緋鯉、眞鯉が
勇ましい
今年や坊やの
初節句

サラ、サラリコ
風が吹く

坊よ、立派な
人になれ
可愛い可愛いと
日があたる

サラ、サラリコ
風が吹く

—丸山晩霞畫—

便衣隊

銃聲が最初に聞えたのは、コック場の裏の空地あたりらしかつた。そこは隣地の清和公司と地つづきになつてゐるので、コンクリートの低い塀さへ越えれば、あの廣々とした陸軍の材料置場の横を、何方へでも自由に遁げられるやうになつてゐた。

つゞいて四五發拳銃か、小銃を發射する音が聞えたが、今度のはたしかに陸軍用地の方からであつた。

実事小説 — printed as: 實事小說

衄（ちぬ）れる花束（はなたば）

長田幹彦

嶺田弘畫

その晩、東亞ホテルでは、内地から赴任してきた河西少將の歡迎宴が開かれてゐたので、二階のホールは、ちよつとの間、可成ざわついた。

警備司令官の本多少將はわざわざ座席から立つてきて、

「おい、松原少佐、今の銃聲は、ありや何かね。さつき話のあつたやはり學良方のスパイの所爲かね。」

松原少佐は窓のところへ出てしばらく戸外を覗いてゐたが、さういはれると、姿勢をたゞして、

「は、多分さうだらうと思ひますが、唯今羽柴大尉を下へやりまして、取調べさせてをりますから。」

「ふむ、どうも蠅のやうな奴等には困るなあ。一疋一疋でやつて來られちや、此方が奔命に疲れるからなあ。はゝゝゝ。」

「さうでございます。何にしろ先日來から河西閣下の御來任をめがけて、大分いろんな厭がらせをやつてをりますのでなあ。先刻も御報告申しましたやうに、もう今朝から市内で二十一名ばかり便衣隊を捕縛したんで

すが、それでもやつぱり眼こぼしがあつたんでございますなあ。はゝゝゝ。』

メインテーブルの方では、元氣のいゝ將軍連ばかりなので、崩れるやうな豪放な笑聲がしつきりなしに聞えてゐた。

そこへ階下から羽柴大尉が劍をがちやがちややりながら上つてきて、本多少將と松原少佐に擧手の禮をしながら、

『唯今、現場を調査してまゐりました。何んでもこのホテルの料理場の裏のところで、突然ピストルを發射いたしたものがありますので、警備配置についてをりました兵が追跡いたしましたところ、それは三人連れの便衣隊でありまして、陸軍用地の奧へ向つて遁走いたしたさうであります。』

松原少佐は笑つて、

『又例の手ぢやな。それであとの銃聲は兵が打つたんか。』

『いゝえ、さうではありません。あれも便衣隊が遁げながら打つたのであります。』

『別に被害はなかつたのか。』

『は、ホテルの窓硝子が一枚破壞されてをりますだけであります。』

『さうか。そりやまあ誰れにも怪我がなくて何よりぢやつた。では今夜は特に警戒を嚴重にするやうに命じてくれ。』

『は、唯今警備隊から、竹内騎兵少尉が兵を一個分隊引率いたしまして、ホテルの警備位置につきました。』

『さうか。どうも御苦勞だつた。』

本多少將はそのまゝもとの座席へ歸つていつた。そこでは便衣隊狩りの話がもてゝゐて、皆わうわうといふさわぎであつた。

階下の入口の近くにある女給仕人達の部屋では二十人ゐる女給仕たちが、もう生きた氣持ちはなかつた。彼等はつい此間、何百人といふ希望者の中から選拔されて、華々しく東京を立つて來た若い女性達なので、まだ實砲の音は知らなかつた。それ、に事件がだしぬけだつたので、すつかり慄へ上つてゐた。

加代子は二階の持場をすますと、少しの間休息しようと思つて階下へおりて來たが、階下のさわぎがあんまり激しいので、却つて吃驚してしまつた。

『まあ、あなた方どうなすつたの。』彼女はきよとりとしてゐる。

初子はそこへとんで出て來て、

『あら、加代子さん。あんた、今の鐵砲の音聞かなかつた？』

『聞いたわよ。何んでも三發か、四發聞えたわね。』

『まあ、落着いてるわね。今階下ぢやもう大騷ぎなのよ。何んでもね、便衣隊が打つたんですつてさ。そこのコツク部屋の窓

に、こんな大きな穴があいてんのよ。』

『誰れも怪我はしなかつたの。』

『え、丁度いゝ鹽梅に、あの部屋には誰れもゐなかつたんで、怪我をした人はないんですの。でも、恐いわね。便衣隊つて奴は、いつやつてくるか分らないんだものね。』

『ほゝゝゝ。そんなものを恐がつてゐてどうするの。こゝは滿洲國ですもの。鐵砲の音ぐらゐ聞いてびくびくしてるやうぢや、一日だつて暮らせやしないわ。』

『だけどさ、そんなことをいつたつて恐いぢやないの。兵隊さんがね、たつた一人で、劍つけ鐵砲で追つかけていつたんですつてさ。とても豪いわね。』

さういつてゐるところへ、廊下の方で突然がちやり〳〵といふ劍の音がした。

『それツ、また何か來たツ。』と、いふんで、皆は縮み上つてゐると、いきなり扉をあけて、入つて來たのは、逞ましい顏をした一人の青年將校と三人の兵であつた。

將校は女ばかりの部屋なので、いさゝか面喰つたやうな顏で笑ひながら、

『やあ、失敬しました。僕は警備隊のものですがね、こゝの窓のところに、外から梯子をかけたものがあるのでね、ちよつと調べさせてくれんですか。』

女達はみんな室の片方へかたまつてしまつた。

將校は兵を命じて、三つある窓を片端からしらべ出した。外がみえると恐いといふので、みんなカーテンを下ろしてしまつてあるので、兵はそれを一々はねて、硝子扉をあけてみた。

戸外からは零下二十六度の寒氣がしん〳〵と吹き込んでくる。眞暗な陸軍用地の廣原が何となく物凄くて、女達には鬼氣迫る思ひがした。

將校は懷中電燈で一番端の窓の下枠を照してみながら、

『うむ、やつぱりこゝから忍び込まうとしたんだな、こゝをみてみい。何かで扉をこじあけようとした形跡があるぢやないか。』と、いつて、そばにゐた加代子の方を振顧りながら、

『ねえ、君、今銃聲が聞えた時には、誰れかこの部屋に居つたんですか。』と、訊く。

加代子はずつと番で出てゐたので、松子の方を顧みながら、

『あんた、交代時間だつたから、こゝにゐたんでせう。』

松子はもぢ〳〵しながら、

『いゝえ、あの時分は忙しい最中だつたんで、どなたもゐらつしやらなかつたんでせう。』

皆も顏を見合はせるばかりであつた。

将校はうなづいて、

『さうですか。ぢや誰れもをらなかつたんで、こゝを狙つたんだな。よし、よし、それで分つた。おい、下村。お前、それぢや、向ふから廻つて、あの梯子をよく調べてみい。俺は松原少佐殿に、ちよつと御報告してくるからな。』

将校はそのまゝ皆に輕い會釋をして、室の外へ出ていつてしまつた。

女達は急に何んだか、ぞうツとして皆ひとつ處へかたまつてしまつた。

竹内少尉

便衣隊が女給仕人の部屋からホテルの内部へ潜入しようとした事實が分つたので、ホテルでは猶ほ一層騒ぎが大きくなつた。

午後の十時になつて、宴會がすむと、支配人や、ボーイ達までが、男のくせに妙に氣味わるがつて、何となく落着か

なかつた。

『ねえ、加代子さん。今夜はね、今のあの竹内少尉さんがね、兵隊さん達と一緒に、夜つぴて警戒して下さるさうだから、君と光子さんと二人でサービスしてあげて下さい。今料理場へ夜食の支度をさういつておいたからね。』支配人はさういつて、こそ〳〵自室へ歸つていつてしまつた。

加代子と光子は階下のホールのそばにある小さい室をとつて、そこへ茶の支度をしておいた。料理場から溫い食事が出來てくると、それを卓のうへへ並べて、兵達に交代でたべてもらふことにした。

やがて竹内少尉は笑ひながら入つてきて、

『やあ、こりやどうも御馳走だね。こんなにしてもらつちやお氣の毒だ。併し兵達は部署をはなれる譯にいかんのだから、各自のところへもつていかせよう』

と、いつて、一人の兵を呼んで、

『おい、お前、この皿をもつていつて、皆に食はしてやれ。氣

をつけてもつていかんと、途中で凍つちまふぞ。はゝゝゝ。』

兵は大きな皿にもつた肉に、フォークをそへて、急いで戸外へもつていつた。

少尉はそのまゝストーブの前の椅子へ腰をおろして、煙草に火をつける。

加代子はそばへいつて、

『ねえ、あなた。ホツトウヰスキーでも召飲りません。』

と、きくと、少尉は笑つて、

『いや、酒はいらんよ。君、勤務中に軍人が酒なんぞ飲んでどうする。はゝゝ。それよりもあつい茶を一杯御馳走になり度いな。僕も腹がすいとるから、遠慮なく食はしてもらふよ。』

さういひながら、彼はいかにも無造作な態度でフォークをとりだした。

加代子はその少尉の樣子がしみじみ嬉しくなつて、

『ほんとに、いくらお勤めでもこんな晩はしみじみお察じいたしますわね。まだ便衣隊は危險なんでせうか。』

『いや、もう君、大したことはないよ。しかしあんな胡麻の蠅みたやうな奴等だから、いつどこへ現はれるか分らんのでね。それに今度の奴等は、司令官閣下や大官連中を狙つてをるんださうだから、少しは骨があるらしいんでね。』

『まあ、いやですわね。私達はついこなひだ此方へ來たばかりなんで、さつぱり樣子が分らないんですけど、皆さんのお骨折りはもう內地にゐる時分から、新聞なぞでよく拜見してましたわ。でも此方へ來て、實際の御樣子を拜見すると、一層何んですか、感激しますわね。』

『はゝゝ。いや、さういふ氣持を君達にもつてもらふだけでも、我々は嬉しいですよ。僕等は今度の事變で、しみじみ日本人の有難味といふやうなものが分つたねえ。一寸した慰問袋なんぞをみても、國民の後援の力が溢れとるですからな。それだからこそ我々は戰線で夜の目も寢ずに働けるんですよ。』といつて、少尉は妙になつかしさうな顏になりながら、

『ねえ、君、こんなことを聞いて失禮だけど君等はこなひだ內地から選拔されてやつて來た人達なんでせう。東京ですか。』

『え、私、東京なんですの。』

『東京は何處です。』

『あの、本鄕ですの。』

『ほう、本鄕？ 本鄕にや僕の兄がをるんだが、本鄕は何處いらです。』

『あの、私、眞砂町なんですの。』

加代子の父親といふのは、眞砂町で小さな藥種屋をやつてゐ

るのだが、不思議なことには、その竹内少尉の兄さんといふのもぢき近所の本郷三丁目に住んでゐるのであつた。

『まあ、ほんとに不思議ですわねえ。ぢやあなた、そのお兄様のお宅へ始終いらつしやいますの。』

『僕はね、隊が宇都宮ですから、此頃ぢや滅多に訪ねませんけど、士官學校にゐる時分には、約一年ほど厄介になつてをつたことがあるもんですからね。さういへば、君のお家の前なんかも通つた記憶がありますよ。』

『ほんとに世の中つて、廣いやうで狹いもんですわねえ。ぢやあなたは、御兩親とも東京においでになるんですの。』

『いや、僕は子供の時に母に別れましてねえ。今ぢや父ひとりなんですが、これは兄が引取つて世話してくれとるんです。』

『まあ、お母様はゐらつしやらないんですの。私もですわ、私も七歳の年に母に死別れましたの。』

『さうですか。いや、どうも母親がないつていふのは、實に寂しいもんですな。はゝゝ。』

『それであなたは、もう事變以來ずつと此方にゐらつしやるんですか。』

『え、僕は昨年の十月の二日に出征命令を受けましてね、隊と一緒に此方へやつてきたんですよ。それから方々へ轉戰して、もう前後十六回ほど戰鬪に參加してゐますが、幸ひ武運に惠まれてゐるんでせう。まだかすり傷ひとつ受けないで、この通り毎日お國のために働いてをるんですよ。』

加代子はその晩、思はず話に實が入つて、午後の十二時過ぎまで竹内少尉と話してしまつた。

加代子は部屋へ歸つてきて、光子と枕を並べて寢るには寢たが、何んだか曉方までちつとも寢つかれなかつた。

その晩は幸ひ何事もなかつた。

民族の叫び

ホテルの附近は、新たに騎兵〇〇〇〇〇隊の警備區域になつたので、竹内少尉はそれからも毎日のやうにホテルへやつてきた。便衣隊騒ぎは、もう常習的になつて、山海關や、北票の方から潜入してくる怪しげな苦力や、馬夫は數知れなかつた。

彼等といへども決して唯單なる匪賊の轉身したものではなかつた。日本人は一般に支那人を非常に蔑視る癖があるが、支那人にしても、さうぐうたらなものばかりはゐなかつた。唯金が欲しさにスパイをしたり、暗殺をやつたりするばかりではなかつた。なかには氣魄のある、立派な勇士もゐて、さすがの日本軍

隊も時々は手古摺らされることがあつた。

殊に北票から潜入してくる連中のなかには物凄いのがゐた。ホテルの外廊へ、時計仕懸けの爆弾をしかけたのなぞは、皆この手輩であつた。しかも憲兵隊の手で逮捕されて、即日銃殺に處せられたが、彼等はまるで日本武士のごとく從容として死についた。監視者の谷野憲兵大尉なぞは、その立派な最期に感嘆してゐた。

　それだけに、警備の手は少しもゆるめられないのであつた。

　その晩も、何となく物情恟々としてゐるので、竹内分隊は午後の七時から、又交代でホテルの守備についてくれた。ホテルには今、出先軍隊を慰問のために差遣された侍從武官の一行と、それから大きな財閥からの視察團として渡滿した、有名な實業家の巨頭達が宿泊してゐるので、一層敵に狙はれる機會が多い譯であつた。

　竹内少尉は、夜が更けると、又例の部屋で加代子を相手にしばらくの閒話していつた。少尉はその晩は妙に寂しさうで、煙草ばかり吸ひながら、

『ねえ、加代子さん。君達もさぞ日本へ歸り度いだらうねえ。から寒くなつてくると、滿洲つていふところは、實に寂しいねえ。』

　加代子も眼をうるませながら、

『ほんとですわねえ。私達は皆非常な希望に燃えてやつてきただけに、猶ほ寂しいんですわ。まだ滿洲は時期がはやいんですわねえ。』

『はゝゝゝ、若い女の人ぢやむりもないなあ。あの當時は、新聞なんかでも隨分滿洲熱をあふつてをつたからね。誰れしもアラスカへ金でも掘りにいくやうな氣分で出て來たんでせうからね。はゝゝゝ。』

『あの、私はそれほど浮ついた氣持ちもなかつたんですけれど、でもこのホテルだつて、もつとどうにかした待遇をしてくれるんだらうと思つてましたわ。これぢやまるで宿屋の女中とちつとも違はないんですものね。お客樣のお酒の席なんかへも出なけりやならないし、私達は學校を出たばかしでちつとも經驗がないもんですから、ほんとに困つちまひますわ。』

『さうでせうともねえ。僕も實はこなひだつからどうも變だと思つてゐたんですよ。いくら何んでも學校を出た人が、カツフエの女給みたいな生活をするなんていふことは、不合理極まることですからなあ。』

『私もそれを考へないんぢやないんですけれど、でも、軍隊の方が皆さんこんなに苦しんでお國のためにつくしてゐらつしや

ゐのに、私達ばかりが贅澤もいへませんわ。ですからね、私達もね、女として出來るだけのことをして、せめて皆さんのためにつくし度いと思つてゐるんですわ。』

少尉は涙ぐましいやうな顏をして、

『いや、どうも君達までがさういふ氣持ちになつてゐてくれりや、もう申分はないよ。こんな荒くれた沙漠のやうなところへやつてくると、何よりもうれしいのは、異性の情味ですよ。ここは戰場だから、にやけた色戀なんていふ感じはむろん起らないです。僕等も君達も皆同じやうに一生懸命になつて、日本の生命線をきづきあげていくために血を流して働いてゐる仲間だ。さう思つたら、なまめかしい氣分なんか起りやしないです。』と、いつて少尉は苦笑ひをしながら、

『併しね、加代子さん。僕は可笑しなことをいふやうだが、君が實は好きになつちやつたんですよ。分りましたか。好きにですよ。それ以外の何ものでもない。好きつていふ意味が一番僕の心持ちを正確に現はしてくれるんです。』

加代子も思はずにつこり笑つて、

『あなた、私にもそのお心持ちはよく分りますわ。不純な氣持の少しも混つてゐない、つまり好きなんですわね。私だつて、やつぱりさうですわ。私、あなたがつまり好きなんですのよ。』

『はゝゝゝ。嬉しいね。期せずして氣持が合致した譯ですね。君は今までに、男にラブしたことがありますか。』

『あら、そんなことありませんわ。私、ずつと學校にゐたんですもの。あなたは、如何ですの。』

『僕ですか。僕だつて異性の關係なんか無論ありませんよ。第一そんな隙がないぢやないですか。女の人が好きになつたのは、君が初めてですよ。はゝゝゝ。』

二人は恥かしげもなくこんな話が出來た。さうした氣持ちは、かういふ境遇にゐるものでなければ、到底分らなかつた。見も知らぬ戰のある土地へ來て、お互に日本人としてしつかりと頼り合ふ氣持ち、それは內地で暖衣飽食してゐる男や女の荒んだ戀なぞとは實際似てもつかぬものであつた。

加代子はふと涙ぐんで、

『でも竹內さん。人間の緣ていふものは、ほんとに不思議なもんですわねえ。狭い東京にゐてさへ逢へなかつた私達が、こんな遠い遠い滿洲へ來て逢へるなんて、私、神樣も隨分だと思ひますわ。あなた、さうお思ひになりません。』

『いや、思ひますよ。僕はね、慰問袋をもらふ時に、いつでもさう思ふんだ。あればかりは一種のくじを引いてるやうなもんですからね、はゝゝゝゝ。』

『それで、あなた、もう近いうちには、戰爭はないんでせうか。』

『戰爭？ 戰爭はありますよ。何處かでポンと一つ銃聲が聞えりや、もう我々はすぐにとびだしていかなけりやならないんです。一番危險なのは、札蘭屯から滿洲里へかけてですね。あすこにをる蘇炳文の軍隊がどう動くかによつて、又大衝突が起るだらうと思ふんです。何にしろ、二百何人といふ日本人が全部監禁されとるんですからねえ。』

『ほんとね。昨日も私、そのお話を聞いたんですけれど、實に危險なんですつてね。』

『もう君、○○○○隊はとうに出てをるんでね。我々の方でも實は、命令一下直に出動する準備は出來てをるんですよ。併し今度の戰は面白さうですな。敵の兵力も相當あるやうだから、戰らしい戰が出來るかも知れんですよ。はゝゝゝゝ。』

竹內少尉の顏には、子供のやうな素直な表情が浮んできた。それが加代子には耐らなくうれしかつた。加代子は、しみじみ少尉が好きになつてしまつた。

亡き母の形見

それは丁度十一月の二十一日の夜のことであつた。加代子が夕飯をすまして、朋輩達と一緒にホールでお茶のサービスをやつてゐると、そこへ軍裝をとゝのへた竹內少尉が、とても愉快さうな顏をしながらつかつか入つてきて、

『やあ、加代子さん。僕お別れに來たんですよ。僕ね、これからチヽハルの方面へ向けて出動することになつたんですよ。』と、いふ。

加代子もよろこんで、

『まあ、いよいよ御出發？ とても素敵ですわねえ。いつここをお立ちなさいますの。』

『午後七時四十分の列車で出發します。今度は二週間位は歸れまいと思ふんでね。實は僕、一寸君に預かつてもらひ度いものがあるんですよ。』

竹内少尉はさういひながら、ぶかぶかした大きな防寒外套の

ポケットから小さな箱を出して、それをあけてみせながら、

『ねえ、君、この時計はね、實は僕の母親の形見なんですよ。隨分古ぼけた時計でせう。僕ね、いつかもお話ししたやうに、とても母親が好きだつたんでね、僕、いつだつて肌身をはなしたことはないんですよ。ところがね、今度は何んだかもう生きて歸れないやうな氣がするんで、これをあなたに預けていき度くなつたんです。どうせ何處でやられるか分らんのだから、もし君、支那兵に掠奪でもされると、母親に對してすまんのでね。どうか君、これを預つてくれんですか。もし僕が戰死したら、これ君にあげますよ。はゝゝゝ。』

加代子はそれを手のなかへ受取つて、

『そんなあなた、心細いことを仰有るもんぢやありませんわ。あなたのやうな元氣のいゝ方に支那の兵隊の彈丸なんかあたるもんですか。ほゝゝゝ。それよりもね、うんと戰つて、早く歸つてきて下さいましな。私、お待ち申してゐますわ。とにかくそれまでこれは大事にお預りいたしておきますわね。』

『どうかたのみます。そいぢや僕もう隊へ歸らんけりやならんから、これで失敬します。』

『あら、まあ、いゝぢやありませんの。ちよつとお待ち遊ばしてよ。今あつついお茶を一杯差し上げますから。』

加代子はうまい紅茶を一杯ついで來て、少尉に御馳走した。そこにゐあはせた女給仕人達は、心から萬歳を叫んで、やがて少尉を玄關から送り出した。

客達は何事かと思つて、ぞろぞろ玄關へ出て來た。

停車場までは僅か五丁ばかりしかないので、七時になると、加代子は何かなしにじツとしてゐられなかつた。彼女は何んだかこのまゝ別れるのが妙に心殘りで、もう一度少尉にあつて、何か云ひ度かつた。

加代子は又支配人に斷つたりするとうるさいので、光子にちよつと耳打ちをして、ふらりとホテルを出た。防寒外套のうへから、毛の襟巻をしても、恐ろしい寒氣はひしひしと顔に迫つてくる。それは寒いといふよりも、痛い感じだつた。一丁も來ないうちに、もう兩方の足先は、感覺がなくなつてしまつた。

その晩も粉のやうな雪がさかんに降つてゐた。ひろびろとした町はがらんとして、薄白い夜の色が何處までもつゞいてゐる。それでも此頃は警備が行屆いてゐるせゐか、町には人通りは絶えなかつた。滿洲人が笛のやうな聲を出して、何かものを賣つて歩いてゐた。

停車場へ來てみると、構内は非常な混雜だつた。砲兵隊も出發するとみえて、砲車や彈藥縱列が、無蓋貨車へ滿載されて、

線路のうへへ幾列車も幾列車もつながつてゐた。そのうへへも雪がうす白く積つていつた。

プラットフォームは兵で埋つてゐるので、加代子はそのなかから竹内少尉をさがしだすのは、容易な業ではなかつた。輸送指揮官は聲をからして、部隊の處理をやつてゐる。乘り込んだ隊は、車窓から隊名をしるした布を垂れて、一列車ごとに裝甲車をはさみながら、勇ましく發車していく。

加代子は柵のわきの街燈の下へ立つて、眼を皿にしてみてゐたが、竹内少尉は姿さへみせない。彼女は通りがかりの通信兵によつぽど聞かうかと思つたが、あんまりざわざわしてゐるので、此方から呼んでも耳に入りさうもなかつた。

三本目の列車はやがて萬歳の聲に送られてプラットフォームをはなれていつた。加代子も思はず手をあげて萬歳を叫んだが、その途端にひよいとみると、前から五輛目の車室の窓のところから、顔を出して、しきりに擧手の禮をしてゐる若い將校がある。よくみるとそれは竹内少尉であつた。

少尉の方では加代子がゐるのを知つてゐたとみえ、少尉は此方をみては、一生懸命になつて擧手の禮をやつてゐる。加代子が氣づいたのを知ると、少尉はさも嬉れしさうに笑つて、すうつと彼女の前を通りすぎていつてしまつた。

加代子は危く少尉の名を呼ぶところであつたが、やつと自分を押へて、いつまでもいつまでもその列車の方を見送つてゐた。加代子は變に眼の下がむずむずするので、手をやつてみると、そこには流れ出た涙がいつの間にか凍つてしまつてゐるのであつた。

加代子はホテルへ歸つてくる途すがら、自分でも不思議なほど泣けて泣けてしやうがなかつた。

巴林占據

加代子はその晩から、譯もなく寂しくて、夜半になつても中中眠れなかつた。彼女は少尉から預つた時計を、いつも枕の下へ入れてねた。それはもう三十年も昔はやつた古風な七寶の時計で、時間もよく合はなかつた。

加代子は少尉のことを思ふと、きまつて枕の下からは、その時計のチッチッチッと時を刻むかすかな音が聞えてきた。その音が耳について、彼女は一層眠れなくなるのであつた。

札蘭屯から巴林方面へかけて、日一日に戰雲が濃くなつていくといふ噂は、新京へも櫛の齒をひくやうに聞えてきた。そのうちにもう第一線の部隊は各所で衝突をおこして、竹内少尉

が出發してから五日ばかりたつと、新京へは負傷した兵がぽつぽつ送還されてきた。それは大方は凍傷でやられたもので、奥地の寒氣が思ひやられた。

或晩のこと、ホテルでは、內地から來てゐる新聞記者の小さな宴會があつた。それは關東軍の新聞班が招待したもので、出先の連中だけに、主客ともに最初から打ちとけて、いかにも愉快さうに談笑してゐた。

そこへ若い將校が慌たゞしく入つてきて、

『おい、諸君、至急を要する發表があるんだがね、こゝで書き取るかね。』と、いふ。

記者連はさすが職業柄とて、何んだ、何んだといひながら、もう紙と鉛筆を食卓のうへへ出してゐた。

『諸君、今第〇課へ入つた無電によると、いよいよ我軍は、巴林を占據したんだ。御承知のとほり、あすこには蘇炳文が半永久的の堡壘を築造してをつたので、我方でも相當の準備をとゝのへて攻擊に移つたんだが、僅か二時間ほどで敵は大興安嶺を越えて、滿洲里方面へ潰走しちまつたんだ。』

記者のひとりは、

『ねえ、中島中尉。時間を明確にいつて下さらんかね。それでないと、記事にならんよ。』

『はゝゝ。こりや失敬。ぢや情報どほりによむから、聞いてをつてくれ給へ。……わが〇〇〇隊は、二十七日午後十時より行動開始、先づ〇〇砲隊は巴林側方の堡壘に向つてさかんに砲彈を浴びせかけたが、敵も迫擊砲をもつて步兵の進出を阻止し、戰況刻々に展開していつた。その間に、〇〇〇隊竹內少尉の率ゆる挺身隊は巴林の後方連絡線に進出、午後十一時五十分、肉彈戰に移つたので、敵は周章狼狽、總くづれになつて、鐵道線路に沿うて、興安嶺方面へ潰走した。十二時三十分、我軍は巴林市街を完全に占據した。敵の損害、死傷約七百、我方は戰死者十一名、負傷者三十九名。』

『戰死者の氏名はまだ分らんですか。』

『うむ、まだ分らん。』

加代子はそれを聞くと、胸がどきどきしてたまらなかつた。もう何か竹內少尉から便りがあるかと思つて、待ち焦れてゐたので、少尉の名を聞くと、彼女は可笑しいほど胸がわくわくしてくるのであつた。

その翌日になると、巴林方面の戰況が詳しく分つてきた。關東軍で發表したところによると、戰死者はその後ぞくぞく判明して、つひに十六名になつた。しかもその中には竹內少尉の名もまじつてゐたのである。

加代子はそれを聞いた時には、さすがにどきツとしてしまつた。併しどうも本當のことゝは思へないので、夕食をたべにやつてきた飯島少佐に聞くと、初めて少尉の戰死の情況が分つたのであつた。

竹内少尉の乘馬部隊は、もう三日も前から非常な困苦ををかして甘南の方面から敵の後方を衝く目的で行動を起してゐたのであつた。敵は五千からの大部隊ではあるし、もう半年も前から塹壕を構築して、防備を完成してゐるので、僅か一個中隊足らずの寡兵をもつて包圍の隊形をとるのは、寧ろ無謀に近かつた。併し何をいつても兵の實數の足りない現今の軍狀とて、ぐづぐづしてはゐられなかつた。

竹内少尉の部下は通信兵までまぜて約二十五名ほどゐた。これは終始尖兵となつて、ぐんぐん敵陣へ肉迫していつた。

いよいよ巴林の後方へ突入した時には、敵の角面堡の十字火と、機關銃の猛射に逢つて、部下はばたばた倒れる。しかしここでも足がかりを失つたら、正面から攻撃してゐる味方の戰機を逸してしまふので、竹内少尉は自慢の祐定の銘刀を揮つて、あべこべに敵の塹壕へ突入していつた。その時少尉のあとにつづいた兵は僅かに九名しかゐなかつた。

竹内少尉についてゐた鈴木といふ上等兵の話によると、少尉の當夜の働きはもうまるで人間業とは思はれなかつたといふ。

少尉は最初のうちは、戰死した兵の手榴彈を集めて、敵の塹壕から僅か六米ばかりのところまで匍つていつて、ボールでも投げるやうに悠々と攻撃してゐたが、やがて、

『おい、鈴木、もう敵は足が浮いとるぞ。突撃だ。突撃だツ。』

と、叫んだかと思ふと、彼はすツくと立つて、日本刀を頭のうへで振りかざしながら、猛烈な勢で塹壕の中へをどり込んでいつた。

亂軍のなかなので、よくは分らないが、少尉が斬り倒した敵はたしかに十人以上はあつたらう。敵はもう浮足だつてゐたので、味方の喚聲に驚いて、急に退却しだしたが、その時、少尉はむらがる敵の中で前のめりにばつたり倒れてしまつた。

そこへ後續部隊が到着したので、追撃はその隊にゆづつて、鈴木上等兵は早速竹内少尉の介抱にかゝつたが、少尉はしつかりした聲で、

『おい、鈴木。お前は負傷はしなかつたか。そりや何よりだつた。俺は腹をやられとるらしいが、大したことはない。それよりも皆はどうした。皆をみてやつてくれ。』と、いふ。

そこへ生き殘つた部下のものが集つてきたので、上着のボタンをはづしてしらべてみると、少尉は驚いたことには、腹部と胸部に四彈を受けてゐるのであつた。

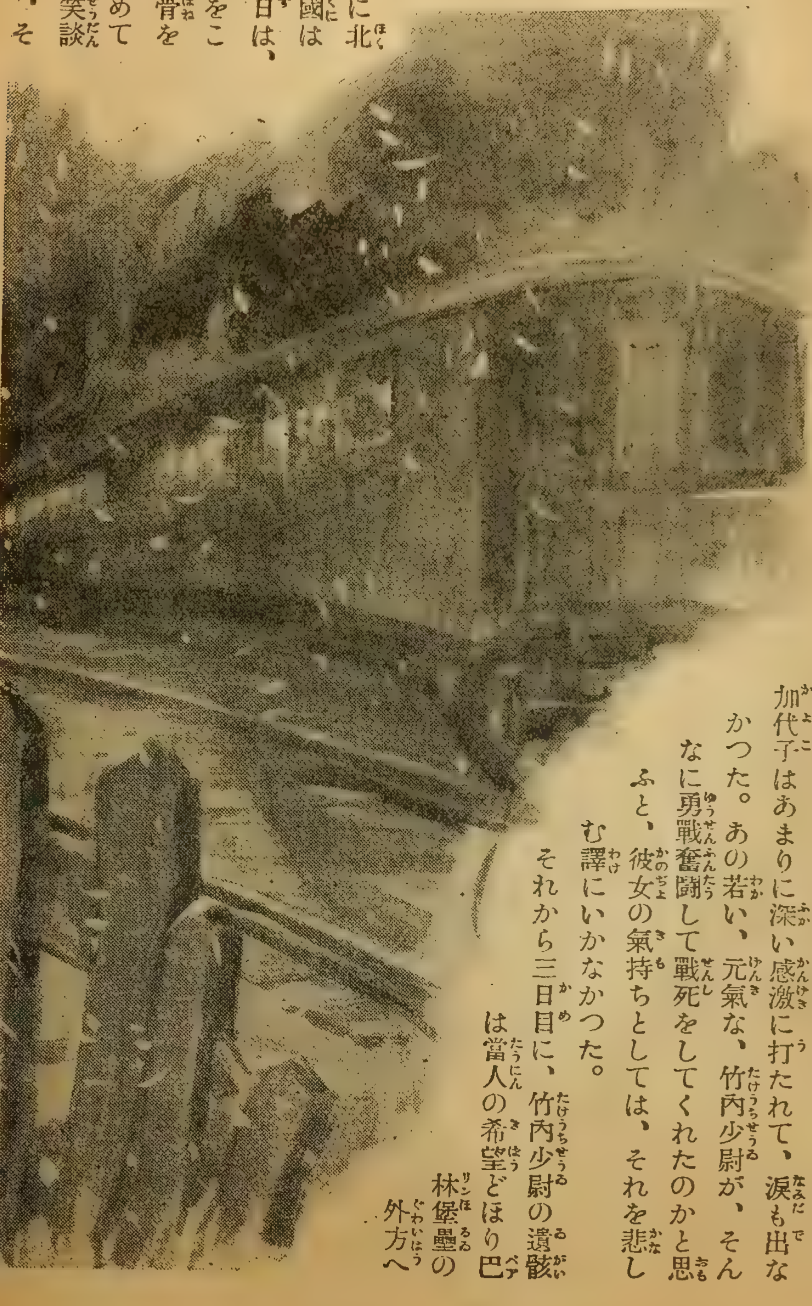
『うむ、おい。少し呼吸が苦しくなつてきたぞ。こりや死ぬか

な。はゝゝゝ。おい、鈴木、すまんが俺のポケツトに、恩賜の煙草が入つとる。それをこの世の別れに一本頂かせてくれ。』

『いや、少尉殿。これ位な傷でそん弱いことを仰有つちやいけません。さ、恩賜の煙草です。』

と、いつて、鈴木が火をつけて差出すと、少尉は少し頭をあげて、目禮したあとで、それをさもうまさうに吸ひ出した。

『おい、あんなところに北斗星がみえる。日本の國はひろくなつたなあ。明日は、お前達、あの大興安嶺をこえていけ。俺はこゝに骨を埋める。この場所へ埋めてくれ。』なぞとまるで、笑談のやうに呟いてゐたが、そ



のまゝぽつくり息が絶えてしまつた。

巴林占據の殊勳者として、竹内少尉には司令官から不日感狀が與へられることまで飯島少佐は話してくれた。

加代子はあまりに深い感激に打たれて、涙も出なかつた。あの若い、元氣な、竹内少尉が、そんなに勇戰奮鬪して戰死をしてくれたのかと思ふと、彼女の氣持ちとしては、それを悲しむ譯にいかなかつた。

それから三日目に、竹内少尉の遺骸は當人の希望どほり巴林堡壘の外方へ

埋められ、遺品だけが、鈴木上等兵に守られて原隊へ帰つてきた。そこで全部の戰死者の遺骨は一緒にまとめられいよいよ內地へ向けて還送されることになつた。

加代子は飯島少佐に賴んで、停車場まで見送りにいくことを許可してもらつた。彼女は車室の棚のうへに並べられた多くの勇士の遺骨の中から、竹內少尉の箱をさがしだした。それには少尉が平常からポケットに入れても

つてゐた日章旗がかけてあつたが、加代子はそのうへへ自分が夜の目も寢ずに丹精してこしらへた造花の小さな花束をさゝげた。それは彼女が學校時代に習ひ覺えた得意の技藝で、生ける花のごとくによく出來てゐた。

飯島少佐は感じ入つて、

『やあ、こりや花のない滿洲ぢやからえゝ手向けぢやなあ。實によく出來とる。この花の色はばかに濃く染つとるぢやないか。一體何んで染めたんぢやね。』

加代子はそれには答へなかつた。少佐も彼女が指に卷いた繃帶には少しも氣がつかなかつたのであつた。

加代子はもう一度遺品の前へ立つて、

『竹內さん。私、お母樣のお時計は一生の記念に頂いときますわ。さやうなら。』と、心の中で呟いたが、その時になつて、彼女は初めて竹內少尉の存在に對して、無限の愛着を感じ、人のみる眼も恥ぢずにわあツと泣き崩れてしまつたのであつた。

一週間ほど前には竹內少尉を乘せて北へ向つた軍用列車が、今度は悲しげな汽笛と一緒に空しい遺品をのせて、ごとりごとりと南へ向けて動きだした。

―完―

二村定一氏

こんな面白い、心から吹出し度くなるレコードは他に絶對ありません。キングレコードはいつも變つた而も淸く明るいものを發表、その中でも是が最も代表的な傑作中の傑作です。最寄りの蓄音器店で御試聽下さい。

(K225)

圓滿第一己らが主義…………二村定一

妾と貴郎は相性ネ…………丸山和歌子 二村定一

右手に教科書、左手に少年倶樂部

お子さん達が喜び勇んで登校する、新學年となりました。優等の立派な成績をとるやうにと希はれるのは、何れの父兄方も同じと存じます。それには、教科書とともに課外讀物として、少年倶樂部を每號續けてお讀ませになることが、是非とも必要です。少年倶樂部は優等生を作る雜誌と、折紙づけられてゐるのであります。

ビクトリヤ女皇謁見の思ひ出

下田歌子

私が始めて英國に參りましたのは、明治二十八年（一八九五年）で、ビクトリヤ女皇の御治世でした。當時、世界に跨る英國の領土には、太陽の光は沒しないと、英國民の誇つてゐた頃です。女性の御身で、その大英國に君臨されるのは、いみじき御生れつきにもよりませうが、定めし立派な御方でもあらうと存じまして、許されることなら、一度は拜謁したいと思つてゐたのでございます。

倫敦を立つて、大陸に渡り、各國を經巡つて獨逸に着いた時でした。御懇意に願つてゐた英國婦人の或方から、

『早く歸つておいでなさい。女皇陛下に謁見が許されることになつた。』

と知らせて來ました。私は直ぐ旅裝をまとめて倫敦に歸りました。

謁見には、禮裝がいります。禮裝には、流行があります。貴族富豪なら知らず、私のやうな者は、流行を逐うて、禮裝を幾通りも作り替へることなどは出來ませんから、禮裝をしなければならない場合には、斷然日本の禮服を着用することに決めてゐたのでございます。これは私が日本を立つ時からの覺悟でした。

懇意な英國婦人は、

『御安心なさい歌子、私の友達が名譽女官になつてゐて、日本の禮服で參內してもいゝやうに、取計つておいてくれました。實は女皇陛下は、日本の禮服が御覽になりたい思召しださうです。』

と、女皇の御內意までも、漏らしてくれたのです。私は、安心して、參內することが出來ました。

女皇が、公式の謁見を許さるゝ日、この

日は、その年の流行が決まる日なのです。英國の貴族や、各國の使臣達が、今日を晴と着飾つた夫人、令孃（滿十八歳に達し、特に拜謁を許されたもの）を伴なひ、揚々として、バッキンガム宮殿に馬車を驅ります。そして馬車が公園にかゝるまでの間は、わざと徐かに打たせるのです。道の兩側には、黒山のやうに見物人が集まつてゐて、何れも手帳を出し、順次に通り過ぎて行く馬車を見ながら、頻りに何か書き留めてゐます。

この手帳を持つて、道端に立つてゐる人達は、寶石商、化粧品商、帽子屋、布地屋、仕立屋などで、目についた服裝を書き留め、それを新らしい流行として、賣出さうと云ふのです。私はあとで、そのことを聞いて、この日の參内が、如何に晴がましいものであるかに、人知れず驚きました。

ビクトリヤ女皇

宮殿に參りますと、金光燦然とした禮裝をつけた係員が、廣い溜りの間に案内してくれます。名を呼ばれるまで、其處で待つてゐるのです。當時婦人の禮裝は、非常に裳の長いものが流行してゐまして、進退動作には、かなり骨が折れたさうですが、奇麗に磨き立てゝゐる婦人達を見ますと、その顏色と云ひ、姿勢と云ひ、實に立派で、美しく見えます。

名が呼び上げられると、呼ばれた者は女皇の謁見室に參ります。御前に出る人は、後から〳〵、續いて來ますから、靜かに、そして滯らず、女皇の御前に出て、差し出される御手に、接吻（片膝をついて）の禮をし、それで直ぐ退出するのであります。

私がお見上げした女皇は、英國の女性としては、稍お小柄で、ふつくりとした御顏には、微笑が漂つてゐます。まことに、溫容溢るゝ如しとでも申しませう。併し凝乎と御覽になる御眼には、理智の閃めきが見え、流石に四邊を拂ふ威嚴が備はつておいでになります。

私は、謁見が終つて、宿に歸りまして

から、靜かにその日のことを考へて見ました。私の着てまゐりましたのは、日本の禮服、乃ち垂髪、袿袴でございます。流行の粋を競つた外國婦人の中に立ち交つて、こゝでは私が外國婦人でございますが、何う女皇の御目に映つたであらう。又一緒に参内した人達が、私の姿を見て何う思つたか知ら……。何んな場合にでも、御國風の禮服で押し通すと云ふ堅い覺悟はしてゐましたものゝ、餘りに晴やかな儀禮だつただけに、多少の不安もないではなかつたのです。

　ところがその翌日のタイムスを始め、倫敦の新聞を讀んで見ますと、筆を揃へて、日本の禮服の優美華麗なことを賞讃し、おまけに、私の進退作法まで、盛んに賞め立てゝゐるのです。あとで公使館の方から、

『貴女は何と云ふ大膽、いや無謀な方だらう。あんな變な装をして、嘸物笑ひになるだらうと心配してゐたが、實に不思議、各新聞の賞讃の仕方は何うだらう。』

當時の下田歌子女史

　と云はれましたが、私は、變な装とは思つてゐませんでも、然うまで賞讃されようとも思ひませんでした。

　世の諺に、ないが意見の總終ひ、と云ふことがございます。私は、外に持ち合せもないし、流行の禮装を作る餘裕もありませんから、御國風の禮服を着て出ましたが、これが若し英國風の流行を眞似て貧弱な禮装でもして出ましたら、始めから氣が引けて、却つて物笑ひの種になつたかも知れません。

　日本の服装の美は、今日では、歐米人の賞讃を受けてをります。優美高雅と云ふ點から云へば、おそらく世界第一でありませう。併し女子は室内に閉ぢ籠り、殊に上流の婦人は、御簾几帳の裡にのみ在つて、それで濟んでゐた昔とは違ひ、男子に伍して、社會の表面に立働かねばならぬ今日では、如何に優美でも、如何に高雅でも、平素の常用にはなりますまい。唯せめて禮装だけは、折角立派なものを持ち傳へて來てゐるのですから、往昔の俤を保存したいと思ふのでございます。

　さて、滯りなく謁見が濟んで、それから數日たちますと、懇意な英國婦人が來て、

『歌子、あなたは光榮な人だ。』
と云ふのです。
『まアお聞きなさい。女皇陛下が、もう一度、あなたに會ひたいと仰しやるのです。日本の禮服を綴り見せて貰ひたいから、ウインザー宮の方へ來てくれるやうにと、ねえ、歌子、あなたは無論行つてくれるでせうね。』
これは、名譽女官をしてゐる友達の方から、その婦人のところに、再度の參内を、勸めて來たからです。私に、異存はありません。日をさだめて、その婦人と連れだち、ウインザー宮に參りました。
ウインザー宮は、倫敦から汽車で、二時間ばかりかゝるところにあります。氣候の好いところで、女皇は、その頃、大抵、離宮の方にお住ひになつてゐられました。
ウインザーでは、内謁見所で拜謁しました。女皇は、私の着用した袿袴に、お手をお觸れになり、いろ〱御質問があつた後で、
『この服裝を見ると、あなたのお國が、古くから文明だつたことはよく分る。この服裝は、何時頃から始まつたものです？』
とお訊ねになりました。私は、
『これは、平安朝の頃の制度に倣つたもので、今から九百年位前になります。その頃から今まで、餘り形の上の變化はございませぬ。』
と申上げますと
『歐洲の十一世紀？ その頃此方は、まだ〱開けてゐなかつたらしい。』
と女皇は、感嘆されて、
『なる程、平安朝時代には、優れた女博士があつて、立派な著書も殘つてゐると聞いたことがある。この樣な服裝をしてゐた當時だから、婦人にも立派な人が居たでせう。』

とお首肯になつたのです。それから、

『日本には、このやうな優美な衣裝があり、それが又よく日本の婦人方に似合ふやうに思はるゝが、公使夫人などは何うして外國風の禮裝をされるでせう？』

と仰せられました。このお尋ねには、私は、お答へに窮つたのです。私のお答へは、今思つても、かなり苦しい申譯のやうだつたと思ひます。

『それは斯うなのではございますまいか。日本と、英國とは、家屋の作り方がまるで違ひます。こちらで、この服裝をいたしますと、直ぐ汚損を生じますから、その手入れに時間もかゝり、裁縫する人も要りますし、補足する布地なども容易に購め難い不便などもございます。私なども、滯在が長引きますと、この服裝は着てをられませぬ。大方、そんな譯で、着用しないのかと存じますが……』

大體、こんなことを申上げたと覺えてをります。すると女皇は、

『然う云ふ譯なら、據ないことかも知れないが、實に惜しいことだと思ふ。我國の大禮服が、胸を廣く開け過ぎ、腕を露はに出すことは、まだ未開時代の風俗が殘つてゐるからで、あれは不可ないと思つてゐる。外國の人が見たら、嘸變な風俗に見えるでせう。改めたいとは思ふが、古い習慣は、無暗に變へる譯にも行かない。』

と仰せになり、服裝についてのお話がすむと、女皇は、日本の皇后陛下が、非常に御賢明であらせらるゝこと、殊に女子教育の方面に御熱心でおはしますことなど、よく御承知で、御推賞があり、次いでくさ〳〵のお話のあとに、私どもは午餐を戴き、無事に拜謁をすませて退去しましたが、是非寫眞を、との御所望があつたので、袿袴の寫眞を獻上しました。

英國は公式の謁見は、誠に晴れがましい、且つ、嚴そかなものでありますが、お內々の御對面とか、御懇談とか云ふことになると、極めて簡素な、お手輕なものであります。

併し私の當時の身分では、二度も女皇に謁見をするなどの光榮は、望んでも得られないことだつたのです。全くこの光榮は、御國風の禮服のお蔭だと思つてをります。

（完）

顏剃りアトのお手當に就て…

顏を剃つたアトを其儘にしておくと、ヒリヒリ痛んだり、皮膚が荒れたりするので、どうも困る…と、よく仰言います。

かういふ時にこそ、桃谷の美顏ユーマーを御活用下さい。ホンの一二滴お附けになるだけで、完全に皮膚を消毒し、皮膚も荒れず、剃刀マケもせず、本當に重寶です。

それにこの美容液は、少しも皮膚を刺戟せず、附けたアトがトテも爽かですから、どなたでもキツトお喜びになります。

毎日の洗面後や入浴後等にも、どうか御愛用下さい。少し宛御常用になれば、荒れを防ぐは勿論、暫くするうちに、キメの細かなツヤ〳〵とした美しいお顏になります。

長篇小說

善は滅びず

佐藤紅綠
林唯一畫

毅と魚子は名は兄妹でも、實は前者は捨子、後者は某陸軍大將の落胤で、爲に側近には此兄妹を夫婦にすべき議さへあつた。然し毅は豫てから魚子の未來の夫に、畏友の的場を推して止まぬ。的場には更に千鶴子と呼ぶ妹があるが、或時此二組の兄妹が那須野に淸遊を試みた際、魚子に向つて的場は、自分等の父は一田舍敎師で、初度の學校火事に御眞影を燒失した事を骨髓迄自責し、再度の失火の際には、敢然身を以てこれを護り、遂に殉難した悲壯の人である事を語り、爾來孤兒としての生涯は、分けて千鶴子を激情眞法の女性たらしめたが、今其彼女が、激しい思慕を寄せる人の出來た事を打ち明ける。〔前號迄の梗概〕

兄と妹

三人は歸り支度のために岩を降りて釣道具を形付け初めた。魚子は獨り歩くともなく草を分けて今ま的場に聞いた物語に就て考へて居た。燃ゆるが如き熱情が絶えず全身に渦巻いて居る千鶴子の性格も解つた、不遇で死んだ父の志を繼ぐべく苦學して居る的場の志操も解つた。

『氣の毒ではあるが實に立派な兄妹だ。』

魚子は猶ほも考へ續けた、足元には一面に百合の花が咲いて居る、或は高く或は低く或は劃然とした青天に唇を向けて心ゆくばかり淸新な大氣を吸ふが如く、或ものは餘りの靜かな山の氣に醉うて大地に首低れて冥想に耽るが如く、或ものは微風に微笑み、或ものは秘密に花粉を零す。魚子は二つ三つを手折つて窃と接吻した。

『さうすると千鶴子さんの戀人といふのは多分私の兄さんかも知れない。』

突然恁う思つた時何かしらん今まで霧の中に隱れて居たものが急にぱつと浮み出た樣な氣がした。

『其れだとどんなに可いだらう、千鶴子さんが兄さん

の御嫁になれば私の姉さんになる、まあ、嬉しいわ。』

彼女は自然に笑ひたくなつた、思も寄らぬ幸福が眼前に迫つた様！

『其れで私は……？』

彼女は不圖此の御正月に兄と母との對談を障子の陰で聞いた事を憶ひ出した、兄さんは私を的場さんに嫁ると仰有つた。

あの話は今まで考へないではなかつた、考へる事が恐ろしいからである、考へても其通りにならなければ失望しなければやならない、失望が恐ろしいのだ。

『私が的場さんと結婚する事になると……』

仄かな幸福が胸の中に湧いて來る。

『さうなると……』

彼女は夢心地に百合に接吻した。此時靜かな足音が聞えた。振返つて見ると其れは奥田の悴時男であつた。魚子はツと思つて立竦んだ、彼女はどうといふ理由なしに時男を見ると身體中がぞく／＼するのである、特に其の輕々しい態度、薄つぺらな言語、腋の下の詰つた米國風の洋服が嫌ひであつた。彼女は一禮したまゝ足を返した。

『やあ、隨分御さがしゝました。』と時男は帽子を脱いだまゝ立塞がる様に正面に立つて言つた。

『何か御用事なんですか。』と魚子は冷やかに言つた。

『別に用事といふんでもありませんが、暫らく御無沙汰を致しましたので御機嫌伺ひに參りました、御邸へ伺ひましたら釣にいらしつたと聞きましたので……』

『さうですか、では宅まで參りませう。』

『いや、恁うして御一緒に散歩する光榮を得るのは何よりの幸福ですから、奇麗な百合ですな、貴女の裾に觸れる百合はどんなに感謝して居る事でせう、私は其れでやつと基督の言つた事を理解しました、ソロモンの榮華も野の百合に若かむと言ひましたね、野の百合は貴女の樣な美くしい方の手に觸れる時がある、其れをキリストが言つたのですな。』

『まあ、貴方は實に巧い事を仰有るのね。』

心の中では馬鹿の骨頂と蔑すみながらも魚子は人を侮る事は女として愼むべき事だと思つて居る。

『いや御言葉で恐れ入りました、やあ其處は小石だらけです、此方へいらつしやい、實に可愛らしい花が咲いてるぢやありませんか、戀はやさしィ……野邊の花よゥ……』

變な節をつけて小聲に唄ひ出す。

『あゝ其處は崖でございますよ。』

魚子は注意した。

『やあ、危ないところでした、貴女の御蔭で生命が助かりました、おう私は何といふ果報者でせう、侯爵の姫君の御手に依つて生命を助けられるなんて私は……』

『何を仰有るの？』

『貴女は侯爵の姫君でいらつしやいます。』

『まあ！』

魚子は口から出任せに饒舌りたてる時男に呆れて笑つた。

『貴女は御自身の御身の上を御存知ないのですか……やあ、しまつた、これは御耳に入れては不可い事だつた。』

時男はいかにも口外を後悔するかの様に言つて口を噤んだ。が直ぐ又た問ひかける。

『貴女は何んにも御存知ないのですね。』

『何を？』

『貴女は本當の御父樣を御存知ないと見えます。』

『私の御父樣に嘘も本當もありませんわ。』

流石に魚子は怺へきれなくなつて窘める樣に言つた。

『では矢張御存知ないんです、貴女は北畠さんを本當の御父樣と思つていらつしやるんですね。』

『貴方は妙な事を仰有るのね。』

『もう恁うなると申上げるより他ありません、私は眞直に申しませう、御聞き下さいますか。』

『はゝゝ。』と魚子は腹立たしさも忘れて笑ひ出した。時男は熱心になつた。

『事實を申しませう。』

『もう可いわ。』

『いや、私は申し上げます、貴女の將來のために貴女の秘密を御耳に入れるのは私の義務であると信じます、貴女は北畠昌平さんの令孃でありません、貴女の御父樣は大槻侯爵です。』

『あら、どうして？』

魚子は笑ひは未だ止まない。

『私、侯爵の令孃？ 大將の令孃？ まあ豪いのね。』

『私は戯れに言ふのではありません、私は只だ貴女の幸福を祈るためです、内閣總理大臣で侯爵、陸軍大將、これほどの榮譽が他にあるでせうか、貴女は實際其の人の姫君なのです、一平民北畠昌平さんの令孃ではありません、人間に不幸はいろいろありますが、生みの親を知らないほどの不幸はありません。』

『待つて頂戴。』と魚子は屹と面を正して言つた。

『私は誰れの子であるか、そんな事はどうでも可いのです、私は北畠昌平の娘であれば其れで可いのです、其れ以外の事は伺ひたくはないのですから。』

善は滅びす……64

『併し御孃樣、父子は人倫の最も大切なものですから貴女も能く御考へにならなきやなりません、其れに依つて貴女の一生の方針を御決めになる事が必要です、例へば平民の子なら平民と結婚も出來ませう、的場の樣な人でも構はない事になりますが、侯爵の姫君となると御身分に相應はしき人格のある、財產のある、新知識のある、さうして歐米の空氣に觸れて世界的の識見を有つて居る男でなければなるまいと思ひます、私は微々たるものではございますが……』

『御免下さい。』

魚子はすた〳〵と足を急がして崖を降りた。

『御孃樣！』

時男は呆氣に取られて魚子の後姿を見送つたが片手に長い頤を撫で、片手に洋杖をくる〳〵と振廻して廻れ右！

魚子は崖を降りると一同は早や釣道具を收めて歸るところであつた、母の雪子は河鹿を籠に一ぱい捕つたと言ふので非常な自慢であつた。

『貴方方は山女を三尾釣つたばかりですが、私にや迚も敵ひますまい。』

『どれだけ御捕になつて？』

『まあ五六十匹はあるでせうよ、今晩は河鹿の鳴き競を御聞に入れますわ。』

『そんなに捕つたんですか、どれ〳〵。』

毅は母の魚籠を覗いて、

『やあ、これは皆な雌だ。』

『あら雌なの？』

魚子と千鶴子は腹を抱へて笑つた。

『雌でも河鹿です。』

雪子は依然として得意である。

『御母さん、雌は鳴きませんよ。』

『あら、さうかえ。』

雪子は初めて氣が付いて落膽した。

『半日かゝつて鳴かない河鹿を取つて居たのね、おう詰らない。』

一同は再び笑つた。賑やかに語り合ひながら家へ歸ると父の昌平は素裸になつて座敷を歩いて居た。

『あらどうなすつたの？』と魚子は言つた。

『今歸つた處だ、坂を登つたから汗だらけになつた、風呂はどうか、うん可し〳〵、さあ風呂だ〳〵。』

昌平は猪の如く風呂場を指して走つた。

『亂暴だわ御父さんは。』

魚子は笑ひながら父の洋服を疊みかけた、汗に濡れたワイシ

ヤツを衣紋竹に挾み、其れから上衣に刷毛を掛けた、背中の處も汗に濡れて居るので衣嚢のものを取出さなければならない。煙草入、銀貨入、手巾、其れと共に出て來たのは汗に濡れた手紙である、手紙の封筒は破れて文字のインキが滲んで居る。

『まあひどい汗！』

魚子は恁う獨りで言つた時其の眼は不圖手紙の文字に觸れた。

『先日も申し候如く魚子を他家へ遣はす念は拙者に於ては毛頭無之、貴下の嫁として毅に妻はす事、拙者の唯一の希望にて候、御熟考の上斷行可然と存候……』

魚子は一氣に讀み下してはツと胸を衝いた。

『本當だつた。』

電光の如く閃めいたのは時男の言葉である。

『あらツ。』

室の中がぐる〳〵廻轉するかの樣！ 彼女は手紙を衣嚢に收めたまゝ逃げる樣に座敷を出た、居室へ入つてぴつたりと坐るは坐つたが、餘りの驚きに自分が今ま何處に居るといふ事も解らなかつた。

『どうしたんだらう、まあ、こんな事があるだらうか。』

父は父でない、母は母でない、兄は兄でない、十九年見たり聞いたり思つたり信じたりして居た事が、そつくり其儘ひつくり返つてしまつた。

『私は一體何んだらう。』

彼女は自分で自分が解らなくなつた。だが一時間の後に彼女はしつかりと自分を恢復する事が出來た。

『誰が何と言つても構やしない、私は御父樣と御母樣の子なんだから。』

夕飯の食卓は賑やかであつた、だが魚子の心には急激な變化が起つた、彼女は父を見母を見るにつけ其處に何となき障壁が新たに築かれた事を感じた、特に兄に對しては頗る曖昧な氣持を壓へる事は出來なかつた。凡ての人は今まで通りの位置にあつて幸福さうに微笑して居る、だが彼女一人は突然今までと異つた別天地に席を移された、千鶴子は朗らかに語つて皆を笑はした、彼女は折り〳〵毅の顏を恍然と見詰めた、ほつと逆上せた樣な頬の色、熱情的な眼ざし、其處に彼女の矜らしげな若やかさと、咽ぶ樣な幸福の息吹が溢れて居た。

魚子は獨り除外者にされた樣な淋しい氣持で居室へ入つた、縁側を開け放して其處に並ぶ大きな籐椅子の一つに腰を埋めた、綠色のスタンドは柔かな光を肩の背後からほかした。

何から先に考へて可いか解らない、彼女は只だ重大な數知れ

ぬ問題の前に、手の付け様もなく茫然として居るだけであつた。

『どうなすつて？』

千鶴子が心配さうな足取で入つて來た。

『御加減が悪い？』

『えゝ、何だか少し……』

『日中に日に照られたからですわ。』

『さうかも知れないわ。』

千鶴子は卓子を隔てゝ向合つて坐つた。

『私貴女に御話しようと思つて來たんだけれども、貴女御加減が悪い？』

『何でもないのよ、面白い話？』

『あゝ面白いわ。』

魚子は千鶴子の露骨な話を聞くのが好きであつた、いつでも憂欝な時に千鶴子を見ると何だか胸が急に開ける様な氣がするのである。彼女は何か突飛な話が千鶴子の口から出る事を豫想して微笑した。

『どんな話？』

『私ね、今日は何だか變なのよ。』

『どうして？』

『私、言はうかしら。』

『言つてね。』

『私ね、戀をした様よ。』

『あらッ。』

魚子は笑つた。千鶴子は自分の荒つぽい言葉に氣が付いてこれも笑つた。

『戀をした様に思ふのよ、戀だか何だか解らないけれども。』

『可笑しな戀ね。』

『今まで随分私戀をしたわ、貴女にはそんな事がない？　私随分あるわ、でも其れは只だ好きな人だといふだけだつたのよ、戀までにはならない、戀の酵母みたいなものね、貴女に其の經驗がない？』

戀といふまでもないが、少しばかりの親しみを持つて異性を見る事は魚子としても今まで無かつたとは言へない、其れは女としての通有性であるが併し其れを口にする程の大膽さが乏しいだけである。

『今日のはいつもと異ふ、私偶然にひどく感じたのよ、これが戀だと。』

『戀がはつきり解るの？』

『解るわ、感じ方が異ふんですもの。』

『どんな人に？』

『貴女の御兄さんに！』

魚子は聲も出さなかつた、其れは無論さうあるべき事だ、魚子としては兄と千鶴子がさうなるべき事を長い間期待して居たのだ、だが彼女は不思議にも自分の胸に怪しき亂れを感じた。

『戀をしちや不可い？』

千鶴子は子供らしい口吻で訊いた。

『不可い事はありやしないわ、私其れを待つて居たのよ。』

魚子は恁う言つたが其聲はいかにも弱かつた、彼女は其れに氣付いてもう一度聲を强めて言つた。

『私其れを望んで居たのよ。』

『さう？　さう？』

千鶴子は何か他の事に考が移つたらしい、彼女は凝と自分の手先を見詰めた、其の圓々とした頰と、眞直な鼻は綠色の薄暗い柔かな光線に浮き出して見えた。

『私ね、今日其れを感じたのよ、毅さんが岩の上に坐つて熱心に水を見詰めていらしつた、其れを私が凝と見て居たのよ、三十分も一時間も默つて……一言も言はずに……其中に私はずん〱毅さんに引込まれてしまつたのよ、私は私の運命をちやんと知りましたわ。』

『運命？』
『戀は運命ですわ、戀は人生の初まりで終りですわ。』
『私には解らないわ。』
『私にも解らないけれども、これで私の凡てが終りだといふ様に思へてならないのよ。』
『喜びぢやないの？』
『いゝえ。』
千鶴子は微かに首を振つた、豊かな髪は光をゆら〳〵と零した。
『私は戀をしたけれども是非結婚しようとは思はないわ、戀はもつと宗教的なものぢやない？　結婚をするとせないとは戀の第一義ぢやないわ、戀は信仰ですわ、私　毅さんを戀したためにどんな幸福が得られるでせう、或ひはどんな悲劇が生ずるでせう、其れは解りません、其れは運命に一任するだけです、さう思ふと私は本當に嚴肅な氣持で自分の戀を見詰めるんですわ。』

『ありがたう千鶴子さん。』
魚子は千鶴子がどれだけ深く兄を愛して居るかを初めて知つた。
『貴女はそんなに兄さんを愛して下すつて？　貴女は其れを兄

さんに御話しなすつた。』

『いゝえ。』

『なぜ？』

『私、毅さんを誘惑したくないんですもの。』

『でも、言はなければ。』

『毅さんが私ほどに私を愛していらつしやるかどうか解りませんもの。』

『兄さんだつて貴女を愛して居ますわ。』

突然裏山に大きな聲が聞えた。

『前へ……おいッ。』

毅の聲である。次で讓二の聲、

『文政の元十一月、吾れ筑水を下つて舟筏を僦ふ、水流矢の如く萬雷吼ゆ、之を過ぐるに人をして毛髪竪たしむ……』

『前へ……おいッ。』

『家の兄さんはあれより他に何んにも知らないのよ。』と魚子は言つた。

『おや、月夜ですわ。』と千鶴子が言つた。

いかにも裏山の雑木林は晝の如き月光を浴びて、透間々々がきら／＼と銀色に光つて居る。

『私ね、讓二さんの詩吟を聞くと何だかしみ〴〵としてくるわ。』

『詩吟なんて古臭い。』

二人は耳を欹だてた。朗々たる讓二の吟聲は次第に熱氣を帶びて來る。

『當時國賊鴟張を擅にし、七道風を望んで豺狼を助く、勤王の諸將前後に歿す、西陲僅かに存す臣武光。』

『前へ……おいッ。』

『いやね、默つてれば可いのに。』

魚子は美くしい眉を顰めた。千鶴子は微笑した。吟聲益々佳境に入る。

『大擧來つて犯す彼れ何人ぞ、誓つて之を剪滅して天子に報ぜん、河は軍聲を亂して銜枚に代ふ、刀戟相摩す八千師……歸來河水に笑つて刀を洗へば、血は奔湍に迸つて紅雪を噴く、四世節を全うす誰か儔侶せん、九國逡巡す西征府……』

聲は林を搖がし眞白に咲く夜の草花を搖がし、葉末の露を滴らして銀色の月光に擴がつて行く。

『秋の様ですわね。』と魚子は言つた。

『前へ……おいッ。』

『河流滔々去つて還らず、遙かに肥嶺を望めば南雲に嚮ふ……』

『前へ……おいツ。』

二人の聲は段々遠ざかり行く、魚子と千鶴子は默つて靜かに首低れた。さうして別々な思ひに耽つた。

秘められた謎

恐ろしく寒い風が吹く十一月の夜、築地の大通り右側を外套の襟を立てゝ何か冥想に耽りながら歩いて居る一人の男がある、其れは北畠昌平であつた、彼は散歩が好きなのである、好きなばかりでない、彼は身に餘る樣な大問題を決定するのは大抵散歩の時である、彼には今ま大きな五つの問題が起つて居る。

第一は營口の水道問題で、アメリカと競爭して其の敷設權を取つてから其の經費に關する遣繰算段である、第二には紀州鐵道の隧道問題で、第三には琵琶湖の開鑿問題、第四には電力會社の事件、第五には日韓銀行の問題である。

元來昌平は銀行なるものに就て凡ての人と異つた意見を有つて居る、普通の銀行は預金者の金を集めて其れを危險の少ない堅實な事業に貸附けて利殖を計る事を主眼として居る、だが昌平は此等の銀行業者をいつも金の番犬と呼んで嘲笑した、銀行は金貸業者ではない、銀行は利殖を計ると共に國家有益の事業に投資すべきものだ、銀行は預金者の奴隸であつては不可ぬ、どんなに危險な性質を帶びた事業でも國家の將來に幸福を齎らす事ならば銀行先づ其れに着手しなければならぬ。これが彼の持論であつた、彼はこの見地から今まで數十の會社を救つた、政府ですら躊躇する樣な事業を自身でどし／＼計畫した、營口に於ける水道敷設權の如きは今ま一と足でアメリカに取られる處を彼が大決心を以つて數百萬圓を投じて物の見事に米國を擊退した、其時の負債が未だに殘つて居る、甲信電力會社も彼は米國資本家の壓迫に反抗して起したもので、紀州鐵道は何人も難工事に辟易したが彼は大勇斷を以て隧道を築きつゝある、凡て危うい事業のために彼は全く銀行の利害を超越して次から次と投資を吝まなかつた、だが彼の銀行は無盡の倉庫ではない、水も漏らさぬ彼の陣形は先づ紀州の隧道から崩れ初めた。工事は豫算に數倍した、地層が脆いので掘れば崩れる、積めば崩れる、人夫が十幾人となく死ぬ、新聞は筆を揃へて嘲笑する。

併し昌平は泰然として動かなかつた。

彼の友人は心配の餘り袖を連ねて彼に忠告した。

『この儘で行くと、日韓銀行は紀州隧道に埋まつてしまひますよ。』

『ありがたう。』と彼は言つた。『併し此の隧道を造ると國家の害になりますか。』

『いや非常に有益であるに違ひありません。』

『有益な事なら斷行すべしです。』

彼の言葉は簡單であるが其れだけ力強かつた、友人達は再び何も言はなくなつた。だが窮迫は日に〳〵募つて來た。

『どうしても政府の補助を得なければならない。』

彼は恁う考へつゝ歩き續けた。政府の補助！ 國家を益する事業のために政府が補助を與へるのは當然過るほど當然である、だが當然の眞理でも今の議會はなか〳〵認容しない、認容させるには政黨を虜にせなければならぬ。

『政黨！』と彼は口の中で繰返した、さうして肩を搖つた。彼は政黨なるものがどんなものであるかを克く知つて居る、幾何かの鼻藥をやれば通過は出來るとは思ふもののさうした惡德手段を以て此の正しき事業を完成する事は餘りに情ない事だと思ひ返した。

『政黨か、ふうん。』

彼は冷やかに笑つた、町の半面は大きな建物のために暗くなつた、彼はぽつくり〳〵歩き續けた、と突然慌たゞしい人の足音が聞えた。一人、二人、三人四人、五六人の影が背後の方に動いた。

『何だらう。』

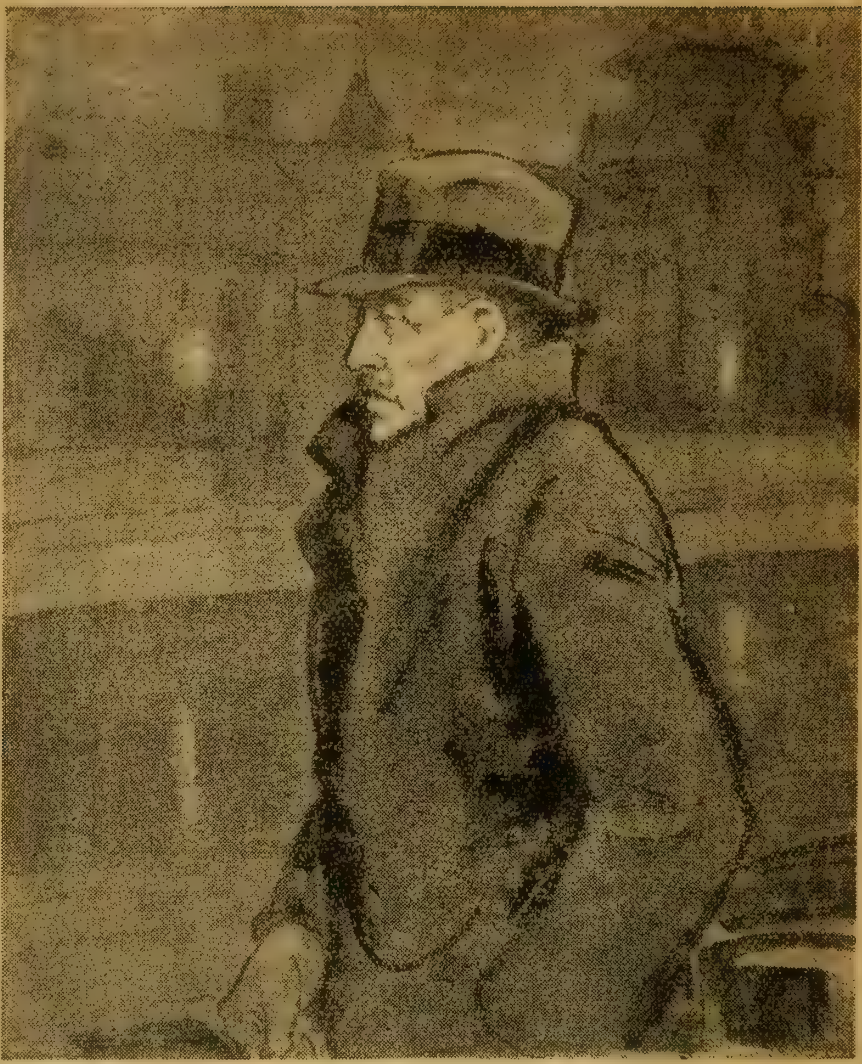
と思ふ間もなく、何處からか呼子の笛が聞えた。

『泥棒か。』

彼は再び歩き初めた、一丁ばかり來ると依然としてばた〳〵人の走る影が見える。

『まだ捕まらないと見える。』

彼は橋を渡らうとした一刹那、疾風の如く驅けて來る者があつた、苦しさうな呼吸が次第に近くなつたと思ふ途端に、一人の男がいやと言ふ



程身體を突き當てた、あツとばかりに彼はよろ〱と一、二間よろめいて漸と立停まつた。

『御用だ。』

横合からむずと組み付いたものがある、突當つた男は既に消え失せた。

『何をするか。』と昌平は怒鳴つた。

『神妙にしろ。』

『何だ貴樣は。』

『俺は警察の者だ。』

『私は北畠昌平といふ者だが無禮するな。』

『なに？』

刑事は昌平の顔を凝と見詰めた。

『やあこれは……失禮をしました。』

『間違ひと解れば其れで可い。』

『御免！』

刑事は曲者の後を追うた。

『うまくやられたなあ。』

彼は刑事の粗忽を笑ひたくなつた、もう瓢屋の前へ來た。其處に奥田を初め重役の面々が待つて居た。彼等は女中共を相手に此日の夕刊にある記事に就て話して居た。

『やあ遲くなつて濟まなかつた。』
昌平は一同に聲を掛けた。
『社長は今ま非常線に引掛らなかつたですか。』と一人が言ふ。
『うん、泥棒と間違へられたよ。』
『やあどうも。』
一同は笑つた。
『御顏を見なかつたからでせう、お顏を見ればどんなに粗忽しい刑事でも間違へやしないんですけれども、夜分ですから。』
と女中は鹿爪らしく言つた。
『顏を見たら猶ほ泥棒と思ふだらう。』と昌平は笑つた。一同の話は又もや夕刊の記事に逆戻りした。夕刊には朝鮮生れの大盜と題して二段以上に記載してあつた。
『大變な奴です社長。金庫破りの名人で、今まで三十幾つとかの金庫を破つたさうです。』
『えらい奴だね。』
『はあ、東學黨の殘黨か、或ひは何か計畫的にやつてるのかも知れません、今朝の新聞では〇〇獨立運動の資本稼ぎの樣に書いてあります、先達て大槻大將を暗殺しようとした連中かも知れません。』
『或はね。』
『さうでせう、報知新聞には多分李成民の一派だらうと書いてあります。』
『李成民？』
昌平は愕然として眼を睜つた。
『非常な勢力です、李成民は布哇に隱れて居るとは嘘ださうです、金剛山附近を巢窟にして何しろ三千の乾兒があるんださうで。』
『李成民！』
昌平は又も繰返した。忘れんとして忘れる事の出來ない毅の父、其れこそ李成民といふ名の男である。
二十五年前、兩國河畔で拾ひあげた毅、其時舟の中で泣いて居た男、其の後長々しい感謝の手紙、後日の患を恐れて火中に附したもの〻頭に殘るは李成民の三字である。妻にも秘し、毅にも秘した人間の一大秘密！

疲勞恢復に
能率增進に
どりこの
舌にとけこむ甘味、爽やかな香氣!!
飲んですぐ吸收される理想的の滋養飲料！
全國有名藥店
食料品店にあり

毅の父が不逞の首魁であるとは實に奇々怪々である。

昌平が恁う思つて深く考へ込んで居ると一人の女中が慌たゞしく入つて來た。

『捕まつたさうですよ、泥棒が今ま……』

『捕まつた？』

一同は顏を向けた。

『帽子を落しましたので顏が能く見えたさうです、髭の白い老人ですつて。』

『老人か。』

『老人でもなか〳〵強かつたさうですよ、刑事が三人で捕まへたら一人を堀へ投り込み二人を地べたへ叩き付けたんですつて。』

『恐ろしい奴だな、それぢや逃がしたのか。』

『え丶舟に飛込んで逃げたさうです、今ま巡査が大勢で提灯を點けて河岸に立つて居ます。』

『いよ〳〵李成民かね。』

『さうらしい。』

『李成民はそんな老人か。』

『さうだ、金玉均と一緒に朝鮮を支那の手から獨立させようと奔走した國士だからな、今は餘程の老人だらう。』

人々の話を餘所にして昌平は立つて二階の縁側に出た、只だ見る黒暗々たる十一月の眞夜中、河岸に沿うて一點二點三點五六點、數十の提灯が一左一右旁午として亂れて居る、きらりきらりと水が灯に反射する、寒い風がひゆう〳〵と吹く。

『あ丶李成民！』

彼は漆の如き暗の彼方に向つて言つた。

『毅のために捕まらずに逃げてくれ。』

（つゞく）

紅綠先生の小説には血もあり涙もある、花もあり實もある。日本人の讀むべき眞の小説は是だ、と今や讀者の方々から大喝采を博してゐます。さて、今後はどうなるか。此小說の本當の面白味は愈ゝ是からです。切に御愛讀をお願ひいたします。

ニキビ
吹出物に
にきびとり美顏水

頑固なニキビ吹出物にも特によくきくので有名な藥です種々なツケ藥やノミ藥で失望された方はぜひこの藥をお試し下さい。この藥はまた美容藥としても比類なき効果があり、男子方にも婦人方にも廣く賞用されてゐます。

愛國者の歌

—侵略者を迎へて—

空に蔓こる颱風雲
天日、ために暗くして
四海、俄かに荒れ騒ぎ
波濤、祖國を呑まんとす

颱風に翔る爆撃機
波濤を分くる大艦隊
嫉みに燃ゆる夷等は
牙を鳴らして迫るなり

天子、高きにみそなはし
いざ、國民よ！　武裝せよ！
夷等討てと宣り給ふ
御宣り畏しこみ、只、死ねや

死を鴻毛の八千萬
額に翳す日本刀
光芒、天地をつんざいて
夷等、消えて影もなし。

三上於菟吉作

吉邨二郎畫

愛國歌

本誌御愛讀の皆樣に申上げます

いつの時代、いづれの國に於ても、その國民が、その祖國を愛することは人情の自然でありますが、わけても吾々日本人の熾烈旺盛なる愛國心は、父祖傳來の大和魂に宿り、或は至高至純の聖火と燃え、或は壯烈鬼神を哭かしむる殉難の華と散つて、ただ一念皇國の爲に總ての國難を打開し、遺憾なくその精華を發揮し來つたのであります。かくて築き上げたものは、實に光輝ある三千年の歷史であり、世界無比の國體であります。

今やわが國は未曾有の非常時！ この秋、この際、皆樣の胸奧には、必ずや忠君の至誠、祖國愛の熱血が鬱勃として湧き立ち、抑へんとして抑へ難きものがあると信じます。乃ち小社は、この機會に於て益々愛國の士氣を鼓舞し、東亞に輝く民族的自覺を鞏固にすべく、その愛國歌の募集を計畫しました。

是非々々皆樣の魂に躍動する大感激を、或は軍歌に、或は民謠に、又は小唄に童謠に、あらゆる詩歌の形式に詠出して下さい。小社は皆樣御苦心の『愛國歌』を、廣く非常時日本の津々浦々にひろめ、この尊くも雄々しき國民感情を彌が上に昂揚し、よつて以て平素の念願たる『雜誌報國』の一助に致したい存念であります。

どうぞ皆樣、この際祖國の爲に、非常時日本の爲に、特に奮ひ起ち、競ひ立つて、續々應募せられんことを切望致します。

發行所 **大日本雄辯會講談社**

キング・講談倶樂部・少年倶樂部
婦人倶樂部・富士・少女倶樂部
現代・雄辯・幼年倶樂部

大募集

募集種目

○國民歌　○軍歌　○長詩　○民謠　○童謠　○小唄等の形式によるもの、愛國の精神を鼓舞するものなら何でも結構

……例へば、◇滿蒙飛躍を歌へるもの　◇空の護を歌へるもの　◇亞細亞の黎明を歌へるもの　◇太平洋の護を歌へるもの　◇大和魂讃歌　◇日本讃歌　◇人傑禮讃　◇國家總動員の歌　◇出征兵士の家庭、非常時女性の覺悟を歌へるもの　◇自力更生を歌へるもの　◇產業振興を歌へるもの等、以上はホンの一例に過ぎず、これらの中一題を歌つても或は數題を一括して歌つたものでも、その他愛國の主旨に適ふ歌なら、取材は全く御自由です。

審査員

詩人　北原白秋先生
詩人　西條八十先生
文學博士　佐々木信綱先生
文學博士　中村孝也先生
作曲家　山田耕筰先生
本社編輯局長　淵田忠良

賞金

○一等　壹千圓（貳百圓宛　五名）
○二等　壹千圓（壹百圓宛　拾名）
○三等　壹千圓（貳拾圓宛五十人）
○四等　壹千圓（五圓宛　貳百人）
○五等　壹千圓（壹圓圖書劵千人）

規定

◇誰にも分りよい文句であること
◇長さは五節以內、容易く暗記し得るもの（一節の長さはなるべく五六行位まで）
◇一人にて何篇應募するも可、但し一篇毎に別綴にし住所氏名明記の事
◇用紙は原稿紙たること
◇原稿へは一篇毎に歌の題名をつけ、更に種目を朱書すること（例へば軍歌・民謠の如く）
◇應募原稿は一切返戾致し兼ねます
◇當選篇の著作權その他一切の權利は本社に歸屬す

▲締切　昭和八年四月三十日

▲宛名　東京本鄉大日本雄辯會講談社『愛國歌』係のこと

▲當選發表（左記六雜誌八月號）
キング、講談倶樂部、婦人倶樂部、現代、雄辯、富士

●更に少年少女より愛國歌大募集

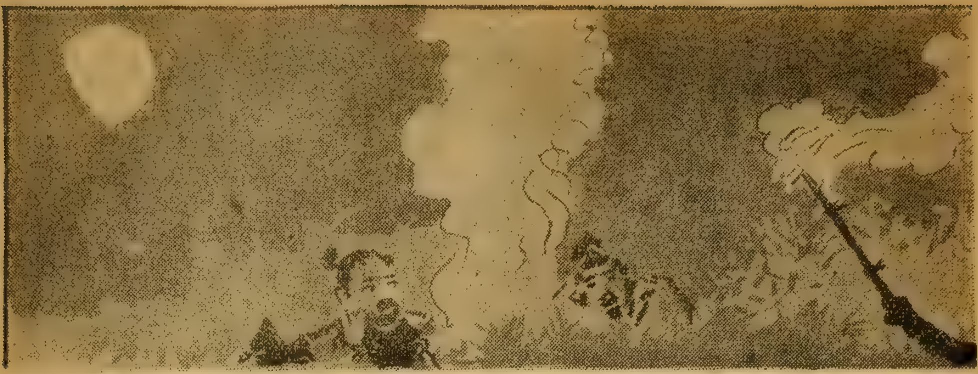
……第二國民たる兒童諸君の愛國心涵養の上に効果ありと信じます。ぜひ御子弟方に御應募をお勸め下さるやう切望して止みません。詳細は『少年倶樂部』『少女倶樂部』『幼年倶樂部』五月號誌上に發表致します。

時代小説

新田大草紙（にったいざうし）

大佛次郎

小山榮達畫



道連れ山伏

一

『この夜道を、おいでで御座いますか。』

客は、日に焼けた顔をあげて頷いて見せながら、亭主の顔を見まもつて、

『うむ。』

『夜道は物騒かね？』

亭主は、暫く答へません。もう、かなりの年寄で立ち居に不自由らしく見えます。畑や山へ行つて働くことも出來ないので、こんな街道筋の淋しいところで、往來の旅びとに粗末な酒や飯を賣つて、老後の微かな暮らしを立てゝゐるのでせう、あばら家も同然、殆ど、見る影もなく荒れた小屋に、ひとりで住んでゐる樣子でした。

客と云ふのは、日が暮れたので老爺が雨戸を閉めに降りたところへ、丁度通りかゝつて何か喰はしてくれと云つて入つて來た旅の山伏でした。頭巾も篠懸も、法衣の肩も街道の埃にまみれ色も褪せて乞食同然にみすぼらしく見えるが、年の頃も男ざかりの、目の光に威嚴のある精悍な顏立の男でした。

『さう云へば、こゝへ來る途中で、旅の者らしい死骸を一つ見て來た。』

と、山伏は、食後の白湯を呑みながら云ひ出しました。

『草の中に鴉が澤山降りてゐるので、覗いて見るとそれぢや。旅の商人らしかつたな。行き

倒れかと思つたが、着物まで剝がれてをつた。』
『どの邊で御座いました？』
『この先の、……さうよ、大きな榎の木の立つてゐる近所だ。珍らしいことでもないかも知れぬ喃。どの方角を向いても空閑の野原ぢや。もつとも東國の武藏野と云へば、京にまでも聞こえてゐる。大方、賊の仕業でもあらう。』
『近頃のことで御座います。』
と、老爺は怖ろしげに答へました。
『以前は、斯樣なことも御座いませんでした。手前どものやうな商賣をしてをりまして、旅のお客さまなどから、京にも鎌倉にも、いろ〳〵と、おだやかでないお話を承るやうに成つたかと思ひますると、てきめんで御座いまする。このあたりの街道筋にも何かと物騷な噂が絶えませぬ。いつもは秩父の山あたりにひそんでゐる惡人どもが、時を得顏に平地の方へ出てまゐりますし、その者たちに苦しめられゝば地の者までけはしい心持にならずにはゐられませぬ。その內、また大きな戰があるやうな噂で御座いますが、如何なもので御座いますか？』
燈芯の火は、靜かに燃えて向ひ合つた主と客の顏に明るく暗らく動いてゐました。風のない、ひつそりした晚ですし、頭をめぐらすと門口を蔽ふほどの大きな八重櫻の木が丁度花ざかりで、闇の中にも仄白く明るく見える靜けさでした。この靜かな春の宵に、もつとほかに浮いた明るい話もあらうものに、亭主の口にのぼるのは怯えたやうな話ばかりなのです、話相手が諸國を遍歷してゐる山伏なので、何か自分に耳新しい精確なたよりに通じてゐないか？　かう思つて、殊更熱心になつてゐるやうでした。
『如何なもので御座いますか？　上方の方の戰は容易に埒があかぬと申しますのは、まことの話で御座いますか？』
上方の戰と云ふのは、楠正成と云ふ大將が突然にあらはれて忠義の旗を擧げたのを、鎌倉の幕府が大軍を差向けて千早城に圍んでゐる戰のことなので、この關東からも軍勢が繰出して行つたのを、街道のほとりに住んでゐて老爺はずつと見まもつて來たのでした。

二

『千早の城攻めか？』
と、旅にやつれた山伏の、顏が遽かに輝くやうに見えました。
『あれは大したものだな。』
『へい……？』

『大きな聲では云へないが、あの戰で鎌倉のだらしのないのが天下に知れわたつて了つたやうなものだ。武勇を誇つてゐた關東方が何十倍の軍勢を向けてゐて、要害とは云へ、城一つ陥せぬと云ふのはどうしたものぢや。楠氏と云ふのは、たかゞ田舍の豪族に過ぎんが、なんとも大したものだ喃。』

『へい、へい……すると、上方の戰はまだ濟みませぬか？』

『濟む段ではない。はゝはゝ……小さい山城にたてこもつた人數に、關八州の大軍が散々に惱まされて足搔がつかなくなつてゐる。』

『へい、では鎌倉方が！　そんなことは御座いますまい。』

『が、まことのことさ。こんなことで嘘を云つたところで仕方がない。まづ、私などは、どつちが勝たうと何の關係もないことだ。』

『ほんとうのお話で御座いますか。』

『鎌倉でも大方今は躍起になつてゐよう。無論、衰へたりとは云へ天下に號令する幕府の勢力ぢや。まだ〳〵軍勢も送らうし、やるだけのことはやらうが喃。』

『戰は、もつと大きく成りまするか？』

『さうならぬとは誰れも云ふまい。なアに、それも、一刻のことぢや。今よりも惡く成ることはあるまいから、氣を大きく持つて眺めてゐることぢや。』

『今よりも惡くなることはない……と仰有いますか。』

『さて、ぼつ〳〵出かけようか？』

と、山伏は伸びをして、立ち上りかけたのでした。

『もし、もし……お出かけで御座いますか？　惡いことは申上げませぬ。どなたか、あとから行らつしやらないものでもなし、もう少しお待ちになつて、なるべくならば、お連れをおこしらへに成つて、いらつしやいませ。他の時では御座いませぬ。おひとりでは、何が出てもお危なう御座います。』

『私のやうな者でも喃。出せと云はれても出す物がないが……』

『ですが、惡いことは申上げませぬ。晝間でも近頃は、大勢さま、お待ち合せになつていらつしやるものを！　この闇の晩に、たつたおひとりで行らつしやるのは御無理で御座います。』

『はてね、この邊にも地頭守護職はをらうに。そんなに道中が物騷になつてゐるのか？』

『お待ちくださいまし。それ、どなたかおいでになりました。お馬の音が聞こえます。お侍さまで御座います。丁度宜しう御座いました。』

三

亭主の後について、外へ出て見ると、そのあたりの武藏野は闇の中に一葦淳りやうに黒く、無際限の空の、星をちりばめた下に、ゆるい丘をうねらせ、森や林を黒くわだかまらせて、夜霧の底にひつそりと寝鎮つてゐるのでした。

老を蔵る馬の蹄の音は、最初の内は星の光の春らしくうるんでゐる空のどこかに聞こえてゐるやうでしたが、やがて、この苫屋のある丘の裾をめぐつて、はつきりと、街道を上つて来るのがわかりました。

待つてゐると、闇の中にやがて、揺れる影があらはれて、近くなるにつれて異形な馬の背にまたがつた侍の姿となりました。長い道中を續けて來たらしい。馬も疲れてゐれば乗手も疲れてゐるやうに見えます。

小屋の前まで來ると、馬の足搔をゆるめながら鞍の上から覗いて見て、

『誰れか、足利から來てゐるか？』

と、やゝ濁つた強い聲で尋ねました。

『いゝえ、どなた様もお見えになつてをりませぬが……』

亭主は馬の口を取りながら、急いで、かう答へました。

『どなたか、お迎へにいらつしやるお約束で御座いますか。』

武士は、あいまいな返事をしながら、鞍から降りて、立つてゐる山伏の姿を鋭どく見てから、會釋も返さずに、つか〱と店の内へ入つて行きました。

『すこし、休息させて貰はう。』

『どちらから、おいでゝ御座いました？』

亭主がかう尋ねたのにも、何の返事も與へません。旅の装束でゐるが、四十がらみの立派な風采な侍で、鋭どい目付をして、小屋の内を見廻してゐます。氣難しく横柄な人柄らしいので亭主も白湯をさゝげてから、おそる〱土間の隅に控へてゐると、侍は急に顔をあげて山伏の方を見ると、ちよつと思ひがけなかつたほど丁寧で愛想のよい調子で話掛けたのでした。

『御坊は、いづれから、おいでられた？』

『南都からで御座る。』

『では……上方の騒動は最早御承知かな？』

『くはしいことは、もとより存じませぬ。』

と云ふのが、山伏の挨拶でした。

『南都を出ましたのが昨年の夏。その後はずつと、諸國を廻つてをりまいて、人の噂に聞くばかりで御座いまする。』

武士は、脇を向いて無言でゐましたが、また急に、

『いづれへ行かれる？』

と向きなほつて尋ねました。

『一向に、あては御座いませぬ。あなた様は……足利殿御家中で御座いますか？』

かう問ひ返した山伏の言葉にも武士は、變に警戒するやうに返事を躊躇してから、あいまいに頷いて見せただけです。

山伏は、武士が何か隱さうとしてゐるのだと感じながら、そんなことには一向關りあひのないやうな、依然としておとなしい調子で、

『都からお戻りなさいましたか？』

と、尋ねました。

『いや、違ふ！』

と武士は突慳貪に答へました。しかし、これは正直な返事ではなかつたやうです。實際は都から歸つて來たのを、故意に隱したやうに思はれました。武士がその後で急に默り込みながら、何となく不機嫌らしい顏付になつたのも、そのせゐらしく見えるのでした。

『どりや、出かけようか？』

突然に、かう云ひ出して腰を上げながら盆の上に靑錢を置くと、山伏や亭主の方で賴み込まうと思つてゐたことを、武士の方から鷹揚に申出てくれました。

『道が同じなら、御一緒にまゐらうかの。』

四

次の、人家のあるところへ出るまで、一里に近く、道は淋しい野中をうねつて、雜木林を貫ぬき、森をめぐつて續いてゐました。この邊が武藏野の中心でせう。騎馬の武士は親切らしく山伏に歩調を合せて馬の足搔をゆるめてくれるのでした。

五六丁歩いてから、少し、あたりが明るくなつたやうに思つて見ると、東の方の森の蔭に月が出ようとしてゐるところで月魄があたりの空をほつと染めてゐました。

靄の中にある遠い低地に、銀色に光つてゐるのは、荒川の支流でせう。間もなく、二人も足もとの地面に自分たちの影を見て歩くやうに成りました。二人が少し前に休んだ家は、もう丘の背後になつて見えなくなつてゐます。一面の草の中です。廣い範圍にわたつて野火のあとが殘つてゐるところもありました。森も燒かれたと見え、木が坊主になつて骨のやうに立つてゐます。

『かなり大きな野火だつたと見えまするな。』

と、山伏が申しました。

武士は、並んで馬を進めてゐるだけで、話もしないで默々と、してゐるばかりでした。この時も、口の中で、うむと頷いただ

けです。

足利殿の家中と云つたが山伏が考へて見ると、この侍の主人の足利高氏はやはり鎌倉の幕府の命令を受け軍勢をひきゐて上方へ出陣してゐるし、あるひはこの侍も主人について千早の城攻めにも加はるし、何か用事があつて領地へ歸つて行くのかと思はれるのでした。それにしても、この侍はあまり立入つた話を好まないらしい様子なので、こちらから尋ねるのはどうかと思ひますが、わざ／＼道連れになつて置きながら、碌々口もきかずに歩いてゐるのは、山伏に取つては最初から氣がかりなことでした。

「何か、考へ事でもあるのかな？ それとも變人なのか。い

や、さうでもない。先刻話した時は、なか／＼丁寧だし人を外らさない巧妙なところさへ見えた。」

かう思つたところでした。

武士は鞍の上で、急に、手綱を控へて道の前後を見わたしたと思ふと、

『修驗者。』

と呼びながら、突然に、抜く手も見せず腰の太刀を抜いて、山伏の眞向から斬りかけました。

眞二つと思つたのが、山伏はたしなみもあつた男と見えて、刄の下を潜つて飛びのいてゐました。

馬上の武士が周章へて二の太刀を下さうとしてるのを、爛と光る目が、凝と睨みつけてゐます。

『何をなさるか？』

鋭どく叱咜した聲を、聞いてゐて武士は一言の返事もしません。たゞ飽くまで斬らねばならぬと信じてゐるのか、殺氣が漲つて蒼白くなつた顔を向けて追ひすがつて來たかと思ふと、ひらりと馬から飛び降りて地面に立ちました。

逃げるかと思はれた山伏は、これも金剛杖を取直して構へてゐます。

『なんで、手前を斬る？』

無言で、武士は詰め寄つて來るばかりです。

『理由を！』

ぱつと、月あかりの中に、氷の柱の崩れるやうに刀身が閃きました。硬い音の中に山伏の握つてゐた金剛杖が草の中へ飛び散りました。持ち手はまたもや飛びすさつて地に屈んだ姿勢を起して來たかと思ふと、背中の笈を捨てこれも腰の刀を拔いて、別人のやうにきつとなつて身構へてゐました。

『足利殿御家中が……なんで、旅の修驗者を殺されようとなさる？』

その聲が終るか否やに、がつと、凄い音をたてゝ、刀と刀と、宙に噛み合つてゐました。

五

二十日ばかりの月が、平らかな地平から緩やかに昇つて、晩春らしい柔かい光で、二人の顔を彩つてゐます。しんとした夜の野中に互ひの隙を狙つて挑み合つてゐる小さい人間二人の、どちらか仆されて靑草の葉を血ぬるか、恐らくその晩の月も一向に關り合ひなく輝いてゐたのに違ひありません。

氣合の聲も漏れなかつただけ凄じく、ひき緊められた瞬間でした。その靜けさを破つて猛然と双方が斬結んだかと思ふと、知らぬ間に武士の方が一二間追ひ詰められて後へ退つて來て、自分がどんな人間を敵に廻したか、初めて氣がついて尠からず狼狽へたやうでした。

山伏はと云へば、前屈みだつた姿勢を起して、六尺近い丈一杯に立つて、切尖を向けながら傲然と敵を睨み据ゑてゐます。口のあたりに動いたのは蔑むやうな笑ひでした。

『やるか？』

壓しつけるやうな聲でした。火のやうな目の色です。

『やつて見い。』

武士の方が眞蒼な、絶望的な顔色になつてゐました。鋭どかつた切尖も今は僅かに必死に身をまもつてゐるだけの樣子です。

『なんで、私を斬らうとする？』

山伏がまたかう云ひ出した時、

『人違ひぢや。』
と、呻くやうな聲が答へました。
『無禮は赦されい。なんとも申譯ないことをした。』
『人違ひ！……でもなささうな樣子ぢや。』
『さうでない。微塵僞りはない。』
山伏は無言でゐます。冷然とした顏付が依然として相手の言葉を素直に受容れたとは見えません。
『誓言せう。斷じて、僞りはない！　身共の失態ぢや。』
『潔く名を名乘つて詫びられるか？』
鋭どい聲でした。
『む……』
と、武士は口ごもつたまゝです。山伏は返事を待つて無言でゐます。
その刹那でした。どこからとなく人の聲が聞こえて來たので、山伏がちらとその方角を見ると、草の中に炬火を赤く揭げて、三四人連れで走つて來る者があるのでした。
『うむ、あすこだ！』
と云ふ聲が聞こえたのは、この深夜の野中の劍戟の音を聞いて、旅の者か役人か驅け寄つて來たものらしく、あるひはと考へられた賊どもとは違つたやうでした。
『人が來た！』
と、山伏は呟いて、急に刀をひきました。
相手方の武士が突然に地を蹴つて斬り込んで來たのは、その途端でした。はつとして體を躱して避けながら、
『卑怯！』
と叫んで、太刀を反すと、
『助勢！』
と武士は飛びすさつて踰けながら、炬火の群に助けを呼びました。山伏の切尖は、危ふく胸のあたりをかすめて流れたやうです。
『私ぢや。來てくれ、敵の間者らしいぞ。』
この叫び聲で愕然としたのは山伏です。見れば炬火の群は、口々に何か喚きながら太刀を拔いて驅け寄つて來るのでした。

六

『遁すな。斬れ、怪しい奴ぢや。』
急に笈をつかんで走り出した山伏の背後で、この聲が聞こえました。炬火の群は屈强の壯士達です。喚き叫んで、草を踏み散らして追ひすがつて行きました。
一番最後に道路から降りて來た頭人らしい髯武者は、武士の

側まで來ると、片手を地に突いて恭しく禮をしてから、落着いた聲で、
『お迎へに上りました。』
と挨拶して武士がまだ拔身のまゝ提げてゐる刀身を丁寧に袖で拭ひにかゝりながら、原の向ふに移つて行つた炬火の方角を見送つて、
『何者で御座りまするか。』
と、武士の顏色を伺ひました。
武士は、刀身を鞘めながら不愛想な顏付を見せて、なほ凝と見送つてゐました。怖ろしかつた瞬間は過ぎてゐましたが、平靜な心持には戻つてゐなかつたやうです。
『尋常の奴ではない。』
と呟くやうに云つてから、また急に、
『是非とも斬れ。敵の間者かも知れぬ。』
『間者？』
『うむ。』
『どちらから……』
ぢろりと、武士は目を動かして、部下の顏を見据ゑました。
『俺れが京から下つて來たのを知つてゐたらしい。彼奴が北條殿の間者であつても斬らねばならぬ。』
『鎌倉の……？』
『さうぢや。』
と返事は斷乎としたものでした。
『話は後でする。鎌倉の間者ならば、特に逸してはならぬ。』
愕然とした樣子でした。それもその筈です。主人の足利高氏は鎌倉の幕府の命令で軍勢を率ゐて都へ上つて行つたと云ふのに、急にひそかに故郷へ寄越した使者の口からこの言葉を聞くと云ふのは、上方にゐる主人の決心に何か大きな變化があつたものと見なければなりません。
『手ぬかりなく賴むぞ。お上の思召はまだ海のものとも山のものとも分らぬ。今は丹波で天下の形勢を御覽になつてゐられる。しかしぢや、ひよつとすると、この機會に御謀叛をなさる。その仕度に、五左衞門、ひそかに下つて來た。鎌倉殿の間者なら逸されぬと云ふのはそれぢや。しかし、なあ、兎に角、今のところは鎌倉は御主筋ぢや。そこぢや。ぬかりなく、手際よくやらねばならぬ。わかつたか、景久。』
『は。』
その間も熱心に見詰めてゐた炬火の群の動靜は、五丁ばかり先の森の近くまで行つて、急に狼狽へたやうに左右に分れて驅け廻つてゐるのは、あるひは不覺を取つて逸したのではないか

と、見る間にこの紀五左衛門の顔色は變つてゐます。

『景久、草を分けても探し出せ。今申聞せしとほりの大切の場合だ。間違へば、鎌倉に人質にお預けの若殿のお身の上だぞ。』

その若殿と云ふのは、主人足利高氏の實子で永壽王丸と云ひ、高氏が出陣の時に幕府に異心のない證據に鎌倉へ人質に差出して行つたものです。

『殊に、まだ我が君御謀叛と決つてをるわけではない。右するか左するかは、天下の樣子を見極めて大願成就のお見込がついてからだと仰せられる。こゝで鎌倉から睨まれてはならぬのだ。

七

足利の家人等は、山伏の姿を見失つて狼狽してゐました。

『この森の中だ！』

振りかざした炬火は杉の幹をあかあかと照らし出して行きます。繁るにまかせた草や茨の間に、僅かに細い道が通つてゐました。

その内に一同がはつとしたのは、先頭に歩いてゐた者が急に立ち止つて、

『人がゐるぞ！』

と叫んだ時です。

見れば人影が黒々と行手にうごめくのが見えました。それも、四五人はゐる樣子です。草の中に寢てゐたのが、突然にこちらが入つて行つたのに驚いて立ち上つたやうに見えました、乞食の群か旅人の野宿か、と怪しまれましたが、こちらで探しあぐんでゐた山伏の男ではありません。警戒するやうに身構へて立ちながら、向ふもこちらの樣子を凝と見まもつてゐます。

（透波か？）

さう氣がついて見ると、風俗も樣々でした。ちぐはぐの具足を附けてゐる者、百姓そのまゝの者――たゞ、どれも得物を身に附けてゐて、無言でゐる内に、どことなく險しい空氣が動き、どんよりと凄く光る目がいざと云ふ際の覺悟を仄めかして威嚇するやうにこちらを見てゐるのと、足もとの地面に焚火の燃えさしが灰をかぶつて殘つてゐるので、大體この男たちの素性も讀めたと云つてよいのです。

『誰れか、この森の中へ入つて來なかつたかな？』

一人が進み出て、横柄な態度の中に妥協的にかう尋ねて見ました。

返事はありません。透波の仲間は、無言で鬚面を見合せただけです。

『山伏の風をした奴だ。誰れもこゝへ入つて來た樣子はなかつたか？』

重ねて、かう尋ねると、頭分らしい一人が初めて首を振つて見せて、誰れも人が來たのを見なかつたと答へました。

『はてな。方角が違つたか？』

『違ふ筈がないが……』

かう云つて顏を見合せたところへ、草を分けて、つか〳〵と追着いて來たのは、紀五左衞門が景久と呼んでゐた鬚武者でした。

『どうした？』

返事がないので、急に苦り切つた顏付になりながら、注意深く透波の群を見まもつてゐて、急に、うむと頷くと、

『お前たち、これだけの人數か？』

と尋ねました。

『もつと仲間はゐないか？　我々に手を貸してくれゝば褒美を取らせるぞ。』

透波の頭は、どんよりとした目の色で景久の顏を見てゐましたが、言葉の意味がわかると、

『どうすればいゝんだ？』

と問ひかけて來ました。

八

山伏はやゝ小高い丘の上へ出て、追手の炬火の動きを見まもつてゐました。

月は先刻より大分高くなつてゐました。夜の平野は靄の立つてゐる地平まで、黒々とひろがつてゐます。露に濡れて、ひつそりとしてゐる草の野原でした。人の話聲がかなり遠くから、意味は取れないが、はつきりと聞こえるのです。追手が急に人數を增し四方に手を分けた樣子なのも、山伏はさとつてゐました。しかも、どこまでも騷ぐ樣子もなく、冷然と、自信ありげに見えるのは、度胸も坐つた男のやうでした。

凝と、動かずにゐる内に、馬蹄の音が起つたのは、先刻の武士が再たび馬を走らせ始めたものと見えました。覗いて見るとそれらしい黒い小さい影が、搖られながら原を横切つて、遠ざかつて行きます。月はあるが、地面は暗いので、その姿も僅かの

間見えてゐただけでした。

（足利の家中らしかつたが……俺れを何と思つて急に斬らうとしたらう。）

山伏は、追手の炬火の動きを見さだめてから、逆側の斜面の笹を分けてひそかに麓へ降りて行くのでした。

間者とでも思つたのか？

それにしても、鎌倉に附いて幕府に重きを爲してゐる足利が、何故他國の間者を恐れるのか？

それが不審でした。

あるひは足利高氏に、幕府に反旗を翻す野心でもあるのか？

これは信じられないことでした。山伏が知つてゐる範圍では、足利氏が朝廷に忠義の至誠を寄せてゐるやうな話はこれまで、つひぞ聞いたことがない。楠氏などに比べれば地位も勢力も隔段に上の家柄の豪族だし、當主の高氏の名も執權の高時の一字を貰つてつけたくらゐで、北條氏とは特に密接の關係がある。京都にお味方する至誠などは、勿論ないものと見なければならぬ。

いや〳〵、さうでないぞ。これは、あるひは別の動機から幕府に反旗を翻す企てがあるのかも知れぬ。足利氏は關東の名家だし代々、野心のある家柄だと聞いてゐる。形勢次第では、立つて北條に代つて天下を取る野心を抱いたのかも知れぬ。關東の大軍を向けて千早の田舍城一つ陷入れる力さへない幕府に機敏に見限りをつけて、この機會に立つて、かねての野望を遂げようとするのかも知れぬ。朝廷の爲にではない、全然自分の

醫學博士 森田資孝先生 御推奬

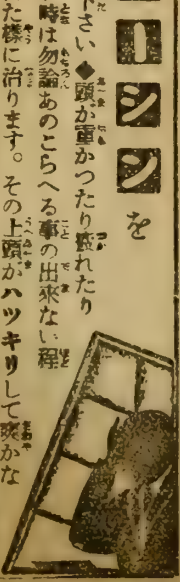
頭痛に ノーシン

頭がボンヤリした時
頭がクシヤ〳〵する時
頭がチクチク痛む時

ノーシンを

スグにのんで下さい◆頭が重かつたり疲れたりして氣分の悪い時は勿論あのこらへる事の出來ない程痛む頭痛が忘れた樣に治ります。その上頭がハツキリして爽かな氣分になりますから仕事や勉強が思ふ存分愉快に出來ます◆論より證據スグのんでごらん！ ノーシンのキキメに誰もが感嘆せられます。

◆定價 三十錢、五十錢、一圓、全國の藥店やデパートにあり



發賣元 名古屋市東區京町（振替名古屋七九二番） 荒川長太郎合名會社

爲にだ。

ないとは云へない。それまでの覺悟がきまるかどうかは、今後の天下の情勢如何を見てからであらう。

結果としては足利氏も朝廷のお味方になることにならうが、さて、その後はどうなるか？ 專横な北條に代つて足利氏がまた政權を專らにするやうな危險はないか？ そんなことにでもなれば、我々の志してゐる公家一統の理想の怖るべき障礙となるが……

追手に心を配つて丘を降りながら、この山伏が心を暗く考へたのはそのことでした。

新田の莊

一

道が下毛野へ入ると、あたりの眺めは一變します。平野をこめる春霞の奧に大和の山のやうになだらかで優しい姿の山が翠欝蒼として見えるのは、太田の金山でした。

あたりの沃野は縱橫にきりひらかれて整然とした田畑になり、鷄が鳴き犬の吠える人家の聚落を點々と列ねてゐます。野山に丁字桃の花ざかりでした。菜の花の咲く畑には百姓が勤勉に鍬を動かしてゐるのが、陽炎の明るい影につゝまれて、豆人形を並べたやうに見えます。見るからに富裕らしい土地、東國の奧にもこれだけよく開拓せられた莊園があるかと、意外に思はれるくらゐでした。所の名は新田の莊、渡良瀨川の流れを一筋隔てた足利氏と相對して同じ源氏の流れを掬む新田の一族が地を拓いて幾代かに亙つて築き上げた領土でした。

足利家の紀五左衞門は、道を急いで、この土地を通り拔けようとしてゐました。連れは人目を憚つて途中まで迎ひに出た景久と云ふ髭武者が一人、馬を捨てゝ徒步で來たのでした。足利の所領はもうこのすぐ先だし、こゝまで歸つて來れば、故鄕に着いたも同然な、心の寛ろぎ方でした。

『景久。』

『はつ。』

『長閑なものだなあ。いつ來て見てもだ。』

五左衞門は笠を脫いで汗を拭きながら、感心したやうに、あたりの春景色を眺め渡しました。

『京では戰をしてゐる。天下の明日がどう成るか判らぬと云ふ場合に、この、のんびりとしてゐることはどうぢや。夢のやうな心持がする。』

『は。』

『睡つてをる。とんと、それぢや。田舍だ。まつたく天下の事には風馬牛ぢや。どこを風が吹かうが、おのれの所領さへ安堵なら、一向に氣にしないでゐられるのだらう。』

『左樣かも知れませぬ。もつとも、これは領主にも依ることで御座りませうな。』

『無論のことだ。』

五左衞門は我が意を得たりと云ふやうに頷いて見せました。

『下野の足利、上野の新田と、もとを申さばお上とは御一族のわけだが、お上が都へ出て風雲を見て、機會さへあれば乘出して天下を掌中に握らうと遊ばしてゐられるのを思ふと、はゝははゝ、人間田舍に生れて無慾に育つと云ふのは氣の毒なものとしか思はれん。』

『いや、慾のところは人並以上で御座いませうとも、人間器量がことで御座います。たゞの地侍と、生れながらの侍大將のお上とでは、もとより比べものに成りませぬ。』

『主人を持つなら、よい主人に仕へたいものだ。はゝはゝはゝ。新田殿も確か千早城へ軍勢を出したやうであつたが……』

『それが、途中ですぐ引揚げてまゐりました。やはり臆病風に吹かれたもので御座いませうか。野育ちもよいが、いつの間にか戰する法を忘れたのかも知れませぬ。』

『いや、しかし……』

何を思ひ出したのか、五左衞門は急に眞顏になりました。

『お上は俺れなどとは、まつたく別の見方をしてゐられる。新田が急に千早の城攻めをやめて歸國致したのは、あるひは鎌倉に背く所存ではないか。東國の兵をひきゐて、一擧に鎌倉を衝くつもりではないか？　かう仰有つて、奇怪にも頻りと新田殿を煙がつてゐられるやうに拜されたが……』

『新田殿が……いや、それは、とんでもない！』

『お主もさう思ふか？　俺れもこゝへ歸るまでは、どうかと案じて來たが、この分では、先づ先づ天下は泰平なものらしく見える。いやさ、お上は例の御氣性ゆゑ、御自分でなさらうと思召されることがあると、他人も同じやうに考へさうに、すぐと取越苦勞を遊ばされるのだ。はゝはゝはゝ、世間はそんなものではない！　人にも依りけりだ。井の中の蛙は、外へは出ぬこと。新田殿もそのくらゐは御存じであらう。待て、待て。誰れか來たやうだ。惡口を聞かれてはならぬ。お上がいよ〳〵の御決心の場合は、一族の由緣を賴つて新田が東國に据ゑた勢力を利用せねばなるまい、とも仰せられた。風の吹きやうに依つては猫の手まで欲しいくらゐ、いそがしくならぬとは限らぬ。甲

信越後に一族の勢力を植ゑつけた新田殿、大事の前に粗略には出來まいて。』

笑ひながら、ぎろりと光つた眼の色でした。桃の花の紅い丘の斜面に降る春の光を眩しげに、糸のやうに細く變ると、

『うむ、それはさうと……新田の館に入つてをるのは、赤橋四郎五郎の娘だつたな？　あれは、どうしてゐる？　あれなどから、新田殿の動靜を聞ければ何よりだが……その後も、例のとほり賢く立廻つてをるか。』

『さて……』

と、景久は、その話になると急に返事を躊躇する色を見せました。

『如何した、景久？』

五左衛門は、眉間に皺を寄せて見返りました。

『何か、變つたことがあつたか。つゝまず申せ。』

二

反町にある新田の館が、森閑としてゐるのは、いつものことでした。馬を下人に預けて門を入つて行つても咎める者もない。穀倉の方で下人たちの何か話してゐる聲が聞こえるだけで、玄關の前には、雀が降りて砂をあびてゐる靜けさでした。

『誰れかをらんか。』

義貞の弟の義助は、鞭をさげたまゝ寺のやうに靜かな玄關の奧を覗き込みましたが、

『お不在と見える。』

と呟いて、若い顏に苦笑ひしながら、庭口へ廻つて、つか／＼入つて行きました。

こゝにも桃の花が咲いてゐました。

若侍のどつと笑ふ聲が聞こえたかと思ふと、またしーんとした世界に弓の弦の鳴る音がして、すぐと的を貫ぬいた心地よい音がまた起るどよめきの聲の中に聞こえました。

矢場に、人が群つてゐるのが見えました。皆若い侍たちばかりで、義助は、その中に兄の子の義顯が健氣な姿で弓を握つて立つてゐるのを見つけました。

『お前か？』

義助は微笑を含んで、立つて見まもりました。

『見てゐよう、ひいて見ろ。』

地に倒れた影も明るい春の光の中でした。叔父に見まもつてゐられて、義顯は少年らしい若々しい顏を微かに染めながら、靜かに姿勢を整へて身構へました。心持よく弦が絞られて行きます。素質がよいのか父の平素の躾けがよいのか、構へも引き方も、まつたく非難の餘地のないものでした。

ひゆーつと、弦を離れた箭は、春日を截つて走つて行きました。

『うまい！』

見事に的の眞つ心を貫いたのでした。

『急に上達したやうだぞ。』

義助は甥の弓を取つて、強さを試して見ながら、庭を隔てた屋敷の縁に、兄嫁の姿を見て、目禮しました。

『兄上は？』

『外を歩くと仰有つて出ていらつしやいましたが……』

『どちらへ？』

『私どもには何も仰有いません。』

『探して見ませうかな？』

かう問ひかけながら、義助は快活らしい顏色の裏

に、何となく心のひき緊まるやうな氣持で兄の義貞の近頃のことを考へました。兄の心持を知つてゐるのは多分自分だけかと思はれるのでした。兄が何事も云はないが忠義の旗を翻して鎌倉を攻める決心でゐることも。また、その計畫が殆ど無謀と云つてよいほど困難で重大な危險を覺悟しなければならぬことも。

義助は、弓を甥に返してゐました。

『もう少ししたら、もつと強い弓を試して見ろ。』

鶯が、どこかで啼いてゐました。義顯はまた箭を二本取つて、靜かに身構へ初めてゐます。義助は、

『兄上はおひとりで出て行かれたのですか。』

と尋ねながら、甥の姿勢に再たび注意深い視線を注いでゐます。

(さうだ。ひとりなんだ。ひとりで、いろ／＼考へながら歩いてゐられるのだ。大變なことだ。この子のことも考へてゐられるわけだらう。)

三

義助が兄に追着いたのは人のゐない九十九折の山道を登つて金山の尾根に出てからでした。麓の村々はもとより、ずつと遠い平野の果まで見晴した松林の中に、義貞は岩に腰を掛けてゐて、義助の登つて來たのを、

(來たな。)

と云ふやうに笑つて迎へたのでした。

『何をしてゐらつしやいます?』

『お前は何をしに來た?』

義助は答へません。無言で、松の幹の側に立つて、麓の平野を見てゐます。

風のない靜かな午後でした。春らしい光が平野の景色を霞ませてゐます。帶のやうな川の流れが鈍い色で光つてゐるのと、どの方角を見ても菜種の花の黃ろい色が美しく目を惹くばかりでした。

『靜かなもので御座います。』

『俺れもさう思つた。こゝに、かうしてゐると松かさが草の中に落ちるのがよく聞こえる。』

『それだけで御座いますか?』

『……?』

『何をお考へになつてゐられますか?』

『何も考へんさ。』

弟は、信じられないと云ふやうな様子を見せました。しか

し、兄は、それを見て靜かに笑つただけです。

『ぢやア、何を考へたらよい？　考へるだけのことはもう考へてある。』

『が、こゝへいらしつて何を御覽になつてゐられます。この方角に鎌倉があり、この方角に上野の守護職がをり、この川の向ふに足利氏の一族がゐると云ふことでは御座いませぬか。』

『違ふ。』

兄は靜かに弟の顏を見まもつたまゝです。

『さあ、何を見てゐるかと云へば、下の菜種の花の美しいことか？　僞りではない。それからこの山の上を通る雲の、いろいろの形を珍らしいと思つて見てゐたと云はうか。ほかに考へることもないのぢやないか？　上方から歸つて來てから、もう百日の餘になる。』

『では、御決心は？』

『遲すぎたくらゐだらう。義助。千早城へ呼び出される前に肚を決めるのが當然だつた。殘念だつたのは、我々兄弟が上方で育たないで關東の田舍に生れたことだ。しかし、そんなことも考へたところで今更何もならん。正しいと氣がついたことを、やるだけの話だ。何も云ふな。俺れが行かうと云つたら、附いて來い。』

弟は無言でゐます。目の色に強い感動の色が滲んでゐるだけでした。

『それで惡いか？　義助。』

鹽の十徳

一、庖丁などで一寸傷ついた指には、直ぐ鹽を揉みつけると化膿しない。

二、お臺所を掃く時、パラ〳〵と鹽を撒くと塵が舞ひ上らず甚だ衞生的だ。

三、湯豆腐をする時、鹽を一摘み入れると豆腐が固くならぬ。

四、青物を茹でる時、鹽を入れて蓋をせずにおくと青々と色よくあがる。

五、新しい箒を熱い鹽湯につけると二倍は長持ちする。

六、硝子器を初め冷水に入れ、鹽を加へて徐々に煮沸し、又徐々に冷ますと丈夫になつて少し位の事では割れない。

七、新鮮な鷄卵の小さい端の方を下にして、相互に觸れぬやう鹽の中に詰めておくと長く腐敗しない。

八、酢を買つた時、鹽一摘み入れておくと黴止めの效がある。

九、薄い鹽水に大豆を二時間ほど浸けておいてから煮ると早く軟かくなつて皮も剝けぬ。

十、揚物鍋に火が入つた時、青菜がなかつたら鹽一摑み投り込めばよい。

『なんの！』
『よければいゝ。默つてゐろ。』
『御勝算は？　相手は九代連綿として根を据ゑて來た幕府ですから。』
『無論勝つつもりだ。』
『義顯も連れて行かれますか。』
『あれも一門の內だ。俺れは一族の血の最後の一滴まで流すつもりでゐる。皆も俺れに任してくれるだらう。』
子供のことを語るにしても、義貞の聲は靜かでした。
これだけ云つて了ふと、もう話すこともないと云ふやうに口を噤んで、見ると云ふほどもなく緩やかな目の色で、麓の方を眺めてゐます。無言になつてこれに倣つてゐた義助は、兄の胸の深く落着きはらつた心持が、靜かにあたりに擴がつて、並んでゐる自分の心までくるんで行くやうな氣持になつて行くのを、凝と味つてゐるのでした。敬虔と云ふのに近い感動さへこもつてゐます。
準備は常日頃から整つてゐるとしても、それだけの大戰を控へて、すこしも感動や興奮らしいものを示さない兄の肚に、驚嘆を繰返しながら、この兄こそ眞實の侍大將だと、肉親に生れた誇さへ感じるのでした。明るい宙に靜かに松の花が散つてゐました。麓の景色は、白い道のうねりも、畑に動く人や馬の姿にも、兄弟が稚なくてこの山に登つて眺めた麗らかな春の景色とまつたく同じものが展がつてゐるのでした。かうして兄と並んで無言で眺めてゐると、いつか、自分たちが、その幼なかつた頃に歸つてゐるやうにさへ思はれるくらゐでした。
『さうです。ずつと三十年の間眺めて來たことになりますか？いつ見ても、こゝはよい景色ですな。兄上。』
『お前もさう思ふか。』
と、兄は笑ひながら、岩から腰を上げようとはしません。
『俺れたちの一生の內に、いつかこの山へこもつて敵を迎へることがあるか、と思ふことがあつたくらゐだが……思へば、見る世界が狹すぎ平穩過ぎた。』
兄の言葉でやゝ感慨深く聞こえたのは、これだけでした。

四

『待て！』
一人が連れの腕をつかんで立ち止らせました。深夜の道路でした。二人とも夜廻りに出てゐた新田の家人です。
森とした闇の中を、歩いて行く人影があるのです。こんな眞夜中のことですし何者かと思はれたのでした。

『旅の者ではないか？』

『いや。』

そつと、息を殺して見まもつてゐて、一人が、急に、

『女だ！』

と、囁きました。

二人とも若い男でした。悪戯らしく目を見合せて、笑ひを漏らすと、

『つけて見るか？』

と、一人が云ひ出しました。

『罪だらう！　春の晩だ。』

『いや、さうでない。怪しからんことには變りがない。お主がいやなら、俺れが行つて顔だけ見て來る。』

その男は、ひとりで出て行きました。待つ間もなく足音をたてず引返して來たかと思ふと、尋常でない様子でした。

『來てくれ！』

『なぜ？』

『柴笛と云ふ女だ。』

『お館の？』

『うむ。』

『をかしいぞ。誰れか人違ひぢやないか？』

さうでないと云ふあせつたやうな返事でした。柴笛と云ふ女ならば、主人の屋敷にゐる侍女の中で、近郷の娘だと云ふが、美人なので若い者たちの噂によく上る女でした。

『藏人と噂のある女だ。』

『さうよ。だから奇怪だと思ふ、藏人がこんな、馬鹿な眞似をするか？』

『しないとは云へまいが……お上をないがしろにする不埒千萬な話だ。しかし、あの女も、なか／＼、しつかりしてゐるやうに聞いてゐたが……よし、つけて見ろ。藏人が來てをるやうだつたら、ひと言云つてやらねばならぬ。見失ふまいな。』

『大丈夫だ。一本道だ！　氣取られぬやうにせい。逸してはならぬ。』

『畑の中を行け。』

興味も手傳つてゐました。闇の中を匐ふやうにして追つて行くと、間もなく小さい森のあるところまで出ます。そこまで來て、二人は、女のほかに、果して別の人間が森の入口に立つてゐるのを見ました。

『ゐるな？』

『うむ。』

桃の畑の中でした。地に蹲つて、なかばは笑ひをこらへな

がら、
『不埒な奴だ。藏人か？』
『待て。違ふやうだぞ。』
違ふ？　これは奇怪だと感じたのでした。
『では、誰れだ？』
連れは答へません。闇を透して熱心に覗いてゐましたが、
『うむ、森の中へ入つた。』
と呟きました。

五

『五左衛門さま、京より戻られた。』
男は立つたまゝ、女を見据ゑて、ひくゝかう申しました。
『何か、新田殿の身邊に變つたことはないかと仰せられるが、久しく、その方から、たよりがないので、私がお叱りを受けた。』
頭巾で顔をつゝんでゐるが、聲は、景久と云ふ鬚武者のものでした。がつしりした軀つきも、あの男のものです。
『どうしたものだ？　面白くない噂も耳に入つてゐる。まさか、そのせゐではあるまいな。』
柴笛と云ふ女は、闇の中にも美しく見える器量の者でした。無言で俯向いてゐましたが、
『別段に、お知らせ申上げるほどのこともないからで御座います。』
とそつと答へました。
『いや、そこだ。何も起らなくても、新田殿の毎日毎日の行狀をひとゝほり知らせてくれなければならぬ。ほかの場合ではなく、上方にゐられるお上から殊更にお言葉があつてのことぢや。そちについて、いろ／＼の噂もあり、父親までが心配して何か申してをつたが、そのことは別段にお取上げにならん。若い女だ。いろ／＼面白いことがあつたとしても一向不思議はないと、五左衛門さま、笑つて仰せられた。』
『…………』
『それと、これとは別ぢや。勤めさへ怠らなければ萬事大目に見てゐよう。父親のことも決して心配ない筈だ。さうよ、何事も起り得るものではない。はゝはゝはゝ、行末は好きな男と一緒になるのもいゝだらう。』
女は、いよ／＼深く俯向くだけでした。
『どうだな、眞實、新田殿の身のまはりには何事か平素と變つたことはないか？』
『御座いませぬ。』

『見なれぬ客人が見えたと云ふやうなことも……？』
『御座いませぬ。』
『油斷なく、見てゐるのだな。』
『はい……。』
『色戀をしてもよいが性根を失ふな、それだけぢや。ほかの者ならば既に嚴重に御成敗になつてをるところを、その方だけに特にお目をかけてくだされる。その御恩を忘れてはなるまい。では、賴むぞ。よいな。』
『はい。』
頭巾の蔭にある大きな目が女の樣子を暫く見据ゑてゐました。が、裾にある草が動いたのは、男が歩きかけたからでした。
『年とつた父親の爲にもぢや。その方は、なか〱親思ひの者であつたな。』
女は草の中に蹲つたまゝ、男が森の中を遠ざかるのを聞いてゐました。
はつと、打たれたやうに驚いて我れに復つたのは、その方角に別の男の荒々しい聲が起つて、何事か爭ひ初めたからでした。立上つて見ると、闇の中に人の影がみだれ合ひ組み合つてゐました。
『縛れ！』
と誰れか叫んだかと思ふと、はつきりと白刄の色が閃いて、影は、急にひき裂かれたやうに左右に分れてゐました。
我れを忘れて、女は走り出して居ります。爭鬪の行はれてゐるのとは別の方角へ。――危いと感じて逃げるつもりでした。

六

柴笛は渡良瀬川の磧について闇の中を夢中で歩いてゐました。今にも追手が來るかと思つて恐れてゐながら、不思議なのは、それとは反對に、自分が我れを忘れて逃げて來たのを泣き叫びたいのを口惜しく思ひ初めてゐました。
（なぜ、逃げて來たのだらう？　なぜ、あの足で、あの方のところへ行かなかつたか？）
藏人時隆と云ふ新田の家人の一人でした。眉の濃い凛々しい姿が、目の前の闇に見えるやうな心持がするし胸が裂けさうに切ないのでした。
どうせ、遂げられぬ戀とは諦めてゐて、男の眞實だつたことを思ひ出すと、泣くに泣かれぬ心持がします。
（逃げないで、誰れの手にも捕らない内にあの方のところへ伺つて、何もかも申上げてから、あの方の手で殺されたかつた！）
當然な、藏人の怒りも呪ひも、むごたらしい刄物の一刺も、

反つて、心から恍惚として受けられたらうと思はれます。なぜ、さうしなかつた！　なぜ、さうしなかつた！

もう今からでは、引返せば、誰れか別の人間に捕まへられるのは判つてゐました。他の人間ではいけない。あのひとだけです。この世界に藏人時隆以外の男のことは考へられないのでした。

なるやうに成つたとしか考へられないのです。けれども、苦しさ切なさは別でした。

自分で死なうか？

かう呟いてゐました。

さう考へたばかりに、すぐ背後から誰れか歩いて來るのに氣がついて、ぎよつとして闇の中を振返つて見ました。

大きな男ですが追手らしくありません。近くなるのを見てゐると、これは、旅の山伏でした。向ふも、夜道に女が立つてゐるのを怪しんだやうに見まもりながら、側へ來ました。

どうしたのだと尋ねます。

『父が病氣で御座いまして、家へ歸るので御座います。』

『家は、どこだな？』

『足利の在で御座います。』

『途中まで送つてやらう。』

山伏は、鋭どい目で顏を見まもりながら、親切にかう申し出ました。四五日前に武藏の國で紀五左衞門を相手に鬪つた男でした。

『病人はあんたぢやないか。惡い顏色をしてゐなさる。』

『いゝえ、わたくしは……』

『親御が惡いと聞いて驚かれたのかな。御病人は幾才になる？』

眞實な調子が、嘘を話してゐる自分を羞しく思はずにはゐられないくらゐでした。柴笛は、言葉數をすくなくしてゐるが、おとなしくこの山伏に附いて歩み續けて行きます。

『あなた樣は、どちらまでおいでゝ御座いますか？』

氣もなくかう尋ねて見ると、

『ずつと遠方ぢや。越の國までまゐる。』

と、嘘か眞實か、山伏は目をあげて答へました。

柴笛は、越の國と云ふのは、話にだけ聞いてゐるがどんなところだらうかと考へ、自分がこのまゝ、この山伏について、その國へ行つて了ふことまで胸の内で考へて見るのでした。

少し行く間に、東の空が白んで來たやうでした。渡良瀨川を越えると足利領の人家が朝の白々とした光の中に見えて來ました。柴笛の生れ故郷の土地です。父もゐれば、景久が話した紀五左衞門も、さう遠くないところに、昨夜の出來事も知らずに

待つてゐるわけでした。

早起の農家では、もうかまどに火を焚きつけて、煙が檐を匐つてゐます。

間もなく山伏は私は別の道を行かうと急に云ひ出して、柴笛と別れると、つか／＼と大股で、本街道を外れた細い道へ入つて見えなくなつて了ひました。

七

柴笛が歸つて來たと云ふのが思ひがけなかつた上に、會つて樣子を聞いて、流石の紀五左衞門も愕然とした樣子でした。

『では、景久は捕へられたか？』

憤然としました。

『馬鹿な奴だ！』

大切な場合に、萬一、こちらの秘密が漏れてはと、それが、その日一日の苦惱の種でした。

（まさか、あれが喋るまい。勿論、こちらの立場も日和見で、まだはつきりと決つてゐるわけではない。景久が何を喋らうが、知らぬことだと云つて了へばそれきりだ。）

と云つて、實際に大事の前でした。上方にゐる主人高氏は、

『今の樣子では十中八九までは反旗を翻して立つつもりだから、合圖の着き次第鎌倉に人質に入つてゐる悴が逃げられるやう準備だけして置いてくれ、それと新田だ。あれから目を放してはならん。』と五左衞門を關東へ出立させる時、くれ／＼も話してゐたことです。高氏は、義貞が立てばいざ成功したと云ふ場合にも優勢な競爭相手になつて、自分の野心をのばすのに邪魔になると見てゐるやうでした。

『實際に、あの男が旗を擧げるやうだつたら、懷柔して、うまく味方につける必要があるかも知れん。』

かうも話してゐたのを五左衞門は覺えてゐます。五左衞門から見ると、主人の足利高氏は新田氏の勢力を過大に見てゐるやうな氣がしてならないのですが、兎に角主人に留守を頼まれたと云ふのは、新田氏を巧みに操縱するやうに頼まれたものと見てもよいのでした。

その立場から見ると、今度のことは意外の失策だつたと云はなければなりません。不機嫌になつたのもその爲でした。

（いや、間者を入れてゐたのが發覺したとしても鎌倉の命令があつてしたことのやうに見せかければよい。弱つたやうな顏を見せてはならん。逆に嚇しつけてやるのだ。なに、あの一族が鎌倉を敵に廻すだけの決心はつくまい。衰へたりとは云へ、幕府の勢力だ。況んや、土地が西國かどこか鎌倉に遠いところな

らば兎も角も、こゝは執權の膝もとにも當る關東の地だ。多少智慧のある者なら蟷螂の斧を振るやうな無謀なことはすまい。)

この思案に落着いて見ると、わざと上方に留まつたまゝ待機の姿勢を採つてゐる主人高氏こそ、悧口な立場を狙つたものなのがはつきりして來るやうでした。

關東から遠い上方にゐればこそ周圍にも勤王の空氣が濃厚ならば、戰をしても勝味があると云へる筈でした。それと反對に執權膝もとの關八州にゐて勤王の旗を翻すと云ふのは、あらゆる點で不利だし、無謀と見てよいことでした。

(これはやらん。大丈夫、やる筈がない。さうなれば、鎌倉の命令で間者を入れたやうに見せかければ、一議もなく縮み上がるだらう。案じるほどのことでもない！ やるものなら今日まで愚圖々々してゐる筈もない！)

何が出來ようと、見たのでした。

そこへ、日が暮れかけて來てから、家來の者が入つて來て、景久が新田から戻つて來たと知らせて來ました。

八

『景久が？』

紀五左衛門は茫然としたやうな顔付でした。

『景久が戻つて來たと。』

まことに景久が無事で戻つて來たのでした。廊下を入つて來て、五左衛門の前に悄然として蹲つたのでした。

『どう致したのぢや。新田の家人に捕られたと申すのは虚傳か？』

『いや、汗顔の至りながら……』

と云ふのが景久の返事です。すると、一旦捕られたのを、新田の者が、そのまゝ返して寄越したと云ふのか？

『手前にも、仔細は判りかねまする。たゞ通りすがりの者だと言張りましたのを、今朝になつて深くも咎めず、歸つてよいと云ふことで御座いました。』

『吟味もせず……？ それは奇怪だ。第一柴笛と何の由縁があるか尋ねられなかつたか？ 柴笛が、そのまゝ驅落して來たことも先方が存ぜぬわけはあるまい。』

景久は、説明に苦しんだやうな顔色でした。

『昨夜の中は、それで御座いました。拷問までもしさうな權幕で御座いましたが、今朝になつてから、上から言葉でもありましたものか、急に繩を解いて、反つて丁寧な扱ひで御座いました。』

『解せぬ！』

『そればかりでは御座いませぬ。思ひがけぬ挨拶は、柴笛がなんで逃散致したのかは知らず、藏人時隆と申す者と懇意に致してをつた故、叶ふことなら時隆の妻に申受けたい。これには主人の存じ寄りもあることゆゑ、手前より貴方様のお耳へ通しておいてくれいと……眞顏の口上で御座ります。』

『なに、柴笛を！』

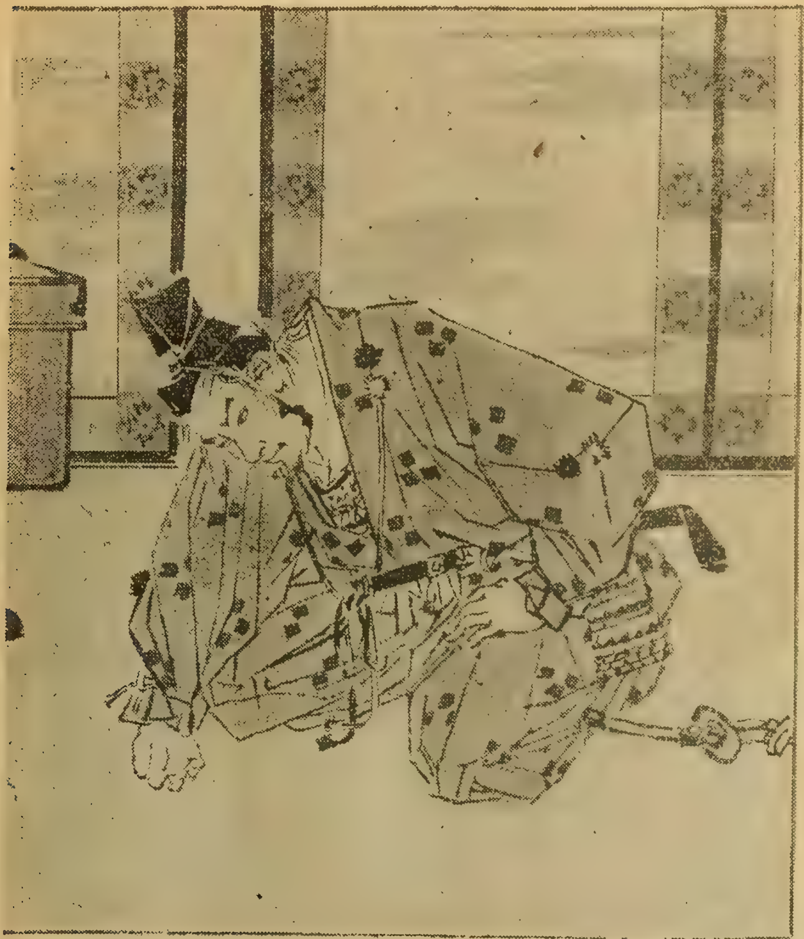
『聞けば、藏人時隆と申すのが、柴笛と兎角の噂のあつた人物だと申しまするが。』

『眞面目で、それを云ふのか？』

『は。』

『よし！』

　五左衞門は、槍の穗尖でも飛び出しさうな怖ろしい目の色になつて、突然にかう云ひ出しました。



『人を愚弄するにも程がある。そちでは口が割れぬと見て、そちに替へて柴笛を取戻さうとする魂膽であらう。見え透いた計略だ。』

『左樣で御座いませうか。手前に話した男などは如何にも、もつともらしく、藏人の朋友故、自分からも御盡力をお願ひすると申してをりましたが。』

『あるひは……こちらの機嫌を損じまいとして、そんな途方もない話を考へ出したのか？　新田殿の言葉だと申したと？』

『確かに、左樣に申しました。』

『分らぬ！』

　もどかしげに五左衞門はかう云つて長大息しました

『態度も鄭重だつたと？いや、何にしても柴笛を向ふに渡すことは金輪際出來ぬ。』

かたく、かう云ひ放つたかと思ふと、また何に氣がついたのか、はつとしたらしく目を光らして考へ込んでゐましたが、

『景久。』

と、きつぱりと言ひ出しました。

『それは、かうせい！柴笛を、そちの手で首にして新田へ屆けてやれ！』

『は。』

『死人に口なしぢや。如何にも領内に柴笛と云ふ女は居つたが、鎌倉殿へ不埒のことがあつて成敗致した。先方への口上はそれで充分だ。』

『は……』

躊躇を感じてゐたらしい景久も、漸くに決心を固めたやうでした。

『早速に、取計へ。』

五左衞門はきびしく、かう云つてから、何か遠い物音を聞くやうな目の色になりましたが、

『雨か？』

とひくゝ呟きました。

いつの間にか降りそゝぎ初めた糠雨でした。石も濡れ土も濡れた庭に、植込みの蔭から夕闇がいつもより早く滲み出してゐるのでした。

景久は靜かに一禮して立ち上りました。

九

草野をこめて降り出したこの雨の中を、暗くなつた道と濡れた土に馬の跡の滑るのに惱みながら、驀地に馬を飛ばして足利莊へ入つて來た者があります。狹い道で行きあつて野良歸りの百姓が周章て避ける間に、水溜の泥を散らして一散に驅け拔けて行くのでした。

乘手は若い侍でした。よほど遠くから來たと見え、馬は鞍まで泥にまみれてゐるし乘手は宵闇の中でも氣がついたほど蒼ざめた顏色でしたし、顏付も際立つて怖ろしいものだつたのが目に入りました。

紀五左衞門の屋敷の前まで來ると、丁度門内から炬火を揭げて出て來たのは、景久で、立止つて怪しむやうに見上げてゐましたが、

『お！』

と、叫んで驅寄つたのは、馬上の男が、やはり主人に附いて上方へ出陣してゐる同僚だつたからでした。一目見て京から何か重大な知らせをもたらして來た者と判つたのです。

『どうした？』

向ふも景久の顏を見て急にほつとしたやうでしたが、

『上方から？』

と、尋ねられて、頷いて見せたかと思ふと手眞似で自分が馬から降りるのを助けさせて、蹌けながら景久の肩へつかまつて地面に立つと、

『五左衞門樣は……？』

大波のやうに息を喘いでゐます。

『殿はゐられる。して、何日……？ 何か起つたのか？』

『手紙がある。』

『い、いづれに？』

男は襟を叩いて、密書のありかを示しました。道中で人手に渡るのを怖れたのか、細い布に書いて襟の芯に入れて來たのでした。獨りでは立つてゐられないらしい重い體を抱へてやるやうにして、門内へ連れ込みながら、景久は、聲を揚げて他の者を呼びました。

『誰れか來てくれ。』

ばた／＼と、人が走り出して來ました。

『京から……兵庫助が御使者で下向したと申上げてくれ。』

あるひは京にゐる主人の高氏がいよ／＼反旗を飜す決心がついたのか？ それを思ふと、血の湧くやうな心持にならずにはゐられません。

五左衞門が驅出して來る氣配がして、

『庭へ、庭へ廻せ！』

と命令する聲がしました。
庭口から入つて行くと、五左衛門はもう緣に立つて待つてゐました。
『御狀……？』
『は。』
『ほかの者は退つてをれ！』
景久が襟を解くのをもどかしげに見まもつてゐて、密書を受取ると、すぐに灯の側で擴げながら、流石に五左衛門まで、指をわな〳〵させてゐました。
息詰りさうな緊張をこめた靜けさの中に、たゞ雨の音ばかりしてゐました。黃ばんだ灯影を半面に受けた五左衛門の顏もひどく蒼ざめて怖ろしいものに見えます。
『ふむ。』
と、讀み了ると重い息をもらして、
『大儀だつた！』
落着かぬ目の色ながら、
『いよ〳〵だ。景久。』
と、押し出すやうに云ひ出して、もの凄く聲のない笑ひを笑つて見せたのでした。
『今日は二十六日だな。』
『は。』
『景久、來てくれい。柴笛は命拾ひした。新田のことなどは、いつでもよい。誰れかゐるか！ 兵庫助を連れて行つて介抱せい。景久、お主はこゝへ殘れ、相談することがある。』

一〇

戶を鎖させて、奧の間に殘つたのは、五左衛門と景久と二人だけでした。流石に昂奮を禁じ得ないものらしく五左衛門は部屋の中に突立つたまゝでゐました。
『いよ〳〵、御謀叛ときまつた！』
『は。』
『御英邁な君だ。お上が立つと御決心になつたからは、もとより成算ありと御看破遊ばされてのことだ。たゞ今は丹波にゐらせられると云ふ。丹波から京までなら一押しぢや。それこそ思ひがけぬ御謀叛に狼狽へ切つた六波羅の軍勢など、蹴散らすに物の數ではない。京を奪つて龍駕を迎へ奉れば、天下に號令が出來、海道を鎌倉へ押寄せるのも最早易々たること。もとより天下の勤王の兵を合せて破竹の勢にならう。驚き入つた御計略と申上げねばならぬが、こちらがまた大切だぞ。籠城の仕度はよいとして先づ何よりも鎌倉にお預けの永壽王丸樣を一刻

も早く、お逃がし申さねばならぬ。御旗上が月の内とすれば、まことに寸刻を爭ふ緊急事だ。

『まことに！』

『景久、これには柴笛をやらう。』

『柴笛！』

『幕府の目を瞞着せねばならぬ。もとより御謀叛のお企てなど、深謀遠慮のお上が露ほども敵にさとられる懈怠はあるまいが、非常の今日、男どもが行つて反つて人目に立つて疑はれてはなるまい。柴笛ならば女ながら氣丈の者。それに戀と云ふ餌があつた！　萬一の事もあらう故我等も手勢を率ゐて途中までお迎へに上るが、鎌倉のお宿へ伺つて、ひそかに外へお連れ申すのは彼女の役ぢや。どうだ、景久、あの女ならば、綏りはあるまい。』

『御眼力に御座ります。』

『早速に仕度させい。』と五左衞門は言渡しました。

『余もすぐに出かけるやうにしよう。大力剛勇の若い者二十人も選んで、目立たぬやうにそれ〴〵出立させてくれい。金澤へ行つて余と落合ふのだ。柴笛の仕度が出來たら余のところへ寄越せ、萬端は途中で聞かせることにしよう。』

『は。』

『この雨は、あいにくであつたが、忍びの道中には反つて天の助け、御武運強き我が君だ。我等の仕事にも神佛の御加護があらうに相違ない。うむ。いそげ、猶豫はならぬぞ。』

雨はなほ歇みさうにも見えません。景久が出て命令を下し、それ〴〵の準備を云ひつけてから、やがて剛力の名譽を以て撰ばれた猛者が三々五々と旅立つて行く間に、旅裝を整へて紀五左衞門が出て見ると、これも甲斐々々しく仕度をした柴笛が、つめたい顏色の裏に、覺悟をこめた樣子で、土間に降りて待つてゐました。

『うむ、待たせたな。』

と、五左衞門は景久に草鞋の紐を結ばせながら機嫌でした。

『その代り、そちに……手柄次第でよいことがある。はゝはゝはゝ。途中、ゆつくり相談しながらまゐらうか？　はゝはゝはは……』

二

新田の莊には、何の變化も起つてゐません。大館、堀口、里見、脇屋、江田、桃井などの一門の主な人々が義貞の館へ集まることがあるが、軍評定をしたやうにも見えないし、日增しに綠の色の加はつて來た野道や菖蒲の花の咲いた池の畔などで、

義貞が小姓一人を連れただけで機嫌のいゝ顔色で歩いてゐるのを見かけることも、常のとほりでした。

また間もなく戦があるやうな噂がどこからとなく傳はつてゐたのも、虚傳だつたやうでした。

さうしてゐる間にも、諸國の雲行の様子がいろ〳〵に傳へられて來るので、

『どうしたのだらう。こんな好い機會に、御主君は何もなさらないおつもりだらうか？』

と、事を好む若い者の間には、齒掻ゆさうに話す者もありました。とりわけて、千早城にこもつて幕府の大軍を惱まし續けてゐる楠氏の一族の噂が好んで話題に上りました。

あの微力な軍勢で、いつまで支へてゐられるものかと考へて、新らしいたよりの聞える毎に、一向に陷落しないのを知ると、驚嘆を重ねるばかりですし、

一度は幕府の命令で敵に廻つて攻撃に加はつてゐながら、急に病氣と云つて引揚げて來た主人義貞の眞意は、いつか部下の者にも理解出來てゐたので、間もなく主人が楠氏と呼應して陣頭に馬を進める日が必ず來ると信じられたので、早く自分たちも出陣したいと思はずにはゐられないのでした。

『上方へ行つた時に、護良親王からひそかに御使者を頂いたので、急にお歸り遊ばすことになつたと云ふ話だが……』

かう云ひ出す者もあれば、新田氏が源氏の出で今の北條には主筋に當るのだし、當然この機會に立つて北條氏を亡ぼさなければならないと力を入れて主張する者もあります。主人がかねて朝廷へ忠義の志が厚かつたのは、誰れも知つてゐますから、楠氏より前に、なぜ旗を上げなかつたかと殘念がる者もゐるのでした。

そんな空氣は、義助などから、義貞の耳にも入つてゐました。義助などは、部下の者がかう申してゐると傳へて、實は自分たちの希望を述べてゐるのでした。

『わかつてゐる。』

と、兄は笑つて申します。

『俺れが上方へ生れたかつたと云ふのは、そこぢやないか？もつとも今では關東に生れたのが倖せだつたと思つてゐる。お蔭で一番強い敵を引受けることになつた。』

『足利なども、あるひは鎌倉へ背くのでは御座いますまいか。』

義助が思はず、兄を促すやうな口吻になつたことがありました。

『同じ源氏から出て、彼にだけは、おくれを取りたくありません。』

さう聞いた時、義貞は靜かな中に、微かに顏色を變へて、きびしく言放ちました。

『義助！』

『愚かなことを云ふな。』

『なぜで御座います？』

『俺れは自分の爲や一家の名の爲に、鎌倉に攻め入らうと企てゝゐるのではない。足利ほどの者が立つてくれゝば難有いと思つてゐる。

　短い言葉でしたが、義助は打たれたやうにはつとしてゐました。及び難い兄だと云ふ感じを深くしたのもその時でした。少し前に、足利の間者を默つて放して還した兄の眞意も、奇怪と思つてゐたのですが、その邊にあつたのかと、初めて氣がついて月の前が急に明るくなつたやうな感じでした。

生品の森

一

五月に入つて或る日賑やかな人馬の響が足利の莊へ入つて來たかと思ふと、砦の中にわーつと歡聲が揚りました。走り出して見ると萬一を危まれてゐた永壽王丸を輿に乘せて紀五左衛門の一行が無事に歸つて來たものでした。

『景久、景久！』

五左衛門が、馬の上で躍り上つてゐました。

『やつたぞ。見事やつたぞ！』

家の子郎黨が馳せ集つて來て、廣場に押し合つて悅び騷ぐのでした。すつかり夏めいて來た光の中に、まるで祭の騷ぎでした。

五左衛門は、四才の永壽王丸を輿からおろさせて、女たちに奧へ案内させてからも、

『やれ〳〵、これで、ひと肩おりた。』

と、得意滿面の顏色でした。

『まことに、まことに……』

景久も手を揉んで醉つたやうな顏色になつてゐます。

『如何相成つたことか、どう云ふおたよりがあることかと、夜も殆ど寢まずに待ち草臥れてをりました。』

『追手がかゝるかも知れぬと思つて、わざと遠廻りして來たので遲れたのだ。しかし、我れながら、よくやつたわい。兎に角、何時如何な知らせが鎌倉へ入るか知れぬと思つて氣が氣でなかつたが……追手もかゝらぬところを見ると、まだ何も知らぬが佛ぢや。どさくさまぎれとも云へたらうが、かう易々と行かうとは思はなんだ。さうよ、柴笛はどこへまゐつた。あれの手柄と申してよいわい。ひとりで入つて行つて、こつそりとお連れ申上げたのだ。』

『御計略のとほりで御座いましたな。』

『かうなればもう、しめたものぢや。上方へはすぐ使ひを出して置いた。どんなにお悦びになるか分らん。若樣が人質に取られてゐるのと、ゐないのとでは、御勇氣に格段の相違があらうと云ふものぢや。こんな、うまく行かうとは思はなかつたぞ。』

『京都から今朝御使者で御座いました。いよ〳〵御出陣とのことで御座います。』

『ふうむ、間一髮ぢやなあ。それでは、もう鎌倉へも知らせが入つてをる。』

『左樣かも知れませぬ。』

『では、籠城の覺悟で、ゐなければならん。なアに、大したことはない。いざとなつたら若樣を守つて、どこへでも逃げるばかりだ。その內我が君が大軍をひきゐて下つて來られる。これまでの主君とは違ふ、京都を陷入れて天下の軍勢に號令遊ばされるのだ。勿體なくも征夷大將軍だぞ。新田の方ではどうした？』

『それが……如何で御座います。鎌倉から、出雲介親連、里沼彥四郎入道の兩人、御上使として遣はされ、この度の戰の費用として新田の莊から錢六萬貫を、お取立てになるとやらで、領主を初め一門が眞蒼になつてゐると申すことで御座いました。』

『なに、錢六萬貫！』

『新田は富裕の者が多い故に特に……と云ふ話だつたやうな噂で御座います。六萬貫とは手前も呆れました。』

『わはゝはゝは……意氣地なし奴が、足もとを見られたわけだな！ 今更悔んでゐよう。どうだな。景久、好い主人は持ちたいものだ。折角千早城まで行つて、尻尾を卷いて、病氣ぢやなどと言立てゝ、すご〳〵田舍へ引揚げて來た侍大將と、征夷大將軍……征夷大將軍ぢやぞ。よいわい。それで底も大方知れた！ 腰ぬけぢや。わはゝはゝ……それは、近頃氣の毒

ぢや。六萬貫を結局出すか?』

『無論で御座いませう。ほかに術もありませぬ。嚇かされて蒼くなつてゐると聞きました。さもあらうと存ぜられます。』

『柴笛の件も、今にして思へば御威勢を怖れたのぢやな。事勿れと云ふ奴よ。よし、よし、柴笛をやれ。約束だつたで喃。とにかく今度は彼女が働いた。届けてやつたところで大事ないわい。どうするか、言分どほり引渡してやらう。一度殺させようとした女ぢや。こちらに、もう用もないと申すわけか。はゝははゝ……どれ／＼若様の御機嫌を伺つて來ようか? それから祝盃ぢや。無禮講よ。思ひ切り飲ませて、今から士氣を引立てゝ置かねばならぬ。

二

夜半に近い遲い時刻だつたことだけに誰れか、庭を入つて來たやうな氣配を感じて、藏人は、怪しんで目をあげてゐました。

春の夜は先刻までどこかで人の話聲が明るく浮いて聞えてゐましたが、今はしーんとしてゐました。その忍びがちの足音も、耳を澄せばはつきりと聞取れたのでした。

誰れかしら、今時分。

かう思つたばかりに、足音の主は、それまで張り詰めて來た氣も緩んだやうに、立ちすくんだかと思ふと、急にこみ上げて來た涙を聲に漏らして、深い溜息を漏らしたのでした。

藏人は、立ち上つたかと思ふと、戸をあけてゐました。よもやと思つたのは氣の迷ひではない、沈みかけた新月の薄い光を受けて影のやうに外に立つてゐたのは、一度はあはれと思つた柴笛の紙のやうに蒼ざめた姿でした。

『あ!』

と叫んだかと思ふと、藏人は、取つて返して大刀をつかんで、はつたと睨み据ゑてゐました。

『なんで、これへまゐつた!』

返事はありません。土に蹲つて、わな／＼としただけです。

『えゝ、誰れが許して、これへまゐつた? 貴樣が、のめ／＼と俺れの前へ顏を出いて、たとへ何人のお言葉があらうと、刺殺さずにはをられぬとは考へなかつたか?』

『存じ上げてをりました。』

と、糸より微かでしたが、はつきりとした返事でした。

『あなた樣のお手にかゝる……それが望みで、今日まで生きてまゐりました。』

『それが望みと? うむ、殊勝な! そこへなほれ!』

一徹の若者でした。思ひも依らず主人に助けられて咎められもせずに來た藏人でしたが、申譯ないと考へて死ぬほどの苦し

みを受けて來たのは云ふまでもありません。

『今更、どうならう。そちの首をはねねば、藏人の武士が立たぬ。何も云はぬ。覺悟はよいな。』

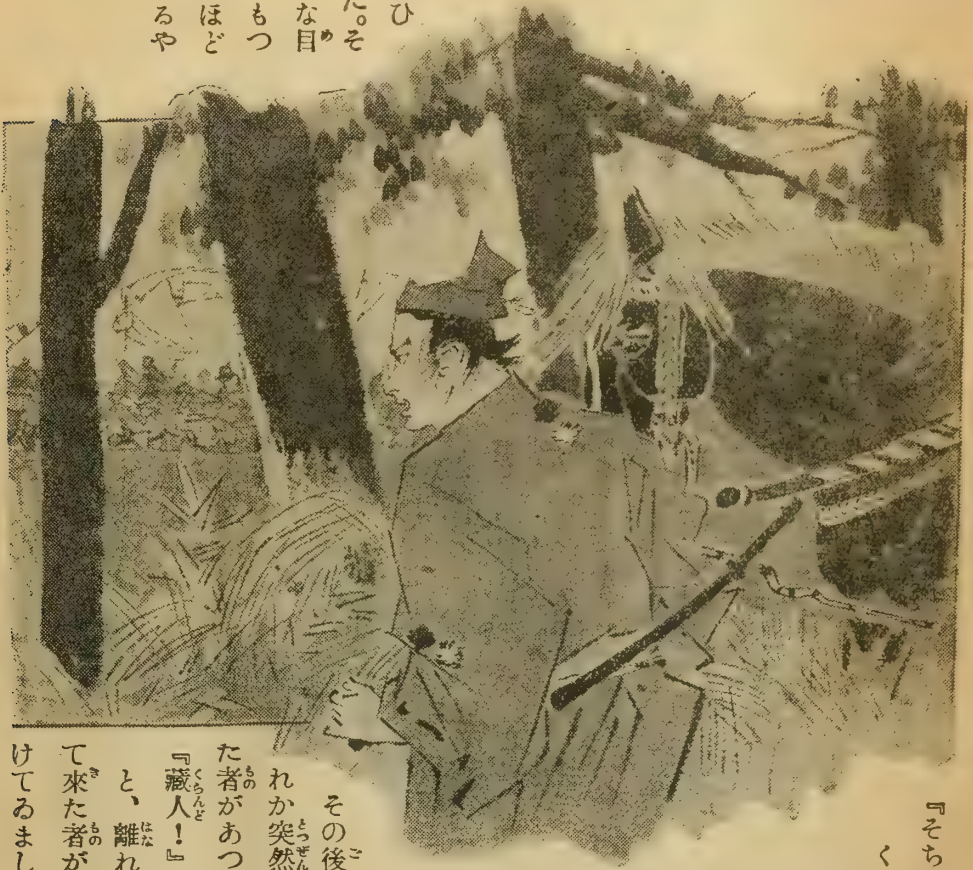
柴笛は、嬉しげに笑つて見せたのでした。

『あい！』

『嬉しう御座います。』

藏人は、流石にあはれと思ひながら無言で、刀を抜きました。その動作の間も、女は貪るやうな目の色で必死に、男の姿を見まもつてゐます。凡そ世の中で自分ほど幸福なものはないと信じてゐるやうでした。

男は感動を殺して、ひくい聲で申しました。



『そちが眞實だつたことだけはよくわかつた！

禮を云ふ。』

『あい！』

ぱつと、心を鬼にして、その可隣な聲にかぶせて振りあげた一刀でした。柴笛は、手を合せてゐます。

『赦せ！』

思はず藏人は、叫んでゐました。

その後のことは夢のやうです。誰れか突然に背後から強い力で、抑へた者があつたかと思ふと、

『藏人！』

と、離れた入口から、つかつか入つて來た者が、鋭い聲で叱咤して睨みつけてゐました。振向いて、その人が思

ひも依らぬ主人の弟脇屋義助だつたのを見て、仰天して刀を隠して平伏した時、義助は雷のやうな大音で呶鳴りつけました。

『鎌倉からの上使を、これから斬りに行く。貴さきにやらせろと、兄の言ひつけだ。すぐに來い。』

『はゝあ。』

『女！』

と、義助は、柴笛が何者かさとつたと見えて、笑つて申しました。

『藏人を借りて行く。留守をせい。』

つか／＼と、外へ出て行つてゐます。藏人は、遲れじと後へ續きながら、天にも昇る心持でした。

義助は、默々と先へ歩いて行きます。月が傾いて闇の深い道でした。かねて命令があつたと見え、途中に五人の壯士が塊つて待つてゐて、義助を見ると一禮して供をして來ました。

顏ぶれを見ると、いづれも強力の名の高い拔群の勇士ばかりでした。

三

『新田が！』

鎌倉の使者を斬つて堂々と獄門に掛けた！　知らせが足利の莊に達した時の、紀五左衞門の愕然とした樣子と云つたらありませんでした。

『眞實か！』

物見の者が、命令を受けて幾度も出て行きました。五左衞門は席に落着かぬ樣子でゐます。

〔眞逆、そんなことはあるまい。何かの間違ひだ。〕

しかし、これは事實だと判りました。それればかりではない、新田の莊では、出陣の仕度をしてゐると云ふのです、五左衞門は暫く口もきけなかつたくらゐでした。

あるひは、こちらが永壽王丸樣を盜

み出したのを見て、急に、反旗を擧げる決心になつたのか？しかし、鎌倉まで出て行くやうなことはあるまい。狂氣染みたことだ。そんな筈はない。」

五月八日の夜でした。大勢出してあつた物見の者が歸つて來て、義貞が一族の者を全部武裝させて生品明神に集めて旗を揭げさせ戰勝の祈禱をさせてゐると知らせて來ました。

『なんだと！』

五左衞門は、呆れて開いた口が塞がりません。

『どうするのだ？　どこかへ、出て行くつもりらしいのか？』

『馬揃ひも出來てをる樣子で御座います。』

『氣違ひだ！　何騎ぐらゐ。』

『脇屋、大館、桃井、岩松、……宗徒の方々、百騎ばかりかと存ぜられますが、陣鐘を叩き貝を吹いて……もの〳〵しい勢ひで御座います。』

『馬ひけ。』

五左衞門は、周章へて、立上つてゐました。

『貴さま等では判らぬ。俺れが行つて見て來よう。』

最早、黎明に近い時刻でしたが、外は、まだ眞暗です。狂氣のやうに馬を飛して行くと、新田の莊の入口で、別の物見の者が走つて來るのに出會ひました。

『どうした？』

『どん〳〵繰出してまゐります。』

『出て行く？　どの方角へ。』

『笠懸野の方角です。』

『ふむ。』

それでは鎌倉とはやゝ反對の方角だと安心したのは一時でした。その方角には上野國の守護がゐることで鎌倉へ進むにしろ先づこれを屠つて後顧の憂ひをなくして置くのが兵法の常道だと氣がつくと、また狼狽へて馬に鞭をあてゝから、

『人數は？』と鞍の上から振返つて大聲で尋ねました。

『二百騎ばかりと見ました。』

『二百騎？』

馬は走り出してゐます。手綱を捌きながら、二百騎ばかりの小人數では、もとより鎌倉を衝ける筈がないと考へずにはゐられません。恐らく、たゞの示威的な行動だらうと考へられます。

夜が明けて、夏山の緣を、昇る朝日が燃やし初めました。ぎら〳〵と、今日もまた暑さうな空の色です。五左衞門は笠を忘れて來た自分の狼狽振りを齒搔ゆく思ひながら笠懸野の方角へ馬を飛ばし續けてゐます。馬はもう汗だらけになつて、かわいた埃の白い道に苦しげに息を喘いでゐました。

四

滿目綠の平原でした。大鎧を着た軍勢が堂々と、これを橫切つて行軍して行きます。晴れ渡つた夏空に旗が流れ、馬が嘶き、陣鐘が轟いてゐます。かうして見てゐる間にも、三騎四騎と馳せ集つて來ます。たゞ五左衛門が馬を乘捨てた丘から眺めたところでは、平野は長い川をうねらせ大きな森を繁らせて海のある地平まで無限にひろがつてゐます。その中に置いた二百騎の人數は整然とはしてゐても、如何にも人數がすくなく、みすぼらしく見えたのは當然でした。

『この人數でか！』

思つたほどのこともないと感じたのでした。しかし次の瞬間に、ぎよつとして見詰めたのは、やゝ遠い西北の道路に煙のやうに埃をあげて進んで來る長蛇のやうな一團の軍勢でした。

『あれは？』

怪しんだのも無理はない。全然豫期しなかつた人數でした。どこから來たのだらう？　かう思つて呆れて見まもつてゐる内に、更に愕然としたのは、眞正面の丘の蔭からも忽然として歡聲をあげながら潮のやうに押出して、義貞の軍へ馳け集つて來る五百人ばかりの人數のあつたことでした。

五左衛門は、茫然として見詰めるばかりでした。

近くなつて全部が一團となつて、どつと鯨波の聲をあげた時、初めて別軍の旗じるしが目に入りました。狐に化かされたやうな感じでした。これは新田の一門で、甲斐信濃にゐる源氏の軍勢です。

偶然とは思はれません。いつの間にそんな遠隔の地にある一族と連絡を遂げて、今日こゝへ現れるやうにしたのか？　强行して押出して來たのにしても、恐らく知らせは十日や二十日前に行つて、その間に仕度を遂げて、期日を誤らず今日こゝへ出て來たものに相違ありません。それとすれば義貞は、とうから義旗を翻す覺悟がついてゐたのか！

なるほど、この人數なら、堂々と鎌倉へ向つて進軍出來る。あるひは、あの要害を破つて破竹の勢で北條の覇府の地へ攻め入るかも知れん。

五左衛門は、たゞ〳〵放心したやうに立ちすくんで、目の前に魔術のやうに刻一刻と威容を整へて行く大軍を見まもつてゐるばかりでした。

また、どつと鯨波の聲が揚りました。見れば、すでこの丘の裾をめぐる街道にまたもや別手の者が馬を揃へて雲のやうに埃をあげ地響させながら、出て來たのでした。

旗や吹流しが、空に翻ります。鎧や馬具が熱日を受けて、煌いてゐます。それも人數は、續々と長蛇のやうに續いて來るのです。

『越後の軍勢だ！　あの、北國から出て來た！』

野を渡つて、どよめきの聲が送られて來ました。前からゐる軍勢が、新しく、遠方から驅けつけて來た味方を迎へようとして、どつと走り出して來たのでした。いつの間にか人數はひろい草野を蔽ふほどの大軍となり、馬の嘶きや人の叫び聲、陣鐘の響が、あたりの山河を搖り動かすやうな勢となつてゐます。

この野を捲く暴風圏の中心にあたる義貞の陣屋のあたりは流石に、整然としてゐて、黑や緋色さま〴〵の大鎧に身を固めた大將たちがお互ひに手を握り合つて、向後の力戰を誓つてゐる有樣です。五左衞門には何もかも夢のやうでした。たゞ氣がついてはつと思つたのは、それ〴〵の別軍の案内役のやうに山伏の姿をした男が加はつてゐて、その人々が本陣の大將たちの間に伍して談笑してゐることでした。

(さうなのだ。大分前から計畫して手を廻してあつたのだ！ それでなければ、かうは行かない！ 俺れが上方からの歸りに邂つた山伏も、あるひは、あの中にゐるのかも知れぬ。)

かう氣がつくと、紀五左衞門は心底から恐怖に似たものを感じて、冷たい影が背筋を走つたやうに感じました。

(御主君はこのことを氣がついて新田を怖れてゐられた！ 我等が見ては、それほどとは考へもしなかつたが……)

今は二千以上三千はあらうと思はれた山麓の大軍が急に水を打つたやうにしんとしたかと思ふと、忽然と、冴えた貝の音が平野の空に尾を曳いて昇り、隊伍を整然とした全部隊の一角から、堂々と進軍が起されたのでした。夏の日の眩ゆいばかり明るい中に人も馬も沖天の意氣に燃え立つてゐるやうに眺められました。無數の旗が風に舞ひ、陣鐘が一度に轟き初めました。

野を渡る風までが、

『鎌倉へ！ 鎌倉へ！』

と叫んでゐるやうに思はれるのです。元弘三年五月八日のことでした。(了)

楠正成の忠烈は、日本人である以上三尺の童兒も是を知つてゐる。ところが新田義貞となると、どうもそれ程に知られてゐない。楠氏は學問のあつた武人で行動がすべて派手であつたが、新田氏は何處迄も實際的で地味で武骨な關東武士だつたので、楠氏程目立つてゐない。然し、其の赫々たる勤王の偉勳、父子、兄弟、一族郎黨の殉忠に於て、楠氏に優るとも劣らぬ大忠臣である。公が兵を上野の生品祠前に擧げてから、天險鎌倉に九代の積威を擁して防戰した、北條氏の本據を僅々十五日で陷れた其の用意周到な戰術は、公の面目を遺憾なく發揮してゐる。來る五月八日には、此忠烈無比武人の典型たる新田左中將擧兵六百年祭が行はれる。非常時日本の五月、筆者大佛次郎氏苦心の大傑作を掲げて、切に大方讀者の御愛讀を祈る次第である。(編者)

黄金奇談

蒙古王の草鞋

◇◇柴田富陽◇◇

蒙古王こと照山佐々木安五郎氏がまだ華やかなりし頃、同志とともに、外蒙古へ乗り込んだことがあつた。何しろ、蒙古王と異名をとつたほどの氏のこととて、途中いたるところで大歓迎をうけた。

さるほどに、歸途ヘイラルへ辿りつき、某日本人旅館へ投宿した時のこと、蒙古王來るの聲に、忽ち旅館は上を下への大騒ぎ、一行が玄關へはいるや否や、主人までが、とんで出て、一行の草鞋の紐を解くやら、足を洗ふやらの歡待ぶりに、氏たるもの、いよ〳〵得意にならざるを得ない。

やがて、案内につれて、部室へ通ると、今度は主人が、羽織袴に威儀を正して挨拶に來り、さて、揉み手をしながら、

『時に、先生、まことに申しかねますが、皆樣のお草鞋を、記念のため、私どもへおさげ渡しが願へますまいか』

かうなると、氏の得意や思ふべしで、

『はて、さて、俺位になると、穿いた草鞋にまで値打ちが出ると見えるわい』

と思ひながら、

『あゝ、いゝとも〳〵――』

と、いとも鷹揚にうなづいて見せたものである。

『有難うございます』

と主人は厚く禮を述べて引き退つたが、やがて、氏が湯殿へ立つて行つて、何氣なく窓から外を見ると、さつきの女中や番頭たちが、井戸端で大きな盥に一行の草鞋を入れ、頻りに洗つてゐるではないか。

『はゝあ、なるほど、いくら記念のためでも、あのまゝではきたないので、それであゝして洗つてゐるのだな』

と何にも知らない氏は、どこまでもお目出たく解釋して、尚も樣子を見てゐると、これはしたり、やがて、きれいに洗ひあげた草鞋は、そのまゝごみ捨て場へ打つ棄つてしまひ、盥の底へ溜つた泥や砂の中から、何やら頻りに選り出してゐる樣子だつたが、最後に番頭の掌へのせられたのは、驚ろく勿れ、何と砂金の粒だつたといふのである。これには、さすがの氏も、開いた口が塞がらなかつたといふ黄金ナンセンス。

ミブちゃんとヨーヨー
小寺鳩甫作
うまいだらう
うン
お使いに行つてちようだい
おカシハ暖いうちにさあ早くよ
よいしやうよいしやう
ちよつと一ッぺん

⑥
あッギャングだ
⑦
今日はやれないよ
⑧
こまったナ
⑨
そらやるぞッ
⑩
探してみるのだよ
⑪
おカシくれなけりゃ通せんぼう

⑫
どうだい
⑬
ぼくらも持つてらアー
⑭
三ブ公に負けるものか
⑮
また通せんぼうか
⑯
そらッ見るのだよ
⑰
これはッおもしろい

モウモウくたぶれちやつた
ああしまつたッ
行く先きを忘れちやつたッ
母ちやん母ちやんあのね……
まあー三ブちやん……
行く先きを聞かずにどこへ行つてたの？
ええッ

米國太平

太平洋に殺氣流る！

太平洋は今うらゝかな春です。だが、その春の光りのうちに、一條のあやしい殺氣が流れてゐます。

太平洋のたゞ中にある緑の島布哇の沖には、海をとゞろかして殷々たる砲聲が聞え、澄み切つた紺碧の空には、轟々と戰鬪機の爆音が響き渡つてゐます。

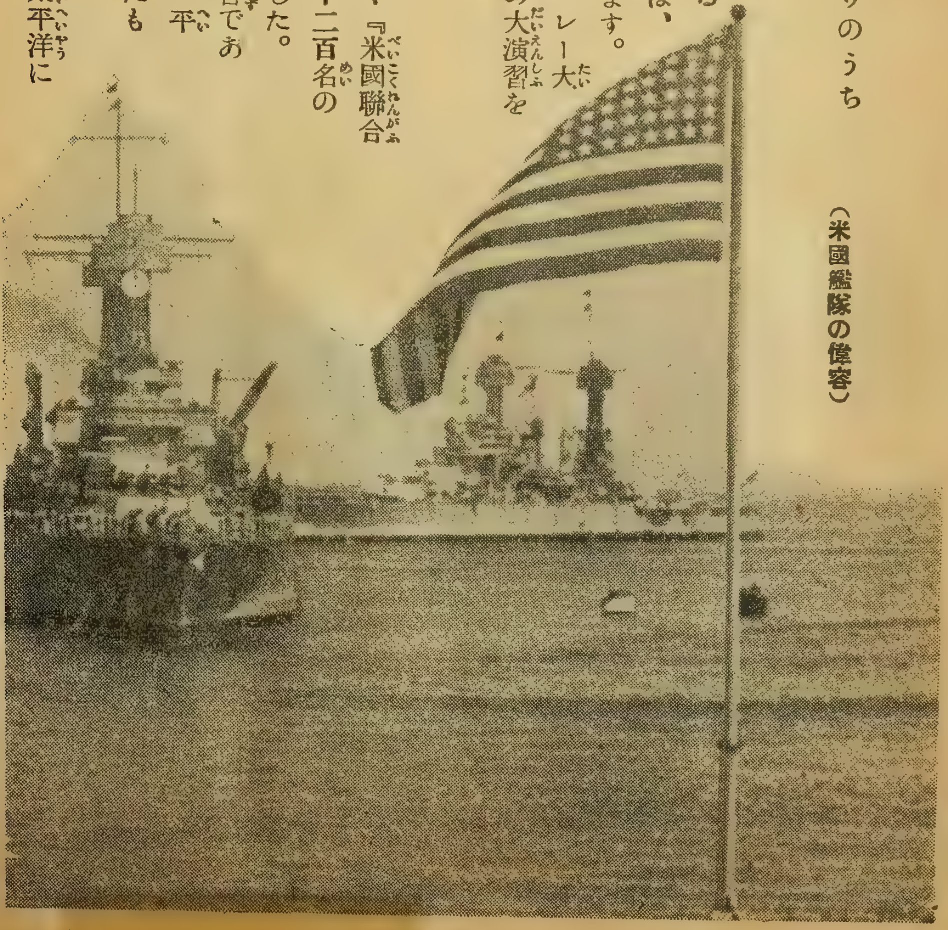
米國聯合艦隊は、一月の初めから、レー大將統監の下に、猛烈な〇〇攻撃準備の大演習をやつてゐるのです。

× ×

レー大將は、去年の秋の末、新しく『米國聯合艦隊司令長官』の任についた時、部下二百名の艦長を旗艦の甲板に集めて豪語しました。

『小官の在任中に、必ず或事が起る筈である。故に今日限り米國聯合艦隊は、平時狀態を脫して、戰時狀態に入つたものと覺悟してもらひたい。』

そして今や聯合艦隊は、全兵力を太平洋に



（米國艦隊の偉容）

洋艦隊

平田晉策

集め、美しい加州の海には、水色に塗られた艨艟が二百隻、物々しい影を映してゐるのです。

あゝ、十四隻の大戰艦と十五隻の新鋭巡洋艦を中心として、集まる水色の大艦隊！

オレンヂが薫るサン・ペドロ海岸の沖には、二百旒の軍艦旗が、花のやうに飜り、澄みわたつた空には、赤い星を翼に描いたカーチス戰鬪機が、銀色の蜻蛉のやうに群れ飛んでゐます。

音に聞く元寇の兵船、スペインの無敵艦隊、英國の雄大艦隊も、これに比べると見劣りがしよう。

だからレー大將は、旗艦『ペンシルバニア』の艦橋で胸をたゝき快心の笑を洩らして、

『小官は、世界歴史始まつて以來の、大艦隊の長官たることを光榮とする。』

と威張つたのです。

しかし、昔から大艦隊の末路はあまり良くない。元の兵船も博多沖の泡と消え、無敵艦隊も滅び、英國の雄大艦隊も遂に小敵ドイツ海軍を取り逃してしまひました。

米國大艦隊は、果して、どんな運命を辿るでせうか。

米國海軍は臆病か

大體、米國海軍は、滿洲事變以來、臆病なほど日本海軍を怖れてゐました。

軍令部長のプラット大將は『今、日本海軍と戰つたつて、勝味はないよ。』と弱音を吐くし、亞細亞艦隊司令長官のテーラー大將も、味噌をつけました。

大將は、去年の春、比島のマニラ軍港を出て戰亂の上海へ向ふ時、

『わが艦隊の行動を妨害するものがあれば、容赦なく實彈を發射する決心だ！』

と、すごい宣言をしました。だが、いよ〳〵揚子江へさしかかつて、折から呉淞砲臺を砲擊してゐる我が堀少將の第三艦隊を見ると、急に怖氣がついたのか、舵を沖の方へ向け變へて、戰場に入ることを避けたのです。このために大將は『臆病提督』といふアダ名を〇〇〇〇から貰ひました。

ことに評判を惡くしたのは潛水隊です。

昭和六年九月十八日の夜、六隻の米國潛水艦が、山東半島の沖を、北の威海衞へ向つて進んでゐました。それが『日本軍が北大營を占據した！』といふ無電を受けると、あわてゝ南の上海へ、逃げるやうにして歸つてしまつたのです。

あまりの狼狽振に、同じ人種の英國支那艦隊の士官達まで、

『米國海軍、卑怯だぞツ。』

と冷笑した位です。

わが海軍の某豫備少將もかう云つて嗤つてゐます。

『あんな贅澤海軍に戰爭が出來るものか。』

いかにも彼等は贅澤です。中尉の俸給が二百弗以上だから、わが中將級の提督も顏色ありません。艦隊が根據地へ歸ると、花のやうに着飾つた下士官の細君連が、ビツクかナツシユなんかの高級車を波止場にならべて居るのですから、豪勢も極まれりです。

あの狹い不自由な潛水艦でも、アイスクリームだけは缺かしません。

それでも、なほ每年、海上生活を嫌つて、脱走する水兵が千名を越えるのです。滿洲事變の後、大西洋艦隊が太平洋へ來ましたが、同艦隊がパナマ運河を過ぎて、海上を桑港へ急いでゐる頃には、何百人といふ士官の夫人達が、同じく大北鐵道に乘つて、大陸を西へ西へと急行してゐたのです。布哇でも夫の後を慕つて來た一中尉の夫人が夜の海岸で暴行せられ、士

人や日本人が犯人として檢擧されたが、『眞犯人は實は〇〇だ。』といふ噂が立つた。

彼等の海軍は、こんな海軍です。

しかし、支那の十九路軍でさへ、一度び砲火に晒されたら、あんなに闘つたのです。まして冒險好きの米人が、わが末次艦隊の砲聲を聞いただけで、蒼くなつてしまはうとは思はれません。

私達は、まだ／＼油斷は出來ないのです。彼等は、かつて戰敗を知らない。英國を破り、スペインに勝ち、獨逸を壓しました。十萬の米軍中には勇士の數も少くないでせう。見よ、去年の秋頃から、彼等の艦隊訓練は、急に實戰的になつて來てゐます。演習につぐに演習で、その頑張り方はすごい位です。月曜日の朝、軍港を出動した艦隊は、土曜日の夜でなければ歸つて來ない。六日間ぶつ通しの訓練をやつてゐるのです。

陸上の夫人連には同情に耐へませんが、私達にとつては、油斷の出來ぬニユースです。

プラット提督

亞細亞艦隊の正體

米國海軍の本據は無論加州と布哇ですが、その先陣は東洋までやつて來てゐます。臺灣の南、比島のマニラ軍港には、亞細亞艦隊四十一隻の軍艦が居るのです。司令長官はテーラー大將、旗艦『ヒユーストン』は、わが『那智』『愛宕』に負けない大巡洋艦です。この艦隊の中でもウヰリアム少將のひきゐる揚子江哨戒隊は、先陣の中の先陣でせう。

少將の旗艦『ルゾン』は、漢口でわが第一遣外艦隊の旗艦『安宅』の近くに錨を入れてゐます。

南京でも、濁流のたゞ中に、わが驅逐艦『桃』『柳』と、砲艦『チユルサ』が百五十米位の近さで、碇泊してゐるのです。私はこの間『桃』の艦長T少佐と一緒に艦橋に立つて、つぶさに双眼鏡で『チユルサ』を眺めましたが、磨き磨かれた三門の四吋砲を見てゐるうちに、

『あの大砲が、もしかしたら、大海戰の火蓋を切るのぢやな

いか。』

と思ふと、何となく異樣な氣がしました。

上海では名提督米内中將坐乘の第三艦隊旗艦海防艦『出雲』と、彼の海防艦『ロチエスター』が、八吋砲の砲口を近づけてゐますが、どちらも古い〳〵軍艦です。

『出雲』のN大佐の肩をたゝいて、

『Nさん、これぢや老武者同志の討合ひですね。』

といふと、大佐はにやりと一笑して、

『そんなことを云つちやいけませんよ。』

と手を振りました。

とまれ揚子江は、上は宜昌から下は上海まで、一千哩にわたつて、日米の軍艦が三十隻以上同じ泥水の上に浮んでゐるのです。

もしも、漠々たる戰雲が、楊柳の綠煙る長江の上に漲る時、我れ勝つか、彼れ勝つか?? 私は軍事評論家として、責任を持つてはつきりと、日本海軍の勝利を豫言します。

兵力から見ても、戰術から考へても、米國の哨戒隊には、到底勝味がありません。このことは、哨戒隊長ウヰリアム少將が却つて一番よく知つてゐるでせう。

たゞ、支那海軍が敵になれば、一寸形勢は違つて來ます。だが、支那の海軍が、果して世界最强の、日本海軍を敵として起つでせうか。

上海で、十九路軍が苦戰してゐる時でさへ支那海軍は、南京や龍華にひつこんでしまつて、絕對に手出しをしませんでした。それほど日本海軍を恐れてゐるのです。

もしも一度び、彼等が無禮にもわが海軍に手向ひしたら、それこそ揚子江上四十隻の支那軍艦は、五日もたゝぬうちに全滅です。

だから、今の海軍部長の陳大將は、全軍に

（上海に於ける日本驅逐艦　米國海軍撮影）

命令して、極力わが軍との衝突を避けてゐます。

私も上海で支那第一艦隊の新式巡洋艦『寧海』や『逸仙』に乘り、南京で飛行艇『安慶』號の上から第二艦隊の錨地を見て――支那海軍のために『日支海軍は戰つてはならぬ。』と痛感しました。

今でも日本と握手したがつてゐる弱い〳〵支那海軍が、今後〇國にそゝのかされて、龍車に向つて、蟷螂の斧を振ふやうなことのないやうに、心から祈らずには居られません。

亞細亞艦隊の根據地はマニラ灣です。

この灣の入口は、砲臺で固められ、十四吋や十二吋の巨砲が海上を狙つてゐます。

中にも灣の入口を扼するコレキドル島の要塞は、上海の呉淞砲臺のやうな、あんな貧弱なものではありません。この島の周りに機雷を敷設したら、いかに勇敢な海軍でも、海上から灣內に侵入することは出來ないでせう。

（リチャード・レー大將）

かつて、米國海軍切つての戰略家フイスク少將は、

『比島守備軍に飛行機が百機あれば、一人の敵兵も上陸させぬ。』

と大變な氣焔をあげましたが、米國の參謀本部も海軍々令部も、この島は必ず數週間で敵に奪はれるものと、決めて居るのですからやり切れません。だから戰時には、亞細亞艦隊の本隊は、マニラ要塞が危なくなる前に、綠の森と熱帶の女の唱に別れを告げて、東支那海へ出て行くに違ひありません。

巾の利かぬ米國潛水艦

彼等は東支那海、黃海で何をするのでせうか。そこの海上には何時も數十隻のわが汽船が浮んでゐます。亞細亞艦隊の戰時任務はこれを狙ふことです。

ことに上海の沖は、海の色が黃色く濁り、しかも深さが僅か二十米位しかないのだから、潛水艦が暴れるのには絕好の海です。

海の色が濁つてゐるから、監視飛行機の眼がくらませます。驅逐艦に發見されさうになると、機關を止めて淺い海底へ沈ん

（マニラ軍港）

でしまひます。

かつて我がN大將が『米國の潜水艦も馬鹿にならん。』と洩らしましたが、烱眼なNさんは、彼等のこの作戰を、見拔れたのでせう。

日本潜水艦は、艦隊戰鬪の强いことは世界第一です。米國潜水艦はその點、とてもわが足下へも及ばないでせう。だから、軍令部長のプラット大將は、

『潜水艦は戰鬪の邪魔だから、艦隊から分離させよ。』

と命令して、今では九十隻の潜水艦は、全部戰鬪艦隊から離れてしまひました。

そして戰時には大潜水艦は、遠くわが小笠原、東京灣附近まで獨りで出動して、偵察をやり、小さい艦は、マニラや布哇を根據地にして、商船を目標にすることになつたのです。

この作戰は、なか〳〵いゝと思ひます。プラット大將は、潜水艦を分離させて置いてから、

『今後、戰場に潜水艦が現はれたら、必ず敵である。躊躇せずに爆撃せよ。』と命令してゐます。さすがに太平洋對日作戰の權威者だけあつて、頭がよろしい。

太平洋上の大軍港

どんなに艦隊が强くつても、軍港がなければ戰さは出來ない。米國の聯合艦隊がマニラへやつて來ないのは、マニラ軍港が小さ過ぎるからです。レー大將の艦隊が、マニラ軍港を根據地として戰爭をやるとしたら、四百隻の商船を動かして、絶えず本國から軍需品を送らねばならないのです。そんなことをしたら百億圓位の金は、またゝく間に消えてしまひます。

そこで彼等は桑港と布哇の二大軍港を根據地にして、まつすぐに、東京灣を衝く作戰を考へて居るのです。

桑港の棧橋には五本の重油管があつて、この管から、各

艦へどん／＼燃料重油を注入しますから、全艦隊の燃料のみがたつた二、三日で終ります。何百人の水兵が眞つ黒になつて、汗みどろに石炭をつみこんでゐたのは昔の夢です。

聯合艦隊は、桑港の少し南の、あたゝかいサン・ペドロや、サン・デアゴの沖にゐて、女氣の交つたオレンヂ風に吹かれてゐますが、いざとなれば、すぐに桑港へ急行して、重油をつみこみ、金門灣の砲臺に『さらば』を告げて、西の方、二千浬、蒼波のかなた布哇軍港をめがけて進撃するのです。

布哇は太平洋作戰の心臟で、海軍の言葉でいふと、前進根據地です。英國の軍事評論家バイオーター君は『布哇は太平洋のジブラルター』だ』と申しましたが、むしろ『第二の旅順』と思つたらいゝでせう。眞珠軍港は水の深さ六十尺。港外の海岸は切り斷つたやうな絶壁で、岩を噛む怒濤が、雪のやうな沫をあげてゐます。

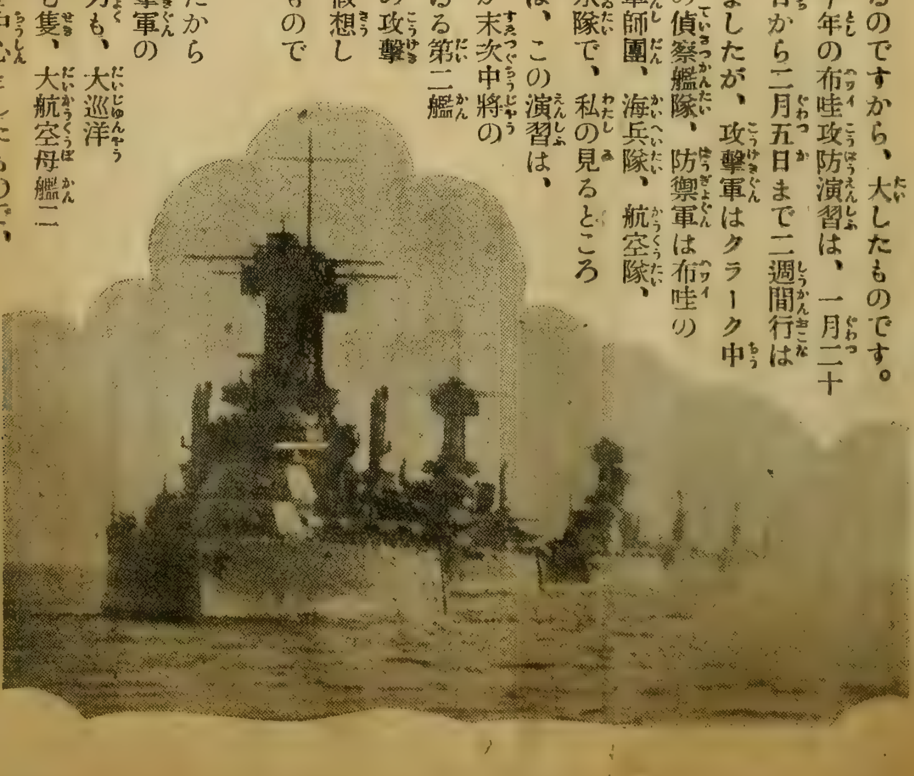
この自然の鐵壁に、二十門の重砲が備へられ、ことにダイヤモンド岬には、世界無類の十六吋要塞砲がかくされて居るのです。

軍港の後ろは、山又山の天險で、一聯隊の山砲兵がこれを守れば、敵軍は絶對に侵入出來ないとされてゐます。

この自然の要塞を一師團の陸軍と、七中隊の飛行機が守つて居るのですから、大したものです。

今年の布哇攻防演習は、一月二十三日から二月五日まで二週間行はれましたが、攻撃軍はクラーク中將の偵察艦隊、防禦軍は布哇の陸軍師團、海兵隊、航空隊、潜水隊で、私の見るところでは、この演習は、わが末次中將の率ゐる第二艦隊の攻撃を假想したものです。

だから攻撃軍の兵力も、大巡洋艦七隻、大航空母艦二隻を中心としたもので、丁度末次艦隊に航空戰隊



（米國主力艦隊の單縱陣
（先頭はカリホルニヤ號）

へ編入した位の艦隊です。

演習の結果は、防禦軍が隨分勇戰したのですが、とう／＼布哇は占領されてしまひました。すなはち演習の上では、わが第二艦隊は、布哇を占領出來るといふことになつたのです。

布哇は雨の多い島です。だから勇敢な攻擊軍の爆擊隊が、雨を冒して空襲を決行すれば、軍港破壞も出來ないことはありません。

米國海軍では、戰時には必ず我軍の攻擊があると決めて、非常に氣にかけてゐます。近くスパイ警戒のために軍政を布いて要塞司令官が政治をやるやうになるかも知れません。彼等は布哇の機密が一寸でも〇〇に洩れることを、恐ろしく神經に病んで居るのです。

陸海軍の希望のやうに、總督府が廢せられて、軍政を布くやうになれば、布哇はいよ／＼日露戰前の旅順と同じです。

私はこゝで、大いに布哇攻防作戰を論じ、最後にわが軍が鳳梨實るハレイワ高原を突破して、眞珠灣頭に眞紅の軍旗が飜る結末までを書いて見たいのですが、米國海軍から叱られるといけないから、止めて置きます。

しかし、事實は、この島は難攻不落とほめてやつてもいゝのです。

米國海軍の攻防演習では、この島の防禦軍は陸軍と航空隊と潜水艦だけでしたが、實戰では、眞珠灣の內外には戰鬪艦隊、偵察艦隊の艨艟が數百隻、海を壓して集合して居るのです。

いかにわが勇猛な末次中將でも、この大敵のたゞ中へ巡洋艦をひつさげ突込んで行くことは困難でせう。

決戰の魁偵察艦隊

米國海軍はもう二十年近くも太平洋遠征大海戰、露骨にいふと、日本攻擊大作戰の研究をつゞけて來てゐます。だから、大きな艦隊を動かすことにかけては、世界で一番上手でせう。

軍令部がこしらへた遠征の陣形を見ると、偵察艦隊が先頭に立つことになつてゐます。

司令長官のクラーク中將は、米國海軍切つての勇將で、冒險

好きな人らしいですからわが末次中將とは正に好敵手です。

この艦隊の根據地は、大西洋です。しかし今や、布哇にやつて來てゐた新任海軍大臣のスワンソンは三月八日に『極東の風雲が穩かにならぬ以上、偵察艦隊は絶對に大西洋にかへさない』と斷言しました。

米國海軍の大巡洋艦は、ほとんど全部偵察艦隊に入つて居るのです。

もう二、三年たつと、今、八隻しかない大巡洋艦が、一躍して十八隻になりますが、さうなつたら、すばらしいものです。

二十糎砲が百六十四門、蛇のやうに長い鎌首をもちあげて一齊に火を吐く時は、太平洋の底に眠る海神も、太膽を拔かれるでせう。海軍評論家のフロスト中佐は『もう、二、三年たつと、巡洋艦の戰鬪も、日本海軍に負けるものか。』と威張つてゐますが、さて、どうだらう。

わが大巡洋艦は『愛宕』以下十二隻、二十糎砲百四門で、明らかに六割海軍です。數字の上では、たしかに形勢甚だ不利になつて來ます。

しかし、世界造船學界の權威パークス博士が『これ

二月下旬サンフランシスコに集合したる米國太平洋艦隊の主力

ぞ眞の大巡洋艦だ』と折紙をつけた精鋭無比の『愛宕』『那智』『青葉』等が、さう、むざ〳〵と敗けてたまるものですか。

米國の巡洋艦は、贅澤な遠征用ですから棲み心地こそ、よく出來てゐますが、防禦力が心細いもので『ブリキ張りだ』と惡口いはれてゐます。

そこへ行くと、わが『那智』級は、戰鬪第一主義で、攻撃力も強ければ防禦力も強い、黒革縅しの荒武者です。たゞあまり戰鬪本位ですから、南洋あたりへ出動した時に、さすがのわが海の猛者諸君も、いさゝか暑さしのぎに閉口する位のことは、仕方がありません。

裏表から見た主力戰艦

（米軍自慢の地獄の爆撃機）

さて、いよ〳〵米國海軍の主力、プラット大將が虎の子のやうにしてゐる戰艦の正體を見極める順番が來ました。

『米國戰艦は強いか、弱いか。』から訊ねられたら、私は『強い』といはねばならない。とにかく三萬噸級が十五隻もゐるのです。大砲の數だけでも四十糎砲二十四門、三十六糎砲百二十四門、三十糎砲十二門合せて百六十門もあるのです。

これが齊射する時には、それこそ天地晦冥、どんな大きな雷鳴だつて消されてしまひます。

布哇沖で彼等の實彈射撃演習を見た英國の士官が、後で『ぞツとして身慄ひがした。』と告白しましたが嘘ではないだらう。

ことに米艦は足が長いのが曲者です。彼等はどんな遠いところへでも出かけます。『メリーランド』級の如きは二萬浬も行動出來るのです。布哇の眞珠軍港から、横須賀軍港までは三千五百浬ですから、まさに三往復ではありませんか。勿論、實戰では、うね〳〵曲り曲つて航海しますから、とても三往復は出來ませんが、それでも彼等が東京灣の近海へ進撃して來て、一週間や十日位、敵前作戰がやれることは事實です。

こんな足の長い戰艦は、世界に三十有餘の海軍があり、七十七隻の大小戰艦がありますが、米國海軍以外にはどこにもありません。戰艦の艦底は二重底ですが、米國の戰艦は、その底と

底との間に、重油を入れて、一つには燃料を多くし、一つには魚雷でやられた時の防禦力を強くして居るのですから、なかなか考へてゐます。

これが、みな日本遠征作戰をやるために考へ出されたのですから、私達は默つて見て居る譯には行かないのです。

プラット大將は砲術の研究にも非常に熱心で、七、八年前は二萬四五千米位しか射てなかつたのが、今では三萬米の遠距離から、どん〳〵射つてゐます。

三萬米といへば敵艦は肉眼で見えません。地球は曲つてゐますから、敵艦は水平線の向ふにかくれてしまふのです。

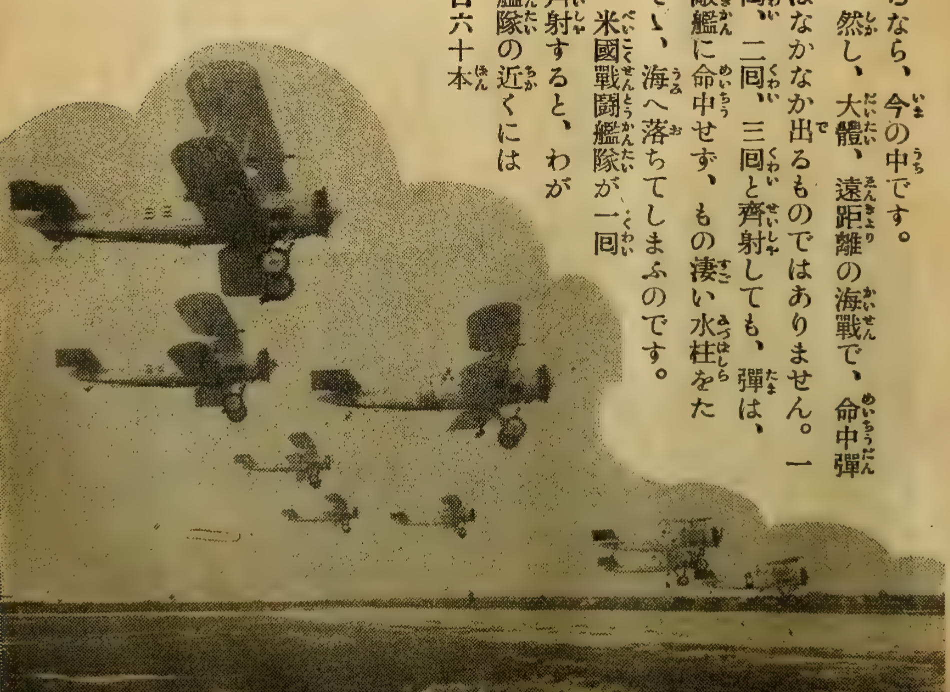
だから、觀測飛行機が危險を冒して、前線へ出ます。そして空中から無電で狀況を報告するのです。この觀測が非常にいいために、砲術將校連中は『遠距離砲戰術は、われ等は世界一の腕前だ』と自慢してゐますが、本當か嘘か私には分りません。どこの海軍でも鐵砲屋（砲術士官）はホラ吹きが多いものです。砲術で鳴らした獨逸海軍でも實戰では百發に三發しか命中しませんでした。

『米國海軍は二百發で五發命中位のものだらう。』

と、英國海軍あたりでは笑つてゐますが、そんな下手でもないでせう。これは、やつて見なければ分らないのだから、威張るなら、今の中です。

然し、大體、遠距離の海戰で、命中彈はなかなか出るものではありません。一回、二回、三回と齊射しても、彈は、敵艦に命中せず、もの凄い水柱をたてゝ、海へ落ちてしまふのです。

米國戰鬪艦隊が、一回齊射すると、わが艦隊の近くには百六十本



（米空軍の威力カーチス機の快翔）

の大水柱がたちます。百六十本もの水柱がたつと、水煙りが濛濛とたちこめて、どの水柱がどの艦の砲彈なのかさつぱり分らない。そこで、彼等が考へ出したのが、奇想天外な水柱着色です。水を紅色や黄色に染めるのです。

戰艦『カリフオルニア』の砲彈が海へ落ちると、紅色の水柱が立ちます。『コロラド』の彈は黄色の水柱をあげます。

それを見て觀測機は『カリフオルニア』の狙ひは遠い、『コロラド』の照準は近い、などと報告するのです。

『カリフオルニア』の射彈が十二の紅の大水柱をあげ、それが眞赤な瀧となつて崩れ落ちる狀況は、想像するだけでも、ものすごい美しさを感ずるではありませんか。――

こゝでわが戰艦の砲術は如何と聞きたくなるところですが、それだけは、事軍機に關しますから、やめて置きませう。

たゞ我が『陸奥』『長門』以下の十戰艦が、彼等よりも、うんと獰猛であるのも事實ですが、又四十糎砲十六門、三十六糎砲七十二門、合せて八十八門の砲力が、彼等の百六十門にくらべて甚だ見劣りのするのも事實です。

ある生意氣な米國士官は、

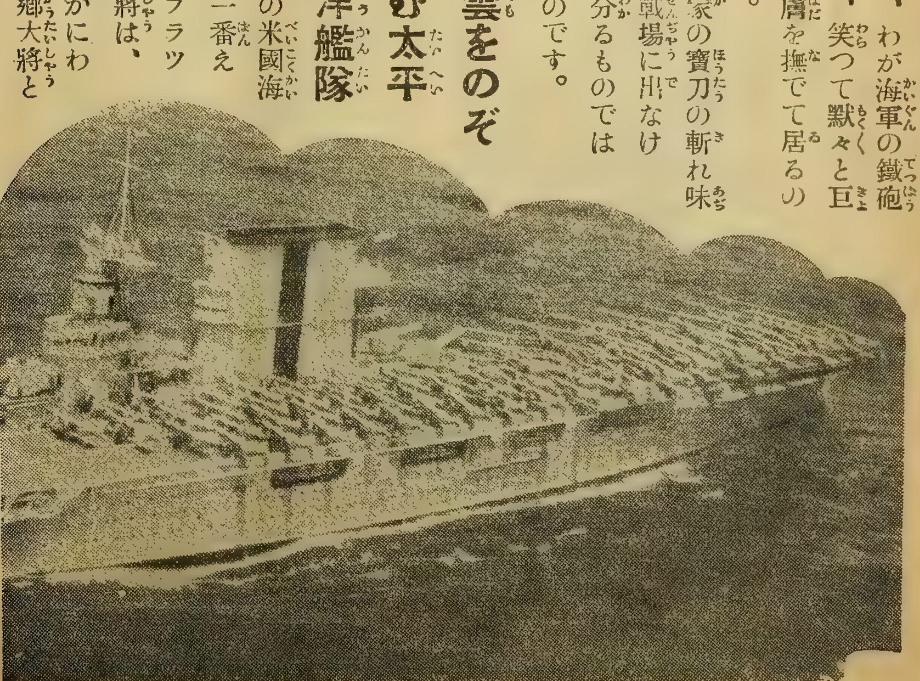
『われ等は先づ防禦力の弱い「金剛」級四隻を、血祭りに上げよう。』

と、暴言を吐きましたが、わが海軍の鐵砲屋は、笑つて默々と亘砲の膚を撫でて居るのです。

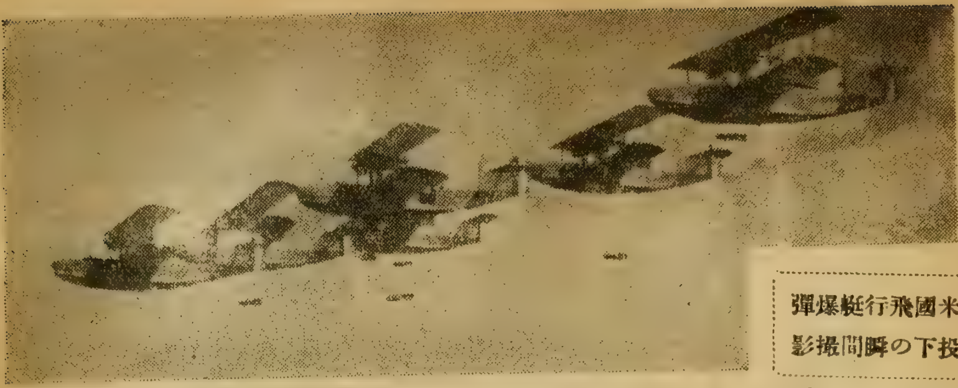
傳家の寶刀の斬れ味は、戰場に出なければ分るものではないのです。

雲をのぞむ太平洋艦隊

今の米國海軍で一番えらいプラット大將は、ひそかにわが東郷大將と



（堂々威を拂ふ米國海軍航空母艦サラトガ號）



米國飛行艇爆彈投下の瞬間撮影

山本大將を合せて、二で割つた人物位に自任して居るらしいです。すなはち軍政家で戰略家を兼ねて居るのです。日本海軍を條約で縛りつけて六割海軍にしてしまつたのは、この大將の考へですから、なるほど偉いには違ひありません。しかし、私の見るところでは、わが海軍には名前は憚りますがプラット提督以上の名將が二、三人に止まりません。

　この大將の作戰振りを見て居ると、米國艦隊がこちらへ攻めて來る時の目標は、マニラの奪還ではなく東京攻撃のやうに思はれます。一匕深く敵の咽元を突かうとするのです。

　この進撃の途中に、南鳥島や小笠原諸島がありますから、彼等は之らの島を占領しようとするでせう。又南洋群島も、日本攻撃の絶好の足溜りとして、狙はれるでせう。あの渺茫はてしもない南洋にばらまかれた小石のやうな小群島も、敵の手に落ちると大變なのです。

　プラット大將がこの大進撃について、一番怖れてるのは、勇猛果敢な日本潜水艦の攻撃です。米國海軍では日本潜水艦の中、約五十隻は八千浬以上の航續力があり、優に布哇近海に游弋して、米國艦隊を奇襲することが出來ると見てゐます。

　又、事實わが、海軍の中でも、潜水部隊は最も旺盛な戰鬪精神を持つて居るのだから、どんな冒險でも〇〇するでせう。

　潜水艦ばかりではない。わが第二艦隊が、快速の巡洋艦、驅逐艦をもつて、何時奇襲を行ふかも分りません。ことに東天やうやく紅を帶びて來る拂曉の頃と、太陽が西の水平線に沈んで

黄昏迫り來る薄暮の頃が、米國艦隊にとつて、一番危險です。

だから偵察艦隊は本隊の先に立つて、嚴重な見張りをやるのですが、この見張り作業は、たまらない位苦しいでせう。今夜は潜水艦の襲撃があるか、明日は巡洋戰艦に狙はれるかと、警戒又警戒で、全員疲勞と心配で神經衰弱にかゝらねば儲物です。

本隊はこの偵察艦隊の後から、十五隻の戰艦が本陣となり、遊撃の巡洋艦、水雷戰隊の驅逐艦が數十隻、前後左右に圓陣をつくつて進むのです。これぞ、米國海軍獨特の輪型陣です。

この本隊の後ろには機雷戰隊、運送部隊がつゞき、全艦隊約二百隻以上になるでせう。

これが蛇のはふやうにうね〳〵とZ形のチグザク航進をもつて、わが近海に迫つて來るのです。

米國士官の中に『この本隊以外に、別に商船に手を入れて、假想戰艦を急造し、そいつで北のアラスカ方面から北海道を攻撃する恰好を見せたら、日本海軍はあわてゝ、必ず兵力を北海へ割くだらう。その、兵力が二分したところで、各個撃破をやればいゝぢやないか。』と、考へた男があります。恐れ入つた迷案です。

しかし、わが聯合艦隊と米國太平洋艦隊が決戰をやる戰場が果して小笠原沖になるか、南鳥島沖になるか、又南へ下つてヤルート島の近海になるか、それとも北方金華山の東沖になるかは、誰れにも分らないのです。その鍵を握るものは、時の米國海軍軍令部長です。

空軍はどれだけ強いか

プラット大將は『米國海軍のこれからの作戰は、空軍第一主義で行け』と叫んでゐます。空中戰で先づ空を占領してから、敵の海軍をやつつけるのです。敵の空軍を射ち墜した後で、偵察隊は戰闘艦隊の着彈の觀測をやり、攻撃隊は敵艦隊の頭の上へ襲ひかゝつて、爆彈と瓦斯彈と魚雷の雨を浴びせかけるのです。

だから一度で空中戰に負けた艦隊は實に慘め極るものです。敵の艦隊から射たれるばかりでなく、空からは爆撃されるし、しかも砲撃は、觀測飛行機がないから、とても、思ふやうには命中しません。『空中戰に負けた艦隊は、必ず全滅する』これはどうしても動かすことの出來ぬ海戰の鐵則ですね。

米國海軍航空戰隊は世界無比の航空母艦『サラトガ』『レキシントン』を持つてゐます。

これは三萬三千噸、建造費一億圓の大航空母艦で、戰時には百二十機の攻撃機、戰闘機を戴せて、空中作戰の主力となるのです。八門の二十糎砲が備へられた甲板には、いつもカーチス戰闘機が十數機、物々しい面構へをしてひかへて居ます。

この二艦の外に彼等は今、海軍工廠で、新しい航空母艦『ランヂャー』を造つてゐます。

これは一萬三千八百噸で『サラトガ』よりずつと小さいが、戰

闘爆撃機七十六機(豫備機を算へると約百機)を積む怪物です。

米國空軍の巨頭モフェット少將は『日本の「赤城」「加賀」よりは強い』と、自慢氣にほのめかしてゐます。

飛行甲板は、獨逸の豆戰艦のやうに電氣で熔接された強い鋼鐵で爆彈を落されてもへつこまないさうです。

煙突は左舷と右舷に出てゐるから、いつも煙りは風下の方へ流して、飛行機の邪魔になりません。

航空戰隊の飛行將校達は、カーチス五型の戰闘爆撃機を、一日も早くこの新艦の甲板から飛ばしたいでせう。

カーチス五型戰闘爆撃機は、五百七十馬力、長さ八米足らずの、見るからに強さうな精鋭です。速力は二百七十五キロで、わが九〇式戰闘機に劣るが、五千米の高空から、薄氣味の惡い唸りを『ヒューンヒューン』と立てゝ、鷲のやうに急降下する時の速力は實に五百キロ。こんなはやい速力は天下に二つとない。わが戰闘機なら、空氣の壓力に耐へかねて、翼が折れ、みじめな空中分解の最期を遂げるでせう。

これこそ實に『地獄の爆撃機』の名に恥ぢぬ怪兵器です。

航空機隊の名司令官ヤーネル少將は『カーチスの編隊爆撃で、敵軍の息の根を止めて見せる』と豪語してゐます。

三機編隊の小隊が三群又は四群、隼のやうに大空を駈けて、めざす戰艦の前後左右から、急襲につぐに急襲、妙技の限りをつくして小爆彈の雨を降らす戰況を想像して下さい。

私達は米國海軍を侮つてはならない。飛行將校の中にも、生命知らずの猛者が三十人や五十人は居るやうです。その證據に訓練中に慘死する將校の數が、わが海軍に負けぬ位多いのです。

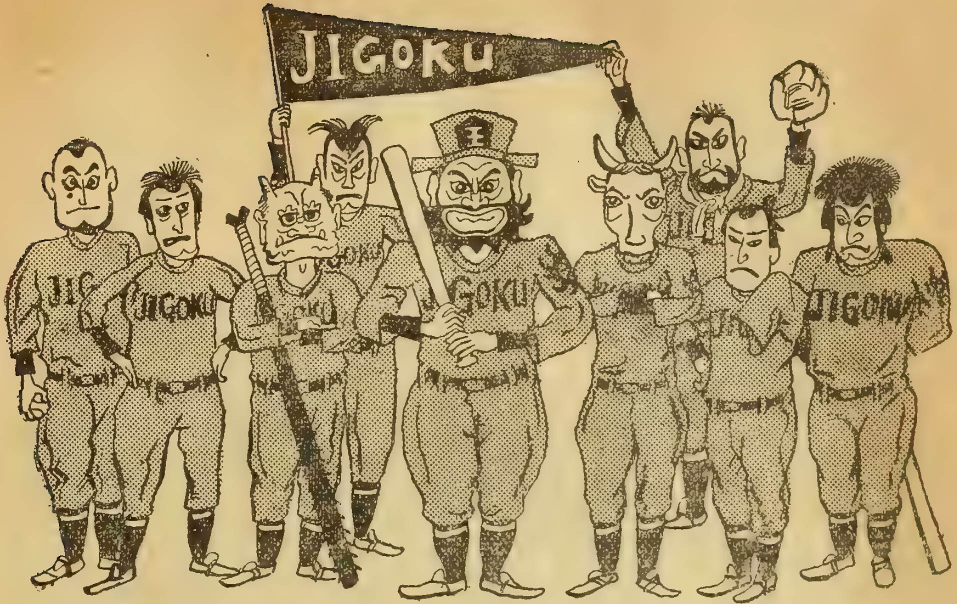
そんなら、彼等の大空軍五百機と、わが航空母艦『赤城』『加賀』『鳳翔』『龍驤』四艦の〇百機とどちらが強いか。機數では彼れが強いし、戰闘技術は、こちらが強い、この謎は、どうしても實戰の秋まで殘ります。

× × ×

最後に一言しよう。日本海軍の任務は東洋の海を守るにあり、まだ一度でも、太平洋の東を攻めようなどと、侵略的な計畫をたてたことはありません。たゞ日本海軍は、極東の海に攻めて來る艦隊があれば、これを近海で撃滅するだけの戰力は、どうしても失ひたくないのです。それを失へば日本は亡びる他ありません。だから日本海軍の作戰は、公明正大國家防衞、極東擁護の神聖作戰です。

もしも、米國が日本と同じやうに、太平洋艦隊の兵力をもつと減らして攻撃作戰を防禦作戰に變へたら、太平洋上の暗雲はたゞちに消えてしまふでせう。

われ等は、進んで戰ひを求めるのではない。戰ひを挑んで來る者に備へるのです。陛下の海軍は、今や聖軍艦旗をひるがへして、西太平洋の鎭護となつてゐますが、私は米國海軍が、一日も早く、その戈をさめて、太平洋の波を永遠に安らかならしめるやうに、心からいのらずには居られません。(をはり)



マンガコント

地獄極樂野球戰

水島爾保布

エンマ大王をキャプテンに有つ地獄チームから、極樂のアミダ様の許へ、三途川原グラウンドに於いて野球試合をやらうといふ申込み、何しろ地獄チームといへば現今名代の强剛ぞろひ、一にドロボー・チームともいはれて、トルことツカムこと、ウツことハシルこと、殊に盜壘の巧みなことに於いては、天下無敵との定評のある選手ばかりで、これにはいかな極樂チームも齒は立つまいとの噂でございます。

『何にしろ、赤鬼選手なんかと來たら、八十何貫の鐵の棒をバットにして、ボールがストライキでも片つぱしから打ちまくるつてえことだし、當りや何れも物凄いホームランだつて評判だ。とても我々に勝目はないよ。』

『しかし、我々の方にも仁王君といふ素晴らしいバツテリーがあるからさうやみやみと敗ける事もあるまいと思ふがどんなもんかね。それにランナーにはキダテンといふ選手もあるし……』

『いや、あいつ等にもランナーは凄いのがゐるよ。鼠小僧だの、石川五右衞門だなんて、忍術を心得てる奴がゐるし、それから、河内山の宗俊なんて、名代のペテン投手もゐるさうだし、定九郎なん

てセーフティー・バンドとゴロの名人もゐるつて話だ。』

『どうもこつちの旗色は悪さうだよ。どうですモンジュ君、何かいゝ智恵はないものかね。』

といつた鹽梅で、アミダ如來樣を始めヤクシ如來、カンノン菩薩、モンジュ菩薩、何れも地獄チームなんかに敗けては極樂チームの名折れだといふところから、何とかこつちからも、いゝ選手を選んで、これに對抗しようと、切とナイン編成に苦心をして居られます。

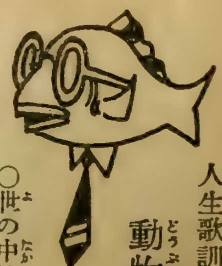
『ではこつちでは差當り左右兩仁王君をバッテリーにして、一壘、二壘、三壘、遊撃の内野は四天王に任せる事として、さて外野だが、先センターは阿彌陀君、ライトとレフトは觀音君と勢至君にやつて貰ふとしようか。』

『いや外野は、阿彌陀君一派より釋迦如來君の一派、すなはち文珠普賢兩君で固めて貰ふ方が有利らしいよ。』

『なに釋迦君だつて、……そいつは駄目だ、釋迦君は駄目だよ。』

『なぜね。』

『だつて、お釋迦樣は、素人もの。』



人生歌訓

動物づくし

里尾　青蛙

○世の中は兎と龜のかけくらべ、速いからこそ遲くなるなれ。

○見る聞くの慾と愚痴とに嚙み合うて、いゝけんけんするは犬のお仲間。

○柔つたふ鼠の道も道なれど、まことの道ぞ人の行く道。

○學ぶべし山猿さへも教ふれば、立ち舞ふわざはなすものぞかし。

○鳴子をば己が鳴らしておきながら、驚きて立つむら雀かな。

○借錢を負うたる馬に乘り合はせ、ひいんすりやどんと落されにけり。

○蝸牛のちつくり角を持つ故に、早や爭ひのはしとなりけり。

○聞けや人、忠とあしたに雀の子、孝と夕に鴉なくなり。

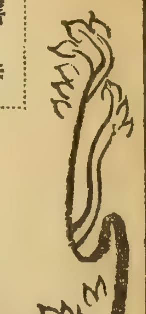
滑稽詩

程度問題

サトウ・ハチロー

肥りたいとて　苦心して
だんだんふくれて　肥りすぎ
上衣もズボンも　小さくて
とてもはけない　着られない
新たに作らにや　間にあはない
——ネエ　なんでも　程度が大切よ

今年の流行は　パラソルの
柄のみじかいのが　流行だと
うんとみじかく　あつらへた
ところが餘りに　短かすぎ
さすと頭が　つかへるよ
——ネエ　なんでも　程度が大切よ



シツクボーイは　すべからく
太いパンツを　はくものと
ぶか〱パンツで　よそへ行く
よその小父さん　それを見て
そりや外國の　ハカマかね
――ネエ　なんでも程度が大切よ

小皺をとるには　マツサージ
朝から晩まで　ゴシゴシと
こすつてゐたのは　よいけれど
やがて赤味が　さして來た
よく見りや皮が　むけてゐた
――ネエ　なんでも程度が大切よ

＝細木原青起畫＝

大佛より大きな手

江見水蔭

別府外務大臣 油屋熊八
七十一歳で青年と名乘る人

『掌の大きなのは最も勤勞した人のマークに均しい。人間は終始一貫、誠實に働かなければ駄目だ。』

そこで日本全國に檄を飛ばして、手の大きな人を募集して『全國大掌大會』といふのを、別府市公會堂に於て開催した(昭和六年十月一日)。その主催者は同市龜の井ホテル社長油屋熊八といふ當時六十九歳の老人——老人といふと當人は御機嫌が惡い。自から油屋青年と名乘つて、紅いネクタイを附けて、身輕氣輕に飛歩いてゐる。別府の外務大臣と云へば知らない者は無い程で、何んでも其紅色ネクタイは、米國の觀光團長から送つて來たので。

併し油屋熊八さんの頭は愉快に禿げてゐる。禿頭大會へ出席しても決して人後には落ちないのだが、それでは既に先鞭を附けられたので、方面を變へて思ひ立つたのが——全國大掌大會。

處が、その掌に墨を塗つて紙へ捺した大手形が、集まるも集まつたものだ。一萬九千八百七十六。其中から最も大きなのを百人だけ選んで、其人達には記念品を贈つたり、湯治宿泊自由券を呈したり、會の當日は縣知事其他の紳士淑女大勢の他に、東京から與謝野晶子女史夫妻を始め、知名の文士畫家十數名を、わざわざ招待して、大講演會。

そこで大掌會の主催者たる油屋熊八

豆知識

●世界一華麗を極める建築物は、佛國ルイ十四世の造つたヴエルサイユの宮殿、總工費四億圓を費し、四十四年かゝつて竣工したとは根氣のよい話。

●現在は遺跡となつてゐる羅馬のカラカラ浴場は一時に三千人も入れたさうだ。全部大理石でチユス帝の建設。贅澤な浴場もあつたものだ。

●支那廣東の一寺院に、高さ五米餘、緣の周圍約十四米の大釣鐘がある。鐘の內外全面に一寸二分大の漢字が八萬一千四字鑄込まれてあるとは、悠長な支那人の造りさうなもの。

青年は、といふと、この手が實に別府の名所たる鐵筋コンクリートの大佛様より大きいと、來賓の一人がお世辭を云つた程で、これを數字で現はすと、指長三寸一分、掌長四寸一分合せて七寸二分の長さで幅が三寸二分とあり、全國から集つた中で、第一位級に編入されたのは益ゝ愉快。

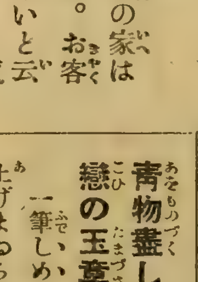
だが、それだけ勤勞といふ事には最大の努力をつゞけて來たので、本當の青年時代に、米國へ渡つて、勞働者として鍛へ上げた、誠に貴ぶべき大掌なのだ。

この大掌を、ニユッと人の前に突き出す。小學校などで、兒童を集めては、大きな掌を先づ示しながら、『人間は働くのが第一です。』それに續いて出るのが、禁酒論。禁煙論。

處が油屋青年の家はホテル業である。お客に酒を持つて來いと云はれると、そこまで禁酒論は擴大されぬので、青年これには困つてゐる。それで同ホテルにはスタンドの酒場が設けられてない。（煙草盆だけは出してある。）

頭の禿げた、ニコニコした老人、それが紅色ネクタイで別府の棧橋に立つて、知名の士を送迎する。その時には、いつも大きな手、大佛より大きな掌をニユツ、と前へ突き出して、これを油屋一流の敬禮法としてゐる處は、確かに昭和畸人傳中のトップである。

青物盡し
戀の玉章



一筆しめし上げまゐらせ候
扨あなた様の姿をみつばより、どうしたいんげんさゝげやら、すいくわ（西瓜）お方と思ひ染め、湯島なるにんじん様へとうぐわん（冬瓜）かけ、叶ふ月日のながいもをまつだけつらきものは無く、なんとなすび（茄子）と心ねぎ、泣くも世間のわらびぐさ、命にかけてほうれんさう、いとし可愛いと夕がほの、からみつきたきふぢまめや、これ程こがるゝ心つたけのこを、けしごま程もくみわけて、あんなかぼちやと思はずに、熱きさゝげがあるならば、みやうがに叶ふお返事をうどうも／＼れんじ上げまゐらせ候まくはあら／＼たべたく

かしこ

しほれ盡した若菜より

ぬしさままゐる

櫻田事變の同志蓮田市五郎が細川家に幽囚中執筆した事變の圖で悲壯を極はめた當時の樣子を今に傳へて珍重されてゐる（小田富彌畫伯模寫）

維新志士銘々傳

森五六郎

三上於菟吉

小田とみや畫

殉忠一念

安政五年八月、勤王志士等の熱願が叶つて、水戸の徳川齊昭、慶篤父子に、攘夷討幕の密勅が下つたといふことが諜知されると、幕府の狼狽は一通りではありませぬ。

——おお、遂に怖るべき危機は迫つた。水戸へ勅諚が下つたとなると、これまで公然と反幕を呼號してゐた西南諸藩は、火に

油を注いだやうに燃え立つだらうし、これまで日和見の洞峠に居坐つてゐたものも、翕然として天朝のお味方に就くに相違ない。かくては徳川の宗家、三百年の社稷も見る／＼瓦解してしまふ。今こそ、只、彈壓だ。もはや、朝廷への御遠慮も、天下への氣兼もしてはをられぬ。土を掘り、根を分けて、勤王家といふ勤王家を根だやしにしてしまへ。

かく、決心した大老井伊直弼は、間部詮勝以下を督勵して、報國盡忠の念に燃える攘夷家、尊王家を、一人も剩さじと捕縛しはじめましたが、これが、世に謂ふ安政の大獄。犧牲者の主なるものとして、浪人儒者梅田雲濱、賴三樹三郎、水戸藩留守居鵜飼吉左衞門、同幸吉、小林民部太夫、藤井但馬守、畫家浮田一蕙、池田大學、日下部伊三次、曾我權左衞門、藤森弘庵、茅根伊豫、安島帶刀その他百餘人をかぞへ、實に未曾有の彈壓といふべきでした。

が、これは要するに、葉を苅つて、幹に及ばざるもの、たとひ三家の筆頭、親藩中の親藩、天下畏敬の的であるとは言へ、當の水戸殿をそのまゝに差し置いては、佛を作つて魂を入れぬわけだと考へた井伊大老は、遂に決意をかためて、松平左兵衞督を上使

として小石川水戸邸につかはし、前中納言齊昭に鄕國に歸つて永代に蟄居すべきことを嚴達しました。

世に副將軍とまで呼ばれる水戸老侯への蟄居命令——全く、德川幕府創草以來の大事件ですが、さりとて、この嚴達に背いて、將軍と確執すべき時でもないと考へた齊昭侯は、感慨を、

浮ぐものかゝらばかゝれ世の係の
　鏡にうつる山の端の月

なる、三十一文字に托して、供揃さへも侘々しく、紫山筑波に程近き領地を指して出發しました。

それが、安政六年八月二十六日。

駕籠わきに從ふものは、いづれも忠臣中の忠臣、事、成らんとして中道に敗れた君侯の胸の中を察して、一同頭もうなだれ勝ちに、とは言へ、胸中深く憤りをたゝへて、

——おお、待つてゐるがよい。奸雄井伊、その中には今日の恨みを必らず報いて、水戸者の魂を見せずには置かぬぞ！

と、口には云はね、眦を血もにじむばかりに引き釣らせてゐないものはないのです。

同勢は悄々と、金杉、三の輪、千住大橋も打ちすぎて、掃部、新宿の渡しを越え、小金井宿本陣に、一夜の宿を求めることになりました。やがて、夜もふける——

老侯寢所の次には、重臣大關和七郎、灯影のゆらぎをみつめながら、轉變の世を、あるひは歎き、あるひは怒り、一人慷慨に堪へぬげに宿直をしてをりますと、ふと、障子の外で、かすかな足音——

素より、刺客、暗殺者に對して、油斷はせぬ大關和七郎、大切な君侯を預つてゐることですから、屹ツとして、刀を引きつけて耳を淸すと、足音は、つい、そこで止つて、

『大關うぢ——大關うぢはおいでなさりませぬか？』

『お！　さういふは森うぢだな？』

と、大關は、ホツとして、

『主公の御寢の間に近い。ひそかにおはひりなさい。』

森五六郎といふ靑年、馬廻り五百石森才四郎の弟で、君寵もなか〳〵に深い忠士——ソツと障子を開けてはひつて來ますと、ピタリと坐つて、

『深更、恐れ入る話ではムれど、拙者一身の大事がムる。君公へのお取次頼み入ります。』

『ナニ、お取次ぎ？』

和七郎、以ての外、と、云ふやうに眉を寄せました。

『只今、何どきと思はツしやる。殿には、旅のお疲れ——かかる時刻にお取次ぎなぞ出來ることゝ思はれるか？』

『ごもつともながら、是非とも出來ぬところをお願ひ申したうムる。』

と、森五六郎はまじろぎもしませぬ。

『フム。』

と、和七郎はキッと見て、

『左近に急場のお願ひとあらば、ほかならぬ貴公だ。お取次ぎせぬこともないが──一たい御用向と申すは何ごとでムる？』

『實は、大關うぢ、拙者、今晩より永のお暇を願ひ、浪人仕り度い所存──』

五六郎の聲はきつぱりしてゐます。

『えツ！ 永のお暇！ 浪人！』

と、物驚きをせぬ和七郎ほどの人物も、思はず聲を筒走しらせました。

『いかにも、お暇願ひ申し度く、右よろしう殿へお取次ぎを──』

大關和七郎、ぐツと目を剝くやうにして青年を睨みつめてゐましたが、

『貴公、亂醉か、それとも狂氣か──まづ氣を靜めて、物を申さツしやい──さやうな理不盡、沒義道、拙者聽く耳は持ちませぬ。さ、お退りなさい。』

『イヤ、拙者、狂氣も亂醉もいたしませぬ。』

と、五六郎は一膝押し進めさへして、

『貴殿は宿直、お取次をいたし下さればお役目は濟みませう。』

『森、貴公、見下げ果てた男だな。只今の殿の御境涯を何と思はツしやる。柳營のおん怒りに觸れて、恐れ多く、おいたはしい限りながら、お國元へ永の御蟄居──折角勤王忠節のおん志をお伸べにならうとする瀨戸際での、この御不幸だ。これまでお暇になつてゐた浪々の者も、かかるときこそ驅けつけて、御勘氣御免を願ふべきに、この大事の折柄、お暇の願ひ。さては君を賣り、國を賣り、志を賣つて、一身の榮達を計る氣だな。亡き父御、まつた兄才四郎どのが承はらば、どれ程に歎かるるか──森、明朝、後悔して詫びなばよし、さもなくば、これまでの親交は夢、大關和七郎、刀を拔く業を心得てをるぞ──』

和七郎が激昂してかう言ひ罵しつたとき、五六郎は顏いろをも動かしませんでした。

『では、かほど申し入れても、お取次ぎは叶ひませぬか？』

『いかにも！ お取次は愚か、拙者その面を見るのもいとはしい。退れ！』

『ハテ、大關うぢ。貴公には左程一本氣のお方とも思はなんだが──が、お取次どうあつても願へぬとなら、それも詮なし──

ただ、これまでのお馴染み甲斐に、ひとつの譬ばなしをいたしませう。時、非にして英雄義人も勢を得ず、永蟄して空しく亡ぶるも、これも運――なれど、その運を運として、手を拱いて只歎き悲しんでゐるのは、壮士たるものの潔よしとせざるところ――大關うぢ、荊軻は易水を渡つて遂に秦王を斬らず我身を失ひ、張良は力士を友として博浪沙に敵主を椎殺せんとして事空に歸す――いづれもその望みの十が一を行ふことが出來ませぬ――さればこそ、拙者、これより永のお暇を賜はり、永久暢氣に暮したいと思ふまで――』

意氣ありげな言葉に、和七郎、怒りを消して、じつと顔を眺めたとき、次の老侯寢所から、微かな咳ぶきがして、

『五六郎、目通り許すぞ！　これへ。』

『は。』

五六郎、和七郎、手をつかへましたが、やがて宿直の和七郎が、寢所堺の襖をあけます。

夜の具の上に、白栲の寢巻で起き直つてゐられるのは、昨日までは天下威嚴の表象のやうに敬はれ、今日は領國へ淋しい零落の旅の徳川齊昭――小鬢の霜、額の皺も目に立つて、ひれ伏

した五六郎を眺めながら、
『五六郎、襖越しに聴いたその方の願ひ、面白し。心力が弱く、榮えを柳營に失つたこの隱居に仕へるよりも、天地四方に漂遊した方が、腕白なその方にはよう似合うて見えるぞ。暇、さし許す。行け。』
『は、は、恐れ入りましたおん仰せ。まことに憚り多いことでは厶りまするが、この五六郎が心底を、老侯おん一人知ろしめすことと存じまする。今生にては、これがおん別れ――御機嫌いよ／＼うるはしくお過しなされますやう――』
見上げる目には隱し難い一ぱいの涙です。
その涙に氣もつかぬ風を裝つた齊昭、枕元の手函を引き寄せると、中から取り出した綠服紗の包――重たげなのを、
『五六郎、その方、射撃を好んだのう――かねて欲しがつてをつたこの銃、形見に取らせるであらう――進め。』
押し戴いた服紗包の内容――それは、五六郎、和七郎、いづれもよく知つてゐる老侯護身の短銃――飛龍と、齊昭みづから銘を切つた一品です。

『か、かたじけなう――』
あとは、言葉もなく、五六郎は座を辷つて、小金井宿本陣を和七郎以外にはいとまも告げず立ちいでると、それなり行衞知れずになつてしまつたのでした。

× × ×

ところが、それから月を經て、初秋が、やがて秋となり、霜雪に似て白々と路べに凍る十一月の末つ方、ある夕ぐれのことでしたが、櫻田御門見付に近い濠端のあたりに、この寒空に、古袷、袖口も裾もボロ／＼なのに酒薦をまとつた生若い乞食がつくばつて、しきりと通行人のあはれみを乞うてをります。

貰ひはなか〳〵少なくはありません――登城下城の折には、大名供揃を見物しようとする都、田舍の老若が、いつもそのあたりに群集するのが恒なので、縋ればいくらにかになるわけです。

やがて、お城の方で、退刻の太鼓が、ドーン、ドーンとかすかに響いたと思ふと、門内から吐き出されて來る、この方角に屋敷を持つた諸大名――

その中に、一本道具で名高い、彥根の城主大老井伊直弼の供揃が、粛々として出てまゐりましたが、もしその時、その行列に目をくばつてゐる若い乞食の眼光に氣がついたなら戰慄を感ぜずにはゐられなかつたでありませう――

――ソソけた髮は、ザワ〳〵と逆立つやうで、目は釣り上り、下唇は血の出るほど上齒で噛みしめられ、つくばつた兩手を、土に爪を立てるやうにしてゐるのです。

が、一介の乞食がどうならうと、天下大老の行列に取つて何でありませう――橋を越えると、下座觸れもおごそかに、濠端を右へ取ります。

ムクリと起き出して、後を慕ふ乞食――

これぞ、實は、水戶殿の愛臣、小金井宿で永の暇を自ら願ひ出た森五六郎、豫讓の故事にならひ、身に漆を塗り、襤褸をまとつて、絕えずこの邊りを徘徊し、故主より賜つた寶銃飛龍を以つて、一發の下に背勅の大老を仕止めようとしてゐたのでありました。

が、何分にも、櫻田門と井伊家は、目と鼻の間、物の三町と離れぬことですから、なか〳〵ウマい折が見當りません。

さて、五六郎、今日も駄目かと思つて、奥齒を噛んでゐるうちに、この時に限つて、どうしたわけか、井伊の供揃が、屋敷の方へは阪を上らずに、そのまま濠端を通つて、辨慶堀の方へ行くのです。

――ハ、ハア、紀州家へ行かれるのだな！

ニタリと北叟笑んだ五六郎です。紀州家屋敷前は、茶店があつて、おでん燗酒の屋臺なぞも出る場所――こゝも亦、地面へ坐つてゐたとて怪しまれませんし、相手の歸りをうかゞつて一仕事するには恰好きはまる形勝の地です。

ところが、彼が土手下につぐなんで、面桶を出して、あてもなく頭を上下してゐるところへ、やつて來た一人の武士、黑頭巾をかぶつて、羽二重黑紋付の着流しに、隆とした茶博多の帶を挾み帶にして、落差しの風體――それが、茶店へ掛けると、澁茶を汲ませて、

『婆、只今、紀州家へはひられた立派やかな供揃――どちらだな？』

『はい、彦根さまでござりますよ。大層お親しい間柄ださうで、とき〴〵お越しになつて、お茶の會でもなさるか、大分更けてお戻りがいつもでムります。』

『フーム――さやうか。御大老か？　道理で御立派なことだ。』

五六郎、フト氣がつくと、この着流しの侍は、さつき、自分がゐた濠端に、ちやあんと立つて行列を拜見してゐた一人です――それが片箱一本道具の供揃を、今更、どこの大名だなぞ訊ねるわけもありません。

――妙なことを言ふ奴だ！

さう思つて、じツと容子を眺めながら、茶店の婆あと話してゐる聲に耳を傾けると、どうやら、聽き覺えのある語韻なのです。

――フウム、たしかに知つた奴じやが――あ、さうだ、あれは飯田一郎だ！

松平讃岐守家臣飯田一郎、錚々たる勤王家で、曾つては水戸老侯に密々の目通りをしたこともある、攘夷執心の人物なのです。

――飯田が、あの行列の後を跟ける？　ことによると彼も――

向ふでは、五六郎が、身を非人に窶してこの寒空の夕ぐれに、土手下に坐つてゐるとは思ひもかけませんから氣がつくはずはないのですが、こちらでは、絶えて久しい友人と思ふと、聲が掛けたい――話もしたい――が、そのやうなことに及びもつきません。目かほで物を言うたとて、事の破れは必定です。

じツと堪へて、心の中に、

――飯田うぢ、健勝で目出たうムるな。

と、會釋をします。

すると、件の侍は、

『おお、もうとつぷり暮れた。この店ももう片づけるころであらう。手間を取らせたな。』

『いゝえ――はい、もうお寒くなりましては、これからは、おでん屋さんの方へ讓る時刻で――ほ、ほ、ほ――これはまあ、多分にお茶代を――』

侍は、錢を投げると、五六郎には見向きもせず、夕闇の中を食違の阪のあなたに消え去りました。

――飯田も見屆けにまゐつた以上は、今夜何かやる氣だらうが、拙者も拙者で、今夜を生けて戻す大老ではないぞ！

五六郎は、しん〳〵と冷えて來る土の上、薦を布いて坐りつづけてゐます。

時を經て、行列を呑んでから、宵のこと、一度ピタリと閉されてゐた紀州家表門が、徐々に八文字に開いて、そこから現は

れて來たのが、彦根大老の乘物です。

と、見ると、森五六郎、面桶と薦を一まとめにして、道傍に押しやると、ツト立つて、闇の中を先潜りをして、かなたの老松の蔭にピタリと身を貼りつけました。

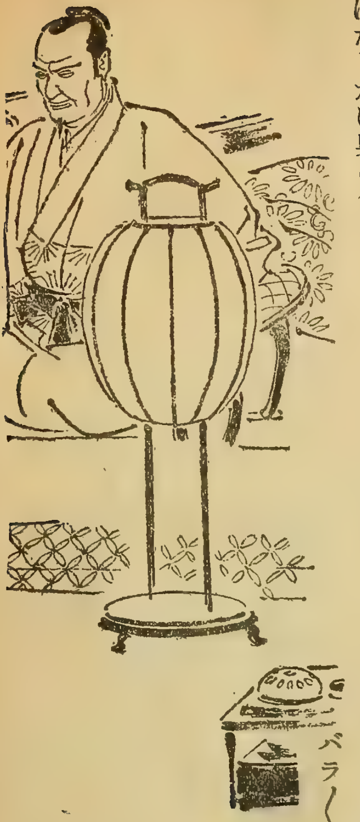
――今日こそはのがしはせぬぞ！　背勅の奸臣井伊直弼――武器は、老侯の賜もの――腕は水戸で聽えた森五六郎、この彈丸が、受けられるなら受けて見ろ！

粛々と進んで來る、井伊の供揃――

その中程に、かご脇に壯士を並ばせた乘物が、今や老松の蔭を行きすぎようとするその刹那、阿吽の息をこめて、狙ひをつけた飛龍の銃先からパッと火を吹く――

――ヅーン！

彈丸はたしかに輿に命中したらしく、



――ワアツ！

と、意味もない叫けびが起つて、かご脇の一人が乘物の中をのぞき込みましたが、それと同時に、落付いた、騒がぬ大老自身のこゑ――

『無事じやぞ！』

『御主君は御安泰じやぞ！　急げ！』

と、供頭が勵聲して、行列はかごを引ッ包んで、矢のやうに驅け出します。

射つて置いて、土手添を、闇にまぎれて逃げて、土にぴたりと身を伏せた五六郎、バリ〳〵と齒を噛んで、

――仕損じたか！　殘念！

と、叫けびましたが、しかしここで捕まつては犬死です――どこまでも再擧三擧を計る外はありません。

バラ〳〵と、行列守護の侍は四方に散つて、曲者いづこと提灯を振りかざしてゐます。と、同時に、かかることもあるかと、いはゆる非常時の府内をかためた役人、目明しが、どこからともなく無數に現はれて來て、草を分け、土を起しても犯人を探さずには置くまいといふ有樣……

腹匍つた五六郎、もはやのがれぬところと、主

君形見の飛龍に二發目を込めて、最期の用意をしてゐると、不思議や下手の方から、

『曲者だぞう！』

『のがすな！　それへ逃げるぞ！』

と、追ひ戻して來る大勢の聲です。

目をあげて見ると、大刀を引き拔いて、走つて來るのは、黑覆面、黑羽二重の着流し。裾をからげ、早だすきの壯漢――まがふべくもない先程の飯田一郎です。

彼も五六郎の想像通り、今夜をすごしてはと、彈丸を受けて慌てて走しる直弼の行列に斬込み、仕そこねて追はれて來たものに相違ありません。

追ひ戻して來る役人原の叫けびに、この邊に居合せた目明し等が、十手を振つて前をふさぐ。井伊の家臣が、めい〳〵拔刀で立ちふさがる――

飯田一郎は一本の刀に八方の敵を威嚇しながら、ジリ〳〵と退いて、紀州家の塀にピタリと背を押し當てました。

後楯を取つて、近づく敵を斬るかと思ふと、朗らかな、高い笑ひが、大刀を片手正眼につけた彼

の唇からほとばしりました。

『ハ、ハ、ハ、ハ、役人ども、怖れるには及ばぬぞ！ 士は運命のちゞまる時、いやしくうろたへるやうなことはせぬものじや。その方ども百人斬つたとてどうなる。これ、彦根の家臣、歸つて主じにさう申せ！ 今夜仕損じていのちを捨てるはわれ一人、志を同じうするものは、この日本國にかぎりがないのじや。首を洗つて待てとな！ よいか！』

と、さう叫んだと思ふと、取り卷いた一同が、アツと言ふまに、取り直した一刀、片袖をびり〳〵と引き裂いて刀身に卷くと、くつろげた襟、左の傍腹に突ツ込んで、思ひ切つて深くぐい〳〵と右に引きまはして、立派な立腹——

役人どもが振りかざしてゐる提灯の光に、その光景をながめる五六郎の、胸の切なさ、辛らさ——

——あの役人原に、一發打ち込まうか？ それとも竹の仕込みを引き拔いて斬り込まうか！ いや、それも犬死だ！ 飯田は、この拙者が、ここにゐるのを知つてゐるかのやうに、後詰あと勢について高言してゐる。ここで死ぬところではない——飯田うぢ、御最期、たしかに見屆けましたぞ！ 水戸の森五六郎、天下の志士にかはつて、たしかに檢分いたしましたぞ！

さう、心に叫んで、血の涙を流してゐる間に、役人達は、砲發したのも、この飯田の仕業と思つたと見えまして、死骸を擔つて退散してしまひました。

そんなわけで、この時は、まづ無事にすんだのでしたが——

救ひの主

さて、その年も明けて、翌年の松飾がとれて間もないころのこと——

ここは淺草駒形の、名高いどぜう屋の店内は、寒さの強い時節のことで、ことに、夕ぐれになつて、職人の仕舞どきともなると、大した繁昌——めい〳〵にどぜう鍋をひかへて、一本つけさせて、いなせな口調で浮世ばなしに興じながら、頬を紅くして泰平樂をならべてゐます。

そして、かうした場所には、いつも陣を張つてゐるのが、市中探索方手下の目明し、岡ツ引き——

つい其處の竹町の秀造といふ目明し、子分を二人連れて、これも鍋を控へて、チビリチビリ飲りながら、客人たちの放談の中から何かうまい聽き込みでもないかと、耳をすましてゐます。

いつの時代も同じことで、かうした所で、思ひもかけず、大疑獄の探索の端緒を得ることもあるのです。

ですが、何分、客に職人が七分、めい〳〵勝手なおのろけや、仕事の上の熱をあげてゐるだけで、目つきの少し悪い奴は、早くも自分達に氣がついて、コソ〳〵と立ち去つてしまふ仕末ゆゑ、

『おゝ、新、助。』

と、秀造は子分たちに、

『もう大分、あつたまつた。そろ〳〵出かけようか――』

『へえ、じやあ、銚子ののこりだけ片づけさせて頂きやして――』

と、茶碗にのこりを移して、酒好きの助といふのが、今しも最後の一しづくを呑んでしまはうとしたとき、

『へえ――まつぴらごめんなさりませ。あまりお寒うございますので、またいつもの奴さ、少しお分けなすつて下さいまし――まことにむさくるしうてお氣の毒さまでござりますが――』

と、哀れ氣なこゑが、軒下に――

ふりかへると、生若い乞食が、面桶、小丼を出して、飯やどぜう汁を分けてくれと、店の者にたのんでゐるのです。

乞食でもお客――

『おお、おめえか。ようし、うんとまけてやるぞ――』

『有難うございます、お代をお受けなすつて下せえまし。』

殊勝な、慇懃な乞食の態度言葉に、定めし落ぶれ者――と、秀造がじつとみつめてゐますと、汚ない巾着をあけて、びた錢を幾つか店の者の手に渡すのでしたが、フト、この目明しの目を射たのは、その巾着の中に、たしかにキラリと光つた小判、二朱金――

乞食は立ち去ります。

『おい、若い衆さん。』

と、秀造が、店の者に、

『今の乞食は、この邊にうろついてゐるのか――』

『へえ？ 何でも、いつもこの並木の通りでお貰ひをしてゐるやうで――大人しい、品のいゝ乞食でございますよ。お貰ひも馬鹿にいゝ容子で、毎晩のやうにどぜう汁を買ひに來ますが――』

『ああ、さうか、並木にうろついてゐるのか――』

何氣なささうに言つた秀造、若い衆に勘定を渡すと、二人の子分を連れて、外へ出て、

『さあ、これからあの乞食の野郎を引つぱたくんだっ』

『乞食？ 只今のですか？』

『大人しさうな奴ですがねえ。』

と、二人の子分。

『馬鹿！ だから手めえたちの目は節穴だッてえことよ。』

と、秀造は吐き出すやうに言つて、

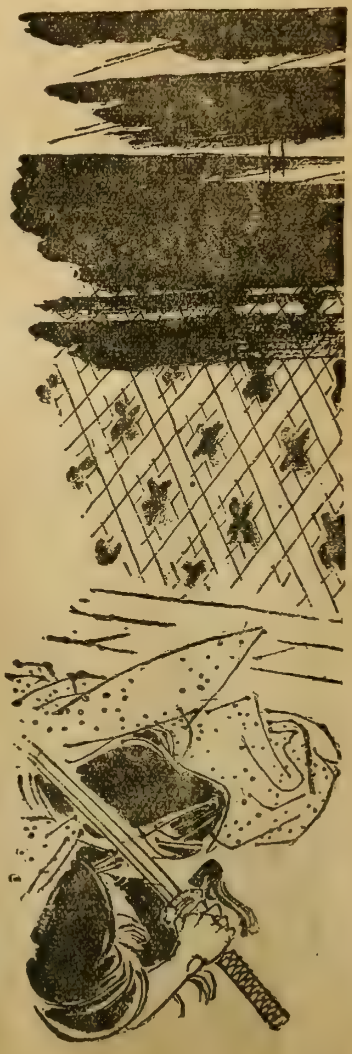
『あいつの巾着の中の黄金の光りが見えなかつたか？ それに指や掌にやあ、竹刀だこ——まあ、敵討にでも出た奴でなけりやあ、相當な大物だぞ。行つて見て、杖を持つてゐたぞ。まづあれをすぐに奪ひ取るんだ。ことに依ると、手向ひをするかも知れねえから——』

このやうな連中が、あとをつけるとも知らず、件の若い乞食、面桶には飯小丼のどぜう汁を大事さうに兩手に持つて、竹杖を刀のやうにだらしもなく腰にさして、ヨタ〳〵と、並木の、いつもの本陣の方へ戻つて行きます。

そのあとから、いそぎ足に追ひついた三人——

秀造が、かたはらを、何氣なく行きすぎる——新と助とが、左右にまはつて、新が、いきなり立ちふさがつて、胸ぐらを取る——助が、間も置かせず、杖を腰から引き拔く。相手は兩手

に面桶と小丼を持つてゐたところを、不意を食つて、きよとんとしたまゝです。
　秀造が戻つて來て、
『やい！　乞食――御用がある。番所まで歩め！』
　ギラリと、乞食の目がきらめきましたが、相手が目明しだと見ると、腰を低く、
『こりやあ、親分衆でございましたか、御用ならどこへでもお供をいたしますが――この飯や丼を頂いてからではいけますまいか――』
『馬鹿をいへ！　とぼけずとキリ〳〵歩め！』
『へえ。じやあ、この飯と汁を、どうぞその柳の下へ置かして頂きてえもので――御用がすんでから頂きますから――』
　腰繩を打たれたまゝ、惜しさうに、路傍の柳の下に、面桶と丼を置いた乞食、前後を取りまかれて番所の方へ歩みます。
　――言ふまでもなく、この乞食は、辨慶堀食違で、彦根大老をねらつた森五六郎なのですが、以前重代物を仕込んで置いた竹杖は、その後人目に觸れるのを怖れて隱してしまつたので、



奪ひ取られた杖には未練はないのです――それゆゑ、甘んじて相手に渡したものゝ、ふところ深く肌身はなさぬ、頂戴の飛龍――これが役人に見出されたらおしまひです。
　五六郎にすれば、目明し、手先きどもに油斷をあたへて置いて、打ち倒して逃げる心算――
　ところが、人通りの途切れたところで――と、圍まれたまゝ歩いてゆくうちに、ふと、うしろから薩摩訛りの聲で呼びかけるのが聽えました。
『これ〳〵目明し――鳥渡待つて貰ひたい。』
『誰れだ？』
　と、秀造、目明し――待て――と、だしぬけに呼び止められて、むかッ腹を立てゝ振り返へると、背の高い、肩の怒つた、

大髷の浪人者――

『へえ、お呼びになりましたは私で？』

仕方なしに、秀造が答へる。

『ウム、ちよいと待つて貰ひたいのだ。』

と、浪人者はヅカ〳〵と近づいて、

『外でもないが、その方に折り入つて頼みがあるが聽いて貰ひたい。』

『何でムりますか――只今、こいつを御用辨にしましたところで、番所まで急がねばなりませぬが――』

秀造は薄氣味惡さうに小膝をかがめます。

『實は、その方が今引ッ捕へたそれなる乞食じや。それを、この方にゆづツて貰ひたいのだが――』

『えッ！　この乞食を？　それは又、變つたお言葉？』

と、さすがに、秀造はびつくりしました。

浪人者は、皺枯れた調子で、

『名を出せば君侯の恥ぢになるから申せぬ。實はそれなる者はわが舊藩に於いて、是非とも入用の人物――この者を探し出すために、拙者、君命をうけて浪々、江戸中を探索いたしをつたところだ。それを、その方に傍から奪ひ去られては、拙者、歸參の道がない。一生、藩に歸ることが出來ない――それゆゑ讓つて貰ひたいと申すのだ。』

『へゝえ。では、何でムいますかえ。この乞食が、何か貴方さまの御藩にかゝはりのある人間なんで――』

『いかにもさうだ。是非とも入用の人物なのだ。』

『しかし、私も江戸市中を見廻つてをります者――怪しいと睨んで引ッ張つてゆくところを、はたのお方のお頼みだと、渡す法がないのでムいますが――』

『フーム、左樣か？　渡し兼ねると申すのか？』

『旦那、まあ、今のところは御免下すつて――その代り、番所のしらべが濟みませば――』

『が、目明し、二人の子分――氣の毒な話であるな――氣の毒じやが是非もない。』

『えッ、氣の毒とおッしやるのは？』

腑に落ちず、秀造が顏を見ます。

浪人者は、冷たく笑つて、

『是非もない。拙者、その方にこれなる人物を江戸の番所に渡されては、國元の君侯に相濟まぬ。拙者も歸參の見込みもなし、この場で腹を切る外はない――その代り、その方どもの首も貰ふぞ！』

いつた、左手の親指の腹でプツリと鯉口を切つて、

『その方どもも、女房も子もあらうが――それゆゑ、氣の毒と申したのだ。拙者とても腹は切りともないのじや。只、行きがかり――仕方がないと諦らめてくれ。』

何分にも、その當時の江戸役向には、薩摩訛りは禁物です。――義理が惡がたく、七十二文の蕎麥代が拂へぬとて、腹を切つた人間さへゐる位で、いざと言へば、自分も死ぬが、他人の命も決して奪り惜しみをしないのが薩摩ッぽうだと信じられてゐました。

――二人の子分はもう尻ごみをしてゐます。五六郎の腰繩を取つた新の手先きはブル／＼とわなゝきはじめました。

『なあ、目明し――じやによつて覺悟してくれ。』

大刀の柄に、浪人者の手がかゝります。

秀造は、その澄んだ目に、殺氣がひらめくのを見ました――

――これは冗談をしてゐるんじやあないんだ。何かわけがあるに相違ない。どうでも番所へ引くと言つたら？

秀造は考へざるを得ませぬ――この乞食がどのやうな惡黨の窶しすがたで、どのやうな名のある奴とちやんと見極はめがついてゐるなら、たとへいのちを捨てゝも召し連れてゆかねばならぬ――しかし、言はゞ、自分の見込みで、これといふ罪狀もわからぬのに叩いて見ようとするだけのこと、一身をかけるだけの決心はつかぬのでした。

『ま、まつておくんなさい。』

と、秀造はあたりを見まはして、

『そこまでおつしやるには、定めていろ／＼深いわけもございませう。幸、あたりに人もなし、では、この乞食、旦那におゆづりいたしませう。』

『ホ、ホウ、さすがは江戸ッ子！　生ッ粹の江戸ッ子！　えらいものだ！』

と、浪人ものは、薄氣味の惡い讃め方をして、

『わかつてくれて、拙者もいのち拾ひ――じやあ、腰繩をはづしてやつてくれ。』

と、言つて、通りかゝつた二挺の辻かごを目に止めると、呼び止めて、乞食すがたの五六郎を押し込んで、自分も後のへ乘つて、行衞も知らずなつたのです。

その夜、三田、薩摩屋敷、有村俊齋の小屋の中で、相對する主客三人――

それは、久しぶりで乞食すがたを脱ぎ捨てゝ、借着のサッパリした小袖の五六郎、主人の俊齋――その弟、治左衛門――五六郎召捕の危急を助つた浪人者でした。

『何もかも、有村うぢのお情け――すでに短氣を起し一大事を

引出さんとしましたところ、思ひも寄らぬ御助勢――辱なうムる。』

と、五六郎。

治左衞門は磊落に、ちよいと頭に手をやつて、

『肉親の前にては、ちと申し憎いことであれど、火焔玉屋（吉原）にて遊興いたし、流連と洒落ての歸るさ、岡ッ引き共に引かれる乞食、どうも森うぢに違ひないと、近づいて見ると案の定――さては食違ひの砲發以來、なほ大膽にも江戸に忍び、大老を狙つてをられたると、義膽に感じ、無理押しの差出口――あの無理が通つたも、結句貴殿の忠節を、天地が感じての事でムらう――さら〳〵拙者の力ではムらぬ。』

『それにしても、森うぢ。』

と、俊齋が、

『貴殿もこれまでお一人にて、さま〴〵苦心を重ねてまゐられたが、今後は、心强うお働きが出來るでムらう。』

『え、心强く――』

『實は、同志一同、貴殿の行衞を是非とも探ね出し、お知らせして喜んで貰ひたいと存じてをつた次第――と、申すは、いよいよ、水薩兩藩、この頃、堅く合體、かの奸雄井伊直弼を江戸で暗殺すると同時に、大阪表にて義兵を擧げ、東西呼應、一擧に大事を決さうと言ふことに評議一決してムる。』

と、いふ治左衞門の言葉に、五六郎は瞳を輝やかしました。

『お、では拙者が、社に寢ね軒に臥してをる間に、そこまで事態は發展いたしてムるか？』

『いかにも、今に無二無三、やるところまで行る外はムらぬ。薩摩は大久保市藏うぢが牛耳を取り、水戸は、金子孫治郎先生の指導の下に、それ〳〵機密が運ばれてをります。恰度、この治左衞門、明日にも江戸出立、水戸に同志を尋ね、打合せをいたさうとしてゐたところ――いかゞでムる？　貴殿も久方ぶり御鄕里を見てまゐられたら――』

治左衞門のすゝめに、五六郎はうなづきました。

『言ふまでもなく拙者とて、同志と共に働きを致すに越したことはムらぬ。そのやうな情勢ならば、くはしいお指圖を、金子先生からお受けもしたく、水戸へお供をいたしませう。』

――こんなわけで、思はぬ危難が緣となり、不思議な人に助けられ、森五六郎、義擧の一味に加はるために、久しぶりで鄕國水戸を指し、治左衞門とも〴〵下つてゆくのでありました。

積怨積雪

さても、時は移つて萬延元年となりますと、水戸勤王派の意氣はます〳〵昂揚し、攘夷の詔勅を返上するやうにといふ幕命が藩主へ下つたと洩れ聽いた人々の激昂は、もはや抑へ難くなつてまゐりました。

——すべてが彦根の仕業だ、彼をこのまゝに置くときには、ます〳〵朝威を輕んじて、遂には北條氏の故智にならひ、將軍をさしはさんで天朝に迫り奉るが如きことをせぬとも限らぬ。——いな、もはやその萌しは見えてゐる。天下の爲め、奸雄斬るべし！　一日を伸すことは一日だけ國家を危機に導くばかりだ。

と、いふやうな議が、いよ〳〵實行に移されることになります。そこで上方方面へ出向いて、薩派と事を擧げるために、宿老高橋多一郎、庄左衞門父子その他を殘して、金子孫次郎は總大將の格、靜神社の神官齋藤監物、關鐵之助、岡部三十郎、廣木松之助、稻田十藏、增子金八郎、海後嵯磯之助、佐野竹之助大關和七郎、弟黑澤忠三郎、蓮田市五郎、廣岡子之次郎、山口辰之助、鯉淵要人、森山繁之助、杉山彌一郎、それに五百石馬廻の家柄に生れた森才四郎　弟の森五六郎——以上の人々はめい〳〵心で妻子に別れを告げ、故郷の山河も今日を見納めだと、お城の方を遙拜して、あるひは浪人體、醫者體、町人體、めい〳〵に變裝し、きびしい幕府の用心の中を、江戸を指して別れ〳〵に出てまゐりました。

江戸でしば〳〵の同志の密會、義擧の日取りは三月三日、上巳の節と定まり、金子、齋藤その他が參謀となり、水藩の外、薩摩の有村治左衞門が加はつて、先鋒、かご脇左の攻手、右の攻手、陣懸り、陣退き、事後役宅への訴人など、手筈をいよいよとゝのへて、東西兩義擧の總師金子孫次郎を殘した他の十八士は、當日の昧曉、折しも降りしきる雪を衝いて、芝愛宕山での勢揃です。

この櫻田大壯擧の前後の狀態については、こゝに諄々しく書く必要もありますまい。作者の如きもその一端をすでにしばしば筆にしてをりますが（例へば、キング所載『犧牲壇の女』の如き）しかしこのかご脇左の攻手の先頭は、森五六郎で、例の飛龍を井伊大老乘物に向けて一發打ち込むや、大刀を引き拔いて、敵ながら健氣にも拔き合せて主の大事と防ぎ戰ふ、彦根方の壯士と斬り結びました。

最初に彼を左右から迎へ擊つたのが、供廻りの吉田大助、水谷采女——いづれも井伊家名うての劍者で、

『おのれ、狼藉者！』

と、拜み討ちに來る吉田——

『何を！　奸賊の犬！』

と、ジーンと受け流した五六郎、返へす刀で吉田の顎から頰へ斬り上げ、つゞいて、後ろから無言で襲つた水谷の刀を、着付の肩先を少し切り裂かせたゞけでかはして、

『來い！』

と、言ひざま、敵の太刀と强引の鍔責、グイ〳〵と押しつけて、突き飛ばして置いて、唐竹割に割りつけました。

水谷はそれなり、積雪に血をしぶかせてのけぞります。

五六郎が、この戰ひで相手にしたのが六人――いづれも斬り伏せましたが、その身に受けた傷は、大したことではありませんでした。

事の序でに申しますが、當時この壯擧を目擊した人々が書き殘したところを見ますと、戰鬪は大凡十分間位の間に濟んでしまつたので、切り結ぶ人達は、世の恒の眞劍仕合のやうに、間隔をへだて、相手を測つて太刀打をするやうな事はなく、行き當り次第に、顏と顏を衝き合せての亂擊――見る目も怖ろしく、毛髮ためにそば立つの感があつたと申します。いかにも、その位な決死の意氣がなければ、將軍居城の濠外――

しかも當の井伊家と目と鼻の間で、幕閣の大老を白晝襲撃し、首尾よく首にする程の働らきは出來なかつたでありませう。

さて、五六郎、必死に斬り結んでゐる中に、有村治左衞門の聲で、

『奸賊、首尾良く打取ツた！』

との大聲が聽えますので、もはや逃げる敵を斬る必要もなく、血刀を高く擧げて喊聲を合せると、側に働いてゐた大關和七郎、森山繁之助、杉山彌一郎——この三人と一緒に、亂髮亂鬢、血に染つた行裝のまゝ、細川越中守屋敷を指して自訴するために悠然と歩み出しました。兼ねてこの四人は、細川家へ事後の屆けに罷り出る手筈になつてゐたのであります。

その道々、お互に義擧の成功を祝し合ふ外他事もなく、格別感情を顔に現はしもしませんでしたが、ふと大關和七郎、森五六郎をかへりみて

『森うぢ、待てば海路——貴公も、例の小金井の本陣以來、さま／＼な苦心であつたのう。』

『イヤ、あの節はひどくお困らせいたしたな。しかし、われ／＼は世界一の仕合者だ。あの晩、博浪沙の故事なぞ、貴公へ謎を申したのを覺えてゐるが、荊軻、豫讓——唐人どもは望みを果したものも稀ないが、今日のわれわれにもう思ひ殘すことはないな。』

吹雪はいくらか止みかけて來ました。一行四人、細川侯門前に差しかゝり、門番に、

『拙者どもは水戸浪人、存じ依る旨あつて只今櫻田門外に於いて、井伊中將の首級申し受け、お屆けのため罷り越したもので厶る。御重役へよろしう。』

と、申し入れます。

細川家はもとより武を以つて鳴る家柄、ことに美擧には緣があつて、赤穗事件當時も、首領大石良雄以下を預つた經驗があります。すでに、今日の大事變をつい近間の出來事で知悉してゐた門番、身分は低いながら、熱誠をこめて一同に會釋して、

『これは〳〵御丁寧な御挨拶、早速重役に申し入れます間、まづ、門內にお通り下されお待ち下さいますやう。』

細川家のその時の留守居役渡邊市郎右衞門は、名だたる謹厚の士、櫻田の志士が訴へ出たと聽くと、早速、藩の記錄をしらべて、赤穗義士あつかひの場合と同樣の待遇をあたへることに決心しました。

早速、館の一間に一同を招じて、市郎右衞門から丁寧な會釋があります。その時、一同は、ふところにして來た斬奸狀を差し出します。これは齋藤監物の筆に成るもので、忠誠の熱情、惡を憎むの激昂が汪溢し、同時に當時の時弊を適切に道破した名文、こゝろみに引用して見ませう。

×

外夷浦賀へ入港以來、征夷府に於いては、事務を變革し、武備を嚴にし、直ちに膺懲の師を起し、皇國の盛威を振張なすべき職務にありながら、當時の有司等專有を口實として、一時諸安異戰の情より、彼が虛喝の勢焰に恐怖し、交易和親登城拜謁をも差し許し、條約を結び、踏繪を廢し邪教を信じ、漫りに外夷に地を裂いて貸す。實に神國古來の聖典を穢し、國體を辱かしめ、祖宗の明訓孫謀にもとるのみならず、勅許を得ずしてかくの如きの政をなすは天朝を蔑視するより起る。是れ皆大老井伊直弼の致す所の者也。將軍家御幼年なるに依り自己の權威を振ひ、公論公議を忌憚し天朝幕府を補けんとする親藩、或ひは公卿、或ひは諸侯、その他普代に到るまで、我意に應ぜざるものは、退隱又は禁錮す。故に外夷は彌ゝ跋扈し、內憂外患旦夕に迫り、皇國の存亡近きにあらんと、畏くも聖慮を惱まさせられ、是れに依つて朝廷には內國治平公武合體し、彌ゝ昇人の基を立てさせられ、外夷の侮りを受けざるやう遊ばされたしとの叡慮にて、嚮には水戶公に內旨を下し賜りしを、幕吏等遮りて、强ひて內旨を朝廷に還へさしめんとす。又この事に關係ありし靑蓮院宮及び近衞、鷹司、三條の三公をも、或ひに落飾或ひは幽閉なし、甚しきに到りては廢帝の說を稱へ、既に禍を釀さんと欲す。豈天下の國賊ならずして何ぞや。今、この暴橫の國賊を捨て置く時は政體を亂し、外國のために大害を生ぜんは眼前の事にして、實に天下の安危に拘はるを以つて、痛恨流血默し難し。是れに依つて我等天誅に代り大老井伊中將を斬戮する事斯くの如

し。何卒此餘は幕府の政治を正道に歸し、先王撫夷の正誼に基し、天下萬民を富嶽の安きに居らしめんことを願ふ。聊か報國の爲めに微忠を表し伏して天地鬼神の照覽を仰ぎ奉る。頓首。憂國慷慨の士。

×

さて、森以下の四人は、當分細川家預けといふ幕命が下りまして、同家では懇切丁寧、曠古の志士を遇するに吝かな點もなかつたのですが、いよ〳〵志士めい〳〵を引き出して吟味といふことになりますと、何が扨て、當時の役人有司、井伊大老の息がかゝつたものが多く、その調べ方は執拗酷薄をきはめたものでありました。

森五六郎も、いよ〳〵初調べの日が來て、調所に引き出されますと、上席は、寺社奉行松平伯耆守、つゞいて町奉行石谷因幡守、勘定奉行池田播磨守、評定所止役吉田庄太郎等が、列座して、威儀いかめしく見下してゐます。いはゞ現今の特別裁判といつたやうなわけなのですが、五六郎、怯れ惡びれる色もなく、訊問のまゝに斬奸狀の内容を一そう強調して、判官の叱咤にも少しもひるまなかつたのです。

ところが、列座の一人池田播磨守が、ふとしみ〴〵とした調子で言ひ出したのでした。

『何がさて、その方仕業は、天下の爲め良からぬことにはきまつてをるぞ。さりながら士はおのれを知るもののために死す――まして主のためには一身を投げ出すが家來の本分じや。今度のこと、定めしその方主人は感じ入つてをるであらう。天晴れ、水戸殿は忠臣を持たれたな。』

この言葉は、ひどく物やさしく、同情に充ちてゐるやうであります。

が、五六郎はジロリと見上げたまゝ返事をしません――

『のう、主の志を果した上は、八ツ裂も甘んじるその方どもの氣持、重々汲み置くと申すのじや。』

『お言葉では厶るが、拙者には貴慮がわかり申さぬ。何をお汲み取りなされると申されるので厶るか？』

五六郎が、空うそぶいたに無理はないのです。池田奉行の今の言葉は、いはゞ誘導訊問といふ奴で、

『お言葉おそれ入る。』

なぞと、捲き込まれて禮でもなせば、

『しからば、今回の事は、水戸隱居の意を繼いでの事であるな――』

と、押しつけて、累を齊昭にまで及ぼさしめようとする判官等の下ごころなのです。

『イヤ、水戸御隱居も宿敵をその方どもあやめ參らせたに依つて、定めてよろこばれての事であらうと申すのだ。』

『元主人の存慮のほどは、拙者なぞのあづかるところではムらぬ。』

『イヤ〱さうではあるまい――』

と、石谷因幡守が傍から、

『すべて陪臣が事を擧げるには、主人の意を繼いでこそ、はじめて忠義の名を千古にとゞろかす。赤穗のためしがそれじや。萬一、その方ども、主意をうけずして事を起したとすれば、それぞ逆臣、謀反人、强盜夜盜の類に落ち、汚名を殘す外はないぞ。のう、われわれは、その方どもの武名を惜しんで訊ねるまでじや。』

『事も愚かや、石谷殿。』

と、五六郎は、昂然として笑ひました。

『壯士一たび志を立てゝ、白晝劍戟を振つて大臣に迫る――名の、後の世の、そのやうなわたくし事にこだはつて、何で事が遂げられませうや。いや〱奉行方には、何とかしてわれ〱の口より水戸隱居の名を出させ、韜晦を廢し邪教を信じ、彦根殿の敵討でもなさりたいのでムらうが、拙者に限らず、今度一擧同志の輩は、そのやうな手には乘り申すまい。いづれも方は御大身、御家來も多いことでムらうが、お言葉にて、御家

OCT 21

風の程も察せられる。水戸、薩摩には、そのやうな迂濶な家來も浪人も厶るまい。』

そして、固く口を結んだまゝ、一言も陳じないのでした。

奉行どもは、一布衣の暗殺者、森五六郎に言ひはづかしめられて、口惜しかつたには相違なかつたのですが、烈士の志、奪ふべからずと知つたと見えて、さすがに拷問沙汰にまでは及ばなかつたのです。

× ×

櫻田の義徒、一二身を隱しおほせたものをのぞくの外、もとより大老を府内に斬害した事ゆゑ、當時の法に依つて、あまさず小塚原刑場の露と消える外はありませんでした。江戸の事にあづからなかつた、金子、高橋その他も、それ〴〵刑戮せられて、屍を溝壑に曝したのでありましたが、その烈々の忠誠、皎々の義心は、死後年を經て光芒ます〳〵輝やき、遂に明治大帝御手帖に、哀惜の御叡慮を記させらるゝの光榮をすら辱うし、贈位、合祀、あらゆる盛譽に浴して、永久後人のために範を垂れるのであります。噫、誰れか白晝大臣を斬るを以つて、漫に暴擧と無みするものぞ。上下抑塞して、

奸姦志を逞ましうするとき、義烈の士立つてこれを斬除す、これ妖雲を排して天日を萬生に光浴せしめんがためのみ！けだし、王者の劍は民を撫づるを旨とするか？義士の劍は破邪に於いてその光輝の最も陸離たるを見ると做す、筆者のみであるだらうか！

（此の項了り）

作者附記―次回は、かねてお約束の『桂小五郎流泊篇』をと思ひますが、或ひは埋れた烈士を選んで御紹介するかも知れませぬ。この點御了承を。

コント

櫻滿開

正木不如丘

醫者と云ふ商賣は人知らぬ苦勞があるものだ。某月某日所用あつて汽車に乘る。二等車の客を何の氣なしに見廻して冷ツとした。新婚の夫婦が乘つて居る。新婦は最近迄肺が少し惡くて診察して居た人だ。新婦と視線がチラと合つた。その瞬間新婦の顏に困惑と憐れみを乞ふ表情のあるのを醫者は見落さなかつた。

『大丈夫ですよ。御心配なく。』

と云ふ氣分で、醫者は新婦に目くばせをした。その時醫者の記憶が蘇つた。

『先生、結婚はまだ早いでせうか。』

『まだいけませんね、姙娠なさると心配ですからね。』

ほんの一月前診察室での對話なのだ。

『決して旦那さんには話はしませんよ。』

と云ふ表情で、醫者は又新婦を見てから、未知の人の樣に知らんふりをして、新聞を讀み始めた。其處へつか〳〵と新郎が近づいて來た。新聞から目を離した醫者はハツとした。

新郎はスツと醫者に向つて腰を下して小聲で云つた。

『先生、しばらくでした。どうぞあの時の事は秘密に願ひます。』

醫者はます〳〵狼狽した。秘密とは？全く分らなかつたが、とにかく小聲で、

『大丈夫です、御心配なく。』と答へた。

新郎は立つて新婦の傍へ歸つて何か小聲で話し始めた。それを見た時、醫者は始

偉人名家曰く集

○カーネギー曰く

人を使ふには三つの心得が必要である。第一はその使用人の手の勤めを要求し、第二に頭の勤めを要求し、第三に心の勤めを盡さしむる樣になさなければならぬ。

○三浦梅園曰く

足の皮は厚きがよし、面の皮は薄きが良し。

○バーナード・ショウ曰く

中才は肩書によつて現はれ、大才は肩書を邪魔にし、小才は肩書を汚す。

○アランツオ曰く

古木は焚くに宜しく、古酒は飲むに宜しく、舊友は信ずるに宜しく、古書は讀むに宜し。

○王陽明曰く

志立たざれば、舵なき船、轡なき馬の如し。

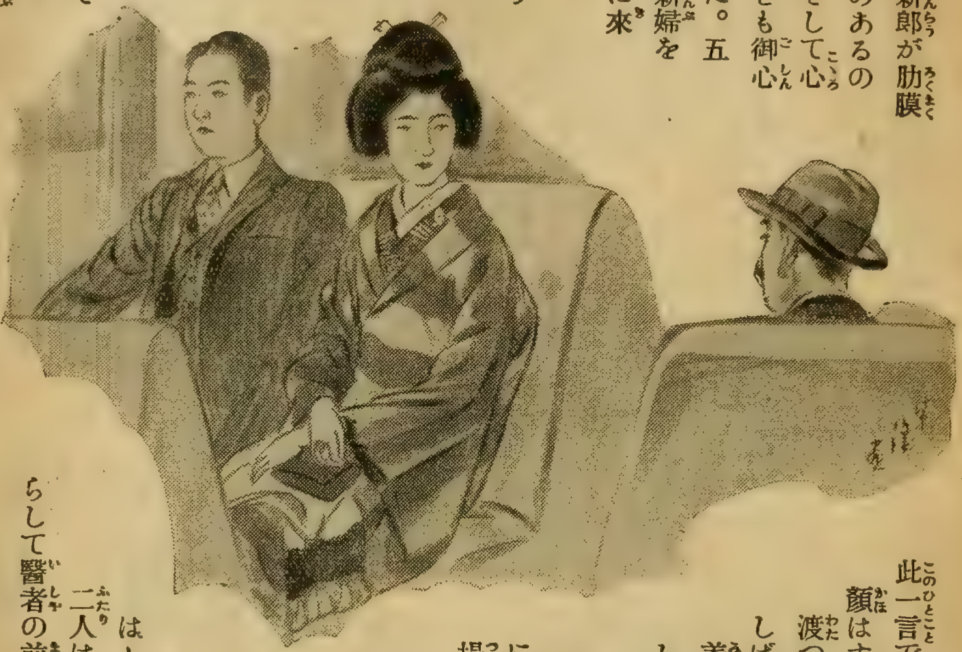
○ナポレオン曰く

OCT 21

めて二年前に此新郎が肋膜炎で入院した事のあるのを思ひ出した。そして心の中で『お二人とも御心配なく。』と云つた。五分程して新郎は新婦をつれて醫者の前に來た。

『家内です、どうぞよろしく。』と云つた後、新婦を見て『二年程前に流感で先生に大變お世話になつたよ。』と云つた。醫者は新婦の顏に不安の浮動するのを見て朗らかに云つた。

『奥さんはお丈夫さうですな。』



此一言で新郎新婦の顏はすつかり晴れ渡つた。醫者はしばらくぶりで美事善行をなしとげた樣な氣分になつて、朗らかに窓外の櫻の堤を見た。

『今日が滿開ですね。お二人をうらやましくなりましたよ、あはゝゝ。』

二人は頰に紅をちらして醫者の前を去つた。

○マーテン曰く

勝利は唯だ汝の精力如何にありて、兵器の如何にあらず。

成功者は即ち好機會に遇ふ毎に、之を利用する所の人なり。

○德富蘆花曰く

其の所を得ぬ總理大臣と、その處を得た小學敎員と何方が幸福だらう。

○エマーソン曰く

世上の事は不倒翁に似たり。何れの方向に轉がるも、結局は必ず正位に返る。

○荻生徂徠曰く

志なき者は聖人も如何ともすること莫し。

○ラスキン曰く

景色を愛する者に惡人なし。

○乃木希典曰く

破れた着物を其のまま着てゐるのは恥だが、其處を繕つて着てゐるのは恥でない。

長篇小説　晴曇

久米正雄
大橋月皎畫

戀人幸子を黒田に奪はれた辻村は、其黒田に懐姙の身で捨てられた房子を、同情から我妻としたが、これに傷心した房子は、異常な難産で男兒を分娩した末、遂に不歸の客となつて了つた。引違へて新婚旅行から立戻つた黒田は、辻村の寄越した其由の通知狀を見、流石に愕然とする。折も折或人の忠告から、事件の概略を察知した幸子の父の斯波氏は、黒田を一間に呼んで事實を訊した上これを幸子にどう處置する積りかと問うた。黒田

は蒼白な面持を上げて、「一切を白狀して、然る後に幸子さんの裁斷を仰ぎます。」と答へる。
(前號迄の梗概)

裁斷

「――お父さま。此方でお招びでしたの？」
幸子は、父の書齋の前で、さう聲をかけた。――中に、もう良人の欣哉と、父が對坐してゐるのを、はつきり感じ乍ら。……併し又その對坐が、厭に靜かなのと、又自分を呼びに寄越した用向が、果して何であらうかを、怪訝に思ひ乍ら。
「あゝ幸子か。――お入り。」
父の太いバスが、重く響いた。――いよ／＼尋常ではない、何か二人で、家訓でも云ひ渡されるにしては、空氣が少し陰欝過ぎる。……
幸子は、障子を開けて、中へ入つた。――中には、果して和服姿の欣哉が、陶火鉢を前にしてゞはあるが、父と對ひ向つたまゝ、下を向いてゐた。
彼女はちつと、先づ欣哉を見た。が、彼は彼女が入つて來た時、ちらと眼

を上げて、眩しさうに一瞥を與へたきり、下を向いて、再びは彼女を見なかつた。

『どうなすつたの？――お父さま？　何の御用なの？　お二人とも妙に默りこくつて？』

『幸子。』父が少し潤んだやうな、慈光に滿ちた眼を上げて、靜に云ひ出した。『お前を呼んだのは外でもない。實は此の欣哉君の事に就いて、少し折り入つて相談したい事があるんだ。』

『まア、どんな御相談ですか？』

幸子は、坐り直した膝を、父の方へ向けた。――ちらと横目で、蒼白に沈んだ欣哉のを顔見やり乍ら。……

『いや、その話は、儂より欣哉君から、直接に聞くがいゝ。――なアに別段、大した事でもないが、棄てゝも置けない事なのでな。』

父は、稍〻空氣を寛和するやうに、さう付け加へた。

『幸子さん！』それに勢を得たやうに、欣哉は靜に

渇びた聲で云ひ出した。「貴女は先刻、辻村から僕の所へ來た、手紙を御覧になりましたね？」

「え丶、拝見しました。――あの房子さんが、子供をお産みになつて、そしてそのためにお亡くなりになつたと云ふ、お知らせの手紙でせう？」

「え丶。さうです。――そして其時、貴女は何とか仰有いましたね？」

欣哉の告白の段取りは、自然に上手くついてゐた。

「え丶、云ひましたわ。――念のために、まさかその子が、貴方の子ぢや無いでせうね、と。……」

幸子にも、今、段々朧ろげ乍ら、彼が何を云はうとしてゐるかゞ、分つて來た。分つて來ると共に、彼女の頬の血は、見る〳〵心臓の方へ吸はれて行くのを覺えた。

「ところが、其時僕が云つた答は、あれは噓だつたのです。――その子は、どうやら私の子らしいのです！」

「まア！　さうですか？　……では矢つ張り……？」

幸子はさすがにすつかり蒼白になり、眼だけ激情に輝いて、さうかすれ〳〵に云つた。

『さうです。僕と房子とは、前に關係があつたのです。そしてそれを振り棄てゝ、貴女と結婚したのです。』

『……だから、どうだと仰有るんですか？』幸子の頬には、蒼白い理性的な、不思議な微笑がちらと浮んだ。

『私、その位の事は、もう疾うから察して居りましたわ。』

『え？　それぢやア貴女は、私の過去の罪は、許して下さると仰有るんですね？』

欣哉は、思はず膝を飛立たせて、さう眞向に對つた。父は、猶更思ひがけない顔で、二人を交る〲見比べ乍ら、默つて聞いてゐる外無かつた。

『欣哉さん。もう私たちは、そんな過去の事なんぞ、許すも許さないも無い間柄ぢやなくつて？　そして私は、貴方が何故そんなに、そんな嘘をお吐きになつたり、お匿しになつたりするのかと、それを只お恨みに思ひますわ。……貴方はまだ私を、信用してゐなかつたのね？　ほんとに愛してはゐらつしやらなかつたのね？』

『いえ、決して。……決してそんな事はありません。只、僕は、萬一、萬々一を怖れてゐたのです。怖れ過ぎてゐたのです？』

『まア、萬一でも萬々一でも、貴方は私たちの仲が、そんな事位で毀れたり、崩れたりするやうな脆弱なものだと、お思ひになつてゐらしたの？』

『いえ、決してそんなものとは思つて居ませんが――』

欣哉は且つ恥ぢ、且つ喜んで、只、そんな風に云ふのみだつた。

『そんなら、もう少ししつかり決心して頂戴。私たちはもうどんな事があつても、離れられないと。そしてもうどんな事があつても、二人一緒になつた事を、後悔してはならないと。――だから、貴方はそんな過去の罪を感ずる代りに、丁度いゝ機會ですから、改めてお父さまの前で誓つて頂戴。――過去は問はず、是から將來、いつどんな事があらうと、私が貴方を選んだ事を、決して後悔するやうな事が無いやうにすると。』

「勿論です。それは僕、一死を賭しても、貴女に後悔させるやうな事は致しません。」

「ほんとに誓つて心配は掛けないわね？」

「え〻、云ふ迄もありません。――誓つて。誓つてそんな心配は掛けません！」

「どう、お父さま？」幸子は父の方を向いて云つた。

「是でい〻でせう。」

「ふうむ、成程な。」父は思ひがけぬ、圓滿な解決に感服して呻つた。「結構だ――お前もなか／＼悧巧だな。知らせる前はどうなる事かと、儂まで心を痛めてゐたが、禍を轉じて福としたお前の所置は、なか／＼偉いぞ――ぢやア二人とも、其積りで仲よく暮して呉れ。」

「難有うございます。」

欣哉も心から頭を下げた。

「だが、お前たちの方はそれでよくつても、まだもう一つ、解決しなくちやならん問題が殘つてるぞ。それはどうするんだ？」

父が注意した。

「は？」

「何ですの、お父さま？」

「それはあの子供だ。――子供はどうする。」

「さうと決まつたら、その子は私が引取つて、大事に育てますわ。――だから欣哉さん。それだけは貴方の責任として、一つ、辻村さん所へ行つて、子供を引取つて來て下さい。」

（つゞく）

（作者附記）今月は、此の重大な危機に際し、頭腦甚だ惡く、嘗て無いスランプに陷つて、是だけしか書けませんでした。讀者の期待に背く事甚だしいのをお詫びします。一つは、小說中の事件が餘り重大な問題に逢着したので、私の手に餘つたのでせう。作者自身、此の春先の空の晴曇、定り無いのには悲觀して居ります。しかし、大いに英氣を養ひ次回には充分に書く意氣込みです。

歸朝された鶴見祐輔氏の二大名著

一年有半歐米を遊歷して歸朝せる鶴見祐輔氏は、思想家として雄辯家として又、名文家として盛名を馳せてゐます。氏が渾身の熱血を注いで著せる二大名著『母』と『子』は、我が國の代表的大理想小說として最近英譯にまでされ外國でも大評判です。我が讀書界では空前の大歡迎を受けてゐるのは勿論、是非御一讀をおす〻めします。（『母』定價二圓送料十二錢『子』一圓八十錢送料十四錢　本社發行）

明治の大兇盗

五寸釘寅吉とはこんな男

岩崎榮

犬が吼えて、五寸釘寅吉が私の家の玄關に訪れた。

この一月十二日の午後七時頃だつた。私が後架にはいつてゐると、取り次ぎの者が扉の外から『五寸釘寅吉こと西川寅吉といふ老人が見えてゐますが……』

『ほう！』と聊か驚いた私は、茶の間へ通すやうに命じて置いて、悠々と殘りの用を達した。

用を達しながら、しかし、ちよつと考へて見た。

——無事平板な文筆渡世の、私の家へ、怖ろしい過去をもつ老人が、わざ〳〵訪ねて來た。五寸釘の寅吉。明治初年の大ギャング。講談や芝居の大立者だが、私の家族、妻や子等は、もうその名すら知るまい。知らなければまた、怖れもしまい。さほどにも古い五寸釘の爺つアンである。どう云つて紹介しようかな——。

後架を出てくると、五寸釘老は、茶の間の長火鉢の前に、座布團も敷かないで、端然と紋付きの羽織で控へてゐた。さうして、その横に引き添ふやうに坐つてゐるお婆アさん。これは、八年前の出獄後に結婚したといふ、茶飲み友達だらうと私は思つた。

妻が茶を入れて現はれると、老人は羽織の裾をパツと捌いて、開き直つて、

『これは初めて御意を得まする。手前こと伊勢の産に致して、お聞き及びでもご

ざらう五寸釘寅吉こと、西川寅吉。こちらの先生とは八年以前から御別懇に願うて居ります。また、これに召しつれます婆アは手前家内……』

とおそろしく古風な、さむらひとも、遊び人ともつかない言葉で、慇懃な挨拶を述べるのであつた。

茶の間へ通る客には遠慮は要らないと思つたらしく、私の長男も、そこへ出て、おじぎをした。老人はこれへもまた、四角四面なお芝居みたいな挨拶を述べて、少年を面喰はせてしまつた。

『いやどうも、今度は酷い目に逢ひましてね先生。』

さう云つて、きれいに禿げた頭を撫でながら彼は笑つた。

伜や孫が止めるのを聞かないで『五寸釘寅吉』といふ芝居を打つて廻る一座に頼まれて自分でも、懺悔と謝罪のつもりで、幕合ひに一席、観衆に向つて、過去を自白し、かねてお詫びを申し述べたいと思つたので、貯金を三百圓ばかり引き出して、去年の秋、隠棲の故郷を出て來たのであつたが、到るところ芝居の不入りがつゞいて、一座の悲境を見るに忍びず、持つて來た金をすつかり投げ出してしまつたといふのである。

『江戸へ着いたときにや、好きな晩酌の一本も遠慮せにやならねえしまつでな。』

と、また笑ひながら頭へ手をやつてゐた。

八年以前――この老人が七十五歳で、三十幾年ぶりに、人間の眞心を、惡魔から取り戻して、この娑婆に歸つたとき、私は若い一介の新聞記者として、この怖れられ、指彈されて、誰れ一人、近寄る者もなかつた彼を訪問したのであつた。そのとき彼は無上に喜んで私を御馳走してくれた。

『出世しておくんなせえよ。わしア死ぬるまでに一度は、きつとおめえさまの家を訪ねて客にして貰ひます。』

そのとき、さう云つて彼は、永い兇悪な渡世のために、傷だらけになつた、大きな掌を突き出して、私の手を痛いほど

（筆者と面接の折の寅吉翁）

握りしめたものであつた。

八年の時が流れた。

——五寸釘の爺さんはまだ健在かしら？いやとつくに死んだらう！いま一度逢つて見たかつたが——

折にふれては、私は彼をそんなふうに想ひ出してゐたのだつた。

『一度はお訪ねすると

約束しといたが、こんな御難を食つた旅でお訪ねしようたア思はなかつた。御子息に土產も買つて來られねえ始末さ。今晚鳥羽行きの切符を買つたら、きち〳〵でもう、濟アさんと二人の辨當代しきや殘らん。まア勘辨しておくんなせえ。そのかはり、來春は、花の頃にうんとお土產をもつて、泊めて貰ひにくるで。』

妻が、何か見つくらつて、酒を溫めた。

『さ、おぢいさん、突嗟で何もごさんせんけど、ゆつくり上つてつて下さいね。』

『……』

默つて妻の顏を、しばらく視つめてゐた老人の眼に、泪が光つてゐた。他人を睨むことを忘れはてた彼の老眼に——。

『ちやうど、この坊ちやんくれえな年輩だつた。わしが始めて人を斬つたのがね。』

彼は、盃を置いて、育ひ立ちの頃の環境を語つた。

伊勢の山田近在に、小賭博打ちの子として生れた彼。喧嘩で斬られた父の仇を討つんだと、自分の脊丈けよりも長い刀を引きずり出して父の敵を突き刺してから『火の玉小僧』と近郷に怖れられた。

十七の頃に、山田の町の大きな吳服屋の娘と戀をして夫婦になつた。それは娘が摘み草の歸りに、村の不良少年たちに暴行をされさうになつてゐたのを救つた緣故からだつた。

『その妻君は死んだのかね。』

『あゝ死によつた。それが可哀さうな最期で、いま想ひ出しても、どうしてもあやまり切れねえ氣持がすらアね。』

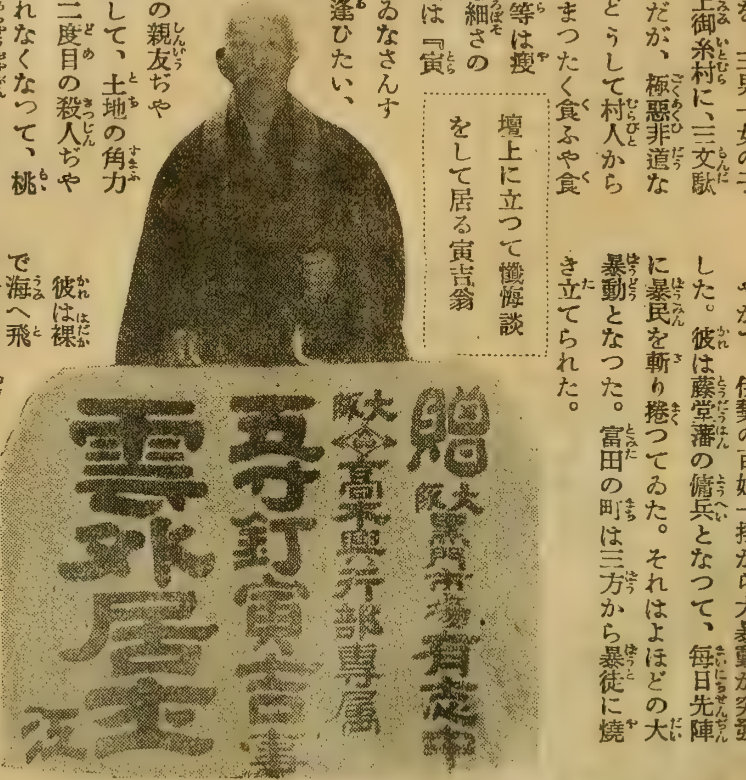
天下の兇盜と恐れられて、また日本中を彼

が逃げ廻つてゐた二十何年を、三男一女の子供を抱へて、伊勢街道は、上御糸村に、三文駄菓子の店を出してゐたんだが、極悪非道な大泥棒の妻や子として、どうして村人からの同情がうけられよう！ まつたく食ふや食はずの生計に、頑是ない子等は痩せ細つてしまつた。その心細さの細りきつたときに、この妻は『寅はん――おまへさんどこにゐなさんす――逢ひたいもんぢや――逢ひたい、逢ひたい。』と狂ひながら死んで逝つた。

『關東の綱五郎といふ、やくざもンが伊勢にゐて、私の親友ぢやつた。こいつの喧嘩に加勢して、土地の角力取り四人を叩き斬つたのが二度目の殺人ぢやつたが、それで土地にゐられなくなつて、桃の花盛りの頃を清水港の次郎長親分をたよつて、村を逃げ出したです。』

次郎長のところでよほど、肚と、腕とを拵へあげたらしい。一刀流の達人、伊東徳風について、みつちり劍道を習つたのもその頃。

やがて、伊勢の百姓一揆から大暴動が突發した。彼は藤堂藩の傭兵となつて、毎日先陣に暴民を斬り捲つてゐた。それはよほどの大暴動となつた。富田の町は三方から暴徒に燒き立てられた。



壇上に立つて懺悔談をして居る寅吉翁

彼は裸で海へ飛び込んで、沖から舟を曳いて來た。さうして、避難民を片つぱしから向ふ岸へ逃がしてやつた。そのあとで、舟の中に殘つてゐた金銀財寶を、どこへ返すあてもなく、また自分もお手當が貰へなかつたので、そのまゝそつくり失敬して、山の中へ埋めて置いて、時々掘り出しては、水のやうに費消してゐたのが世間に知れて、おかみの眼が光り出したので、彼は九州へ落ちて行つた。

九州では西南戰爭のまつ最中だつた。そこで官軍に志願して、田原坂の戰ひに、賊軍を何人も討ち取つた。

けれども戰爭がすんで見れば、やはり元のおたづね者だ。彼の生きる道は、兇惡なる世界の大立者となる以外には見當らないやうに思はれた。この邊りから彼の間違つたヒロイズムがスタアトしたらしい。

伊勢の松阪で、三井といふ分限者へ押し入つて、百人餘りの消防隊と、捕り手に包圍されたとき、屋根から飛び降りた途端、忍び返しの五寸釘を三本も右足に踏み拔いたまゝその五寸釘を拔く間もなく、三人の捕り手を投げて、三里の夜道を逃げのびてから、五寸釘の寅と、世に謳はれるやうになつた。

『何度破獄をやつたのかね。』

『北海道が二度、その他三度ばかりさ。いやその頃の私は惡魔ぢやつた。よく今日まで生

きてゐられると思ふよ。』

『隨分ヒヤリとするやうな事が多かつたらうね、白刄の下を潜つて逃げ廻る間にや。』

『白刄はちつとも怖かアねえ。腕に自信があつたからね。一生一代一番ぞつ！　としたのア北海道樺戸の監獄を逃げ出して、あの方角もわからねえ大森林へ迷ひ込んだ時だつたねえ。何しろ十日走つても、二十日行つても、山また山で、見當がつかなくなつた。木の根、草の花、土まで食つたが、二十日あまりも經つた頃にや精も根もつきはてゝお前さんのめえだけれど、泣き度くなつたよまつたく。そこんところへおめえさん！　山猫が出て來やアがつて、左肩へワッ！　と嚙みつきやがつたときは、もういけねえと觀念したねえ。』

『三十何年前に、最後の年貢を納めたのはどこだつたかね。』

『それア甲州の葡萄畑の大活劇から、武州熊谷近在を荒らしたやつが、浦和の裁判所で、缺席判決の死刑と聞いてね。丁度その頃どうしてゝ逃げられねえ人殺をやつた友人を助けるために、そいつの罪も私が引つ被つて、恐れ乍らと、自首して出たんだ。』

そのとき世話になつたのが、逸見某といふ典獄、これが非常な人格者で、ちつとも寅吉の罪を責めないで天子様の御恩、天子様の有難さ、――そんな事をしんみりと毎日說き聞かせてくれた。天子様

と、臣子の辭たるを數へられて、はじめて彼は天日を仰ぎ見たやうな氣になつたといふのである。

『なんでも神妙にして、假令百歲の年になつても生きて、今一度娑婆へ眞人間となつて出て、たゞの一年でも天子樣へ御奉公をしなきや、なんのために人間と生れて來たのか、わけがわからねえと、ほんとに、しみ〴〵とさう思ひました。』

さう云つて、彼は、私どもの前に、今更あやまる如く手を突いて、頭を垂れるの

であつた。

『監獄で三十何年の間に、頂いた金で、慈善風呂を炊いて、大阪と、名古屋とで、殺した人々のために供養しました。』

さうして、彼はいま、いとも安らかな心を取り戻して、故山に、子や孫とともに好々爺として餘生を送つてゐる。

『金が出來たら、全國を、謝罪して廻るのがわしの仕事ぢやと思つてゐます。』

そんなことを云ひ置いて彼は、十時半の鳥羽行きに乘り遅れまいために、私の家を辭し去つた。

通りまで見送つて出て、タクシを拾つて乘せて歸した妻は、あとで、

『いゝお爺さんぢやありませんか。どうしても私、惡人とは思はれませんわ。』と何度も繰返してゐた。

『やつぱり天皇陛下の お話から、いゝ人間になつたんだねお父うちやん。』

と私の長男がいふのであつた。

『さうだ〳〵、まつたくそれだよ。』

と私は子供を抱きしめてやつた。（をはり）

滑稽萬歳 娘評判記

浮世亭苦樂
香氣家長生

苦『サア、相變らず輕口掛合を一席。』長『それでは演題を令孃評判記とは如何で？』苦『ウフ〳〵結……結構だね。』長『もし〳〵、そんなに鼻の下を延しちや不可ません。』苦『サテ、最初は醫者の娘さんとゆくかね。』長『宜うがすね』苦『どうもあの御家庭は下町風がお好きで、髮もいてふ（胃腸）返しで、淨瑠璃をよくカタールと云ふさうだが、鳥渡、緣談を持ち込んでも、けつかくですが外へ廻りましたと云ふ御挨拶さ。』長『ではあの貿易商のお孃さんは？』苦『もう、結婚の取引ずみだよ』長『此れは大變簡單ですな。では、向ふの軍人のお孃さん。』苦『あの方は、このへん（近衞）でも大將ほめものでな、第一親砲工だ。それに物を云ふにも步騎してゐて氣持が良いね。』長『そいつは感心。然らば隣りの漬物屋の一人娘は如何でげすかね。』苦『ウムあの豆々しく働いてゐるお梅ちやん、親御が酸いも甘いも心得てゐるから、らつきよう（愛嬌）もよいが、納豆しても貰へないよ。』長『そりやまたどうして？』苦『ヘテ、前からいゝなづけがあるからさ。』兩人『御退屈樣！』

座談上手は一生の得

座談が上手だと誰にでも好感を持たれ、交際が廣くなる。『交渉應對座談術』はその虎の巻！ 誰方も御覽あれ。定價一圓五十錢 送料十二錢 本社發行。

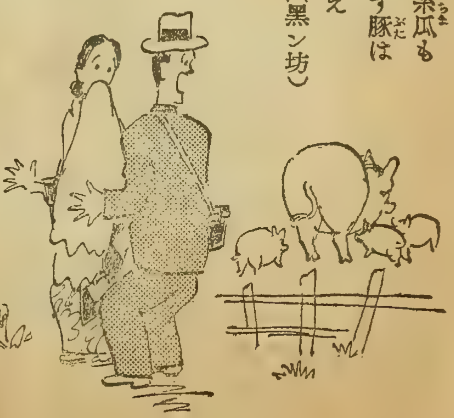
町會の
汐干狩
トラックで
歸り（たから）

無理矢理に
帽子脱がせ
りや禿げ
て居り
（龍平）

泥棒を捕まへ
た娘に嫁の口
（紫情）

一段を語り
終れば誰
も居ず
（大彌太）

衛生も糸瓜も
知らず豚は
肥え
（黒ン坊）



今日逢へる嬉しさ
ネクタイ
などを
替へ
（歩浪）

麗人もあぐらで飲むでる飛鳥山（螺雨）
チンドン屋家では叩く子を叱り（正二）
掛け食ひに勝つた大食見舞はれる（政雄）
かあちゃんは食べ過ぎたかと坊や問ひ（柳子）
小羊の様な彼女の強い肘（若蘭）
浮世川柳 素文
投句大歓迎

果然熱狂的大評判！　大增刷出來！

大江專一先生著　ルーズベルト

見よ！人氣の焦點！米國新大統領の全貌躍如！

一億三千萬の大衆の驚異的大歡迎！　有史以來空前の大就任式はそも何を意味する？　就任早々勃發した未曾有の財界恐慌、この大米國の苦惱を一身に引受けた彼の處置、さては戰債問題、國際聯盟問題、關稅會議をどうする？　果して彼に如何なる成算ありや？　全米國民の命の綱を握る彼、不況に喘ぐ歐洲諸國の運命を決する彼！

注目せよ！　重大危機に直面せる米國の動向、ギャングと爆彈の米國に君臨して、正義と協調に邁進する彼、彼こそ眞に謎の大惑星！　全世界注目の焦點である！

彼の全身を流れる烈々たる熱情は、遂に二十八歳にして州上院議員たらしめ、次で海軍次官となり、やがて世界史上空前の海軍大擴張と、かの有名な北海大封鎖とを敢行せしめた。歐洲戰後ウイルソン大統領とともに下野し、雌伏十二年！　今こゝに政治に、經濟に、幾多秕政の中に混亂せる米國に敢然と理想政治を標榜して蹶起した、これこそ人間壯觀の極みである！

（內容の一部）

△鵬程一萬五千浬　△ハーヴアード大學　△アメリカ海軍　△勞働者の友
△ルーズベルト家　△東郷大將と瓜生中將　△世界大戰　△人生意氣に感ず
△デイラノ家の血　△最年少の上院議員　△大海軍擴張　△再起不能の診斷
△母の念願　△正義の少數派　△宣戰布告　△悲痛な覺悟
△自然を愛する少年　△凱歌は擧る　△旅順口閉塞の故智　△鬪病法の秘訣
△魚釣競爭　△ウイルソンを知る　△前代未聞の壯擧　△野黨の惱み
△密偵と間違へらる　△奇計の成功　△非常時の決心　△危機を救つた電話
△兵學校入學を斷念　△私は海軍狂です　△海上の悲喜劇　△血を湧かす總選擧
△キユーバ遠征の夢　△水兵の溺死　△四面楚歌　△掉尾の獅子吼

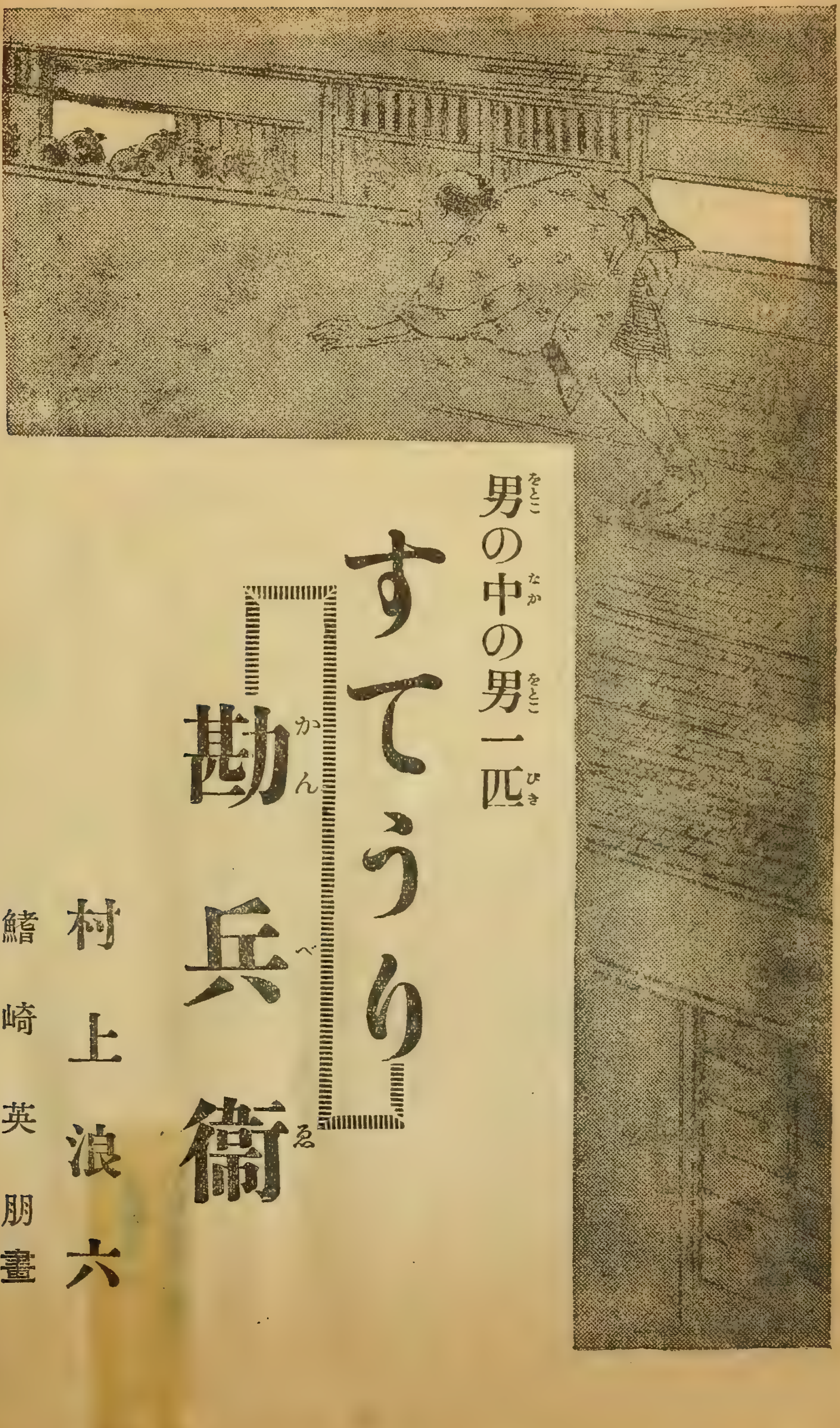
日米開戰是か非か、大海軍論者を長官とする現米國の海軍政策は果して如何？　極東問題、太平洋問題を廻つて兩國の關係愈〻機微、之こそ全國民刻下必讀の大快著！

讀者悉く感嘆激賞、一刻も早く御覽下さい

四六判布裝四百餘頁定價一圓三十錢（送料十二錢）

全國の書店にあります

東京本郷　大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）



男の中の男一匹

すてうり勘兵衞

村上浪六

鰭崎英朋畫

大晦日の前の晩、正月の餅を食ふか食へないかの境は萬年町の貧乏長屋に容易ならざる出來事で、大名のお家騒動よりも騒ぎが大きい、

餘所ながら勸兵衞の芳志、離れても元の古巣を忘れぬ長助の情で、のし餅二十枚を十七軒へ配らうとする時、どこから窺うて居たか不意に現はれた五人のため、その餅を押へられた幸助は自分だけ四枚分の殘念ばかりでなく、びッくりして飛上ッた臆病の叫びは今にも締め殺されるやうな聲で、

「サア皆、出てくれ出てくれ大變だ大變だ、或人から長屋中へ歳暮に來た二十枚の餅が空になるンだ、めい／＼に貰ッた餅だぞ、取られても宜い奴ア出るに及ばねエ」

これを聞て出ずに居る奴はない、腰の立たぬ病人まで這ひ出して、十七軒の兩側から蝗のやうに飛出した總勢三十餘人、長屋の薄明りに長さンの顏を見るや否、はゝアと感づいて、

「どッから來たッて貰ッたッて、よけいなお世話だ、なゝ何の因緣あッて幸さン、その餅を空にされるンだい」

かうなると幸助も勢ひが出て來る、

「折角こゝへ今この餅屋の運ンで來た車と一緒に女俳優が、どうの斯うのと、見當の付かねエ妙な事で威張り出した人があるンだよ、第一この餅屋が間抜けてるからだ、あすの朝でも宜いに今頃、だしぬけに持ッて來やアがッて」

なか／＼幸助も苦しまぎれの智惠が出る、そッと柔かく長助の頭を毆りながら自己の頭を突出したので、心得た長さンまた二つ三つ喰はして、

『この野郎』

『この野郎たア何だ』

兩方から疵の付かない摑み合を始めて、わい〳〵騷ぐ多勢の中へ倒れ氣味に紛れ込だが、三尺の一方口を二重に立塞いだ五人の奴、

『今の餅屋といふやつを出せ、誰に頼まれて此貧乏長屋へ餅車を曳いてきやがツた、怪しいぞ、いくら紛れ込でも袋の鼠だ、奥に遁げ路はあるめエ』

錢はなくても分相應に一理窟のある奴、乃公が居るといふ面に多勢の味方を掻き分けて出て、

『この萬年町は昔から貧乏神の氏子で江戸ぢやア深川名物の一つだ、わざ〳〵貧乏長屋と念を押すには及ばないよ、お前さン方ア全體、どツから來なすツた大金持ですね、この餅を盗まれたンぢやアありますめエ、第一また暮の餅と女俳優と、それを並べて何の文句になるンだ、のし餅は一枚だツて有難いが女俳優ア百人、ぞろ〳〵遣ツて來ても用のねエところだ、おい皆、兎も角も餅だけは手近の一軒へ入れて置て車ア、あの餅屋に返した上、めい〳〵後で分るよ、この人達は大晦日前の忙がしい中から喧嘩しに來たンでもなからうし踏殺しに來たンでもねエから安心しろ、たとひ踏殺すにしても四十人足らずだ、蟲ぢやアあンめエし、さう安々と踏殺されて堪るけエ、さアとなりやア一人に七八人づつ向ふ脛へ喰ひ付けるンだよ、はゝゝ』

自分だけになると腰は弱いが、素寒貧の多勢は氣が揃うて强い、おまけに餅の力で、うか〳〵手の出せない五人の奴、じりじり後へ退りながらも袋の口は開けない、

『おめエ達を相手にするンぢやアねエから引ツ込でろ、然し此奴等、覺えがあるだらう、一時この長屋に居た浪人もので廣小路の女芝居から中村鶴吉を盗ンで遁げた奴と、今夜こゝへ餅を運ンだ奴ア同じ穴の狸と見て取ツて來たンだ、その野郎、逃さねエぞ。』

突當りに拔け道はないと思うて居るが、その巾の狹い細長いところへ三十餘人の總出に押合うて、がや〳〵と立騷ぐ奥の方で長助の耳へ口を寄せた幸助、

『長さン屋根越だ、屋根を越えろ』

『おツと、たのむぜ』

『さア乘ツた』

背の高い奴が手を伸せば屆く低い棟割長屋で、幸助の肩を踏臺に屋根へ這ひ上りし長さン、その裏側から飛降りて、一目散に仙臺堀の正覺寺橋より二つ目への道筋を駈け出し、彌勒寺裏の入片町へ息を切ツて走せ歸るや否、

『たゝ大將、また事だ、餅車を曳いて長屋の入口へ這入ると畜生、五人の奴が覘ツて居やアがツた、やう〳〵屋根越で遁げて歸りましたが、どこまでも執念深く、うるせエ奴等だ、なアに長屋中は大丈夫ですよ、わざと總出の騷ぎで此方の味方して居ますからね』

かういふ事のある毎に眉を顰めて、はツとする鶴吉、

『わたしのため、さう皆さンに迷惑ばかり、かけるンですねエ』

勘兵衛は常よりも遲い夕飯の後で、莨の煙りを吹きながら、

『二度も三度も遣り損ツて居て、まだ懲りない奴等だな、年忘れの慰み旁ゝ、おどかしてやらうか』

『ですが大將、かうして無事に遁げて歸ツたンですから、この年の暮に、ばかりでなく萬一、もし面倒になると』

『面倒な事はない、ちよいと手輕に』

『大將の手輕は少々、凄すぎますよ』

『向ふの奴の事を心配するな、時に過日、どツか大工の眞似をするとかで錐を買つて來たな』

『買つて來ましたが錐を、どうするンです』

『その五人の奴、投げ飛すだけでは面白くなし刀で斬るほどの奴でもないからね、錐で突てやるンだ』

『はゝゝゝいくら彼奴等だツて錐で穴の明けられるまで、じツとして居ませンよ』

『いや、うまく突てやる、長助、きさま、その着物を脫げ』

『これを脫いで』

『乃公が着るンだ』

まア、あなたと呆れて、鶴吉の止めるを搔き退け、無理に剝ぎ取られた襦袢一枚の長助、

『寒い』

『新らしいのが出來てるだらう、それを着ろ』

『ありやア正月、お祝ひに改めて元日からですよ』

『この世帶に晦日も元日もあるかい』

長助の古布子を着て、古手拭の頰被りに三尺帶の尻からげ、三つ目の錐を手にしながら、

『どうだ鶴、何に見える、かういふ風は芝居の方でも役割に困るだらうな、はゝゝおい長助、幸ひの宵闇だ、そツと隨て來い、狼狽へて近寄ると、きさまも突かれるぞ』

萬年町より鬼熊の住む藥研堀への道順、大川端へ出て萬年橋を渡れば新大橋から向ふ河岸へ、兩國を渡るとすれば高橋筋から北に向うて來る奴、兎も角も正覺寺橋までと飛出した勘兵衛、其まゝ內に居れぬ長助また續いて、靈巖寺の門前町へ來た時、

『大將、この邊で待ちませう、長屋へ近づいちやア、まづい』
『さうだな、面は見なくとも凡そは分るだらう』
『五人の奴ですから間違ひませンよ、や、來たらしい、來ましたぜ大將、どこでゝも靜かでねェ奴等だ、饒舌りながら來やアがツた』
『かくれろ』
出ろといはれても出兼ねる長サン、ちよろ〳〵と鼬のやうに寺の門脇へ遁げ込で、星明りに窺うて居ると、急に醉漢の眞似をし出した勘兵衞、
『あゝ好い心持だ』
袋の鼠を取遁した五人の奴、いち〳〵兩側の長屋を覗いて見たが、影も形もない不思議さに小首を捻りながら、三十餘人の素寒貧を相手に喧嘩も出來ず、餅車の横に甲州屋といふ燒印を後日の種として、癇癪まぎれの舌鼓に引揚げて來た靈巖寺の前、

『あの長屋の奴、どうも皆、ぐるだぜ』
『そりやア分ツてるが偖、これといふ證據もねェからな』
『考へて見ると、油斷のならねェ相手だよ、盜まれた時に二人

とも氣絶さしやアがツたし、うまく出喰したと思やア馬鹿にしやアがツて、これから廣小路の女芝居を見物に行くンだと皮肉な奴だ、あの時に乃公なンか、どうして遁げたンだらう、まだ腑に落ちねエ』

『遁げたンぢやアねエよ、おもはず身體が宙に浮いて走ツたンだ、現に彌勒寺橋の上から川ン中へ抛げ込まれた工合を聞くと、やはり五體が欄干を越て夢のやうに飛だ後で、ざぶりと來たさうだ、は丶丶丶』

『なンにしても、うすツ氣味の惡い野郎だ、ぶつからずに穴を知りたいもンだな、さうすりやア網の掛けやうがあるよ』

『いつの間に鶴吉め、あンな顏をして居て、そンな物凄い色男を拵へたンだらう、一枚看板の金凾を取られて仕舞ツて相手は正體の知れねエ奴だからな、地團駄を踏で親方の口惜しがるのも無理はねエよ、第一これまで賣込だ藥研堀の面ア、めちやめちやに潰れたンだ』

饒舌りながら來た前の奴へ、よろ〳〵とした醉ツ拂ひの風で、

どンと突當りし勘兵衞、

『こら、氣を付けンか』

いくら卷舌にならうとしても、氣を付けろ盲野郎と輕く出ない、

『默ツて人に突當るといふ事があるか、あるまい、あるめエ』

透して見た目には頰被りの布子を着た尻からげで、みすぼらしい姿に高を括りし奴、

『うぬの方から突當ツて何を吐しやアがる、この端た人足め、どぶろくを喰ツてるな、素面で居りやア張り飛されるぞ』

『遠慮するな、張り飛してくれ』

『おや、此奴』

『此奴とは何ぢや』

『はゝゝ年の暮に怪我アするなよ、今夜ア御機嫌の好い乃公達ぢやアねエぞ』

『乃公は上機嫌だ、さア張り飛せ』

後から四人の奴、

『おい〳〵、そンなものに構はねエで、そツと脇の方へ退けてやれよ、醉ツ拂ツてるンだ』

『ところが野郎、身體を摺付けて來やアがる』

『ぢやア一擊ぐらゐ喰はせろ』

頰被りの横面、ぐわンと喰はした筈の握り拳、すツと外れて、振返る途端に、

『痛い、きやツ』

ちくりと臍の上に冷たいやうな氣がしたと思へば、急に痛くなりて、きやツと叫び出した聲に四人の奴、どうしたと寄ツて來た中の一人また飛び上ツて、

『きやツ』

びツくりする間も驚く間もない、わツといふ男らしい聲も出さない、きやツ〳〵と猿のやうに叫び出して、ばた〳〵と倒れたのも道理、電光石火の武道で一尺あまりの柄を逆手に握りし勘兵衛、二寸あまりの三つ目錐で一突づつの早業、其まゝ遁げ出した足音に門脇の長さン、置去に逢うては堪らない、慌てゝ辷り轉げた身體を無我夢中に走りぬいた彌勒寺橋の上、ほツと總身の溜息を漏しながら、

『大將、彼奴等、どうなりますね。』

『なアに生命に別條ない、急所を除けてやツて、細いものが二寸ばかりづつ這入ツたンだからね』

『細くツても鐵で先の尖ツたものですよ、ずぶり〳〵と二寸づつも這入りやア澤山だ』

『口が小さくツて奥が割合に深いから縫ふ事も出來ず、聊か後の療治に惱むだらう、さア長助、これで當分まア掛ツて來ないね、あゝいふ奴は犬と同じで、遠吠もしないほどに尾を卷かして置かないと、面倒だよ、今度は鬼熊といふ奴を、うまく引ずり出して、息の根を止めるも罪だから箸と茶碗を持てるぐらゐの不具者にしてやらう』

ぶる〳〵と震ひ出した長さン、襦袢一枚にされた時よりも腸から寒くなりて、

『おツそろしい、そンな色男がありますかね』

『その代り鶴には弱いぞ』

『ちえッ』

『何だ、その聲は』

『何だか知らねエが、妙な工合で自然に出たンですよ』

まさかの場合、侍は刀で人を斬るものとばかり思うて居た、が、年忘れの慰み半分に三つ目錐で五人の奴を突き倒すとは、聞いた事もない長助、

『大將、錐は』

『もう後は使へまい、この川の中へ捨てようか』

『捨てゝ下せエ、明りで見せられると、ぞツとしますよ』

一人で淋しく行燈を引寄せ、今か今かと待兼て居た鶴吉、二人の足音に入口の障子を開けて、まだ花曇りの心配顔は失せない、

『追ツかけて引止める事も出來ませンし、ほンとうに氣が氣でなく、長さン、委しく聞かして下さいよ』

勘兵衛に尋ねても、いはぬものとして聞かれた長助、

『わかりませンね』

『わからないといふ事がありますかね、何のために着物まで着替て、わざ〳〵隨て出たンですの』

『裸で出られねエから仕方なしに正月着を纏ツたンですが、實ア見えなかツたンですよ、たゞ暗闇の中から不意に、きやツきやツといふ聲だけ聞えたンで、はツと思ツた間に相手の奴、ばた〳〵ですからね、あとで聞て見て、なるほどだ』

『その、なるほどを聞かして下さいといふンですよ』

『兎も角も大將、着物を脱いで貰ひませう』

『はゝゝ乃公も着心地が惡い、萬年町で屑屋時代の持越だから、ぷンと何だか變な匂ひがするね、まだ遲くない近處の錢湯へでも飛込で來る、此まゝぢやア今夜、鶴に氣の毒だ』

ごそ〳〵と蟹のやうに遁げ出した長さン、

『また遣られた、のろけと凄味と兩方、ちやンぽンに來るから堪らねエ、わツしよりも今夜、ゆツくり寝てから聞た方が宜うがすよ、はゝゝ笑ひたくもありませンぜ』

おもはず吹き出した勘兵衛、

『さういふと、きさまにも氣の毒だな』

『ど、どう致しまして、毎度の事で、馴れて居りますよ』

『長さンは根が親切で、いふ事が面白くツて氣輕で、ほゝゝ全く好い三枚目に出來て居ますねエ』

『お手柔かに願ひますぜ、三枚目か四枚目か知らねエが、をりをりこれでも、まだ四十男だ、獨りぼツちの無常を感じま

すよ』

『何とかして、ねエ、あなた、おかみさンを、さうなると、わたしも心の置けない話し相手が出來ますから』

『ところがね、なか／＼贅澤だ、圖ぬけた美い女で年は自分の半分ぐらゐで氣立の優しい柔和な上に、うンと持參金のある相手でないと、承知してやらないさうだ』

『まア』

『いよ／＼受けきれねエ、大將、お伴して肩でも流しませう』

勘兵衞は首肯きながら、急に眞面目な顏、

『冗談はいふもンの、鶴、いつまでも忘れず恩に着て居れよ、この角の取れた丸味のある世話好きの脇師が居てくれないと、乃公だけでは眞正面に荒くなるばかりで、かうは行かないぞ、第一お前、始めて萬年町の裏長屋へ遣ツて來た時、あゝいふところには妬み半分に僻み根性の往々あるこツた、もし意地惡く邪魔でもされたら、どうする、こゝまで來ない內に相手の生捕で、それ以來、他人とも思へないほどの厄介になツてるンだ』

おもはず坐り直した鶴吉、

『それは、わたし、よく承知して居りますよ、まして東西も分らない時、あンな人の手へ子飼に貰はれて、この十九になるまで、あけても暮れても慾得のため、さンざ苦しめられて來たンですもの、實は長さンに遠慮なく、あンまり嬉しく甘え過ぎるから、つい、我まゝばかり出ますが、ふしぎの緣で、こンなものに掛り合ツたと、諦めて下さいよ』

兩手で兩方を拂ひ退けるやうにした長助、

『さう來られると此方だツて、鐵砲笊を背負ツて步いた屑屋が不思議の御緣で、その日の食ふ心配もなく浮び上ツたンですよ、めでたく無事に家を持ツた夫婦の中へは、どう考へても用のねエ野郞だ、あゝいふ譯で、かういふ事になるから、おかげで面白く、をり／＼陽氣に馬鹿げた駄洒落の一つも出るやうになるンだ、あのまゝ萬年町に居りやア、あすの大晦日を控へて借金取は來ねエにしろ今頃、生きてるか死でるか自分でも分らねエ面をして居ますよ、はゝゝ少々は狼狽へて屋根越に遁げて來たが、この年の暮あの貧乏長屋へ、のし餠二十枚を運び込だ心持といふものア大將、わツしの生涯に天下を取ツたやうな氣がしますよ』

鶴吉を振返りながら、

『また舞臺の藝を知らねエが、あゝいふ奴等を敵に受けて戀と情と行掛りの意地に搦まツた、この浮世の芝居に不器用ながら一役を勤めるかと思やア、夜の夜半でも飛び起きたくなりますよ、どこまで此奴、好い年をして、とぼけた野郞に出來てるン

でせう、はゝゝゝ』

ゆふべ萬年町へ押掛けた歸途、靈巖寺前で頬被りの醉ッ拂ひに出喰して、五人が五人とも殘らず斬られた疵でなく、ぶつり〳〵と細く深く突刺された療治に醫者も首を捻り出したが、藥研堀の鬼熊は猶更その首骨の草臥れるほどに捻り出して、相手も分らず何で遣られたか、それも分らない、

『二三度の遣り損ひは、たしかに編笠浪人の生き盜賊だが前夜の奴ア、どうしても考へが付かねェ、そンな風で醉ッ拂ッてる端た野郎に、こンな凄い事の出來る筈アなし、酒亂の狂氣に出逢ッて、だしぬけの不意に時の災難として仕舞へねェ氣もするし、あの鶴吉を盜まれてからア、ろくな事が續かねェ、寢た間も癇癪を起さしやアがる、事に依ると、やはり編笠の細工かも知れねエぜ』

その場に居合さない無事な子分三人を前にして、流石の鬼熊も思案に餘りしところへ、門口の格子を開けて一僕を召連れた武士、

『芝居興行の太夫元で、熊藏といふものゝ住居は、こゝか、是非に逢ひたい』

横柄な言葉に一人の奴が出て見ると、見馴れぬ立派な侍、

『どちら樣で』

『逢うて話せば分る、また逢うた方が身のためになると、さういへ』

ます〳〵高飛車に出られて、筒ぬけの聲を聞いた鬼熊、

『どういふ用か知らねエが、熊藏と呼捨にする人、逢ッて見よう、こッちへ通せよ』

ずッと通るや否、そこにある座布團を勝手に引寄せ、大刀を左の脇に置て、じろりと鬼熊の顏を睨みながら、

『熊藏は、その方か』

癪に觸るといふ面で、

『わッしでさア』

『なるほど、それらしい顏をして居るわい、この方は松平伊勢守の家來で、川口周藏といふもの、過日、深川の八幡へ參詣の途中、彌勒寺橋を通行の砌、不意に四五人の奴が前後を取圍み、女盜賊、俳優喰と、いやはや、けしからン事をいひ掛りに言語道斷の振舞ひ、その中の一人を引ッ捉へて聞けば熊藏、そちの子分といふ事、たとひ人違ひにせよ、其まゝで濟むと思うて居るか』

時も時、折も折柄、いやな暗劍殺が向うて來たと、俄かに丁寧な頭を下げた鬼熊、

『まことに、な、何とも申譯のない事を致しまして、私、その場に居ればで御座いますが何分、うろたへた慌て者の小屋人足ばかりで、とンだ御無禮を働きまして、お屋敷でも分りますりやア早速、おわびに出ます筈ながら』

『これ〳〵熊藏、よし屋敷が分ツて早速、あやまりに來ても、それで濟まぬぞ、實は一時の間違ひで納めてやらうとしたが、ふと同僚に漏したところ、貴公一人の汚名でない、同列の我々は固より第一は君に對して、その家來が芝居の小屋者から女盜賊とは武士の面目、どこに立つかと、もう間違ひでは濟まぬ事になツたぞ熊藏、何とするか返答次第、門口に待たしてある仲間の一走りで、おツとり刀の十餘人こゝへ來る筈ぢや』

赤面の鬼熊、急に靑くなり出して、

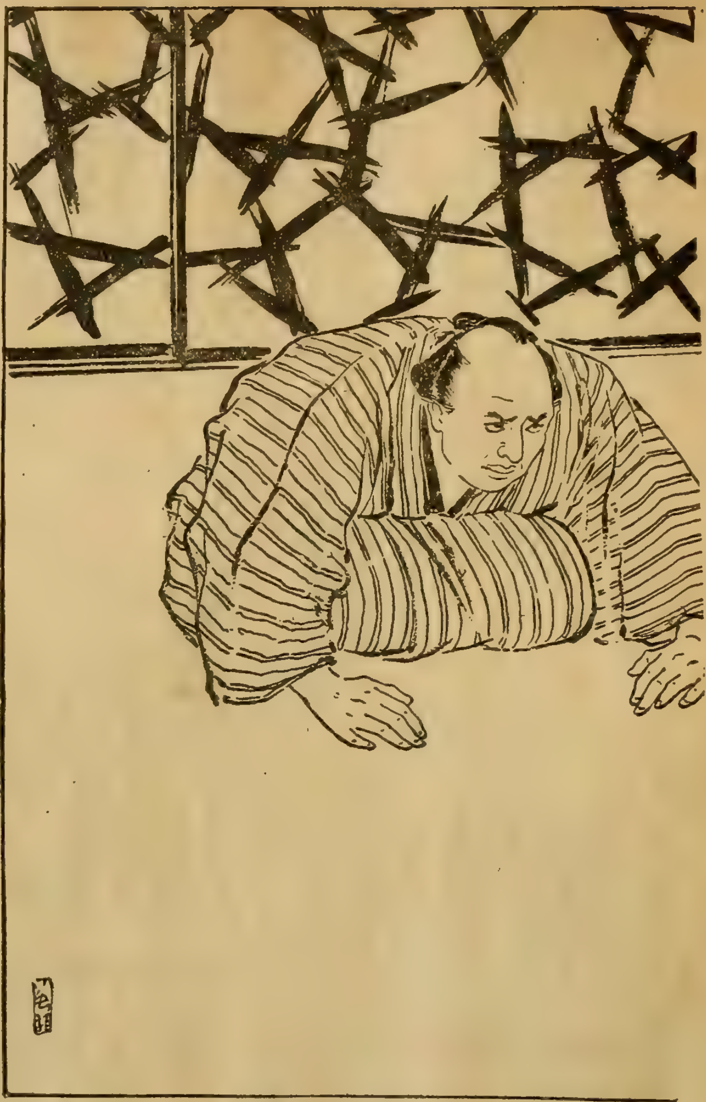
『殿樣、それは』

『殿樣でない、伊勢守の家來だ』

『恐れ入ります、實は私の子飼から育てた中村鶴吉といふ一枚看板の女俳優を盜まれました大騷ぎの最中で、血眼になツて居ります野郎共、その相手を口癖のやうに編笠浪人と』

『その浪人に何の緣も、ゆかりもないぞ』

『では御座いますが、彌勒寺橋を



御通行の節は、やはり同じ編笠を、お召になツて居られましたさうで』

『編笠は江戸市中で、一人や二人でない』

『それが狼狽へた向ふ見ずの奴等で御座いまして』

『いづれにせよ、間違ひで濟まぬ武士の面目上を、どう致す、町奉行の方へ手を廻して生涯、興行もの一切を差止めるぐらゐに輕く行けば宜いが、熊藏、ちと難かしいぞ、もはや川口周藏、一人の事でない』

興行もの一切の差止めを輕いといはれて、それを生命の綱に世を渡る奴、胴骨を碎かれたよりも、あツと驚いた面色、

『いかやうな目に逢ツて、どんな苦しい立場になりますとも、この熊藏の身に出來るだけの事で、おわびを申上げますから何卒、格別のお情を以て、お助けを願ひます』

苦蟲を噛潰したやうな顏で、腕を組みながら暫く思案して居た川口周藏、

『我々は萬一の場合、腹を切ツて申譯の立つ事もあるが、その方共は、其日々々の利慾ばかりで世渡りをするもの、さうも行くまいな』

こゝを取外しては助からない、
『御承知の通り、商賣往來にもねエ、いや御座いませン賤しい藝人仕込みの稼ぎ家業で、やッと一家眷族を養ひますもの、間違へばこそ、お武家樣を相手に、かういふ不始末を仕出來しまして』
『では熊藏、かう致せ』
『どう致します』
『あやまり證文一札』
ほッとした鬼熊、
『ありがたう御座います、あやまり證文で、すみますれば』
『すまぬところを、すましてやる、その書き方は差圖するぞ』
『どういふ文句でも、お差圖に從ひます』
『かういふ文句に書けば、不承ながら無事に納めて遣はさう、私儀、抱への女俳優、中村鶴吉の事に付、まことに申譯のない御迷惑を相かけ、わかッたか』
『わかりまして御座います』
『御迷惑を相かけ、何とも以て恐れ入り奉り候、今後この儀には毛頭、彼是と仔細らしき事を申す間敷、爲後日一札、依而如件、どうぢや』
『お宛名は』
『宛名は書くに及ばン、今いふ通り、もはや川口周藏、一人の面目でないから、その方の名と實印だけ捺して置け、うか〳〵すると身代も生命も飛ぶところであッたぞ、以後は氣を付けろ』

もう今年これが終りで、その一日を半分も消えた大晦日の晝過、入片町の門口へ川口周藏、それと見た長助も鶴吉も今は野暮固い理窟を並べる人と思はないばかりか、雨降りに軒下を借るやうな心地で、
『や、入らッしやいませ』
『さア、どうぞ、こちらへ』
『はゝゝゝ世間放れがして居て、この年の暮にも靜からしいな』
心易げに六疊の居室へ通りて、勘兵衛の顏を見るや否、
『みやげを持ッて來た、今日は面白い、みやげものを持ッて來た、鶴どのも這處へ』
『鶴と、お呼び下さいまし』
『いや、打明けたところ始めは少々、氣の合はないやうにも考へて居たが過日、あゝいふ哀れな事を聞かされて、すッかり分ッた、そッと涙の額越に拜まれた時は、まゐッた、はゝゝゝ』

懐中より鬼熊の一札を取出して、勘兵衞の手に渡しながら、
『田島、それで兎も角も、よからう、面を見てさへ人間らしくない流石の奴も、自己に間違うた覺えのあるため、まンまと首尾よく一ぱい、手盛を喰ツたぞ、はゝゝゝ宛名のないところに自由自在の使ひ道がある、中村鶴吉の事に付て今後は彼是、決して申す間敷候ぢや、わざ／＼あゝいふ徒輩を相手とするに及ばないが、もし萬一こゝを嗅ぎ出して來て蒼蠅い時の盾にはなるぞ、あやまり證文、その一札に貴公の腕があれば、もう安心、もう大丈夫、はゝゝゝまさか目の敵に覘うて居る編笠浪人の手に渡るとは思ふまい』

ふとした若氣の至りともいへぬ生涯の過まりで、相傳の君に對し世取の兄に對し一藩の朋輩に對し顏向けも出來ずに出奔した我への友情、今また世間體に晴れて妻ともいへぬ女のため人知れぬ情の賜もの、勘兵衞の目から男泣きの涙が滾れて來る、
『鶴、乃公は禮をいはぬ、禮のいひやうがない、お前こゝへ出て、この一札を篤と見た上、お禮をいうてくれ、長助、きさまも出て來い、これだ、これだ』

二人の前に廣げて置て、兩眼を閉ぢたまゝの勘兵衞を見て居れぬ川口周藏、すぐに座を立ちて、鶴吉と長助の止めるも聞かず、
『よい年を取れ、正月は七日まで御用に暇のない身、その後また來る、今度は馳走してくれよ、ついでに一陽來復の挨拶をして置く、お目出たう』

さツさと其まゝ出て行く後姿を、送り出す間もない鶴吉、まご／＼して居た長助、じツと無言のまゝの勘兵衞、いひ合したやうに三人とも互ひの顏を見合して、
『あなた、あンな時、わたしに禮をいへと、無理ですよ、何だか胸が一ぱいになツて來て』
『平生お饒舌りの此奴も、今日といふ今日は大將、いつもの調子が引ツ込で仕舞ツて、妙な工合に出損ひましたよ、人間といふもの、好い加減に喜ばしてくれねヱと、うまく遣れませンね』
『川口といふ男、小さい時からの打解けた友達で、わけて人よりも心易く入魂にして居たが、あゝまで親切に乃公の事を考へてくれるとは、思はなかツた』

鶴吉は小膝を進めて、
『わたしは今まで、なさけない親知らずで、どこを向いても淋しい不運なものと、泣いてばかり居ましたが、この長さンといひ、あの方といひ、かうして見ると、まア何といふ仕合せな身體でせう、これで、あなたにさへ、見捨てられねば』

『そ、そンな事を、こゝで、いはねエこツた、もし大將が變な眞似でもすりやア第一、わツしが承知しませンよ、あの方だツて、もう今ぢやア、よく捨てたとは譽めに來ませンからね、大船に乘ツたやうなもンだ、おまけに鬼熊の奴め、とンだ間違ひから面くらツて、好い氣味だ、はゝゝゝこの證文一枚で大將、どう出て來やアがツても鼻ツ柱を逆捻にしてやれますね』

『實は此方に聊か威張れないところもあツて、なるべく眞晝の顔を見せないやうにして居たが、まづ一安心だ、これで否應なしの梟が付くだらう』

『然し野郎、その謝罪證文が此方にあると知りやア、びツくり仰天の驚きと呆れの宙返りで、どンな面をするでせう、さンざ手を變へ品を換へて來た子分の奴等ア寒中の川中へ叩ツ込まれたり、ずぶずぶ錐で突き倒された結句の果、やツと見付けた金函に手も出せねエといふ始末だ、殘念でせうな』

『殘念でも無念でも現在、かうなツて來た成行だから、ぐうの音も出せない目に逢はして置て、もし此方に金の出來る時節でもありやア、その時に幾何か遣るンだ、この鶴だツて熨斗を付けてくれた譯ぢやアなし、遁げた事は遁げたンだからね、はゝ

はゝ』

『さうして戴けば、わたし猶更、晴々として』

『その時は大將、是非この長助お使者だ、今から約束して置きますぜ、これまでの總勘定に畜生、うンと膏を絞ツてやりてエ、長屋の屋根越に遁げた藝ばかりだと思ツて居やアがるかも知れませンからね』

鶴吉、そツと横を向きながら、小さい聲で、

『川口樣、樣々』

心ばかりの門松を立てゝ雜煮餅の前、下戸の勘兵衛も長助も三四杯の屠蘇に醉ひ、どこからも禮者の來ぬを結句の幸ひに打寛いだ氣樂さ、まして大晦日に鬼熊の謝罪證文が手に入りし嬉しさで、のンびりとした元日、張り替た障子に旭日の射し込む心地、これが脇差を賣ツて出來た新世帶といふ事も苦にならない、

『長助、まア此くらゐで目出たいとして置かう』

『置かうぢやありませンよ全く、お目出たい正月だ、すまないこツてすが、おかげで、ことし一年の籠城は出來るし、まづ四十二の厄歳は過ぎたし、生れて始めて人並に正月らしい氣がしますよ、萬年町に居て御覽なさい、盆も正月もあツたもンぢやア

ねエ』

『はゝゝゝさういふ氣で居てくれるから、この不自由な浪人住居も何となく春が來たやうな心持になるンだ、ねエ鶴』

今朝は鶴吉も無理に飲まされた屠蘇で、ぽッと薄赤い顏、わざ〱改めて着飾る正月の衣裳もないが、遁げて來た時の派出な大模樣よりは聊か地味に目立たぬ秩父織の小荒い棒縞で、どこやら若い世話女房めいて來た風情、それが猶更また一段と女振を上げて、くッきりと浮き出したやうな目鼻立に惜氣もなく溢れる愛嬌、

『ほンとうにまア、長さンが居て下さるンで、どのくらゐ便利で陽氣になるか知れませンよ、もし二人ぎりだッたら淋しくッて、その上に行屆きませンから叱られてばかり居ますね、ほゝほゝもう二三杯、長さン、お飲みなさいよ、そして何か聽かして下さいよ、きッと長さン、これで隱し藝のある人、お正月ですもの』

ぺた〱と自己の額を叩いた長助、

『じよ、冗談ぢやありませンよ、そンな意氣筋の道樂で貧乏したンぢやアありませンよ、曲りながらも新內の一節ぐらゐ眞似が出來りやア、この暢氣野郎、鐵砲笊を荷いで步きますかね、づう〱しく門付けの流しで、まぐれ當りに浮氣女の一人や半分を探しますよ、ところが生憎と野暮の骨頂、藝なし猿の大喰ひだ、はゝゝゝさういふ手間で、どうですね、お囃しがねエから踊り憎いでせうが、ちよいと本職に遣ッて貰ひたいもンで』

『いやですよ』

『かうなッて居なすッても大將、まだ見た事がないンでせう、廣小路の人氣を獨り舞臺に背負ッて立ッた藝ですぜ、此まゝ埋めて仕舞ッちやア勿體ねエ、めでたい正月に一度ぐらゐ、ようがせう』

『はゝゝゝ藪蛇だッたな鶴、他人に見せるンでないから何か手輕い目出たいものを一さし』

いき〱と張り切る目元に二人を睨み付けて、

『長さン、わたしを、やはり廣小路の女俳優と思ッてるンですか、あなたまで、好い氣になッて、もう、もう〱あンな嫌な事は忘れて仕舞ひましたよ』

ぐいと一杯、飲み直した長助、

『やり損ひ、かうなれば仕方ない、わッしが取ッて置の藝を出しますよ、何を隱しませう、長年の間これで苦勞したンだ、隨分これには骨を折りましたぜ、なまやさしい修行ぢやアねエ、あだおろそかに聽いて貰ッては引合ひませンよ』

勘兵衞は思はず手を叩いて、鶴吉も小膝を擦り寄せながら、

『それ御覽なさい、きツと何かある人と思ツて居ましたが案の定、さうでせう、さうでなくツて、あゝ萬事に調子よく如才のない苦勞人になれますかね、意地の惡い、今まで、すまして居て、さア、お始めなさい』

『まづ咽喉を濕して』

『はい、わたし汲みますよ、まアお座蒲團』

湯呑を引寄せて一口、えへンと咳拂ひ、元來の不出來な面に上目使ひで腹の底より絞り出した聲、

『くづい、くづい、お拂ひ物は御座いませンか紙屑に襤褸屑に糸屑、人間の屑の外は何でも戴きます、くづい〳〵』

呆れて笑ひ出した勘兵衞、

『はツはツはツ、やられた、やられたわい』

お世辭に湯を汲で丁寧に座蒲團まで敷かした鶴吉、遁げ出す長助の後を口惜し紛れに追ひ廻して、わづか三室の狹い借屋の中を、ぐる〳〵と二三度の大騷ぎ、追ひ詰められて壁の隅に片手を擧げながら片手に自己の口の端を捻る四十男と、まだ若々しい娘氣の失せぬ今年二十歲の女と、これも正月氣分で、その長助を毆りかけた鶴吉の姿に自然と芝居の型の現はれたのも面白い、

正月四日、幼少よりの常例に極められた事で、今は落ちて居ても貧しうても、神佛へ參詣せねば氣の濟まぬ勘兵衞、早朝に起きて深川の八幡へ、それから淺草の觀世音へ、もはや繼ぎ合した肩入れ着物でなく、粗末ながらの春着、脇差のない大刀の一本差も武士の面魂ひを失はぬ男振、さのみ尾羽うち枯した其日暮しの素浪人とは見えない、

本堂に參詣の後、また二度目の群集雜踏に揉まれて雷門を押出され、左へ折れて吾妻橋を渡らうとする時、同じ參詣に人混を避けた隨身門より出たらしく花川戶の方より來て、ばツたり出逢うたのは兄の田島幸兵衞、加之も同僚と二人連れで、それと一目に見るや否、

『や、おのれツ、勘兵衞』

いかなる剛敵にも恐れないが、この兄には一言のない勘兵衞、せめて君への申譯に見付け次第の斬捨にすると川口周藏より聞いた兄の悲憤、決して無理とは思はぬが、斬込まれて刄向ひの出來ぬ弱身、遁げる事も出來ぬ苦しさ、

山が崩れて來ても狼狽へて慌てぬ度胸の勘兵衞も、これには流石に顏色を失うて、おもはず二歩三歩、よろ〳〵としながら、

『兄上』

『默れツ』

『は』
『おのれに兄といはれる幸兵衛でないぞ、ようも今まで、のめのめと生きて居ツた、田島家の汚れ者め、不忠不義の恥知らず奴、橋を渡れ』
『は』
『人、こゝでは人目がある、橋を渡れ』
頻りに同僚の止めるも聞かない、眼中に怒りの涙を含みし幸兵衛、
『お構ひ下さるな、かやうな奴、あゝ兄として、かく出逢うた以上、見遁す事はならン、藩中一同へも兼ての約束で御座る』
兄の幸兵衛は同僚に袂を掴まれ、弟の勘兵衛は差俯いたまゝで顔も得上げず、七十八間の吾妻橋を渡り行く兄弟、
もし町人ならば同じ面目なさも、こゝまでの侍氣質に苦しむまいが、武士の家に生れた義理の柵で、どうも出來ない、
吾妻橋を東へ渡れば、晝も往來の淋しい隅田川の川添ひで、北は枕橋、南は中の鄕、ぴたりと足を停めた幸兵衛、
『この兄に出逢うて、生命、助かると思うて居るか、事も事に依りけり此奴、侍の過失といふものは外にあるぞ、不埒とも不屆とも、淺ましいとも、なさけないとも、いひやうのない奴、そ、それへ直れ』
身を縮めて蹲まりし勘兵衛、連れの同僚その間を隔てながら、
『勘兵衛殿、立ツた、立ツた』
これは立ツて遁げろといふ謎、兄御は拙者が抱き止めるといふ謎、さうして居ては斬らねばならぬといふ謎、心の一禮に立ちかけた勘兵衛の動くと共に同僚を不意に押退けて、すツと拔いた幸兵衛の一刀、實は兄と段違ひで、二三度の空を斬らした後、聊か力の弱りしところへ身を入れて面上を掠らせた早業、亂刄の中を潜るよりも危ふい武道の極意、たら／＼と額口から流れる血汐、
『これで御免なさりませ』
片面を押へて飛鳥の如くに走り出した弟を、
『待てツ』
追はうとしたが、背後から羽搔責に抱止められて、これ幸ひの幸兵衛、どこまでも追ひたくない、
『あれでは、きゝ斬り足らぬ奴』

入

片町の家では、今の身に何の不足もない元日の四日目、相變らずの長助は暢々とした氣で、鶴吉も何となく晴やかな笑顔『ねエ長さン、遲い事、あゝ早く起きて出て、八幡樣と觀音樣だけでせう』

『さう飛脚のやうに走り歩けませンよ、常と違ツて市中も賑やかだし、八幡樣ア兎も角、淺草は大變な人出ですからね、久しぶりで、ぶら〳〵』
『ぶら〳〵歩いて居るンでせうか』
『まア、せツせと駈け出すよりも、ぶら〳〵の方でせうよ、急ぎの用ぢやアなしね』
『歸りは、いつ頃になりませう』
『今日中には大丈夫』
『もう、お晝を過ぎて、よほどになりますよ、晝御飯、どうしたでせう』
『まるで母親が小兒を出したやうだ、そこまで氣になるンですかね、大將、うツかり外で一夜も泊ツて來られねエ、もし二三日も家を空けたとなりやア忽ち大騷動が持上ツて、どンな事になるかも知れねエ、あぶなくツて傍に居れませンな、はゝはゝ』
『長さン、さうなると、面白いンですか』
『いえ、何、面白くツて笑ツたンぢやアありませンよ』
『では、どうして、をかしいンです』
『さう、いち〳〵此方へ當らなくツても今に大將、歸りますよ、はゝゝゝまた笑ツて濟みませンが、こりやア正月笑ひといふもンで、やはり延喜の內だ』
『勝手に澤山、お笑ひなさいよ』
『困る大將、かういふ貞女を預けて置て、どこに暇取ツてるンだらう』
『貞女』
『貞女ですよ、ちよツとの間も心配で堪らず離れて居れないといふのは、あばずれの不貞腐ツた薄情の女にねエ筈だ、よツぽど惚れ過ぎて居ないとね、めちや惚れが卽ち貞女の基で、氣まりの惡いも何もあるもンですか、遠慮は入りませンぜ、心に思ツた通り誰に憚かりもなく、ふンだンに貞女を出した方が宜い、貞女を無理に押へて腹に詰め込でると毒になりますよ』
『わたし一人の時、いくらでも、からかツて下さい、その代り長さン、あとで後悔しないやうにね』
『わツ、譽めて敵討をされちやア堪らねエ、はゝゝゝまた此奴、げら〳〵笑やアがる』
そろ〳〵夕暮に近い門口から勘兵衞の聲、
『おい、今、歸ツた』
二人とも一時に立ちて、障子を開けると、左の目から斜めに額を晒木綿に卷た勘兵衞の顏、びツくりした鶴吉は思はず反身の聲を出して、

『あらッ』
長助も胸を突かれたやうな形に驚いて、
『ど、どうなさいました』
無言のまゝ六疊の居室へ通りて、靜かに火鉢の前、
『ちよいと怪我をして、幸ひ其邊の近くに醫者があッたからね、すぐ飛込で療治して來たが、なアに心配するな、たいした事はない』
心配するなといはれても、はや鶴吉の目は涙に濡れて、取付くやうに差覗きながら、
『どこで、どうしてゞす、どうしたお怪我ですよ』
長助も坐りながらの及び腰に目を剝き出して、
『大將、聞かして下さい、たゞ心配するなで、さうですかといへますかね』
首肯いた勘兵衛、
『まだ外は明るいが、もう内は薄暗いな、長助、行燈に灯を、鶴、鐵瓶の湯は沸いてるか、一ぱい汲でくれ』
灯を點けさせて湯を呑み、ついで莨を一服、ぽンと火鉢の縁に雁首を叩いて、
『どうせ後になれば疵の工合で分るだらうから、躓いて倒れた拍子に石

でともいへまい、實はね、淺草から吾妻橋を渡ツた時、出逢うた相手に』

『まア、どういふ相手に』

『大將の眞ツ向を遣るといふなア、なみ〳〵の相手ぢやアありますまい、まさか藥研堀の』

『なみ〳〵の相手や例の奴等で、この勘兵衛に卯の毛の疵も附けられるか、これはな、いふにいはれぬ苦しい立場で、乃公の方から斬られねばならない相手、加之も手や足でなく、身體中に一番の大切な面へ受けてこそ、乃公の心も通じる相手でね、然し親兄弟の敵討に出逢うたンではないぞ、腕に任して斬るばかりが男でなく、斬られて幾分か武士の申譯が立つ事もある、まづ今日は、これだけの事にして置かう、長助も鶴も、この上は聞いてくれるな、疵は左の眉毛から額際へ掛けて二寸七八分、わざと斬られた武道の心得で、深くはないが、乃公の生涯、これほど苦しい相手と、これほど難かしい藝はなからう、ちと腹も空いた、茶漬で宜い』

その上の委しい事、くどい尋ねやうも出來ぬ鶴吉、おろ〳〵しながら、

『兎も角も、お横に、床を展べませう』

『まだ早いよ、夕飯を先にしてくれ、長助、ぷつりと錐で突刺したよりは輕いぞ、はゝゝゝ』

今の先まで笑ひ續けて居た長助も、笑へない、臺所へ這ひ込で、茶漬といはれたが幸ひの蒸鰈、網に載せて焼き始めたところへ、膳拵へに來た鶴吉、小さい聲で、

『長さン、どうしませう』

『どうも仕方ありませンよ、なるべく機嫌を取ツてね』

『お醫者さン』

『それも一應、きいてからでないと』

『ふしぎに遲いと思ツたンですよ』

『何だか深い譯があるらしい、あの大將、どンな奴にでも向ふ疵を受けて歸りますかね』

『どういふ譯でせうか』

『そこを、それといはずに、うまく今夜、きいて置て下さい、氣になツてならねエ』

四年越に人知れぬ心を惱めた勘兵衛、これで少しは寢覺の安くなるやうな心地、ほツとして、

『おい、まだか』

『はい、只今』

色白の優形ではないが、男らしく苦み走りし男振、武藝は松平伊勢守の藩中に並ぶものないといはれた武藝、さりとて入らざる事に理窟張らぬ氣風、これで戀をされた女が前後に二人とも世間へ憚からねばならぬとは、田島勘兵衛も月下氷神の贔負にされて居ないらしい、

春とは名ばかりで、まだ一月の寒さ身に沁む夜も次第に深けて、ひツそりとした中から幽かに聞える犬の遠吠は、猶更その淋しさが增して來る、

寢る時は必ず右枕の勘兵衛も、じツと仰向きになツたまゝで疵のためか、何か思うて居るためか、いつにない事、をり〳〵漏れる溜息、それが胸に響いて來る鶴吉、

『痛みませうねエ』

寢ながらの横目を使うて、

『何、さほどの痛みもない、お前、そこに起きて居ても同じ事だ、もう遲いぞ』

『いえ、ちツとも睡くないンですよ、それに長さンと當分の間、交り番に起きて居ます約束』

『さういふ病人ぢやない、疵も淺いし根が丈夫だから捨てゝ置ても自然に癒ツて來るンだ、地に生えた樹木でいへば、ちよい

と幹のところへ手斧の先が當ツたぐらゐだ、ごし〳〵鋸で曳いたンぢやアないぜ、わかツたか、わかツたら寢ろ』

『でも、寢られませンよ』

『どうして』

『相手からでなく、あなたから、わざと受けた疵ぢや御座いませンか、お歸りの時の話しでは』

目を閉ぢて暫く考へて居た勘兵衞、

『これはね、いふ時節の來るまで、いふまいと思うて居たが、いづれ一度は、いはねばならないから今夜、後悔しても役に立たぬ乃公の恥を打明けて仕舞はう、あの川口が始めて來た時、襖越に聞いたらしいね、菊枝といふ名、男ではあるまいと尋ねたね、お前、實は其、菊枝といふ女のために生涯を埋めた田島勘兵衞だ』

『すみませン』

『誰に、すまない』

『其お方に、小屋がけ芝居の女俳優、わたしのやうなものが後から出て來て』

『まてよ、默ツて聞け、その菊枝といふのは世間普通の女でない、實はね、父祖代々の御恩を蒙る殿樣のお部屋で、乃公よりも五歳の年上、此方からの戀でも何でもない、二十四の時、いはゞ向ふからの戀に追はれて遁げ損うたを、若氣の至りともいへぬ申譯に腹を切るも易いが、それでは猶更また却ツて君への恐れ、お名前の汚れとなる苦しまぎれに出奔して四年越』

『その菊枝といふ方、どうなりまして』

『これも川口に聞いたが、御成敗にもならず、長のお暇』

『では、お達者で居らツしやいますね』

『さうらしい』

『四年の間、一度も、お逢ひなさらずに』

『ば、馬鹿な事いへ、たとひ居處が知れたとて、よし途中に出逢うたとて、君に對して不忠不義の後悔、見向きも出來るか』

『ですが、さぞ、なつかしう、思ツて居なさいませうね』

『鶴、今夜は乃公の懺悔だぞ、乃公の恥を曝してゐンだぞ、篤と考へて、よく聞け、さういふ譯で、果は萬年町の裏長屋へまで落ちた勘兵衞、これから浮ぶとしても、仕官の道はない、どうせ生涯の浪人、この浪人に緣を繋いだ以上、華々しい晴やかな世を渡れないが、それは承知か』

『まア、あなた、今更、そンな事を、わたしに』

『いや、承知なら乃公も、その氣で一生、放さない』

『離れませンとも、お嫌になツたら慾ひ捨てたりせずに、いツそ殺して仕舞ツて下さいよ』

うッかり枕を仕直さうとして、おもはず出た聲、痛いともいはず、

『うゝン』

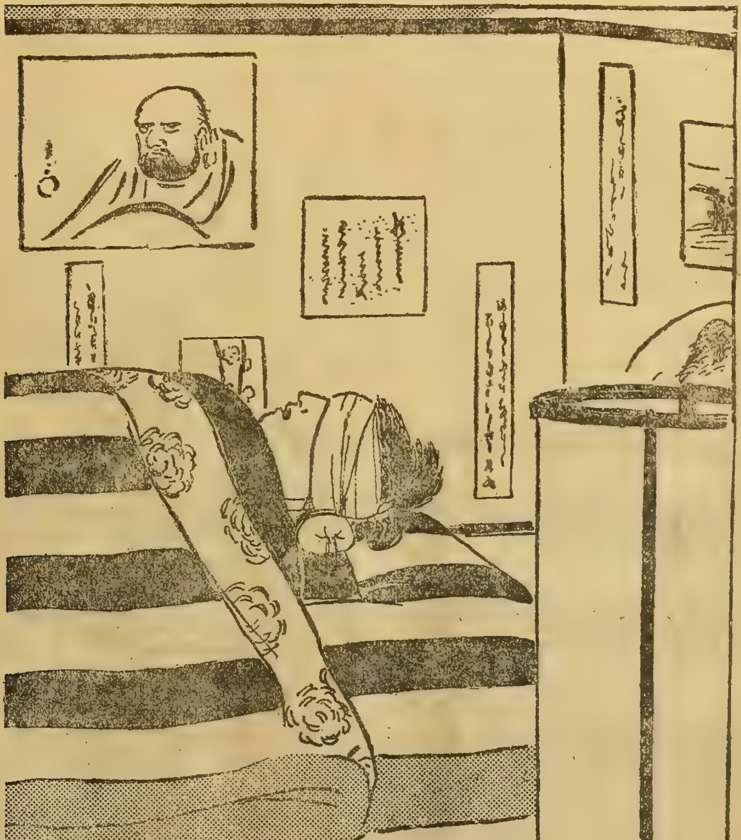
慌てゝ枕を持添へた鶴吉、

『そツと、そツとなさいよ、どういふ人が、こンなところへ手斧を當てたンでせう』

滿面を皺めた勘兵衞、

『他人では當てゝくれない、今日あの吾妻橋を渡ツた時、四年目に出逢うた兄に斬ツて貰うた、もし一貫目の罪とすれば、やう〳〵これで十匁か十二三匁は輕く減ツたらう』

常より早く起きた長助、まんじりともせずに夜を明した鶴吉、かういふ時は猶更、臺所より外に聲を包むところがない、



『どうでした、別に變ツた工合は、熱でも出やアしませンかね』

『あゝいふ人ですから案外、どうもないやうですが、やはり幾

分かね』

『あたりまへだ、外のもンなら夜通し唸りますよ、遅くまで話し聲が聞えたので、まア宜いと思ツて居ましたが、あの中で、どンな話しが出ましたね』

『いろ／＼と』

『疵を付けた相手を聞きましたかね』

『長さン、委しい事は、わかりませンが、あの疵は、恩のある相手の人に出世さすため、手柄をさしたンださうですよ』

『いくら恩があるにしろ、化物の外ア一人に一個と極ツてる顔だ、二個も三個も掛替のあるもンぢやアなし、大將の好奇心も度が外れて居ますよ、第一また相手の奴も奴だ、好い氣になりやアがツて』

『長さン、大きい聲をしては、今、すや／＼と寝入ツたところですよ』

首を縮めた長助、

『もし急所だつたら、どうするンですい』

こればかりは心を許した長助にも話したくない鶴吉、

『ですから、歸ツて來た時に乃公の生涯、これほど難かしい藝はなかツたと、さういうたでせう、わたしのやうなもンでも、をり／＼舞臺では自分の藝を殺して、相手を引立てねばならないといふ、苦しい立場の覺えがありますからね』

兄の田島幸兵衛、淺草の歸途に弟の勘兵衛と出逢ひ、拔打に面上を斬ツたといふ噂、現在その時に同道した同僚の口より傳へられて、武士の面目、さもあらうと一藩の評判を聞くや否、そツと屋敷を出て來た川口周藏、入片町の家へ這入らうとする後姿を見たのは、どうしても此邊が怪しいと覘うて居た鬼熊の子分で、生憎また其奴は謝罪證文を取られる時に居合した奴、宙を飛で藥研堀へ走せ歸りし注進面、

『占めた、親方、いよ／＼穴を見付けましたぜ、過日こゝへ來て否應なしに一札を取りやアがツた侍、あれも一つ穴に相違ねエ、彌勒寺橋を渡ツた入片町だ』

吸うて居た煙管で灰吹を叩き割ツた鬼熊、

『どこまでも念入に手を廻しやアがツたな、もう地獄の一丁目へ引ずり出したと同じこツた、今に見ろぢやアねエ、すぐ今夜、乘込でやらう』

（つゞく）

一難去つて又一難來る。危いかな田島勘兵衛！　さて次號は？

國難愈ゝ深刻、大亞細亞聯盟結成の秋つひに來る！

細井肇先生

日本の決意

日本は國際聯盟脱退！　米國はどうなる？　歐洲はどうなる？　前途いよ／＼暗憺として豫測をゆるさぬ。今こそ大亞細亞民族團結の秋だ。細井肇先生の大亞細亞主義を提唱した『日本の決意』は目下必讀の大快著！　荒木陸相其の他名士極力推奬！

定價五十錢
送料八錢

大日本雄辯會講談社發行
（振替東京三九三〇）

にせと本もの

1
久し振りの上陸だ
大いに飲み大いに唄ふ
とするか、いゝ陽氣
だなあー
2
あれ〳〵
上官もい
い氣持に
なつてゐるワイ
3
しかし上官であれ
ば敬禮しなければ
なるまい
4
どうも樣子が變てこ
だと想つたら花見の
假裝だ、馬鹿々々しい
5
もう俺は知ら
ねえよ、甘く
見んねえ
畜生！
6
こら上官に
敬禮をせんか
ウヘッ今度は
本ものか

冬木ゆか

笑話

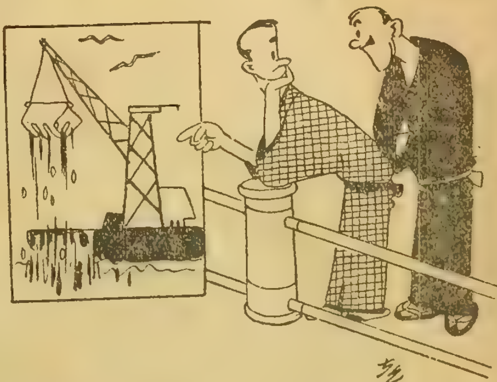
モダン不精者

いつもガタ〳〵なボロのタクシーばかり選んで乗る男があつた。

——どうしてもつといゝ自動車へ乗らないんだい？

と訊くと、

——揺れるから煙草の灰を落す世話が無い。



思ひやり

河岸に立つて、河底の泥を浚つてゐる機械を見てゐた男、如何にも感に堪へて、

——大變だらうなア。

——何がです？

と、傍の男が訊くと、

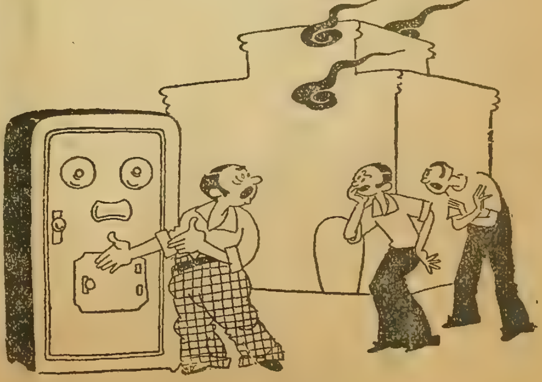
——底にゐて泥を入れる役の者がさ。

適材適所

下士『床山二等兵！　お前は軍隊に入る前に、どういふ職業に就いてをつたか？』

新兵『はつ、理髪師の徒弟で、顔剃を主にやつてゐたであります。』

下士『では、直ぐに炊事場へ行つて、馬鈴薯の皮を剝く手つだひをして來い！』



疎忽者

會社が火事と聞いて駈けつけた疎忽者、大汗になつて、

『オイ、皆んな手を貸して呉れ、此の大金庫を眞先に持ち出すんだから……』

發見

ウイリー『母ちゃん、赤ちゃんの眼は母ちゃんに似てゐて、鼻は

父ちゃんの鼻にそつくりだつて、小母さんが言つたね。』

母親『さうだよ。』

ウイリー『そいから御覧よ。赤ちゃんの口は、祖父さんと同じだから――歯が一本もないんだよ。』

次の亭主

『僕の女房には全く憂鬱を感じるよ。何かつていふと、直ぐに前の亭主の話ばかりするんでね。』

『それならまだいゝ方だよ。僕の

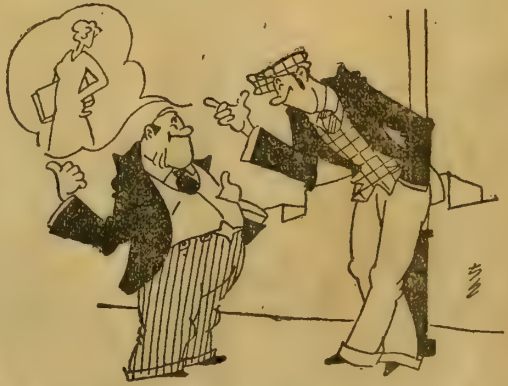
女房と來たら、口癖のやうに次の亭主の話をするんだよ。』

雪の夜

巡査――こら〳〵、何をしてゐる?

醉つぱらひ――か、鍵を落しちまつて……雪が消えるまで待つてゐるんで……。

身の程知らず



肥つた男――君、先刻からあの美人は、僕の方ばかりチラ〳〵見てゐるぜ。どうもよほど僕を好いたらしい。

友人――何を言つてるんだ。あの女は君の目方を想像してゐる丈だよ。

まあ、お静かに

客『おい、ボーイさん、此のスープの中を見て呉れ。蠅が一匹ゐるぢやないか! こりや一體、どうしたわけだ!』

ボーイ『まあ、さう大きな聲をなさらないで下さいまし。一匹やそこらの蠅がスープを飲んだところで、その分量は知れたもんぢやございませんか!』

長篇小說

地(ち)に爪跡(つめあと)を殘(のこ)すもの

佐々木邦

細木原青起畫

都の夢、里の夢

秀才の豐彦君と堅固君が、必死に智惠子さんを中に暗鬪するので、見兼ねた智惠子さんの父君は、此關係を斷たすべく、三人を連れて最後の淸遊に出た。然るに其途中一頭の奔馬が智惠子さんに襲ひ掛り、これを庇うた小泉君と呼ぶ兩秀才の友人は、爲に腕を折るといふ椿事が起つた。兩秀才及び智惠子さんは、小泉君の此英雄的行爲に感激して、心から彼の病床を見舞うたが、當の小泉君の心持が、これを機會に智惠子さんの愛を得たがつてる事を勘づくや、急に三人共彼を蔑視する感を新にし、結局又候彼女を爭ふ兩君の心の縒が戻る。堅固君の如きは戀の結末を一か八かのジャン拳で決めようと迄昂奮した。（前號迄の梗概）

豐彦君と堅固君は一緒に上京した。堅固君は豐彦君の下宿してゐる大野さんのところで二三日厄介になつた後、一高の寮へ移つた。その折、

『さあ。ウンとやるぞ。當分會へないかも知れないよ。』

と言つて行つたが、日曜に直ぐやつて來た。

『何うだい？』

『面白い。』

『勉强が出來るかい？』

『まだ落ちつかない。明日から始める。もう當分來ないよ。』

それにも拘らず、日曜毎に顔を見せるから、豐彦君は待つてゐるやうになつた。

『こゝは矢つ張り鄉里の出張所だよ。こゝへ來て、君や大野さんと鄉里の話をすると氣が休まる。』

と堅固君は説明した。

『少しホームシツクだね？』

『うむ。その氣味もあるだらう。』

『もう一つありはしないか？』

『何だい？』

『偵察に來るんだらう？』

『大丈夫だ。ハツハヽヽ。』

『何か音沙汰はなかつたかい？』

『あるものか？　君こそ偵察だ。』

『ハツハヽヽ。』

『當分は諦めてゐる。』
『長い當分だぜ。』
『うむ。』
『詰まらないことは考へないで、大いにやらうよ。』
と豐彦君は安心してゐた。ジャンケン問題が堅固君に損をさせた。しかし堅固君は然うと氣がつかない。豐彦君は智惠子さんの疑問を度度思ひ出して、自分の立場を優勢と信じてゐた。その折、智惠子さんとジャンケンの手振りをした。此方が鋏を出したのに、智惠子さんは態々紙を出した。あれにも深い意味がある。
『やるとも。一度しかない一生だ。』
『額を壁にかけたかい？』
『かけたよ。』
『君、一遍大井先生のところへ行つて見ないか？』
『さあ。』
『會つてくれるよ。先生のところへ行つて三須先生のことを話すと好い供養になる。』
『一遍つれて行つて貰はうか？』
『今日でも宜い。今日は寺内君が遊びに來るから。』
『三文小說家か？』
『可哀さうに。面白い男だぜ。』
『君は友達があるから宜いな。』
『君は未だ出來ないかい？』
『同窓の連中とは懇意になつたけれど。』
と堅固君は淋しさうだつた。
『兎に角、天下の一高だから、君の方は秀才が多いだらうね？』
『何あに。』
『同級生は何うだい？』
『鈍栗の丈競べだよ。』
『嶄然君が頭角を拔いてゐるのかい？』
『先づ然うだ。』
『これは驚いた。』
『本當だよ、思つた程ぢやない。あれなら僕が一番で入るのも當り前だ。』
『隨分やつたんだからね。』
『うむ。恐るゝに足らない。』
『それは結構だ。』
と豐彦君は喜んだ。
大野さんも日曜は閑だから、少時顏を出して話相手を勤める。
『何うですか？　もう慣れましたか？　寄宿舍は。』
『えゝ。』
『日曜には屹度遊びにいらつしやいよ。』
『參ります。』
『學生も保證人の家へ始終來る間は間違ないさうです。足が遠退くやうになると、兎角いけないと申します。』

『ハツハヽヽ。』
『本當ですよ。』
『それなら豐彦君は大丈夫ですね。』
『豐彦君は堅いです。』
『僕は何うでせう？』
『無論堅いです。名詮自性、堅固君です。』
『ハツハヽヽ。』
『殊に一高は蠻カラの揃ひですから、間違ありますまい。』
『はあ。』
『大いにやつて下さい。佐藤家は三代目で天下に名を揚げる。村は狹くて驥足が展ばせません。』
　と大野さんは流石に長く東京にゐる丈けのことがある。しかしその後から必ず村の話を始める。
『小泉は何うですか？』
『さあ。』
『金が出來たでせう？』
『出來たやうです。』
『一風變つてゐますけれど、兎に角、あの邊での豪物ですよ。』
『しかし評判は惡いです。』
『無論好い筈はありません。人の手のものを拂ひ落しても取らうつて人ですから。』
『はあ。』
『窪澤は何うですか？』
『新田ですね？』
『えゝ。丈八です。あすこは昔から大したことはないんですけれど。』
『さあ。』
『金は出來ませんか？』
『これは減る一方らしいです。』
『然うかも知れません。何もしないんですから。』
『いや、米相場へ手を出すんですつて。』
『それぢや何もしないよりも惡いです。田舍漢が盲滅法に手を出したつて儲かるものですか？』
『はあ。』
『水門の山口は何うですか？　あすこは伸びる一方でせう？』
　と要するに金のことだつた。丁度そこへ奥さんが現れて、
『堅固さん、松崎の大野は如何でございますか？　大野つて大金持は？』
　と訊いた。
『ハツハヽヽ。』
　と大野さんが笑つた。松崎の大野は大野さんの兄さんだ。
『これも伸びる一方でせう。』
　と堅固君が言つた。
『屋根の草がね。』
『いや、そんなことはありません。』

『ハツハヽヽ。あの屋根の草丈は何うかすれば宜いのにね。』
と大野さんは郷里の生家を思ひ浮べた。
『草ばかりぢやありませんよ。いつか行つた時は夏でしたから、百合か何か咲いてゐましたわ。如何にも田舍らしくて風情がございますわ。』
と奥さんは東京生れだ。
尙ほ郷里の話が續く中に、

『田川では青木さんが一番好いやうです。』
と堅固君が訊かれもしないのに言ひ出した。
『はゝあ。』
『この夏、藤島の明神さまのお祭りの時、青木さんの娘がもう少しで大怪我をするところでした。』
『はゝあ。』
『馬力に轢かれたんです。小泉の息子がおつ被さつて、これが怪我をしました。』
『はゝあ。』
『大したことはなかつたですが、青木さんが氣の毒がつて毎日のやうに小泉のところへ御機嫌を取りに行つたら、小泉は好い幸ひにして、田地の交換を申出たさうです。』
『小泉は轉んでも只起きませんよ。』
『えゝ。青木さんも然う言つて、困つてゐました。見す〳〵大損をするんですから。』
『小泉にかゝつちや誰でも敵ひませんよ。』
『青木さんはあれから屹度交換に應じたんでせう。』
『小泉つて人は昔から人の弱味につけ込んで、ダン〳〵身上を大きくした人です。』
と大野さんは青木さんを避けて、小泉一方だつた。
『オホヽヽヽ。』
と奥さんが笑ひ出した。

『…………』
『堅固さん、青木さんの奥さんは何とか小町つて程の美人でいらつしやいますつてね?』
『はあ。しかしそれは昔のことです。』
『お幾つ?　今は。』
『さあ。三十……七八でせう。』

『今でも綺麗?』
『はあ。二十七八に見えます。』
『そんなことはないよ、君。』
と豊彦君が横槍を入れた。否定よりも反省を促す意味だつた。
『昔は大變だつたさうでございますわね。』
『さあ。』
『美人ですから競爭者が多くて。』
『そんな噂が殘つてゐます。』
と堅固君、今更仕方がなかつた。
『足跡を拜んだ人があるんでございますつて。』
『はゝあ。』
『足跡の砂を紙に包んでお護符にした人もあるんでございますつて。』
『はゝあ。』
『それですから今でも見識がお高いんでございますつてね。私、いつか行つた時、兄嫁から種々と聞いて參りました。あの邊の人は世間を知りませんから、詰まらないものを評判に致します。』
『昔の話は僕達もよく知りませんけれど。』
『何なら一遍拜みたいと思つたんですけれど、ついその御光榮に浴しませんでしたの。オホ、、、。』

と奥さんは笑ひながら、大野さんの手の甲をピシヤリと叩いた。
『痛いね。』
『性があつて？』
『あるさ。』
『オホヽヽ。』
『何のことだか次第が分らない。それでは。』
と大野さんは急いで立つて行つた。逃げて行つたやうだつた。奥さんも間もなく、
『何うぞ御ゆつくり。』
と言つて引き退つた。
豐彥君は階段の足音が消えるのを待つて、
『君、叔母さんは知つてゐるんだよ。』
とむづかしい顏をした。叔母さんではないが、然う呼んでゐる。
『うむ。知つてゐるんだね。』
『それだから、青木さんの話はしない方が宜いんだ。』
『果して知つてゐるか何うかと思つて、試めして見たんだよ。』
と堅固君は平氣だつた。
『もうよせよ。』
『うむ。』
『夫婦喧嘩が始まるかも知れない。』
『時々やるのかい？』
『やる。』
『ハツハヽヽ。』
『笑ふなよ。今の話だと思ふと惡い。』
『青木さんの奥さんのことで喧嘩をするのかい？』
『違ふ。子供がないから退屈するんだ。』
『何方が強い。』
『叔母さんの方が強い。始まると、僕は階段のところへ行つて聞いてゐる。』
『性が惡いな。』
『小說を書く時の參考にするんだ。』
『溜まらないなあ、こんな奴を下宿に置いちや。』
『ハツハヽヽ。』
と豐彥君も笑ひ出した。
それから寺內君が來た。豐彥君が堅固君に紹介した。
『君のことは先學期中毎日のやうに佐藤君から聞かされましたよ。』
と寺內君が言つた。
『あなたのことも暑中休暇中に度々承はつてゐました。』
と堅固君も如才ない。
『從兄弟同志丈けに、よく似てゐますね。』
『然うですか？』
『兄弟のやうです。』
『僕が弟です。』
『佐藤君は好い兄貴です。これぐらゐ君のことを思つてゐる人はない

でせう。何かといふと君の話が出るんです。』
と寺内君は尙ほ二人を見較べてゐた。
『仲は好かつたんです。』
と堅固君はつい過去を使つてしまつて、
『今でも好いんですけれど。』
と現在に改めた。
『一高は法科ですつてね？』
『はあ。一部甲類です。』
『甲類といふと？』
『英法です。』
『はゝあ。』
『あなたは小說をお書きですつてね。』
『はあ。やつてゐます。』

『一同級生だけれど、事實は先輩だよ。』

と豐彦君が敬意を表した。

『年丈けは大分先輩だけれど。』

『何でも先輩さ。』

『一年級を二度やつてるからね。』

『君、今日は堅固君が來たから丁度好い。大井先生のところへ連れて行つて貰へないか？』

『宜いとも。堅固さん、君もこれでしたね？』

と寺内君は長押の上の額を指さした。

『はあ。』

『大いにやるんですよ。』

『その決心です。』

『しかし爪跡を殘すなんて、小さい料簡ぢや駄目ですよ。』

『はゝあ。』

『理想はもつと大きいところを行く方が宜いです。法科なら、君は政治家でせう？』

『さあ。その邊かも知れません。』

『外交官だよ。』

と豐彦君が教へた。

『外交官なら尚更のこと、大風呂敷を擴げてかゝる方が宜いです。世界の地圖を染め更へちや何うですか？ 塗り更へるとは言ひません。敢へて染め更へると言ひます。』

『大きいですな。』

『それで丁度好い加減になるんです。現實には何うせ割引がつくんですから、僕達の理想は決してそのまゝ叶ふものぢやありません。そこを見越して、大きく吹つかけるんです。』

『成程。』

『僕は君達よりも年丈け先輩ですから、世の中が多少分つてゐます。例へば、こゝに一萬圓の損害賠償を受けたい人があるとします。この男が正直に一萬圓として訴へれば、何だ彼だと値切られて、結局千圓ぐらゐしか取れません。それですから辯護士がついてゐて、初めから十萬と吹つかけさせます。』

『成程。』

『すると一萬圓で示談にしてくれと來ます。宜しい。オーライ。』

『ハツハヽヽ。』

『それと同じ理窟ですよ。僕は明治の文學を根柢からひつくりかへしてやります。然ういふものを書きます。これから聲を大きくして然う叫ぶんです。』

『はゝあ。』

『しかし大井天泉初め先輩共が値切るに定つてゐますから、それで漸く自分の存在が認められるぐらゐのものだらうと見越しをつけてゐます。』

『ハツハヽヽ。』

『何うしても損害賠償の時の原告の態度で行くんですな。』

『はあ。』

『君達は二人とも秀才だから有望です。地球のどてつ腹へ大穴を明けるんです。』

『ところがナカ／＼明きません。』

『いや、それぐらゐに大風呂敷を擴げて置けば、何うにか斯うにか爪跡が殘るんですよ。』

『成程。』

『初めから爪跡なんて謙遜してゐたんぢや駄目です。値切られるとゼロになつてしまひます。』

と先輩をもつて任じる寺内君は處世の要訣を說いた。

晝から三人つれ立つて早稲田へ向つた。初めての堅固君には砂土原町から大分道程があつた。穴八幡の手前で馬車に乘つた老紳士に行き會つた時、豐彦君と寺内君は恭しくお辭儀をした。

『大隈さんですね。』

と堅固君は直ぐに氣がついた。

『えゝ。大風呂敷です。』

と寺内君が答へた。

早稲田へ出掛けたのは大井先生を訪れて親しく謦咳に接するのが目的だつたが、先生は生憎不在だつた。寺内君は例によつて先生一家の信用を見せつける爲めに、一人上り込んで出先まで確めて來た。

『講演をやりに行つたんだつてさ。待つてゐたつて、ナカ／＼歸らない。豫め話して置くと宜かつたんだけれど、惜しいことをした。』

と言つた。豐彦君も殘念がつた。しかし堅固君は、

『宜いですよ。大隈さんを見ましたから。』

と滿足した。文學者よりも矢張り政治家に興味を持つてゐた。

寺内君の下宿が近かつたから、二人は誘はれて寄り込んだ。

『愉快ですなあ。大いに話しませう。』

と寺内君は又氣焔を揚げる積りだつた。

『お手軟かに願ふぜ。』

と豐彦君が警戒した。

『何だい？』

『風呂敷だよ。』

『大丈夫だ。僕のは擴げたところで小風呂敷だから。』

『中風呂敷だらう。』

『兎に角、お互に大いにやらうよ。君が始終言ふ通り、一度しかない一生だ。僕は矢つ張り君の感化を受けたんだね。君と交際し始めてから學校の方の勉強に身を入れるやうになつたよ。』

と寺内君は實際然う感じてゐるのだつた。

『僕も確かに君の法螺で啓發された。』

『法螺はひどいな。』

『意氣込みだ。法螺ぢやない。君と話してゐると、世の中も然うむづかしいものぢやないと思ふ。今にも傑作が書けさうな心持になるよ。』

『君は書ける。屹度書ける。』

『駄目だよ。』

『早く書けよ。待つてゐる人があるんだ。』
『そんなことはないよ。』
『あるつて言つたぢやないか？　この間。』
『あれは冗談だ。』
　と豐彦君は堅固君の手前、甚だ具合が悪かつた。
『堅固さん。』
『はあ。』
『三人で誓ひを立てませう。』
『何ういふ誓ひですか？』
『君は世界の地圖を染め替へる。佐藤君と僕は日本の文學を建て直す。』
『結構でせう。』
『先づ然ういふ意氣込みで行くんです。』

『えゝ。』
　と堅固君は頷いた。
『佐藤君は何うだい？』
『宜からう。』
『それぢやその積りで大いにやりませう。愉快だなあ。』
『到頭始まつた。ハツハヽヽ。』
『中風呂敷だ。これからダン／＼擴げる。』
『堅固君、僕は始終寺内君に吹き飛ばされるんだよ。』
　と豐彦君が説明のやうに言つた。
　寺内君は早速擴げ始めた。一しきり氣焔を揚げた後、
『ところで實際問題だ。この三人の中で誰が先鞭をつけるだらうかな？』
　と首を傾げた。
『それは君だよ。』
　と豐彦君が言つた。
『いや、君だぜ、屹度。』
『何故？』
『君は好い題材を持つてゐる。あれを書いて新聞の懸賞に應じれば一番早い。』
『駄目だよ。』
『何とか言つて、もう始めてゐる

んだらう?』
『そんなことはないよ。』
『堅固さん。』
『はあ。』
『矢つ張り佐藤君が一番早いかも知れませんよ。小説として好い題材を持つてゐるんですから。』

『何んな題材ですか?』
と堅固君は人が悪い。
『僕が出し拔くと思ふのか、詳しいことは話しませんが、早稻田と目白の關係です。』
『はゝあ。』
『主人公は自分らしいが、君の鄕里から女子大學へ來てゐる人があるんですか?』
『ありません。』
『それぢや空想かな?』
『空想ですよ、全然。』
『寧ろ空想の方が囚れなくて宜いんですよ。小説はイマジネーションで行くんですから。』
『駄目だよ。』
と豐彦君が遮つた。
『しかしもう書いてゐるんだらう?』
『駄目々々。』
『書いてゐるんですよ、屹度。默つてゐて、いきなりワツと言はせる積りです。油斷がなりません。』
と寺内君は堅固君へ御馳走の意味だつた。二人の間の競爭については何等知るところがないから、それが堅固君の胸中に起す反應を顧慮

する筈がない。
豐彥君は自分の話し出すことが妙に自分の方へ彈ね戻つて來るので、危くて仕方がない。堅固君を偸み見たら、折惡く視線が衝突した。今更取り繕つても藪蛇になると思つたから、そのまゝ沈默を守つて、寺內君一人に喋らせた。それから時計を出して見て、
『さあ。もう何うだらう?』
と切つかけを拵へた。堅固君も時計と相談した。
未だ早稻田に電車のない頃だつた。二人はブラ〳〵歩いて引き返す。
『豐彥君、僕はこれで當分御無沙汰をするかも知れないよ。』
と堅固君が言つた。
『何故?』
『勉强しなければならない。』
『うむ。』
『來なくても心配しないやうに大野さんに話して置いてくれ給へ。』
『よし〳〵。』
『君は折角小說を書き給へ。』
『書きはしないよ。』
『僕は學生の分を守つて語學を勉强する。』
『變なことを言ひ出したね。』
『ハツヽヽヽ。』
『何だい?』
『變なのは君だよ。』
『何うして?』
『當分つてことを忘れてゐる。』
『忘れちやゐない。』
『それぢや正々堂々とやつて貰ひたい。』
『正々堂々とやつてゐる積りだ。疚しいところは些つともない。』
『小說は本當に書いてゐないのかい?』
『書いてゐない。』
『將來は何うだ?』
『それは書くさ。』
『近い將來だ。當分に屬する近い將來に書く積りか?』
『書けないよ、ナカ〳〵。』
『それぢや當分書かない約束をし給へ。』
『何ういふ意味だい?』
『僕が外交官試驗を受けるまで書かない約束をし給へ。』
『それは無理だらう。』
『ハツヽヽヽ。』
『何だい?』
『悉皆白狀したよ。』
『…………』
『三文小說で出し抜かうつて料簡だ。』
『失敬なことを言ふな。』
と豐彥君はムツとした。

『文章は經國の大業と聞いてゐる。』

『………』

『女の御機嫌を取る爲めに書く小說なら、君の文學はラヴレツターのやうなものだ。三須先生が地下で悲しむぜ。』

『………』

『君は小說の中で僕を貶すんだらう？ 僕の惡口を言ふんだらう？』

『君は自分が始終やつてゐるから然う思ふんだよ。』

『僕がいつやつた？』

『………』

『おい。僕がいつ君の惡口を言つた？』

『よせよ。詰まらない。こゝは中の松原と違ふ。』

『お山が見えないから心に疚しいことをしても宜いのか？』

『文句があるなら、家へ行つてから聞かう。』

『僕はもう歸るんだ。』

『それぢや穩かに話し給へ。』

『………』

『見つともないぜ。君がダン／＼押して來るものだから、往來の人が變に思つて見てゐる。』

『うむ。』

と堅固君は氣がついた。豐彥君は郵便箱と電信柱の間に挾まつて、それから先は溝だつた。

豐彥君はもう日曜に堅固君を待たなかつた。堅固君も姿を見せなかつた。しかし冬休みに一緒に歸省して又一緒に上京した。春休みも然うだつた。交渉は鄕里丈けで續いた。親しさには變りがないけれど、東京では用事以外に顏を合せない。早稻田には早稻田の屈託がある。一高には一高の屈託がある。單にそれに紛れてゐて、他意あるのではなかつた。夏休みが二度來た。もうその頃は歸省も上京も各自單獨だつた。

當分といふ申渡しを受けてから滿二年になる。智惠子さんは女學校を卒業して一年たつてゐる。豐彥君も堅固君も、その間休暇の歸省中、智惠子さんに會はないのではなかつた。同じ村に住んでゐるから、時折見かけた。しかし申渡しを覺えてゐた。

『お久しぶりね。』

と智惠子さんはいつもニコ／＼してくれる。少し赤らむ。

『御無沙汰申上げました。』

『仕方ありませんわ。然うお願ひ申上げてゐるんですから。』

『お變りありませんか？』

『有難うございます。お蔭さまで丈夫よ。』

『お父さんお母さんも？』

『えゝ。』

『それでは。』

『失禮致します。』

『さよなら。』

と大抵それつきりだが、時稀その後から、

『一寸、豐彦さん。』

と呼び止めてくれることがあるから、豐彦君は直ぐに振り返れる用意をしてゐる。

『一寸、豐彦さん。』

『はあ。』

『御勉強していらつしやる？』

『やつてゐます。』

『龍の首は？』

『迚も〳〵。』

『前途遼遠？』

『はあ。』

『しかし見込はあるんでせう？』

『あります。』

『何うぞしつかりと。』

『はあ。』

『さよなら。』

豐彦君は然ういふ折から、いつもジヤンケンの問題を思ひ浮べて意を強うする。此方は着實だ。堅固は山カンだ。それがあれで現れた。そこを考へて特別に扱つてくれるのだと思つて、

望みを將來に繋ぐ。しかし堅固君も一通りの挨拶を終つた後呼び返されるのを待つてゐる。

『一寸、堅固さん。』

『はあ〳〵。』

『あなた矢つ張り一番？』
『はあ。』
『前途有望ね。』
『恐るゝに足りません。』
『折角御勉強を。』
『はあ。』
『龍の首よ。』
『必ず取ります。』
『何うぞ。』
『待つてゐて下さいますね？』
『えゝ。』
『時間の問題です。』
『でも早い方が宜いのよ。』
『はあ。』
『それでは。』
『お父さんお母さんへ宜しくと言へないんですから困ります。』
申上げませうか？』
『眞平です。』
『オホヽヽヽ。』
『…………』
『さよなら。』
堅固君もこれを自分丈けが受ける特別待遇と信じてゐる。豐彦君は

勝手に早稲田へ行つて、勝手に文學をやるのだ。しかし此方は違ふ。元來智惠子さんと相談づくで一高に定めて、外交官を志望してゐる。大學を銀時計で出れば外交官になれるかと智惠子さんが訊いたのである。あれは試験を受けるのだと敎へたら、受けては如何と來た。受けて外交官になればお嫁に來てくれますかと露骨に突つ込んだら、その返答は常識で判斷して差支ないと言つた。要するに豐彦が三文小說を書かない中に、外交官試驗に通りさへすれば宜いのである。

しかし二人はもう問題に觸れなかつた。又夏休みが來て、豐彦君は豫科から本科へ進んでゐた。堅固君は一高を卒業して、大學の法科へ入つた。拳を固めて睨み合つた中學時代とは違ふ。何方も悉皆大人びてゐる。家のことについても、各自兩親から相談を受ける身になつた。その春、豐彦君は自分の家がこの數年間に堅固君の家から度々救援を受けてゐることを承知して、堅固君に一應の挨拶をした。默つてゐて

は氣が濟まなかつたのである。それに對して、堅固君は、

『君、そんなことは問題ぢやない。分家は本家から分けて貰つたんだ。本家あつての分家だ。詰まらない心配はするな。』

とお父さんの精神をそのまゝ享けて、却つて慰めてくれた。

『それにしても……』

『何だい？』

『こんなに迷惑をかけてゐることを僕は些つとも知らなかつたんだ。』

『迷惑ぢやないよ。そんな話は何うでも宜いぢやないか？　お互は學問で身を立てるんだから。』

『うむ。』

と豐彦君は頷いたが、事實、堅固君の將來繼ぐ田地が半分になつてゐるのだから心苦しい。智惠子さんのことは問題が違ふにしても、當事者そのものは同一人だ。見す〳〵迷惑をかけてゐると思ふと、鋒先が鈍る。

七月中旬、二人は鄕里で顏を合せた。堅固君の方が先に歸つてゐた。豐彦君は寺内君に誘はれて北海道へ廻つたから、十日ばかり後れた。堅固君は豐彦君の歸るのを待つてゐて訪れたのだつた。例によつて東京では會はなかつたから、話が一學期分溜まつてゐた。しかし堅固君は用件から切り出して、

『僕は小泉君から妙なことを賴まれてゐる。君、一つウンと首を縱に振つてやれ。條件は僕がつけてやる。』

と冒頭から勸誘の態度を示した。

『何だい？　一體』

『小泉君は親父が死んで悉皆悲觀してゐる。』

『うむ。今度は死んだね。小泉君の父（ファザー）が死ぬ。小崎先生が死ぬ。渡邊村長が死ぬ。』

『名物が急にへつてしまつたよ。尤も好い意味の名物は小崎先生丈けだけれど。』

『小泉君は何を君に賴んだんだい？』

『君のところに小泉君の親父の詫證文がある。そら、お宮のお賽錢をちよろまかした一件だ。』

『うむ。』

『小泉君はあれが欲しいんだ。』

『ふうむ。』

『この間から三度僕のところへ來た。親父の惡辣を認めてゐる。しかし親父が起した家だから、自分が繼ぐ以上は家名の汚點を拭き消したいと言つて、香奠返しに小學校へ五百圓寄附したさうだよ。』

『ふうむ。』

『親父の貸した金の證文も一切棒引きにしたつて話だ。』

『豪いね。』

と豐彦君は小泉君そのものに少しも惡感情を持つてゐない。

『萬事親父の罪滅しつて意味さ。』

『ついてはあの證文を取り返したいと言ふんだね？』

『然うさ。何うだい？』

『さあ。僕は返してやつても宜い。しかし僕のぢやないんだから、お父さんに相談して見なければ分らないよ。』
『ロハぢやないんだぜ。買ひ戻したいと言ふんだ。』
『賣る道理もない。返すなら只だ。』
『それぢや何にもならない。この際だ。千圓取つてやれ。』
『………』
『何うだい？』
『これは君と僕と少し意見が違ふかも知れない。』
『何故？』
『小泉君は親の惡名を雪ぎたいと言ふんだらう？』
『うむ。』
『見上げた心掛けぢやないか？　友人としては大いに同情して援助を與へるのが當り前だ。』
『矢つ張り文學者は甘いよ。』
『何うして？』
『盾の兩面を見なければいけない。小泉君は村一番を心掛けてゐるんだぜ。』
『今でも金なら村一番だ。』
『財産名望共に村一番を心掛けてゐるんだ。ついてはあの證文が人手に渡つてゐると具合が惡い。今の中に取り戻して置いて、後から大きな顔をする積りさ。』
『然う疑つてかゝれば限りがない。』
『君、君のところも僕のところも小泉君の親父を疑つてかゝらなかつたばかりに、何んなにひどい目に會つてゐるか分らないんだぜ。』
『うむ。』
『それだから返すなら千圓取つてやれ。しかし返したくないと思ふなら、僕も今言つたやうな意味から賛成する。』
　と堅固君は甚だハッキリしてゐる。
『後から威張られるんぢや詰まらないね。』
『それだから考へものだよ。斷らうか？　家に確かにあるんだけれど、何處かへ紛れ込んでしまつて見つからないと言へば宜いんだ。これは斷つた上にピンと利くよ。』
『しかし本當に親の惡名を雪ぐ爲めかも知れないぜ。然うだとすれば、返してやるのが友情だ。』
『千圓取つてやらうか？　この際だ。』
『君、この際つてのは何ういふ意味だい？　僕のところが金に困つてゐるからかい？』
『違ふよ。』
『それぢや何うしてこの際だね？』
『小泉君が昨今柄にない佛心を起してゐるから、この際さ。今なら千圓でも出す。しかし一年もたつて見給へ。小泉第二世振りを發揮するに定つてゐる。』
『成程。分つた。僕は矢つ張り僻むのか知ら？』
と學彦君は何處までも正直だ。策士の堅固君には本家が兎角不如意

のこの際千圓稼いでやらうといふ善意の山氣が當然動いてゐたのである。

『何うしよう？ 僕は何方でも構はないんだけれど。』

『小泉君は何故僕に直接言はないんだらう？』

『君がナカ〳〵歸つて來ないからさ。それに君に言つて斷られゝばそれつきりだから、僕に執成しを頼んだのさ。』

『兎に角、お父さんに相談して見る。』

『然うし給へ。お父さんはお父さんで考へがあるだらう。』

と堅固君はもう勸めなかつた。

豐彦君はお父さんと相談の結果、詫證文を小泉君に返すことになつた。

『死人に罪はない。何も言はないで渡してやりなさいよ。』

とお父さんは至つて簡單だつた。翌日、それを堅固君に通じたら、堅固君は早速小泉君をつれて來た。小泉君も最早小倉服の中學生でなかつた。夏羽織に臺灣パナマの特製、立派な旦那さまになつてゐた。

『いや、その節は御鄭重なお悔みを戴きまして。』

と言葉使ひまで改まる。親父の詫證文は直ぐ息子の手に戻つた。

『何うも有難うございます。實はこれについて……』

『いや、もう宜いんだよ、これは。紀元前の古文書だ。』

『賣るの買ふのつて商賣染みた話ぢやないんだよ、君。』

と堅固君が諭したのは君子豹變といふ奴だつた。

『ところで何うだね？ 一家の主人になつて忙しいだらう？』

と豐彦君は氣を利かして、話題を轉換した。

『天手古舞をしてゐる。何が何だか分らない。』

『急だつたやうだね、お父さんは。』

『卒中だもの。朝倒れて、晩にもういけなかつた。醫者の藥を飲んだことがないといふ丈夫一式の親父だつたけれど、死ぬとなると脆いものだよ。』

『五十幾つだつたね？』

『五十五だ。』

『未だ若い。渡邊さんや小崎先生とは違ふ。』

『皆卒中だよ。一月の間に三人だから驚く。』

それも弔辭を讀んだものが死んでゐる。何かの因緣だらうと思ふ。』

『小崎先生が一番先だつたね?』

『うむ。小崎先生の弔辭を讀んだ渡邊村長が死ぬ。渡邊村長の弔辭を讀んだ僕の親父が死ぬ。僕の親父の弔辭を讀んだのは大村校長だけれど、これは未だ死なない。』

『然う死んぢや溜まらないよ。』

『僕の親父は弔辭が頭へ利いたのかも知れない。一體讀み書きは極く不得手の方だつたが、渡邊村長のことだから、是非おれがやると言つて、僕に書かせた。僕ももつとやさしいものを書けば宜かつたのに畢生の學力を揮つて、無暗とむづかしいものを拵へてしまつた。親父は覺えるのに大分頭を使つたらしい。何うもあれが利いて腦の血管が破れたらしい。』

と小泉君は尚ほお父さんのことを話し續けた後、

『ところで豐彦君、序といつては失敬だが、僕は君のお父さんに一寸お目にかゝりたいんだ。』と申入れた。

『何か用があるのかい?』

『今のお禮を言ひたいんだ。』

『それには及ばないんだけれど、家にゐるから丁度好い。一緒に來給へ。』

と豐彦君が案内に立つた。

小泉君は豐彦君のお父さんの部屋の敷居に手をついて、

『お邪魔でございませうけれど。』と平伏した。

『まあ〳〵、此方へ。』

と佐藤さんは快く請じた。小泉君は躙り進んだ。

『唯今は有難うございました。』

『親父の古證文を……』

『何でしたかな？』

『うむ〳〵。そんなことはもう何うでも宜いんだから。』

『親父は兎角評判のあつた男でしたから、僕は責任が重いです。僕は親父の償ひをしたいと思つてゐます。何分宜しく。』

『お互に。』

『この通り若輩ですから、あなた初め村の先輩の御指導に縋る外仕方がありません。何うぞ宜しくお引き立てを願ひます。』

と小泉君は頻りに頭を下げた。

『餘り先輩甲斐もないんですけれど、お互に力になりませうよ。』

『何うぞ。』

『お父さんが大きくした後ですから、君も實際責任が重い。』

『はあ。背負ひ切れません。』

『そんなこともないでせうが、一生懸命におやりなさい。』

と佐藤さんは勵した。元來小泉家は佐藤家の子分だつた。それがダン〳〵と頭を擡げて、佐藤家を凌ぐやうになつたのだから、兩家の間には幾多の經緯があつた。生前の小泉さんは佐藤さんと犬猿の間柄だつたのである。

小泉君は少時話して豐彦君の部屋へ引き返した。そこには堅固君が一人で待つてゐた。

『失敬〳〵、堅固君。ところで僕はもう一つ折り入つてお願ひがある。聞いてくれるかい？　豐彦君も堅固君も。』

『何だい？』

と堅固君が訊いた。

『一身上のことで君達の智惠を借りたいんだ。』

『成程。』

『君達と僕は頭が違ふ。君達は秀才、僕は鈍才だ。』

『そんなことはないよ。』

『いや、お情けで中學校を卒業したんでも分つてゐる。僕は分に安んじる。學問や出世の方は君達にやつて貰ふ。その爲めには僕の力で出來ることなら何でもするぜ。』

『それぢや將來代議士の運動費を出して貰ふよ。』

『宜いとも。』

『ハツハヽヽ。』

『僕は君達の兵糧方を勤める。』

『ところで何ういふ相談だい？』

『一身上の問題で話が込み入つてゐるから、改めて申入れたい。斯うつと、今晩は閑かい？』

『休暇中だから、いつでも閑だよ。』

『それぢや夕方誘ひに來るから、藤島の大黑屋まで御足勞を願へまいか？　久しぶりだ。懇親會をやりながら話さう。』

『さあ。』

『豐彦君、何うだね？』

『行つても宜い。』

と豐彦君が先づ應じた。今しがたお父さんにあやまり閉口した態度が氣に入つたのだつた。

（つゞく）

どつちの手柄

林京太郎

『今夜は此處らで一仕事してやらう』
1
『此奴うさん臭いぞ』
2
『こりや不可れえ』
『ワン〳〵』
3
『ワン〳〵』
『助けてくれっ!』
4
『へん、どんなもんぢやい』
ワン〳〵
5
『ウアッ蜂だッ』
6
『ざまア見ろワン〳〵』
7
『ヤツ此の顏にはかなはねえ』
8

大日本雄辯會講談社ニュース

『愛國歌』大募集

時局に鑑み、更に更に、尙一層の愛國熱を、全日本に鼓吹しようと、本社一度愛國歌の募集を、全國の新聞紙上に發表するや、洵に時機を得たるものと、各方面の大贊成、熱狂的な共鳴をうけ、國を思ひ、君を思ふ、眞に愛國の熱情迸る熱作續々として集り、社内一同只管驚嘆驚喜してゐる次第です。まだ應募されてゐない方々は、本誌別欄御參照の上、此際振つて御力作を投ぜられんことを切望いたします。

婦人子供博で
のらくろ不思議館と
どりこの大噴水が大評判

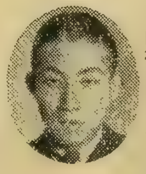
萬國婦人子供博覽會が、三月十七日から東京上野と芝浦を會場として、盛大に開催され、非常な人氣を呼んでゐますが、中でも芝浦會場の本社建設の**のらくろ不思議館**は、タンクに乘つた巨大なのらくろ伍長の勇姿に先づ驚嘆、中へ入れば電氣やレンズ應用の各種の不思議が見られるので、大人も子供も大喜び、人いきれの疲れを休める淸麗な**どりこの大噴水**と共に大變な評判です。

竹の臺會場に
九大雜誌報國塔

更に上野の會場へ參りますと、本社發行九大雜誌の淸新にして明朗な塔が建つてゐます。これは今までに見られなかつた新形式の塔で、日本文化を象徵した見るからに快い氣分のものです。

陣容完璧を誇る
キングレコード

田村しげる氏



竹岡 信幸氏

さきに亘匠西條八十先生、時雨音羽氏を迎へ更にメッオ・ソプラノ渡邊光子孃、彌生ひばり孃の精鋭を加へて、陣容愈〻完璧を誇るレコード部は、こゝに又又流行歌作曲界の新人、**田村しげる氏**、**竹岡信幸氏**との專屬契約成り、今や意氣軒昂、躍進又躍進焔の如き生氣に燃えてをります。何卒、今後の活躍を御期待下さい。

全國巡回 婦人講演會の盛況

本社講演部講師安倍季雄先生擔任の、淸く明るき家庭を目ざす全國巡回婦人講演會は、到る處大歡迎をうけ非常なる盛況を博してゐますこと、玆に誌上より皆樣に厚くお禮を申し上げます。福島縣下に於ける四月の日程豫定は左記の通りです。何卒近隣開催の節は精々御誘ひ合ひの上、御來聽切にお願ひ申し上げます。

日程豫定……

四月十一日 **白河町**、十二日 **須賀川町**、十三日十四日 **郡山市**、十五日 **二本松町**、十七日十八日 **福島市**、十九日 二十日 **喜多方町**、二十一日二十二日 **若松市**、二十四日二十五日 **平町**

名譽ののらくろ トーキーに撮影

今や滿天下の少年諸君の大熱狂、大歡迎を博してをります『少年倶樂部』連載ののらくろ伍長が愈々トーキー版として銀幕上に踊り出ることになりました。のらくろ二等兵の卷、一等兵の卷、上等兵の卷の三卷からなる、この大漫畫映畫は、本社映畫班の手により勇壯痛快、滑稽無類の、のらくろの大活躍を近く皆樣の眼前に展開することになるでせう。何卒その折は皆樣お誘ひ合せの上、精一杯のらくろを聲援してあげて下さい

『未來花』の映畫化と主題歌のレコード吹込み

菊池寛先生の麗筆により、目下『キング』に連載され、天下數百萬の讀者を魅了してゐる評判の小說『未來花』は、今度日活の超特作として、牛原虛彥氏監督、夏川靜江孃主演で、映畫化されることになりました。春季の大呼物として、天下のファンを熱狂させるのも遠くないと思ひます。

尚、これが主題歌として、西條八十先生の作られた未來花の歌、千夜子の歌は、キングレコードに吹込まれました。作曲者は新進田村しげる氏で、氏の獨特な曲想と相俟つて、必ず大衆の嗜好に投じて、大流行するでせう。

（寫眞は夏川靜江さんの千夜子）

待望の鶴見先生の大快著やうやく脫稿

親しく歐米の風雲を探つて歸られた鶴見先生には、刻下の日本現狀を見るに忍びず、此の時こそ一大決心を全國民に訴へねばならぬと、渾身の熱筆を揮ひ、こゝに漸く脫稿いたしました。詳しくは來月號に御報告いたします。何卒刮目してお待ち下さい。

『武藤山治百話』出版

清新潑剌、興味津々たる中に、先生獨特の社會觀を說き、事業のこつを敎へ、床しい人生の探索を述べられたもの、今の世に活躍して居る人、今後大に活躍せんとする人は是非一讀すべきものです

（定價一圓三十錢）

少年少女讀物『動物物語』出版

理學博士 大島正滿先生著

象、豹、熊、虎、ゴリラなどの猛獸をはじめ、鳥類、魚介類、虫類の興味深い讀物五十篇。日本、北米、南米、濠洲、印度、アフリカなどの、初めて聞くやうな面白い珍しい話を蒐めたもの。鮮明美麗な寫眞二百五十枚挿入。

（四月初旬發賣豫定）

教育繪本として大評判！『日本イソップ繪物語』

流石に村岡花子先生の名著、幼稚園から尋常一二年生のお子樣が大喜び、全國的に大好評です。

（定價一圓三十錢）

畢生の戀人雪乃を、主君伊達綱宗の側女に召上げられた三澤賴母は、同じく殿の側女たる妹初子の手引きで、唯一目雪乃に對面しようとしたが、これが失敗に終つたのみか、思はぬ手違ひから御爲派たる諫死組の一人を殺害して了つた。時に綱宗は御爲派重臣達から隱居を强制され、且つ最後の命令書として賴母の討取狀を認めさせられる。かくて賴母は絶體絶命、漸く追手の重圍を逃れて吉原に逃込んだが、其時彼は圖らずも、同じ揚屋に、名殘の遊興を試みる綱宗の姿を見、又其苦しい胸中の述懷を洩れ聞いて、我知らず主君をいとほしむ暗涙に搔き暮れた。〔前號迄の梗概〕

放し討

一

たうとう綱宗は隱居となりました。

萬治三年七月十八日……老中酒井雅樂頭の役宅に、伊達家の代表として立花飛驒守、伊達兵部大輔、大條

時代小説

伊達事變

白井喬二

齋藤五百枝畫

兵庫、片倉小十郎、茂庭周防の五人がまねかれ、席上に老中阿部豐後守、稻葉美濃守なども立合ひまして、雅樂頭から不行跡逼塞の申渡しがありました。

翌十九日、幕府から太田攝津守お使番として伊達家に出張し、綱宗に直々台命を傳へ、こゝにはじめて正式に隱居退身の儀が聞屆けらるゝこととなつたのです。

その時上使の中に『跡式の儀は重ねて仰出さるべし、但し牛込より筋違までの普請は、引續きて相勤むべし』とあり、綱宗の隱居所は品川南大井村の下邸といふ事に決定しました。――この日、時々曇、と萬治日錄に書いてある通り、天日晦冥、彩光は雲間を破つて斷續し、豆を臼くやうな雷鳴が絶えず聞えてゐたと申す事です。

同日。

今一つの事が行はれました。

それは、綱宗遊興のお供をした例の四人の家來、渡邊九郎右衞門、坂本八郎左衞門、畑與左衞門、宮本又

市が、おのおの死刑に處せられた事であります。

惡臣成敗……といふ觸出しで、さしたる糾問もなく直ぐ處刑されてしまつたのです。

殊に、渡邊九郎右衛門の如きは、拘引尋問等の事に及ばず、人をやつて放し討にしました。放し討といふのは、罪狀明白な場合屢々行はれたことで、逃亡抵抗のおそれある者は、引捉ふ手數をはぶき、腕の立つ者を派遣して其場を去らせず討果してしまふのです。

渡邊九郎右衛門は貳拾兩貳拾人扶持、疋田流槍術の名手でした。

だから……これに荒れ出されては手強くもあるし、大變な饒舌家であつたから、行掛けの駄賃に、要らぬおしやべりをされても事面倒と、わざとこんな手段を執つたのでせう。

此日、放し討に向つたのは、渡邊金兵衛、渡邊七兵衛の兩人でした。同姓ですが別に親戚でも何でもありません。たゞ、姓が同じゆゑ、平常親しく交際つてゐたものらしく、こんな場合、相手に油斷させるには都合のいゝ連中だつたのでせう。

座敷に通つて二言三言いふと、金兵衛は、突然、

『碁盤……』

といつて片隅を指しました。

九郎右衛門が何氣なくそつちを振向く途端、七兵衛が、

『上意！』

と云つて斬りつけました。

不意を喰つて九郎右衛門は、

『おのれツ！』

と叫んで身を跳ね退きましたが、尖刀が、眉間を外れ、肩先へ、二三寸斬りこみました。

『あ！』

と蹌踉きながら、それでも立ち上つて、へだての唐紙へ手を懸けました。次の間の長押には手頃の槍が二本懸つて居たから、それを取るつもりだつたのでせう。

『渡邊氏上意である、觀念せよ。』

と再び云ひ聞かせて、二の太刀を打卸した時、唐紙が外れて九郎右衛門は次の間に轉げ込みました。

『待てツ、卑怯な、何理由あつて……』

と云つて跳起きようとする所を、上から蔽ひかぶさつて左の頸の根を發止と斬りましたので、さしもの九郎右衛門もそのまま聲もなく息絶えて了ひました。

これが成敗の實狀でした。

他の三人の內、宮本、畑ば引立てられて目付所で斬られ、坂本

はやはり放し討になりました。君公を惡所へ誘ひ、淫蕩に陷れたといふ罪名ですから、無論、お家斷絕、一族は遠流の身の上となり、一代の豪遊王綱宗朝臣の榮華の夢はこれで全く跡形もなく終りを告げたのであります。

二

然しながら、こゝに、終りを終りと見ない連中が居りました。

それは刺客組です。

此前大條兵庫に斬りつけた刺客も、殿隱居とならば益ゝ重臣を鏖殺せずには措かんと豪語しましたが、それが、本當となつて、刺客組の結束は益ゝ猛烈でありました。

彼等の持論は、君側の奸は敢て渡邊九郎右衛門等四人に止どまらず、江戸詰昵近の重臣こそ悉く奸中の奸、これを除かずんば有る可からずといふ意氣でした。

物騷であるけれど徹底的です。

たゞ、さういふ物騷な連中だから、常に一定の場所に居るわけには行きません。昨日は東、今日は西……といふ工合に、絕えずその屯所を變へて居ります。此の前は向島の小梅村でしたが、今は青山奥の穩田村にこつそりと其の本部を設けてありました。

十九日の夜には、此の刺客團本部へ、綱宗公の逼塞公許の事から、惡臣成敗の事まで、悉く、報告が集つて來たので、團員は額を鳩めて昂奮の極に達して居ります。

一人が、

『斯うなつた以上、却つて、我々の仕事は遣りよくなつた。』

といへば、一人も應じて、

『勿論。』

と叫んで居ります。

百姓家の三間ばかりあるのを簾越に打拔いて、その一番奥の間を、會合に使つて居ります。

勿論、表構へは藩學徒の寮舍のやうに裝ひ、玄關口には如才なく、仲間風の團員が、將棋盤を持出して、張番の役に就いて居りました。

『殿が逼塞していゝくらゐなら、何も、我々は、最初からこんな苦勞はせん。』

『第一、殿がさういふ事に成つたのに、側近の重臣が知らん顏をしてるといふ法があるか。』

『知らん顏ならまだ可愛いゝが、彼等は如何にも知つた顏をしてるのだ。即ち、殿を押込め奉つて、それで、御家安泰、天

晴れ忠義貫徹と心得てゐるのだから怪しからん。』

『待て、所が、それはまだ買被つてゐる。彼等は本當に忠義を貫徹する考へがあるだらうか。』

『ない。』

『さうだ。斷じてない。忠義の名を假りて不忠を働いてゐるのだ。』

『忠義の假面だ。』

『獅子身中の蟲だ。』

『彼等は、幼名を立て奉るのが最初からの目論見だつたのだ。』

『主家横領。』

『藩政專斷。』

語氣が激して來た時、

『第一。』と一人が割込みました『冷靜に考へて見て、今日の下臣の成敗は何たるざまだ。隱居となるほどの殿の御不行跡を、高が納戸役目付役どころの渡邊九郎右衞門や坂本八郎右衞門を成敗して、それで涼しい顔をして居れるといふのが抑も彼等に良心のない證據だ。』

『下に辛く、上に厚く――』

『而も、その下を放し討にしてゐる。』

『裁きの座に連れ出せば、彼等の陰謀が露見するからだ。』

『咄、醜魁！』
『手段はたゞ一つ！』
『斬るか。』
『さうだ、重臣を悉く斬る事だ。』
『それこそ天下の大義、彼等の贋忠義を我等の眞忠に依つて制裁するのだ。』
『起て諸君。』
『よし、やらう！』
『一人一殺。』
『これから——』
と云つた時、
『おい皆ンな、軍用馬が居無いツ、盗まれたツ！』
といふ聲が裏口でしました。

三

『何ツ？』
といつて家の中の一同は思はず立ち上りました。
『軍用馬？』
『さつき軍資金を附けて來たばかりのあれか？』
『さうだ、あの馬だ。』

『エツ、そ、そりや大變だ！』
『みな狼狽てるな。』と一人が總崩れになりかゝる一同を制しました。『軍資金とか軍用馬とかいふ言葉を、さう安々と使ふな。もつと、落着け〳〵。』
『うむ、それはさうだが……然し折角届いたあれを盜まれては我々の準備は――』
『兎に角厩に行つて見よう。』
裏口や横椽に脱ぎつ放しの履物を、各々パラ〳〵と、とびつくやうな恰好で穿いて、急いで、背戸の厩へ駈けつけました。
『おゝ成程ツ、居ないツ。』
『これは驚いた、藻抜の殼だ。』
『誰だツ、こゝを見張つてゐたのはツ？』
『杉村だが……一寸煙草の火を取りに行く隙にやられたのださうだ。』
『杉村ツ。』と一人が呼びました。『本當か？』
『杉村は此處にゐない、今、その邊へ追つて行つた。』
『ちえツ、仕方がないな。』
『第一、馬が着くと何故直ぐ荷物を卸さなかつたのだ。荷物さへ卸しとけば、馬だけ盜まれたとて、さして堪へはせぬ。』
『向ふは馬だけなら曳いて行かないだらう。』
『だから、何故……』
『今更、こゝでそんな事を云つたつて追ツ付かない。』と一人が昂奮する一同を鎭壓ました。『それよりか、米俵の中に仕込んであつた資金袋を、盜んだ奴が知つてゐるかどうかだ。それによつて、我々の態度も決めなければならぬ。偶ツとすると、我々の背後の力を、江戸詰家老が探らうとしてゐるのかも知れぬ。』
『ふうむ……』
といつて一同は、急所を衝かれたやうに青い顏をして默つてしまひました。
背後の力。即ち資金の出所でせう。刺客組の背後に動く影武者、勿論それを極秘にする誓約の下に資金が出てゐるに違ひないから、如何なる理由があるにしてもそれが露見する事は、刺客組に取つて潔い事ではありません。形は殺人團でも、飽まで忠義の一黨と信じてゐる彼等には、みすみす內兜を看破られ、後援者を裏切るやうな事になるのは辛いのでせう。――暫く、沈默が續きました。
突然一人が、
『然し。』と云ひました。『どつちにしても我々の不覺だ。盜んだ奴が資金袋を知らうと知るまいと、そんな事はどうでもいゝ、この上は只決行を急ぐばかりだ。飢渇盡忠、今は、正に、たゞ

その一途あるのみだ！』
『好からう……塞翁が馬。資金を盗まれたばつかりに、我々の目的が豫定より早く貫徹される事になるなら、こんなうまい話はない。おれも、これから出懸けよう。』
『さうだ、夜陰に乗ずるやうな姑息な手段を執らず、白晝踏込んで斬るか。』
『さうとも、彼等が渡邊、坂本を放し討にしたやうに、こつちも公然乘込んで行つてバツサリやる。』
『よし、おれも行くぞツ。』
二三人は氣早やな連中と見えて、直ぐ家の中に駈上つて、がたがた身仕度をとゝのへると、一刀の者もあり、兩刀の者もあり、それぞれ面上に決心の形相を浮べながら、肩立に出て來ると、
『おい、おれたちはこれから行くぞ。君達はゆつくり馬の行方でも捜してゐたまへ。』
厩の前に佇む連中に、そんな皮肉を浴びせかけながら、わざわざ、内庭を通つて表門の方へ出て行つた。
『はやまるな――馬の決着を見てからでも遲くないぞ。え、おい？』
さういつて、後から窘めるやうに云つたが、
『なアに、おれはおれの受持の事だけは片付けてくる……忠義の爲には、われ向日葵の花とならん！ あばよ。』
どや〳〵と出て行く門外から、その時、恰度、こつちへスイと這入つて來た一人の侍がありました。
『御免……少々お尋ねいたしまするが。』
さう云つたところを見ると、それは三澤賴母でありました。

四

『あツ？』
『君は？』
『三澤氏ではないか？』
こつちの連中は、一緒に、思はずさう叫びました。
『おゝ、やつぱりこの家だつたか――』
賴母はどうやら、こゝを目當てにやつて來たものと見えて、自分の名を呼びかけられて吻としたやうに忽ち喜色を表はしました。
『この家？』刺客組の連中は、圖星を指すやうな賴母の言葉に對してすぐ警戒しました。『三澤氏、君は、何しにこゝへやつて來たのだ？ こゝへ我々の居ることを知つて來たのか？』
『さうだ、知つて參つた。』さうして、急いで、額の汗をぬぐひ

ました。』あゝよかつた、こんなに手輕るに分らうとは思はなんだ。この邊は埃ツぽいから歩くのにどうも骨が折れて……とにかく、その邊の緣端にでも一寸休ませて頂きたい。』

だが、刺客組の連中は、互ひに目を見合つて突立つたまゝ、そこから中へ入れようとはしませんでした。

『さうは參らぬ、話があるならこゝで聞かう。』

『こゝでも話せない事もないが……どつか緣端にでも。』

『いけない。そこで話し給へ。一體君は、こゝをどこから聞いて來た？』

『小梅村で。』

『何？――いや、あそこではさう安々と分る筈はないが。』

『だから隨分苦心した。いろいろ聞出しに骨を折つて、やつと方角だけ分つた。今、君等から名前を呼ばれた時は、まるで、地獄で佛、夢ではないかと思つたほどだ。兎に角、こんなに早く分らうとは考へなかつた。――君、さうだ、君達に一つ頼みたい事がある。』

頼母は一頃のやうに內省的な落着を失つて、多少、そわそわとした輕躁なところが出來てゐました。たゞ、眼の奧の方には、まだ、僅かに、一脈の純性が潛んでゐるだけです。

『何だ、云つて見たまへ！』

『わしは……君達の仲間に入黨したい。』と頼母は、聲を絞るやうに急いで云ひました。『どうか、是非、さうさせてくれ。刺客の一員となつて働く。』

『ふん。』刺客組は鼻先で彈きました。『三澤、君は、そんなことを頼む資格はないよ。』

『ある。』

『あるものか。第一、君は此間我々の前に現はれた時は、どういふ立場であつたか知つてゐるか。――隅田堤の上で、我々と行き會つた時は？　あの時は、君は、我々と反對に立つ江戸詰家老の組織した防止組の使者としてやつて來たのではないか！』

『あの時はさうだ。』

『あの時さうなら、今だつてさうと見る。』

『いや、あの時だつて使者とは云ひ分、內部とは何の關係もなかつたのだ。たゞ防止組の連中に仲裁を頼まれて、臨時に引き受けたまでだ。あの場で斬り合ひになつたから……わしは、すぐそこを去つた。たゞそれだけだ。仲裁だけの使者だ。疑つてもらつては困る。今日は感ずる所があつて是非君達の仲間に這入りたいと思うて……』

『さうは行かん！』と刺客組は呶鳴りました。『第一、今君がこ

の邊を迂路々々してゐるといふのからして怪しい。』
『迂路々々してはゐない、君等を訪ねて來たのだから。』
『それが怪しい。』
『入黨させてもらひたいと思つて。』
『君は江戸詰家老の廻し者だらう。間諜だらう。』
『馬鹿なことを云ひ給ふな。』賴母も赫としました。『わしは今、實は、諫死組の連中に狙はれてゐるのだ。諫死組は江戸詰家老と氣脈のある輩。それに狙はれてゐるわしが何故間諜だ。第一、諫死組に、わしの討狀を許したのは江戸詰家老達ではないか。この事實に依つて疑ひを晴してくれ。』
『そんなら君は、身の置所がないために、命の隱し場所として刺客組に入黨するのだな？』
『それもある。』と賴母は正直に肯定しました。『それもあるが、……實は、殿の御遊興を曲解してあゝした大事を惹起してしまつた家老達が憎くなつたのだ。討狀の復讐ではない。君達の忠義に同心するのだ。おれは殿の御不行跡を責める氣持を變へて、家老を責める氣持になつた。だから、君たちのところへ逃げ込んで來ても決して間違つてはゐないつもりだ。だから、どうか是非……』
『然し。』と刺客組の一人は、やゝ落着いて遮りました。『どつちにしたところが君のいふ事を全部信ずるわけには行かん。とにかく、一應君の身柄は我々が檢束する。こつちに來給へ！』
三人の手が賴母に掛つて、罪人でも捕へたやうな恰好で裏庭の方へ引立てゝ行きました。

五

檢束……といつたが、實際縛らんばかりの嚴重さでした。
裏口の物置小屋の中に叩きこまれて、そこから一歩も出しません。入口に見張が三人、中に二人這入つて來て、凄じく睨めまはしながら小突くやうに取調べるのです。賴母は覺悟をきめました。血を見る事を本願とする刺客組の事、怪しいと見たらば早速血祭に上げるでせう。いや、怪しいと見なくても、少しでも曖昧な所があれば、容赦なく斬捨てるに違ひありません。——簡短に入黨出來ると思つたのが間違ひでした。尤も、刺客組に縋らなければ、結局諫死組の毒刃に仆れるのが必定です。どうせ死ぬならどつちでもいゝやうなものゝ、然し、息ある內に今一度雪乃に會ひたいと思ひました。
だが、既に遲し。
最う、爼上の鯉の如く、刺客組の前に生命を晒してしまつてゐるのです。

物置小屋は高窓が一つ。入口は二尺ばかり開いてゐるが、それだけでは迚も風は通りません。蒸籠のやうな蒸暑さの中で、調べる刺客組の者だけが、バタ〳〵と扇子を使つて涼を入れて居るのです。

『三澤、君は。』と一人が、わざと遠廻しに聞きました。『こゝに厩のある事を知つてゐるか。』

『知らない、今日始めて來たばかりだから。』

『今、厩の中の馬を引出して逃げた奴があるのだ。』

『引出して逃げたといふと？』

『どう思ふ、さういふ奴の事を、君は？』

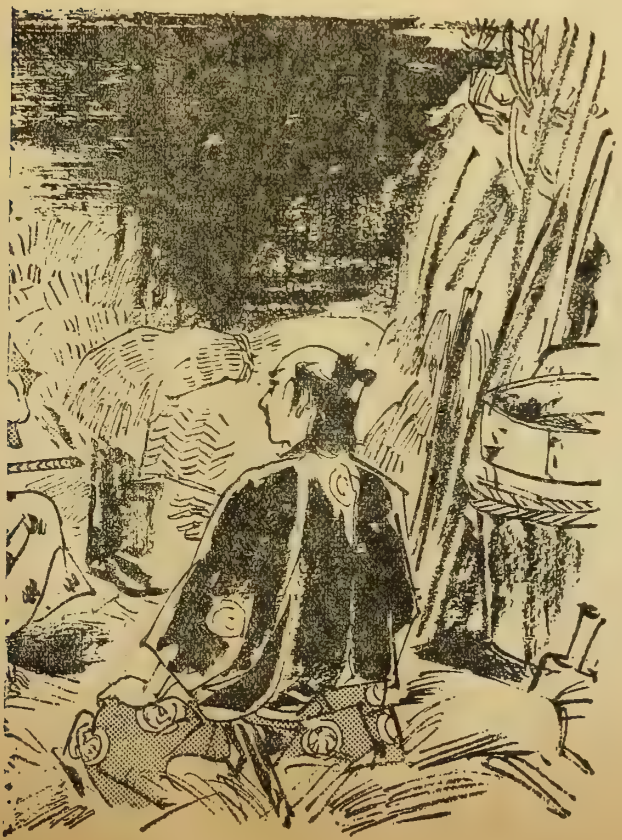
『馬泥棒か知ら。』

『さうだ。馬泥棒だ。然しこゝがたゞの百姓家なら何でもないが……つまり、住んでる者が我々だから、隨つて、その馬泥棒にも曰くが附くわけだ。』

『すると、君等の事情を知つて、盜んだといふのか？』

『君はどう思ふ？』

『わしは何とも思はぬ。今そんな事を判斷してゐる餘裕がない。』と賴母は云ひました。『それよりも、快く君等の仲間に入れて貰ひたいことだ。』



『顧みて他を云ふな。』さう云つて、刺客組の一人は、賴母の樣子をヂツと見詰ました。然し、賴母の樣子からは、どう思つても、怪しい節を發見する事が出來ませんでした。『ぢやア——君が若し刺客組に這入つたら、誰を刺す？』

『誰でもよい、君等の命ずるまゝで。』
『諫死組の方はどう始末をつける？』
『君等の助力を願ひたい。』と頼母は、本音吐くやうに云ひました。『君等の命ずるまゝに働く代り……どうか諫死組の方は眞逆の時に助力を願ひたい。出來ることなら、わざと誘ひ出して早く始末をつけて了ひたいとも思つてゐる。筋違ひの討狀を附けられてゐては、身體に大きな足枷を繫がれてゐるのも同じ事だから。』
『さうか。』
刺客組の者は、やゝ諒解しかかつた樣子です。
それは、諫死組に付狙はれてゐる爲に、こゝへ逃げ込んで來たといふ理由が極めて當然に思へたからでせう。けれども――それだから、すぐ、刺客團へ加入させるかと云ふと、それは亦別問題です。云はゞ少し自分勝手な加入申込み理由ですから、それを早速諾き届けるほどの好意は持てません。たゞ、多少、敵意が緩和され、殺氣がゆるんだといふだけの事で、依然頼母の死生は彼等の手中に握られてゐるのです。
『どうか、これほど事を分けて云つたのだから、是非とも……』

頼母は、こゝぞとばかり頼みました。『如何なる難所へでもぶつかる。』
『どうしよう？』
と云ふやうに、刺客組の二人の目が空中で行合ひました。加入せしめるか、それとも、後難のないやうにバッサリ殺つてしまふかと云ふ、二つに一つの相談です。

と、その時、物置小屋の外が急に騷々しくなつて、

『發見つた〳〵、馬泥棒を追ひ詰めた、みんな手を貸してくれ！』

と叫ぶ聲が聞えました。

六

この聲に頼母の方の話は中絶して、今まで調べてゐた刺客組は、みな大急ぎで外へ出て行つてしまひました。

ガタン……と戸が締まり、錠前の卸る音がして、小屋の中には頼母が一人取り殘されました。

『まるで牢獄だ――人間が落目になると……』

頼母はさう思つて、觀念の目をつぶりました。

だが、かうやつてゐれば無事です。諫死組に襲はれる心配はない。然し、一歩誤れば刺客團の刀の錆です。而も、小屋の中に一人取殘された途端、頼母はふつとさうした不吉な豫感に塞されて、

『もう駄目だ。』

と思ひました。

暫くすると、狼狽しい跫音が聞えて、小屋の戸が開くと、さつきの刺客組の一人が勢込んで這入つて來ました。

『斬られるな――』

頼母が、ギクリとなつて、何となく、身構へした時、

『おい三澤。』と彈むやうな聲で云ふのです。『君が加入したいならば、君の誠意を試して見たい事がある。』

『え、加入させると云ふのか？』

『まだ分らぬ。』と相手は頭を振りました。『だから、君の誠意を試してからと云ふのだ。』

『どうすればいゝのだ。』

『今馬泥棒を追ひ詰めた……そいつが中々手强いのだが、それを君に一つ手傳つてもらひたいのだ。多分、江戸詰家老の間諜だと思ふ、どうやら飛道具を持つてゐるらしいので一寸難物だ。』

『何、飛道具？』

『馬と米俵とは取返したが、米俵の中に這入つてゐた物……君が手傳ふといふならその物は云つて聞かせるが、その物を拔き盜つて逃げる所を、やつと一方へ追ひ詰めたのだ。然し、今いつたとほり飛道具を持つてゐるので、それから先きが近寄り難い。』

『相手は何人だ？』

『一人だ。』

『逃げ込んだ場所は？』
『穩田畑の蘆叢だ。君は知るまいが、あそこは、二三町四方もある深い茂みで、而も眞ん中の方に穩田川から通じた水溜りがあるから、あそこへ逃げ込まれたからには少々面倒だ。』
『そこへわしに行けといふのか？』
『厭なら厭でもよろしい。』
『行かう！』と賴母は引受けました。『飛道具といふのは何だ？』
『多分……魚狩に使ふ爆裂竹らしい。そいつを振廻して打つぞ打つぞと云つたさうだから……四方の出口は固めてあるから、夜にならぬ内に踏みこめば取逃すやうな事はない。君が、江戸詰家老に關係がないといふなら、そいつを引つ捉へてくれゝば一番早分りがする。』
『よし、やらう。』賴母は、然し蒼白た顏でした。所詮、どつちへ向いても逃れられぬ運命です。『だが……引つ捉へそこなつたら斬つてもいゝか。』
『さア？』と考へて『仕方があるまい。』
『村方（役人）の方はいゝな。』
『人をやつて渡りをつけたから大丈夫だ。但、單なる馬泥棒といふ事になつてゐる。』
『拔き盜られた物……といふのは？』
『そいつはな、いゝか、三澤、大丈夫やるな？』と念を押してから、近づいて小聲でいひました。『軍資金だ。多分、五十兩は這入つて居よう。』
『さうか。』
賴母は靜かに立ち上つて居りました。
『では、その穩田畑とやらへ案内してくれ。』

蘆の中

一

蘆の葉先は、風にソヨ〳〵と戰いで居りました。
その上に、晝の月が、ぽかりと一つ浮んで居ります。
夕方近いのか、朝なのか、分らぬほどの閑寂さでした。――たゞ、どこかで茅蜩の聲が聞えてゐます。でも、見わたす限りつらなる穩田畑の青蘆の上には、未だ、きらめくばかりの强い日が輝やいて居りました。
『では、やつて見る――』
と振り返つて、寂しく苦笑して、賴母は、その蘆の路に歩み

寄りながら、
『玉と散るか、斬るか。生捕にしたら大手柄だ。』
とつぶやきました。
『成可く生捕にしてくれ。』

『さう参らぬかも知れぬ。』頼母は、蘆の彼方を指して、『この方角だつたな?』
『さう〳〵。こつちに合歡木が二三本あるだらう。あそこからズツと左に寄つた、一番蘆の深い邊だ……そこから直ぐ向ふに水溜がある。愈〻となると水に潜るつもりで、その邊に隱れてゐるに違ひない。夜になつてから逃出すつもりだらうから、大丈夫必と居る。しつかりやつてくれ。』
刺客組の激勵を背後に、
『行つて來る。』
と頼母は、大股に歩き出しながら、
『爆裂竹が鳴つたら這入つて來て貰はう――向ふを仆すか、こつちが仆れるか、どつちかに決つてゐる時だらうから。』
と大聲で云ひました。
やがて頼母は蘆の中に這入つて行きました。
そこには細い通路があるのですが、地面が凸凹になつてゐるので、頼母の頭は向ふに行くに隨つて見えたり隱れたりし

出しました。蘆も亦、中央になるほど丈が高く伸びてゐるのでせう。終ひには、頭の見えない時の方が多くなり、やがてサラサラと搔分ける葉末の戰ぎで、あゝ今あそこを歩いて行くなといふ事がやつと分るやうになりました。

『割合に大膽だ。』

『引くに引かれぬ所だからな。』

『うまい役目を振當てたものだ。』

『今に、あの葉先が大嵐のやうに搖れ出すだらう——我々は、馬泥棒と命の遣取はしたくないからな。』

『もうあの邊から、そろそろ……』

こつちの刺客組が、てんでに勝手な事を云ひながら、事の成行を傍觀してゐる時、頼母は、合歡木近くの蘆の中に分け入つて、身を屈め、ヂツと向ふを透して見て居りました。

蘆の中には、何の物音も聞えませんでした。

實に靜なものです。別な國へ突然取落されたほどに靜かで、そして青臭いやうな草いきれと、縞を織るやうな風とが、いよいよ外界との隔りを作つてゐるやうに淸らかでした。

頼母は、天を仰いで、

『あ？』

と思はず驚嘆したほど、天の麗はしさに見惚れました。
蘆の中から覗いた天は、眞に、始めて見た玻璃球ほどにも美しいものでした。
『こんな所に馬泥棒が？』
と考へると、頼母は、折角の綺麗な座敷へ泥足で上られたやうな、清淨を汚されたといふ腹立たしさが、勃然と起つて來ました。
『よし、草の根分けても！』
全く、草の根分けてもです。
蘆の根を兩手で掻分けながら、頼母は、注意深く前方、左右へ、目をくばり〳〵少しづつ進みました。
風が出て草の葉先を搖がす時、頼母は、それに乘じて、一層前に進みました。向ふを發見する事が勿論目的には違ひありませんが、然し、その發見の仕方が、突然で、あんまり身近だと、非常な危險が伴ふのです。相手の飛道具がどれくらゐの威力のあるものか知らぬが、兎に角火藥を提へてゐるのですから、多少の隔りをおいた所で發見する必要がありました。
『水溜のところまで行つて見よう。』
と思ひました。
水溜が中心ですから、この蘆の中に逃げこんだ以上は、どうしても一旦そこまで入り込むに違ひありません。追ふ方から云つても、矢張り、そこまでは行つて見る必要がありました。
地面が少しづつ、濕氣〳〵として來たかと思ふと、向ふに、チラ……と白い水の光りが見えました。
『うむ、あそこだ！』
頼母が、思はず四ツ這になつて、蘆の中を這出さうとした時、向ふの水際に、何か、黑く、動くものがありました。

二

『おや？』
と思つて、頼母は、這ふのを止めて、目を凝して見ました。
よく見ると何も動くほどの物はないが、水際に二つ三つ、積重つた炭俵が轉がつて居りました。その間から、黑い襤褸布のやうなものが食み出てゐて、それが、こつちの水溜の入江のところに映つてゐて、風が吹くと水面が搖れるので、却つてその黑い襤褸布が動くやうに見えるのです。
然し、頼母は、
『はて？　あの襤褸布が怪しい。』
と思ひました。
四五間へだたつて居るのです。

とにかく――と思つて石を拾ひました。
そして風の吹いて來るのを待つて、そいつを、ポンと投つて見ました。
一度はそこまで屆かず、二度目は襤褸の上に當りましたが、別に何の異常も起りません。三度目は炭俵の上、四度目に亦襤褸布に當つた時、炭俵がむくむくと動いて、一番向ふの端から、ひよいと頭が出て、こつちを振り返つて見ました。
人間です。
『あツ?』
と賴母は咽喉元で魂切りました。
然し、それよりも驚いたのは相手でした。
風の吹き起るたびに石が當るので、何か自然の作用とでも思つたのでせう。さうでなくては、滅多に頭を出す筈はないが、うつかり釣られて、炭俵の甲羅の中から正體を現した人間は、こつちの蘆の中に蹲つてゐる人影を見て、今はこれまでと思つたか、そのまゝの姿で水際をずる〳〵と這ひ出しました。向ふの蘆の中へ逃げ込まうとするのでせう。
賴母は、
『おい、待てツ。』
と叫びました。
少し可笑しいやうな氣持も手傳つたので、大きな聲が出ませんでした。
相手は、一枚だけ乘つかつてゐた背中の炭俵を、四ン這のままはふり落して、何か手に持つてゐるものを、抱へ込むやうに、すばやく、取り直した樣子です。
爆裂竹?
賴母は、すぐさう思ひました。
愈よ、一か八か――。
さう思つた時、相手は、突然、片つぽの肩をガタリと落して、こつちを狙ふやうな恰好をしました。
『待て、話しがある。』
と賴母は、急いでいひました。
『こら、何をする、抵抗いたすと身の爲にならぬぞ!』
續いてさう云つた時、相手は急にピンと身體を伸してペッタりと坐り、兩膝の上に二本の手を突つ張つて、
『ふゝ。』
と笑ひました。
急に人の變つたやうなぐんにやりした態度です。
その人間を見た時、賴母は、
『あツ、貴樣――』

といつて二の句が次げませんでした。
それは弟の望四郎だつたのです。
惡弟望四郎。
久しく眼界から消え去つてゐたその望四郎が、突然炭俵の中から……否、どこから現はれようとそんな事はいゝが、今自分が引つ捉へようとしてゐる馬泥棒は、思ひもかけずその望四郎だつたのです。さうと知つて茫然自失するほどの驚きが頼母の身内を襲ひました。彼であれば、何も理窟あつての事ではなく、全くの惡心だけの物です。引つ捉へて、どこにも見所のある奴ではない。勿論、自分もこいつには怨みがある。然し、今、馬泥棒として現在の弟を引つ捉へなければならぬ自分の運命を、頼母は、咄嗟ながら、悲しいことに思ひました。
『き、貴様は、十兩の抵當に兄を賣る奴だ――五十兩の軍資袋に目がくらむのは無理もないが、よくよくの極道者……貴様だつたとは知らなかつた。』
頼母が腸を絞るやうな聲でいふのを、
『ふゝ、さうこきおろしなさんな、久しぶりで會つたんぢやねえか。』
と望四郎は、それでも弱つたやうな作り笑ひをしました。

三

いや作り笑ひではない、恐らく本當の笑ひでせう。切羽詰つた土壇場に、追つて來た相手が兄と知つては、如何に惡事に掛けて親を滅する彼でも、身內の嬉しさをつくづく感じたに違ひないのです。

みくびつたやうな目が、

『あゝよかつた。』

と、恐悅してゐます。

賴母は他人以上の警戒を拂ひながら、

『どうするつもりだ！』

と簡短に疊みこんで見ました。

『どうするつて、金が欲しい。』

相變らず傍若無人な物言ひ振りです。

『金の話ではない……貴樣の身柄を引ッ括りに來たのだ。』

『そいつは不心得だね。』

『何？』

『第一血をわけた現在の兄弟……おいらアな、お前の顏を見た途端に嬉しくつて、こ、これこんな風にペツタリ坐つてしまつて腰が立たねえ。』

『默れツ！』と賴母は激怒しました。『口から出放題の逃口上をいふやつだ。小梅村の防止組に十兩の懸賞金でわしをはめこん

だのは誰だ。それでも兄弟といへるか。』
『そりやいへるよ。』と望四郎は平氣な顔でした。『その代りお前は、あの時、二十兩の金と立派なお衣裳とを貰つたぢやねえか。おれは賞められこそすれ、怒られる筈はねえつもりだ。』
『それは結果だ。わしのいふのはそちの心根だ。その心根を憎むのだ。現在の兄たる者をおめおめ甘言を以ておびき出し、金と引換へに他人の手に引渡すといふ心根だ。——その後で、たとへわしが金子を得ようと、それは別問題だ。而もあの時、そちは裏から逃げ去つたではないか。自分でも惡い事をしたと思へばこそ、わしを置き去りにしたのだ。』
『然しね……』と望四郎はけろけろとした調子でいひました。
『お前はおれを斬らうとしたこともあつたからね。』
『何？』
『置き去りや、はめこみぐらゐ勘辨してくんな。』と本性を現はしたやうに首を上げて、グニャ〱と手を振りました。『だから、こゝんところは大負けに、お互ひ帳消しツてことにしよう。』
『うむ……』
言葉では到底敵ひません。例の惡の利いた話術、まんざらの非理でもないやうに聞えるところが不思議な業でした。かうなつて來ると賴母は、いつでも受太刀になつて來て糸目を解されるやうに、何となく丸め込まれてしまふのです。
然し、今日は……と考へましたが、その今日も、もうそろそろまくし立てられてゐる。第一、斬らうとした事があつた——といふ一言は巨彈でした。あの時の心裡は、綱宗侯への忠義……と自ら辯解はしたけれど、實は大部分自分の榮譽心が手傳つてゐる。そこを考へる時におのれをよき兄と云ひ切れぬ節がありました。それあるがために、今の言葉は強く胸に堪へ、そして今亦、己れの身を守らんがために引受けたこの追手が、圖らずも弟を召捕る事になつた廻り合せを、心の中ではすでに充分當惑してゐるのでした。
『そこで、そいつは帳消しツて事になつても、これから先きの事は又別だ。』と望四郎は物を味ふやうに小首を傾げながら云ひました。『つまり……お前の請負の方が大きけりや、そこんところは、どうも、算盤玉の立つやうにしなけりやなるめえ。』
『どういふわけだ。』
『おれの懐中にある資金袋……こいつはな、確かに五十兩這入つてる。然し、いゝかい兄ちやん、若しもだ、お前がおれを召捕つたら百兩になるつていふ約束があるなら、そこんところが一寸面白くなる。五十兩と百兩とぢや、何しろ、五十兩の差違

があるからな。』

『たはけ！』頼母は呆れました。『金づくで、このやうな仕事が引受けられるか。』

『そいつア威張れねえよ。』と望四郎は、失望したやうに云ひました。『たゞ働きはへマつてものだ。然しお前の事だから大方そんな物だらう。あゝあゝ勿體ねえ。だが、おれもそんな取引ぢや、濟まねえがお前の繩目にかゝるわけには行かねえ。やつぱりこの五十兩だけで斷念とかう。』

『望四郎。』

『あゝ。』

『おれは今、咄嗟に考へたが……』と頼母は云ひました。『お前の身柄ぐるみ引ッ括るか、それともその五十兩袋だけこつちへ取戻すか、二つに一つだと思つてゐる。然し、お前をこゝで取逃すと、假へ金子は取戻しても、わしもぐるだと思はれさうだ。と云つて、貴樣を引ッ括ればわしの弟と知れる。家門の恥だ。わしの手に依つて亡き父上母上に、みすみす泥を塗るやうな物。それを思ふと、一層、貴樣をこゝで叩き斬つて切腹……』

『おつとつと。』と望四郎は手を擧げて大仰に制しました。『つまんない事を考へなさんな。兄ちやんは、肝心の事を忘れてゐる。』『何？』

『一番いゝ事を忘れてゐるから苦しむんだよ……いゝかね、どんな事だつて肝心の事を忘れてゐた日にや、いつまで經つたつて結局のつく筈はねえ。』

『何だ、肝心の事といふのは？』

『二人で逃げる事さ。』とあつさりと云ひました。

四

成程……それはさうかも知れません。何も、頼母だつて、刺客組にそれほど深い義理がある譯ではないから、こゝで二人で逃げる事は一つの解決法で無いこともない。

然し、それは頼母の心の許さぬ所でした。第一、五十兩の金子を盜んだ罪名を被せられます。そして諫死組のほかに、亦一つ刺客組といふ敵を持たねばならぬ事になるのです。天地そのために狹くして、士分の面目いづこにありやと云ふ破目です。頼母は、どう考へても、この汚れたる弟と共に逃げ去るやうな恥多き行動は執れませんでした。

『そんなことは、わしには出來ん！』

『さうかね、それぢや一人で逃げるだけのことだ。』

『逃しはせぬ。わしは引ッ括りに來たのだ。』

『ところが。』望四郎はニタリと笑ひました。『さうはいかねえ。』
『どうでも逃げると云ふのか。』
『さうさ。どうでも逃げるね。』
『爆裂竹を持つてゐるからだな。』
『はゝ。』と望四郎は、目を据ゑて笑ひました。『あれはうそだよ、何にも持つちやゐねえ、たゞ何でもねえ竹ツ切れを振り廻して威赫しつけただけだ。』
『何？』頼母は再び呆れました。
最も重大であるべき事を、さも何でもない事のやうに、ケロケロ自白してゐるのです。兎に角意表に出た言葉です。考へ方に依つては、こゝに爆裂竹を持つてゐるぞと云はれるよりか、もつと、意外で、そして衝動的な言葉です。そこに、さうした呼吸を心得てゐるのか、眞逆、たゞの正直ではあるまい。さう思ふと、却つてそれが薄氣味が惡いのです。
『爆裂竹を持つてゐない？』
『さうさ、嘘だと思ふなら……ほれ！』
ぽんと投つて寄來したものを見ると、成程それは節くれ立つたたゞの竹切でした。
『どうだい兄ちやん。』
『ふうむ……』と何か分らぬ變な感激に襲はれながら、頼母は、
『それなら猶更ら逃げることは出來まい。』
『さうとばかりは云へねえさ。』
と望四郎は、顏の底で笑つてゐます。
『ぢやいゝか。』
『第一……』と望四郎は遮るやうに云ひました。『この資金袋がどこから屆いたか、兄ちやん知つてるか？』
『差出人か。』
『さうさ。』
『知らぬ。然し、そんな事は知らなくてもよい。』
『さうぢやねえさ。これはお前ともお馴染の伊東七十郎だぜ。』
『え？』
『あいつが、國元へ歸つて何かごじやごじややつてる内に、到頭金の出所を摑へてこつちへ送つて寄來す樣になつたんだ。』
『どうしてそんな事を知つてる？』
『まあ。無駄事は後で聞いてくれ……いゝかい、それよりか、こゝんとこが眼目だ。その七十郎と青根在の駒北庄八郎との關係だ。』
『うむ？』
『そこまで云へばお前だつてギツクリするだらう。駒北の娘の雪乃、あの女ア七十郎の手引で御殿勤をする事となつて江戸に

出て來たんだ。いゝかい、ところが、あんな風にお殿様アたうとう御隱居さ、女ながらに忠義つてわけで出て來た雪乃の孃ちやんはどうなる？』

『どうなるとは？』

『引つこみが付かねえぢやないか。それゆゑ、今度のやうな事になつたんだ、雪乃の孃ちやんがよ。』

『今度のやうな事とは？』

『おや、ぢやまだ、お前知らねえのか？』と望四郎は呆れた樣に口を尖がらかしました。『ほうさうか、それで、そんな暢氣な顏をして、のめ／＼刺客組なんかの片棒を擔いでるんだな。』

『云へ、どうしたと云ふんだ。』『昨日七十郎の處へ歸つたんだ。』

『歸つた？　雪乃か？』

『さうさ。然し、たゞ歸つたんぢやねえ。』と望四郎は、氣の毒さうに云ひました。『自害しに歸つたんだ。』『エツ？』

『それほどの事を仕なくとも好かりさうなもんだが、やつぱり胸が狹いやね女は。お前もあの女にや、大分性根を入れてたやうだが、あきらめた方がいゝね。忠義なんか仕ようつていふやうな女、面白くねえ。世間にやもつと面白え女は澤山ある。』

『これ望四郎。』

『あとは何にも知らねえよ……然し、こゝでお前に會つてその事を知らせることが出來たのも、まア、因緣てもんだらう。お前も、これから歸りや、刺客組の手で何彼と規則盡めな目に逢はされ、自由に外出歩きも出來ねえに決つてるから、全くいゝ所で會つたんだ。いや、長談議になつた、兄ちやん、ぢや、おら遠慮なく逃げるぜ。』

『…………』

『お前の手落になつちや濟まねえが、おれだつてこゝで取ッ捕まるな厭だ。』

『…………』

『江戸も、もういゝ加減で左樣ならの潮時だと思つてゐる。お互ひに無事だつたら、國の樣子を、亦お前にこんな風に知らせる時もあらうさ。ぢや……』

『待て！』

『取ッ捕へる？』

『わしも逃げるから、騷ぐな。』

『え、ぢや先刻云つた通り二人で？』

『氣が變つた。』賴母の顏は蒼白でした。『逃げるとなれば巧く周圍を破らねば……叱ツ、誰か？』

と云つた時、蘆叢の外に大勢の近づく氣配がしました。

（つゞく）

講談こそ生粋の民衆藝術だ

大佛次郎

『私も、新しい鼠小僧次郎吉を書いたけれども、古くからある話のよさには感心してゐる。昔の話は書いたものでなく、聽衆を前に幾代かの人が喋つたものだつた。それが永い年月の間に次第に洗練されて、云はゞ口演者と聽衆とが合作して、だん〳〵面白いものにしたのが今日殘つてゐるのであらう。かうして、人間一人の頭腦の所產でなく、數千人數萬人の協同した制作になつたので、特殊の美の世界を作つたといへるわけだらう。僕が、講談を面白いと推奬する理由は玆にある。』

講談ほど大衆的な讀物はない。しかも誰にも面白く讀めて爲になる！

忠孝仁義を基としてしみ〴〵人情が味へる素晴しい讀物だ!!

眞に講談こそは、我々の祖先が永い間か〻つて育てあげた殆んど完全に近い民衆藝術である。日本人のみが持つ國粹藝術！　比類なき美しさとそこに横溢する人情味。之こそ世界に誇り得る藝術でなくてなんであらう。

見よ！人氣の焦點に立つ『評判講談』の大偉觀！

讀め！これこそ後世に貽る定本、名作中の名作ばかりだ!!

鼠小僧治郎吉

名人松林伯知師一世一代の名長講

野狐三次

近代の巨匠大伯山の記念塔最後の熱演

寛永御前試合
斯界の元老一龍齋貞山師の十八番

猿飛佐助
大阪派の頭領旭堂南陵得意の長講

天保六花撰
名人典山ならでは語り得ぬ名講談

祐天吉松
鬼才神田伯龍師十八番中の十八番

闘口武勇傳
怪談牡丹燈籠
大島伯鶴、三遊亭小圓朝兩師熱演

八百八狸
花形田邊南龍師とつておきの名講

怪傑兒雷也
南陵師必死の熱演に生くる大怪奇物語

赤穗義士外傳
名人花形總出の熱演、感動感激の大讀物

村井長庵
雲霧五人男
宿老寶井琴凌師、腕に撚をかけての熱演

一心太助
西尾麟慶師師匠まさりの熱辯大長講

黑田騷動
忠烈義烈、感奮興起、太田貞水師十八番

浪華女俠傳
頭取桃川若燕師、得意中の得意の讀み物

講談讀むなら講談社の『評判講談』誰方もお早く御覽下さい。

◇全國書店にあり　定價各册一圓　送料十二錢

東京本郷　大日本雄辯會講談社　(振替東京三九三〇)

醫學博士　高橋孝太郎先生發明（專賣特許）

高速度
滋養料

どりこの

十大特長

『どりこの』は、人體榮養の貴重要素である葡萄糖、果糖、アミノ酸を主成分とした理想的の滋養料で、然もその美味、芳香は誰方の好みにも合ひますので、今や滋養飲料と嗜好飲料の兩方面から大歡迎され、正に世界の寵兒となつて居ります。次にその特長をあげれば…………

一、『どりこの』は主成分が葡萄糖、果糖ですから、服めば胃腸の働きを要せず體内に吸收され悉く貴重な榮養となります。

二、『どりこの』中のアミノ酸は消化液の分泌を促し、消化を援けます。

三、『どりこの』は茶匙三杯程で鷄卵一個分の榮養價を有して居ます。

四、『どりこの』は直ぐ吸收されるので疲勞を急速に恢復します。

五、『どりこの』は誰にも美味しく飲め、いくら飲んでも害はありません。

六、『どりこの』を少量牛乳に入れると、榮養價を倍加し、風味を良くし、消化器を害さない一種獨特の美味しい飲物となります。

七、『どりこの』は御家庭日常飲料として、殊に接客用として、お茶やコーヒーのかはりに上品で結構な嗜好飲料です。

八、『どりこの』を日常用ひますと高價な榮養分を極めて安價に得る事が出來ます。

九、『どりこの』は病氣見舞、其他各種の御贈答用品として一番便利です。

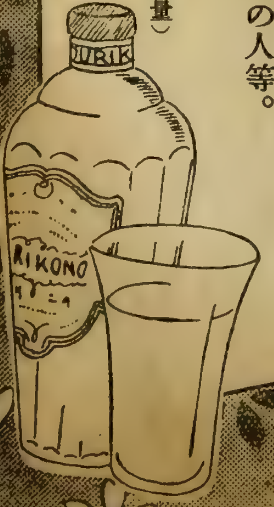
十、『どりこの』は左の如き人々の滋養料として最適であります。

胃腸の惡い人、結核性の人、神經衰弱の人、貧血及び熱性諸症の爲衰弱せる人、流動食を攝つて居る人、食慾不進の人、食のもたぬ場合、腺病質虚弱體質の人、幼兒の榮養不良、病後の衰弱、產前產後の人等。

一瓶 一圓二十錢
德用瓶 二圓（二倍量）

全國有名藥店、食料品店にあり

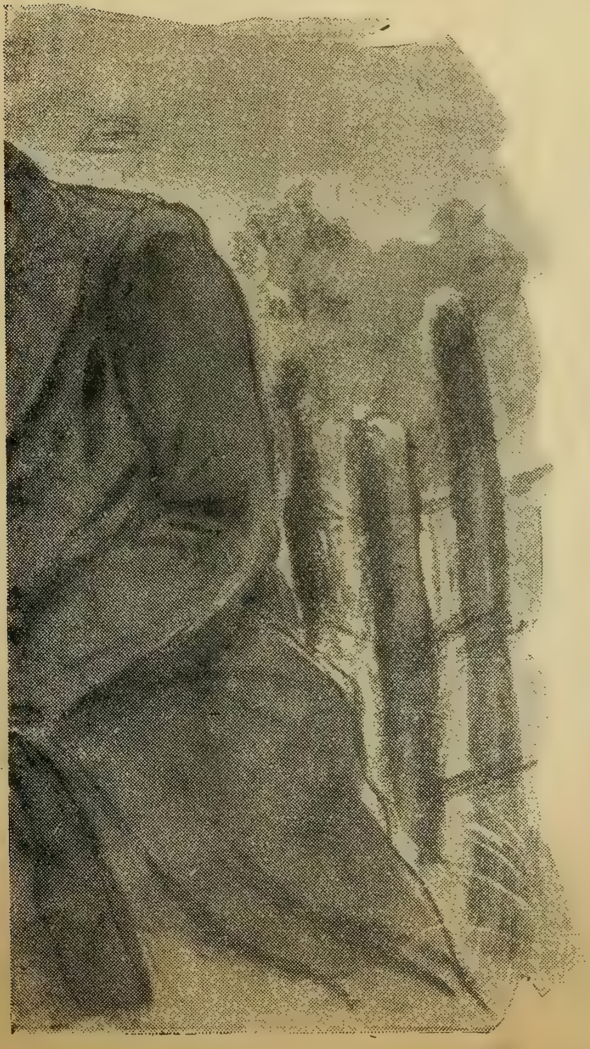
發賣元 東京・本鄉 大日本雄辯會講談社代理部



ダイヤを落した女

正木不如丘

須藤重畫



名ピッチャー玉原

秋の大學野球リーグ戰に、突然彗星の樣に現れて、名ピッチャーの名を恣にした、K大學の玉原一夫は、今日も冬期休暇中の練習場になつて居た、濱松中學のグランドで、嚴格な監督のコーチで、すつかり疲れて居たが、海岸の合宿で夕飯をすませると、一人例の樣

女

に散歩に出た。此夕飯後のたつた一人でする散歩が一夫にとつては、恐らく最も樂しいものだつたのだ。特にピッチャーとして名聲をはせる樣になつてからは、

一層彼は孤獨の時間をもとめる樣になつたのを、彼自身も氣付いて居た。此孤獨の時間こそ、彼が物心のつかぬ頃、死別したと云ふ母への追憶……それは母を記憶せぬ彼にとつては、全くとりとめぬ悲しみへの憧憬に過ぎないのではあるが……を許される時間であつた。實業界に羽振りをきかせて居る父の子として、一夫は物質的には申分なく惠まれて居た。

父は又亡くなつた一夫の母への追憶に溺れてか、一夫が物心のついた時から、今日の日迄獨身を通して、父母二人分の愛を一夫にそゝいで居た。それなればこそ一層一夫は亡き母への戀しさをいつも忘れる事が出來なかつたのだ。

冬の日が全く暮れて、海には漁火一つ見えぬ暗がおほひかぶさつて居る。その海岸の岩の上に一夫は小半時も腰かけて居た。唯知らぬ母への思ひだつた。

ふと一夫は大切な肩に風のあたるのに氣付いて、片手でその肩をもみながら立ち上つた。今年の春こそ思ふまゝに相手校を總なめにしてやらう。それは決して夢ではない。彼は青春の胸の高鳴りを感じながら、海沿ひの松並木道をスタ〳〵とあるき出した。

二三町も歩いてポツ〳〵と家並が初まる所迄來る迄は、彼は唯春のリーグ戰の作戰ばかりを考へて居た。ふと彼は十間程前を銀狐のショールを肩からずらせて行く洋裝の婦人のあるのに氣づいた。此邊に珍らしい樣子の人だなと彼が思つた時、彼はハタと足をとめた。

キラリと光るものを彼は道に見たのである。月がいつの間にか出て居た。彼は光るものゝ前に立ちどまつて居た。キラツと青い光がのびて、紅い光が縮んだ。

一夫は首を動かして道を見つめた。光る。すばらしい光だ。彼は腰を下して長い指をのばした。その間にも光は紫に青に紅に、光を放つた。彼の二本の指は光にふれた。彼は腰をのばして指の間につまれた光を見つめた。

ダイヤだつた。二カラツトを越えるダイヤなのだ。一夫の心がときめき渡つた。頰がほてつた。ふと一夫は母を思つた、母にあつた樣な氣分だつた。

その時カツと靴音がした。ハツとして一夫はダイヤに吸ひつく眼をあげた。青白い月光をあびて、銀狐の婦人が、下を向きながら、何か搜す樣に、一夫の一間前に來て居た。一夫はダイヤと銀狐の婦人とを交互に見た。

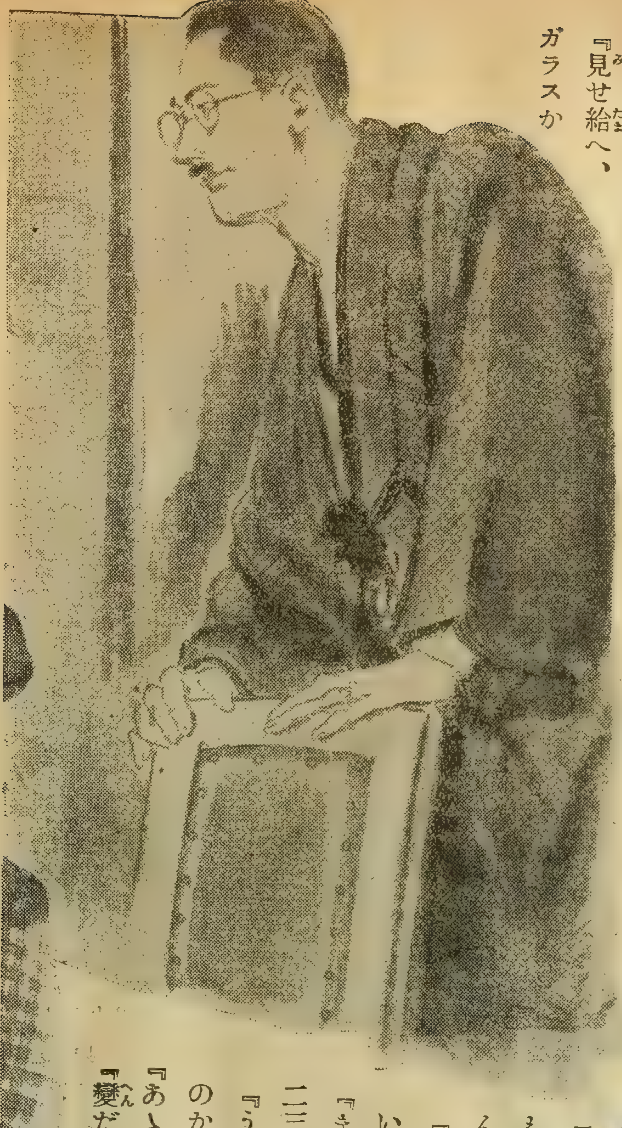
三十歳程の美人だつた。婦人も一夫に氣付いて、無言のまゝ一夫を見つめた。

『ダイヤをお落しになりはしませんか。』

一夫は冷静な口調で云つた。
『えゝ、リングからはづれまして。』
婦人は面映ゆげに顔を下げて、又足許をさがした。
『それなら、私が今拾ひました。』
『まア。』
婦人は急に朗らかに、一夫に近づいた。一夫は指の間のダイヤを婦人の前に出した。婦人は右手を出しながら、一夫から眼をそらさなかつた。一夫は婦人が左手に手袋をはめながら右手の手袋を握つて居るのに氣付いた。……手袋をぬぐ拍子に落したのだな……と心に思ひながら、婦人の右手の掌にダイヤをのせた。が婦人はそれを握らうともしないので、一夫は奇異の感にうたれて、初めて婦人の顔を見た。その時婦人は、
『まア、あなたは、玉原さんですね。』
と云つた。一夫は狼狽してしまつた。かう云ふ事は最近度々經驗する事であつたが、餘りに突然だつたので、一夫はすぐに返事も出來なかつた。
『御熱心ですね、毎日の御練習で。』
婦人は一夫の心の動きなどには全く無關心にかう云ひ續けた。その言葉で、一夫は初めて此婦人が二三日前から、中學のグランドに來て、毎日熱心に練習を見て居る人であるのに氣がついた。
『私野球が大好きなので、毎日拜見して居ますわ。』
婦人はスラ〳〵と云ひ續けた。一夫は此婦人がダイヤなどを全く忘れて居るのが、いさゝか腹立たしくなつた。
『では、ダイヤは間違なく……』
迄一夫が云つた時、
『まア失禮しましたわ、私お禮も申上げませんでして、いづれ後程改めてお禮にお宿迄上ります。』
『いゝんです、何でもない事です。』
『いえ、必ず上ります。』
一夫はいさゝか氣味惡くもなつて逃げる様に婦人を其處へ置去りにして、スタ〳〵と急ぎ足で合宿へ歸つて來た。

合宿を訪ねた婦人

『又、君の孤獨センチメンタリズムの發作だね。』
合宿に歸つた一夫をセンター青木が見付けて云つた。
『さうでもないがね。君、僕は今變な女に逢つたよ。』
『玉原ファンだらう、又サインか。』
『うゝん、ダイヤを拾つたのだ。』



『ダイヤ？』
『うん・すばらしいダイヤだ。』
センターは同室の隅で将棋にふけつて居る者に聲をかけた。
『おい、一大事だ、将棋どころじやないぞ。玉原がダイヤを拾つたのだ。』
『えゝ？ ほんとか。』
将棋の二人が駒をなげて近づいた。
『見せ給へ、ガラスかどうか鑑定してやる。』
『いや、ダイヤは持主に返してしまつたのだ。』
『何だ？ 返した？ そんなべら棒な事があるものか。拾得物はすべて一割を拾得者がとる權利があるんだぞ。』
『さうか。だがもう返してしまつたよ。それよりも、その落主が變なのさ。狐のえり巻をして[illegible]、返してやつても別に喜ばん。』
『[illegible]るだらう。』
『いや、確かに二カラット以上の、上ものだよ、紫と青の光がしきりに出たんだから。』
『[illegible]』
『さうか。まあダイヤはダイヤでもいいが、一體その女は狐ぢやないのか。』
『まさか……君等は氣がつかないか、此二三日練習を熱心に見に來る女を……』
『うん、年はとつてるが、あの美人のか。』
『あゝ、あれのダイヤなのだ。』
『變だぞ、そいつは。實は僕達は初めから怪しいとにらんだ

のだ。あの女なら、玉原、お前ばかり注意してるぞ。氣をつけろよ、間違ふなよ。』

一夫もさう云はれると、あの婦人が一夫に注意して居る樣に思はれた。

『大丈夫だよ。第一お袋なみの年だらう。』

『だが、年はあてにならんぞ、若き燕と云ふのがなか／＼あるからな。』

その時、合宿の玄關で聲がした。

『御免下さいまし。』

一夫はハツとして

眼で青木に合圖した。

『御免下さいまし。』

『誰か來たな。』

女中の出る樣子がないので、暢氣坊で通つて居る青木が取次に出た。

『何ですか。』

『御監督の山村さ

んに一寸お目にかゝりたく存じますが。』

『山村さんですか。おいでですが、どなたですか。』

『失禮致しました。私はかう云ふものですが、ほんの二三分お目にかゝりたう存じます。』

『では話して見ます。』

一夫は玄關の問答をきゝ洩らさじと耳をそばだてた。青木は二階の監督の室へ行つたらしい。やがて青木は下りて取次へ出た。

『山村さん逢ふさうです、二階へ上つて下さい。』

センターが舊の室へ歸つて來た。

『何だらうか、今頃女一人……』

一夫はすぐに用件が分つた。

『今話して居た女だらう。』

『あゝさうか、なる程狐だつたよ。あの狐だけでも千圓近くするな。おい玉原、大變だぞ、お前を婿に呉れつて、山村さんに頼みに來たのだぞ、きつと。』

『さうぢやないよ。さつきのダイヤの禮に來たんだよ。』

『あゝ、さうか。一體そのダイヤはいくら位のものなんだ。』

『僕には分らないな。』

『一萬圓とすると、先づ千圓の禮か、しめたな。』

『とにかく、今夜の玉原は主動者だよ。去年の秋以上だ。』

『馬鹿を云ふなよ、五目でもやらう。』

『さうだらうな。千圓の不時收入では落着けまい。さアやらう。君等も將棋をやるさ。何しろ千圓だ。』

青木は床の間から碁盤を出した。

『今日は賭けてやるんだぜ、一度僕が勝つと十圓だぞ。』

『僕が勝つたらどうする。』

『そんなケチな料簡を出すなよ。不時の收入千圓ぢやないか。三三なしのまつたなしだよ。』

『いゝとも。』

十分ばかりは碁石と將棋の駒の世界だつた。

『玉原君は居るか。』

監督が唐紙をあけて聲をかけた。

『えゝ、居ます。』

『あゝ、君、今ダイヤを拾つたらう。』

『えゝ、拾ひましたが返しました。』

『さうだつてね。今その落し主が訪ねて來て居られるんだが、お禮をしたいつて云はれるが、そんなもの貰はなくつていゝだらう。』

『えゝ、いりません。』

『さうか。そんならさう云つておくよ。』

監督は唐紙をしめて行つた。センターが碁石を投げた。

『なアんだ。つまんない。慾のない監督だな。僕は斷然不愉快だな、日本の法律にある事なのだし、先が出すと云ふなら、とつておくのが國民の義務だ。一體玉原、お前は金持の息子に生れたから、山村さんがあゝ云ふのだ。おれが拾つたのならば、きつと千や二千はとつて呉れるのだ。不經濟なものだな、金持の息子は。』

二階から客は下りたらしい。

『どうぞ、玉原さんによろしく。』

客が歸ると、監督が又唐紙をあけて入つて來た。

『玉原君、君によろしくつて。どうしても禮をするつて云ふから、君は金持の息子だつてどなつてやつたよ。降參して歸つて行つたが、君の事を色々きいたよ。ほんとに根掘り葉掘りさ。娘をもらつて呉れなんて云つて來るかも知れないよ。だがあのダイヤは二萬圓はするのだつてさ。玉原フアンらしいね、毎日此頃練習を見に來て居るさうだ。だが一寸不思議だつたのは、君が財産家の一人息子だつて話したら、すつかり悲觀してたよ。養子に貰ひたいと思つてたのだよ、きつと。』

監督はさう云つて唐紙をしめながら、

『もうみんな寢給へよ。』

と云つて二階へ引き上げて行つた。青木は玉原を見つめて頬をふくらせた。

『ほんとに不經濟な息子だよ、君は……僕はもう寢る。折角の二千圓を逃がして起きてなど居られんから。』

彼はサツサと碁盤を床の間に收めて、押入れから夜具を引つぱり出した。

センターの好奇心

翌日は朝のうち小雨が降つたので、合宿で山村監督の懷舊談をきいて、選手達は興がりながら、色々得る所があつた。午後になつて日が出てグランドのコンディションもよくなつたので、中學チームと練習仕合をする事になつた。陽は照つても風はいさゝか寒かつた。それでもかなりの見物人が集つた。

『練習仕合でも全力をつくしてやるんだよ。』

監督の注意で、選手達は熱心にやつて居た。センターの青木は、大きなフライを一つとつてそれをホームになげながら、ふと銀狐の婦人の今日も來て居るのを知りながら、チエンジになつたのでベンチに引きあげて行つた。婦人が監督に挨拶をして

から、玉原に近よるのを、青木は注意して居た。

『昨晩は誠に有難う存じました。あれから一寸合宿へお禮に出ましたが、監督さんにお目にかかりまして、わざとあなた樣にはお目にかゝらずにお暇しました。監督さんに叱られましたので、お禮も致しかねますが、どうぞあしからず。』

『えゝ……』

玉原は頬を染めて唯頭を下げてベンチについてしまつた。センターの青木は、その日マッチのすむ迄、いつも此婦人の態度を注意して居た。婦人は玉原の一擧手一投足を眼もはなさずに注意して居た。玉原が三振を食はせる度に、つゝましやかながら拍手を送るのを忘れなかつた。

唯ボールが好きだと云ふだけではない。ボールそのものよりも、玉原に特別な關心をもつて居る人だ、さう青木はその日婦人の態度から推論を下した。

十五對零と云ふ樣な、段違ひのスコアながら、かなり緊張した場面もあつたので、選手達は相當の疲勞を感じて、合宿に引上げた。

その道々、青木は玉原に小聲で話した。

『確かに何か意味があるんだよ、あの銀狐は。君ばかり絶えず注視して居るよ。』

『さうかなア、氣味が悪いな。』

『とにかく相當なブルジョア婦人には違ひない。いづれ僕の探偵眼で、あの

婦人の身分を洗ひ出して見るよ。さうすれば、何故君にあの婦人があれ程の關心を持つのか、その理由が當然分るだらう。』

『まア、さう思ふなら、探つて見て呉れ給へ。僕は別にさうは思はないが。』

『いづれ分るよ。それ迄はだまつて僕の活動に信頼して居るんだね。』

二人は一緒に風呂をあびて、夕飯をすませた。青木は今夜も玉原が散歩に出るために、オーバーをきるのを見て、

『又孤獨センチメンタリズムかい。』

と聲をかけた。

『一寸海岸をあるいて來るのだ。』

『一緒に行つてはいけないかね。』

『いゝよ。』

『では一寸邪魔をするかな。』

二人はつれ立つて合宿を出た。海岸への道々、青木は玉原に親友らしく話しかけた。

『どうして君は孤獨が好きなのだ。僕は前から君が、時々グランドで淋しく一人何か考へて居るのを知つて居たんだが、……と云つて別に悲しい樣子も左程ないし、まさか失戀とも思へないし、どうも分らないんだ。』

『何でもないんだ。唯時々一人でとりとめぬ事を考へてるのさ。』

『さうだとは思つて居る。君、君は父親一人だと云つたね。お母さんはどうしたのだ。』

『死んだのだよ、僕がまだ物心のつかぬ頃……』

玉原の語調が感傷的だつた。

『そのお母さんの事を君は思ふのだね。』

『あゝ、それもある。だが母の事など、全然記憶にないのだから、懷ふと云つても夢見たいなもので、内容はないのだ、唯子供の時から、母が居れば、と勿論母のないためにどれだけ悲しい思ひをしたと云ふ記憶もないのだが、近來どうも母の事が思ひ出されるのだ。悲しくはないが、なつかしい樣な變な氣になるのだ。』

『君戀をしてるんぢやないか。』

『いや、戀なんて知らないよ。若し戀をして居るとすれば、知らぬ母を戀して居るとは、云へるかも知れない。』

『フロイドの云ふ所では、男は先づ母を戀すると云ふから、それなんだらう。』

『さうだらうか。』

玉原は自分ながら分らない妙な氣分に襲はれて居るのを知つて居た。二人は海岸の岩に腰かけて、今上つたばかりの月光にをどる波を見て居た。

『では、僕は先に歸らう。君も肩を冷さぬうちに、歸つて來給へよ。』

青木は珍らしく感傷的の言葉を遺して、一人先きに歸つて行つた。

玉原はしばらく月光の海を見ながら考へて居た。今夜もなくなつた記憶にもない母を思つて居るのだ。ふと彼の心の一隅に銀狐の婦人が姿をチラと見せて消えた。妙な女とも思はなかつた。當然彼の心に棲む筈の婦人の樣にも思はれた。がさう考へると、折角今迄淸く思ひ續けて居た母が、遠のいて行く樣にも思はれて、殘念になつた。

彼は急に立ち上つた。そして松並木の道をあるき出した。ふと銀狐の婦人の姿を見た。五六間先に。がそれはまぼろしの、眼を見はると唯の松並木だつた。月光が長く松の影を道に黑く這はせて居た。彼はスタ〳〵と急ぎ出した。誰かに追はれる樣な氣味惡さを感じた。足許を見て、二三間前に眼を動かして、

二三歩急いだ時、彼はハツとして立ちどまつた。

又ダイヤが光つた。彼はゾツとした。もう一歩もあるけなかつた。恐ろしくなつた。ダイヤは青く紅く長い光を道の上でのばして居るのだ。彼は松並木の行く手を見た。誰も見えなかつた。

彼の心はいさゝか平靜をとりもどした。彼は二三歩進んで、ふるへる指尖で光をつまんだ。ダイヤである。昨夜のまゝのダイヤだつた。彼はそれを掌にのせて見つめた。紫、青、紅三色が尾を引いて彼の掌にのびた。

彼はギユツとダイヤを握つて、後ろをふり向いた。何か物の氣配がしたが、夜烏が近く鳴いただけで、人影とては自分だけだつた。

『又捜して來るだらう。』

彼は合宿の方へ歩き出した。が誰も來なかつた。立ちどまつたり歩いたり、もどつたりして、彼は小半時を此並木道に居たが、遂に銀狐の婦人には逢へなかつた。

『明日又グランドに來るだらう。』

ふとさう思ふと、今迄の不安が消えた。彼は今は明日グランドで、ダイヤを銀狐の婦人に渡すのを樂しむ氣分で、合宿へ歸つて來た。ダイヤをかたく、彼の大事な掌の內に握りながら……

合宿の入口で彼はしばらく立止つて居た。ダイヤを拾つた事を誰かに話さうか。それも氣が引けた。昨夜も拾つたのだ、そして今夜も。氣恥しく思はれた。

『明日返せばいゝ、誰にも話すまい、特に青木には……』

さう思つて、彼はダイヤを內ポケツトに入れて合宿の玄關をあけた。

姿を消した婦人

翌日の朝からの小春日和を、玉原は希望に燃えてグランドに出た。ダイヤはしつかりユニホームのポケツトに收めてあつた。

正午近く迄、練習をしたが、遂に銀狐の婦人は姿を見せなかつた。

『玉原、今日は來なかつたな。』

晝飯に合宿へ歸る道で、青木が話しかけた。玉原は狼狽して紅くなつた。

『どうしたのだらう、病氣にでもなつたのかな、早速取調べなくてはならないぞ。』

青木は吾事の様に好奇心を燃え立たせて居る。玉原はポケットのダイヤが氣にかゝつて、ソツと手でふれて見た。硬い感觸が彼の乳に感じられた。彼はダイヤの話を青木にしようと思つたが、どうしても口に出せなかつた。

合宿に歸ると、玉原に一通の手紙を女中が渡した、見慣れぬ女文字だつた。封の裏には野中雪子と署名してあつた。玉原はそれが銀狐の婦人であるのを直感した。彼は戀人からの手紙でもよむ樣に、人にかくれて封をきつて、胸の鼓動を押し沈めながらよんだ。

……ダイヤを確かにお手にお入れになつたのを知つて安心致しました。どうぞそのまゝ御持ち下さいまし。私は一昨夜あなた樣の御身分を知つてすつかり落膽致してしまひました。もう永久にお目にかゝる時は參りますまい。どうぞ私だけの秘密の尋ね人に似た方への贈物として、ダイヤはおうけとり下さいまし。若し萬一警察などへお屆け下さいますと、私の過去の罪が、私の將來をさいなみつくす事となります。御緣あつてお目にかゝれました私の最後の願をくれ〴〵もおきゝ屆け下さいませ。

雪　子

玉原一夫樣

手紙は走り書ながら美しく書かれてあつた。玉原は夢見る氣分になつて、銀狐の婦人の一昨夜の姿を畫いて見た。……私だけの秘密の尋ね人に似た方……彼女の戀人に似て居るのか、それとも彼女の子に似て居ると云ふのか。

……過去の罪とは何なのであらう。此ダイヤが罪の種だと云ふのか。

玉原は當惑してしまつた。ダイヤの値は二萬圓と云ふ。それを故なく自分でかくし持つて居ていゝものだらうか。

青木に相談するのが最もいゝ。がそれならば何故昨夜のうちに話して置かなかつたか。

玉原は全く狼狽と困却のるつぼの中で、晝飯を食べて、又グランドに出なければならなかつた。

『午後も來ないね。いよ〳〵病氣に違ひない。二人して見舞に行くべきだな。』

練習中水を飲みにベンチへ來た青木が、玉原に朗らかに耳打ちした。玉原は答へやうがなかつた。

その夜玉原は又いつもの岩の上に居た。今は母を戀ふる心の暇のない彼であつた。かうして岩の上に居る間に、銀狐の婦人が、後から近づいて來るのを、どれ程彼は心でいのつたであらうか。

ダイヤは此岩から海に捨てるのは何でもない事なのだ。だが彼女が持つて居て呉れと云ふのが全く意味のない事であらうか。ダイヤを拾得物として、警察に屆けてしまつたならば、事は實に簡單でもある。けれどもそれをとめる彼女の願をきゝ屆けてやらなくていゝものであらうか。

又ダイヤをこのまゝ持つて居る事も何でもなくも思はれる。が此ダイヤを持つて居る間の不安に果して堪へられるであらうか。

一體何のために彼女は自分の前に現れたのか、秘密の尋ね人に似たと彼女は云ふ。何故自分はそんな人に似る樣な不幸を持つて生れたのであらう。

此ダイヤ一つのために、自分の將來は全くめちやくちやになつてしまふのではなからうか。

玉原はダイヤを左手に握りながら、海面を見つめた。此腕でダイヤを海に投げる。そのために自分はピッチャーになつたのであつたか。

月が出た。銀波が渚にさゝやいた。掌をひら〳〵と五彩の光がのびて彼の眼を射た。此美しい色を持てと銀狐の女は云ふ。では思ひきつて一生持つて居ようか。

突然今迄忘れきつて居た母への憧憬が彼の心を完全に占領した。お前は母ならぬ婦人にいつ迄心を亂されるのだ、と心の母が叱つた。

玉原はすつと岩の上に立ち上つた。そして月光と魚鱗の海面を見つめた。足を岩の上の平らにふんばつた。兩手を頭の上でふりかぶつて、海面を見つめた。彼の左手が後ろに引かれた。手がのびた。海面二丈の高さに、紫、青、紅の光が尾を引いて飛んだ。

『ワッ！』

と玉原が叫んだ時、彼の肩が後ろからしつかりと押へつけられた。

『玉原、ダイヤを投げたな。』

青木の太い聲だつた。

『うん。』

と玉原がうなつた。

『どうしたのだ、馬鹿！』

玉原は興奮から冷えて素顔になつて後ろを向いた。

『海に捨てちやつたのだ。』

『どうしたのだ。』

玉原はポケットから銀狐の婦人の手紙を出して、青木につきつけた。青木は無言のまゝ手紙を月光で讀んだ。

『さうか。分つた。それもいゝだらう、……だが玉原、肩を冷すといけない、一緒に歸らうよ。』

『うん。』

玉原はも一度海面を見た。月光の滿ちた海を遠く船が動くのが見えた。

『さつぱりしたらうが、惜しかつたな、よく光つたぜ。』

『うん光つた。すばらしかつた。』

二人はそれだけ話して後は無言で合宿へ歸つた。監督が心配して玄關に出て來た。

『玉原、肩を冷すなよ。』

『有難う存じます。』

『心配してたのさ。ああ、あのダイヤの女はもう來ないよきつと。昨日ニユーボール

を君が投げたのを中學生がファストよりファウルしだらう。あのボールをあの人コツソリとつてポケットに入れたよ。それで玉原ファンとしては目的を完全に達したのだから

な。昨日あれを見た時に、僕はもう今日は來ないと分つちやつたのさ。』

監督は豫言者の樣に得意な笑を殘して二階へ上つて行つた。

私立探偵社長青木

その翌日の練習の時、監督は玉原の肩の狂ひに氣が付いた。アウトドロツプの模範的な投手として、玉原は敵に對する大きな脅威であつた。そのアウ・ドロが思ふ樣に出なくなつた事は、玉原の投手たる資格を五割も下落させ

る事になるのだ。

『どうしたのだ、だから肩を冷すなと、あれ程云つたぢやないか。』

監督は叱言を云ひながら、何回も何回も、玉原に投げさせた。玉原は全身の注意を腕と手の握りに集中させたが、矢張りうまく行かなかつた。

『今日はもうやめだ。一日靜養し給へ。』

叱りながらも、若い玉原を愛して居る監督はかう云ふしかなかつた。玉原は監督の絶望的の言葉をきいて、眼尻があつくなつた。

『もう少しやつて見ます。』

『もういゝよ、心配しなくてもいゝ。』

さう監督に云はれると、玉原はます〳〵悲しかつた。若しこのまゝ肩がきかなくなつてしまつたならば、……と思ふと、玉原は堪へられなくなつて、ベンチに歸つて、腕を組みながら、同僚の練習を見る氣にもなれず、考へ込んでしまつた。

水を飲みに青木がベンチへ來た。

『玉原、悲觀するなよ。監督は君をたよりにして居るから、腹を立てるのだ。又明日は調子が恢復するよ、……だが今日の君の出來はほんとに變だよ、一體どうしたのだ。まだあの婦人の事が氣にかゝるのか。』

玉原は最も氣の合つて居る青木にかう云はれて、初めて心のわだかまりが、幾分とけて來て、淚が出て來た。

『僕はあの婦人の事なんか、練習の時考へはしないんだけれど、ボールが手から離れる瞬間に、ひよつと昨夜のダイヤの事を思つたのだ。ダイヤを海へ投げた時の事を。さうすると急にボールが小さく感ぜられたのだ。それから肩がどうかしちやつたのだ。何しろボールの目方が急に輕くなつちやふのだから、カーブなんか、どうしてもつかないのだ。それではならないと、何度思ひ直してもやつぱりあれが心に引つかゝつて居て、駄目なのだ。今迄のスランプとは全くちがつて、自分でどうもならないんだ。僕も投手としての生命は、ダイヤを投げると同時に、昨夜で終つてしまつた樣な氣がする……』

青木は玉原の手を握つた。

『何を云ふんだ、そんなつまらぬ事を云ふものぢやない。大丈夫だよ。ダイヤなんて何だ。ダイヤを海に投げてこそ、君の投手としての生命が永遠になるのじやないか。今日は歸つたらどうだ。おれも後から行くから。僕山村さんに話して來てやらう。』

青木はコーチして居る監督の所へ走つて行つた。

『山村さん、玉原の奴、すつかりショげてますから、今日は歸らせてやつて下さい。』

『うん、どうかしてる様だ、では君一緒に歸つて、よくなぐさめてやつてくれ給へ。僕も經驗があるよ。あの銀狐の婦人が來なくなつたのが、精神的に玉原を悲しませて居るんだよ。よく話してやつて呉れ給へ、僕からでは却つてまづいからな。』

『ではさうします。』

青木はベンチに歸つて、玉原にセーターをきせたり、オーバーをきせたりしてやつた。

『ぢやア、歸らう。うなぎでも食ひに行かう。』

玉原は無言のまゝ、青木の後について、グランドを出て行つた。

合宿への道々青木は玉原の心を亂さぬ程度に、玉原の心のもつれの原因をさぐつて見た。玉原は唯海で投げたダイヤにばかり心を引かれて居る様に云ふが、銀狐の婦人の手紙の内容が、むしろ肩の狂ひの原因であると、青木は思つた。そして銀狐の身分を洗つて、事をはつきりさせて置くのが、玉原のためだと思つた。

合宿へ歸つて、玉原のために床をのべてやつた青木は、

『とにかく一二時間、靜かに眠る方がいゝよ。僕はそれ迄グランドへ行つてるから。』

かう云つて青木は合宿を出た。青木は至急銀狐の婦人の身分とその後の様子を捜る決心をしたのだ。

青木は、婦人がいつも自動車でグランドへ來るのを知つて居たので、町内の自動車屋を捜してあるいた。濱松の町はかうして自動車屋をしらみつぶしに捜し廻るにしては、廣すぎた。盗壘の名人としての青木も、かう町中をあるき廻るに適した足の持主ではなかつた。三時間の努力も報いられず、腹をペコ〳〵にして、彼は合宿へ歸つて來た。選手達は午食に歸つて居た。玉原も一緒に飯を食つて居たが、浮かぬ顔でまづさうに食べて居た。

食事後、午睡の癖で二階へ上つた監督の後を追つて、青木は相談に行つた。監督はチームの者の婦人關係に就いては特に嚴しいので、青木は誤解のない様に話しておく積りだつた。

『だがあの婦人と玉原は何でもないのだね。』

『勿論です、私が誓ひます。唯恐らく玉原はあの婦人から來た手紙のなぞにひつかゝつてるのだと思ひます。だから、あの意味あり氣な手紙の内容が、はつきりすれば、玉原の氣も落着くのだと思ひます。だから僕は玉原のために、あの婦人の身分をすつかり洗ひ出さうと思つてるのです。』

『さうか、親友の君としてさう思ふならば、やつてやり給へ。だが君、自動車屋などさがすより、警察へ行つてきく方が早いよ。名は分つてるのだらう。』

『あゝ、さうでしたな。』

私立探偵社長が喜んだ。

『署長に手紙をかいて上げよう、それをもつて行つて宿帳を調べてもらへば、今迄の宿は分るだらう。だが彼女はもう居ないね、僕の想像では。あの婦人は玉原ファンで、少しよくない性質だと思ふね。昨夜も僕が云つた通り、あの婦人は玉原だけが手にふれたニユーボールをポケツトにかくす様な事をしたのだからね。時々あるんだよ。そして意味あり氣な手紙を玉原に書いて、姿をかくす。全く筋書通りだ。見給へ、春のリーグ戰にはきつと彼女は目立つ姿で現れるから。』

『さうでせうか。』

『然し、これは僕の想像に過ぎない。とにかく一應あの婦人の身分を洗つておく事は、玉原には勿論、我がチームにも必要な事だ、では署長に手紙を書かう。』

青木は監督の書いて呉れた署長宛の依賴狀をもつて、合宿を元氣よく出て行つた。

青木の報告

合宿の夕飯時に青木は歸つて來た。湯から上つた監督はくつろいだ和服姿で二階でスコアブツクを前にして過去の戰跡を調べながら、今春の作戰に沒頭して居た。

『山村さん、歸つて來ました。』

二階の入口で青木は聲をかけた。

『あゝ、どうだつたね。』

『すつかり分りました。玉原を此處へ呼んで、話してもいゝでせうか。』

『うん、さうしよう、僕等の間には少しの秘密があつてもならないからな。』

青木は玉原を呼んで、再び二階へ來た。

『玉原、實は僕は、君の今日の不出來は、あのダイヤよりは、むしろあの婦人から來た手紙の方が深い關係があると思つた。だから山村さんにも智慧をかりて、あの婦人の事を調べた。すつかり分つたから今話すつもりだ。きいて呉れ。』

玉原は眼を見張つて、青木の口許を洩れる言葉に注意を集めた。

『決論を先に云ふが、要するに何でもない事だ。決して君が心にかけるに及ばない事なのだ。』

『さうか、そりやよかつた。』

監督が先づ安心した。

『山村さんの紹介狀をもつて、警察署長にあつて、野中雪子と云ふ人の泊つて居た宿を調べて貰つた。本町の齋藤旅館だつた。早速其處へ行つたが、秘密をさぐるのだから、正面からではまづいから、宿泊人となつてとにかく入り込んで見た。そして一風呂浴びてから、女中にきいて見たよ。そしたらその女中が恰度運よく、あの婦人の受持だつたので、すつかり分つた。あの婦人は、その女中が氣に入つたと見えて、昨夜出發したのだが、その前の晩、おそく迄身の上を話したさうだ。今は未亡人なのだが、三年程前迄は神戸で英國のある貿易商と同棲して居たのださうだ。』

『さうか、何處となく異人臭かつたな。』

監督が共鳴した。

『ところが、あの婦人には若い頃……あんなに若く見えたが、四十一二になつてると云ふ事だ……若い頃、十八九の頃、東京の學校へ來て居た時、戀をした青年があつたのだ。下宿で同宿の者で、僕等と同窓の人だよ。姙娠して男の子を生んだのださうだ。二人は勘當の身になつて、男は新聞配達をする、女は生んだ子を里子に出して、看護婦の勉强をして、二年程して、免狀をとつた。』

『看護婦臭かつたかな。』

『免狀をとつてから、看護婦會に入つて、働き出したが、派出看護婦として築地の聖路加病院へ行つてた時、英國人について居て、金にあかして生活する樣子を見、又獨身の病人の誘惑にうち勝てなくなつて、夫と子を捨てて、英國人の退院する時、神戸へ逃げてしまつたのだ。その後は別れた男と全く音信不通で二十五年近くたつてしまつたのだ。英國人の夫に三年前死別して、莫大な遺產をもらつて、神戸に暮して居たのださうだが……それからが君に關係があるのだよ。君の姿を一度外苑で見ると、どうも捨てた自分の子に似て居ると云ふのさ。それで分つたらう。』

青木は笑ひながら玉原を見た。玉原は頰を染めて恥かしい表情をした。

監督がその時、うなづきながら云つた。

『なる程、それで分つた。此間ダイヤの禮に來た時、君の事を根掘り葉掘りきいた。ではヒヨツとすると、君が自分の子ではないかと思つてたのだ。君が玉原家の一粒種だと話したらば、

落膽したのが、はつきり分つたよ。尙又君のうちが財產家だと話した時も、ガツカリした樣だつたから、自分の子ではなくても、子の樣な氣分で學費でも出したかつたのかも知れないよ。まアさう分れば、向ふには氣の毒だが、こつちは安心だ。』

『山村さん、どうもダイヤを松並木で落したのが、わざとやつた事の樣に私には思はれるんですがね……玉原、君はさう思はないか。』

『さア、それは……』

『それにちがひないさ。誰があんなダイヤを落す奴があるものか。たしかに君の身の上を知るキツカケを造る一つのトリツクさ。』

『僕もさう思ふね。』

靑木が玉原に云つた。玉原はまだ、すつかり落着けない顏をして居た。

『玉原、かう分つたらば、もう君も安心し

ていゝだらう。君があの女の子に似て居たつていゝだらうぢやないか。』

『勿論、それはそれでいゝんだ。だけど僕はそんな事より、海に……』

『あゝさうか。山村さん、まだお話しなくてはならない事があるんです。』

『何だ、まだあるのか。』

『玉原、僕から話すよ。實はあの女が訪ねて來た翌晩、……をとゝひの晩、玉原が例の樣に海岸へ行つた時、又あのダイヤを拾つたのです。』

『又か。ふうん、ではいよ〳〵意識的に落してるんだ。』

『さうです、今度ははつきり意識的にやつてるのが分つたのです。玉

原はそれを拾つて、女が姿を現さないので、こゝへ持つて歸つて來たんです。大方それを貰ひに來るだらうと暢氣にかまへて居たんですが、女は來ずに昨日のおひるに、玉原へ手紙が來たんです……玉原、手紙あるか。』

『うん。』

玉原がポケツトから手紙を出した。監督は讀んだ。

『すべてよく筋が通つてるな。そしてそのダイヤは？』

『それなのです。玉原は昨夜そのダイヤを海へ投げちやつたのです。』

『海へ？ 投げた？』

監督が吃驚して眼を見張つた。玉原が初めて眞顔のまゝ云つた。

『私、その手紙を見てすつかり狼狽してしまひました。こんな事で心を亂されては、叶はないと思ひましたから、思ひきつて海へすててしまつたのです。カーブもつかず、ダイヤは月の海に光の尾を引いてとんで行きました。』

『さうか。さうだつたのか。それが君の頭にひつかゝつてるんだな。どうも今日君はボールの目方を錯覺して居たやうだ。』

『それが分りましたか。』

『分つたね。もつと重く、と再三僕は云つたらう。さうか。だがよく海に投げ込んだね。では青木、ニユーボールを五ツ六ツ持つて海へ今夜行かう。そして玉原にボールを海に向つて投げさせよう。ダイヤを葬つて、玉原のアウ・ドロ……あの凄いやつを見せて貰はうじやないか。夕飯をそれから食はう。』

『さうしませう。』

『有難う、元氣が出て來ました。』

若い二人が立ち上つた。監督はニコ〳〵笑ひながら、和服の袖で眼尻をぬぐつた。

玉原の父の死

海に投げ込まれたニユーボールは宵暗の中ながら、すばらしいアウ・ドロで水面をたゝいた。それ以來一週の間、玉原の投球は申分なくその威力を發揮した。

が突然、全く突然、玉原は父危篤の電報をうけとつた。母のない父一人の玉原は、色を失つて、東京へ歸つた。

父は急性の肺炎でＫ病院に入院して居た。旅裝のまゝ病院に入つた玉原は、呼吸困難と戰ひ疲れて居る父の顏を見なくてはならなかつた。

『お父さん。』

『うん、一夫。』

父は苦しい呼吸で答へた。

玉原の父は數限りなく施される注射の苦しみと戰ひ、一夫の申分ない體格からの血液の輸血迄うけたが、その効なく、一夫の看護を受ける事、唯一晝夜で、一夫一人を殘して他界してしまつた。

息を引きとるより一時間前に、父は一夫に一通の遺書を渡した。その遺書を一夫は、父の死んだ夜に、おくれてかけつけた親友青木と一緒に封をきつた。

……一夫、私はお前の父として、私の死後になつて一つ詫びなければならないのだ。それはお前を僞つて居たからだ。お前の母はお前を生んで程なく死んだと、おれは云つて居た。然し、それはうそである。だがお前の母は今も生きて居るか、それとももう死んで居るか、私も知らない。

お前の母は私とお前とを捨てて、私の前から消えて行つてしまつたのだ。お前の母はおれのために働いて與れるために、お前を里子に出したが、急に行方が分らなくなつてしまつたのだ。私はその頃、玉原家へ家庭教師になつて居たのだ。そして私は麻原家から、玉原家へ養子に入つたのだ。玉原家の一人娘が私の第二の妻だつたが、その妻も妻の親も私が玉原家へ入つて一年たゝぬ間にチフスで他界した。それ以來私はお前一人の成長をたのしんで、獨身で來たのだ。お前は不幸な子だ、母を戀ひ慕つて居るのを、私は知つて居るが、お前の母の墓だと云つて、お前が度々詣でたのは、實はお前の生みの母ではないのだ。これだけはお前に話しておかなくてはならない事だ。

私はお前の生みの母を決して憎んでは居ない。だからお前も決してお前の生みの母を憎んではならない。親を憎む程子として苦しい事はないのだ。若しお前が生みの母に逢ふ事があつたならば、私は決してお前の生みの親を憎まなかつた事を傳へて與れ。

父

一夫殿

玉原は聲を立てて泣いた。青木はどうしていゝのか全く分らなくて、玉原の肩をジツと握つて居た。

通夜の夜になつて、玉原は段々落着いて來た。生みの母のある事と、その母がまだ生きて居るのを思ふと、玉原は父なき後の淋しさが幾分かうすらぐのを感じた。特に父が母を憎んで居ないと分つたのは、子としての玉原にとつては、最上の喜びでもあつた。

玉原は一時、通夜の客とはなれて、自分の室で、今は父の許しをうけた氣分で、生みの母をひたすら戀ひ慕つた。然も今は先の樣に姿を知らぬ母ではなかつたのである。

青木が入つて來た。

『どうだ、落着けたか。』

『あゝ、ありがたう。餘り突發的に、色々の事が起つたので、まごついてしまつた。』

『さうだらう。だが君、かう云ふ場合には、とかく心に隙が出來るものだから、友人として注意するのだが、君のお父さんの遺書と、君が生みの母親ときめてしまつて居る彼の婦人の過去とが、偶然の一致と云ふ可能性もないではないからな。今山村さんが僕にそれを注意してくれたのだ。僕も山村さんに云はれて初めてさう氣がついたのだが……』

玉原はさう云はれて愕然とした。

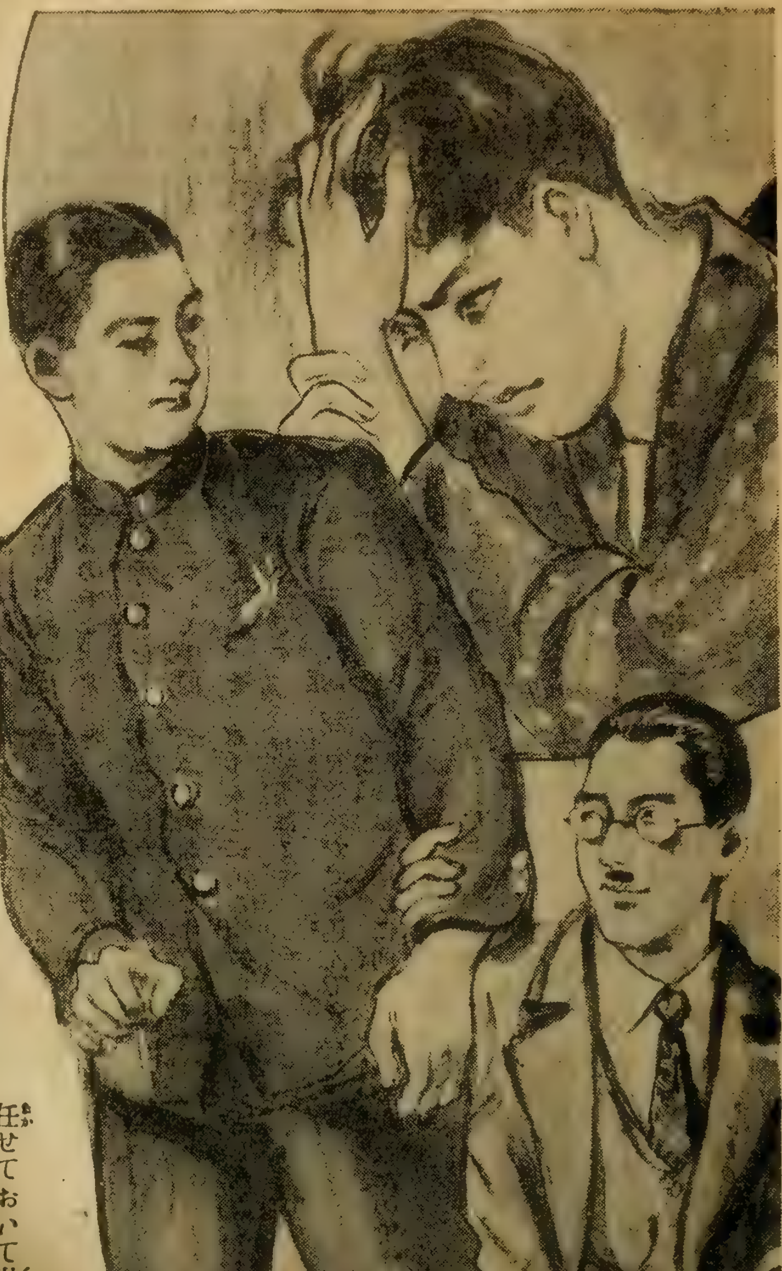
『うん……』

ほんとにさうなのだ。

『だから後になつて君が又落膽する樣な事があつてはならないと思ふ。今は大切な時だから十分に落着かなくてはいけない。』

『有難うよく分つた。うつかりして、僕はあの婦人が生みの母だと、父の遺書を見て以來、單純に今迄考へて居た。

そして今年の春のリーグ戦は、生みの母を捜し出すべく、立派な戦をしようと今の今迄思つて居たのだ。だが山村さんの御注意は御尤もな事だと思ふ。』



『さう云ふ様に落着いて居て呉れ給へ。及ばずながら、僕は君のお母さんをきつと捜し出す様に努力するから、その方は僕に任せておいて呉れ給へ。』

『たのむ、山村さんによろしく云つて呉れ。僕は一時間程休んで行くから。』

青木は又通夜の席に引き返した。山村監督と隣り合つて、K大學の法醫學の教授が坐つて居た。青木はそれに近づいた。

『山村さん、よく話して來ました。落着いた樣です。』

『それはよかつた。』

二人の會話がすむと、法醫學者が話し出した。

『山村さん、三四日前でしたがね。私は面白い一つの經驗をしましたよ。あなた方に大分近い關係があるんですがね。去年の秋だつたが、或る未知の婦人が私を訪ねて來ましてね。或る大學の投手の事で、法醫學的に調べて貰ひたいと云ふのです。どうも子供の頃一寸の間、自分が乳母をして居た人の樣に思はれるが、事情があつて直接きく譯にならないが、何とかいゝ手段はないかと云ふのです。それで私も智惠をしぼりましてね。その乳母で居た頃の玩具が殘つて居ないかときいて見たのです。ところがゴム毬が一つあると云ふのです。で、私は、それは何よりだ。それならば、その投手がニューボールを使つた時、それをなるべく他の人の手にふれないうちに、うまく手に入れてゴム毬と一緒に持つておいでなさいと智慧をつけてやつたのです……』

山村と青木の胸は激しく打ち出した。教授は學者らしく冷靜に續けた。

『然るに二三日前、ゴム毬とニューボールを小包で私に送つてよこしたのです。』

『で、結果は？』

青木が青年らしくせき込んできいた。

『まア、お待ちなさい。その小包と一緒に手紙が來たのです。折角お願ひしたが、今は全く別人であるのが分りました。私は全く谷底につき落された樣に思ひます。もう再び甲斐のない事を考へまいと思ひます。全く別人の手のふれたゴム毬とボールとを、淋しい心でお送りしました。なまじ記念のゴム毬の手許にあるのは却つて、私の悲しみを增すばかりですから、……かう云ふ手紙なのです。で私は冷靜な科學者として、そのゴム毬とボールとにある指紋を驗べて見ましたよ……』

『結果は？』

又青木がせき込んできいた。

『結果は、明かに同一の指紋が現れたのです。』

『え、同一人なのですか。』

『さうです。』

青木が夢中で立ち上つた。

『待て！』

山村が青木のズボンをつかんだ。青木は恥かしさうに又腰を下した。山村が教授にきいた。

『同じ指紋が出れば、必ず同一人なのですか。』

『確實です！ だが彼女はどこに居るか、何と云ふ名か全く不明で知らせやうがない！』

教授は一寸淋しい顔をしたが、

『どうも世の中には、科學の解決を待ちきれずに、早合點をする人があつて困る。』

と述懷口調でつけ足した。

山村監督はその夜、青木に、此教授の話を玉原には當分絕對秘密にする樣に命じた。

その後玉原家の葬儀が終つた翌日の都下の新聞には、『野中雪子さん、至急當部へ居所をお知らせ乞ふ。K大學野球部』の廣告が出た。然しその効果は全くなかつた。くり返し一週程此廣告は大阪新聞に迄出たが、反響はなかつた。

玉原はその後、ますます調子が悪くなかつた。春のリーグにも、彼はスランプだと云つて現れなかつた。

數年後になつて、英國に留學して居た玉原から、青木は一通の手紙をうけとつた。その手紙で、彼は生みの母に遇つた事を報じたが、野球部の廣告を彼女は讀んだけれど、ダイヤを返還されるためと思ひ、母は住所を知らせざりし由、今となつて親子大笑ひ致し候』と書いてあつた。

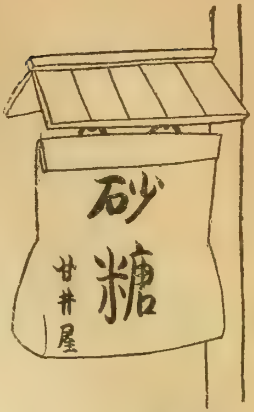
（終）

茅原華山先生著『日本國民に遺言す』忽ち重版！

これこそ日本民族の缺陷を深く突込み、我等は如何に生くべきかを啓發指導する名著、永井、鳩山兩大臣首め諸名士御推奬！ 青年團、處女會、官衙、軍隊、學校等の公民教育好資料として好評嘖々！

下村海南博士曰く 萬朝報を去つて十八年、茅原華山の名は世間から消えてしまつた。此間華山は再び歐米に漫遊してる。今次『日本國民に遺言す』べく其所見を公けにした。それは日本國民に生活の指導の指導原理を示してゐる、說の是非は各人見る處であらう、非常時に際し國民擧げて眼覺めねばならぬ秋、先づ國民生活綱領三則守則二十六を一讀し、華山の遺言につき再思三考すべきである。

ぜひ座右に備へて日々御愛讀下さい！ 定價一圓二十錢（送料十錢）東京・本鄉 大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）



落語

甘井羊閑

正岡蓉

大へん世の中には、甘いもの許りお好きの方がございます。

お酒と違うて一寸は害がないやうでございますが、而し、これとても程度で、一つ二十錢からの結構な餅菓子を毎日十二づつは喰べないと眠られないてな事になりますと、仲々、インフレ景氣の儲けぐらゐでは追付きません。

さて、これはごく罪のない大阪のお話で、阿波の徳島からでて參られた砂糖問屋。

御商賣が砂糖屋さんでいゝ加減甘い所へ、御主人の名が甘井羊閑。

それで、三度三度、御飯のおかずはゆで小豆に牡丹餅といふのですから、この位、甘い家庭はございません。從つて家族一同、みな甘いものに緣がございます。

△『えゝ一寸、お訊ね申しますが。』

○『はい〳〵何ですな。』

△『砂糖問屋で甘井羊閑さんのお住居はどちらでございませうか。』

○『羊閑は私ぢやがどう云ふ御用で。』

△『いえ實は、あなたの所は大へん甘いもの許り集めてらつしやると聞きましたので、ちよつと拜見にでましたので。』

○『いや、ようこそおいでになりました。さ、お上り下さい。』

△『へー、有難うございます。おやッ、大へん、此の沓脱石には蟻が居りますな。』

○『いや蟻も出ませうて。それは、石ぢやない、氷砂糖の固りで。』

△『へー氷砂糖……えらい物ですな。』

○『さ、こつちへ來て下さい。それから一つお斷りしておくが、うちの火鉢へ煙草の灰を落しては困りますよ。』

△『それは又、どういふワケで。』

○『灰の代りに黄粉と砂糖を入れてあるので。さうしておくと、餅を燒いたときすぐに傍から廻りの黄粉に塗して喰べられるといふ便利がある。』

△『や、成程、巧いこと考へましたな。時に奥さまはおありで。』

○『ハイ、家内は私より甘いものが大好きで、里の苗字が佐藤（砂糖）、そして本名が又、おさと（砂糖）で。』

△『ハヽー、佐藤おさとさん、成程、あなたの所らしい奥さんですな。して、息子さんは……』

○『ハイ、長男は膳哉（善哉）と申しますが、久しく肝臓（甘草）をわづらつて困りました。而し、おかげで只今はすつかり丈夫になりまして、外國へ菓子の研究にゆくのだと、先年、ケーキ丸で洋行いたしまして、あちらの婦人を嫁にして戻りました。この嫁の名がサッカ

リン、二人の中へできました子供をシロップと付けましたやうなワケで。』

△『いや、どうも甘いづくしですな。女のお子さんはおありですか。』

○『ハイ、もう一人、娘がお蜜で。』

△『お蜜さん、これもアマイな。して今、どちらにおいででございます。』

○『アマガ崎のアマの城下に居ります。』

△『何、アマガ崎のアマの城下……いよいよ甘づくめ甘オンパレードですな。で、どちらへかお嫁きになつたのですか。』

○『いえ、其が事情あつて、とう〱尼（甘）になりました。』

△『やれ〱、それは〱。では、お寺を持つておいでですか。』

○『なあに、あなた、庵（餡）を持つて居りますので。』

△『ウーム……いや……アマイことにかけては徹底してゐますな。而し、一家そろつて甘い趣味がお揃ひで結構です。もう、お子さんはそれ丈けですか。』

訊ねると今までニコ〱してゐた甘井羊閑さんがポロ〱涙をこぼしました、さうして、

○『いや、それが聞いて下さい。たつた一人、次男丈けは家風にあはずとう〱勘當して了ひました。』

△『それはお氣の毒で。今、御次男は失禮乍らどうしてらつしやる。』

○『憎いやつで。鹽問屋へ養子に參りました。』

（をはり）

漢學者（寸篇落語）

學者の家へ賊が入つた。主人の學者が「何者だツ」と大喝すると、賊は縮上つて△「ヘイ、泥棒でございます」○「泥棒、そんな棒はない筈だ。盜賊だらう、何と云ふ名だ？」△「藤兵衞と申します」○「藤兵衞と云ふ名はない、文字で書くと藤ひやうゑだらう、住居は何所だ」△「麻布の市兵衞町で……」○「市兵衞町ではない、市ひやうゑ町だらう」△「恐れ入ります」○「何所から入つた？」△「ヘイ、裏手の黒ひやうゑを乘越えて參りました。」

滿天下待望の名著愈〻出版!!

武藤山治先生著

武藤山治百話

見よ!! 實業界の巨人が語る感銘深き一語一語!!

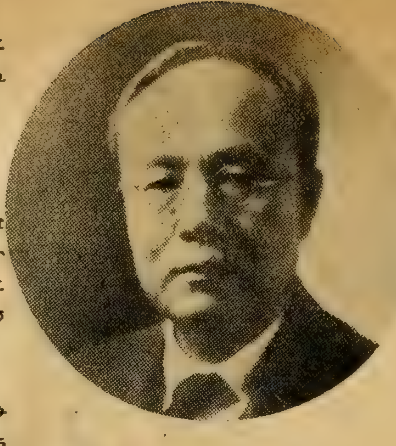
本書は曩に鐘紡の名社長としてその名を天下に轟かし、いま時事新報社經營の任に當つて名聲赫々たる實業界の大立者武藤山治先生が、血の滲むやうな刻苦奮鬪によつて得た貴重なる體驗とその高邁なる人格、及び東西古今の書籍を渉獵せる該博な知識とを以て、凡ゆる方面にその眞情を披瀝せるもの!

全卷一百數十篇、頗る廣範圍に亙る處世、修養、警世の大執筆!!

流石實業界の巨頭であり嘗ては政治界一方の領袖であつた著者、又青年時代には或は米國に勞働しつゝ勉學し或は新聞記者

としてその敏腕を謳はれた著者――此の著者にして、始めて此の大抱負を述べ得られるのだ。政治、經濟、實業方面は勿論、或は敎育に宗敎に、或は科學に人生觀に、盡く一家の大見識を以て忌憚なき論評を下してゐる。本書に引用した挿話の如きも、或は諸外國の新事實又は吾國の現狀を捉へ、或は古今の逸話、寓話を求めて、實に面白く實に平易に、然も時には峻烈骨をさす名論となり、時には犀利警拔よく讀者の肺腑を抉る卓說となる。之を讀んで感奮せざるなく、之を見て興起せぬ人はないであらう。

讀め!! 面白い實話、寓話!! 感銘深い新知識の寶庫!!



內容の一部

○人生幸福の二面觀
○八尺男の悩み
○二重人格の戰ひ
○我子を忘れたる女
○人生の競馬場
○我國の要する政治家
○米國州會に於ける祈禱
○『議會政治』に改革の氣運
○米國政界秘話
○リツデル孃に恥づ
○大阪の中央公會堂
○金持と政治
○農村生活と都會生活
○赤化思想と青年敎育
○金儲けの秘訣
○農村と町との經濟關係
○中小商工業者を救へ
○米國家庭豫算會議の一例
○世界不況恢復策
○役人經濟と財政整理
○新聞紙自制の必要
○米國實業會社の採用條件
○エヂソン座右の銘
○喜劇名優の述懐
○失敗に屈してはならぬ
○成功の裏面
○讀書の經濟化
○不景氣の利用厚生
○人間と自然の喧嘩
○人體電氣の研究
○藤壺貝の話
○音の力と光の力
○眞理の銅像
○自負心の缺乏
○愛の小舟
○小中學生に街頭敎育

是こそ成功の道を悟り品性を高める修養の活敎訓!!

本書は武藤先生獨特の平易簡明な文章、實に面白く輕い氣分で讀耽り、而も新知識が豐富に得られ人格は必ず陶冶される。之こそ老若男女誰にも喜ばれる新時代の修養讀本!

定價一圓二十錢(送料十二錢) 全國の書店に販賣

東京本鄉 大日本雄辯會講談社發行(振替東京三九三〇)

霞(かす)む峠(たうげ)ざんげ猿(ざる)

子母澤寛

小村雪岱畫

峠の卷

一

富士が、眞ッ正面に見える。

東から西への上りが二里。西の下りは、長く裾を曳いて、三里とも云ひ、五里ともいふ。東の麓は柏村、西の麓は、大里村から、森の間、畑の間、丘の上に、點々とわらぶき屋根が彌五郎村へつゞく。

この村々から見上げると、春は朝がすみ、冬は夕靄。いつも、夢のやうに、ぼうーッと霞んでゐる。峠を越える旅人が、どッちの村を見下しても、矢ッ張り霞んで見えるといふので、誰とは無しに、霞峠と呼んでゐた。

その峠の頂上に、幹の周圍二た抱へ、峠を掩ふやうに枝を張つた櫻の大木があつた。春の日の午の刻過ぎ、櫻の花が、はち切れるやうに咲いてゐた。

西から東へ、杖を力に、ゆつくり〳〵と上つて來る若い女がある。草鞋をはいて、ずゐぶん疲れてゐる。鬢の毛が、姐樣かぶりの手拭の下から、青白い頰のあたりにはら〳〵とかゝつて、肩から胸へ結んだ僅かばかりの荷物さへ重さうだ。小鼻のところに、ぽッちりと愛嬌のあるほくろが目立つた。

女は身重だ。

その女の、すぐ、後へつゞいて、にた〳〵忌や味な笑ひを浮べてついて來る浪人がある。色のさめた羽二重の紋付の素袷に、袴をつけてゐるが、袷の肩の色は褪め、袴の裾もすり切れて、刀の鞘の塗もはげた。深編笠はぬいで小脇に、月代の延びた二十七八の瘦せた頰骨の出ッ張つた人物だ。

この浪人は、もう少しさッき、霞峠を、東から西へ越えた奴。もう峠も、下り切らうといふ邊りで、向ふから來る一人旅の女を見て、一旦遣り過して置いてから、何んと思つたのか、急に、逆戻りに、のそ〳〵とついて來たのだ。

女は、最初は別に氣にも留めなかつたが、峠が急になる頃から、段々この浪人が氣味惡くなつて來た。ちよい〳〵振返つて見ると、浪人は、その度に、にや〳〵と笑つて、一寸、頭を下げたりした。

どうしたのか、人通りがない。例へ、百姓か、子供でも通り合せてくれたらと、幾度、見返つても、後には、いつも、この浪人がひとりだつた。峠の上からも、誰も來ない。段々恐くなつて、足を早めようとしても、身重のからだには、それも出來なかつた。

今にも、後から襟首をつかまれるやうな心地に追はれて、やがて、頂上へ近くなつた。櫻の花が――ぱツと、目のさめるやうに櫻の花が咲いてゐる

『名にし負ふ霞峠だ。櫻も滿開。御新造ちと腰を下ろして行つたらどうだ。』

浪人、はじめて、聲をかけた。

二

女は、ぎくりとして、顔色をかへて、つツつツと足を早やめて、頂上を東へ下らうとした。

『待て！』

浪人は、今迄の、隙をうかゞつてゐるやうな小狡さうな態度から、がらりと、獸のやうに變つて行つた。

『人ツ子一人通らぬ峠のてツぺん。これが男知らずのおぼこ娘といふではなし、待てとお主の袖をつかんだ俺のこの手の謎を解けない筈はなからう。』

ぴつたり袖を押さへて終つた。金と――殊に、女に餓ゑた旅から旅と流れる浪人の、淺ましい餓鬼の姿だ。

『あ、あ、あたしは身重のからだです、おゆるし下さい。』

逃げようとする女。

『そんなことはどうでもよろしい。たゞ、俺は、無駄にこの峠をついて來たのではないといつたら足りるのだ。』

『放して――放して――』

『放すものか――得心するとせぬとはそツちの勝手だ。俺は、力づくでも、思ひのまゝにするのだ。』

『放して――許して――』

女の叫ぶ聲。浪人の惡魔のやうに燃えた眼の光――。

暫くして――。

浪人は、西へ下る峠の道脇にある湧水で、唸り乍ら、眼を洗つてゐた。血だらけな左の眼。頰も鼻も、滅茶々々に引つかゝれて、糸のやうな爪痕からぷつ〳〵と血が出てゐた。

『うむ、剛情な女だつた。俺はこれ迄、道中で、いろんな女を物にしたが、あんな猫のやうな奴ははじめてだ。たつた一時の思ひを叶へる爲めに、もう少しで眼をつぶされるところだつた。指をいやといふ程に突込みやがつたが、――』

と、血だらけの眼の方だけで、あたりを見廻して、

『まアどうやら微かにでも物は見えるやうだから、この分なら盲目にはなるまい――だが、痛む、痛む――しかし、あの女が、いよ／＼どうにも仕方がなくなつたといふ時に、はつきりとした聲で南無阿彌陀佛と、たつた一こと云つたが、あの顏、あの顏――俺は、引つかゝれるより、突飛ばされるより、もツと、もツと強く打ちのめされるやうな心持がした。ぞう――ツと、凍る水を浴びされたやうな心持がした。だが、ふふーンだ。何アにをこれしきの事に、俺の惡運は、まだ／＼續く、まだ／＼續くんだ。人生僅か五十年さ、太く短かくと昔から云ふ通り。』

やがて浪人は、とぼ／＼と富士に向つて峠を西へ――扇のやうに開いた裾野の生々した若綠の中に消えて行く。

時々、

『痛い、これア痛い。眼の底から腦髓まで針を刺すやうにやむ。やられた眼は確かに見えるんだが――この痛みやうは、只事ではないな。』

苦がい顏をしてこんな、ひとり言を云つてゐた。

柏村の巻

一

峠の麓、柏村は、村をめぐつて奇麗な水の流れが走る。僅かばかりの村の家並のところも、眞ン中を、ちやら／＼と響を立てゝ小川が、底の、一つ一つ數へることの出來るやうな石を洗つてゐた。

白い壁の庄屋。大きな土藏と黒い門のある郷士の家。何處にも此處にも、柿が眞赤にうれて、黄色い大きな桐の落葉が、流れから流れへ、小舟のやうに渡つた。

村から峠へかけて、時々、雁が鳴き渡る。夕雲が、蛇の腹のやうな淋しい冷めたさを見せて、月は鏡のやうによく澄んだ。

秋も、もう、冬に近かつた。

百姓の喜十郎おやぢは、根が寒むがりやで、爐へ焚火をしながら、行燈の傍で、簑だの、菅笠だのをだして、冬仕度の繕ひをしてゐた。

その横に坐つて、赤ン坊に乳を含ませてゐる若い女。やつれ

て、瘦せてはゐるが、よく見ると仲々美しい。小鼻にほくろがある――。

窓の外は十三夜の拭つたやうな月。雁の聲がした。

女が、ほッと溜息をついた。喜十郎は、すぐに此奴を聞咎めて、

『お秋さんや、また何んか思ひ出さつたの？　お止めといふによう。お前さんがくよくよするのが、みんなお乳にまはつて、赤ン坊のお腹へへえる。丈夫で奇麗に育つ子も、そのために、ひ弱い子供になるげぢやないか？』

『はい。』

上げた顔に、涙がきらりとした。

『お前さんは、晴々とした顔をせぬ。それア尤も、あの峠の――』

と云ひかけて、喜十郎は、ふと口をつぐんで終つた。

『峠！　霞峠！』

お秋は、急に強い調子で、口の中で呟いて、顔は、さツと、血の氣が失せた。

『あの峠、あの峠――』

叫ぶやうにいふのを、

『それア、あんな事もある。だが、あれを知つてゐるのは、日本國中、どれだけ廣くても、あの鬼のやうな浪人と、この喜十郎より外にはないのぢや。喜十郎は、口を八つ裂きにされても、他人樣へ云ふ氣遣ひはなし、あの時のことは、あれだけで、恐ろしい夢を見たと、水に流して終ふことぢやと、わしは、幾萬遍云つた事やら。お前さんは、まだ、わしの心がわからねえかのウ。』

喜十郎は、年の頃すでに六十、ごま鹽の髷をきツちりと結つて、律儀さうな老人だ。

『あの峠、あの峠――』

お秋は聲を立てゝ泣き出した。

『いけないのゥお秋さん。お前さんが、そんなに泣いたり悲しんだりばツかりしてゐては、わしが、折角、お助けして、この年寄が、お前さんを背負つて、二里の嶮しい峠道を、この村まで來た骨折りも無駄ではないかよウ。』

二

お秋は、まるで、この春以來、長い長い夢を見てゐるやうな心地がつゞいてゐた。今も今とて、爐のそばで、はつきりと喜十郎の聲を聞き乍らも底の知れない眞ッ白い雲の彼方に、自分で自分の姿を幻に見てゐるのである。

若い武士と肩を並べて、淋しい中にもうれしさがあつて、江戸を出發した。

『何アに、お天道は江戸にばかりは照らぬよ。旅へ出て仕官をしよう。俺は、俺の腕を信じてゐる。なまじ、これ迄いろ／＼なわだかまりのある江戸よりは、白い紙のやうになつて、旅で主人を求め、力一ぱい、人間一匹をむき出しにして買つて貰はう。』

元氣のいゝ夫の姿。自分も微笑して、前途の大きな希望に燃えてゐた。まぶしい位に、陽の照るやうな心地がした。

それが――。

何時の間にか、駿府の城下はづれの貧しい長屋の片隅に、病みほほけてゐる夫と、一刻一刻頬の肉の落ちて行くのがわかる自分が、その枕元へ坐つて深い溜息をついてゐた。

『俺はいよ／＼最後の日が來たやうな心地がする。人生、不運に生れた奴は、いくらあがいたところで仕方のないものだな。泳ぎを知らぬ奴が、水へ落ちたと同じ事だ。俺はむしろ、頼りにならない友人を力としてゞも江戸の浪人生活をつゞけてゐた方がよかつたかも知れない。』

『あなた、そんな氣の弱い事をおツしやつては――』

『有難い――力をつけてくれるお前の心は有難いが、浪々の果てのこの病氣。俺は人生の敗者として死んで行かねばならない。たゞ、氣にかゝるのはお前の身重のそのからだだが――』

『どうぞ、どうぞ、このお腹の子の爲めにも、氣をお丈夫に。』

夫は長い事、默つてゐた。泣いてゐた。

『心殘りだなア。』

低く云つた。

それから――。

夫は死んだ。それでも野邊の送りをする迄は、心もからだも張り詰めてゐたが、仕事を休んでお葬ひの世話を燒いてくれてゐた長屋の人達が肩を叩いて、

『たゞのおからだではない、お氣をしつかりとして。』

こんなことを云つて、行つて終つてからは、からだ中の骨が溶けてゆくやうで、ぢツと坐つてゐる事さへ出來なくなつた。

幾日か經つ。

『いつ迄も、かうしてはゐられない。米もない、味噌もない。もう賣り拂ふ品もない。せめて、からだが江戸まで歩ける間に

『――江戸まで行く着物のある間に――』

そして――。

旅をつゞけてゐた。身重の苦しさと、手許の少なさは、悲しくも、淋しいたつた一人の旅であつた。

その指して行く江戸は――。

江戸には、父もない、實の母もない。繼母が父の亡き後を、恐い顏をして、自分を睨んでゐるのが、見えるやうだつた。慄ふ脚、進みかねる足。でも外に行くべきところがない。

三

櫻がぱツと眼に映つた。

その櫻の間から、あの日の浪人の顏が出た。

『あツ!!』

お秋の聲に、却つて、吃驚したのは喜十郎。

『ど、ど、どうしただね。』

『――』

お秋は、たゞ、息苦しさで、倒れさうになつた。喜十郎の聲は、たゞ、あの浪人の聲にきこえた。

浪人が、自分のからだを離れて峠を下りて行く姿を見た。だが、それから後、自分の氣のついたのは、柏村の百姓喜十郎老人の薄暗い部屋の中だつた。

『太い浪人だ。だが、俺ア飛出したところで勝てツこはなし、齒ぎしりをして見てゐただけだつたよ。可哀さうに――この身重のお前さんをのゥ。』

お秋の胸に、その喜十郎老人が、今、眼の前の老人として、はつきりと正氣づいて來た。

『すみませぬ。』

『何をね、今更――くよ〳〵しては、お前さんのからだに惡るいばかりか、その赤ン坊に惡るいつて事よ。おう〳〵、めんめを開いてるな。おう〳〵よし〳〵、可愛い子ぢや。お七夜に、このおやぢが名付親だ、おこよ坊よ。達者で大きうなつてくんろよ。』

喜十郎は、堪りかねたやうに、簑を片づけて、お秋の胸から、赤ン坊を抱きとつた。眼のぱツちりとした女の子。名前をおこよ。夏のさかりに、この家のこの部屋で生れた。ほとゝぎすが鳴いた。

『お武家の子だけに、女の子でも、何處となう凜々しいなア――お秋さんや、この子が一人前になるのが樂しみぢや。江戸の繼しいお袋さんとこへ戻るより、氣兼ね氣苦勞のねえ田舍、朝夕、靜かに暮してゐるに限りますぞよ。』

『はい。』

その雁の鳴き渡る麓はやがて冬となつた。雪が降つた。山に食物のなくなつた山犬が、里を荒らして、鶏をさらつて行くなどといふ噂が立つてゐた。

お秋が、喜十郎の納屋で、肌身離さずに持つてゐた匕首で喉をついて死んだ夜も、朝から雪のちら／＼降りつゞいた日であつた。

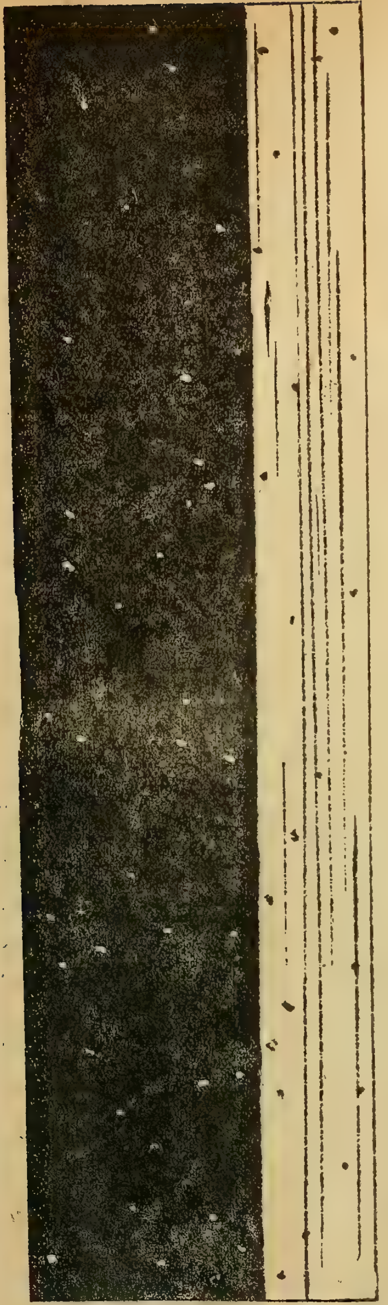
『この乳呑子を殘して、まア何んて事をするだア。他人の親切を仇でけえすとはお前のこんだぞ。』

喜十郎は、お秋の死骸を見ると一時に、くわッと腹が立つて、蹴りつけてもやりたい心地がしたが、

『大恩ある喜十郎樣。』

とした書置きをよむと、一も二もなく涙だけが出て來てならなかつた。

『霞峠にて、世にも恥かしき憂目を見、すぐにも自害と存じ候へども、お腹の子を闇より闇へ道づれにする事の不便さと、一には若し男の子ならば、不幸の中に陋死いたせし夫の思ひを、今の世に晴らし、名あるものにもさせ度しと思ひ、諦めかね惜しからぬ命を本日に及び候。その上、お前樣の御親切身に染みて有難く、一日一日、この世に未練をかけ候へども、所詮は、何處のものとも知れぬ浪人に汚されし、われ乍ら穢ならしきこの身。おこよも、最早や他人樣のお乳にもすがるやうに相成り、案じ候事もなく、この上は、重ね重ねの御親切に甘え候へども、何卒何卒不便のものと思召し、お前樣の子としてお育て下され度く、わたくしは、死



んであの世にて夫にお詫を申し、草葉の蔭よりあの浪人の行衛を探し必らず〳〵取り殺して無念を晴らす考に御座候。他人様に顔見らるゝも恥かしき汚れし身にて、一日もこの世に居られぬを泣きの涙に生き長らへても、たゞ未練の増すばかり、思ひ定めて自害いたし候。わたくしの死體は、野の果てにお棄て下され、たゞ〳〵おこよの事、臨終の際まで頼み參らせ候。』

身孕地藏の巻

一

おこよは、もう、十八になつてゐた。美しい娘であつた。死んだ母のお秋とは瓜二つ、たゞ小鼻のほくろがないだけであつた。母が生きてゐて二人で並んで鏡に映つたら、お互に、どツちが、自分だか、わからなくなつたであらう。

そのおこよは江戸にゐた。江戸車坂の一刀流の劍術道場伊東彌左衛門方に、女中奉公をしてゐた。

この道場へ來てから二ケ月。今日一日で、明日は暇を貰つて、深川佐賀町の本郷重太夫の道場へ住み込むことに定まつてゐる。

春のうらゝかな日である。

今朝着いた伊東の舊友といふ年配の人と、もう一人少し若い二人の劍客があつて、伊東は座敷の障子を開いて、晝から、酒がはじまつてゐた。庭には青い竹、沈丁花が咲いて、いゝ匂を漂はしてゐる。

お酌をしてゐたおこよが、お酒の代りに座を立つた時、若い方の劍客が笑ひ乍ら云つた。

『伊東先生、なか〳〵別嬪でございますな。』

『うむ。別嬪の上に少し事情があつてな。江戸の道場を、一ケ所二ケ月づつで奉公をし廻つてゐるのぢやよ。明日からは、深川の本郷先生のところへ行く。』

『ほーう。それアまた變つてゐますな。』

と、老劍客。

『あれは、甲駿の國境近き柏村といふところのものでしてな。彼十歳の時、四谷の平山行藏先生が旅の道すがらその柏村へさしかゝつた時、大變な吹雪に逢はれた。行く先きは登り二里とやら申す險しい峠で、仕方なく、ある百姓家を訪ねて、納屋の一隅を借りてそこへお休みになつた。』

『納屋?』

『未だに如何なる寒夜と云へども寢所で夜具をお用ひにならぬといふ先生ぢや。素より好んで納屋を所望されたのぢやらう。』

『ほーう。はじめて伺ひます。あの忠孝眞貫流の平山先生は、そんなお方なのですか。』

と若い劍客は眼を丸くしてゐる。

『納屋などは、先生としてはまだ極樂ぢやと仰せになるだらう。何しろ、寒中水風呂に入り、讀書の際は、槻の二尺四方

の板を敷物として、これに雨拳を突き當て突き當て、拍子をとつて夜を過ごされる。その爲めに兩の拳は鐵よりも堅いとの噂ですからなア。』

『へーえ。』

『その平山先生が、眞夜中に、ふと不思議な音を耳にして眠りをさまされた。外は物凄い吹雪、その吹雪の中に、ざア〳〵と水をかぶる音なので、そツと、出て見ると、母屋のうらを小さな川が流れてゐるが、これが凍つてゐる。その凍りを破つて、こゝから桶で水をくんではかぶつてゐるのが、まだ、七つ八つの女の子なのですなア。』

『へーえ。』

『それが、今の女中ですよ。平山先生が段々本人にきいて見ると、何にか深い事情がある――この事情の何んであるかは拙者も實は知らんのですがな。兎に角、平山先生が、そこで、ぴつたりと旅行の足をとめられて、まる二年の間、この女の子へあの物凄い眞貫流の手ほどきをしたのですよ。』

二

伊東は自分ごとのやうに話しつゞけた。

『いかに子供でも、寒中吹雪の中に水を浴びる程の健氣な奴、それに手をとるのがあの平山先生ですから、二年たつて十歳の時には、大した腕になつた。それを、御自分で江戸へ連れて出られて、尙二、三年、手許に置いて、それから、江戸の道場を順ぐりに二ケ月づつ、御自分で添書をされてまア當人奉公巡禮といふ譯ですよ。すでに奉公の道場數五十に近いといふ事。』

『何んの爲めでせう。』

『武藝の腕を磨かせるとのお心もあるらしいが、拙者は、何にか例へば親の仇といふやうなものを探してゐるのではないかと想像してゐる。』

『で、先生はあの女の腕前をごらんでしたか？』

『それア知つてる。何しろ受けたり切返したり打つて出るなどといふ技に心を置くからうまい奴には下手が敗けるに定まつてゐる。そんな工夫ばかりしてゐては生涯やつても知れたもんだ、只必死三昧、精一無雜に、餓ゑた鷹の如く、怒れる虎の如くに、敵に向つて突撃してこそ、其處に自在の妙境があると說かれる先生ぢや。その薫陶を受けた女、並々の手練では歯も立たぬ。』

若い劍客は、こゝ迄來ると、きツと眉を上げた。

『どうでせう一つ、拙者も修行になります。あの女と手合せをお許し下さる譯には參りませぬか。』

『はツはツはツ。』
と、伊東は笑つたが、
『よろしい、話して見ませう。あの女も修行を喜ぶのですから。』
やがて――。
座へ戻つたおこよは、若い劍客のいふまゝに、道場で手合せをする事となつた。
『誠に恐れ多い事でござりまする。わたくし如き卑しき女が、御歴々様のお手直しをいたゞきましては。』
『いや、そんな御謙遜では痛み入る。拙者こそ、平山先生御仕込みの痛い目を見ねばいゝがと、心配してゐるところです。』
そして、この二人の手合せは、まるで問題にならなかつた。おこよの一突きで、若い劍客は、道場の眞ン中へ、仰向けに引ツくり返つて終つた。老劍客も、羽目板へ、竹刀の先きで縫ひつけられる位に、押しつけられて行つた。
『いや、どうも、全く鬼神の如きお手練、われ／＼男子として面目ない、穴があつたら入りたい位ですよ。』
恐縮する二人――また奥へ戻つて酒になつた。
おこよは、たつた今、竹刀を持つた事などは忘れたやうに、穏やかな女中として、丁寧に酌などをした。
『あなたは、柏村だとさツき伊東先生から伺ひましたが、甲駿の國境附近は、拙者も旅をした事がありまして、柏村といふのは幾つもある。何の邊ですか？』
若い劍客が、きいた。
『はい。峠を越えれば、眼の前に富士が繪のやうに見えますといふ、大きな櫻の木のあります霞峠の麓の村でござります。』
『あゝ、然樣ですか。霞峠の――』

三

老劍客が言葉をついだ。
『あすこならわれ／＼兩名、つい、十日程前に通つて來ましたぢやよ。大きな櫻の木で、もう、蕾が赤くなつてゐました。この陽氣ではそろ／＼一片二片がついたかも知れませんなア。それに麓の村々が紅桃の盛りでしてなア。誰がつけたか知らんがあの峠を霞峠、全く麓の村々がかすんで、ところ／＼に紅を落したやうな桃の盛り、天下の絶景でしたわい。』
『あゝ、然樣で御座つたか――人生、こゝに多少の緣ありですなア。はツはツはツ。』
伊東も愉快さうに笑つた。
『久しぶりで、故鄕の話をきかせていたゞき有難う御座りま

した。』
『いや、何アに。』
と若い劍客。
『それから、あの櫻の下に不思議な奴がゐましてねえ。』
『え!?』
おこよの眼が光つた。
『何んでござりませう?』
『然樣、一寸見たところ年の頃は先づ五十近いが――尤も顔は見れんのですがな。浪々の武家ですよ、あの櫻の下にぺつたりと坐つて、默つて、下を向いたまゝ、大地へ手をついて、ぺこぺこと頭を下げてゐるのです。そして、その傍らに立札がある。あれは何んと書いてゐましたツけねえ。』
と、老劍客の顔を見た。
『文言は忘却したが、要するにぢやね。自分は先年この峠に於て、若氣の至りで或る過ちをした――何んぢやらうなア、たゞ過ちとだけでわからなかつたが――その罪業消滅のため、櫻の下に、一基の地藏尊を建立したい。就ては、永々の浪々であり、加ふるに病弱如何ともする事を得ないから、篤志のお方の應分の御寄附を得たいといふのぢやつたなア。』
『それから、終りに最後に感激の文句があつたではありませんか。』
『さう〳〵。その爲めに、拙者も、甚だ輕るい嚢中から、身分不相應の志を献じた次第ぢやが、その地藏尊は身孕地藏と稱へ奉り、拙者は、その建立と共に斷食潔齋この處に於て涅槃に入る者也とあつたですなア。』
おこよの顔色は變つてゐた。
『霞峠!　身孕地藏!　五十位の浪人!』
すツくと立つて、劍客も伊東先生も、あツといふ間に、
『御免遊ばしませ。』
敷居の外に手をついて、
『なが〳〵の御厄介をいたゞき有難う御座りました。それこそ、わたくしの尋ねまする仇敵。これからすぐに、駈けつけまする。』

櫻の卷

一

霞峠を、疾風のやうに駈け上る若い女。云ふ迄もなくおこよである。引つかけた道中合羽の下には、白木綿の襷、一本刀を腰にしてゐる。

峠の中程で、ふと立ち止まつて、麓の村を見返つた。櫻が咲いてゐる、桃が咲いてゐる紅い桃が――。柏村を圍る水が、きら〳〵と春の陽を映して綠の間に、鏡を延べたやうに輝やいてゐる。

『平山先生がお暇乞の時に申されました。仇は何時迄も仇ではない、一心發起、殺した母上の菩提の爲めの苦行ならば許して戻れ、許すこともまた佛への孝道ぢやぞと――でも、でも――わたしが、十八年の永い間の辛苦も悲しみも、誰が與へた、何んの爲めでせう。わたしは、わたしは、許せない。地獄へ落ちて鬼になつても仕方がない――たゞ、お世話になつた喜十郎おぢいさまに今日の日をお見せ出來ないのが口惜しい。』

おこよは、ひとり言を云つて、また峠を走り上つた。

峠の櫻は、丁度、十八年前のあの日のやうに、ぱツと明るく咲いてゐた。大きな幹、雲を重ねたやうな花――その幹の下に、男が、その浪人風の老武士が、頭をべつたりと地へつけるやうにして、坐つてゐた。身孕地藏建立の立札に、花が一片一片、散りかかつてゐた。

おこよは、つか〳〵と傍へ寄つた。そして、力をこめて、

『お顏をお上げなされ、寄附いたしませう。』

といつた。

浪人は、矢張り下げたまゝ、

『上げられぬ。一生、人に顏を見せず、頭を下げたまゝの苦行でござる。拙者は餘命いくばくも御座らぬ、一刻も地藏尊の建

立を急いで居る仕儀、切に御寄附をおたのみ申す。』

云つた時、おこよの鼻に不思議な匂が入つた。

『酒？　えゝ、酒の香。』

酒をのんでゐるやうだ――この男は、酒をのんでゐる。

『お顔をお上げなされ。』

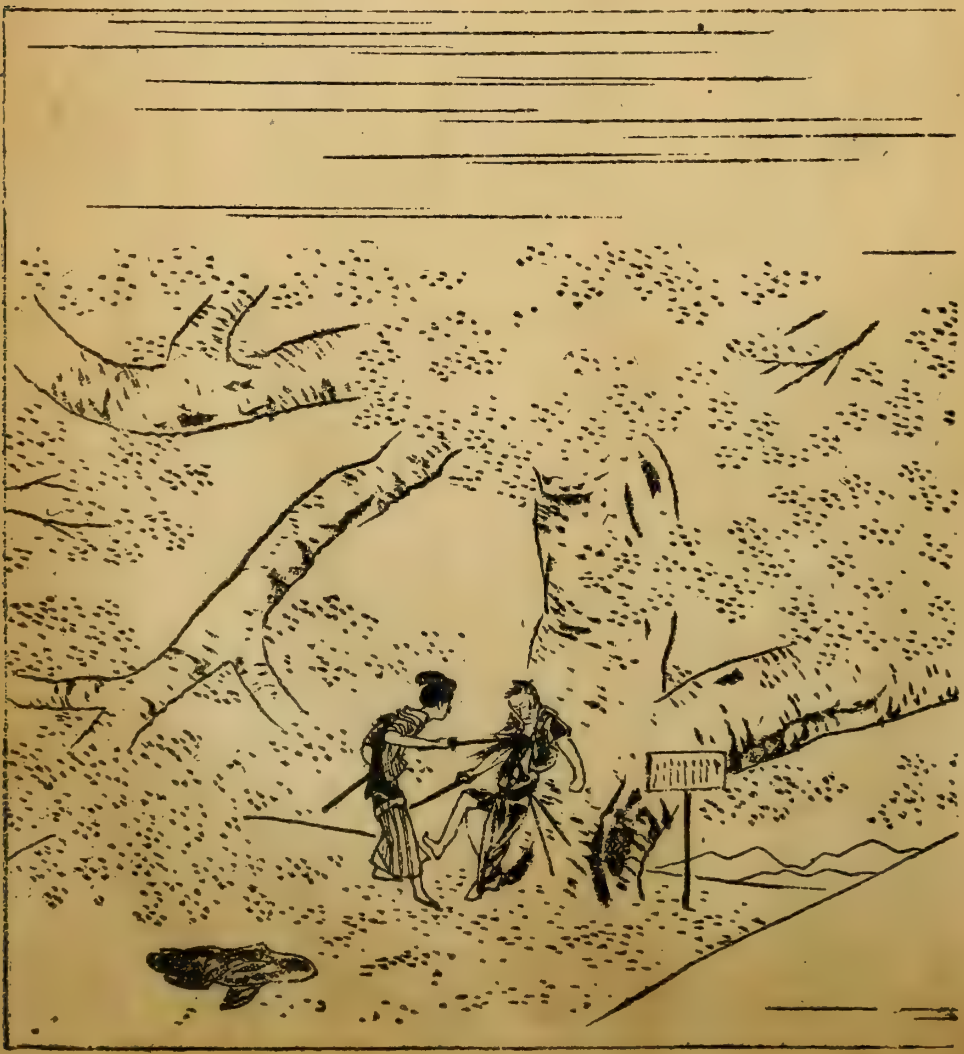
『お若い女人のやうに思はれるが、強ひて顔を上げよと仰せあるは何故でござるか？』

『お顔を上げて、よツく、わたしの顔を御覧なされ。十八年前、その許のした悪業を目の邊りに、思ひ浮かばれるでせう。』

おこよの聲は、ぴ――んと響いた。心の底には、平山先生の教が、波のやうに騒ぎ立つてはゐたが――。

二

男はむツくりと顔を上げた。眞赤な顔、



酒に醉つた顏。憎々しい厚い唇――あの日、お秋を苦しめた浪人だ。

『わツはツはツ。』

まるで、今迄の殊勝な人間とは別人のやうに、

『いよ〳〵飛んで來たな馬鹿な小鳥奴！』

『え？』

『はツはツはツ。貴樣が忠孝眞貫流平山行藏子龍の弟子となつて、あの日の俺を討つ爲めに、四方八方手を廻し、江戸道場の二ケ月奉公。それもこれも諸國を渡るこの俺には廻り廻つてみんな耳へ入つたんだ。一人旅の一寸したいたづら、夢のやうだと笑つて濟ませば濟むことを、荒立てゝ死んだお前のお袋もお袋だが、女だてらに仇討騷ぎ。そツちへ行つてもお前の噂、こツちへ行つてもお前の噂。俺は最初は屁とも思つてゐなかつたが、その噂が餘りうるさいので、お終ひにはどうにも、自分が何んだか本當に恐ろしい者に追はれるやうな氣がしてならなくなつて來やがつて、夜も碌々ねむれねえ、夢を見る、うなされる、段々、お前が恐くなる。鬼に見える。お前の顏が平山の顏に見える。堪つたことぢやアねえんだ。それで、逆手にこツちから、お前を殺して奇麗さツぱり跡を斷つて、ゆつくり枕を高くしてえと實は江戸で一二ケ月程探して見たが、噂ばかりでどうにもお前の正體がつかめねえ。それに第一、お膝下では、うつかり刀は拔けねえし、その上、萬に一つ、平山に助太刀などとやられては、こツちの命が危ないので、考げえ出したこのお芝居。變つた事を。變つたところでやつてゐれアすぐに日本國中の評判になる、忌やでもお前の耳に入る、お前が、計られるとは知らねえからのこ〳〵こゝへやつて來る。おびき出せア此方のものだ。助太刀なしの女一人。ヘン、さア、どうするんだ。御寄附々々と貰つた錢で、毎日麓から運んで上る酒が三升、おい、まだ飮み殘りがあるんだ、萬事ア此奴を飮んでからの話だ。』

老浪人は、傍らの草のかげから、酒を出して、これを、德利のまゝ、ごくり〳〵と飮んで、

『かう、醉つぱらつちやア、顏を上げては錢ア貰へねえ、そこで考げえ出した下頭の一件。ばた〳〵人の足音が聞えて來てから手前の首だ。手間暇もなくすぐに下げるといふものさ。足音のねえ時は、櫻の下で一人酒盛り、女のゐねえが淋しいだけよ。』

おこよは、浪人の云ふのを默つて聞いてゐたが、頰には次第に微笑が浮んで來た。

『みんな詐されてゐたんだ。平山先生もお話だけをお聞きになつて、あたしにあんなにおツしやつたのだけれども、これなら、討つのが當り前。』

さう思つて、

『わたしを知つてお出でなら今更名乘る事もござりますまい――さ、尋常の勝負!!』

浪人も、ひよろ〳〵と立ち上つて、唇をなめ乍ら、

『別嬪だなア。このまゝ殺すにやア惜しいもんだ。』

三

『默れ!!』

『しかし、安心しな。十八年前とア事變り、こツちはもう年寄りで、から意氣地が無くなつてゐるんだから――』

『さア、刀をお拔きなされ。』

『よし〳〵。人を斬るには刀は拔かなくてはならんからなア。わツはツはツはツ。』

するりと刀を拔いた。

『後日の爲めお名乘りなされ!』

『俺か?』

『仇!』

『わツはツはツ。俺は元駿州田中の藩、北條五郎太といふものだ、二十五の時女でしくじり浪人して以來、女千人の願がけして物の見事に成就した男だ。腕は一刀流。安心しろ。痛くないやうに斬つてやるぞ。やツ!!』

いきなり斬りつけた。櫻は散る。春風が吹く。

さツと躱して、ぴたりと中段につけたおこよの刀は、ぴくりともしなかつた。そして、ぢりツ、ぢりツと進んで行つた。

北條の頬は次第に青くなつた。醉も醒めて、眼が血走つた。

『待て、待つてくれ。』

でも、おこよの刀は、青く光つて、たゞ、眞直ぐに、槍のやうに延びて來るだけだつた。

暫くして――。

北條は、胴の眞ン中を、櫻の大木へ、刀で縫ひつけられて、泉のやうに血が流れ、がつくりと顏を下げて、もう、絕命してゐるやうであつた。

おこよは、峠へ立つて、靜かな呼吸で、また、なつかしい柏村を見下ろしてゐた。

『わたしもう刀を持つ用は無くなつた――桃の咲く村、櫻の咲く村――あたしは一生あの村で、母上と、喜十郎ぢいさまの菩提を弔つて送りませう。あの流れの、あすこを廻つた水車小屋、その隣りの納屋、あたしは、あすこで、一生を送るのです。あ、人が通る、馬が通る――人も馬も、みんなあたしの知つてゐる方かも知れない――』

富士は、おこよの背に、今日も、くツきりと浮んでゐた。

――終――

笑の探検隊

第一班

班長――徳川夢聲

隊員
榎本健一
大岡怪童
中野かほる
水ノ江瀧子

モダン藝妓大學

さアて、これから吾等の第一班は、笑の鑛脈を求めて、何處の山へ赴くべきか、鳩首合議をした――と云ひたいが、鳩首は2人だけ、あとはゴリ首と、河馬首と、斯く申す小生の饅首である。

すると、ターキー孃、一寸ウインクして（と云つても、小生に對してではないですゾ）カホル孃と何か合圖をして、小生の耳に囁いた。若き乙女にサ、ヤカレルのは、決して不愉快なものでない事は、石器時代から不變の眞理でアリマス、――が、ヲヂサンと來ましたネ――『あのネ、ヲヂサン、ゲイシヤ・ガアル・カレッヂに行つて見ない？』と、小生に囁いたのである。

『然し、吾々男性にも參觀させるかしら。』と小生が云ふと、カホル孃が實に艶やかな、横目で白眼んで（と云つても、何もヘンにとつては困りマスゾ。顏を向けるのが面倒な場合は、目だけで間に合せるデス）曰く、『だつて男性が相手の職業ですもの、貴郎がたが行けば、實習の材料よ。』と來た。

成る程、そいつは面白い、てんで小生は破顏一笑――私は文章と云ふものを書き出して以來、未だ嘗て此『破顏一笑』てえ文字を使用した事は一回もないのであるが、前號

本誌の記者が、さう書かれたので、ハタとばかり想ひ當つたから、そのまゝ借用する次第。

まつたく小生は笑の表情が拙劣であつて、一たび笑つたが最後、ガラガラと造作が崩れて了ふ事、吾ながら妙也である、正にこれ破顔デアル。――で、小生は運轉手君に囁いた『これから、新橋の藝妓學校にやつてくれ給へ。』と。

昔から、イキで高尚でヒトガラな、藝妓衆と云へば、新橋にトドメを刺したもの。ヤボとハイカラの御禁制は此の土地の誇るべき傳統だつたのである。それが、モダン〳〵、ウルトラモダンのスピード時代、目醒しきカフエ女給の進出、戰慄すべきダンス・ガールの跳梁、うわーッ『セックス戰線異常あり矣!』――傳統の固い敎に閉ぢ籠つてばかり居ると時代の方でサッサと行つちまふゾ、『自覺セヨシンバシゲイシヤ!』とばかり、土地の福澤諭吉みたいな先覺者が、集つて創立したのが實に本校でアリマス。

新橋藝妓學藝講習所

――1933年には、1933年型の藝妓を! といふ意氣込み。

やがて、自動車は校門に入る――と書きたい所だが、寫眞で御覽の通り、門は御生憎さまで、市場のリヤ・カアの置いてある、橫丁のガラス戸が、いきなり入口である。

『何處へ連れてくんですい。』

と、今まで心配さうだつた、エノケン、カイドーの兩君、看板を見ると、ガゼンきまりの惡さうな表情をしたから、案外彼等もカレンである。

兩人とも、容易に這入らうとしない。そのくせニヤ〳〵笑つてる所を見ると、滿更、恐怖心ばかりではないらしい。

『ねえ。何をグヅグヅしてんの。』と水ノ江瀧子孃。

『さア、早く御上んなさいよ。』と中野かほる孃。

小生、この光景を眺めて、ハテ何かに似てゐるが、と思つたがハッキリしなかつた。あとで寫眞が出來てきて見たら、『あ、さうか。この光景はマサに、八ツ切り慘死體の發見された地方に於て、毎夜見られるアレであるぞよ。』と秘かに微苦笑したデス。

敎室は、幾十疊も敷けようと云ふダダッ

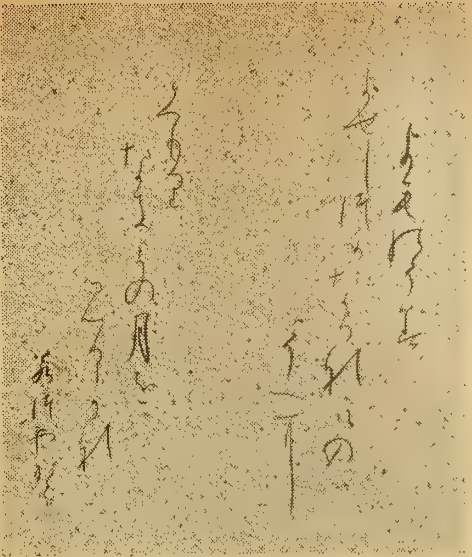
柄にもなく羞んで居る兩君を兩孃頻りに勸誘して居ます

廣い、二階の一室ぎりだ。

島田、島田、銀杏返し、島田、銀杏返し、島田、島田、銀杏返し、銀杏返し、ズラ〳〵ズラッと、日本髮・オンパレード。中に、お下げも二三混るが、斷髮は1人も無し。流石に別天地である。

それが今や、英語の時間とあつて、新橋演舞場で小生知り合ひの金子教授が、リーダーを講義してゐらつしやる。

『ルックアット・ザット・マン。』と教授が、仰言ると、これ等千紫萬紅の女生徒が、



千代香さんの手蹟

『るつくあつと・ざつと・まん。』

と聲を揃へて云ふのである。

教室の一隅に、土地分讓會社事務所にありさうな、戸棚つき卓子があつて、其處に教頭然と控へてゐるA氏に、いろ〳〵と本校の特色を聞く。

『さうですなア、生徒の年齡が實にマチ〳〵である事も特色ですかな。一番若いのは13ぐらゐから、一番年長となると60歲近い婆さんがあります。』

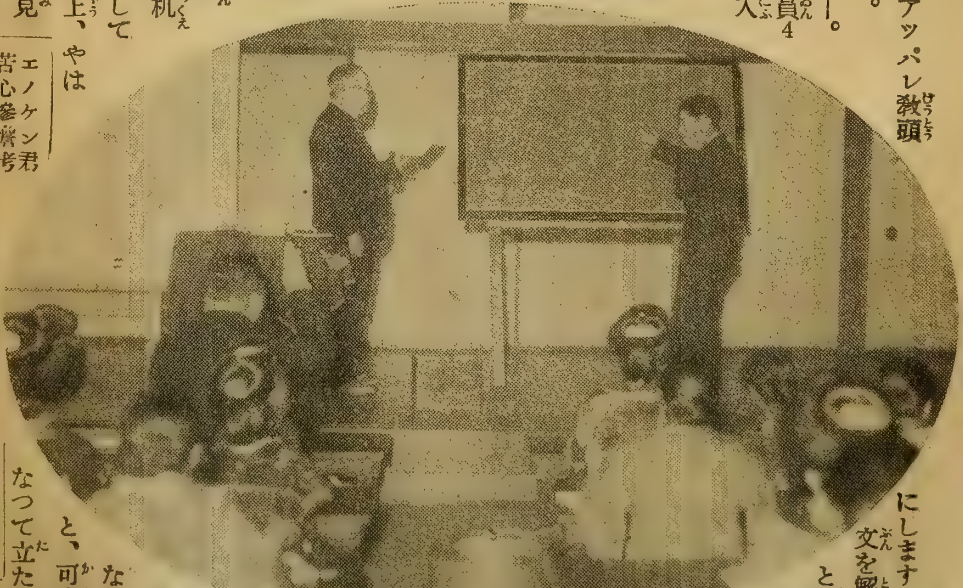
『ほゝう。然し今日、見えてゐるのは、皆んな若いやうですが。』

『それはね、英語の時間だからですよ。流石に40を過ぎてからは、英語でもないといふ譯でせうな。さういふ老寄り連も、御習字の時間となれば出席します。習字の方では、自慢するんぢやありませんが、天才を2人も出してます。就中、偉いのは野島家の千代香といふ妓でしてね。これは泰東書道院の書道展覽會で、賞状を貰つたんですから──つまり繪畫の方で云へば帝展ですな、あれに入選すればもう玄人です、書道で立派に飯が喰へる腕前ですな。』

最前列に行儀よく着席した四人、英語の講義拜聽

『はゝア、年齢は御幾歳で？』
『千代香ですか。21ですよ。』
『成る程、丁度、檢査ですな。』とは、吾ながらクダラない事を云つたもんだ。
『それから、も一つ本校の特色は、生徒が全部出席しては困る、と云ふ事です。』
と、奇想天外な事を仰言る。小生もサルモノ、皆まで云はせず、
『つまり、全部出席するやうでは、御座敷の方が不景氣だ、と云ふ證據だからで。』
『いや、ネタが拔けるからです。』
『へえ！　あのネタが……』
『さうです。本校は全新橋600名の藝妓のうち、約400名を生徒としてゐます。この400名が、全部精勤てえ事になるとデスナ此建築はチヤチなバラックですから、忽ちネダが拔けて、階下の公設市場の、野菜物や、お魚をブッ潰す恐れがあるんです。』
『はゝア。然し、不幸にして生徒諸孃が、皆氣を揃へて勉强家になつた時は？』
『その時は新橋演舞場を教室にする事になつてゐます。』

とは、アツパレ教頭殿である。
さて――。
探檢隊員4名、臨時入學とあつて、最前列に行儀よく着席する。
金子教授ニコニコ笑ひながら、
『では、榎本、大岡の兩君も、その机に生徒として坐つた以上、やはり藝妓と見て教へる事にします。さア、入學試驗として、この英文を解いて御らんなさい。榎本君ッ。』
と指名して、次の英文を黒板に書かせました。
Is all law sam buy many a salt dasb.
エノケン君、苦心慘憺考へたが何うしても解らない。
するとカイドー君、
『先生ッ、僕出來ました。』
『では大岡君！』
『ハッ。その意味は、サムガ多クノ或ル鹽ノ混ゼモノヲ買ッタノハ總テ法律デアラウカ――であります。』
『いけません。本校の生徒が、そんな頓智のない事で何うしますか、向ふの壁の處へ御立ちなさい。』
と、可哀さうに、カイドー君泣き相になつて立たされました。
さて、この英文は、讀んだ通



エノケン君苦心慘憺考へたが出來ない。その時『先生！』と手を揚げたのが、カイドー君でした。

遂に立番をさせられて泣面のカイドー君

りの意味で、即ち『居候、三杯目には、そつと出し』なんださうです。成る程、イズオールローは、居候と讀めます。流石は、本校の先生だけあつて、シヤレた問題を御出しになるではないですか。

やがて休憩の時間――。

交る〳〵何か御話しをするやう、と云ふ先生の御命令で、吾等のターキーは、滔々と敎壇に立つて、國際聯盟と日米問題を論じた。

『以上の理由に依りまして、よしんば日本が聯盟から脱退いたしましても、米國との覺書がある以上、南洋の委任統治の島は、返す必要がないのでゴザイマス。』

『ヒヤ〳〵。物つてモノは、島だらうと借金だらうと、返す必要はねえ！』

と、エノケン君大共鳴である。

續いてカイドー君が壇上に上り、カホルさんのピアノと、新橋の姐さんたちのヴアイオリンを伴奏にして、ドエラい聲樂を唸り出した。セイ樂には違ひないが、これはまさに凄樂だ。當人はテナーだと云ふが、あんな恐ろしいテナーはあるもんぢやない。強ひて云へばバスに近い。――それもエンヂンの狂つたバスである。

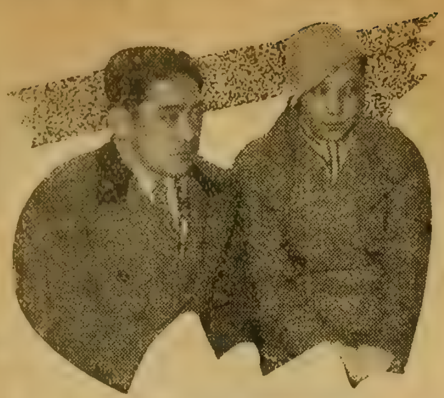
ソートー、舞臺で物凄い聲を出すエノケン

南洋の委任統治問題を滔々論じて居る吾等のターキー嬢

君も、『うーむ、俺なんぞの聲は此れに比べると、寧ろソプラノだネ。』と感に打たれた。

『エラいわ！』とターキーも感心して云つた。『あんなに全部、調子ツ外れで唄へるもんぢやなくつてョ。』

とかくして、吾等ユーモア探検隊の一行は、本校に勉學する生徒諸嬢の、意氣込みに、心からなる敬意を表して引上げたのである。



カイドー君の凄樂に感心して聞き入る御兩人

カイドー君、ボーズだけは一人前だが聲は狂つたバスの如し

娯樂室解答

○**詰碁** 瀬越憲作

黒先、白死。

黒一と出る手が良着、以下九までにて白死です。黒一を二に置けば白一、黒『い』白四黒六白八黒七白五黒『ろ』白『は』で活となります。本題は黒一の手を發見された方が正解です。

○**聯珠解答** 珠聖 清水吾石

△黒(十九)と引き白が其何れを止めても黒次『甲』で勝。變化△白(十六)で(甲)に止めれば黒(十七)の手から『十七の處、イ、ロ』の四追勝。

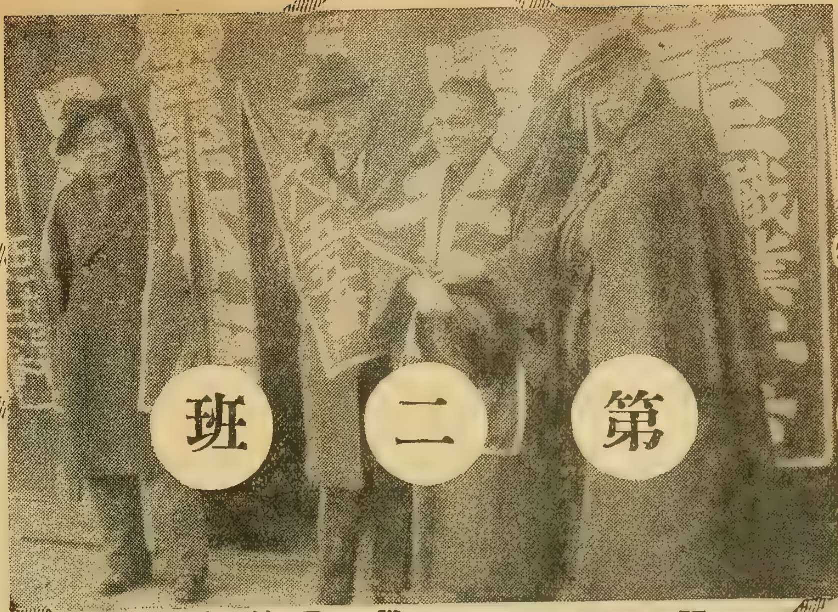
○**詰將棋解答** 七段 溝呂木光治

△八三銀▲九三玉△九四歩▲同飛△九二銀成▲八四玉△八五金迄の七手詰です。

○**正規軍の編成**——(三百一人)

○**繪さがし**——出刃庖丁と帆掛舟

○**判じ繪**——目に青葉山ほとゝぎす初がつを



班長＝和田邦坊
隊員＝西村樂天
井上劍花坊
林家正藏

浮世四人男

のらくら巡禮

宮さんであるところの櫻井京子。デブ監督へ何やら囁いてゐると思つたら、急にこつちを向いて、もう宮さんでなく女優櫻井京子の聲で、

『皆さん、妾これで失禮致しますわ。』

『おや、もう歸つちまふんですか。』

『ハイ、あのう一寸急ぎますので……』

『おや〳〵。でも殘念――』

『至極にござる――チョン。』

と舌打ちで、柝の入る思ひ入れあつて、一同呆然となる。中でも一番殘念な顔をしてゐるのは、吾が林家正藏相勤めるところの間貫一だ。

『宮さん〳〵。』

よほど思ひ詰めたものか、遂々後を追つ掛けて行つた。エレベーターへ乘らうとした彼女のコートの袖を引つ張つた。

『あら、林家さん戯談なさつちや困りますわ。』

『いや、手前は貫一でげす。』

『もう、お芝居なら濟んぢやつたのよ。』

『いや、手前は貫一でげす。宮さん、そりや、アンマリでげせう。まア、一寸待つて下さい。』
『でも、急ぐンですもの。』
『そ、それぢや矢つ張り宮さんは、この貫一を捨てて富山一家へ嫁ぐつもりだなア。』
『いゝえ、それは違ふわ。』
『ぢや、何處へ行かれるでげす。』
『妾今度日本映畫と契約が出來て、今から社長さんと會見するのよ。』
『えへッへッ――』
『まア、氣味の惡い！　失禮しちやふわ。妾の給料を定める大事な會見なのよ。何時まであんた達の相手をして、こんなに吞ゞ氣に遊んでゐられるもンですか。現代の女性はすべからく職業へ、職業へ……』
『えへッ、吾等は高座へ高座へ……』
『その通り！　あばよ。』
　彼女正藏の手を拂つて、ヒラリとエレベーターに乘り移り、網の中から、ベリカンが耳を掻くやうな恰好で、
『チエッ。』
と投げキッスをした。
『有難うござい。』
　と正藏が兩手を捧げて、お叩頭してゐる間に、スル／＼とエレベーターは下る。
『おや、もう行つちやつた。アラ、行つちやつたア。』
　彼が安來節の踊りの手つき。
『正ちやんしつかりしろよ。』
『もう駄目でげす。宮さんは行つちつたア。』

『仕方がないよ。紅葉先生の昔からお宮は貫一を捨てることに定つとる。』
『ぢやと申して。』
『サテ／＼、聞きわけのなきご人ぢや。近頃は女性がえらく進出しとる。彼女が吾々を捨てて行くのも無理無い。もう、皆んなこゝらで金色夜叉は解消といふことに――』
『贊成!!』
『贊成!!!』
『で、これからどういふことになるデスか。』
　樂天が宮さんから返された銀紙の指輪を嚙みながら立つてゐる。
『とに角、こゝは寒い。下へ降りては如何。』
　破鏡先生の劍花坊が叫んだので、皆んな急に慄へだした。
『矢つ張り女の子がゐないとひとしほ寒いでげすな。』
　と正藏、
『そりやお前、岩戸神樂の昔よりつてね、女が岩戸へ隱れちやつたら冷えらアね。』
　と樂天、

『手前商賣用の義經だつて、常盤御前と離れてからといふものは、彼氏快々として樂しまず、八丁飛びが思ふやうに出來なかつてえから、實に女性なるかなでげすかな。』
『實に、女はよい。』
と嚴かに嘆聲を洩らす劍花坊先生。
どうもかう見渡す限り女の好きな一行で、ホト〳〵余も持てあまし(?)さればこれより女の國へ――といつたところで・まさか女學校へ繰り込む年柄でもない。
『あら、正さまてなことといはれて、この冷たい手をギユツと握つて呉れる女性のところへ行きたいでげす。どうでせう班長どの。』
といつて、正藏が僕へ擧手の禮をした。
『お湯屋などはどンなもんでげす。』
『湯屋へ行つてどうするんだ。』
『女湯へ入つて―― 正しく名譽の戰死をしたいでげす。』
『まさか。』
『あはれ、想像するだに手前武者震ひをするでげす。』
『そりや正ちやんにや限らねえ、誰れだつて武者震ひすらア。』
『あはツはツはツ。』
呑ン氣なもンである。ブラブラと女の國を搜して歩く人形町のユニオン。ダンスホールジヤズの音いと朗かに女の子は薄いイヴニング・ドレスコツ〳〵とハイヒールにまつはる紅い色、正にエロ、エロ、エロでげす。
『うわツ。』
と一番に嘆聲を上げて嬉しがつたのは正藏だ。
『あでやかでげす。滿目花なりでげすかな』
樂天が氣取つてホールへ進む。ナンバーワンの手を執つて、スル〳〵と可成り上手に上つて行く。一行中ダンスを踊るのは彼丈けだ。あとは皆な縮すくひ位のもので、
『タツタラ、タツタツラでげすかな。あ――手前やつて見てえなア。』
『あなた、踊らない?』
彼女が進んで正藏の手を執つた。

『えへツへツ、お手柔かに。』

彼一寸羞しがつたが、面の皮は厚い商賣だから、ダン〳〵圖々しくなつて行く、

『えへツへツ、何ンといふ女性的な、あまりに女性的なこの臀部――』

『あらツ、この人失禮しちやふわ、そんなとこ觸つちや嫌よ。』

『平に、ご勘辨を――。』

『あなた踊り駄目ね。』

えへツへツ。』

『そんなに喰付いちや駄目。』

『えへツへツへツ。』

「あらツ、變ね。」

『タツタラ、タツタラ、こりやせのよいとなツ。』

正藏調子に乘つて踊つてゐる内に、ツルリと辷つて、斯の如く、

『セーフ。』

自分で叫んでダンサーのスカートへもぐり込んだ。正藏彼女の脚へ噛り付いて

『もう離さねえ――』

『馬鹿、馬鹿、馬鹿ツ。』

とダンサーに手ひどく叱り飛ばされてゐた

『お爺ちやん如何が?』

今度は劍花坊先生引つ張られて面喰つた。

『拙者は劍舞の手で行くが大丈夫か。』

『いゝわ、今ワルツだから、恰度いいわ。』

『然らばご免。』

といつて、先生袴のもゝ立ち高く取つて、ポンと膝を叩くとあの聲で、

『鞭聲粛々夜河を過る――』

と辷り出した。いやもう見事なことです。

ダンス場から直ちに淺草へ、淺草は松淸町都屋職業紹介所へ、讀者はこの突飛な吾等の行動に驚くだらう。第一、班長自身驚いてしまつたんだ。

『口入屋へ行つてどうするんだ。』

『班長殿ツ。』

と正藏が立ち上つた。

『班長殿、吾々は日本男子でありますツ。』

『左樣。』

『日本男子でありますから、女の子に負けては不可ないでありますツ。』

『尤も。』

『でありますから、吾々は落語家なんか止めて大いに金を儲けて、生意氣なる女性に對抗するであります。』

『よろしい。』

そこで、口入屋の都屋へ行つたといふ譯なので、何しろ、やることは突飛なやうだが、

吾等一行、かなり理窟には叶つてゐるらしいのである。

都屋と白抜きの紺の暖簾を潜つて、

『はい、今日は。』

『被來い。あ、もし／＼、そちらは女子部です。どうぞこちらへ。』

なるほど入口を間違つて女子部へ入つてゐる。何處までも女の香ひの好きな連中と見える。女は女だが眼のショボ／＼のお婆さんが二三人待つてゐる丈けであつた。

『番頭さん、あゝいふ人は何處へ行く人達ですか。』

『あのお婆さんですか。』

『ハイ、あの婆さん達、矢つ張り妾の口か何ンか搜しに來てゐるのですか。』

『冗談でせう、あんな妾を持つ人が何處にありますか。あゝや皆なご飯炊きに行く連中ですよ。』

『なるほど。』

先づ樂天が進み出る。

『えゝ、滿洲などで一旗上げる何かいゝ商賣はありませんか。』

口入屋で思案投首の浮世四人男

『手前共では滿洲は一切取扱ひませんので。』

『僕に向くいゝ口などはどうデスカ。』

『ご年配は幾つでございます。』

『四十八ですからな。』

『左樣でございます、ご飯炊き、旅館の仲番お寺の掃除番、あ、あなたには仲どんはどうです。』

『吉原ですか。』

『左樣、その口なら今直ぐにでもございますが。』

『牛太郎は困るです。何しろ顏が廣いですから。』

『丁度年恰好といひ、あなたの聲といひ、丁度いゝですがね。──え、旦那、洋服の旦那物は相談でげす、まア一寸お入りなすつて、どうでげせう、もし／＼旦那々々、──とかういふ調子でやるですか。』

『おや、あんたは下地がありますな。』

『えへッ、番頭さん、僕は漫談家でね。』

正藏は向ふの番頭を相手に、

『樂でウマイ物喰つて儲る商賣はないでげすか。』

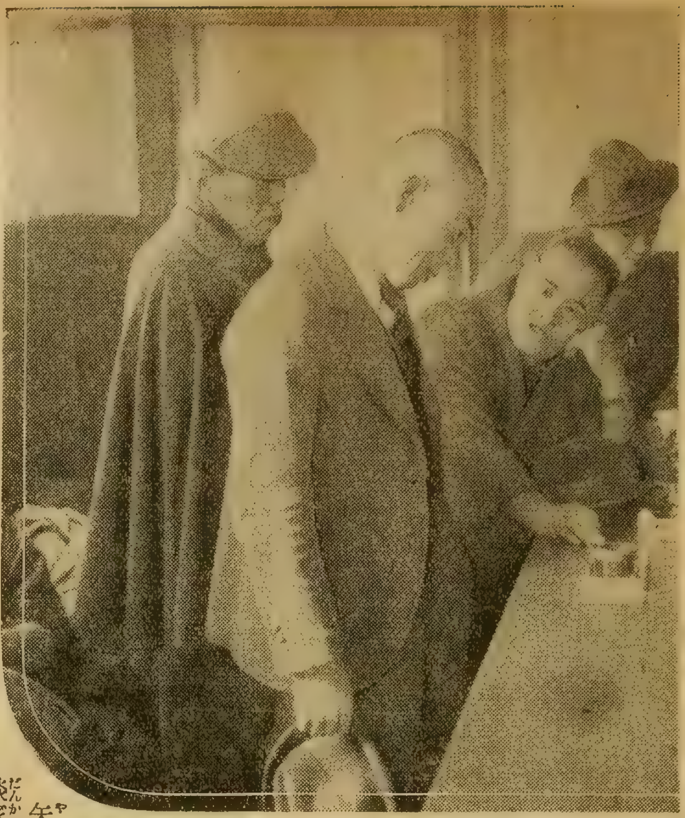
と氣のいゝことをいつてゐる。番頭憤然とした。

『働けど／＼喰へない今日此の頃、あんたなどのご料簡は持つての外だ。』

と正藏叱られる。

『ばさら（店働き）か、かつぎ（天びん棒）でウンと働きなさい。』

『いや、拙には左樣な手荒なことは困るでげす。どうでげせう番頭さん、おめかけなどの口は無いでげすか。』



『そんなものはありません。』

『ブラ〜〜遊んでゐるには理想的な男でげすがなア、いやこれは殘念でげす。』

といつて、この二人ともホー〜〜の體で店を出て來た。

『矢つ張り世は不景氣でげすな。』

『僕は矢つ張り漫談家で暮さう。』

『手前も一生落語家で。』

『先生も矢つ張り川柳で一生？』

「ウン、儂や死ぬまで唸る。』

『ぢやア、僕も漫畫でチヤホイと暮すかな。』

○

かくて各自、夜のとばりを縫つて、暖かい女房のゐる長火鉢の前へ歸つて行つた。

『さよなら。』

『さよなら。』

正藏だけは、空を仰いで、

『あゝ、いゝ月でげすな。今頃はお宮さん、何處にどうしてござるやら……』

と三勝半七のさはりをうなりながら、歩いて行つた。（をはり）

班長—川上三太郎先生（中央）隊員—後藤市丸さん（右より二人目）メイ・牛山さん（右より四人目）森律子さん（左より二人目）

本多林學博士を攻めるの巻

ウドンを喰べハゲを論じ博士大いに若返へる

——所は赤坂溜池三會堂の三階、森林會の事務室。中央に大きな卓子。その一方に本多靜六博士。それに相對して森律子さん、メイ・牛山さん、後藤市丸さんの三女性。四邊は時ならぬ華やかな色彩と匂がいつぱいに流れて艶めかしい。隣で事務を取つて居る人たちが折重つて此方を覗き込んでゐる。

——といふところで芝居なら幕が開きます。

博士。（愛想よく迎へて）ホウ、これは美人揃ひですな。

森。（舊知の間柄とて早速朗らかな會話が始まる）まあ——（此のまあ——は森さん特有の魅力のあるまあ——である）先生本當にお久し振りで御座いました。二十年振りで御座いませうか。何時も御元氣で何よりで御座います。

博士。歐洲から歸りの船以來ですね。

森。左樣で御座いますわ。あの時わたくし一人旅で全然倦きてしまつたところへ、シンガポールから先生がお乘りになりましたが、先生の朝お早いのには吃驚致し

ましたわ。

博士。朝は何時も五時起床。さうして運動のために船員と一緒に、甲板洗ひをしましたわい。

森。最初は好奇な――と船客は笑つて居ましたが、その中一人眞似、二人眞似、到頭西洋人までが一緒になつて甲板洗ひをやり出しましたのには感心致しました。

博士。あはゝはゝ、さうだつたかな。

森。荒れた日がありましたね。私共食堂へ出ましたが、先生がお見えになりませんので、婦人でさへ食堂へ出るのに堂々たる男子が船醉で食堂に出られないなんて怪しからん――といふ譯で、密と先生の船室を覗きますと、先生はあの時裸體になつてお唸りになつていらッしやいました。

（本多博士）

矢張り船にお醉ひになつたのでしたね。

博士。飛んでもない。私は船に醉つた事なぞは一度もありませんぞ。

森。でも裸體で切りに唸つておいでになりましたわ。

博士。あれは唸つてゐたのではないです。唄をうたつて居たんです。

森。唄を？　へ、エ、詩吟ですかそれとも軍歌ですか？

博士。鼻唄です。

森。鼻唄？　でも詩吟のやうな軍歌のやうな……。

博士。だから鼻唄です。詩吟とか軍歌とかきまつてしまへば、それはもう鼻唄ではない。きまらんから鼻唄です。なア市丸さん。

市丸。（感心して）まあ、本當ですわ。（此の人唄となると直ぐ夢中になる）あたし、先生の鼻唄是非伺ひたい――（覗いてゐる森林會の人々吹き出しかけて我慢する）

博士。そりや聞かせてもいゝが、何しろ他の學科はみんな甲なんだが、唱歌だけは乙といふ鼻唄なんだから、マア止めて置きませうかい。

牛山。先生は徒歩主義でいらッしやるさうですが……。

博士。私の有難迷惑なのは宴會なぞに招待されて、歸りに自動車へ乘せられる事です。何故かといふと、その儘自動車で家へ歸つても、また毎日歩くと定めてある距離だけは歩かなければならんからね。

牛山。毎日何の位お歩きになるのです。

博士。毎日二里づつ尻端折で歩きます。先づ澁谷の自宅を中心に目黒附近まで歩く。

市丸。まあ夜なんか怖いでせうねえ。

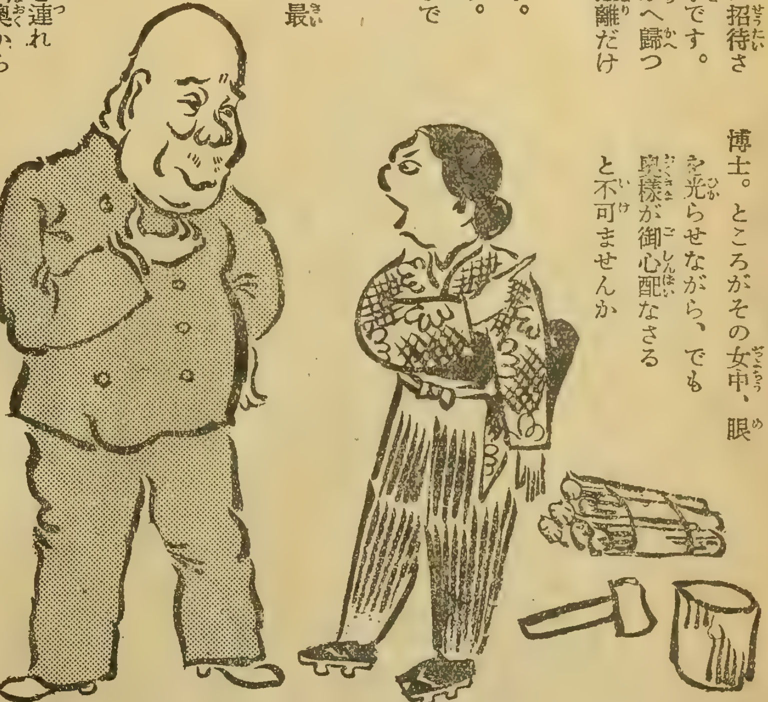
博士。怖いより一人だと退屈で弱る。最初は家内が一緒に歩いたんだが、此の頃年を取つて億劫がつてね、

森。そりや奥さまがお氣の毒で御座いますわ。

博士。それについて面白い話がある。何しろ一人では退屈だから誰か供を連れようと思つてね、幸ひ家に會津の山奥から來た今でもモンペを穿いて自轉車へ乘つて使ひに歩く女中が居たから、それにオイお前俺の供をしろ——と言つたんです。

牛山。悦んでお供をしたでせう。

博士。ところがその女中、眼を光らせながら、でも奥様が御心配なさると不可ませんから——(一同爆笑)



市丸。まあ、その女中さん、屹度驚いたんですね。

博士。驚いたのは寧ろ此方さ。然し女は矢張り女だね。

牛山。先生は光頭會(これは頭の禿げてゐる人でなければ會員になれない會である)の會長だと伺ひましたが——

市丸。(感心をして博士の頭を見てゐる)まあ、會長さまですか、ほンにねえ。

博士。いや會長は辭職しましたよ。あれは兒玉伯に讓りました。兒玉君は何しろ學生時代からの有權者だからね。

牛山。でも先生のお頭は先生にしつくりお似合でいらッしやいますわ。

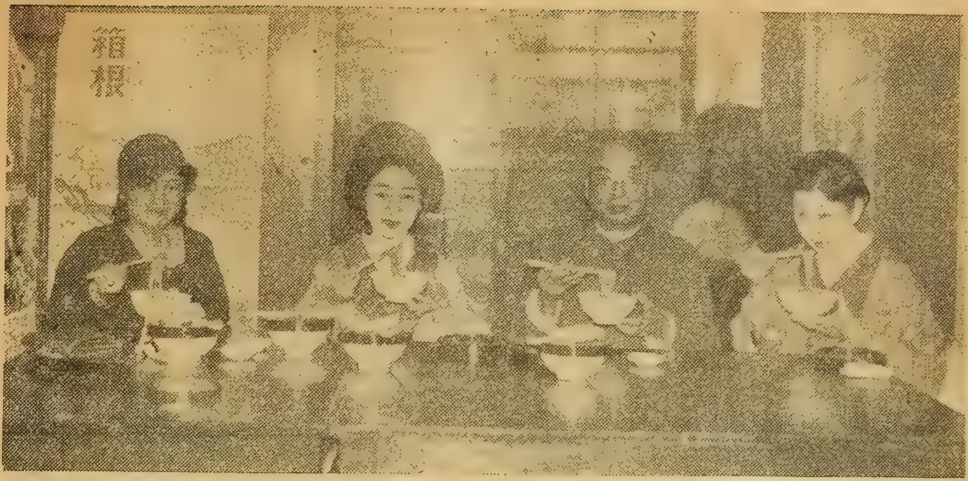
博士。光頭に衷心感謝した事がある。それはウヰンナで萬國農林學會が開かれた時、私は副會長に選ばれたんだが、一段高い所から斯う見下すとイヤ禿げてる〳〵、場内見渡す限り悉く光頭で、偶〻髪のある頭は迚も貧弱に見えてさつぱり振はない。その時ばかりは此の光頭に禮を言つたよ。春風やよくぞ禿げたるわ

が頭――とね。（笑聲）
森。するとお頭の禿げてゐる方は、それだけ進んでいらッしやるのですのね。
博士。さうだと有難いんだが、實は其の反對で血液の循環が惡くなると禿げるのださうだ。だから私なども大分頭の血のめぐりが惡くなつたんだね。
牛山。そんな事はありませんわ。
博士。私の友人のロイブといふ男が、矢張り私同様禿げだつたが、これは皮膚に刺戟を與へれば血行を促進するからまた毛が生えるといふので、毎日硬いブラシでゴシ〳〵こすつて居た。

市丸。生えましたの。
博士。生えたね。立派に。
市丸。では先生も毎日ブラシでゴシ〳〵おやりになつたら……。
博士。實はあやからうと思つて二三日やつたが、何だか長靴でも磨いてるやうで、馬鹿馬鹿しくなつたから止めた。（一同吹き出す。迚も愉快である）
森。ところで先生のお晝食は何時も饂飩ださうで御座いますが、饂飩は餘程お好きでいらッしやいますか。

（後藤市丸さん）

――この間が終らない中、給仕さんが山と積んだ饂飩カケを運んで來たので、みんなビックリする。
皆々。あら、あら〳〵。
博士。此處には苦學してゐる人が澤山居るのです。それで晝飯は十錢以下と定めて居ます。十錢以下では饂飩よりないからね。だから皆な氣を揃へて一緒に饂飩を喰べる。



八本の箸でうどんの睦しさ

（本多博士お得意のうどんの御馳走）

だからお客様のお振舞も饂飩です。さあ、お喫りなさい。

森。迚も結構なお話で御座います。頂戴致しますわ。（メイ・牛山さん）

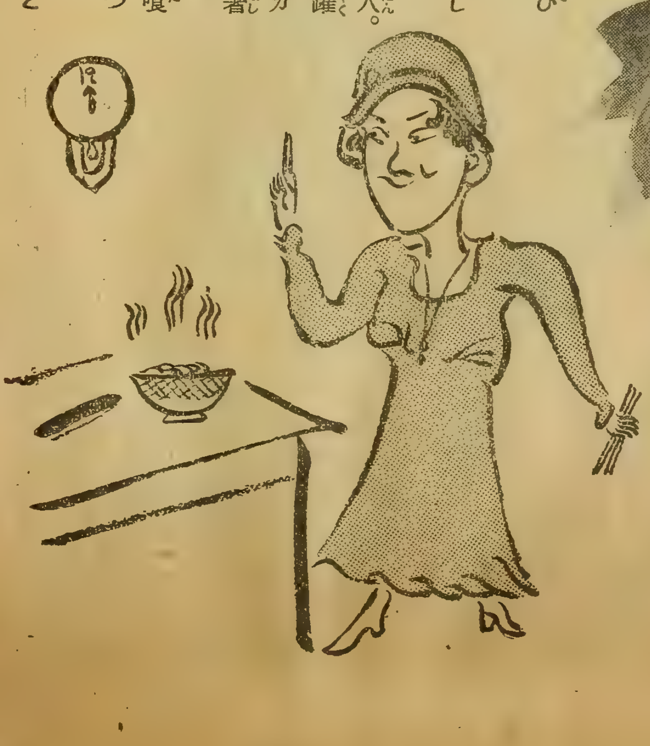
牛山。わたくしお晝頃毎日お伺ひしますわ。

市丸。あたしもさうしませうかしら。

――やがて博士と並んで三人。八本の箸がツル〳〵活躍する。そこをパチリとカメラに納める。みんな箸を置く。

博士。斯う美人の間に挾まつて喰べると饂飩も美味いな。若返つたやうな氣がする。

牛山。電氣マッサージをなさるとなほよろしいのですわ。



博士。（ツルリと頭を撫でて）髪が生えますかな。では今度兒玉君を連れて牛山さん、貴女の所へ出かけるか。

市丸。（心配さうに）あら、それはお止し遊ばせよ。

博士。何うして？

市丸。でもそのお頭に髪が生えてしまつては、肝心の光頭會が潰れてしまふぢやありませんか――

――到頭こゝで我慢に我慢をしてゐた事務を取つてゐる人たち、耐へ切れず笑ひ出してしまつたのであります。

皆々。アハ、ハ、ハ――

チヨン、チヨン――（幕）

菊池寛先生包圍の卷

（先生三人の中の一人を特に語らんとす）

わが女性軍も愈々最後のコースに入つた。ところがこの最後が迚も大難所である。それは音に聞くむツつりの大御所文豪菊池寛先生を包圍攻撃しようといふのである。これ實に探検隊最後の難所であるが、何しろ本誌連載の『蒼眸黒眸』の壓倒的好評の筆者を、何とかしないといふ法はない――と三人の相談一決して、自動車はその儘丸ノ内大阪ビル、菊池先生の事務所へ向つたのであります。

『お目にかゝりたいのですが――』

『二十分でよければと先生仰言つてです。何しろ迚もお忙しいので。』

取次嬢までが一寸手ごはい。

『二十分結構です、是非――』

それから地階のレインボーのグリルで待つ。何しろ今度が最後の、さうして總攻撃だ。その傍を直木三十五先生がニヤ〳〵しながら通りすぎた。このニヤ〳〵は

『巧くやれ。』

といふ風にも取れるし、

『返り討ちだぞ。』

といふ風にも取れる――そこへ、

『やあ――』

と菊池先生が現はれた。と見るや忽ち森總帥巨彈を放つ。

『先生、先生の東京行進曲が、あたしたち帝劇女優としての最後の舞臺でした。』

『さうだつたかね。』

『あの狂言の時でしたわ、先生が帝劇のお歸りに警視廳前の濠へお落ちになつたのは。』

『ふ、ふ、ふ――』

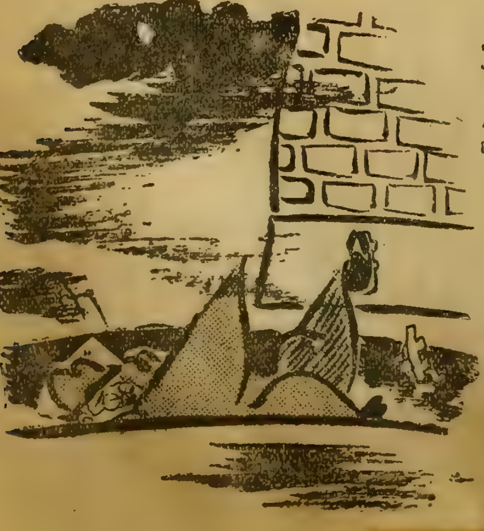
『でも、あれからあすこへ先生が抗議を申込んだので電燈が點いたので御座いましたよ。』

『濠へ落ちるのもいゝものさ。』

續いて市丸君、間髪を容れず追擊。

『先生ダンスは――』

『やらん。』



『その頃流行のヨーヨーは。』

『あれは一寸やつて見たが、直ぐ出來さうだから止めたよ。』

直ぐ出來さうだから止めた——なんて矢張りキクチさん——であるでス。

（森律子さん）

續いて牛山さん。

『この頃の東京の流行は先生の小說の中から生れる——つて專ら定評ですのよ。』

『そんな事はないよ。』

『先生、あたしたち三人に若し着物を買つて下さるとしたら、何んな柄や形のものを選んで下さいます？』

森さん、發言に二人共聲を揃へる。

『それは有難いわ、ねえ先生、何ういふ着物を買つて下さるの？』

『ねえ、先生——』

斯う取りすがられては、幾ら世界的むッつりでも一寸顏がほころびる。そこを透さず寫眞班のM君最後の效果を百パーセントに收めた。

『僕は元來その人が好きにならなければ、着物なんか買つてやらないよ。』

と逃げたでス。ところがおッとドッコイ、こゝで逃げられては——と市丸さん、ジリジリと詰め寄りました。

『では先生、この三人を順々に好きになつて下さいな。さうして見立てて頂戴——』

さて三人は何と〳〵と、詰め寄つたです。然しその時義經少しも騷がず……でしたナ。

『先生、一つ四人で麻雀でもおやりになりませんか。』

菊池『麻雀、麻雀なんてもう古いよ。』

『ぢや、此頃、何をおやりになつてゐますの。ヨーヨーはいかが。』

『ヨーヨ？なんて、すぐ出來てしまふから面白くないよ。』

美人が三人で頻りに誘ひをかけるが菊池先生、宛で駄々つ子みたいに、皆とり合はない。このところ、すねた子供が玩具を怒つて投り出すのを、お母さんが頻りになだめてゐると云ふ體たらく。

黒眸へむツつり少し崩れかけ
菊池先生が包囲攻撃に遭つて
聊か笑つてゐる所――向つて右より
メイ・牛山・後藤市丸・菊池
先生・森律子の諸氏

『ホウ――』

斯うなると牛山さんも最後の一戦だ。

『それでなければ先生、この三人の中一人だけ誰かの形に就いてお話し下さらない?』

『さうなるとその人が好きだといふ事になる。』

『いゝぢや御座いませんの? さうなつたつて。』

すると先生は突如立ち上りながら仰言いましたゾ。

『よし、では言はうか。』

『エ――』

三人は思はず昂奮しました。其時先生はニヤリとして時計を見上げたのです。さうして、

『約束の二十分――』

さうして身體を翻へしました。

『あら!』

『あら!』

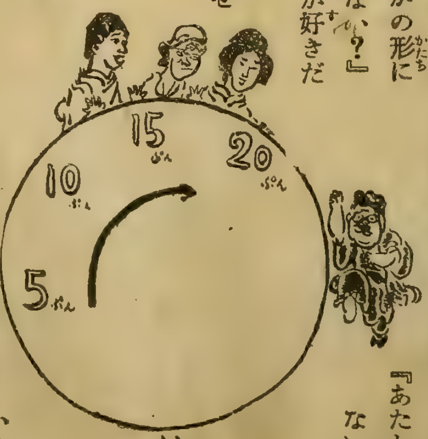
『あら!』

『失敬――』

さて先生はこの三人の中の誰を語らうとしたのでせうか。さう考へると、

『あたし、今夜は寢られないわ。』

と三人が地團太踏んだのも無理はありません。



シンケイ・スキジヤク――といふものは、時に斯ういふ事が原因になるものであるですゾ。そこでヤケになつて、洋食を喰べ、汁粉を喰べ、蜜豆を喰べ、林檎をかじつて、この美しい花片は、一つは麹町、一つは銀座、一つは淺草へ――ひら、ひら、ひらと飛んで行つたのでありました。明朗なる女軍萬歳――。

(をはり)

藝界噂

八雲の改名

蒲田のスター、八雲惠美子、『美に惠まれる』といふ名は、易學からいつて美人薄命の相があると云はれ、驚いて理惠子と改名する事になり、自己經營の酒場タッドで盛大な改名披露會を催した。改名第一回作品は佐々木恒次郎監督の『昨日の女、今日の女』である。佐々木監督の音頭で、『昨日の惠美子、今日の理惠子に幸あれ!』と、ばかり、プロジツトしたさうだ。

妾のお婿さんを?

米國ワーナー・フア社で賣り出しのロレッタ・ヤング孃は、この頃誰と結婚するの、誰と婚約しさうだのと噂ばかり立てられてゐる。

リチャード・バーセルメスまで本氣になつて、『お目出度いんですつてね。』に、彼女、つくづく嘆じて曰く、『その中にきつと、皆さんが寄つてたかつて、妾のお婿さんを決めて下さるでせう。』

ほんまの顔まけ

東西で長面の役者と云へば、東で荒次郎、西で延若とは、誰れの眼も違はぬ所、所でこの兩人久振りで歌舞伎座で顔が逢つたので、あるいたづらものが、寸法を計つて見ると荒次郎の方が少し許り長かつた、河内屋曰く、『これがほんまの顔負けや。』

三度死んだ?宇禮雄

松竹蒲田の江川宇禮雄は、近來非常に賣り出して來たが、本年に入つてから、『東京の女』と『應援團長の戀』に出演、共に死ぬ役で、二度ぶつ續けで死んでゐる。當人もこれを氣に病み、『三度目は何ンとやら……』で、本當に死んで了ふのではないかと、案じてゐる。すると、城戸所長までもその氣になり、何ンとか方法を講じようと、寄々協議してゐたが、脚本部に現れた所長、柳井隆雄に、『もう、一度、江川を殺してくれ!』と、命令した。

ばなし

『心得たり。』と、柳井が書いたのが、野村芳亭監督で撮つてゐる流行歌映畫『島の娘』だ。これで、江川は見事に三度目の死をやつてのけて、ホッとしたといふ。野村監督、ニヤ〳〵して、『殺して生かすとは、これや、本當の殺生々々』

女飛行大佐

その輝くばかりの美貌によつて米國映畫界に名高いビーブ・ダニエルスは、ハリウッド人中では最も長い飛行時間を持つてゐるが、その筈で彼女は米國飛行機株式會社から陸軍飛行大佐（但し名譽の）を贈られてゐるので、何か事ある毎に陸軍大佐の服裝で現れ、スター連を驚ろかしてゐる。

高田稔の感激

新興キネマの『感激の人生』撮影終了といふ間際に、背中へ瘍が出來て入院した高田稔、切開手術が早かつたので、二、三日中に退院の見込みであるが、これと知つたファンから病室は見舞品の山、眞ッ白なベッド上に横つた高田、つく〴〵『感激の人生』を味つてゐる。

久松フクレル

大菩薩峠で、子供のやうな丸茂三郎とラブシーンをやる久松喜世子、ぬらずんばあるべからずとあつて、塗るわ〳〵、すると三日目に久松若いぞッーと聲がかゝつた。

『役者に年なし、へんなもん?』と得意がらうとする時、大向に聲あり。『丸茂、ママさんの云ふことをよく聞くんだぞ。』

自分ながら呆れます

明治座の乞食の夢で、三津五郎が菊五郎の乞食から錢を貰ふ所があるが、後の『御所五郎藏』では反對に菊五郎に金の催促をする役『貰つて置いて催促するなんて隨分妙ですな』とからかふと、三津さん赤面して『自分ながら、恩知らずに呆れます』と眞面目な顏。

新鮮にして藝術味豊かなる名小説出版！

菊池寛先生最近の大傑作二篇

未來花 竝 良人ある人々

御覧下さい！ 咲く櫻花の噂を壓するこの評判！

映畫になりレコードに歌はれ、春の人氣を脊負つて立つ未曾有の大名作『未來花』は作者が、この一篇に、その豊かなる天分と、藝術的情熱の全部を傾けつくしたと云はれるもの。落ちぶれゆく富豪の家に人となつた麗人千夜子が、家の爲に母の犠牲となつて、思はぬ男に嫁ぎ、その良人の愛を滿喫しつゝもなほ以前の戀人たる青年を忘れ兼ね、**つひに家出をして職業婦人となる。而も彼女は、その時既に人の母とならうとしてゐた。果して彼女は何處へ行く？** 作者の情熱は、限りなき同情の

熱涙を注いで、社會の表裏の、激しき潮の流れに飜弄されつゝ、ひたすら未來の新生活の理想の花咲く島に辿り着かんと苦しみ悩む悲しき千夜子の姿を描いて、讀者の紅涙を搾らせずには措かない。

見よ！悲しき女の姿！更に見よ憐れむべき男の姿！

『未來花』と共に發表せられて、その姉妹篇とも稱さるゝ『良人ある人々』は、構想の特異、取材の新鮮、共にこの人ならではと嘆賞さるゝ大力作。作者は、これを執筆さるゝに當つて、左の如く云はれて居ります。

結婚せる人々で、『眞に幸福なる人々』は稀有である、眞に理想的良人は少く、夫妻間に於ける性格的一致も亦甚だ稀である。良人よくとも、妻あしく、妻よくとも良人あしき場合は、更に多い。夫妻ともに善良にして、しかも性格趣味一致せずして家庭に寒風吹きすさぶ場合もある。女性が、一生の苦樂一に良人の善悪に依る。良人難は、女性の人生行路に於ける唯一無二の關心事である。私はこゝに良人を持てる三四の女性を描いてその悩み、その悲しみ、その憂、その愛慾、受難、その家庭苦を描いて、讀者の參考にしたいと思ふ。

共に天下の名篇、一九三三年の最高峰！

この二大長篇が併せて一冊、至急御購讀下さい！定價一圓五十錢（送料十四錢）本社發行

現代小説

蒼眸黒眸（さうぼうこくぼう）

菊池寛

富永謙太郎畫

前號までの梗概

最初の男性櫻井にある失望を感じてゐた壽美子は、次いで識つた靑年作家の三木に眞の思慕を覺えたが、其後叔父に誘はれて、三木と一緒に熱海に遊ぶ中、突如ジャズ歌手の佐伯ちか子と呼ぶ女性が戀敵として現れ、彼女の心を可成かき亂した。然し結局壽美子の純情は三木を動かし、愛の言葉を固く誓つて一先づ相別れた。所が其相別れた當夜、右のちか子は海の妖女にも似た魅惑を以て三木に迫り、遂に其心身の淸さを奪つて了つた。翌朝の三木の悔恨は深刻極まりなかつたが、それでも目の邊り又ちか子から朗かな嬌態を見せられると、其心は我知らず解けかゝらざるを得ないのだつた。

仲人

東京迄の歸りの汽車中、壽美子は冷たい窓枠に、あつい頰をもたせて、いつか知らず〳〵戀の法悅に、醉ひ痴れてゐると云ふ態だつた。

叔父は、洋書に眼をあづけたまゝ、殆ど壽美子に話しかけなかつたので、線の中斷したレコードのやうに、壽美子は頭の中で、三木の言葉や動作を、幾十回となくくり返してゐた。もう、ちか子などがいくら、三木に働きかけても大丈夫だと云ふ確信を心の底ふかく秘めながら。

大森で、叔父は、

『近い内に、訪ねて來るだらう。お母さんによろしく。』

と、云つてあつさりと降りてしまつた。

壽美子も、次ぎの品川驛で降りるので、ハンド・バックを取り上げると、鵞毛のパフで、輕く頰をなほした。

春のやうに、あたゝかゝつた車室から、吹き晒しのプラットホームに出ると、急に東京の寒さが感じられたやうな氣がして、內腿の邊から、ゾク〳〵と寒さが、這ひ上つて來た。

家へ歸ると、母が淋しかつたと見えて、うれしさうに、壽美子を迎へた。

『顏色が少し蒼いんぢやないの？』

『熱海が、あんまり暖かつたもんだから、東京へ歸ると、急に寒いやうな氣がするの。』

壽美子は、母に答へながら、久しぶりに音樂が聽きたくなつて、[illegible]ンゲッティの民謠調をかけた。

『旅行は、樂しかつたの？』

『え〻、とても。』

民謠調は、わびしい物音を引きずり始めた。

『櫻井さんが、新響の切符と、チョコレートを持つて來て下さつたの。』

さう云つて、母は茶箪笥の上から、リボンのついた菓子鉢に入つたチョコレートを出してくれたが、壽美子は手を出す氣がしなかつた。

壽美子は、三木の存在を少しでも早く、母に知らした方がいいと思つたので、

『今度の旅行叔父さまと、二人ぎりぢやなかつたのよ。三木さんと云ふ方、一しよだつたの。』

『三木さんて、若い小說家の。』

文學好きの母は、三木の名前を知つてゐた。

『え〻。さう、い〻方だわ。』

『あの方、叔父さまのお弟子？』

『と云ふわけでもないんでせう。でも、隨分親しさうよ、叔父さんも三木さんを賞めてゐるのよ。』

と、壽美子の頰に初めて、子供らしい微笑が浮んだ。

母は、ふと思ひついたやうに、

『さう。さう。一昨日、成田さんがいらしつてね、櫻井さんの話をしていらつしつたわ。』

『さう。どんな話？』

『櫻井さんのお父さんが、お前と櫻井さんとのお交際のことをよく知つていらしつて、もうい〻加減に結婚させたいとおつしやるんですつて。長く交際つてゐて、つい間違ひでも起つた後で、あわて〻結婚させるよりも、どうせ結婚するものなら、早く結婚してくれた方が、安心するとおつしやるんですつて！』

『まあ！』

壽美子は、氣がなささうに受けて、

『いくら、長く交際てゐたつて、あの人と間違ひなんかありつこないわ。』

と、云つた。

『でも、櫻井さんは、隨分お前を好いていらつしやるやうだし、お前だつて長くお交際してゐるんだから、お前がよかつたら、話をす〻めたら、どうかしら？』

『ぢや、成田さんは、仲人と云ふ意味で、いらしつたの？』

『さうかも知れないね。』

壽美子は、だまつてしまつた。

『櫻井さんは、人はいゝ方だし、お金はあるし、なか〳〵才人でいらつしやるし……』

と、母が云ひかけるのを、

『さうかしら。あの人どこかピントが、はづれてゐるのよ。』

と、壽美子は妨ぎるやうに云つた。

『でも、お前だつて、隨分親しくしてゐるぢやないの。』

『そら、さうよ。音樂會や、活動などを見に行く相手には、丁度いゝんですもの。』

『まあ!』

母は、ちよつとあきれて、

『でも、あんなにお交際してゐた以上、今更お斷りしにくゝないこと?』

『だつて、私ごく淡々としたお交際だけしかしなかつたんですもの。何も束縛されることなんか、ありやしないのよ。』

母は、今時の娘と、自分達との考への極端な違ひに、おどろいて微笑した。

『御夫婦になつたら、一しよに音樂會ばかりも行つてゐられないでせう。その外に、いろ〳〵生活があるんですもの。よい遊び友達は、必ずしもよい良人ではないわ。』

『まあ!』

母は、それでもニコ〳〵しながら、

『それなら、それであまり深入りしないやうにしないと、困りますよ。』

『そんな事、ちやんと心得てゐるわ。』

『ぢや、今度成田さんが、いらしつたら、それとなく、お斷りして置いた方がいゝね。』

『おねがひするわ。』

『でも、お前そんな事を云つて、櫻井さん以上に、いゝ方が、さうちよい〳〵あるもんぢやないよ。』

（三木さんて、云ふ方があるわ）

と、云つてのけたいのを、さすがに制して壽美子は立ち上ると、レコードを、ジヨセフイン・ベーカーのラヴ・ソングにかけ替へた。

卒業できぬ人

壽美子は、その晩少し微熱を感じた。東京があまりに溫度が違つたゝめ、風邪を引いたのであらう。

翌日、此頃盛んに鳴き始めたローラ・カナリヤの聲で眼をさましたが、頭が重かつたし、咽喉も少し痛かつた。

女中にさう云つて、紅茶とパンを運んで貰ひ、そのまゝ床を離れなかつた。

十一時頃、來客を報ずる玄關の鈴が鳴るのをかすかにきいて、誰かしらと思つてゐると、母が、

『氣分いゝの？　お目覺め！』

と、云つて上つて來た。

『えゝ、少しいゝのよ。』

どなたと云ひかけて、壽美子はかるく、咳き込んだ。

『櫻井さんよ　玆へお通ししてもいゝ？　それとも起きる？』

『櫻井さん！』

壽美子はさう云ひながら、今日が日曜であるのに、氣がついた。

櫻井の父と云ふのは、ある大きな貿易商會を經營してゐて、上海にも桑港にも支店を置いてあつた。櫻井は、慶應を出てゐたが、修業の意味で、父の店には務めず、横濱の某商會に、見習的に働いてゐた。

仕事の方は、割合熱心で、壽美子が結婚を承諾してくれゝば、上海へ行つて父の商會の支店長をやりたいと云つて

ゐた。

だから、どちらかと云へば、華美好きな壽美子の母は、櫻井に對して、可なり好意を持つてゐた。

『切角、來て下さつたんだから、一寸お通ししたら……』

『寢て居て會ふなんて、いやだわ。』

母は、それを背で聞き流しながら、階下へ降りて行つた。

間もなく、そこへ厭味なほど、正確な線の美しい櫻井の顏が、現はれた。

壽美子は、豊かな黒髪を、雪白なシーツに波打せて、熱

のために、うるみがかつた双眸は美しく、生地の頬はやゝ赤味がかつてゐた。

『旅行してゐたんですつて？』

『えゝ。』

櫻井は、ベツドに近い、アーム・チエアにポツコリと腰をおろし、最上等のシガレツトであるアブダラに火をつけて、紫のけむりを立てながら、何とはなしにだまつてゐた。

壽美子は、かるくせきこんだ。

櫻井は、少しあわてゝ、煙草の火を灰皿にこすりつけて、消さうとした。

『いゝえ。煙草のせゐぢやないの。どうぞ、召し上つて、いらしつて……』

『いや、あまり喫ひたくもないんですよ。』

『熱海、とても暖かでせう。品川で少し寒いなと思つたら、もう風邪を引いちやつたのよ。』

『氣管支を痛めたんでせう。』

『耳も少し痛いの。』

『中耳炎になるとこはいから、氣をおつけなさいよ。痛む方の耳、少し浮かせたらどうですか。』

櫻井は、心から壽美子の容體を氣づかつてゐた。

『その容子では、音樂會は一寸ダメですね。』

『切符を送つて頂いたんですつてね。どうも、ありがたう。とても駄目だわ。』

『さう。ぢや、音樂會駄目として、今度何時會つて下さる。』

『そんなお約束出來ないわ。』

櫻井は、サツと色を易へながら、

『もう會ひたくないと云ふ意味？』

と、きゝ返した。

壽美子は、櫻井が氣の毒になつたので、

『さうぢやないのよ。先のお約束なんかするものぢやないと云ふ意味よ。』と、かるくはづした。だが、櫻井はそれでも慰められなかつたと見えて、

『僕も、貴女にだん／＼自信が、無くなつちやつたし、一層引き下らうかと思つてゐるんだけれど……』

壽美子は、しばらくだまつてゐたが、

『そんな事より、仲人らしい人をよこしたりなんかして、お母さんなんかから、動すなんて卑怯だわ。』

と云つた。櫻井は、あわてゝ、

『そりや、寃罪ですよ。父が、貴女と僕との事を心配して、勝手によこしたんですから、それは僕の責任ぢやありませんよ。』

と、辯解した。

『さう、それなら、いゝわ。私達の間で、まとまらなければ、まとまるものぢやないんですものね。』

と、壽美子は云つた。

櫻井も、うなづいたが、しかし彼の心の中は寂しかつた。

その寂しさが、すぐ顔に現はれたので、壽美子も少し氣の毒な氣がした。

櫻井とても、ザラにある青年ではなかつた。少しキザではあるが、才能もあるし、自分を心から愛してゐてくれることは分つてゐた。

しかし、一年以上、交際つてゐたゝめに、その人間の裏も表も、分り切つてしまつて、そのする事爲す事全部解るやうな氣がして魅力も興味も感ぜられなくなつてゐた。

やはり、結婚するなら、三木のやうな中々、卒業出來ないやうな複雜な内容を持つた男でなければならぬと、壽美子は考へた。

三木に心が傾いてゐる以上、櫻井になまじかやさしい言葉をかけて、望みをつながせるのは、わるいと思つたので、壽美子は氣の毒とは思ひながら、だまつてゐた。

『ぢや、また病氣がよくなつたら、會つてくれますね。』

『えゝ、それは。』

と壽美子は、言葉を濁した。

『ぢや、あんまり長くゐてお喋りして、熱でも出るとわるいから、僕歸りますよ。大事にして下さい。』

『ありがたう。』

『ムーラン・ルウジュでも、のぞいて歸るかな。』

『新宿の……』

『さう。僕、ちよつと彼處好きなんですよ。』

櫻井は、さう云つて立ち上ると、壽美子のベッドの傍で、しばしためらつたが、思ひ切つて階下へ降りて行つた。

裏切

三木様。

熱海があまりに、暖かでしたので、風邪を引いてしまひ、昨日今日と床についてしまひました。

昨日、熱海へ電話をかけましたところ、東京へお歸りになつたとの事ですが、まだお電話がかゝらないので、そればかり待つて居ります。かうして、じつとしてゐますと、この部屋に誰かゐてほしく、口を開いて何かしみ〴〵話したくなります。明後日までには、きつとよくなると思ひますから、明日

中にどうかお電話下さいませ
　　　　　　　　　　壽美子

と、小型の和紙の便箋に、わづか一枚半ばかり書いてしまふと、壽美子は何か大きな仕事でもしたやうに、ガッカリとしてしまつた。

　此の思ひ、早く屆けかしと、壽美子は女中を呼んで、速達で出させた。

　翌日は、朝から雨が降つた。時雨のやうな寒い雨だつた。窓ごしにわびしい雨の脚を見つめながら、終日三木からの返事を待ちこがれてゐたが、かゝつて來た電話は、みんな三木からではなかつた。かうなると、心は情なくいらだつて、樂しい空想などは、ちつとも浮ばず、熱海から箱根へでも廻つたのかと考へたが、そんな話は、ちつともなかつたので、東京へ歸つたに違ないと思ふと、三木の沈默が、何のためか、皆目分らなかつた。

　佐伯ちか子とは、もう決して口を利かないと約束してくれたし、心にもない約束をする三木でもないし、……處女の貞操の旗である唇を許した自分を、裏切るやうな行爲はしないだらう。それだのに、東京へお歸りになつた以上、どうして電話をくれないのかと思ふと、壽美子はその夜、不安のために、容易にねつかれなかつた。

　櫻井が約束を違へたときなど、平氣であつたし、また約束を違へる櫻井でもなかつたと思ふと、自分が三木との戀愛に下手に立つてゐることが、しみ〴〵分るやうな氣がして、いよ〳〵いらだつて來るのだつた。

　その次ぎの日は、古い譬ながら、裸虫の洗濯と云ひたい、晴れた快い日であつた。

　大分氣もちも秀れたので、朝普段のやうに起きてしまつた。三木からの電話を待つ氣持は、一昨日よりも昨日よりも、切なくなつて、とても家に落着いてはゐられなかつた。

　午後になると、壽美子は母が氣づかふにも拘はらず、三木を訪れる決心をして、お化粧をすると支度を始めた。

（壽美子さんは、着物の方が、ずーつと似合ふ）と、たまに和服を着ると、櫻井が云つたので、それに追從するやうに思はれるのがいやで、しばらく着なかつた和服は、壽美子の心を新しくした。

　三木の住んでゐる上野花園町までは、高輪から、三十分近くかゝつた。

　動物園の裏で、壽美子は見知らぬ人に、三木の家を訪ねた。それはすぐ知れて、せまくはあつたが靜かな住宅街を、いくら

か樂しい氣持で、敎へられた方へ歩いて行つた。

仕事に熱中してゐるのか、それとも自分と同じやうに風邪を引いて、寢てゐるのだらうと思ふと、三木を恨んでゐた心は消え、熱海での三木の眸や言葉を思ひ出して、不意に訪ねて行く自分が、樂しくなつて、うれしい期待に心がときめいた。

三木の家は、あまり新しい家ではなかつたが、その人が住むのに、いかにもふさはしい、靜かさうな二階建で、門の脇に、一本すく／＼とのびた桐の木があつた。

取次に出て來たのは、文學青年らしい蒼白い顔の男だつた。

『三木先生は、いらつしやいますか。槇壽美子です。』

『はあ！』

と、無愛想に云つて、男は二階へ上つて行つた。

間もなく降りて來て、

『どうぞ。』

と、その玄關にとつつきの八疊へ通された。

壽美子は、そこで十分ばかり待つた。だが、三木は容易に降りて來なかつた。

壽美子は、昨夜三木が徹夜でもして、今朝になつて眠つたので、いまあわてゝ起きるのかも知れないと、待ち遠しさの中にも微笑を浮べた。

が、それから五六分間經つても、三木は降りて來なかつた。彼女は、もうのん氣にかまへて、ゐられなかつた。椅子に腰かけ直して、身體の向きを換へたとき、やうやく廊下を歩いて來るらしい足音がした。

障子に影が映つた。壽美子は、ハッとしながら、そこへ視線を蒐めてしまつた。

が、障子が開けられて、三木の表情を見たとき、壽美子の興奮も期待も、冷たい風に一時に、吹きちぎられてしまつた。

これが、あの三木だらうか。彼の身體中で、二つの寶玉のやうに、淸らかに澄みわたつてゐた双眸は濁つて、顔色は病人のやうに蒼ざめ、そこにはたゞ壽美子の來訪に對する當惑と恐怖だけしかなかつた。

三木が、自分の來訪を迷惑がつて居ることだけは、判然と解つたが、それがどうしてだか、どんな原因からであるか、丸きり判らなかつた。

『いらつしやい！』

いつものやうに、つくろはず、三木は頭を下げたが、それが罪を問はれる罪人のやうに、おど／＼してゐて、卑しくさへ見えた。

三木の、あの好もしい漂々たる容子は、どこにもなかつた。

『不意に参りまして、御迷惑でしたかしら。』

『いや。』

三木は、壽美子と差し向ひの椅子に、腰かけると、暗い額を垂れて壽美子の話し出すのを待つた。

『隨分お顔色が、おわるいぢやありませんの？』

『昨夕少しも眠れませんで……貴女お風邪は、もうよろしいんですか。お出かけになつてもいゝんですか。』

さう云つた言葉さへ、白々しく不自然で、取つてつけたやうであつた。

自分の風邪を知つてゐる以上、手紙を見たのに相違なく、それだのになぜ電話をかけないのかと非難する勇氣も、今は壽美子になかつた。機會さへあれば、櫻井のことも話し、三木から結婚を正式に申し込んで貰ひたい希望だつたが、それも滅茶苦茶に叩きつぶされた氣がした。

それでも、あるたけの力をかき蒐めて、壽美子は、少し笑顔をつくつて、

『わたし、今日少し改めて、お話しにうかゞつたのですけれど。』

と、云ひかけると、三木はひどくあわてゝ、

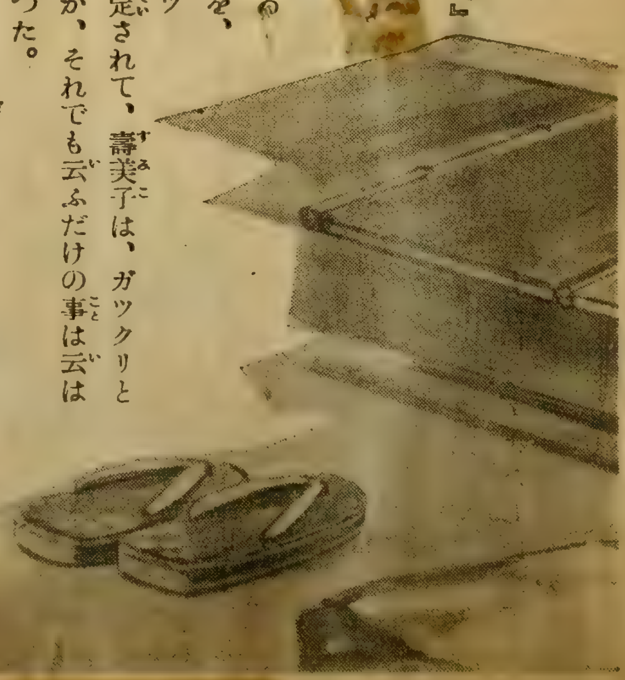
『はあ、承りますが――僕は、とんでもない男で、僕自身愛憎がつきてゐるんです。』

三木の容子から、感じてゐたことを、さうハツキリ肯定されて、壽美子は、ガツクリとなつたが、それでも云ふだけの事は云はうと思つた。

『まあ、それは何うしてゞございませう。わたしには、おつしやる事が、腑に落ちませんわ。ハツキリ話して頂けませんでせうか。』

『僕は、貴女を愛する資格を失つてしまつたのです。もう――かうしてお會ひしてゐる事が、貴女を侮辱してゐるんですから、まして、これ以上、その理由をお話しすることは、出來ません。』

と云つて三木は、首をたれた。



『どんな事でも、おつしやつて下さいませな。でないと、私歸れませんわ。』
思はず、壽美子の聲が、涙にうるんだ。
『わづか四五日の中に、貴君のお心が、こんなに變つてゐようとは、夢にも思ひませんでしたわ。』
『僕の心が——僕の貴女に對する愛情が、變つてゐれば、僕はこんなに苦しみません。』
『貴君のお心が變つてゐなければ、何も問題はないと思ひますわ。』
『それが、それが、僕が馬鹿だつたのです。どうぞ、僕との事は、凡て無かつたとお考へになつて下さい。』
三木の蒼ざめた顔が、泣き笑ふやうに、ゆがんだ。
『私には、少しも分りませんわ。母にも、貴君の事は、ちよつとお話ししましたし、それに……』
『それから先を、おつしやらないで下さい。僕は貴女の純な眸を見てゐるだけでも、充分罰せられてゐるのです。どうぞ、僕をゆるして下さい！』
『まあ！　何をおつしやるのでせう。私は……』
『どうぞ、もう何もおつしやらないで下さい！』

胃腸病にイノール
胃腸病の根本を良くする薬〇〇〇
高貴胃腸薬専門諸大家推賞　價一〇〇
醫學士田口勝太先生創製

さう云ふと、三木は哀願するやうに、頭を下げた。
わづか四日ばかりの間に、眼に見えぬ魔障が嚴然と二人の間に立つてゐた。三木が、あくまで、身を恥ぢるだけで、何も云はぬ以上、壽美子は、充たされぬ心で歸る外はなかつた。
五分ばかり寂しい悲しい沈默が、つゞいた。立ち上つた壽美子の眼に涙が光つてゐた。
『ぢや、わたしお暇して歸りますけれど、私だつて一時の氣持ではございませんでしたから、貴君にハツキリと理由をおつしやつていたゞくまでは、あきらめがつきませんが、お手紙でなりと、おつしやつて下さるでせうね。』
あやふく泣けて來るのを、こらへて云つた。
『いつれ、それは……』
面を上げないで、三木は口ごもりながら云つた。
『ぢや、もうこれぎり、お會ひしない方がよろしいんでせうね。』

と云つたが三木は、それには答へなかつた。
壽美子は、一時に眼の前が暗くなつた。取りみだすまいと、虔ましく氣を張つて暇を告げると、唇を噛みしめて、玄關へ出たが、その片隅を見たとき、壽美子は、ちら〳〵と眉間に光が走しつた。
あゝなぜ、先刻氣がつかなかつたのだらう。
そこには、青狐の襟巻と、ハイカラなビロードのコートが、緋の裏を、ところ〴〵見せて、まるまつてゐた。
敷石の片隅には、クリーム色の緒のすがつた南部表の爪先のピツチリと、反り返つた草履があつた。
壽美子は、弾かれたやうに、ハツと突つたつた。問ひ質すまでもなく、その好みから云つて、それが佐伯ちか子のものでなくて、何でせう。壽美子は、送り出して來た三木をふり返るさへ眼の汚れと云ふ氣がした。
身體中を逆立つて流れる激情を、じつと抑へて、事もなげに、
『さよなら。』
と云ひすてると、颯と薄紫の袂をひるがへして、汚辱の地を立退く聖女の如く、小走りに門外に走り出た。

（つゞく）

作者の麗筆はいよ〳〵冴え勝つて來た。愛し愛されつゝも、悲しい別れを告げねばならなかつた二人の運命は？　悲しみか喜びか――次號に聞け!!　如實に描く眞情の叫びを。

內田式 水壓療眼器

內田孝藏博士監製

醫學界諸權威 實驗御推奬

眼病治療（特にトラホーム撲滅に）近視眼老眼の豫防に！

本器は眼病治療の三條件清水洗眼、水壓マッサージ、冷罨法の三作用が合理的に作用する理想的治療器でその著しい効果に實驗者驚嘆激賞！　朝に、晩に、勉強運動の前後に御使用下さい。充血、疲勞忽ち恢復し精神爽快となりますから神經衰弱には特に大効があります。

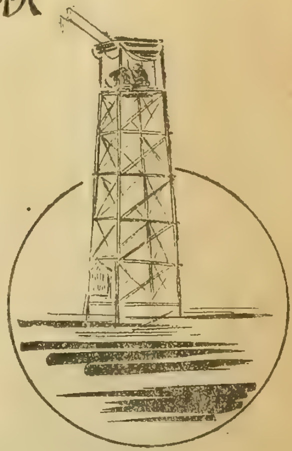
定價		送料	
角型	一圓八十錢	內地	十五錢
Y字型	二圓五十錢	領土	四十二錢
		米國	四十八錢

發賣元 大日本雄辯會講談社代理部

全國藥店醫療器械店にあり。

目玉武士と我慢男

横澤千秋



『天下太平、五穀成就』ドドンコ　ドンドン、ドドン　ドン〳〵。兩國回向院の相撲場では、朝からいさましい櫓太鼓が鳴りひゞいて、見物の人たちが押すな押すなの大にぎはひ――身うごきもならない程ギツチリ詰つて、おもしろさうに相撲を見物してゐます。

明治の御世になる少し前のことで、まだ皆がチョン髷をゆつてゐた頃ですから、今のやうに立派な國技館もなく、ひろい回向院といふお寺のひろ場に大きな小屋を作つて、そこへ人を入れて相撲を見せてゐたのです。

その多ぜいの中に、トテモ目玉の大きなギョロリとした武士と、背の小さいガツシリした町男のやうな男がゐました。この二人は、ちやうど隣どうしに並んでゐました。そして二人とも、相撲が好きらしく一生けんめいです。

そのうち、背の小さい町男の方が、腰からたばこ入れを取り出して、スパリスパリと旨さうに煙草を吸つてゐましたが、『ハテ、こりや困つたナ』と、呟きました。人ごみの中なので煙草盆もなく、吸ひがらをはたく物がないのです。手ではたいても仲々とれません。『なにか無いかナ』男はキョロ〳〵と圍りを見廻しました。ところが目についたのは、お隣りの武士のさしてゐる刀の柄です。

『こりや好い』男は『しめ〳〵』と言ふ顔をして手をのばすと、『ポン〳〵』すまして刀の柄にきせるを打ちつけて吸ひ殼をハタきました。おどろいたのは其を見た人達、たゞさへ八釜しい武士の刀で、しかも斷わりもせず、とんでもない煙草の吸ひ殼をハタくなんて、下手にすると斬られて了ひます。

『なんと言ふ人を食つた、命しらずの男だらう、今に武士が怒るぞ』見た人々はおもはず自分の方が汗をかきました。

ところが、その武士はジロリと大きな大きな目玉を剝いて『ウム』と睨みつけたまゝ直ぐ又見物をつゞけました。やがて、一勝負がをはつた時、今度は目玉の武士が煙草をとりだして、パクリと一服吸ひつけました。いまのやうに卷煙草なん

か無い時ですから、誰でもきせるです。そして、その吸ひ殼。武士はニコリともしないで、さつき刀の柄で吸ひ殼をハタいた小男の頭の上へ、その吸ひ殼を『フッ』と吹き落しました。頭の上では、火のついた吸ひ殼が青いけむりをあげて、ジリジリジリ。見た人は二度ビックリ。

小男もギョツとした様子でしたが、先刻の自分のことがあるので怒る事もできません。『ウウ、ウム』熱さに目をシロクロさせながら、脂汗をながしてジツと我慢しつゞけ、とう／＼消えるまで其のままで我慢してしまひました。『怖ろしく我慢づよい男だナア』とあたりの人は舌を捲いておどろきました。

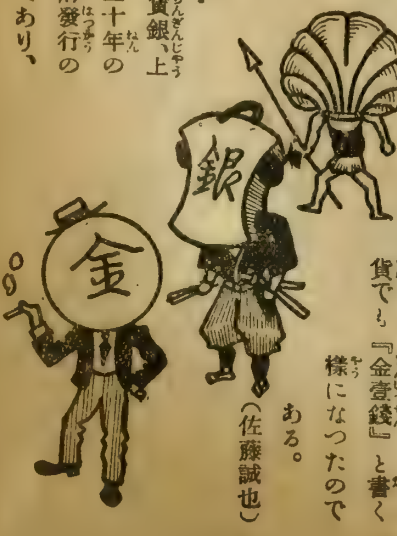
そして、目玉の武士と我慢男のどちらもどちら、人まねの出來ない怖ろしい膽ツ玉の好さに感心しました。道理こそ、それから四五年たつてから、この二人は日本にかくれない偉ものになりました。目玉の武士は、西郷隆盛。我慢男の町男は、日本一の俠客とうたはれた會津の小鐵でした。

──(をはり)──

お金に因んだ話

□金錢に關する文字に『貝』の字が附いてゐるのは、支那太古時代には貝を通貨とした證據である。卽ち、賣買、賄賂、質、貯、貨、販、財、貪、責、貧、費、貢、賜、賞、購、等々。

□銀貨本位時代には『銀』の字が貨幣を意味し、路銀、給銀、賃銀、上納銀など云つた。明治時代も三十年の初期迄は銀本位だつたが、政府發行の貨幣紙幣に『金』の字が記してあり、公文書にも稅金、預金、保證金など記したので、民間では『かね』といふ字に總て『金』の字を用ゐた。だから銅貨でも『金壹錢』と書く樣になつたのである。



(佐藤誠也)

幕末巷談

風流活人劍

「錢五島の繪圖面」を忘れて來た

「玉ちやん、困つたわねエ。」
「なアに、お孃さん？」
「私、大變な忘れ物をして來たの、濱町へ歸らなきア
ならない。」

妖艶お蘭、怪少女お玉を先手とし、三十五萬兩の軍資金を擁する錢五組の陰謀團は、背後に隻腕の怪劍士篠原求馬、並びに怪手品師駒井駒造の援けを得て縱橫に畵策し、幕府捕方を苦しめ續けた。此一團の中心には、亡き錢屋五兵衛の娘お京が居るのだが、彼女は嘗て右の篠原求馬の戀を拒けて、一味の敵横山新太郎の許に奔り、而も現在は、其新太郎との仲を割かれて、陋巷に不遇を歎く身となつて居るのだ。一夜此お京の隱れ家で、端なくも落ち合つた二個の人影。一は絕ち難き戀情に惱む新太郎、一は此新太郎を昔の戀敵に搗てゝ、我父の敵の片割と隨け狙ふ篠原求馬、相對するや新太郎は、先づ一刀の鞘を拂つた（前號迄の梗概）

「まア。」

お京がソワ〳〵と立上るのを見ると、お玉もその後から膝をあげました。

中の郷の加賀屋――舟師九兵衛が世を忍ぶ質屋渡世――の奥、二人は更くる夜も忘れて、お蘭の歸りを待つて居るのでした。

一方は錢屋五兵衛の孫娘に生れ乍ら、錢屋一家の所刑と共に、艱難のドン底に突き落されたお京、逆境の中に十九の春を迎へて、優しく臈たけた美しさ。

一人は高貴の血統を引いたお玉、輕業の一座に人となつて、男の子よりもぞんざいな口を利きますが、漁り立ての鯉のやうにピチ〳〵して、磨いたばかりの珠のやうに輝やかしい娘です。

「何を忘れたの、お孃さん？」

さう言ふうちにもお玉の樣子は、號令が掛れば、一番上等の獵犬のやうに、水火の中へも飛込みさうな構になります。

「錢五島の繪圖面と、あの鍵。」

「えッ。」

忘れ物の重大さに、お玉もさすがに度膽を拔かれました。

「どうしようね、玉ちやん。」

錢屋五兵衛が密貿易の根據地にした錢五島の繪圖面が、どんなに重要なものか、沒收漏の遺産三十五萬兩の行方が問題になつて居る時だけに、これは容易のこ

とではありません。
『おいらが行つて取つて來ようか、お孃さん、その繪圖面と鍵を何處に置いてあるんだい――』
『さうして貰へると宜いけれど。』
『大丈夫さ、お孃さん、夜だつて夜中だつて、おいらは平氣さ、變な奴が出て來たら、宜い加減遊んだ上、大川へ放り込んでやるよ。』
『まア。』
輕捷無比なお玉は、それ位のことをやり兼ねないでせう、十五になつたばかりの小娘には相違ありませんが、泥棒にも辻斬にも驚くお玉ではなかつたのです。
『ね、お孃さん、何處にあるのさ。』
『それはね、――私の家を入つて――』
『あツ。』
お玉は不意に飛上ると、いきなりお京の首つ玉に噛り付きました。これ位の直情徑行はちよい／＼やり兼ねない娘ですが、半分言ひかけた口を塞がれたのにはお京も驚きました。
『何うしたの玉ちやん？』
『暖簾へ耳が生えたんだよ、お孃さん。』
『えツ。』
振り返ると、お京の背へ近く、淺黄の暖簾から、男の耳が一つ出て居るのです。
言ふ迄もなく大縣村之介の村どん、お京の話に引寄せられて、我にもあらず立聽いて居たのでした。
『何んて嫌な耳だらう、お孃さん、斯うしてやらうよ。』
飛付いてお玉は、暖簾の耳をグイと引きました。
『…………』
早くも身をかはさうとしましたが、お玉の素早い身の働きには、村之介の武術も左したる役には立ちません。
『あツ、放せ、何んと言ふ事をするのだ。』
丁稚姿にはなつて居りますが、腹の底から武士の村之介が、唐人髷の可愛らしい娘に、耳朶へブラ下られた圖は、全く譬へやうもありません。
『間拔な耳だよ本當に、千切つて煮て喰ふから――』
『あ、痛い、參つた。』
『劍術ぢや無いよ村どん、參つた――なんて言つたつて放すものか。』
美少年村之介と、美少女お玉の揉み合ふ姿は、お京の緊張した心持をほぐして、ツイ吹出させて了ひます。
『何を騷ぐ――』
店から、九兵衞が顏を出しました。銀髮の後ろから灯を背負つて、後光が射すやうな見事な赤い顏、ギヨロリとした眼も、鹽つ辛い聲も、妙に重しがききます。
『爺さん、おいらは濱町まで行つて、お孃さんの大事な忘れ物

を持つて來るから、村どんが後を追はないやうにしておくれ。』

『宜いとも。』

『耳を確り摘んで居るんだよ、爺さん。』

『そんな事が出來るものか、――大丈夫だよ、俺が引受けれア、貧乏搖ぎもさすこつちやねえ。』

九兵衞も婆婆ッ氣の豐かなことでは、誰にも引けは取りません。

『宜いかい爺さん。』

『宜いつてことよ、相手が武家だと思へば遠慮もあるが、今ぢや質屋の奉公人の村どんだ、下手にあがきあがると、其場から叩き出して、二度と寄せ付けることぢやねえ。』

成程さう言ふ術もあるでせう。

其内にお玉は娘らしく一通りの仕度をして、闇の街へそつと辷り出ました。

『私も一緒に行から、玉ちやん。』

後からお京が、下駄を突つ掛けたまま追ひすがります。

『お孃さんは行かない方が宜いよ、おいら一人で澤山さ。』

『でも、隱して置いた場所が判らないと、無駄な骨折をするから。』

『……』

お玉も默つてうなづきました。お京にしては、九兵衞と村之介と睨み合つて居る家の中へ殘るより、闇は濃くとも、戰鬪力の旺盛なお玉と、濱町へ行つた方が樂だと思つたのでせう。

錢五の遺産に「絡まる大秘密」

この邊で少しばかり、錢屋五兵衞の積んだ富のことに就て話して置きませう。

三十萬兩――五十萬兩といふと、讀者のうちには『宜い加減のことを』と思ふ方もあるでせうが、作者は決して出鱈目を書いてるのではありません。

錢屋五兵衞は最初加州藩から梅鉢の定紋まで許され、日本沿海の貿易に從事して居りましたが、國内の商賣だけでは、如何にも利分が薄いので、全國に設けた支店から、あらゆる珍貨を集め、國禁を犯して、メリケン、オロシヤまで押し渡り、濡手で粟の儲けを摑みました。これは天保から嘉永へかけて、かなり長い間に行はれたことでした。

その後幕府の思惑を憚つた加州藩は、河北潟の開墾で土地の漁民と爭ひ、毒を流して多くの病人を作つたと言ふ理由で、五兵衞を縛らせましたが、何分の老年で、嘉永五年十一月牢中で病死、翌六年十二月には、一子要藏と共に鹽漬の死體を磔柱に掛けられ、番頭市兵衞は獄門、その他一族中永牢申付けられた者七名、藩の勘定方、郡方などで、五兵衞に關係があると見られて、切腹を命ぜられた者十一名、そのうちの筆頭、二千五百石取の篠原主殿は、隻手怪劍豪篠原求馬の父に當ります。

五兵衞の死後、その財産の大部分は沒收されました。宮腰と寺中と二ケ所の住宅を、五人の同心が三日三晩徹夜で調べると、――發見された額だけでも、

大判二千九百七十枚（その額十四萬八千五百兩）小判二千六百六十六兩、古金三萬六千六百兩、二分金五千三百二十兩、二朱金十六萬五千三百二十兩、小玉銀一石二斗（二千百八十三貫）、天保錢五百三十二貫、四文錢千六百六十貫文、藩札七十貫五百二十匁

米三萬五千三十石、大豆四百八石、小豆五千三百樽、田地八千五百三十石、船二千五百石積四艘、千五百石積六艘、千石積八艘、八百石二艘、五百石十二艘、小船二百餘艘、倉八十棟（内煙硝倉一、唐物倉一）

その他寶掛金翌嘉永六年六月迄に入るもの二十七萬五千三百兩。

これは全部記錄に殘つて居る確かな財産目錄で、その他名も知らぬ舶來品は山の如く、見る人の目を驚かしたと言ふことです。

此表に現はれた金額だけでも、六十萬兩を超しますが、一兩小判の金の含有量がほぼ四匁で、今の爲替相場でざつと四十圓、六十萬兩と言ふと今の金に換算して二千四百萬圓にも上り、その上當時の物價や生活の程度を考へると、その倍にも、三倍にも上る購買力を持つて居りますから、錢五の富といふものは、全く想像以上だつたに相違ありません。

その他穀物や土地や材木や、日本全土に設けた支店の財貨を併せたら、どんな額に上つたことか、これは計算も出來ません。

それだけの富を持つた錢屋五兵衞が、メリケン、オロシヤ、南洋、支那と密貿易をする爲に、人知れず錢五島に、三十五萬兩の財寶を隱して置いた――と言つたところで何んの不思議があるでせう。（錢五島の所在に就ては、學者間にもいろ／＼の說があります。これは追つて書く機會もあるでせう）

錢五島の寶は、いづれ一部分を江戸へ持つて來たことでせう、濱町の裏長屋に住んで居る、一介の手品師駒井駒造が、窮民を賑はす爲に、老中阿部伊勢守正弘の面前に千兩箱三十を積んだのは、その三十五萬兩の一部だつたに相違ありませんが、大船巨船を悉く沒收されて了つた錢五組の殘黨が、一寸の間に、太平洋の中にある離れ島から、三十五萬兩の大金を、皆んな日本へ持つて來たとは思はれません。

三十五萬兩と言ふと、それが全部金であつたとしても、正味だけで千四百貫目、箱や風袋を入れると何う計算しても、二千貫近い目方のものになります。

錢五島の繪圖面を濱町へ忘れて來たお京が、青くなつて驚いたのも無理のないことなら、さう聞いて、村之介が眼の色を變へたのも當然のことでした。

『…………』

『お孃さん、大丈夫かしら。』

『誰かに見付からないかしら。』

『多分、見付からない積りだけれど――』

お玉とお京は兩國橋の上を、美しい通り魔のやうに急いで居りま

した。

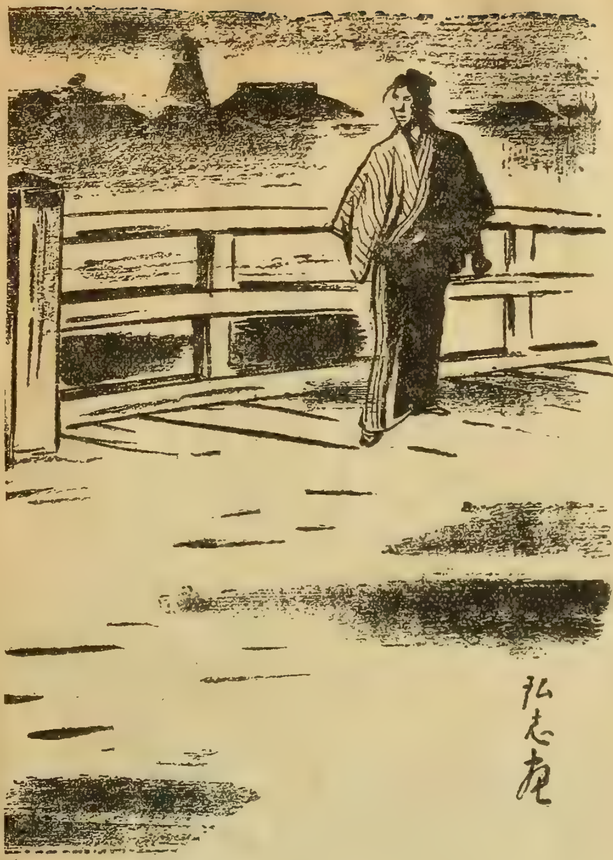
『錢五島にまだお金があるの、お孃さん。』

お玉は四方を見廻し乍ら斯う言ひました。橋の中程、四方の闇は無氣味に濃いが、此處なら先づ誰にも聽かれる心配はありません。

『まだ、三十萬兩も殘つて居るのよ。』

『…………』

『江戸へ持つて來たのは、たつた五萬兩だけ、それも駒井の叔父さんが骨を折つて、フレデルストンの多三郎が持つて來てくれたのさ。』



フレデルストンといふのは、メリケン人と言ふ觸れ込みで、ペルリ提督の通辭として日本へ來た男ですが、實は八年前に、錢屋五兵衞がアメリカへやつた多三郎と言ふ手代だつたのです。(この秘密も、いろいろの文獻で明かになつて居ります)

『大變ねえ。』

あまり話の桁が大きいので、お玉も二の句が繼げません。十二文の木戸を取つて、輕業手品を見せたお玉にしては、三十五萬兩といふ金は、全く途方も無い數字に過ぎなかつたのです。

『――で、その江戸へ持つて來た五萬兩のお金を何處に隱してあるの、お孃さん?』

お玉は好奇心で張ち切れさうでした。が、

『シーツ。』

それへ應へる代りに、お京の柔かい手が、愛撫するやうにお玉の肩を叩きます。

振り返ると、橋を渡つて、後ろからヒタヒタと近づく人影も、全く、暖簾の蔭も、橋の上も、大金の話となると油斷が出來ません。

兩劍士必死の刄へ

「お玉は跳込んだ」

『あッ、お孃樣。』

お京の隱れ家――濱町の路地の奥へ入ると、先に立つたお玉は立縮んで了ひました。

『何うしたの玉ちやん。』

後ろから差覗いたお京は、それつ切り、氣が遠くなつて、ヨロ／＼とお玉の腕の中へもたれ込みます。

蹴開いたままの雨戸の中には、淡い行燈の灯に照し出されて、世にも恐ろしい光景が展開して居るのでした。

恐ろしい――と言つたところで、まだ一滴の血も流れて居るわけではありません、が、睨み合つた二人の劍士を包んで、キナ臭くなるやうな緊張は、斬るか斬られるか、氣合は僅かに、一髮の兼合で平衡を保つて居るのです。

一方は、久し振りに姿を現はした横山新太郎、錢五組とは、倶に天を戴かぬ思ひの、加州の萬石家老、横山遠江の甥、同苗新太郎、白皙隆準、繪に描いた小栗判官のやうな美男ですが、僅かに一刀を青眼に構へたまま、眞つ蒼な額際から油のやうな汗が流れ、夢みるやうな眼を見開いたまま、必死と、最後の死線を守つて居るのでした。

これに對したのは隻手の怪劍士篠原求馬、右手は寒々と肩から削られて、羊羹色になつた紋付も痛ましい風情ですが、少し痩ぎすの五體に、氣力は刄金の如く脈動して、深沈たる

淵の如き瞳、相手を凝つと見据ゑ乍ら、左の拳に、刀の柄を輕く押へて居ります。

横山新太郎は、齋藤篤信齋門下の使ひ手で、技には少しも不足は無いのですが、猛虎を睨みすくめる、求馬の眼力には、毎度惱まされて居ります。打物取つては、左まで劣るとは思ひませんが、冷たい、深い、惡龍の深潭を思はせるやうな眼で、ジッと睨みすくめられると、次第に夢見るやうな甘美な心持に誘はれて、手も足も出なくなるのでした。

今なら、催眠術とか、精神力とか、說明のしやうもあるでせうが、昔の人に取つては、それは全く、手の付けやうのない魔力だつたのです　澤庵禪師が、柳生重兵衞を取つて押へたのも、梅辻規淸が、惡獸毒蛇を平げたのも、煎じ詰めると、この精神力の極度な發揮で、篠原求馬は、たま〳〵これを體得して、劍の方に用ひたまでのことですが、誰もそんな事を知りもせず、又防ぎ手と言ふものも考へては居なかつたのです。

横山新太郎は、最後の氣力まで打ちひしがれましたが、劍を持つ者の敏感さで、雨戸の外に、女——お京らしい女が立つて居るのを見ると、辛くも一縷の戰鬪力を振ひ起しました。

『えッ——』

と帛を裂くやうな氣合、一刀は延びて、求馬の頸へサッと突いて來ました。が、僅かに身を捻つた求馬、聲をも掛けず、構をも崩さず、辛くも元の備に返つた新太郎へ、最後の致命的な一擊を加へる隙を狙ひました。

求馬は曾て拔かぬ一刀を拔いて、何んの容捨もなく新太郎を斬る氣でせう。自分の許嫁で戀人、——命に代へてもと思ひ込んだお京を讓られ乍ら、破れた草履のやうに捨てた新太郎、——そのくせ、お京の留守に入り込んで、紅い長襦袢の移り香に醉ふやうな痴漢は、潔癖で一本調子で、物事に妥協のない求馬は、斷じて許して置くことの出來ない存在だつたのです。

泥の如く無氣力にされた新太郎の頭上へ、求馬の瞳はキラリと光りました。左手に一刀を引拔けば、間違もなく新太郎は眞つ二つにされて了ふのです。

『あッ、玉ちやん、助けて、——』

雨戸の外のお京は、一瞬にしてこの形勢を讀み盡して了ひました。放つて置けば、今にも新太郎は斬られるでせう。三月越し姿を見せない男ですが、お京は、怨むことも、あきらめることも出來ないほど、新太郎に打ち込んで居たのでした。

『お孃さん、向ふへ行かうや、見ちや惡い。』

お玉にはそんな深い心持などは解りません。一流の劍士と劍士の、命を賭けての勝負を、氣の弱いお京に見せるでもあるまいと思つたのでせう。長い袂を引いて、路地の闇に引返さうとします。

『玉ちやん、お願だから、横山樣を助けておくれ、あれ、あれ、篠原樣が——』

求馬は腰を捻ります。左の拳が柄を叩けば、新太郎はもう死んだも

同樣でせう。
『お孃さん。』
『いえ、玉ちやん、横山樣を助けなきア、私も、私も生きては居ない』
『お孃さん、そんな事を言つたつて――』
『お願だから、玉ちやん、私では出來ないが、お前なら出來る、助けて、助けておくれ。』
お京は前後も忘れて、路地の土の上に膝を突くと、自分より遙かに小さいお玉の胸に顏を埋めて、犇々と、そのか細い頸に腕を卷くのでした。
『お孃さん。』
『玉ちやん』
お京の乾いた眼、――涙さへ湧かぬ、恐怖に乾いた眼や、わななく脣を見ると、お玉はもう凝つとしては居られませんでした。物をも言はずにお京を押のけると、ポンと一と跳び、小さい身體はもう行燈の前へ立つて居ります。

「お京の賴みなら」と求馬は刄を引いた

『小父さん勘辨しておやりよ。』
『あッ。』
と言ふ遑もありません。次の瞬間にお玉は、求馬と新太郎の中へ、いや刄と瞳の中へ、何んの恐れ氣もなく、大手を擴げて突つ立つて居たのです。
求馬も驚きました、が、それよりも斬られるに決つた新太郎の方は、辛くも刄を引いて二三歩退きました。
『退け。』
求馬は僅かに氣合の破れを整へて、屹と小娘を見据ゑます。
裾短かな八丈の袷、唐人髷に前掛、見る影も無い姿ですが、お蘭がどんなに飾らうとしても、これ以上の身扮をしようともしないお玉は、その見すぼらしさに引立てられるやうな、不思議な品位と美しさの持主でもあつたのです。
『篠原の小父さん、勘辨しておやりよ、こんな弱い者を斬つたつて始まらないよ。』
『お玉か、退け。』
『ね、小父さん。』
何んと言ふ憎めない顏でせう。横山新太郎を『弱い者』と形付けて了つたにも驚きますが、それより、白刄にも精神力にも、一向關心の無い小娘のニコ〳〵した顏が、すつかり求馬の鬪志を醒して了ひます。
いや、それよりも重大なことがありました。闇の中から、お京の美しい眼が、涙さへ含んで、嘆願するやうに凝つと、此方を見て居ることに氣が付いたのです。
『お京殿の賴みか。』

『さうだよ、小父さん。』

何んと言ふ蟠りなさでせう、お玉はさう言ひ乍ら、求馬の胸へ頰を當てるやうに、その苦り切つた顏を見上げるのでした。

この無法な小娘の匂ふやうな美しさが、最後に殘つた求馬の憤怒を吹き消して了つたのでせう。

『お京殿がその積りなら――』

苦い笑ひが求馬の面を横ると、其儘肩を落して踵を返しました。呆然と行燈の前に立つて居る横山新太郎に背を見せて、一歩敷居の外へ、――

其處にはお京が、滿面の涙を拂ひもせず、少し闇の中に身を引いて、淋しく歸つて行く求馬を見送つて居るのでした。

眼の隅に燒き付くやうなお京の艷やかな姿から、求馬はそつと面を反けました。外は底も知れない睦月の闇、更くる夜と共に、深々と加はる寒さに、求馬の肩がゲッソリ瘦せて見えます。

お京に怨む心が無いうちは、求馬は新太郎を斷る氣にはなれなかつたのでせう。自分を捨てて、敵の懷に去つた許嫁の涙を、何う見たかわかりませんが、求馬の後ろ姿は、兎に角淋しく、薄寒いものでした。

『小父さん、まだ賴みがある。』

追ひすがつたお玉、

『何んだ。』

求馬は路地の外に立ち停りました。

『駒井の小父さんが、岡つ引と大藏鐵心とか言ふ浪人者に縛られて行つたんだよ。』

『それは大變だ。』

『お蘭姐さんが助け出しに行つたけれど、何うなるか解らない、こんな時篠原の小父さんが居ると、何んとかして下さるだらうつてお蘭姐

さんが言つて居たよ。』

『よし〳〵、それも引受けよう、駒井氏には恩義がある。』

『ぢや頼んだよ小父さん。』

『心得て居る。』

『それから、時々加賀屋へも來ておくれよ、いゝ近頃物騒で困るつて、お蘭姐さんがこぼして居るよ。』

『さうか。』

『ね、約束しておくれよ、いゝおいらは小父さんが好きさ。――いゝおいらより本當に強いのは小父さんばかりだし。』

『馬鹿な。』

求馬の顔にはもう一度苦笑ひが走りました。この天才的に身輕で敏捷な小娘が、思ひ上つた言葉が可笑しかつたのでせう。

家の中ではお京が、久し振りで逢つた新太郎の膝に打ち伏して、身も浮くばかりに泣いて居りました。

新太郎が足を遠退いたのは、伯父の横山遠江に、三十五萬兩の在所を探すやうに言ひ付かつた爲――と知る由もありませんが、斯う久し振りで逢つて、憚る人もなく差し寄ると、

いろいろの疑ひも蟠りも氷の如く解けて、一度せかれた思ひが、猛烈な勢ひで盛り返して來るのを何うすることも出來なかつたのです。

橋の上に佇む

大縣村之介

『お孃さん、歸らうや、此處に居ちや物騷だから。』
『……………』
お京は默つて顏を上げました、何時の間にやらお玉は歸つて來て、開け放したまゝの雨戸の外から、間が惡さうに聲を掛けたのです。
『ね、お孃さん、駒井の小父さんが居ないから、此處には居られないよ。』
それは尤もな言葉でした、もう少し新太郎に話すことも、聽き度いこともあるのですが、たつた十五の、男の子のやうな氣風のお玉には、そんな察しが付く道理はありません。
『歸らうね、玉ちやん、——横山樣、それでは又——』
お京も立ち上りました。
『お京殿、私が此處へ來なかつたにもわけがある、いづれ解る時もあらう。』
まさか三十五萬兩を狙ふ伯父の差金に反抗した——とは言へませんが、新太郎の調子は、妙にしんみりして、お京をうなづかせるに充分なものがありました。
『横山樣。』
『お京殿、時節を待たう。』
『ハイ。』
行燈を吹消すと、三人は並んで外へ出ました、雨戸を外から締めて其儘路地の外へ、
『お孃さん、あれは?』
『?』
『繪圖面と鍵。』
『大丈夫。』
お京はそつと帶を叩いて見せました。劍戟と涙との間に、何うして持出したか、お玉にも氣が付かなかつたのですが、實は行燈を消して外へ出る間に、案内知つた神棚から取下して、其儘帶の間へ挾んだまでのことです。
濱町の通りへ出ると、其儘新太郎は別れて了ひました、危い命を助けられた上、何時までも未練がましく付き纒ふのは、さすがに後ろめたい心持だつたのでせう。
『横山樣。』
『お京殿。』
二人はそれつ切り、何んにも言ひませんが、三月越の蟠りの代りに、新しい熱情が芽んで、明日にも逢はずには居られない心持になつて居るのでした。
『あツ、お孃さん、村どんでせう。』
橋の袂まで來ると、お玉は立止つて、闇の中を指します。
成程、其處に立つて、何方へ行つたものかと思案をして居るのは、

村どんの大縣村之介に紛れもありません。
　あんなに賴んだ九兵衞の手を脫け出して、二人の後を慕つて來たのでせう。闇の中にお玉とお京を見定めると、思はず氣がとがめる樣子で外方を向きましたが、
『村どん、到頭やつて來たの?』
　お玉に聲を掛けられると、不承不承に此方を向いて、小鬢を掻きます。
『お二人のことが心配で、九兵衞殿の許しを受けてお迎ひに參りました。』
『まア、大層親切なんだねえ、だけど、その御褒美には、今晩にも暇が出るよ。』
　お玉はツケ〳〵とやつ付けます。
『いや、そんな事は無い、九兵衞殿が御承知だから。』
『歸つて聞けば解るさ、ね、お孃さん。』
『…………』
　お京は默つて點頭きました。胸の中には新太郎が一杯で、この手代姿の美少年に同情する餘裕などは無かつたのです。
　中の鄕の加賀屋に着いたのは、もう眞夜中近かつたでせう。
『小父さん。』
　裏口へ廻つて、何時もするやうに拳を振上げたお玉は、思はず飛退きました。滅多に物驚きをする娘ではありませんが、いきなり闇の中から、一塊の眞白なものが飛出したのです。
『猫だ――』
　いや、猫に驚いたわけではありません、猫が飛出すほど、裏口の戸が開いて居たのが、何んとしても腑に落ちなかつたのです。
　三人は一團になつて、家の中の闇へ飛込みました。

爺さんの敵と「村之介は指された」

『灯り。』
　村どんの村之介は、さすがに武士のたしなみで、こんな時は號令者になります。
　お玉は一番よく案內を知つて居るので、手探り乍らすぐ、行燈と火打箱の在所が判りました。あわてて鎌を鳴らして、硫黃附木に灯を移すと、
『あツ。』
　四方は血の海、
　お玉は、思はず灯を落して了ひました。
　もう一度燧石を鳴らして、行燈に灯を容れたのは、それからまた、好い加減まご〳〵してから――。
　灯の中で見ると、帳場と奧の境、丁度淺黃の暖簾の下に、無殘な姿を橫へて居るのは、加賀屋の主人九兵衞――曾ては錢屋五兵衞の舟師として、二千五百積でメリケン、オロシヤまで押し渡つた豪の者――

のこと切れた姿だつたのです。

『あ、九兵衛。』

とお京、立ち縮んだまゝ、暫らくは息も吐けません。

『爺さん。』

お玉は血潮に浸るのも構はず、骨組だけは確りした、九兵衛の身體を抱き起しました。見ると、左の肩先から袈裟掛に斬られて、たつた一と太刀で息が斷えた樣子、銀髮から胸へかけて、半面蘇芳を流したやうで、その凄まじさと言ふものはありません。

併し、誰の眼にも疑の無いのは、餘程腕の出來た者に斬られたといふことでした、肩先から斬り下げた傷は、胸へかけて五六寸、眞に水もたまらぬ腕前です。

『爺さん、誰がこんな酷たらしい事をしたんだ、それだけでも言つておくれよう。』

お玉は九兵衛の身體を掻き上げて、耳へ口を當てないばかりに斷う言ひますが、冷たくなつた死體が物を言ふ筈もなく、怨を呑んで死んだ白眼が、黄色い灯にクワッと不氣味に開くだけでした。

お京はこんな時には、全く無力で、たゞおろ／＼するばかり、側に居たところで何んの役にも立ちません。

お玉は死體の頭を、火打箱の上へそつと置くと、何心なく立上つて、四方を見廻しました。證據になるものは、其邊に一つも落散つては居りませんが、一とわたり見廻す眼が、フト、其處に突つ立つたまゝ、ぼんやり此場の樣子を眺めて居る、大縣村之介の村どんと出逢つたのでした。

『あッ、お前だらう、爺さんを殺したのは。』

何んと言ふ遠慮の無さでせう、お玉の指は眞つ直ぐに伸びて、村之介の胸をピタリと指して居るのでした。

『馬鹿な事を、――拙者の知つた事では無い。』

村之介は駭然として顏を擧げました。この美玉のやうな少女の面に、的面に見据ゑられると、やましい心は無くとも、何んとなく面はゆい心持になるのは是非もないことです。

『爺さんが外へ出さなかつたんで、斬つて飛出したらう、お前に相違ないよ。』

『いや知らぬ、拙者が出る時は、

九兵衛殿はまだ生きて居た――』

『それぢや一度出かけてから、又取つて返して斬つたらう。』

『馬鹿な事を言ふと許さんぞ。』

さすがに村之介は、武家の心持に返り切つて、この無法な少女の言ひ掛りを突つぱねました。

『お孃さんが錢五島の繪圖面を取りに行くのを、立聽して居たお前だもの、後を追はうとして爺さんに止められ、だまし討に斬つて飛出したらう。』

『そんな馬鹿な事が――』

『爺さんの敵だ、逃がさないぞ。』

お玉は村之介の袖の下を潜ると開け放したままの裏口へ飛んで行つて、中からピシリと締切りました。

『お蘭姐さんが來たら、仇討が始まるんだ、それまで逃げ出さうとしたら、おいらが代つて相手になつてやる、村どん覺悟をおし。』

『弱つたなア。』

『親を殺された方が餘程弱るよ。』

お玉は何んと言つても聽き入れません、全く村之介が下手に此處を飛出さうとする様子を見せたら、この怪少女はあらゆる腕を揮つて驅

け惱ますでせう。

一と通りの武術には通じて居る村之介ですが、綱渡り、投げ太刀、竹乘り、あらゆる輕業に達した天才的な少女を相手に、間の惡い敵役にされるのは全く感心しません。暫らく觀念を定めて、お蘭の歸りを待つより外は無かつたのでした。

怪人物鐵心を前に
「お蘭必死の啖呵」

一方はお蘭、町方與力の佐伯東一郎を促して、夜中乍ら中洲の大藏鐵心の道場に、驀直に驅け付けました。

『與力、佐伯東一郎。』

と名乘ると、横着者の大藏鐵心も、さすがに逢はないわけに行きません。丁寧に通して、さて、衣服を改めて面會します。

『これは佐伯東一郎殿、夜中わざ〳〵の御出は珍らしい、御役向の事で御座るか、それとも、私の御用で御座るか。』

妙に絡んだ物の言ひやうは、眠いところを起されたせゐもあるでせう、兎も角、大藏鐵心、以ての外の機嫌です。

『役向といふ程の用事では御座らぬが、先程町方の御用を勤むる者、何んか事の行違ひで、駒井駒造なる手品使ひを、御當家に送り屆けたと申す、仔細あつて、其者の身柄を御引渡し願ひ度い。』

妙に當らず觸らずな言ひ分は、岡つ引や目明しの落度にならぬやう、又大藏鐵心の罪にならぬやう――と、佐伯東一郎の思ひやりの深いところでせう。

『ホ、ホウ、それは異な事を承る、如何にも拙者の舊友諸葛亮三郎こと、當時駒井駒造と申す者を、當道場に案内いたしたが、それはお互に合意づくのことで、縛つたわけでも、手籠にしたわけでも御座らぬ、何んかの思ひ違ひで御座らう。御配下の手先目明しが、無辜の者を縛つたとあつては、第一世間への聞えも惡い、左樣な事は仰しやらぬ方が宜しからうと存ずる。――最早深夜のことでもあり、詳しいことは、いづれ明日でも承るとして、今晩はこれにて御引取を願ひ度い。』

實に人を嘗めた言ひ分ですが、自分の配下の手落があるだけに、佐伯東一郎それでもとは言ひ切れません。

『ちよいと、お前さん、白ばつくれたつて駄目さ。』

堪へ兼ねて、東一郎の後ろから、お蘭がにじり出ました。

『お前は何んだ。』

大藏鐵心、以ての外の顏色になります。

『とぼけちやいけない、お前さんに口說かれ拔いたお蘭さんの姐さんさ、お見それ申しちや義理が惡からう。』

『何んだと？』

『默つて駒井の小父さんをお出し、ツベコベ言ふと爲にならないよ。』

灯の中へ正面を切つたお蘭は、激情に少し顫へて、目の覺めるやうな美しさです。

『默れ女、俺は町方與力佐伯東一郎殿と話して居る、お前は何んだ、——誰の許しを受けて、何處から入つて來た』

鐵心は少し開き直ります。

『許しなんか受けずに、人の家へ押込むのがお前さんの稼業ぢやないか。』

『何？』

『大泥棒の庵原山之丞、白ばくれたつて駄目さ、佐伯の旦那、海道筋を荒し拔いたのは、此野郎で御座いますよ』

お蘭は臆れた色もなく、指を擧げて、大藏鐵心の顏を正面から指しました。丁度それは、お玉が九兵衞の敵と思ひ込んで、村之介の顏を指した時刻になつて居ります。

『無禮者。』

『何が無禮なのさ、姿形は變つてるが、お前が大泥棒の庵原山之丞なことは、私がお蘭なことと同じやうに確かさ。』

『賣女、何を言ふ。』

『畜生ッ、賣女と言つたな。』

『お、言つたが何うした、八つ山下で水茶屋を開いて媚を賣つて居た其方だ、賣女と言はれて何が不足だ。』

『お茶は賣つたが、色は賣らないよ、お氣の毒樣だ、お前こそ、大泥棒の庵原山之丞ぢやないか——佐伯の旦那、此野郎を縛つて下さい。』

お蘭も必死でした、騷に驚いたか、內弟子らしいのが五六人、襖を細目に開いて、左右から眼を光らせて居るのも容易ではありません。

『俺は大藏鐵心だ、疑があるなら、調べて見るが宜い。』

『噓々。』

『庵原山之丞とやらは、總髮で、前齒が欠けて、色が黑かつたさうだ、その上、先年伊皿子のお化け屋敷で燒け死んで居る、死體まであつたといふ噂ではないか。』

『噓々、月代は剃れば剃られる、伊皿子で死んだのも、何處の馬の骨だか判つたものぢやない。』お蘭も必死です。

『齒は中年者に急には生えぬぞ、その上、俺は足が惡い。』

『何んと言つても、お前は庵原山之丞に相違はない、ツイ昨夜も、この私を手籠にしようとして——』

『これ〳〵自惚も好い加減にせぬか、俺は阿部伊勢守樣の仰せ付けで錢五の殘黨を調べたのだ、お前があまりジタバタするから、引つ抱へた——それだけの事だ』

『えッ、口の減らない。』

『口の減らないのはお前だ、佐伯東一郎殿の手前、今晩のところは許してやる、歸れ歸れ。』

劍もホロロの調子ですが、これではお蘭も全く齒が立ちません。

その上、いくらかでも伊勢守の息が掛つて居ることを知つて居るだけに、佐伯東一郎も此上爭ふ口實は無かつたのです。

『飛んだ無禮をいたした、平に。』

丁寧に詫まで言つて、苦々しいが、お蘭を撫め〳〵、其儘引上げるより外に方法も無かつたのです。

三十五萬兩は何處？

――駒井駒造の拷問――

『聽いたか、諸葛。』

佐伯東一郎とお蘭が歸ると、冷たい嘲笑をその後ろ姿に浴せた鐵心は、隣の部屋の唐紙を開けて、雁字がらめにした駒井駒造を引出しました。

『…………』

駒造は縛られた上に、猿轡まで嚙まされて、老實な面も、さすがに忿怒でハチ切れさうですが、これでは、唐紙を隔ててツイ五間ばかりの所にお蘭が居るのに、聲を掛けるどころか、注意を促がす方法も無かつたわけです。

『猿轡があつたか、成程それでは物は言へまい、ハツハツハツハツ、こいつは大笑ひだ。』

鐵心は自分の手で駒井駒造の猿轡を外してやると、その前へ立ち塞がつて、ニヤリ〳〵と續けました。

『どうだ諸葛、樂ぢやあるまい、俺も昔は貴公の 弟 弟子だつた事もあるから、こんな目に逢はせるのは本意ぢや無いが、何分御褒美が大きい。』

『…………』

『此邊で器用に話して了つたら何うだ、どうせ貴公の金で はあるまい。』

『…………』

『尤も、貴公がその三十五萬兩をそつくり、横取りするといふなら話は別だが、貴公にはとてもそんな藝當が出來るわけは無い、――して見ると、貴公がその在所を話したところで、大して困るわけでもあるまい。』

『…………』

『錢屋五兵衞の不淨財、三十五萬兩といふ沒收漏の大金が何處にあるか、それを言ひさへすれば、今直ぐでも許してやるよ、何うだ諸葛――』

『…………』

『それも俺が猫ババを決めるわけではない、――どうせ二三萬兩はくすねるかも知れぬが、兎に角三十何萬兩といふ金は右から左阿部伊勢守に差上げて、公儀の御庫へポンと入るのだよ、錢屋五兵衞も本望だらうし、俺は直參にお取立だから、三十五萬もろに懷へ入れて、一生十手捕繩に追ひ廻されるより、氣だけでも樂だらう。運よく行けば、貴公も仕官の口にあり付くかも知れないよ、解つたかい諸葛。』

大藏鐵心は一生懸命說き出しましたが、その長廣舌の下卑さ加減に、すつかり愛想を盡かして了つたのでせう。

『默れ奸盜。』

駒造は到頭爆發して了ひました。

『何んだと？』

『自れの糞土の心を以つて、人の心を測るのは聞き度うない、錢屋五

へ兵衞の沒收漏遺産は、如何にも三十五萬兩ある、併しこれは、天下の爲、當氏の爲、一番大事な事に使ふ金だ、幕吏や奸盜には百文もやることでは無い。』

『何？』

『言ふだけ無駄だ、斬るなり打つなり勝手にせい、俺の口は田螺よりも固いぞ。』

駒井駒造はきつと口を緘むと、成程梃で開けても物を言ひさうもありません。

『ハッハッハッ、相變らず融通の利かない男だ、今に痛い目を見せてやる、その時愚痴を言つても追付かぬぞ。』

『…………』

『さア、此男を道場へ運べ、少し鹽を嘗めさしてやる。』

大藏鐵心は振り返つて斯う言ふと、

『おう。』

五六人の壯士、左右の唐紙を開けて飛込むと見るや、泥棒猫でもつまみ上げるやうに駒井駒造を提げて、道場の板敷の上へ投り出しました。

道場と言つたところで、まだ建つたばかりの至つて粗末な普請、天井は梁が縱横に走つて、繩尻を投れば、其儘きり／＼と駒造の身體を宙に釣上げるやうに出來て居たのです。

『どうだ諸葛、もう一度言ふが、三十五萬兩の在所を敎へて、目出度く溫かい床へ歸る氣は無いか。』

『…………』

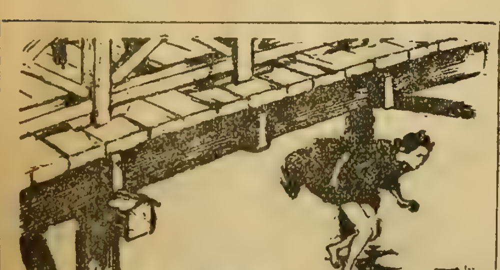
『頑固な男だ、まだ首を振つて居る、サア、吊せ。』

『おう。』

號令と共に、雁字がらめにされた駒井駒造の身體は道場の天井へキリ／＼と釣り上げられて、蓑虫のやうに、宙でクル／＼と廻り始めました。丁度その時、お蘭は中の鄕の加賀屋へ、町駕籠を急がせて居りました。

父親の九兵衞が、何者とも知れぬ曲者に殺された事も知らずに、そして、怪少女お玉が、大縣村之介を敵と思ひ込んで血潮の海の中で、睨み合つて居ることも知らずに──。

それにしても、何んと言ふ遲い雲助の足取りでせう？（つゞく）


忍術怪盜一代の任俠史！
傾城松山、嬌妓お花の熱情
芝居さながらの大場面の展開
評判講談 鼠小僧治郎吉
面白い／＼名講談中の名講談
布裝美本 定價一圓 送料十二錢
○各書店にあり 大日本雄辯會講談社 振替東京三九三〇

本欄解答は全部三二九頁にあり

○不正規軍の改編

日滿軍の熱河攻撃に於て、我に投降した或る不正規軍の一團を改編しようとしたところ、二隊に分けても三隊、四隊、五隊若くは六隊に分けても一人殘り、七隊に分けると一人も殘らず各隊同數になつたと云ふが、然らば投降不正規軍の數は幾人であつたでせう？

○動物問答

鷹『そんなことたかが知れてるぢやないか。』
烏賊『如何にもさうだ。』
駱駝『君は樂だらう。』
馬『ところがうまく行かんのだ。』
虎『すつかり取られて閉口さ。』
犀『そりや才のない話だね。』
象『取り返すの造作ないだらう？ねわし君。』
鷲『わしは知らないよ。』

○面白い呼び方

△浪の花…鹽。　△むらさき…醬油。
△山くぢら…野猪。　△あたりめ…するめ。
△おすもじ…すし。

○むづかしい動物の異名

△猿（孫憲郎、林大節、紅供奉、孫文郎蔚、巴西侯）
△鼠（陳二公、司城主簿、殿前錄事、司文府史、南宮書佐、馳道都尉）
△馬（千里將軍、四足仙人、綠耳公）
△犬（守門侯、黄耳、逍遙郎君）

○味な俚諺

△桃栗三年柿八年…（果實を結ぶ迄）
△艪三年に棹八年…（船頭になる迄）
△思ひ三年戀五年…（添ひ遂げる迄）
△疥癬三年又三年、治つて三年又三年…（全治する迄）

○繪さがし

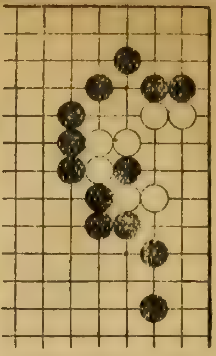
この繪の中に二つのものがかくされてゐます、何でせう？

○方言くらべ

△東京地方（お父さん、お母さん御飯が出來ました。どうぞ召し上つて下さい）
△青森地方（どちや、がちや、ままできたい、どうが、あがつてけい）
△八丈島（てでさま、うんまさま、ひようらが、ねえとあが、さあめやあると）
△アイヌ語（あちやぼ、はぼ、あまむたね、あええやすかへ、くすもいべやん）

○詰碁新題

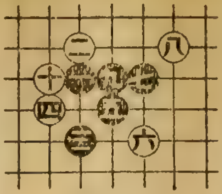
七段　瀬越憲作出題



黒先・結果如何

○聯珠棭勝新題

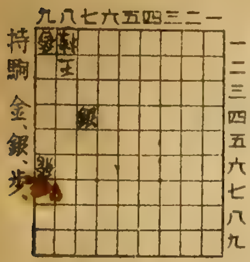
珠叟　清水吾石出題



黒十一から追手詰で最も簡單に勝つのは何處でせう。

○将棋新題

七段　溝呂木光治出題



持駒　金、銀、歩、

○入れ違へた手紙

彼氏は、金を貸してくれと云ふ友と戀人とに同時に手紙を書き、封筒へ入れる時中味をつい入れ違へて了つた。で？

戀人へ『駄目、駄目、駄目です。斷然駄目です。今後君の様な人とは絶交します。』

友人へ『用件の趣、委細承知しました。例の〇〇町の角のポストの處で待つて居て下さい。』

○街頭ナンセンス

銀座街頭に於ける兄妹の會話。

兄『何處へ行く？』

妹『我黨倶樂部へ一寸。』

兄『行つちやいかん。』

妹『あら、困つちやつたわ。妾どうしませう。』

兄『何が困るんだ。そんな――』

妹『我黨倶樂部つて、W・C（便所）の事なのよ。W・C――WAGATO・CLUB――』

兄『うーむ、早く行つて來い。』

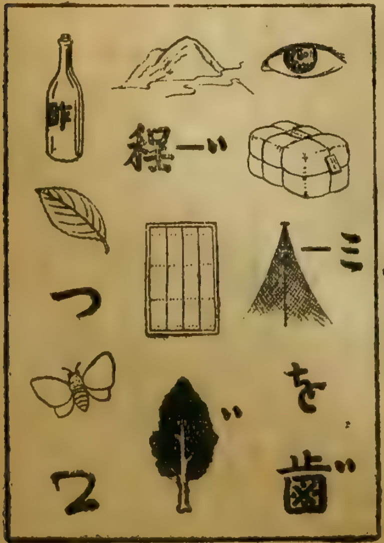
○そこなら請合

○『この邊に魚のよく釣れるところはないかね？』

△『あるよ、そこに「通行を禁ず」といふ立札のある小路があるね……それを眞直に行つて「通り抜けを禁ず」とある道をかまはずドン／＼通つて、更に「無用の者入るべからず」と札の立つてる密林を抜けると「釣漁禁」と高札のある沼に出るが、そこなら釣れること請合だよ。』

○孫子十代二百年貯金

茨城縣新治郡〇〇村の副業組合員は、孫子十代二百年貯金』といふ強制義務貯金を始めたが、それによると一日一錢五厘で年五圓四十七錢五厘で、二百年後には皆それ／＼約四十萬圓の大資本家になるんだと。



○判じ繪

この繪を何と讀みますか？

今！結核患者の非常時に

救ひの神『ダウンチリメン』

▲喀血、衰弱の甚だしい二期三期の結核にもグングン効果を奏し

▲重症の肋膜炎、百日咳、喘息等にも短時日の服用で奏効歴然！

春は何故結核に危險か？

從來の統計上から見ますと、結核患者の死亡率は冬が一番少く春が最も多い事が明瞭であります。何故春は結核に悪いかと申しますと、一つには氣温が上り其の上空氣も濕潤になつて來ますから、今まで冬眠状態で活動を中止してゐた結核菌が再び活動を開始する爲めであると、又一つには、春先からは晝と夜との氣温の差が、冬期よりも甚だしく從つて結核療養に困難な事とに基くのであります。

斯く、健康増進には好シーズンの春も、結核患者にとつては恐るべき生命の非常時でありまして、春と共に喀血が頻りに起つたり、急に病勢が亢進したりして、櫻の花の散る頃には悲しむべき結核犠牲者が續出する結果となるのであります。

又幼兒の生命を脅かす百日咳、劇しい發作毎に命をけづられる喘息等にも從來眞の根治藥と云ふものはなく、姑息な一時凌ぎの痲醉性の藥物を用ひて居る有様であります。

斯うした方々に不思議な効果を奏する熱帯藥草『ダウンチリメン』をお奨め出來るのは治療上保健上誠に喜ばしい事であります。

何よりも事實が證明！

この『ダウンチリメン』の卓効は三期の肺病を僅か四ケ月位で治癒せしめた實例、肺尖カタルや肋膜炎、或は腹膜炎を短時日に治した實驗談、又は肺病より恐ろしくて治り難いといふ喉頭結核を完全に全治せしめた實例さへあります。長い間手古摺つた百日咳や全治は絶望と諦めてゐた喘息等もこの藥草の服用で著しく其の苦しみを輕減した實驗報告も來て居ります。でありますから決して空理空論ではなく、呼吸器患者の望み焦れてゐた理想藥が出現したと云ふ事が出來ませう。

喀血・血痰を止めるこの卓効

『ダウンチリメン』を服用された方々の等しく認め、且つ驚嘆されるのは、結核患者を最も恐怖させる咯血と血痰を不思議に止める事頑固な咳が短時日に鎮まり、胃腸が丈夫になり、食慾が進む事が非常で、熱をとるのに汗を出さぬから、身體の衰弱を防ぎ、短時日の服用でかくも顯著な効果を奏するのですから全く驚嘆の外はありません。現に某々大學病院でも實驗の結果意想外の卓効にその成分を研究中であります。

強烈に働く殺菌消炎作用

ダウンチリメンは東印度に於て發見された熱帶奇草で、部落の土人達が萬病の秘藥として昔から非常に珍重してゐるもので今日までの研究によつて明かにされた處によりますとダウンチリメンの主要成分は、チグリン、チトラール、ゼラニオール、シトロネラールと云ふ四種の高級揮發油と、蓚酸、カルシウム、タンニン並に苦味質等で、その中でも此の高級揮發油が頗る強烈に殺菌的に、又消炎的に作用するので猛烈な繁殖力を有する結核菌も繁殖を阻止されるのであります。

この偉大な作用は、岡部醫學博士始め、九州醫科大學の諸博士の研究と實驗によつても認められ、『ダウンチリメン』は血を咯く様な重症、特に肺病、肋膜、喘息、百日咳その他の呼吸器病に從來の如何なる醫藥よりも優れた作用がある事が判明し、昨今では各大學病院や醫院で盛んに賞用されて居ります。

ダウンチリメン草の栽培

化學藥品に見ざる特効！

斯くの如くダウンチリメンは解熱、鎮咳、祛痰、消炎、殺菌、健胃、強心、止血等の全く化學藥品には見られない綜合的の効果を奏しますが、往々にして化學藥品に見る様な嘔吐作用、胃腸障害、中毒作用其他の危險な副作用を伴はず、頗る香味佳良ですから日常嗜好的に服用して居るうちに、極めて合理的に而も速かに治効を奏するのがダウンチリメンの特長であります。

一日分タツタ六錢五厘

しかもこの世界にも稀に見る卓効藥が、一日分僅か六錢五厘といふ嘘の様な實費値段でお頒け出來るのですから經濟の豐かでない方にも安心して服用が續けられます。病苦に日夜お惱みの方は早速『ダウンチリメン』をお試し下さい。用ひ方は至極簡單で一日量を土瓶に入れ煮沸するまで煎じてそのまゝ召上り下さい、他の漢藥の様にグラ〳〵煮つめる必要ありません。吸入の時はその煎汁を白布で濾してから吸入器で吸入して下さい。

◇◇

『ダウンチリメン』は定價（藥草）十五日分一圓、一ケ月分二圓、（錠劑）十五日分二圓八十錢、一ケ月分五圓、送料內地十五錢領土四十二錢、東京・本郷・駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）へ御註文下さい。

現代小說

東京哀歌

加藤武雄
山川秀峰畫

その夜・第四景

憎い人だつた。恨めしい人だつた。自分のすべての歎きの源、自分のすべての不幸の根は、あの人のうちにある。さう思つて、憎みつゞけ恨みつゞけてゐた人だつた。だのに、瑞枝は、今久振りにその人に會ふと、唯、懐かしさだけが先に立つた。そして、岩間の清水のやうに、冷たいかなしみが、その懐かしさと共に胸底から湧きあがつて來るのであつた。

「いや、そんなにお變りにはなりませんよ。」

と、廉吉は例の物靜かな調子で、

「かう云ふところへ、よくいらツしやるのですか？」

「いゝえ。ほんの時々ですの。」

「ずゐ分壯んなものですね。僕ははじめて來たんですが――。」

廉吉は云ひなが

方へ眼をやつ

「はじめて

「はじ

「お

「一

が

「

純情を蹂躙されても、猶且つ奈々子に眞心を捧げる伴廉吉は、其爲に可憐な女給襟子の戀をも斥け、妖艶瑞枝の思慕をも足蹴にした。だが其奈々子の生涯も夢順調ではなく、今はダンサーと迄沈淪して居るのだが、飽迄も廉吉が彼女を隱まふものと信ずる奈々子の實家では、父の危篤を傳へて彼女を歸すべく廉吉に要求した。廉吉は必死に彼女の在處を探り、とゞ帝京ダンス・ホオル迄彼女の姿を求めて來たが、其處で彼は思はざる人に我名を呼ばれて愕然とした。妖艶瑞枝！ 嘗て其思慕を拒絶した瑞枝が、忽然として彼の前に其姿を現したのである。

〔前號迄の梗概〕

動かしただけで答へ無かつた。心、こゝにあらずといふ風に、眼を踊り場の光景に捕へられてゐた。

『私、こゝで、あの方をお見掛けした事が御座いますわ。』

瑞枝は、そつとその横顔に眼をやりながら云つた。

『え？』

びつくりしたやうに、廉吉は瑞枝を見た。

『伴さん。大切な方を、どうして、こんなところに出してお置きになりますの？』

『奈々子の事を云つていらツしやるのですか？』

『奈々子さんと仰有るんですわね？　勿論、その方の事よ。——でも、今夜はお見えにならないやうですわね。』

『瑞枝さん、あんたは奈々子について何か御存じですか？』

廉吉は、言葉を彈ませて、強く瑞枝を見据ゑた。

『いゝえ。たゞ、日外、こゝで一寸お見掛けしたばかりですの。』

『然うですか？　奈々子は、どんな風にしてゐました？』

『どんな風にツて、先では私の事なんか御存じ無いんですし、たゞ、私の方でお見掛けしたといふだけの事ですから——。』

瑞枝は、一寸言葉を切つたが、

『伴さん、ぢやあ、あなたはあの方と御一緒にいらツしやるん

NOV - 6

『

いと

の方

て居き

ますの。

『奈々子ナ

たばかりです

いて尋ねて來たの

『ぢやあ、別れてお了

『瑞枝さん、僕とあの女性

すつてゐるやうですね。僕は是非一度

つてゐました。あなたは、僕があの女性と結婚したのだと思つていらしつたのでせう？』

『さうぢや無かつたんですの？』

『さうぢや無かつたのです。あの女性と結婚したのは僕で無い外の男だつたのです。』

『外の男？』

瑞枝の眼は大きく大きく睜られた。

『非常に複雑な事情があつたのですよ。ある期間、僕は奈々子と一緒にくらしてゐた事もあるにはあつたのですが、併し、それは結婚ぢやあ無かつたのです。』

『まあ！　私にはわかりませんわ。』

『わからないのが當然です。だが、あなたにだけは本當の事をお話したいと僕は思つてゐました。』

『話して下さいましな。ねえ、伴さん、何うぞ私に話して下さいましな。』

瑞枝は思はず廉吉に取りすがるやうにして、

『こゝでは、あれですから、何處かへ行きませう。そして、どうぞ、話して――話して下さいましな。』

廉吉は躊躇した。今は、そんな過ぎ去つた事を語つてゐられる場合では無かつた。それだけの餘裕は、廉吉の心には無かつた。だが、さうして口を切つた以上、瑞枝の要求を拒むわけにも行か無い氣がした。

『あちらへ行きませう。あちらでお茶でも頂きながら、私、お話をうかゞひ度いわ。』

瑞枝は否應云はせぬといふ調子で、引き立てるやうにして歩き出した。廉吉もあとについて歩き出さないわけには行か無かつた。

瑞枝は、その同伴者の事は全然忘れてゐた。閑却されてしまつた康夫は、少し離れたところから眼を光らして、先刻からの二人の樣子を眺めてゐたが、二人が歩き出すと、

『何あんだ！』

と口の中で呟いて、一寸の間ぼんやりしてゐたが、何を思つたか、のこ〳〵と二人のあとに跟いて歩き出した。

同じ建物の地階にある珈琲店の、壁に添うた隔席に、二人は對ひ合つた。

『瑞枝さん。僕は、あなたには濟まないと思つてゐるのですよ。いつか一度、あなたにお詫びをする機會を得度いと、長い間僕は待つてゐたのですよ。』

眞面に對ひ合ふと、廉吉は、しつとりとうるんだ眼で、改めて瑞枝を見直すやうにして心からの言葉で云つた。

『いゝえ、そんな事は――もう、過ぎ去つた事で御座います。』

『僕を許して下さいますか？』

『あら、そんな事は――。』

と、瑞枝は、卓に顏を伏せて、

『私、正直のところ、お恨みして居りましたの。憎い方だとさへ思つてゐました。でも、かうしてあなたのお顏を見たら、恨みも憎みもみんな消えてしまひました。』

『いや、僕は、あなたからは、どんなに恨まれても憎まれても仕方の無い人間です。僕は、あなたの事を思ひ出すと、いつも胸が痛みました。』

『本當に、そんな風に思つて下さいまして？』

『あなたの事は、僕の心臟の蕀だつた。瑞枝さん、僕は隨分あなたを苦しめた。だが、僕だつて苦しんだのですよ。いや、今も苦しんでゐるのです。僕が些とも幸福ぢや無いと云ふ事は、僕の顏を見ただけでおわかりになるでせう。』

『えゝ、それはわかりますわ。――だから、どうぞ、私に話して下さいましな。私、かうして久振にあなたにお目にかゝつて見ると、一番はじめにお目にかゝつた時のやうな氣持になつて來ますの。一番はじめ、お目にかゝつた時は、死んだ兄さんのやうな――死んだ兄さんが、もう一度生きかへつて、來て與れたやうな、そんな氣がしました。私は、どこまでも、その氣持で妹としてあなたをお慕ひしてゐれば宜かつたので御座います。私、これから、その時分の氣持になつて、もう一度あなたと御近づきにして頂き度いんですの。だから、あなたもそのお積りで何も彼も私に話して下さいましな。』

『さう思つて下さいますか？』

『えゝ。私もう結婚してゐる身なのですし、さう思ふ外に、思ひやうが無いぢや御座いませんか？』

瑞枝は淋しく笑つて見せて、

『どうぞ、私を妹にして下さいましな。さうして下されば、私、これから、すつかりいゝ子になつちまひますわ。』

『あなたが、その氣持になつて下されば、僕も、どんなにらくになるか知れませんよ。』

『妹だと思つて、お話して下さいましな。』

と、瑞枝は促すやうに繰返した。

『ぢや、聞いて頂きませう。お話したら、あなたは僕の馬鹿さ加減に呆れておしまひになるでせうよ。』

廉吉は然う前置をして語り出した。

瑞枝は、廉吉の話を、一語ものがさずに、どんなかすかな言葉の陰影をも捕へ餘さずに、熱心に聞き入つた。時々『まあ！』と間投詞を挿んだり、深い溜息を吐いて見せたりしながら――。

『さうでしたの？　そんな事とは、私、些とも知りませんでしたわ。』

一通り聽き終ると、瑞枝は、抑へかねた感動に、聲をのゝかして、

『ぢや、奈々子さんのお宅の方でも、奈々子さんがあなたと結婚してゐるのだと思つていらッしやるのですわね？』

『然うなんです。――いづれ、すべての事を知られる時が來る、いや、此方から、打明けなければならぬと思つてゐたのですが、樺山との關係がそんな風になつてしまつたものですから、打明けるにも打明けやうが無かつたのです。僕が知らないうちに、奈々子が家へ戻つてでも居るかと、それをせめてもの氣休めにしてゐたのですが――。』

『それで、お父様が御病氣で、お邸から呼びにいらしッたんですのね？』

『然うです。明日にも、奈々子を探し出して、邸へ伴れて行かなきやならんのですが、たゞ、このダンス・ホオルに出てると聞かされただけで、住所がわからないのです。』

『わけはありませんわ。ホオルの支配人に聽けばわかりますわ。』

『さうでしたね？』

廉吉は急に顏色を明るくして、

『さうでした！　そんな事に氣がつかないなんて、僕もずゐ分迂濶でしたよ。』

『私、訊いて來て上げますわ。――こゝでは、笛子さんとかッて云つていらッしやるやうですけど、本當のお名前は奈々子さんと云ふんですわね。お苗字は？』

『樺山、でなければ青江――。』

『訊いて來ますわ。』

云ふと同時に瑞枝は立ちあがつた。そして扉から出て行つた。

しばらく經つてから瑞枝は戻つて來た。

『さういふ人は居無いと云ふんですの？　でも笛子さんッて名で出て居る人なら、初瀬三四子ッて人で、その人の住所はわかりました。吃度、本當のお名前は隱して出ていらッしやる

のね？』

『然うでせう？　多分。で、住所はわかつたのですね？』

『えゝ、わかりました。これから直ぐにいらツしやらなければいけないわ。』

『行きます。いや、ありがたう！　ありがたう！』

瑞枝は急き立てるやうに云つた。

と、廉吉は急に勇み立つて、

『それで、一體、何處なんです？』

『こゝなんですの。こゝからは直ぐでせう？』

瑞枝は、住所を書きつけた紙片を廉吉に渡して、

『私、その邊まで御一緒にまゐりますわ。』

と、廉吉と一緒に立ちあがつた。

瑞枝が、廉吉と一緒に出ようとすると、

『瑞枝さん！』

呼びながら近づいて來たのは康夫だつた。康夫は、先刻から、少し離れた卓に陣取つて、二人の會話に耳を傾け、二人の樣子に眼を光らしてゐたのだつた。

『おや、あんた、未だ居たの？』

瑞枝は、冷やかな侮蔑的な調子で云つた。

『何處へ――何處へいらツしやるんですか？』

康夫は、廉吉の方へ横眼を呉れながら不平らしく云つた。

『何處へ行かうと、あんたなんかの知つた事ぢや無いのよ。』

叩きつけるやうに瑞枝は云つた。

康夫は、憤然として、

『此の方はどなたです？』

もう一度廉吉を見ながら云つた。

『紹介して呉れと仰有るの？　あんたなんかに紹介して上げるには勿體無さ過ぎる方なの。伴さん！　あんた、此男御存じ？』

『いや――。』

廉吉は面喰ひながら答へた。

『勿論御存じ無いわね。これは小ぽけな狼ですの。』

『え？』

『惡魔ですの。でも、尻尾のある小ぽけな惡魔よ。』

瑞枝は、憎々しげに康夫の顔を見た。

『何を――何を云ふんです？』

康夫は、憤るよりも、寧ろ呆氣にとられて瑞枝の顔を見上げた。

『ほ、ほ！　あんたなんかにはもう用は無いのよ。伴さん、さあ行きませう！』

瑞枝は廉吉を促して扉から出た。

康夫は、ぼんやりと、そのうしろ姿を見つめて、棒のやうに突立つてゐた。

『畜生！』

と叫んで、あとを追つて出た時は、二人はもうタキシに乘つて、青山の奈々子の寓に駛らせて居た。

『私、心配なんですの？』

と、瑞枝は、タキシの上でわなゝいた。

『その奈々子さんて方には、悪い奴がついてゐるらしいんですの。』

『悪い奴が――？』

廉吉は、とむねをつかれながら問ひ返した。

『無事にゐて下されぱいゝけど――。』

『悪い奴ツて、どんな――？』

『私にも、はつきりとした事はわからないんですけど――。』

しかし、そんな會話のうちに、自動車はもう奈々子の寓――襟子が慌たゞしく出て行つたあとで、二三子が、途方にくれて、不安におびえてゐるその家のすぐそばまで駛つて來てゐた。

その夜・第五景

麻布の霞町の、表通りからはいくつもの横町を曲らなければ行けないやうな、ずツと引ツ込んだ、ところに大きな邸と邸との間にはさまれた家――その重田の家の客間では、重田と、二人の男とが、忍びやかな調子で語り合つてゐた。

二人の男――一人は、紺サアジの背廣を着た痩せた小柄な男で、血色の悪い顏に、眼だけがきら〳〵と光つてゐた。一人は、拳鬪家か何かのやうな逞しい身體に、よれ〳〵の紋付の羽織と、古びたセルの袴をはいてゐた。頰骨の高い赭ら顏の、しゆろ箒のやうに立つた髮の、右の生え際のところに大きな刀傷らしいものの痕があつた。年齡はどちらも主人と同年配の三十五六といふところらしかつた。

重田は、口元のあたりに、例のにや〳〵笑ひを浮べながら、靜かな調子で一とくさり說き終つてしまふと、

『――といふわけなんだ。それで、俺自身で、出向いてもいゝんだが、まあ、それにも及ぶまいて。出る幕になりや無論出るつもりだが、こゝんとこは、まあ、君達でやつて見て貰ひ度いんだ。』

異樣に赤い唇を、ぺろ〳〵と舌の先で舐め廻しながら、二人の顏を代る〴〵見た。

『そのくらゐの事はお茶の子さいさいだ。宜うがす！　僕等二人で引きうけませう。』

と答へて、肩を搖つたのは、和服の方だつた。

『ところで、どのくらゐ吹ツかけたもんでせうな。』

背廣の小男が、皺嗄れた聲で云つた。

『青江欽藏と云やあ、長者番附にも載らうツていふ大ブルジョアだからな。尤も、近頃、大分いけなくなつてゐるといふ事は聞いてゐるが――。』

と、重田は、右の手の人さし指を眞直に立てゝ見せて、

『少なくとも、このくらゐはものにしてくれなくちやあ――。』

『千――?』

和服が問ひ返した。

『馬鹿ア云つちやあいけない。もう一桁上だ！　青江と云やあ天下の富豪なんだ。その一人娘なんだ。リンディの小倅は、何十萬弗だつたかね?』

重田は叱りつけるやうに云つた。

『さうですとも！』

と、小男が云つた。

『さういふすばらしい玉なら、叩き賣つたところで、千や二千にやなりまさあ。』

『千や二千の代物ぢやあ無いんだ。全く、手離すのが惜しいくらゐなものだよ。』

『もう、よろしくやつてゐるんぢやあ無えのかね?』

と、小男はにや／＼として、

『相變らず凄え腕だ。――ところで、その代物つてのあ、何處にしまつてあるんですかい?』

『こゝにゐるのだ。』

『へえ?　こゝに?』

『二階にゐる。二階で寢てゐるよ。すつかり醉ツちやつてね。だが、もう醉ひもさめる頃だ。少しうたはせなきやなるまいよ。』

重田は、煙草のけむりを、眼尻をしわめて見つめながら、

『ぢや、明日の朝早く――九時頃まで來て呉れ。それまでに、君達に持つて行かせるものをこしらへて置く。』

『持つて行かせるもの?』

和服の方が問ひ返した。

『君達が、手ぶらで行つたつて、どうもなるまい。女の手蹟で、手紙を書かせて置くよ。それを持つて行くのだ。それで、素直に應じなけや仕方が無い、小指を一本宛切つて持つて行くんだな。』

冗談半分に――冗談半分にしろ、怖ろしいことを平氣で云ふ重田だつた。

『なるほど、さうすりや、間違ひツこなしだ！　ぢや、明日の朝、九時までに――。』

和服の男が立ちあがると、背廣の方も椅子を離れながら、

『だがね、柴田さん。』

と、硝子玉のやうに冷たく光る眼で、重田の顔を眺めて、

『明朝になつて、へんに氣が變つたりしちや困りますぜ。急に、手離すのが惜しくなつたりしちやあ――。』

ひやかすやうに、にやりと笑つた。

『は、は！　何ともわからないよ。』

『そりやあいかん！』

和服の方が、幅の廣い肩を一とゆすりゆすり上げると、

『何うですい？　代物を、此方へ預かつて置きませうか？』

『馬鹿を云ふな！　それこそ――それこそ、あぶないもんだ！　は、は！　大丈夫だ。大丈夫だ。』

『本當に大丈夫ですかい？』

と、背廣の方が、

『それにしても、一寸、拝ませて貰ひ度いもんだな。』

『いかん！　今夜はいかんよ！』

重田が手を振つて見せると、背廣はにやりと笑つて部屋を出た。和服もつゞいて出た。

重田は、送り出しもしないで、新しい烟草に燐寸を擦つた。そして、うまさうにそれを吹かしながら、得意らしい微笑を浮べた。彼はその計畫が案外易々と成就しかけて來たことを考へて、すつかり悦に入つてゐた。彼の甘言が百パアセントの効果

をあげ、無邪氣な奈々子は、絶對の信頼を以て、彼に自分の身の上を洗ひざらひ打明けた。奈々子が、大ブルジョアの青江家の一人娘であると知つた時、重田の胸に浮んだのは、リンドバアクを脅迫したあのアメリカのギャングのやり方だつた。奈々子をしつかりと人質に抑へて置いて、青江家から金を強請らうといふその惡辣なたくらみも、重田が、それ迄爲し來つた數多くの惡行にくらべれば、殆ど家常茶飯事と云つてもいゝくらゐのものだつた。

今日は、奈々子をさそひ出して、横濱の方へ伴れて行つたりして、一時間程前に歸つて來たところだつた。

遲くなるから、といふのを引止めて、それと無く薦めた一杯の飲みもの――その飲みものゝ不思議な効果が、今、奈々子を二階のベッドの上で前後不覺に眠らせてゐるのであつた――。

その夜・第六景

重田は、椅子から離れると、二階へのぼつて行つた。そこも洋室になつてゐた。洋服簞笥なども置かれてある重田の寝室で、一方の壁際に据ゑられたベッドの上には、上衣をとつたまゝの奈々子が生ける屍となつて横たはつて居た。ハイヒイルの可愛い靴が、片方の足からすべり落ちて、ベッドの脚の傍にころがつてゐた。傍卓の上の置電燈の蓋に漉されたほの紅い光が、昏々と眠り入つてゐる奈々子の顔を、ほの白く浮べてゐた。小さい唇が半ばひらいて、閉ぢられた眼の、睫毛のかげを下瞼に刷いて、その顔は西洋人形のやうに美しかつた。

　重田は、傍に立つて、じつと、その寝姿を打戍つた。

『何も知らずに眠つてゐる。は、は、たあいのないものだ。』

　重田は心の中で云つた。獲物を前にした猛獸のやうな鋭い慘忍な表情がその顔にあらはれてゐた。――重田は、先刻、魔酒の酔ひに意識を失ひかけた奈々子を、階下からこゝへ擔ひあげる時の、その嫋かな肉體の感覺を思ひ浮べた。激しい食慾が、全身の血の中に燃えあがつた。彼は、身を屈めて、そのぐつたりとした奈々子の肩に兩手をかけた。そして抱きあげるやうにした。

　奈々子は眼を開いた。空洞なやうな力無い眼に、ぼんやりと重田の顔がうつつた。まだはつきりと意識を取戻す事は出來無かつた。半ば、夢のやうな氣持だつた。

　その夢のやうな氣持の中に、ぱッとひらめくものがあつた。

『何人？　何を――何をするの？』

　奈々子は譫語のやうな調子で訊いた。

『僕ですよ。酔ひが覺めましたか？』

『あ、柴田さん！　――こゝは何處？』

『僕の家ですよ。』

『あら、あら！』

と、奈々子は叫んだ。

『私、すつかり眠つちやつて――歸らなきやならないわ。』

　奈々子はベッドを飛び降りようとしたが、身體が思ふやうに動かなかつた。そして、氣がついて見ると、重田の兩腕でしつかりと抱き寄せられてゐた。きら〳〵と異樣に輝く眼に、無氣味な笑ひを浮べて近々とさしよせられた重田の顔が、惡夢の中のもの〻如く、睫毛とすれ〳〵にクロズアップされてゐた。

『柴田さん、どうするのよ？　あら、あら――柴田さん。』

　奈々子は一生懸命にもがいた。

『あら、あら！』

半ばは、怖ろしい惡夢にうなされてゐる氣持で、奈々子は叫んだ。叫びながらもがいた。しびれるやうに動かない手足を、じたばたと動かして、それでも力の限り、せい一ぱいに抵抗した。

必死にもがいてゐるうちに、奈々子はベッドから滑り落ちた。同時に、重田の手から自由になると、半ばは轉りながら室の隅に逃げて、よろめく足を踏みしめて立ちあがつた。

『何をするんです？ 何をなさらうといふんです？』

奈々子は、肩で喘ぎながら、火のやうな眼で對手をにらんだ。いくらか頭がはつきりして來た。そして、此の場の事態が混亂した頭の中にも、少しづつ現覺されて來た。

『は、は、は！』

重田は――今まで、物も云はなかつた重田は、はじめて冷たい聲を立てゝ笑つた。

『ひどい人！ 何をなさらうツて云ふんです？』

『何にもしやしませんよ。――あまりよく眠つていらツしやるんで、今、一寸來て見たところですよ。』

『でも、今、あなたは――あなたは――。』

『僕が何かしましたか？ ――僕あ、何もしやしませんよ。あんた、何かへんな夢でも見たんぢや無いですか？ 大へん、うなされてゐたやうですがね？』

重田は、けろりとした顏で云つた。

さうだつたのか知ら？ 夢だつたのか知ら？

奈々子は一寸思ひ惑うた。

『夢ですよ。夢を見たんですよ。』

『夢？』

『さうですよ。あんたは大へん、うなされてゐましたよ。』

何が夢なものか？ ――奈々子は、すつかり相好までも變つてしまつた重田の、その異樣な眼の輝きと、無氣味な微笑とを見ると、はつきりとすべての事實を了解した。

『惡黨！』

奈々子は身を慄はして叫んだ。

『は、は！ そんな惡黨でも無いんだが――。』

『惡黨だわ！ 惡黨！ 惡黨！』

『それにお氣が附きましたかね？』

『私を一體どうしようツての？』

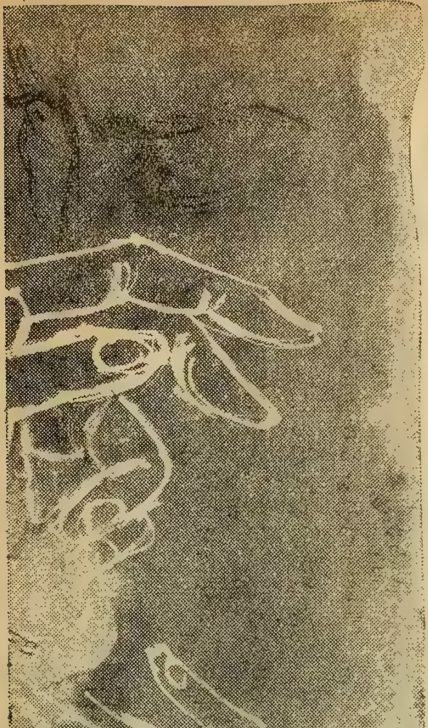
『別に何うもしませんよ。』

言葉つきは、相變らず慇懃だつた。

『歸して下さい！ 歸して！』

『歸すわけには行きませんな。』

『人を呼んでよ！』
『近所は遠いし、階下には婆さんが一人居ますがね。婆さんは、忠實な見張り役ですよ。』
『それで、私をどうしようツていふの？　私、へんな事をしたら、舌を嚙み切つて死んぢやふから！』
『いや、僕もこれで淑女に對する禮儀はいくらか心得てゐるつもりです。あなたがお可厭だといふ事は、愼む事にしませう。だから、まあ、安心してそこへお掛け下さい。』
重田は、椅子を指して見せて、
『明日になつたら歸してさしあげます。歸してさしあげますが、その代り、私の方にも一つお願ひがあるのですよ。』
『何です？　それは――。』
『なあに、わけも無い事ですよ。ごく簡單な事なんです。一寸お待ち下さい。』
重田はさういふと部屋を出て行つた。此の間に逃げ出さうと、奈々子は扉の方へよろめき寄つたが、出て行く時に鍵をかけたと見えて扉はびくともしなかつた。
窓を打破つてでも――と、窓帷を引寄せて見た時、重田はもう部屋へ戻つて來た。
『は、は！　仲々、逃げられやしませんよ。』



重田は嘲るやうに笑ひかけて、
『惡あがきをなさらないでも、明日になれば歸してあげます。歸してあげますから、私の云ふ事を一つ肯いて下さい。』
云ひながら、二三枚の書簡箋と、萬年

筆とを、小卓の上にのせて、
『何でも無い事なのです。手紙を一本書いて下さればいゝのです。』
『手紙を――?』
『さうです。ほんの二三行でいゝのですよ。文句は私の云ふ通りに書けばいゝのです。まあ、その萬年筆をお持ち下さい。』
奈々子は何の意味ともわからなかつた。が、兎に角、卓に向つて、ふるへる指先に、萬年筆をとりあげた。
『私の云ふ通りに書くのですよ。えゝと、(父上様)――と先づお書き下さい。』

仕方が無かつた。奈々子は、さう書いた。
『書きましたか? ぢや、次に斯う書いて下さい。(私は、今、

怖ろしいワナに陷ちてゐます。此のワナから救はれる方法はただ一つしかありません。それは此の手紙を持參する者の要求を、卽座にお容れ下さることです。）――。』

　重田は、ゆつくりゆつくりと言葉を刻んで、

『どうです？　書きましたか？』

だが、奈々子のペンは、中途で動か無くなつてゐた。

『書けませんか？　ぢや、もう一度云ひませうか？』

『要求ツて――あなたは、何を私の父に要求なさるおつもりです。』

『さあ、それは、こゝでは申上げられませんし、又、あなたとして訊く必要の無い事だと思ひますね。』

『それを聞かなきや、私、書けません。』

『どうして書け無いのです？』

『惡黨！』

と、奈々子は、強く叫ぶと、萬年筆を床に叩きつけた。

『亂暴をなすつちや困りますよ。』

　重田は、床に轉つてゐる萬年筆を拾ひあげて、

『その手紙を書いて下さらないと、歸してあげるわけには行きませんな。どうしても書くのがお可厭だと云ふんなら、仕方が無い、別の手段をとるばかりですよ。』

『この手紙を書けば、今夜、直ぐに歸して呉れるんですか？』

『今夜直ぐにといふわけには行きませんよ。いづれにしても今夜は、こゝにお泊めしなければなりませんな。』

『ぢやあ――ぢやあ、同じ事だわ！』

　奈々子は叫ぶやうに云ふと、

『可厭だ！　私、書かない。』

　強く首を振つた。

『困りますね。それが書けないとすると、いつまでもお歸しするわけには行きませんよ。』

『惡黨！　惡黨！』

　泣きながら、奈々子は叫んだ。

『は、は！　又、惡黨ですか？』

『惡黨！　惡黨！』

『は、は、は！　惡黨の安賣ですな。尤も、あなたが、いつまでもこゝにいらツしやり度いと云ふんでしたら、そんな手紙をお書きになるには及ばんですよ。いや、正直のところ、僕も、あなたを何處へもやり度く無い氣がして來ました。どうです？　僕と、末長く一緒に暮らして見る事になすつたら――。なるほど、僕は惡黨には違ひ無いのですが、愛する者に對しては、此の上もなく親切な男ですよ。僕は事實、すつかりあなたにチヤ

アムされてしまつたのです。全く奈々子さん、あなたはかあいいですな。』

重田は、その眼に、好色的な色を浮べて、そろ〳〵と奈々子の方に歩み寄り、奈々子の肩に、その蜘蛛の脚のやうに細長い指をのばしかけた。

『何をするんです！』

と、奈々子は飛び退いて、一生懸命に睨みつけたが、そのじり〳〵と燃え迫つて來る眼に射すくめられて、わな〳〵と身をわなゝかしながら、

『何人か――何人か來て！ 何人か來て！』

と、我を忘れて叫んだ。が、窓の外には、荒々しい風が闇を掻き亂して吹き荒んでゐるだけだつた。

その時、階下の玄關脇の小部屋では六十ばかりの老婆が、こくりこくりと居ねむりをしてゐた。

それは、ごましほになつた髪の、澁紙をもみくちやにしたやうな顔の、小柄な婆さんだつた。

時々、二階の物音に眼を覺ましては、一寸耳をすますやうにして、奇妙な笑ひを、齒の一枚も殘つてゐない、それ故、巾着の口のやうに見える口元にうかべた。――もう長く重田に召使はれて、重田のする惡事の數々には馴れ切つてゐたから、今、二階で行はれてゐる事が何であらうと、そんな事に心を動かす風は無かつたが、でも、叫び聲や泣き聲がきこえて來ると、

『やれ、やれ――』

とつぶやいて、

『なまいだ、なまいだ。』

などと糊を嚙むやうにくりかへして、そのまゝ又、こくりこくりと眠り入るのだつた。

突然、入口の扉が明いた。老婆はびつくりとして出て見ると、襟卷で顔の半ばを包んだ若い女がそこに突立つてゐた。

『柴田さん。いらツしやいますか？』

低い、しかし、鋭く迫るやうな聲だつた。

『へい。お留守で？』

『お留守？』

女は、きらりと眼をきらめかすと、

『お留守ぢや無いでせう？ 二階にゐるでせう？』

『いんえ。お留守で。あなたはどなた樣で？』

『案内して頂戴。私、至急、重田に――柴田に會ひ度いのですから。』

『お留守でございますよ。へい。』

對手の權幕に氣壓されたやうに老婆が、おど〳〵として答へた時、二階の方から悲鳴に似た聲が聞えて來た。それを耳にすると、女は、いきなり上へあがつて、さゝへようとする老婆の手をするりと摺りぬけて廊下へ歩み入つた。そして、階段の上り口を見つけると、白足袋の底をちらちらと、一散に上へ走りのぼつて行つた。そのあとを老婆は、ひきがへるが這ふやうにしてのぼつて行つた。

『お開け！』

女は、どん〳〵と扉を打叩いたが、鍵が下りてどうしても明かないのを知ると、かう老婆に云つた。

『そんな、あなた亂暴な――。』

と老婆は、扉の前から女を押しのけようとしながら、

『他のうちへあがつて來て――そんな、まあ、亂暴な！』

『鍵を持つて居るでせう？　お開け！』

女は、慌たゞしい中にも、へんに落着いた調子でもう一度斯う命じると、

『開けないのかえ？　これを御覽！』

女は手をあげた。その手の先にきらりときらめくものがあつた。

『ひえゝ！　開けますよ。開けますよ。』

『早く――早く、お開け！』

『まあ、待つて下さい。鍵を――下から鍵を――。』

そんな押問答のうちに、扉は中から明けられた。同時に、

『何人だ？』

といふ重田の聲がした。女は、扉の隙間から素早く身體を滑りこませると、

『私よ。重田さん！　襟子よ！』

『や！　襟子。』

『ほ、ほ！　矢張、あんただつたのね。』

襟子は、氷を碎くやうな聲で笑つた。　（つゞく）

今一番人氣のある
キングレコードで
いよ〳〵『未來花の歌』發賣
作詩は詩壇の巨匠西條八十氏、作曲は專屬田村しげる氏の大力作。

（田村しげる氏）

日活映畫『未來花』主題歌
未來花の歌……………渡邊光子
千夜子の歌……………丸山和歌子
▲レコード番號K二二四　▲各蓄音器店に有り

ユーモアコント

煙草は御遠慮

岡田三郎

西原勇吉君は、上野、櫻木町間の省線電車の車掌であつた。

西原君は健康で、朗かな精神の持主であつた。日日の勞務によろこんで從事し、少しも倦怠の色を見せることなく、乘客の誰に對しても親切をもつぱらとした。

が、西原君は、車内で煙草を吸ふ客に對しては、常にいきどほりを感じ、睨みつけるやうにするのであつた。あれほどいつもは、物柔かな態度で、慇懃な物の云ひかたをする西原君ではあつたが、煙草を吸ふ客に對する時は、まるで別人のやうに、頑固一徹な、激しい氣性の人間になるのであつた。そのために、客と隨分口論をすることもあつた。煙草を御遠慮下さいと掲示してある以上、その掲示を無視して喫煙をする客を咎めるのは、車掌としての義務であると考へてゐるからであつた。それだのに、あべこべに、いらないおせつかいだと云はんばかりに、けんつくを食はすやうな客があるのには、西原君は腹が立つてならなかつた。

『まあ勘辨してくれたまへ、車掌君、僕はね、どうも人なかに出ると、煙草をふかさずにゐられないもんだから、……』

こんなことを云ふ客もあつた。如何にもにこにこして、人のよささうな人物なので、西原君はがみ／＼叱りつけるわけにもいかず、と云つて、そのまゝひつこんでしまふことも出來ず、思案の末に、かうきりだした。

『それではお客樣は、まあ云はば、喫煙病と云ふやうな病氣を、持つてゐらつしやるわけですね？』

『さうさう、喫煙病とは、うまいことを云つてくれた。病氣ではどうも、仕樣がないですからね。』

客は得意になつて、わざとこれ見よがしに煙草をぷかぷかと吸ひつづけた。

『しかしですね、ほかのお客樣がたに迷惑をかけるやうな病人や、醉漢、――つまり醉つぱらひやなんかは、乘車をお斷りすることになつてゐるんです。あなたのやうな病人も、他人の迷惑になりますからね、降りていただかなければなりません。』

『なんだつて！　僕を病人だと云ふんだね！　失敬な！』

その客は座席から立ちあがつて、西原君をぐつと睨めつけた。

『規則を楯にとつて、あまり人を小馬鹿にしたやうな、けんぺいづくのことは云つて貰ふまいよ。降りるなと云つても、降りてやるよ。この次で僕は降りるんだ。ざまあ見やがれ！』

ちやうど電車は停つた。客は振りかへり振りかへり、西原君に嘲笑をあびせながら、プラットフォームに降りて行つた。

西原君は癪にさはつてならなかつた。電車が動きだしても、いつまでもドアの硝子から外ばかり眺めてゐた。あの男に負かされたやうな氣がして、口惜しかつた。車掌と云ふ職業をいやになつたのは、その時がはじめてであつた。

どうしたなら、車内で喫煙するやうな不德漢を、懲らしめてやることが出來るだらうと、西原君はそれからと云ふもの、暇さへあれば考へつづけた。荒々しい言葉をつかつて喧嘩口論をするやうなこともなく、あつさりと降參させてしまふやうな手はないかと、毎日毎日西原君は頭を惱ました。

或日のこと、蒲田で乘つた中年すぎの洋服の客が、座席につくと、眼鏡をふきなほし、新聞をひろげ、いざ讀まうとするやうな恰好をしたかと思ふと、それをよして、ポケットを探りはじめた。西原君は直覺した。あれは

きつと、煙草を吸ふぞと思つた。さう云ふ人物にかぎつて、ほとんど無意識的に、習慣的に、どんな場所でも喫煙するものだと云ふことは、永年の觀察で西原君には解つてゐた。

案の定その客は、ポケットから朝日を出して吸ひつけた。西原君は、わざと見ない振をしてゐた。電車はやがて大森驛に着いた。ドアは開いた。

『あの、お客樣、ちよいと申上げたいこ

とがありますんで、失禮ですが、……』

かう云ふと、西原君は何氣ないやうに見せかけて、客をうながしながら、プラツトフオームに降りた。客も何事であらうかと、西原君のあとについて降りたが、そこでまたすぱりと煙草をふかした。

『どうぞ御遠慮なしに、充分煙草をお吸ひ下さい。』

笑ひながら西原君は云ふと、咄嗟に車内に乘込み、合圖をした。ドアは閉ぢ、電車は動きだした。車外では、置き去りにされた客が、手にした新聞を高くあげて振りまはし、何だか喚いてゐるやうであつたが、それなりにすうつと、うしろへ消えて行つてしまつた。

車内の乘客達は、申合せたやうにどつと笑ひ囃した。西原君は出來るだけ嚴肅な顔をしてゐようと思つたが、色々なことが耳にはひつて來るので、つい釣りこまれて微笑を浮べずにゐられなかつた。

『あの車掌さん、なかなか頭がいいぞ。』

『たしかに出世するよ。』

『置きざりを食つた、あの親爺の、あわてふためきやうはどうだ！』

『あれはきつと、うつかり者で、何のために外へ出されたか、まだきつと氣がつかずにゐるかも知れんね。』

『客を咎めるにも、ああ云ふ婉曲のやりかたが一等だ。感心したね。』

『えらい車掌さんだ。』

西原君は今日ほど、車掌と云ふ職業によろこびを感じたことはなかつた。

思案にすぎて　京太郎

のらくろ伍長曰く

みなさん！

ボク……のらくろ伍長から報告致します。

今度突然僕に無二の親友が出來ました。それは兎君です。

彼は實に愉快です、朗らかです、とても奇抜で大人の皆さんでも一目見たらアッと驚いてすぐ大好きになります。特に皆さんのお子様方が熱狂します。それは僕保證し

皆様！御存じですか？

本誌の姉妹雜誌『婦人倶樂部』は近頃實に評判です、毎月次々と送り出す巨彈！大奮發の大附錄は何れも素晴らしい發展です、四月號の如きは實に婦人雜誌界の新記錄をつくるといふ大賣行です、これも本誌愛讀者皆様の御應援のお蔭と感謝に堪へません。

五月號は又々左のやうな素晴らしい大計畫です

第一別册附錄

和裝洋裝流行の一切見立カード

これは帝都五大デパートが全部參加して絢爛たる壯觀です、しかも和裝、洋裝、服飾品一切を網羅してその選び方、見分け方その他この種の知識が何でも分る御婦人方には是非必要なものです。此の計畫は恐らく雜誌界の革命と云つてもよい新計畫です。

ます。これは僕同樣田河水泡先生の奇拔な筆で大判二色刷といふ何處でも三十錢以上はするとても素敵な繪本です、それを婦人倶樂部では、『お子樣のためのお土產附錄』として皆樣に無料で差上げるといふのです。實に僕婦人倶樂部の愛讀者のお子さんや弟妹の方は幸福だと存じます。兎に角婦人倶樂部の五月號を一度御覽下さい！そしてお子さんや弟妹の可愛い方は是非お求めになるやうおすゝめ致します。報告終り。

第二別册附錄

お子樣方へのお土產繪本

これは上欄でのらくろ伍長が報告してゐる通り、お子樣や弟妹方大喜びのものです。これも亦婦人雜誌界の革命的新計畫です。

第三別册附錄

美人になる急所

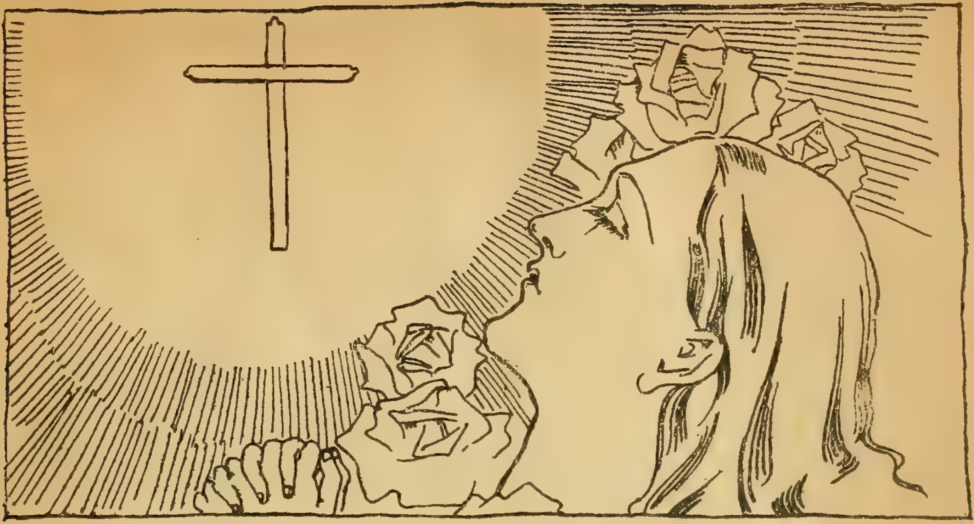
これは題の通り美人になる急所、お化粧、美髮、着付、身體のこなし方一切を公開した御婦人必携の懷中讀本です。

この三大附錄つきで定價は平月通り五十錢です

日本一安い雜誌です、是非實物を一度御覽下さい!!

更に堂々たる讀物欄を御覽下さい何れも本年の小說界を代表する大傑作です

明麗花　菊池寛
月よりの使者　久米正雄
女の友情　吉屋信子
新婚競技　辰野九紫
長兵衛手毬歌　長谷川伸



西 洋 講 談

愛の復讐

天狗太郎

嶺田弘畫

美姫の客死

可憐な八木枝孃が義理ゆゑひそかに倉平を伴つて須秘豹城を出奔いたしましてから幾日目かのことでございます。病める菊耶姫を擔床に乘せましたる雉子彦、熱心に看護をつゞけながらだん〳〵と日數を重ねて城下に近附いてまゐりました。

たゞ、心配なことには、どうにもその菊耶姫の容態がよろしくない。龍九郎のために捕はれの身となつてからこの方、長い間の怖しい思ひ、悲しい思ひに小さな胸は亂れに亂れて、もうとツくからものゝ判別がつかなくなつてゐるといふ哀れな有樣。おまけに雉子彦や滿都彦が自分を

救はんためとは露ほども知らず、何ものか白刃を拔き翳して斬込んで來たといふことにいたく驚きまして、それ以來ずッとはげしい發熱をつゞけてをります。

恰度、須秘豹城まで後半里といふ手前。菊耶姫の容態はいよ〳〵惡くなりまして、なんとなく危篤が迫つて來たらしく思はれる。せめて父虞蘭土伯に無事な姿を一目でもと、心の中では急ぎに急いでをりました雉子彥も、もう强つてはすゝめない。詮方なく、一時野生の梨の木の下に休息いたしました。

折りしも時刻は眞晝時。陽は暖く靜かに照し、梨の木の枝があるかなしかの風に戰いでをります。昏々と擔床の中で眠りつゞけてをりましたる菊耶姫、草刈りに出掛ける女どもが野のあちこちで鎌を研ぎはじめた物音にふッと眼を覺しまして、

「まア、いゝ花の匂ひだこと！」

と獨語。今までの熱に浮された調子とは違ひ、どうやら正氣に返つたらしい聲音でございます。

はじめてそんな聲を耳にいたしました雉子彥、はッとばかり胸を轟かせまして、

「菊耶姫！　菊耶姫！」

擔床を覗込んで呼掛けますると、ぱッちり眼を瞠いた菊耶姫。雉子彥を瞶めて嬉しさうな笑をにッこり浮べ、

「雉子彥さま……！」

差出す兩手も力なくばつたり落ちる。雉子彥は我を忘れてその菊耶姫を胸に抱緊めました。

「おゝ、菊、菊耶姫！　氣が、氣が着いてくれたか？……神さま、有、有難うございまする！」

「それではあなたも、まだこのわたしを忘れずに？」

「何をいふのぢや。わかれてこの方、一刻も忘れたことはないわ！」

聞くに見る〳〵盛上つて來る二粒の眞珠のやうな淚。菊耶姫はつゞけて何かいふが、聲が低くてよくわからない。雉子彥は唇の傍に耳を持つて行きまして、

「え、え、菊耶姫、なんと？」

「花がよく匂ふこと……！」

『花がよく匂ふ？　見るとほりこゝは野原ぢや。須秘豹城はもう間近い。すぐに父上の許に連れてまゐるぞ。聞えるか。わかつたか？』

　さういひながらふと見て、雉子彦は愕然といたしました。菊耶姫の顏色は見る〳〵蒼く變り、玉なす冷い汗が額に滲出してまゐります。

『菊耶姫、苦、苦しいか？』

『何やら暗くなつてまゐりました！』

『えツ、暗くなつて來る？　これ、このやうに陽が照つてゐるのに……菊耶姫、しつかりしてくれ。頼む。もう一言、何かいうてくれ！』

　呼べば應へて脣は微かに動きまするが、もう聲はすこしも聞えない。たしかに雉子彦の名を呼んでゐるのでございます。

　と、この時、俄かに菊耶姫の痩細つた腕が布の下で震へだしました。最早疑ひたくも疑へない。悲しい臨終が來たのであります。

『こ、これ、菊耶姫、待つてくれ。今暫く待つてくれ。せめて須秘豹城へ歸り着くまで待つてくれ。お願ひぢや〳〵！』

　前後を忘れて半狂亂、雉子彦が聲を限りに叫びますると、その情が通じたものと見えます。菊耶姫は再び微かに眼を開きました。

『神さま、あゝ在天の神さま……！』

　深い絶望に聲を曇らせ、從者達までが擔床を取圍き、草に跪いて祈禱をはじめます。菊耶姫は笑を湛へてもう一度雉子彦を見、陽の光を仰ぎましたが、まもなく靜かに眼を瞑ぢてしまひました。それきり永遠の眠りに就いたのでございます。

鬱々として

　哀れ未來をかけて契る約束の、一世の美姫菊耶姫を失ひましたる雉子彦の落膽は言葉のほか。嘆いて

ばかりゐても詮方なく〳〵、亡骸を鄭重に柩に收め、傍で見る眼もしほ〳〵と歸城の途に着きました。
この報知を耳にいたしましたる城中では、驚きあわてながらも途中まで出迎へます。老臣家來はいふまでもなく、婦人連までがぞろ〳〵と附隨ふ先頭に杖に縋つた一人の盲目の老人。雉子彦は、一眼見るより愕然と走寄りまして、
『や、や、こは父上には……！』
いふまでもなく老人は虞蘭土伯。受難以來はじめての對面でございます。かね〴〵滿都彦、倉平等から話には聞いてをりましたが、まさかこれほどとは思はなかつた。雉子彦も一時は呆然としてしまひました。
かくては果てじと氣を取直し、菊耶姫の亡つた顛末を詳しく告げる。涙に咽返つた虞蘭土伯、やがて杖を動かして柩の傍に連れて行つてもらひたいといふ意を現はす。雉子彦がその手をとつて伴つてまゐりました。
暫くは無言のまゝ。次に虞蘭土伯は身を屈めて、左手でそろ〳〵と菊耶姫の顏を探る。自分の娘に相

違ないと確めると、亡骸の胸に兩手で組んだ十字の上に自分の手を重ね、見えぬ眼で天を振仰ぎました。

おゝ、切株ほどに殘つてゐる右腕も天を指してゐます。この時の父虞蘭土伯の祈禱！　必ずや在天の神の御心を强く動かさずにはおかなかつたでせう。女達は歔欷流涕し、雉子彦も地に倒れて泣きだします。

まもなく一同は柩を衞つて須秘豹城へ引返し、寺院の禮拜堂へ亡骸を据ゑました。幾百挺の蠟燭が點され、澤山の少女達は終夜讃美歌を合唱する。夜が明けてもまだ雉子彦の姿はその柩の前にありました。

ところが不思議なことが起つた。その晩から虞蘭土伯の手足が利かなくなりました。耳まで聞えなくなつたらしく、何を問うても通じない。仰向けに寢たまゝ、時々窪んだ瞼をあげては樂しげにこ〳〵し、誰かに話しかけるやうに唇を動かしたりするだけになつたのでございます。

この有様を見た雉子彦、菊耶姫を失つたことゝいひ、いよいよがつかりいたしました。たゞ、自分に代つて敵の捕虜となつてゐる伯父滿都彦のことを思ひ出し、取敢へず家臣の一人に償金を持たして出してやりましたが、後は氣が拔けたやう。もう天晴功名手柄をしたいなぞいふ希望もなくなりました。立派な武士になつてみたところで、悦んでくれるものがなくなつたからでございます。こんな思ひをするなら寧ろ死んだ方がましだなぞと考へて、欝々と日を送つてをります。

さうかうするうちにかなり日數は經ちましたが、どうしたことか伯父の滿都彦は一向歸つて來ない。そこへひよツくりと訪れてまゐりましたのが、積土の戰で一度は捕虜にした、十字軍の武士とはいへ盟友の羅留四郎。まづ菊耶姫の弔詞や虞蘭土伯の見舞を述べました上、獨逸へ遣した家臣がある城の牢屋へ捕はれの身となつてゐることを告げました。

『や、や、それでは伯父上の身の上も……？』

驚く雉子彦。羅留四郎は靜かに制して、

『いや〳〵ご心配召さるな。拙者、阿能人に對し、滿都彦どのの生命を奪へばこの羅留四郎が身代り、雉子彦どのに復讐されるであらうと申送りおき申した。萬が一にも刄を首に當てるやうなことはござりますまい！』

今に變らぬ羅留四郎の友情。それも捕虜となつたのを釋放されたお禮の意味ですが、雉子彦は感謝もし、ほツと安心もいたしまして――最早その上は、雉子彦自身で伯父滿都彦を救出しに赴くよりほかに方法はない。羅留四郎の勸告に從つて一應彌須大公殿下の添書をもらつて獨逸へ行くことゝなり、二人同道

して須秘豹城を出發いたします。

恰度、その頃、彌須大公殿下には、普露具といふ隣國へまゐられてゐる。二人が後を追うて首都に來ますと、思ひがけなく償金を持たせて獨逸にやつた家臣が現はれて來ました。驚きながら仔細を訊きますと、

『一旦は捕はれの身となりましたものゝ、拙者、償金の大部分は途中に埋めてまゐつたと城主を僞り、金を掘出すため二人の武士を伴ひ釋放され申した。計らずも殿樣とお眼にかゝり、この上の悦びはござりませぬ！』

『して、伴つてまゐつた二人の武士は？』

『多分今頃は海へ流れてゐるのでござりませう。水の底へ沈んでしまひました！』

とにツこり。償金の一部は奪はれたが、大部分はこの首都にゐる倉平に預けてあるといふ話に、雉子彦はいよ〱驚いて、

『なんと、倉平がこの土地にゐるとな？』

悲しみのために忘れてゐた龍九郎のことを思ひ出し、新しく復讐の念に驅られる。とまれ倉平がこゝにゐるとは不思議、早速呼びにやらせました。

女王樣かと

ほどなくやつて來た倉平。主人の顏を見るより嬉しさ悲しさ、何もかもごツちやにしてとんちんかんな挨拶をする。いろ〱話がありまして、雉子彦も龍九郎が縊れて死んだことなどをはじめて知りました。

『それにしても、汝は、如何なる用事あつてかやうな土地へまゐつてゐるのぢや？』

『はい、八木枝孃さまのお供をいたしまして……？』

『何をいふか、八木枝孃は故鄕にゐるではないか？』

『いえ、たゞ今では、この普露具大公妃殿下のお傍に仕へて一等のお氣に入りでござりまする！』

聞けば聞くほどいよ〱驚く雉子彦。八木枝孃が須秘豹城に於て虞蘭土伯を親身の娘も及ばぬほどに看護したと知つたのも初耳。非常に感激いたしましたが、それにしても積土の軍中で話さなかつたのは不審。いろ〱問詰めますので倉平も弱つて、

『えゝ、それやなんでござりませう。多分老殿樣がお話しなされたと思ひ、それで默つてゐたのでござりませう……！』

どうして八木枝孃がこゝにゐるかと申しますると、かつて以前にある僧正から大變な遺産を贈られてゐる。その遺産の監理者が普露具の首都の僧正だといふ關係上、須秘豹城を立退いた後の當てもなく辿り着いて身を寄せたといふ譯。大公妃殿下に

ます。

仕へるやうになつたのもこの僧正の推薦によるものでございます。

それはともかくとして、倉平は、今、獨逸方では、いろ〳〵政治的な意味でしきりと普露具大公殿下の機嫌をとつてゐるから、その口添へがあれば必ず滿都彦を無事に放還するに違ひない。それをするにはまづ妃殿下を動かすに限る。幸ひ八木枝孃のいふことは何事も快く聞入れてくれられる。會つて話せと熱心にすゝめます。二人を早く會はせたいからであります。

無論、雉子彥も八木枝孃を介して賴んだ方が便利だとは知つてゐますが、二人が會ふことはなつかしいやうできまりも惡い。ふと氣が着いて、

『いづれにしても、一先づ城中に伺候いたさう。羅留四郞どの、お仕度召され！』

すぐ樣用意を整へて城中に出掛ける。この夜は、恰度、首都の市長が各國の有名な武士達を饗應するといふので、雉子彥、羅留四郞の兩名もその席に列し、久振りで舊知の人々にも出會つて交驩をいたしてをりました。

そこへ普露具の大公殿下、妃殿下が連立つてお出ましになる。後方には數多の朝臣や、花かとばかり着飾つた侍女達が隨つてをり、あまりの華かさに眼も昏むくらゐ。何氣なく眩しさうにそちらを見遣つた雉子彥、思はずはツとなつて一歩後へ退りました。

といふのは、妃殿下の右手にすこし下つて一人の年若い美女。燦くばかりの嬋娟さ。どうやら見覺えのある顏でございます。

『はて、どう見ても八木枝孃そのまゝだが、他人の空似といふこともある。ひよツとしたら姬君殿下であるかも知れぬ。めつたに聲はかけられぬわい！』

とは口の中での獨語。實際、さう思つたのも無理はございません。金絲銀絲の刺繍をした上着を肩に、ふさ〳〵とした鳶色の髮の毛が流れかゝつて、まことに女王と見違ふほどの氣高さ。雉子彥は我を忘れてうつとりと見恍れてしまひました。

この間に順番が來て普露具大公兩殿下の前にすゝんで名前を言上し、挨拶を申上げる。すると姬君殿下と間違へたかの美女、雉子彥の顏を眺めてさも〳〵なつかしげにつこりいたしましたが、すぐに氣が着いたやうにはツとして俯向く。傍で見ると正しく八木枝孃でありまするが、言葉をかけることも出來ない。そのまゝ後方へ退りました。

その時喇叭が鳴つて、客分であらせられる彌須大公兩殿下の出御。妃殿下は、雉子彥の姿を認められると市長が挨拶に來たことも知らずに傍に驅寄られて、

『雉子彦どの、今更いうても返らぬが、みづからは菊耶姫が不憫でならぬ。亡つた時の樣子をば、後で詳しく聞きませう！』

と、鄭重なる慰めのお言葉。雉子彦も、また〳〵疵を抉られるやうな思ひ。崩折れるやうに妃殿下の前に跪いてはら〳〵と涙を流しました。

まもなく宴會がはじまる前の一しきりの混雜。この時、靜かに雉子彦の肩に觸れるものがあつて、

『雉子彦さま……！』

と、あたりを憚るやうなやさしい聲。振返ると八木枝孃でございます。

『雉子彦さま、お久しうございます。今のあなたのお嘆きは、きつと聖母さまが慰めて下さいますぞえ！』

涙含んで囁く八木枝孃。いふまでもなく菊耶姫への弔詞。雉子彦も感謝に滿ちた聲で答へました。

『有難う。眞心からお禮を申しまする！』

切なる愛情

その晩、宴會となつてからは、雉子彦は招かれて彌須大公妃殿下のお傍へまゐり、菊耶姫のことなぞをさま〴〵語りながら夜を更しました。八木枝孃も時々やつて來ては酌をしてくれましたが、どうも相手が宮廷の衣裳を纏つて女王のやうな樣子をしてをりまするので、昔のやうに馴れ〳〵しく打解けにくい。わづかに眼と眼を見合すくらゐで、わかれて旅宿に歸りました。

翌日、普露具の大公殿下は、彌須大公殿下歡待の意味で盛大な狩獵を催しました。雉子彦もそれに參列いたしますると──彌須大公殿下より火急のお召。傍近く招寄せて、

『その方の伯父滿都彦、十字軍のために捕虜となりをるとのこと。必ず統領に談判してやるによつて案ずるに及ばぬ！』

との有難い仰せ。これといふのは、前晩、大公妃殿下に事情を申上げて取りなし方を嘆願した結果でございます。雉子彦も一安心、勇躍して一騎歸途に着いた背後から忙しく迫つて來る蹄の音。どうやら自分の後を追掛けてゐる樣子。振返つて見ると──昨晩に變る凛々しい姿。八木枝孃でございました。

手綱を控へて待つまほどなく二人の馬の頭が駢ぶ。八木枝孃は懷中から普露具の大公妃殿下より獨逸統領に宛てた書狀を取出して、

『及ばずながら伯父さまをお救ひ申上げたいといふ一心からでございます。大公妃殿下から直々のお賴みゆゑ、まさか肯かぬこともございますまい！』

と手渡しする。八木枝孃も同じく心配して普露具の大公妃殿下に滿都彥の救助方を嘆願したのでございます。雉子彥は受取つて押頂いて、

『これはだん／＼と忝けない。拙者、生命ある限りはご恩のほどは忘れ申さぬ！』

『ご恩とは、どんなご恩でございます？』

怨めしさうな八木枝孃。雉子彥の橫顏をそツと見て、

『伯父さまはわたしには大切な養親。出來るだけのことをしたまで〵、何もあなたからそのやうなお禮をいはれる覺えはございませんわ！』

『いや、そのお心持が有難いと申すのでござる！』

『さう眞面目に仰有れば、わたしにはいよ／＼他人のやうに思はれて……今度のことでもさうでございます。なぜ、昔のやうに、はじめから、八木枝、あ〵せい、かうもせいといひ附けては下さいませんの？』

ピンと拗木の花櫻、八木枝孃は口惜しげにもまた悲しげに申します。雉子彥は急にまご／＼して、

『それや、ソノ……ソノ、拙者もさういひたいのは山々ぢやが、何やら咽喉に支へていへぬのぢや。大方、あなたが、あんまり變つて……あんまり立派に……。』

『いえ／＼、あんまり年をとつたからでございませう！』

ちよツと變な氣持です。二人は、暫く默つて乘りす〵めてゐましたが、八木枝孃は再び馬を寄せて、

『雉子彥さま、あなたは伯父さまをお救ひなされて後、またいづれへかご發足でございますの？』

訊かれて雉子彥、驚いたやうにじツと八木枝孃を瞶めました。といふのは、菊耶姬を失つた悲しみがあまりに大きかつたせゐです。まだ一度も、これから後どうせうなぞと考へてみてゐなかつたのでございます。

『左樣、伯父を救つた後は……萬一、十字軍との戰爭でも起れば勿怪の幸ひ。早馳馳參じて戰死してしまふことでござらう！』

不意に兩眼に眞珠のやうな淚を浮べましたる八木枝孃、言葉もなく顏を覆つて歔欷きをはじめる。雉子彥は驚きまして、

『これ、八木枝孃、何をそんなに……？』

慰めるつもりで馬を寄せますると、その雉子彥の袖に思はず縋附きました八木枝孃。遣瀬なげな聲で哀願するやうに囁きました。

『雉子彥さま、お死になされてはいや、いやでございます！』

が、答へはない。二人はまた無言で暫くす〵みましたが、ややあつて今度は雉子彥の方から話しかけて、

『時に、八木枝孃、あなたは長くこの宮廷に仕へるお考へでござるかな？』

『いゝえ〳〵、あの、弟達もをりますし、遠からず故郷へ歸るつもりでございます。』

『それはよろしい。きつと伯父が故郷へお連れするでござらう。が、八木枝孃、伯父を手頼りにして下されよ。伯父はあなたを愛してをります！』

『はい。この後は、わたし、伯父さまと……いつまでも〳〵二人で暮して行きまする……！』

言外に籠る深い悲しみ。八木枝孃はとうとうわッと泣出してしまひましたが――もうこの時には普露具の城門が近附いてゐる。二人はそのまゝわかれねばなりませんでした。

再び戰場へ

數日の後、雉子彥にとつてはまことに好都合なことが出來ました。それは、普露具大公殿下の斡旋で、彌須大公殿下と獨逸の統領とが會見して、平和のためにいろ〳〵條約の締結といふ運びになつたことでございます。

その結果は、豫期したほど滿足な解決は得られず、まもなく平和は破れました。しかし統領の隨員である阿能人と、彌須大公殿下の供奉の武士雉子彥との談判は、たやすくすら〳〵と捗取りました。

といふ譯は、條約が完全に締結すれば双方の捕虜交換といふことになる。それでは滿都彥を放還しても償金はすこしも取れない。さきを見越して阿能人が大讓歩したのと、十字軍でも尊敬されてゐる羅留四郎の盡力によるものでございました。

表面的にはともかくも平和といふことになつて、獨逸統領はその首都へ引返す。雉子彥は破格の便宜を計られ、無事安全に伯父滿都彥を引取るためにこの一行と一緒に十字軍國へ赴きました。

氣だけは急ぐが、何しろ獨逸統領と同行してゐるので自由にならない。途中さま〳〵な出來事があつて、丸緣鈴克といふ城まで來ますと、思ひがけなくその客舍に滿都彥が來て待つてゐる。雉子彥は、我を忘れて走寄りまして、

『やや伯父上！』

嬉しさのあまり犇と抱合ふ。悧巧な滿都彥は早くも雉子彥の顏色を見取つて、

『雉子彥、可哀さうに菊耶姫は亡つたのう！』

『伯父上には誰からお聞き召された？』

『誰からも聞かぬ。そなたの顏を一目見て承知いたした！』

積る話も後やさき。二人はこゝから引返して普露具に歸つてみますると、そこの大公殿下と妃殿下とは、今度は彌須兩殿下の客として旅立たれた留守。財產の監理人であつた僧正について八木枝孃の消息を聞くと、虞蘭士伯看病のため宮仕へを辭して須秘豹城へ行つたといふ話。兩名も早速その後を追掛けました。

五日の後に須秘豹城へ到着。八木枝孃は、自分がこゝへ來たことに何か下心でもあるやうにとられはしないかと頰を赧らめながら二人を迎へましたが――雉子彥としても、八木枝孃の虞

蘭土伯に對する親切は最早わかつてゐます。感謝こそすれ、ちツとも咎める氣持はない。八木枝孃もその雉子彦の胸を讀んで、心の中では思はずほツといたしました。

　歸り着くが早いか、雉子彦は、一應虞蘭土伯を見舞つた上で菊耶姬の墓に詣でて見ますると、美しい見事な花環が供へてある。誰が供へたか番人に訊いてみると八木枝孃だといふことなので、

『八木枝孃がな。あの女は天使ぢや！』

一種の感慨的な氣持です。雉子彦は深く打たれました。

その後の虞蘭土伯の容態は、相變らず病床に就いたきり。何を問うても話してもちツとも通じませんでしたが、不思議やかうしてみんなが揃つた數日後、埋火が消えるやうに亡りました。而も奇蹟を現はして、死骸は幾日經つても腐らなかつたといひます。

　この虞蘭土伯を鄭重に葬つてからかれこれ一月ばかり經つた後でございます。深い憂愁の中から雉子彦は一つの決心をいたし、改めて伯父滿都彦に向ひまして、

『さて、伯父上、あなたには、八木枝孃を伴ひ、一應故鄕へお歸りになつては如何でござりまするか？』

『うム、そなたも一緒に歸れば異存ないわ！』

『いや、拙者はこれより彌須大公殿下の許に驅附け、戰場に向ふ所存。萬が一にも生存へてゐましたなら、戰爭が終つた後に歸りまする！』

　もうこの時には、一時結ばれてゐた平和條約も破れ、波獨兩國間に一大戰爭が起る兆候を示してをりました。暫く默然と考込んでゐました滿都彦、やがてきつと頭をあげて、

『それならばわしも國難に殉ずるわ。老いたりと雖……。』

『いや〳〵、伯父上には是非々々故鄕へ！』

　爭ひをはじめた兩名。菊耶姬の死によつて癒すことの出來ない手傷を負うた雉子彦、戰場に向ふといふのは結局すゝんで戰死するといふ意味なのでございます。それがよくわかつてゐますだけに――一人息子のやうなその甥を殺して、滿都彦としても老後が何樂しからう。寧ろ最期を共にしたいといふ氣持で一緒に戰場へ行くといふのであります。

　しかし雉子彦とすれば、親同樣の伯父を道伴れに出來るものではない。强つて故鄕へといひ張つたのと――八木枝孃の處分にも困る。とうとう滿都彦が雉子彦の意見を容れることになりました。

　たゞ、可哀さうなのは八木枝孃でございます。幾日かの後、大勢の從者を引連れ、武者振り雄々しく戰場へ走向ふ雉子彦の

——もう二度と生きては歸つて來ないであらう。その幼馴染の戀人の後姿を、涙でじツと見送らねばなりませんでした。

生死も不明

その雉子彦が出發した數日の後、滿都彦も八木枝孃を伴つて故郷へ向けて發足いたしました。後方には、夥しい財寶を積んだ車が幾輛となくつゞいてをります。

これは、須秘豹城は敵地に近い上に、城主の雉子彦が留守になる。いつまた襲撃を受けるかわからない危險が多分にあります。相談の結果、安全な故郷へ移すことにしましたので——しかし放棄は出來ない。倉平が代つてそこの守將となりました。故郷へ歸つてみると、館は荒れに荒れてゐます。そこで、滿都彦は、早速大規模な築城計畫を立てまして、

『よし／＼、歸つて來たら雉子彦を驚かしてやる。須秘豹城より何倍も大きい城で迎へてやるわ！』

地を選んで基礎の石まで置かせました。ところが何ケ月經つても雉子彦の消息は杳として聞えない。滿都彦は、また腕を組んで考込んでしまひました。

『待てよ。わしがかうして城を築いても、雉子彦の身體は槍で突刺され、とツくに狼の餌食になつてゐるのぢやないかな？』

さう考へて來ると折角の築城計畫も手に着かない。毎日々々八木枝孃と二人で額を集めまして、繰返し／＼雉子彦の身の上を案じるだけになりました。

半年ほど經つと、彌須大公殿下と十字軍の戰爭はいよ／＼激烈を極めてまゐりました。誰れも彼れもその噂で持切るやうになりましたが、依然として雉子彦の消息はない。あれほど美しかつた八木枝孃の顏の色澤がめつきり惡くなり、頰の肉さへだん／＼落ちて來ました。

また春がめぐつて來て、燕や雲雀は歸つて來ましたが、やはり雉子彦は戻つて來ない。雁が南から北へ飛んで行くやうになつても同じことです。戰爭の結果も、あるものは波蘭軍が勝つたといひ、あるものは負けたといふ。滿都彦と八木枝孃の二人は、たゞ／＼顏を見合せて長い溜息ばかり吐いてゐます。

戰爭は二ケ年間つゞきました。そのうち嬉しい噂が傳つて來て——彌須大公殿下の軍が大勝利を占め、十字軍から講和の申込みがあつたと報知です。二人は躍上りました。

『さうなれば伯父さま、雉子彦さまはいつお歸りでございませう？』

『戰爭さへやめば歸るわい。もうぢきぢや！』

ところがまた二月經ち、三月經つて、いよ／＼講和が成立し

たと聞いてもまだ雉子彦は歸つて來ない。死んだとも、生きてゐるとも音沙汰もありません。すつかり深い絶望に陷つた八木枝孃、涙の中からいひだしました。

『伯父さま、わたし、もう……尼寺へまゐりたうございます！』

『いや、待て〳〵。わしももうこの上我慢がならん。須秘豹城へ行つて樣子を聞いて來るわ！』

その準備の眞最中。ある夕方でございました。田圃で働いてゐた一人の農夫が宙を飛んで驅附けて來て喚いたものでございます。

『若殿樣がお歸りなされましたッ！』

おゝ、待ちに待つた雉子彦がとうとう歸つてまゐりました。滿都彦と八木枝孃の二人は、悦びのあまり半狂亂のやうになつて出迎へました。

しかしその雉子彦はなんといふ變り方でしたらう！　見るから水々しかつた若者が、眼は落窪み、頰骨も突出したばかりか、人間までが變つてゐる。もと〳〵かなり朗かな性質だつたのに——ひどく懶さうな樣子をして、寡口になつてゐます。久振りに二人に會つてもたいして嬉しさうな顏もしない。滿都彦がいろ〳〵骨折つて手柄話を聞出さうといたしましたが、まるきりの不成功。何一つ聞くことは出來ませんでした。

たゞ、須秘豹城から供をして來た倉平の話によると、雉子彦は、十字軍の名譽ある武士のしるしの孔雀の羽根や、駝鳥の羽根で飾つた兜を數へきれないほど持歸つて來て菊耶姫の墓に供へたといふ。分捕りの馬や、鎧だけでも一財産あるほどだといふことでした。

歸鄕後三日目でした。その雉子彦が、急にどッと重い枕についてしまひました。聞けば肋骨が二枚も折れてをり、脇腹にもまだ生々しい傷がある。ほかにも瘡跡は大小無數で——はじめ、滿都彦は、五六日も寢てゐたら癒るに違ひないと輕く見てをりましたが、これが大きい間違ひ。幾日經つても快くなるどころか、却つて日増しに弱つて行くばかりとなりました。

すべて滿足

一憂去つてまた一憂。滿都彦と八木枝孃とはお寺へ行つては藥草や塗藥なぞをもらつて來、さま〳〵眞心を籠めて看病いたしまするが、更に利き目が見えない。哀れ雉子彦はそのまゝ死んで行くのではあるまいかと思はれるほどの有樣になつてまゐりました。

これにはげしく心を痛めました八木枝孃。どう見ても雉子彦の病氣は肉體的なものばかりではない。何か胸にあるのではあ

るまいかと思ひついて、滿都彦にそつと訊いてみることをすゝめると――頷いた滿都彦。雉子彦の機嫌のいゝ折りを見計ひ、まづ夥しく取つて歸つたといふ孔雀羽根の兜のことから話を釣出して、

『そなたはその兜を菊耶姫の墓に供へて來たといふことぢやが、それで復讐も果したといふもの。さぞ氣が休つたであらうのう?』

『いや〳〵、伯父上、その反對でござりまする!』

『何、反對ぢやと?』

『もと〳〵拙者が戰場へまゐりましたのは、その菊耶姫の思ひ出を忘れるがため。復讐も果し、すべてが終つた今は、却つて世の中がつまらなくなりました!』

『それはいかん。早く全快して溫泉へ參り、酒でも飲んで暮すやうにするがよい!』

『折角ではござりまするが、拙者は最早浮世の快樂は求めませぬ。また、誰が與へてくれるでもなし……。』

『ふム、左樣か。いやよくわかつたわ!』

　にツこり笑つて頷いた滿都彦。なる程、雉子彦の病氣は八木枝孃の想像どほり、愛も復讐も一段落ついたといふ氣持から、精神的に非常な空虚感に襲はれてゐるのでございました。

『それなら雉子彦、その世の中が詰らぬ譯を敎へてやるわ。片方終つて、まだ片方をはじめぬからぢや。わかつたかの?』

『よくわかりませぬ。そんなことでもあるやうな、またないやうな……。』

　それでも滿都彦は大滿足。いそ〳〵と病室を出て來るとすぐに八木枝孃を呼んで、

『すつかり原因がわかつたわい。雉子彦の病氣を癒すものは、ソレ、そなた一人ぢや!』

『伯父さまとしたことが、そりや、まア、どうしてわたしが?』

　つと傍に寄つた滿都彦、何やら耳に囁く。八木枝孃は眞赧になつて飛退いて、

『あれ、伯父さま、噓ばツかり……!』

『何、噓ぢやと? コレ、これが噓でなるものかい!』

　わざと大きな眼でその八木枝孃を睨んで見せて、滿都彦はにこ〳〵笑ひ出す。さうしたことのあつた數日後――滿都彦がふと病室にはひつてみると、どうでせう。あれほど重態を傳へられた雉子彦が床の上に起直つて八木枝孃に髮を梳かれてゐます。

『やア、これはいよ〳〵全快かの?』

『いえ、アノ……あんまり髮が亂れてゐましたゆゑ。つい、ソ

ノ……。』

またしても眞赧になつた八木枝孃、何やら口のうちでしきりと辯解をつゞけます。滿都彦は寧ろ上機嫌で、

『いや〳〵、武士の家では通例弟が兄の髪を梳く。妻があれば妻が梳く。よいわ〳〵！』

といひながらも、胸の中では旨くやつてくれたと褒めてゐる。早くも形勢を察し、何か獨語をいひ〳〵、また忙しげに出て行きました。

それからまもなくでした。滿都彦が再び引返してみますると、雉

子彦が八木枝孃を兩腕にしつかりと抱いて翅のやうに輕々と宙に振りまはしてゐます。その二人の顔に現はれた歡喜と、情熱と、涙と――最早、訊くだけが野暮である。雉子彦の空虚感は、今や、年來の幼馴染八木枝孃の愛情によつて埋められ、滿されてゐるのでありました。

『よくやつてくれた〳〵。わしは、いづれ行末はきつとかうなるものとは思つてゐたが、よくやつてくれた〳〵。このやうな嬉しいことはないわい！』

すぐに滿都彦はその二人を抱緊めて、かはる〳〵頬に接吻してやる。この間にも言葉をつゞけて、

『芽出度い〳〵、とうとうそち達は一緒になつてくれた。もう思ひ殘すことはない。これでわしも安心して死ねる……！』

不意に胸が詰つて、大きい塊が咽喉佛に込上げて來ました。滿都彦は、嬉し涙をぼろ〳〵滴しながら繰返しました。

『いや、芽出度い〳〵。それで立派な城も建つといふものぢや。たゞ、この上は、一日も早く子供の顔を見せてくれ。野に散る霰のやうに澤山生むのぢやぞ。霰のやうに！』

（をはり）

感冒にトラシン

新發見の貴藥を配合

『トラシン』は、あらゆる病原菌、特に感冒菌に對して强力な殺菌力ある田口博士新發見の新藥『カロキシン』を基盤としたものです。

トラシンは、高熱を去り頭痛、咽喉の痛みを愼め痰咳を止め、心臟を強める等、從來の感冒藥に見られぬ優れた効果をもつ理想藥です。

主なる藥效

▲感冒一切 ▲頭痛 ▲氣管支カタル ▲齒痛 ▲咽喉カタル ▲扁桃腺炎 ▲鼻カタル ▲肺炎 ▲肺尖カタル ▲肋膜炎

二日分・二十五錢
五日分・五十錢

全國有名藥店にあり

東京・本郷
大日本雄辯會
講談社藥品部發賣

大日本雄辯會講談社編修發行

若さと熱のキングレコード

四月新譜は是非御試聽下さい

爽かな春の宵、新進專屬作曲家の二大豪華盤の妙味

番號	種目	曲名	作詞・作曲	演奏
K222	童謠	兵隊さん	林柳波詩　長妻完至曲	長谷山雛菊音樂會員　キング管絃樂團
		春來い來い	若杉雄三郎詩　山内伶晃曲	永岡志津子　キング管絃樂團
K223	合唱	ブリュー日本	鹿山映二郎詩	キング合唱團　キング管絃樂團
	獨唱	フラワー日本	田村しげる曲	彌生ひばり　キング管絃樂團
K224	日活映畫未來花主題歌	未來花の歌	西條八十詩	渡邊光子　キング管絃樂團
		千夜子の歌	田村しげる曲	丸山和歌子　キング管絃樂團
K225	流行歌	圓滿第一己が主義	塚本篤夫詩	二村定一　キング管絃樂團
		妾と貴郎は相性ね	竹岡信幸曲	丸山和歌子　二村定一　キング管絃樂團
K226	詩吟			吉村岳城
K227	落語	觀櫻會（上下）		春風亭柳橋
K228 K229	浪花節	水夫長の死（一－四）		宮川左近

新譜案內

竹岡信幸氏　田村しげる氏

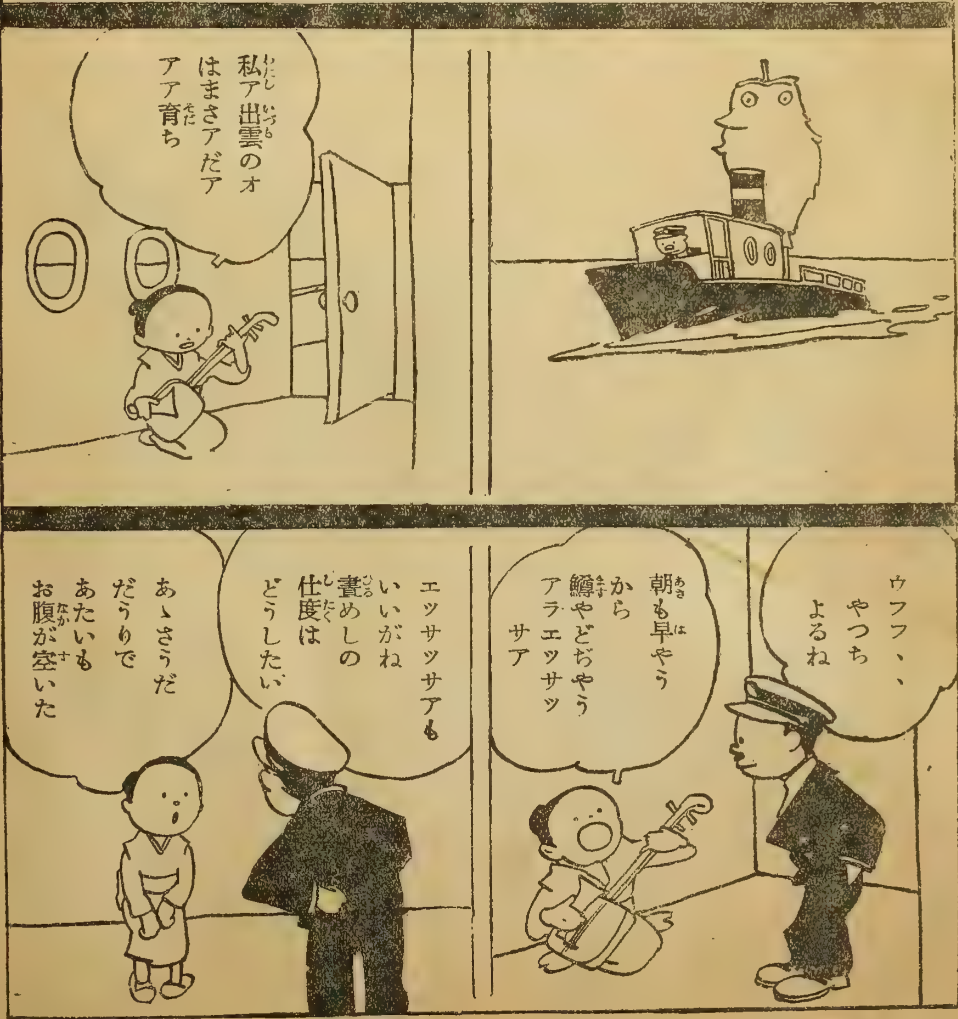
◉キングレコード專屬アーチスト

全國蓄音器店にあり　一枚一、五〇

連載漫画

無軌道船長

田河水泡



松江ェ　大橋ィ
コラシヨッ
あゝ
しまつた
お釜を落
しちまつた
船長さん
に叱られ
るかな？
飛込んで
探して
來よう
ハテナ？
ここらに
居た筈
だが？
ここにも
居ない
ハテナ？
をかしいな
まさか
海に飛込
んだ筈も
あるまい
が

俺をおどかすつもりで隠れてゐるんだらうおジャズやーい
船長さま
おやあ？何處かで呼んでるぞ
おジャズやーい何處だーい
ここだーい
さても不思議な丸坊主ウーム傳へきく海坊主とは此奴のことだらう撲り殺してやる

今度浮いて來たら投網で打つて生捕つて見世物にしてやらう
生意氣な人間の口眞似などしやあがつて
おおくるしい早く！
巧くかかつたらしいぞ
オヤ何だいお前はおジヤズぢやないか
知らないわよどうせ私は海坊主だわよ
惡口のつもりで言つたのぢやない間違へたのだからさうむきになつて怒るなよ
今度海へ何が落ちたつて取つてやるものか

視力増進と恢復法

近視・亂視・弱視も正確になり、老眼も若返つて不思議に視力が恢復

かつてある外國人が日本の留學生が大抵近眼鏡をかけて、青い顔をしてゐるのを見て『なんだ、日本人はみんな近眼ではないか』といはれたさうですが、日本はたしかに諸外國に比べて近視眼が非常に多いのであります。

最近文部省の統計によりますと、

◇小學校では十年前に比較して男女共に約五パーセントの増加を見、百人に就いて男十七人、女二十人の近視がをり、

◇高等女學校や中學校では十年前に比し約十パーセントの増加を見、百人中約三十五人の近視がをり、

◇更に師範學校では百人につき約四十二人、專門學校では男四十二人、女五十一人といふ驚くべき有樣で、今後ます／＼増加の傾向があるといふから全く國民保健上由々しき問題と云はねばなりません。

兎角必要なものは損ひ易く失ひ易いのが自然の理で、日常の仕事、勉學、その他の業務に對し、眼を患ふ機會を常に與へられてゐるに拘らず、その養生に努めぬから罹病するのであります。從つて近業に從事して眼を多く使ふ人、眼の弱い人は常に視力の増進を計らねば次第に近視や亂視、遠視となり、或は年の割合に早くから老眼となります。又之等の眼疾に既にかゝつてゐる人が恢復に努めねば漸次視力は減退し、度數は進行し、益〻強度となり、知らず／＼の間に腦までも犯されて不幸な生涯に陷入る事になりますから、努めて視力恢復に、又その増進に力を注ぐことが保健上最も重要なことであります。

しかしながら進歩した現代

の醫學に於てもこれ等の近視や亂視、遠視などは頗る治療の困難な眼疾とされてをり、その治療法にも殆んど良法がなく、殊に老眼などは自然になるもの位に考へて一般に放つておく傾向があります。ところがこゝに御紹介する貴薬『エモチン』は、支那の奥地に生ずる特殊な植物の實で、視力障害には驚異的な効果があり、毎日これを用ふれば視力をメキメキ恢復、増進し、近視や亂視さへもこれによつて漸次治るといふことが多くの實驗者によつて力強く證明されてをります。

エモチン

◇老眼が若返り近眼恢復
◇視力が驚く程強くなる
◇眼性がよく丈夫になる
◇頭腦が明晰となる事妙
◇不眠症神經衰弱に有効

十七日分 一圓五十錢
五十五日分 四圓

視力増進の貴薬「エモチン」は

支那の奥地に産する特殊な植物の主精より得たるもので、貴重薬として支那では昔から腦及び視力恢復に大變珍重されて來たものです。『エモチン百日服めば夜目が効く』とさへいはれその美味しい風味とまつて一般家庭でお茶やコーヒーの代用として來客の接待に應用されてをりますが、之を常用すればする程、漸次頭腦は明晰となり、心身は爽快に、精力を増進し、便通をとゝのへ、筋肉を強くし、神經衰弱や腦病を快方へ向はしめ、視力を増進恢復し、益々健康體へみちびきます。

これこそ皆様に確信をもつておすゝめ出來る視力増進の貴薬です。過度の試驗勉強の結果、随分と眼を害つてをらるゝ方が多いことと思ひます。近視を矯正せんがために眼鏡をかけて反つて度を昂進させ勝ちなものです。さうした方は是非この『エモチン』の常用により健全な視力を恢復せしめることが肝要です。眼のわるくない方も常に机邊に備へて常用すれば近視の最もよい豫防策となり且つ腦の働きを良く致します。どうぞ御愛用下さいませ。

實驗者の一例

十四度の近視が二十六度に恢復……

宇和島市本町　芝　殿

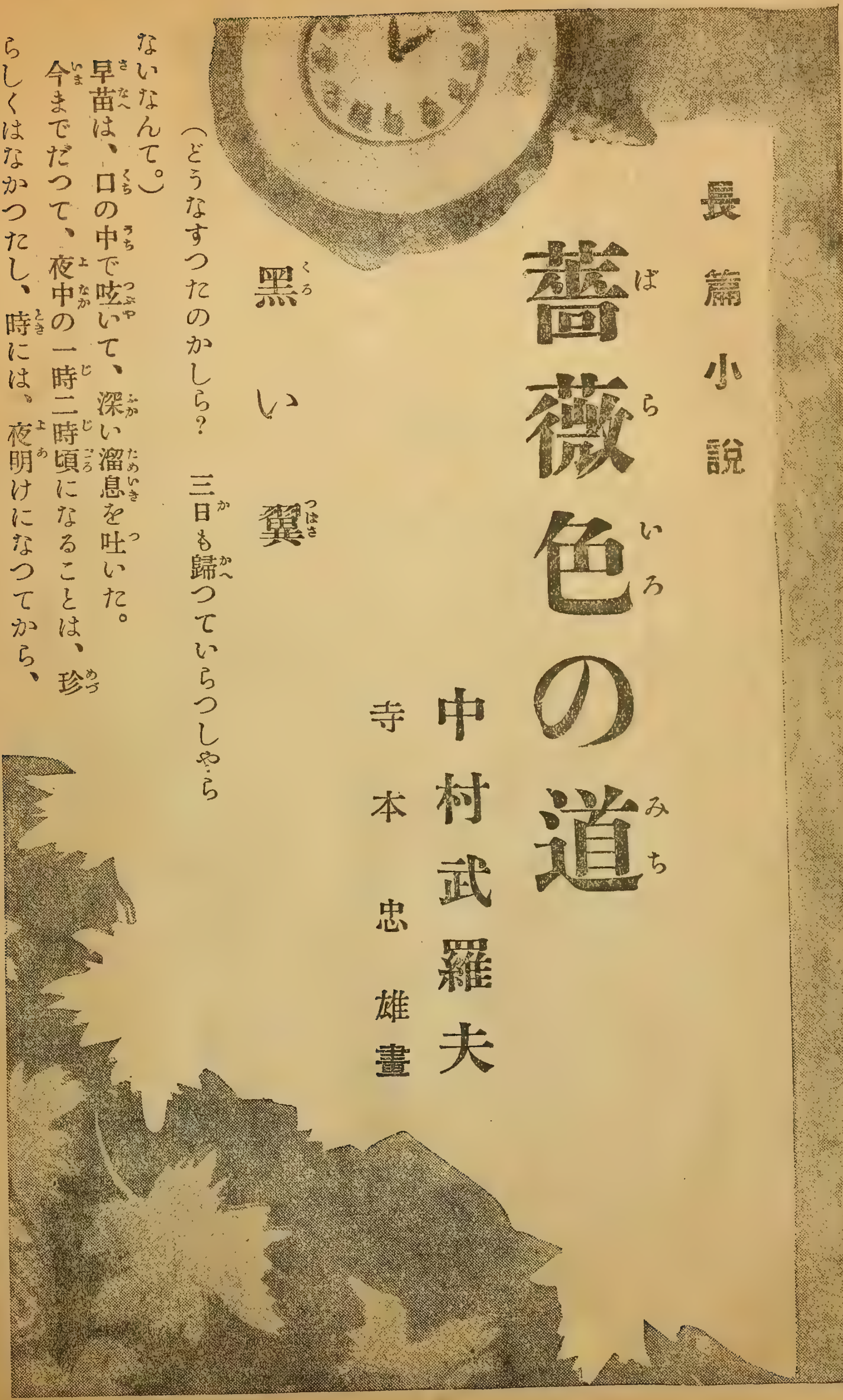
十四度の近視で約二ケ月半エモチンを服用せしに二十二度に恢復し、視力は日々快方に趣きつゝあり、其後の視力は二十六度の眼鏡を掛けるまでに視力恢復致し今更ながら其効果の顯著なるに驚き居候。

眼鏡をとり、物が見え非常なる喜悦を感ず……

和歌山縣高野山　三宅殿

エモチンを使用し始めて今日で丁度十日程しか經過せぬのに眼鏡をとつても今迄の如く何も分らぬといふ事がなくなりました。次第に良好でよき結果にすゝんでをります。厚く感謝してをります。學校の授業、運動等に於ても非常なる喜悦を感じてをります。

視力増進劑エモチンは各地有名藥店にもあります。が品切の節は藥價十七日分一圓五十錢五十五日分四圓(送料内地十五錢領土四十錢)にて大日本雄辯會講談社代理部へ振替東京六六二九)でお取次します。尚代理部へお申越次第『實驗文献集』を差上げます。



長篇小説

薔薇色の道

中村武羅夫
寺本忠雄畫

黑い翼

（どうなすつたのかしら？　三日も歸つていらつしやらないなんて。）

早苗は、口の中で呟いて、深い溜息を吐いた。

今までだつて、夜中の一時二時頃になることは、珍らしくはなかつたし、時には、夜明けになつてから、

歸つて來ることもあれば、たまには、外泊して來ることが、ないでもなかつた。

でも、三日も家を空けたまゝ、何んの音沙汰もないなどといふことは、一度もなかつた。

いくら放埒な陽一郎でも、あんまりだと思つた。

どんな用事があつて、どこにゐるのか知らないけれども、ちよつとぐらゐ、歸つて來る暇もないといふ筈はないやうな氣がした。若し、歸つて來る暇がないなら、電報を打つなり、速達を出すなりしたつて、いいはずだ。

無斷で、三日も歸つて來ないなんて、どうしたことだらう。早苗が、いろ〳〵苦心をして、父の惣造には、内證にしてあるからいいやうなものの、若し、こんなこと

青年高濱陽一郎は、許婚迄ある身で放埓三昧に耽つてゐたが、一方彼は類なく純情で、病める踊子のマユミをば眞心籠めて看護つてゐた。此マユミの今はの際の望みは、別れて久しい妹絹子に唯一目會ふ事である。陽一郎は其意を察して百方奔走し、遂に銀座のカフエーに女給を勤める絹子を探し當て、急ぎ伴つて病院に歸つたが、あはれ其時はマユミは既に瀕死の重態で、喘ぎつゝ僅に、『高濱さん、どうか私の代りに此絹子と結婚して下さい。』と、思ひ掛けない言葉を殘した儘、臨終の眼を閉ぢたのであつた。（**前號迄の梗概**）

が分つたら、陽一郎は、どうするのかしら？　と思つた。

いくら一人息子に甘い惣造でも、無斷で、三日も家を留守にしたことが分つたら、どんなに怒るか知れない。父に怒られて、素直に言ふことを聞くやうな陽一郎ではないから、きつと、二人は衝突するに違ひない。

若し、そのために、父と子との間が、氣まづくでもなるやうなことがあつたら、どうしたらいいだらうと思ふと、早苗は、氣が氣ではなかつた。

（ほんたうに、いい加減で、歸つて來て下さらなくちや。）

早苗は、自分一人で、こんなに氣を揉んでゐるのに、そんなことは、ちつとも思ひ遣つてもくれないらしい陽一郎の冷淡さが、つい怨めしくなつて、自然と涙ぐまずにはゐられなかつた。

若し、今夜にも、惣造が早く歸つて來て、陽一郎のことを、聞くやうなことがあつたら、何んと答へたら、いいだらう。惣造に對して、何んとかウソを吐かなければならないことになる。

そんなことのない中に、とに角一度、ちよつとでもいいから早く歸つてくれゝばいいと思つた。

（でも、若しかしたら？）

早苗は、別の不安に打たれて、はつとした。

陽一郎の放埓のために、どこかを遊びまはつて、それで歸つて來ないものだと決めてゐるけれども、若しかして、何か不吉な過ちでもあつたのではないかと思つた。

この前にも、横濱のキャバレーで、メリケンの船員を相手に、ナイフを閃めかしたり、ピストルを打つたりして、大喧嘩をしたとか、タクシーで、どこかのお爺さんを轢いたとかいふこともあつたし、それから、警察の留置場に投り込まれて、惣造が、わざ〳〵迎ひに行つて、やうやく連れて歸つたことだつてあるのだ。

さう考へて來ると早苗は、無斷で、三日も歸つて來ないのは、

NOV - 8

たゞ事ではないやうな氣がして、胸騒ぎがした。喧嘩でもして、大怪我でもして、そのために、歸つて來れないのではないだらうか？

或ひは、誰かに、ひどい負傷でもさせて、歸つて來たいにも、歸つて來られないのではなからうか？

それとも、この前のやうに、また警察署にでも捕へられて、出て來られないのかも知れない。

想像は想像を生み、疑ひは更に疑ひを生んで、それ等の黒い翼は、留め度もなく擴がつて行く。

同時に早苗は、わざ〳〵自分を訪問して來た謎の婦人の言葉が、やつぱり、氣になつた。

まさか、陽一郎に限つて、異性關係で間違つた行ひがある筈はないと、信じ切つてはゐるやうなものゝ、それでも、どうだか分らなかつた。

キャバレーのマダムと、自から名乘る謎の婦人の話では、陽一郎が、踊り子の一人に熱中して、行方を晦ましたと言ふのだが、その通りには信じられなくても、或ひは、秘密な戀愛に夢中になつて、そのために三日も、無斷で歸つて來ないのかも知れない。

教養もあるし、思慮も辨へも、十分持つた早苗ではあるけれども、でも、いくら抑へても、嫉妬の妄想を、どうすることも出來なかつた。

早苗は、陽一郎の身を案じ、自分の嫉妬のために苦しんだ。居ても、立つても、ゐられないやうな氣持ちがした。早く、陽一郎が歸つて來てくれゝばいい。早く、陽一郎の顔を見、その聲を聞いて、安心したいと思つた。

若し、今、陽一郎が歸つて來てくれたら、行きなり彼の身體にしがみ附き、その胸に顔を埋めて、思ふさま泣きたいと思つた。

門の外を、自動車が走るサイレンの音を聞いても、玄關の方で、何か物音がするのが、かすかに聞えても、直ぐに、陽一郎が歸つて來たのではないかと思つて、胸が、どき〳〵した。

コツ〳〵、と、ノツクの音。

早苗は、はつとして、

『誰？』と、かすかに言つた。

『お食事のお仕度が、出來ましてございますが。』

ドアが開くと、召使のとしやの顔が覗いて、しとやかに言つた。

『あら、もうそんな時間かしら？』と思つて、時計を見た。

いつの間に、こんなに時間が經つたのだらうと、不思議な氣

がしたが、時計は、十二時三十分を示してゐた。

『わたし、お中食は、いたゞきたくないの。』

『どこか、お氣分でも、お惡いのでございますか。』

と、としやは、心配さうに聞いた。

『いゝえ。さうぢやないけれども、わたし、いたゞかないわ。』

『では、トーストか何か、お部屋へ持つてまゐりませうか。』

『あら、そんなことをしてくれなくたつて、いいの。』

『でも……』

『欲しくなつたら、さう言ふわ。』

『では、どうぞ。』

と言つて、としやは、それでも氣がかりらしく、退つて行つた。

早苗は、いつの間にか今日も、もうお晝の十二時を三十分も過ぎたのに、それでも陽一郎は、まだ歸つて來ないばかりか、何んの音沙汰もないのだと思ふと、ます／＼氣が揉めた。

このまゝ、打つちやつて置いて、いいものか？ それとも、惣造に打ち明けて、どこか心當りでも、探して見なければならないのではないかと、思案に迷つてゐた。

どうするとも、心が決まらずに、焦り／＼してゐる中にも、時計の針は、遠慮なくすゝんで行つた。

偶と、玄關の方で、自動車の音が聞えた。

（あら、お歸りになつたのかも知れないわ。）

と思つたけれども、早苗は、何遍も／＼騙されてゐるので、直ぐに玄關まで、迎ひに飛び出して行くことが出來なかつた。

早呑み込みをして、慌てゝ飛び出して行つたりして、若し、また陽一郎が歸つて來たのでなかつたら、召使たちの手前も、どんなに極りの惡い思ひをしなければならないと思ふと、迂濶には、飛び出して行けなかつた。

する中、人の足音が近づいて、靜かなノックが聞えた。

『どうぞ。』

早苗は、今度こそ陽一郎が歸つて來たのだと、胸を躍らせて、椅子から飛び立つと、自分で、ドアを開けた。

『やあ。』

ドアの外に立つてゐたのは、陽一郎ではなくて、意外にも岩崎だつた。

『まあ。』

早苗は、失望と、腹立たしさとに、一度自分の手で開けたドアを、岩崎の鼻づらで、ぴしやりと閉めてしまひたいと思つた。

いくら親しくしてゐる間柄でも、取次ぎもなく人の部屋まで、のこのこやつて來た圖う／＼しさが、早苗は、餘計、腹が立つた。

でも、面詰することも出來なかつたので、早苗は、そのまゝ、石のやうに突つ立つてゐた。

『どうしたんです？ 氣分でも惡いんぢやありませんか。』

馴れ／＼しく言ひながら、岩崎は部屋の中に、つか／＼と入つて來た。

早苗は、あまり好いてはゐなかつたけれども、岩崎は惣造の甥で、陽一郎とは從兄弟同士だつた。小さい時から、高澤家には、家族の一人と同じやうな親しさで、出入りしてゐた。

『いゝえ。』

早苗は、お愛想なんか、ちつとも言はなかつたし、また、言ふ必要もなかつた。以前の椅子に歸ると、腰を降ろして、力なく溜息を洩らした。

『では、何か心配なことでもあるんですか？』

と言ひながら岩崎は、小さなテーブルを間にして、早苗と向ひ合つて、アーム・チェアーに腰掛けた。

『別に。』

早苗は、かすかに言つた。

『何んだか、顔色も、あまり好くないやうですな。』

『さう。』

と言つて早苗は、思はず自分の頬を撫ぜて見た。

『どうしたんです？ バカに憂鬱ぢやありませんか。』

『昨夜、よく眠れなかつたからかも知れないわ。』

早苗がさう言つたのは、ゴマ化しでも何んでもなかつた。

單に、昨夜ばかりではない。早苗は、陽一郎が無斷で家を明けてからの三晩といふもの、ほとんど眠つてゐないと言つても好かつた。

陽一郎が歸つて來ないのに、早苗は、眠るどころではなかつた。眠られもしなかつたし、眠らうともしなかつた。夜が明けて、召使たちが起きるまでは、ベッドの上に横はつてゐても、まんじりともせずに、玄關の方に、陽一郎の歸つて來た物音でもしはしないかと思つて、耳を澄ましてゐた。

『どうして？』

『理由はないの。たゞ、眠れなかつたゞけなの。』

と言つて、早苗は淋しさうな微笑を浮べてゐた。

『陽一郎君は、どうしたの？』と、岩崎は聞いた。

『あら、あなたは、陽さんのところに、入らしたの？』

『さうぢやないけども。』

『留守ですわ。』

『どこへ行つたの？』

『知らないわ、そんなこと。』と言つて、早苗は悲しさうに俯首れた。

『やつぱり、家を外にして、遊び歩いてゐるんだな。』

岩崎は呟きながら、シガレット・ケースを取り出して、ウエストミンスターを一本摘むと、ライターで火をつけた。

微笑を含んだ瞳が、早苗を見ながら、唇からは、ゆるやかに煙を吹いてゐた。

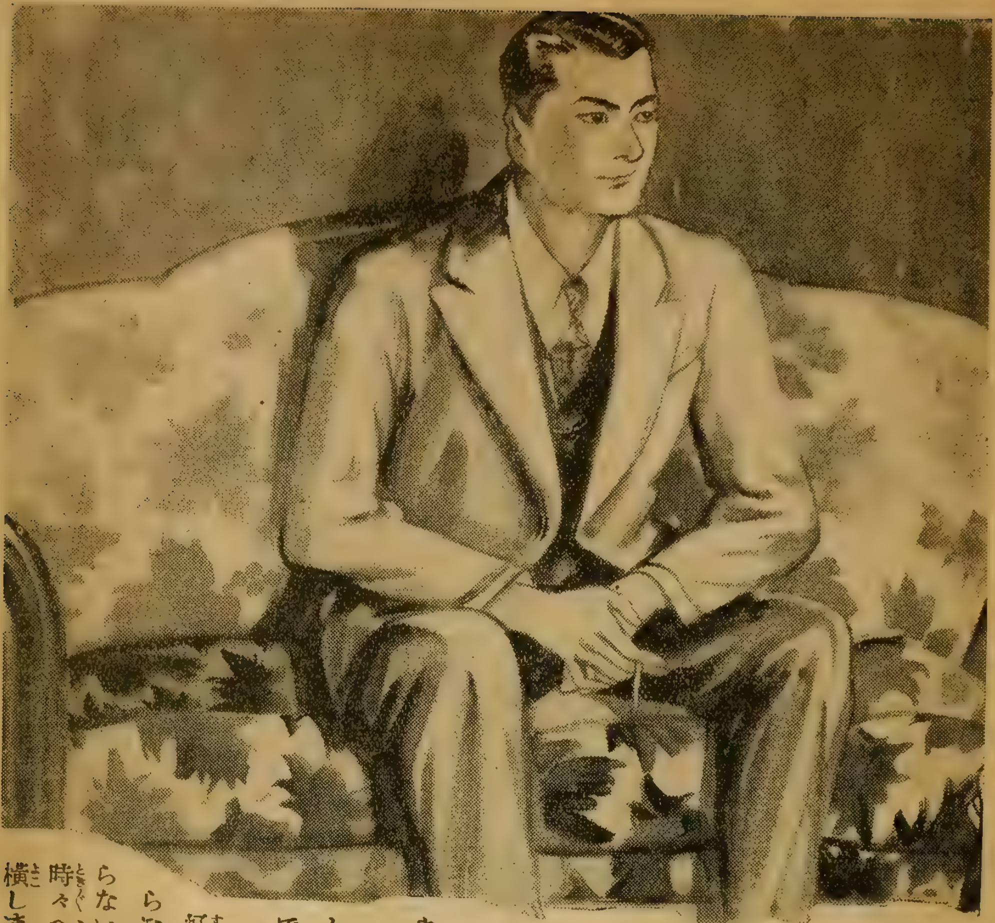
『さうでもないわ。』

と、早苗は、陽一郎を庇はずにはゐられなかつた。

『だつて、いつ來て見ても、陽一郎君が、家にゐたことなど、一度だつてないぢやありませんか。』

『ちやうど、生憎、あなたが入らつしやる時には、いつでもお留守な

のね。』と、早苗は言つた。
『僕が、來る時だけですか。』
『えゝ。』
『さうぢやないでせう。』
『まあ。』
『知つてゐますよ。』
『あら、何を知つてゐらつしやるの。』と、早苗は眼を見張つた。
『あなたは、知らないのですか。』
岩崎は、謎のやうなことを言つて、恍けたやうな表情をして、にや／＼笑ひながら、早苗の顔を見てゐた。
『ですから、わたしが、何を知らないと、おつしやるの？』
『最近の陽一郎君の消息ですよ。』
『それは、どんなことでせう？』
早苗は思はず、必死にならずにはゐられなかつた。
岩崎が、どんなことを知つてゐるのか知らないけれども、どんなことでもいいから、聞きたいと思つた。自分と陽一郎とは、一緒に暮らしてゐながら、しかも陽一郎が、どんなことを考へ、どんな生活をしてゐるのかは、ちつとも知らないのである。殊に、最近の三日間といふものは、家に寄り附きもしない。
或ひは岩崎に聞いたら、陽一郎の消息が、分るのではないかといふ氣がした。不安に驅られてゐるところなので、どんなことでもいいから、聞きたいと思つた。



『僕から聞かなくたつて、一緒にゐる早苗さんの方が、よく知つてゐる筈ぢやありませんか。』

と、岩崎は皮肉な微笑を、眼尻に漂はせてゐた。

『でも、わたし、存じませんの。』と、早苗は悲しさうに言つた。

『どうして？』

『……………』

『知らないなんて、をかしいぢやありませんか。』

『岩崎さん。』

早苗は、何か決心したやうに、急に顔を擡げて呼んだ。

『えつ。』

『ほんたうはね、陽さんは、この三日ばかり、歸つていらつしやらないの……それで、心配してゐるところなの。』

早苗は、陽一郎のために、秘密にして置かうと思つてゐたことだけれども、岩崎が、陽一郎の消息を知つてゐるらしいので、何もかも打ち明けて、相談した方がいいと決心した。

不斷は、早苗の餘り好かない岩崎である。單に早苗が感情的に好かないばかりではなく、岩崎といふ人物は、どこか油斷のならない人間のやうな氣がするのであつた。どこが、どう油斷がならないと、はつきりしたことは言へないけれども、早苗に對しても、時々へんな素振りを見せるし、それに、高濱家の財産に對しても、横しまな野心を抱いてゐるのではないかといふやうな疑ひを、抱け

ば抱けないことのないやうな節々が、時々見えないこともなかつた。
　でも、今の早苗は、溺れる者が、一筋の藁でも掴まうとするやうな場合だつた。岩崎の人物に對して、不斷、警戒してゐることなど忘れて、頼り縋らうとするやうな氣持ちになつてゐた。

青い焔

『やつぱり、歸つて來ないのが、ほんたうなんですか。』
岩崎は、顔には皮肉な表情を漂はせながら、眞劍に聞いた。
『えゝ。』
早苗は、辛かつたけれども、かすかに頷くよりほかなかつた。
『どこへ行くとも言はずに、出かけたまゝ、二日も三日も、歸つて來ないんですか……』
『えゝ。』
『ぢや、昨日、青木の奴に聞いたことは、ほんたうなんだ。』
と、岩崎は獨りごとのやうに呟いて、何か考へ込んだ。
『どんなことを、お聞きになりましたの？』
と、早苗は不安さうな眼をして、一生懸命に聞いた。
『でも、僕の言ふことなんか、早苗さんは、信用してくれないでせう。』
『いゝえ。信じますわ。』
『だつて、いつだつて、信用してくれないぢやないか。』
『わたし、信じますわ。』
『今だつて、僕には、いい加減なことを言つたくせに。』
『あら。わたしが、どんないい加減なことを、言つたでせう？』
『陽一郎君が、三日も無斷で歸つて來ないのに、ちよつと出かけて、留守だなんて。』
『でも、それはあなたが、陽さんのことを、何んにもご存じないと思つたものですから……』
『それで、僕を、いい加減にゴマ化すつもりだつたのですか。』
『まあ、ゴマ化すなんて。でも、陽さんが歸つていらつしやらないことは、誰にも内證なんですもの。』
『なぜ？』
『だつて、そんなことが、をぢさまに知れたら、大へんだと思つて。』
『早苗さんは、どこまでも、陽一郎君を、庇つてゐるんですな。』
と、岩崎は冷笑するやうな微笑を浮べてゐた。
『別に、庇ふなんて、そんなわけぢやありませんけれども。』
早苗は、羞含むやうに、仄かに顔を赧らめた。
『とに角、陽一郎君は、幸福だな。』と言つて、岩崎は溜息を吐いた。
『どうして？』
『早苗さんのやうに、やさしい人に、庇つて貰つたりして……幸福ぢやありませんか。』
『まあ。』
『僕は、陽一郎君が羨ましい！　こんな大富豪の一人息子に生れて、

今に、この財産だつて、全部、自分のものになるでせう。それから、早苗さんのやうに美しい、心のやさしい人が、ちやんと許婚に決つてゐるのだし……』

『そんなことは、どうでもいいのよ。それよりも、陽さんは、今、どこにゐらつしやるのでせう。』

『……………』

『岩崎さんは、ご存じなんでせう？　どうぞ、教へて下さいませな。』

『…………』

『陽さんのゐらつしやるところが、分りさへすれば、わたし、これから直ぐ、お迎ひに行つて來ますわ。』

早苗は、一生懸命だつた。

『あなたは、陽一郎君の迎ひに行くと、おつしやるのですか。』

岩崎は、眼を見張つて聞いた。

『えゝ。』

『驚いたな。』

『ですから、陽さんが、どこにゐらつしやるか、教へて下さいな。』

『僕も、直接には知らないのです。人から聞いたゞけですから。』

『誰から、お聞きになりましたの？』と、早苗は急き込んだ。

『青木君から。』

『青木さんといふのは？』

『知らないのですか。』

『存じませんわ。』

『そんな筈はないのだが……』

『その方は、どういふ方ですの？』

『陽一郎君の友人ですよ。この前のお祝ひの時にも、こゝに來てゐたぢやありませんか。』

『では、わたしも、お目にかゝつたことがある方ね。』

『ありますとも。』

『ぢや、その方のお名前が、きつと今、思ひ出せないのよ。』

『早苗さんは、陽一郎君以外の男性は、眼中にないのだから。』

『あら、そんな……それで、その青木さんて方、どんなことを、おつしやつてゐらしたの？』

『陽一郎君は、横濱のキャバレーの踊り子とかに、近頃、夢中になつてゐるといふことですな。』

『えつ。』

早苗の顔色が、さつと變つた。

『思ひ當ることでも、ありますか。』と、岩崎は靜かに問うた。

『いゝえ。』

早苗は、蒼ざめた顏の色をして、かすかに頭を掉つた。

『何んでも陽一郎君は、そのキャバレーだか、酒場だかで、夜も晝もなく飮んだくれて、へゞれけになつてゐるといふことですが……』

『まあ。』

『尤も、僕が、直接見たことではないのですから、何んとも眞實のところは、保證出來ないのですが。』

『それは、横濱ですか？』

と聞いて早苗は、ほつと深い溜息を吐いた。

『青木君が言ふには、そこで一昨日の晩は、陽一郎君と一緒に、飲み明かしたといふことなんです。』

『まあ。』

『とても、附き合ひ切れないので、青木君だけ歸つて來たのだといふところを、僕は銀座で會つて、青木君から聞いたのですが……』

『あなたの知つてゐらつしやることは、それだけですの？』

『それだけです。僕は、陽一郎君も、相變らずだなと思つたゞけで、青木君とは別れてしまつたのですから。』

『さう。』

『若し、必要があつたら、もつと

詳しいことを、聞いて置くところでしたな。』

『ぢや、その青木さんといふ方に伺へば、陽さんが、どこにゐらつしやるか、すつかり分るのでせうか。』と、早苗は息を彈ませて聞いた。

『さうですな。少くも一昨日の晩から、昨日の夕方までのことなら、すつかり分るはずですな。』

『ぢや、岩崎さん。わたし、あなたにお願ひがあるの。』

『どんなことでせう。』

『聞いて下さる？』

『どんなことでも、聞きますとも。あなたの賴みですからな。』

『その青木さんのところへ、わたしを連れて行つて頂きたいの。』

『あなたが、行らつしやるのですか。』と、岩崎は驚いた。

『え〻。』

『行らして、どうするんです？』

『青木さんに、お目にか〻りたいの。』

と、早苗は必死に言つた。

『それで？』

『陽さんが、今、どこにゐらつしやるか、わたし、それが知りたいんです。知らなければならないんです。』

『陽一郎君の迎ひに、行かうといふんですな。』

『え〻。』

『早苗さんは、そんなにまでしなければならないのですか。』

『え〻！ こんなことが、をぢさまに分つたら、困るんですもの。』

『どうして？』

『ほんとに困るの。』

『だつて、伯父さんは、陽一郎君を、あんなに可愛がつてゐるぢやありませんか。陽一郎君が、どんなことをしたつて、伯父さんが、怒つたり、叱つたりするやうなことは、ないぢやありませんか。』

『さうでもないわ。』

早苗は、悲しさうに頭を振つた。

『さうでもないつて？』

『え〻。』

『僕には、分らないな。』

『この頃、をぢさまは、陽さんを、今のまゝにしては置けないと、さう思つてゐらつしやるところなの。』
『なぜ？』
『あまり、放埓が過ぎるからでせう……』
『實際、陽一郎君のやうな、勝手な振舞ひをしても、今まで小言一つ言はれずに來たのは、伯父さまなればこそだからな。ほかの親なら、疾つくに勘當されてゐるところなんだが。』
『若し、三日も歸つて來ないなんて――こんなことが分つたら、それこそ、どんなことになるか、知れないぢやありませんか。』
『伯父さんも、近頃は陽一郎君に對して、いくらか、眼が開いて來たと見えるんですな。』
と言つて岩崎は、會心さうな微笑を、につと浮べた。
『ですから、をぢさまが、まだご存じない中に、どんなことをしてゞも、一刻も早く、陽さんに歸つて來ていたゞかなくちや、ならないのです。』
早苗は、斯うしてゐる間も悟かしさうに、焦り〳〵してゐた。
『早苗さんのお氣持ちは、僕にも能く分りましたが。』
『おや、青木さんのところへ、わたしを連れて行つて下さる？』
『喜んで、お伴しませう。』
『そして、陽さんのゐらつしやるところが分つたら、わたしと一緒に、迎ひに行つて下さる？』
『醉つぱらひの迎ひに行くなんて、あんまり氣が利いたことぢやないけれども、早苗さんの賴みとあれば、僕は、どんなことだつて、喜んでしますよ。』
『まあ。』
『火の中に入れと言はれゝば、火の中にでも、水の中に飛び込めと言はれゝば、水の中にだつて、僕は、喜んで飛び込むのです。』
『まあ、そんな冗談ばつかり、おつしやつて……』
『イヤ、冗談ぢやありません！　本氣なのです！』
と、岩崎はむきになつて、力を籠めて言つた。
『それよりも、わたし、では急いで、直ぐに仕度をしますから。』
『僕が、本氣で言つてゐることを、冗談だなんて言はれるのは、心外ですな。』と、岩崎はぶつ〳〵言つた。
だが、早苗は、そんなことに、いつまでも、かゝり合つてゐるわけには行かなかつた。急いで次ぎの部屋に入ると、十五分と經たない間に、化粧も直して、外出の仕度をして、出て來た。
『どうもお待たせして、失禮、いたしました。』
薔薇色のアフターヌンを着て、すらりとした早苗の姿は、見違へるやうに美しくなつた。
『いや、どういたしまして。』
岩崎は、魅力的な早苗の姿に、恍惚として見惚れながら、輕く頭を下げた。こんな美しい婦人と、これから暫らくの間でも、一緒に步かれるのだと思ふと、岩崎の胸は、幸福感のために、ぞく〳〵して、かすかに顫へてゐた。

青木は獨身者で、お茶の水のアパートにゐた。

麻布三河台の高濱家の屋敷から、お茶の水までは、快適なハドソンを走らせて、二十分とは、かゝらなかつた。

初夏の爽やかな微風と、エメラルドの空と、さん〳〵と降りそゝぐ、輝やかしい日光と！

岩崎は、自動車の快いクッションの上に、身を搖られながら、幸福そのものと言つてもいいやうな氣持ちに、陶然として醉ひ心地になつてゐた。

自分は、美しい早苗と一緒に、自動車に乘つてゐるのだ。若やかな牝鹿のやうな早苗の身體が、自動車の微かな動搖の度びに、岩崎の身體と一緒に搖れて、どうかした拍子に、腕と腕とが、膝と膝とが、輕く觸れ合ふ。

その度びに岩崎は、さながら電氣にでも打たれたやうに、全身が、ぞく〳〵して、身顫ひした。

斯うして、いつまでも〳〵、早苗と一緒にゐられたら、どんなに幸福だらうといふ氣がした。

でも、自動車が、アパートの前に留まれば、どうしても降りなければならない。早苗が、自分の妻にでもならない限りは、いつまでも一緒にゐることなど、とても望めないのだ。

だが、早苗は、既に陽一郎と、結婚することに決つてゐる！　自分が、どんなに思つたところで、どうすることも出來はしないのだ。

さう思ふと岩崎は、一種の妬ましさが、青い焰のやうになつて、めら〳〵と胸に燃え上るのであつた。

（畜生！）

思はず心の中に呟いて、ぢつと早苗の横顏に見入つた。

早苗は、そんなことは、何んにも知らないのである。

彫刻のやうに、よく調つた襟脚から、肩の線が、顫ひ附きたいほど、蠱惑的だつた。

双の瞳は、ぢつとフロント・ガラスを見入つて、時々、長い睫毛が、靜かに太息でもするやうに、瞬きする。ルーヂェで彩つた眞紅の唇が、花の蕾のやうに、固く結ばれて、すつきりと通つた鼻筋の下の鼻翼が、呼吸する度びに、かすかに蠢めいてゐる。

（このまゝ、どこまでも〳〵、ドライヴしたら、どんなに素敵だらう！）

と思つて、岩崎は深く息を呑んだ。そして、急に胸騷ぎがした。

（いつそ、どこかへ、誘拐することは出來ないだらうか。）

岩崎が、そんな妄想を描いてゐるところへ、早苗の美しい顏が、少し憂ひを帶びて振り向いて、

『ねえ、青木さんに伺へば、分るでせうか？』

と、心配さうに聞いた。

『それは、どうだか分りませんが……多分、知つてゐるのではないかと思ひますが。とに角、昨日までは、一緒だつたといふのですから。』

岩崎は、何氣なく答へた。

『ほんとに、分つてくれると、いいんですけれども。』

と、早苗は溜息を吐いた。

『早苗さんは、そんなことばかり、心配してゐるんですな。』

『だつて。』

『ほんたうに、いい天氣ぢやありませんか。こんな日に、このまゝ郊外でもドライヴしたら、どんなに愉快だか、知れないと思ふですな。』

『わたしは、それどころぢやないの。』と、早苗は悲しさうに言つた。

岩崎は、再び、言葉をつゞけることが出來なかつた。

ハドソンは、いつの間にか、お茶の水のアパートの前まで來てゐた。

赤い灯

岩崎が先きに立つて、早苗も一緒に、アパートに入つて行くと、

『青木君は、ゐますか?』

と、岩崎はツカ〳〵と受付にすゝんで、聞いた。

白髪の混つた、薄禿げの頭をして、粗末な背廣を着た爺さんが、眼鏡越しに二人の樣子を、ぢつと見てゐたが、しばらくしてから、

『たしか、ゐらつしやるはずです。』と、不愛相に答へた。

『さうですか。』

岩崎は、ちよつと會釋をすると、受付を離れて、早苗に合圖をして、また先きに立つて、とつとと廣い階段を、足早やに上つて行く。

早苗も、後につゞいた。

青木の部屋は、二階の東側の隅で、三十六號といふ室だつた。岩崎は、五六度は訪ねて來たことがあるので、案内は能く分つてゐた。

コツ〳〵。

三十六號室の前に立つと、ドアは、ぴしやりと閉められてゐる。

でも、受付の爺さんが、たしかにゐる筈だと言つたので、岩崎は、ノックをして見た。

が、部屋の中は、しんとして、何んの返事もなかつた。

『お留守ぢやないのでせうか。』

後ろに立つてゐた早苗が、不安さうに言つた。

『さあ、どうだか分りませんが……でも、さつきの爺さんが、たしかにゐる筈だと言つたのですから。』

岩崎はもう一度、前よりも、もつと強く、コツ〳〵と、ノックをして見た。

でも、部屋の中は、相變らずしんとして、やつぱり返事がない。

『どうしたんでせう?』

『さあ。ことに依つたら、まだ、眠つてゐるのかも知れないですな。』

『あら、だつて、もう三時を過ぎてゐるのよ。』

『何しろ、この連中と來たら、夜と晝とを取り違へてゐるのですからな。朝の三時四時まで起きてゐることも、珍らしくなければ、お晝の二時三時まで眠つてゐることだつて、やつぱり、珍らしくはないんです。』

と言ひながら岩崎は、ドアのノッブに手を掛けて、廻さうとしたが、錠がかゝつてゐると見えて、動かなかつた。

『やつぱり、お留守なのでせうか。』
『さうですな。』
『お留守だつたら、わたし、どうしたらいいでせう。』
扉の前に立つて、二人が、ひそ〳〵話してゐるところへ、黒い毛繻子の上つ張りを着た掃除婦の婆さんが、空のバケツを提げて、やつて來た。
『青木さんのところに、お出でになつたのですか。』
と、婆さんは二人の樣子を見て、聲をかけた。
『えゝ。』
早苗は、頷いた。
『受付で聞いたら、たしかにゐるはずだと言つたのですが、いくら〳〵ノックをしても、返事がないので、弱つてゐるところなんです。』
と、岩崎が說明をした。
『お留守ぢやないでせうね？』と、早苗も心配さうに聞いた。
『お留守ぢやありませんよ。今朝、歸つていらしたのを、見たんですもの。それから、どこへもお出かけになつた樣子は、ありませんから。』
『あら、おや、ゐらつしやるの！』と、早苗は聲を彈ませた。
『今朝、歸つて來たのですか。』
岩崎は呆れたやうに、眼を見張つた。
『わたしが、階段の掃除をしてゐる時に、歸つていらしたんです。』
『どんな樣子でした？』と、岩崎が聞いた。
『相變らず醉つぱらつて、フラ〳〵してゐましたよ。階段を一つ踏み違へて、轉んだりして。』
掃除婦の婆さんは、笑つた。
『ぢや、昨夜もあれから、また陽一郞君と一緒だつたのかも知れない。』と、岩崎は早苗を顧みた。
『さうね。』
早苗も、青木が昨夜も一緒だつたとすれば、陽一郞がどこにゐるのか、手がかりくらゐ分るに違ひないと思つて、ほのかな希望を認めた。
『きつと、眠つてゐるに違ひないのだから、何んとかして、起さなくちや……』
岩崎は、改めて『青木君〳〵』と呼びながら、かなり強くノックをしたけれども、やつぱり返事がない。
『開けて、お入りになつて見たら、どうですか。』と、婆さんが、注意してくれた。
『ところが、錠が掛つてゐて、開かないんだよ。』
『では、受付から、合鍵を借りて來て上げませう。』
さう言つて老婆は、小急ぎに廊下を急いで、階段を降りて行つたが、直きに合鍵を、借りて來てくれた。
ドアを開けて、部屋に入つて見ると、果して青木は、ベッドの上に、ぐう〳〵と眠りこけてゐた。
窓々のブラインドは、すつかり下ろされてゐるので、部屋の中は、

薄暗かつた。その薄暗い、狹くるしい部屋の中に、ベッドだの、椅子だの、テーブルだの、洋服簞笥だのが、亂雜に置かれてゐた。

恐らく、青木は今朝になつてから、歸つて來ると、洋服を脱ぎ捨て、ピヂヤマに着換へると、後の始末もせずに、そのまゝベッドにもぐり込んで、眠り込んでしまつたのだらう。

椅子の上にも、テーブルの上にも、チョッキだの、ズボンだの、上衣だの、ワイシャツだの、靴下だのが、亂雜に放り散らしてあつた。

『青木君。』

早苗は、入口に立つてゐたが、岩崎は、つか／＼とベッドに近づいて、かなり高い聲で呼んだ。

でも、深く熟睡してゐると見えて、なか／＼眼を醒まさなかつた。返事もしないし、身動きもしない。さながら死んだやうになつて、ぐう／＼と寢息を立てゝゐる。

早苗は、こんなによく眠つてゐるものを、起すのが、何んだか、氣の毒なやうな氣がした。

餘程、このまゝにして、しばらく待つことにしようかと思つたけれども、でも、陽一郎のことを考へると、一刻もぐづ／＼しては、ゐられないと思つた、

『青木君々々。』
岩崎は、呼ぶだけでは足りないと思つて、今度は青木の肩先を掴んで、搖り動かした。
『う……う……』
わけの分らない呻き聲を洩らしながら、青木は眉をしかめて、寢返りをすると、そのまゝ、また枕にしがみ附いて、眠らうとした。
『青木君。』
もう一度岩崎は呼ぶと、再び、肩先を強く搖つた。
青木は、それで初めて、眼を醒ましたが、まだ眠呆けたやうな眼をして、怪訝さうに岩崎の顔を見上げて、
『お早う。』
と言つた。
『早いことがあるものか。もう三時過ぎだよ。』
『えつ。』
『いつまで、寢てゐるんだ。早く起きたまへ。』
『こゝは、一體、どこなんだね。』と、青木は不思議さうに、きよと〳〵した眼つきをして、その邊を見まはしてゐた。
『どこでもない。アパートの君の部屋ぢやないか。』
岩崎は、あまりのをかしさを、抑へることが出來なかつた。
『さう〳〵。僕は、今朝、歸つて來たのだな。』
『分つた？』

『やつと、思ひ出したよ。僕は、また、どこかへ泊つたつもりでゐたんだ。あまり醉つぱらつたものだから、そのまゝ、どこかへ寢込んでしまつて、今、君に起されたのかと思つたのだ。』

『昨夜も、また、高濱君と、いつしよだつたのだらう。』

『うん、一しよだつたとも。』

『ぢや、また、あれから、高濱君のところへ行つたのか?』

『どうも、附き合ひきれなくて、一旦、別れて、銀座まで歸つて來たやうなものゝ、また淋しくなつて、フラ〳〵と引つ返して行つたんだ。』

『どこへ?』

『横濱さ。』

『横濱のどんなところだ?』

『赤い灯……』

『えつ。』

『赤い灯の家だよ。君だつて、知つてゐるぢやないか。』

『K・Sキヤバレーだな。』

『さうだよ。』

『そこにまだ、高濱君はゐるのかしら。』

『多分、奴は、まだ、飲んだくれてゐるだらうよ。』

『青木君、お客さまと一緒に來てゐるんだ。起きたまへ。』

岩崎はさう言つて、入口に立つてゐる早苗を振り返つた。

（つゞく）

木火土金水　（寸篇落語）

世の中の事はすべて木火土金水から成り立つてゐる、と知つた振りをいふと、聞いてゐた男が、

『それでは盜人でも木火土金水から成り立つてゐるか。』

『勿論さうだ。先づどろ棒といふから、土と木に縁がある。ひる鳶ともいふから、火の縁がある。あと白浪といふから、水の縁がある、これ即ち木火土金水だ。』

『なるほど、しかしそれだけでは金が無い。』と突込んだら、

『無いから彼奴らは、ちよい〳〵盜みに來るのだ。』

蔣介石はどんな人物か?

今、日支問題の焦點に立ち、渦亂支那をどう導くか、その進退を注目されてゐる蔣介石の秘められた半生が、澤田謙氏の名筆に依つて、『世界十傑傳』の中に躍如と描かれてゐる、同書は現代を動かす世界十大偉傑を擧げてゐるので、刻下必讀の好著だと好評嘖々たる名傳記である。（定價一圓三十錢）送料十二錢　本社發行。

田河水泡先生と

「サッチャン・マスコット」

田河水泡先生

天下無類の面白い漫畫を描いて、日本中の兒童達をヤンヤと喜ばせてゐる田河水泡先生が、今度、非常な意氣込で、少女倶樂部五月號の大附錄『サッチャン・マスコット』を作りました。

これは、少女倶樂部に毎號連載されてゐる大評判の『スタコラサッチャン』を漫畫人形に組立てたもので、顔や手足が動く様に出來てゐる頗る新工夫の面白いものです。

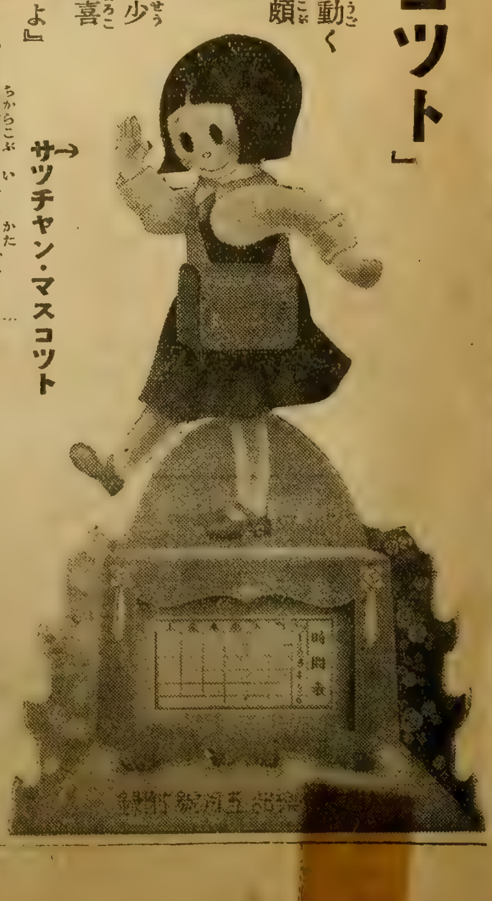
『この附錄で、少女方を熱狂的に喜ばしてあげますよ』

と田河先生も大へんな力瘤の入れ方だけに、少女倶樂部の方でも、非常な自信と奮發でつけたもの。これこそ、日本中の少女方が飛上る位 喜ぶ附錄でせう。

寫眞で御覽の通り、少女方がこれを机の上に飾つて、愉快に勉强する樣に、時間表もつけてあるなど、誠に行き屆いた、樂しい附錄で、少女方は發賣の日を待ち焦れてゐる有樣です。

尙、少女倶樂部五月號には、この附錄がつく外、『滑稽博覽會見物』といつて、今東京で開かれてゐる萬國婦人子供博覽會の樣子が、すつかりわかる特別讀物や、軍事通の平田晋策先生が特に少女方のために書いた『熱河の話』といふ大評判の記事など、隅から隅まで、誠に申し分ないスバラシイ出來榮えです。

ですから、御家庭の少女方には、この五月號を賣切れぬ中ぜひ奬めて頂きたいと思ひます。定價は普通號通り五十錢で四月十日發賣です。



サッチャン・マスコット

愛讀者俱樂部

感激の涙

滋賀縣　森田卯三郎

四月號の大讀物戯曲『松岡全權』を讀ませて頂きました。その中でスペイン代表マダリアガ氏、チエッコ代表ベネッシユ氏の暴言には戯曲乍ら大いに憤慨させられた程素晴しい讀物だつた。その暴言の中を我帝國代表松岡氏がよく奮鬪されたものだと心から感謝感激に堪へなかつた。氣の短かい僕は正にマダリアガ氏の寫眞を破りかけた程の憤激を感じた。此讀物はそれ程素晴らしかつた。今後もかうした讀物をうんと載せて貰ひたい。他の連載ものも大變よかつた。

洒落對話

大阪府　新本繁之助

○君大變藥罐が漏るぢやないか。
◇あつ、底迄は氣がつかなかつた。
○糞度胸のある人つてどんな人のことだい。
◇上官の命令を屁とも思はぬ人だらう。
○此着物は何時頃出來ますかね。
◇はい夕方出來ます。
○今夜の語り物は何だらうね。
◇なんだか新内よ。
○猫がなぐり殺されたよ。
◇キヤッと云つて死んだらう
○帽子を忘れて來たんぢやないか。
◇うむ、今氣がついてハッと思つたよ。

東京　中村正藏

笑話

金齒

名古屋　小塚濟敏

金齒を澤山入れてゐる某氏に或る人が、
『此頃金が高く賣れるさうだが、君、その金齒を賣ると儲かるぜ。』
『御冗談でしよ、儲かつても是を賣つたら其日から飯が食べられなくなる。』

負け嫌ひ

山田市　五月晴男

甲野『乙山が僕達の結婚を祝福して、百圓の指環を贈るといつてゐたから斷つてやつたよ。』
細君『まあ、そんな結構なものを何故お斷りなすつたの。』
甲野『實は乙山に俺は大の負け嫌ひだと云つてあるのだ、ところが近く彼奴も結婚するといふことを聞いたものだからね。』

雲隱れの術

東京　北村國治

冨士百人一首

高知 丹瓊寺 洸

◇心あてに讀まばや讀まむ雜誌冨士選り迷はせる面白い記事

◇忍ぶれど口に人氣に出でにけり冨士を讀むかと人の問ふまで

◇音にきく大東京の講談社たゝへて冨士を讀みもこそすれ

◇契りなき座右の娛樂に讀ませつゝ末の寶と冨士買はんとは

◇雜誌冨士獨り讀みつゝ更くる夜は如何にたのしき物とかは知る

數字問答

名古屋市 日比野一男

問 一人でも麗(零)人とは

答 一人でも無頼漢と云ふが如し

問 一人でも藩(半)士とは

答 一人でも班(半)長と云ふ……

問 一人でも産(三)婆とは

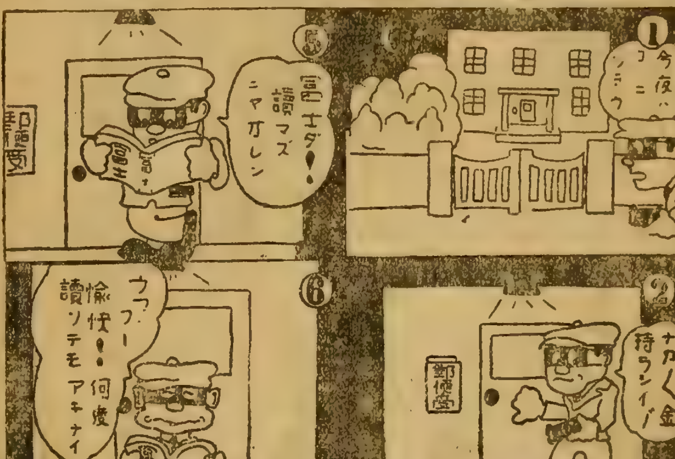
答 一人でも詩(四)人と云ふ……

問 一人でも後(五)妻とは

答 一人でも六(六)部と云ふ……

問 一人でも區(九)長とは

答 一人でも從(十)者と云ふ……



名古屋 岩井吉雄

春は來たけど

兵庫縣 三宅武彦

春は來たけど、あの人見えぬ
來ぬなら來ぬで、いゝけれど

劍道師範『本日は愈々當流の極意、雲隱れの一手を實地指南致すに就ては各々には皆傳料を出しなさい。宜しい、では夕景から再びお出下され。』

門弟一同、謹しんで夕景道場に來て見ると貸家の札。

道理で

靜岡市 吉岡馨

甲『よう、暫くだね其後どうしてる。』

乙『うん、夜も寢ずに働いてゐるよ』

甲『ホ、ウ、感心だね。それで一體何をしてゐるんだね』

乙『夜警をやってるよ。』

大きな蠟燭

東京 本間龍平

與太『昨夜の火事は十軒ばかり

去年の暮の　冬の朝
二人で焚火した時に、
今話さうか　打明きよか

横濱　大高喜久三

此の束燃えたら話さうか
も一つ焚いて　話さうか
思つてゐる中美しい
　娘が來たので　あの郎は
心が變つて　あの人と
行つてしまつて　それつきり
今だに歸りも、お便りも
春は來たのに來はしない
來ぬなら來ぬでいゝけれど
男心の猫の眼に一語云ひたい、恨み言

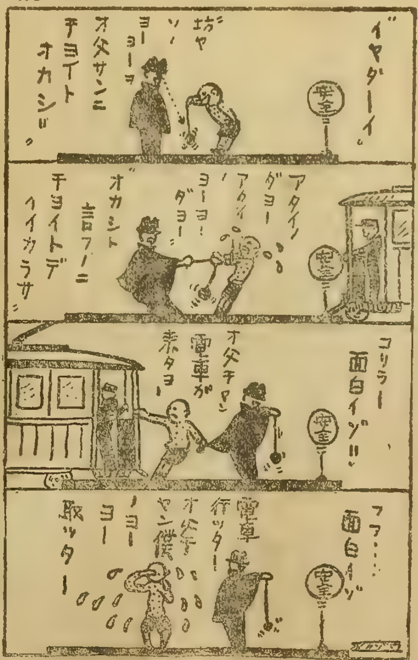
冨士新ラッパ節

三重縣　山本東鷄

冨士はまだかとたづねたら、
明日來ますと云つたけど

一日千秋待つ思ひ
寢てさへ忘れぬ夢の內
　タタ……
冨士が來た〳〵やつと來た
美事な表紙に眼がさめる
口繪や記事に釣り込まれ
食事するさへ忘れてた
　タタ……

横濱　大高喜久三



貧乏神の歌へる

秋田市　水島れい子

焼けたつてね。』
三太『うん、何でも蠟燭一本であれだけ焼いたつてんだから恐ろしいよ』
與太『ふうん、恐ろしく大きな蠟燭があつたもんだね。』

職業的戀愛

宮城　遠藤素水

患者『ねえ、貴方、僕が全快したら、僕と結婚してくれますか。』
看護婦『エー、しますわ。』
患者『サンキユー。』
看護婦『あたし昨日は兩足を切つてしまつた方と駈落ち迄する約束をしてしまつたんですもの、そんなことお安いことですわ。』
患者『エエッ。』

◇美味い物食べ樂しく暮らせ金がなくても氣をもむな

◇朝寢晝寢は毎日止めるな夜は夜遊び怠るな

◇貯金やめとけ節約するな金を持つたらすぐ使へ

◇酒は呑め〳〵呑んだら狂へ金は元氣で逃げてゆく

◇物見遊山は心のまゝよ、誰に遠慮がいるものか

◇仲良く暮らすな怒つて暮らせ笑はぬ門に福は來ぬ

◇贅澤するには遠慮はいらぬ一人で奢侈稅引受けろ

◇今日は觀劇明日は遊山たまにや三日も家空けろ

◇けちは禁物七八おくも男前出せ氣前張れ

◇相場するなら高値を買うて安い所はきつと賣れ

廣島 荒木賢一

冨士の歌

名古屋 石井常雄

一、僕は冨士だ　雜誌の王だ
市の書店の　人氣もの
一番背高く　積まれても
一番はやく　賣りつくす

二、僕は冨士だ　雜誌の王だ
僕は冨士だ　思想の華だ
正しい道を　說きおこす

三、名士の說話　隨筆や
古今偉人の　傳記にも
僕は冨士だ　雜誌の王だ
僕は冨士だ　文化の粹だ
美事な表紙　口繪やら
世界を學ぶ　寫眞集
小說さへも　氣品あり
僕は冨士だ　雜誌の王だ

四、僕は冨士だ　世界の冨士だ
西に東に　汽車汽船
母國の便りを　積み込んで
大和心を　鼓吹する
僕は冨士だ　雜誌の王だ。

話上手

高知 高橋利枝

亭主『今日歸りの電車の中で洋裝の美人に抱きつかれたよ。』

新妻「まあ、あなた、それ本當。』

亭主『本當だとも、電車が停車したはずみに美人がいきなり僕に抱きついたのさ、僕もそこで、うまうま抱き止めてやつたよ。』

新妻『まあ　貴方が抱き止めたの。』

亭主『すると美人は恥しさうに顏を赤らめて僕に云つたよ！』

新妻『な、何んて云つたの。』

亭主『この包みの中には壞れ物が入つてゐましたのに、有難うつてね。』

投稿大歡迎

漫畫、笑話、珍談、奇談、冨士批評等々何でもどし〳〵御投稿下さい。掲載の分には薄謝を呈します。

宛名は　冨士編輯局讀者倶樂部係。

鼻の病 手輕な根治法

捨て置くと頭が悪くなる——治療困難な

恐るべき肥厚性鼻炎急性鼻炎蓄膿症等を一掃出來る

頭腦と鼻は密接な關係

口腔の衞生、保健に就いては誰方も決して注意を怠りませんが、其れよりも大切な鼻腔の健康に就いては案外無關心の方が多いのには驚かされます。

御承知の如く、鼻腔と頭腦とは密接な、而も重大な關係があるもので、今迄非常に成績の良かつた學生が、急に成績が惡くなり、憂鬱になつたといふ原因の大部分は、鼻の病にあるのです。恐るべき鼻腔の故障は前途有爲の青年、少年から記憶力、判斷力を奪ひ、白痴低能同樣にする事實があり、或ひは極度の神經衰弱を惹き起して、家庭は暗く不愉快なものになり、色々な悲劇の原因となつた實例も、絶えず耳にする處であります。

又鼻病の爲、自然口から呼吸する樣になり、知らず識らず思ひがけない病魔に襲はれる危險もあることで、鼻腔の衞生が如何に生活上重大であるかを痛感するのであります。

不快で苦痛な鼻の病

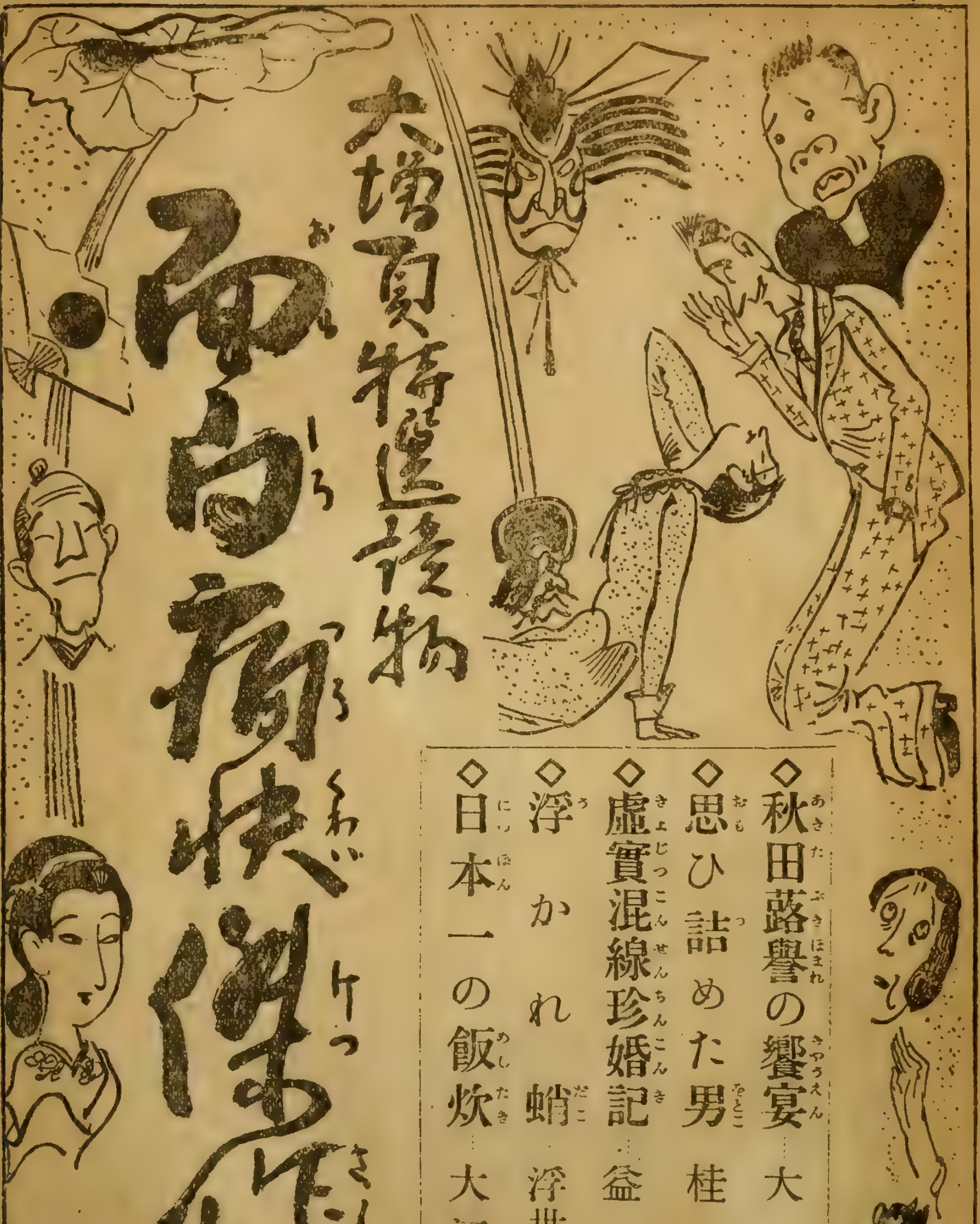
鼻の病で最も惱まされる者の多いのは肥厚性鼻炎と蓄膿症で、是等の治療には外科的處置をするものゝ外、鼻腔の洗滌・藥物の塗布等が行はれて居りますが容易に根治し難く、その苦痛・懊惱、焦燥は、全く想像も及ばない位であります。頭が重く、鼻はいつとはなしに塞がつて思考力が減退し、何とも云へぬ不快な氣分は經驗者でなければ解らない苦しみです、從つて何か經濟的に、手輕に出來る、然も確かな効果のある治療法がないかといふ事は、患者の齊しく考へてゐる處であります。

家庭で治る洗滌法

所が茲に醫學博士高木愼先生實驗御推奬の鼻腔洗滌器『フーピー』は、子供や婦人にも手輕に使用が出來、獨特の洗滌藥により、消炎作用、殺菌作用が行はれ、急性鼻炎は二三回の使用で症狀が減退し、肥厚性鼻炎も數回で快通し、氣分爽快、頭は輕くなり、記憶力・判斷力も回復して何時も愉快に仕事が出來るのです。其他一切の鼻の疾患に著しい効果が認められ、鼻つまり等は一度で快通する理想的のものです。

尚空氣の惡い所や、塵埃の多い所で仕事をしてゐる方や、受驗勉強中の學生方、其他誰方でも朝夕御使用になれば　鼻腔は強健になり、容易に鼻病に冒される事がなくなります。

洗鼻器フーピーは定價一組（洗滌液共）一圓三十錢（送料内地十五錢、領土四十二錢）御注文は東京・本郷・大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）へ。


大増頁特選讀物
面白痛快傑作揃ひ
◇秋田蕗譽の饗宴……大島伯鶴
◇思ひ詰めた男……桂文治
◇虚實混線珍婚記……益田甫
◇浮かれ蛸……浮世亭多苦樓
◇日本一の飯炊……大河内翠山

秋田蕗譽の饗宴

大島伯鶴

上覧相撲の恨か　雜言！

秋田名產と申しまするすると、誰でも直に蕗と言ひまする程、秋田蕗は名代になつて居る。今日でも莖の長が五六尺、葉が雨傘ほどなのがザラに在りまする。樺太の方へ參りまするすると、八尺から一丈に及ぶのも有るといふ事。此秋田蕗を東京へ持つて來て培養を致し、澤山な蕗の薹を岩のやうに出させ、八房とか八頭とか申

して、正月初春の盆栽に致します。偖此秋田名産の蕗につきましては、實に血のにじむやうな感激の話が御座りますので、一層蕗に價値が附くやうに考へられます。

「申すな、内膳！　其方が如何樣に申さうとも、武士の面目ぢや。明日こそは修理太夫、秋田武士の意地にかけても安藝守を眞ッ二ッ……止めるな！　此の期に及んで何の諫言ぢや、聞かぬ〳〵、聞く耳持たぬわえ！」

此處は下谷七軒町三味線堀秋田二十萬五千石の城主佐竹修理太夫の上屋敷で御座います。只今、柳營より御下城の當主修理太夫殿、老臣鳳内膳、山村軍太夫の兩名を前に致し、キリリと癇癖の青筋を立て、血相變へての御怒りで御座います。

「上！　殿中に於て御刃傷とは畏れながら以ての外、如何樣の仔細御座りませうとも、御短慮〳〵、只々御氣をお靜め遊ばすやう。」

「何が短慮ぢや、此れ良ッく承れ。不埒千萬なるは安藝守ぢや。大樹公御出座までの間、予が藤堂和泉守を相手に、國許名産の秋田蕗の話を致し居る横間より致して、此の修理太夫に向ひ僞者などゝ聞捨ならぬ雜言無禮！」

「…………」

「如何に秋田蕗が見事にもせよ。鑵子の如き蕗の臺、孟宗竹の如き莖などとは以つての外、と、滿足に予の話を聞きもせずに安藝守、剩さへ其許の如く大仰に物を申されゝば、予が國産廣島名物の西條柿なども、柳營濠端の捨石ほどもあると申せるなどと、滿座の中にての嘲弄、予は堪忍相成らぬ……これ内膳、軍太夫！」

「へゝッ……」

「予が和泉守に申せしは、秋田蕗の大いなる葉は傘ほどにして、四五人の者が雨宿りをいたし、蕗の臺は鑵子ほど、莖は孟宗竹位と申した言葉が何で僞りである。」

「御意御尤も……併しそれに致しても藝州侯には何の遺恨にて、上へ惡口を申しかけられたで御座りませうや。」

『その理由は元より分明……去る十九日の上覽相撲に、藝州自慢の抱へ力士雁幕善太夫が當家抱への念數ケ關久我藏に負けをとつたる遺趣ぢや、意恨ぢや……』

『…………』

『苟にも一國一城の主とある者が、高が抱へ力士の土俵の勝負を根に持つて、場所もあらうに殿中にて惡口、予に向つて虛言ぢや、僞り者ぢや、武士の風上にもおけぬなどとは、何たる雜言！　容赦はならぬ。明日こそは修理太夫、二十萬石と一命とを塵と擲ち、安藝守を眞つ二ツにいたして、秋田武士の面目を見せてくれるぞ。』

恁様な大名に有り勝ちなる處の、性來癇癖一徹の佐竹修理太夫、拳を震はせ、歯を嚙み、無念の涙さへ滲ませてゐるのでございます……いや、此御贔負といふものは格別で、お芝居では俳優、相撲では力士、今日では野球拳鬪などと、贔負チームや贔負拳鬪家の勝敗に一

喜一憂、頼まれもしないのに勝つたと云つては踊り上り、負けたと云つては泣き出すなんて、誠にファン心理ぐらゐ面白いものはございませんが、御多分に漏れず藝州沼田郡廣島四十二萬六千石の城主松平安藝守、剛氣なお方だけに大變な相撲狂、從つてお抱へ力士も夥多ある中で、特にお氣に入りの東方小結雁幕善太夫、過る日吹上の御庭で將軍家上覽相撲がございましたが、此晴れの土俵におきまして、西方前頭筆頭念數ケ關久我藏の爲めに土俵の砂に埋められてしまひました。サア、面白くないのは安藝守、此れが勸進相撲位ならば兎も角も、一世一代晴れの上覽相撲だから、抱へ力士の雁幕には、石に噛りついても勝つて貰はねばならぬ所を、負けるに事を缺いて、上手投と云ふ華やかな手で投げ飛ばされてしまつた。相手の念數ケ關のお抱へ大名は佐竹修理太夫！　此時の相撲の遺恨が未だ腦裡から消えやらぬ折柄、殿中で將軍御出座を待つ暫しの間、安藝守の耳に聞えて來たのがお國名物秋田蕗の自慢話！　負け相撲の鬱憤が有るところへ、見た事はないが話が餘り大きすぎる蕗の自慢、只何となくムツとした安藝守、修理太夫の方に向き直つて、

『此れ〳〵佐竹殿、他人が知らぬからとて、餘り大きな事は申されぬものぢや。如何に大きくても高が蕗、莖が孟宗竹、葉は鏵子ほどとは、餘りと申せば聞苦しい出放題。世事話に致せ、武士は虚言を申さぬもので御座るぞ、其許の如き虚言者は、武士の風上にも置けぬと申すものぢや……』

此の一言に氣早の修理太夫の片手は、思はず、腰の小刀の柄にかゝつたが、待て暫し！　殿中で鯉口三寸寛ろげても、家

は斷絕其身は切腹！　死する我身は厭はぬが、家名を絕つは先祖へ不孝、また不憫なは家臣共の嘆き！　殿鑑は遠からず、内匠頭の刄傷！――逆流する憤怒の血潮をヂッと堪へて我慢する修理太夫の耳に、無慙にも續けて聞えて來ますのは、傍若無人の安藝守の嘲弄で御座います。

（最早、堪忍相成らぬ！　二十萬石よ、消えも失せよ！）遂に我慢の糸をプッツリ切つた處の修理太夫、滿面朱を染めてあはや小刀の鞘を拂はんとした途端、サラリ！　正面の襖が開いて、

『シーッ、出御ウ〳〵』と云ふ覓播摩守の警蹕の聲！　流石の修理太夫もハッとして、そのまゝ兩手を疊についてしまひましたから、他からは知れません、此れが天の助けとでも申しませうか。……その日は事なく納まつて御下城と云ふ事になりましたが、サテ、事情を聞けば氣早過ぎるとは言ひながら、修理太夫の怒るのも無理はない。が、此まゝ明日の殿中で刄傷をさせては、内膳並に軍太夫の老臣としての役目が立たない。

『上！　お怒りは重々御尤には御座りまするが、一旦のお怒りのあまり、秋田二十萬石に疵がつきましたならば、御先祖樣へ……』と云はせも果ず修理太夫。

『先祖への不孝も承知、家臣の嘆きも心得居る。いや、それ等の事を思へばこそ、今日、安藝守を討ち捨てなんだのぢや……コレ内膳！』

『へゝッ。』

『二十萬石が大事か、修理太夫の武士が大事か。』

『サア……それは。』

恁うなると老朽内膳行詰つて眼を白黑してゐる。

『エヽッ、諫言無用ぢや！』

そのまゝ蒲團を蹴つて殿樣が立上りますと、次の間から、場所柄をも省みず、

『アッハッハヽヽ、ハッハヽヽ。』

と云ふ不敵な高笑が、三人の耳を突きぬけるばかりに聞えましたが、實に青天の霹靂で御座います。

決死の大役　命の道中

『襖の外で笑うたのは誰ぢや、……こりや、何が可笑しいのぢや、怪しからぬ奴、――その分には捨ておかぬぞ。』

殿樣益々御立腹、これは怒る方が尤もで。……襖をガラリと明けまするど、其處に平伏してゐるのは、御小姓の奈川采女で御座います。修理太夫はモウカン〳〵に怒つて、ブル〳〵身體を震はせてゐます。

『予が安藝守に嘲弄されたが可笑しうて笑うたのか、但し今日、殿中に於て藝州を討ち捨てなんだのを笑うたのか。』

『何條もちまして左樣な事を……』

『ウム、左樣でなくば何故笑うた。』

『ハヽツ……畏れながら、上御一心にお思ひ詰め遊ばされたやうに御見せ遊ばして、上席方に御戯れ遊ばすが可笑しう存じまして……』

『何と申す。』

釆女の意外の言葉に、屹と瞳を据ゑて睨まへた修理太夫。釆女の方では臆する色もなく殿樣のお顏を見上げまして、

『憚りながら些細な事に、二十萬石を賭けての御刄傷とは、日頃の上にもあるまじき御短慮、それゆゑ御戯れと存じ上げまして御座りまする。――此れが、事實、嘘僞りを安藝守樣へ仰せ遊ばしたら兎も角、御國産秋田蕗の御物語には、露些かの僞りもなき仰せ……大きなものになりまするど、殿の仰せの通り、葉の下で四、五人の者が雨宿りも叶ひます。又蕗の莖に致しても、孟宗竹に劣らぬ太さ、鑵子ほどある蕗の薹、いづれも秋田に參れば珍らしからぬお國名物、嘘と思はれまするほど自慢の鼻の高い理由と存じまする。』

『…………』

『で御座りまするに因つて、その秋田蕗の本物を一見致さぬ者は、誰しも僞りと思ひまする。其處が秋田蕗の誠の値打ではござりますまいか。……今日殿中で畏れながら殿のお話を嘘僞りと思召されましたは、恐らく安藝樣ばかりでは御座りますまい。御同列方も、左樣に思召されたかも知れませぬが、只御口に出して仰せにならぬだけの事。下世話にも話半分などと申しけなしまする、本物を見せねば成程と合點が參らぬかと存じまする。畏れながら上、此處でござりまする……明日の御刄傷、武士の面目と御座りますれば、釆女決してお止め申しは致しませぬが、見事刄傷遊ばした節に、御列座の御同列方は、何とお思ひになりませうか。』

『ウーム……』

『藝州侯に嘘をあばかれ、言開きならぬからの刄傷ぢや、と取沙汰されうも知れませぬ。さすれば御恥辱の上にまた一層の御恥辱。』

『…………』

『まつた、相手にもよれ、上覽相撲の遺恨から云ひがかりなど致すとは、太守たる雅量品格に乏しき安藝樣、左樣な方に刄傷とは清和源氏たる累代御當家の武名の瀆れ！ サア、左樣な事を遊ばされずとも、今日の仇討は立派に相叶ふ手段が御座りま

する、即ち、名産秋田蕗をとりよせまして、安藝樣始め御同列方に御覽に入れて、僞りならぬ事を示しては如何に御座りませうか、それにても尙ほ且つ安藝樣が兎や角申されたなら、その時こそ！』

『ウム、その時こそ眞ツ二ツと申すのか。』

『ハ、ツ、スツパリと潔よく遊ばされませ、それが秋田武士の誠の面目。』

と言ひますると、再びピタリと疊に額をすりつけました奈川釆女の條理整然たる言葉に、始めて覺つた殿樣に於ては、紅潮した頰にニコリと淋しい微笑を浮べまして、

『釆女、良くぞ申した。いや、若年の身を以つて予を思ひ領地を思へばこそぢや、其方の諫言、過分に思ふぞ。其方の案文至極の工夫ぢや。』

微笑の底に流れる涙、釆女の眼にもまた涙！　美しきは主を思ひ家臣を思ふ主從の溫い情でございますが、サテ、斯うして佐竹修理太夫の猛る心を押へ、累卵の危きに瀕した秋田二十萬石を、一旦安きに置いたところの奈川釆女、此處で小祿の小姓ながら松平安藝守を始め列座の諸侯方に、秋田蕗の本物を御覽に入れると云ふ大役を仰せつかつたのでございますが、一月後になると、佐竹家には參覲交替で御歸國になりますから、どうでも御交替前に仕終はせなければなりません。現今と違つて交通不便な德川時代、早打の駕籠を飛ばせたにしろ、品物を持つて來るのは大變で御座います。その上、只、諸侯方に秋田蕗を御覽に入れたゞけでは何にもならない。當の相手の藝州侯に殿中に於ける雜言過言の詫言を、修理太夫に向つて言はせなければならない。實に決死の大役！　命の道中で御座います。

前髮姿の小姓奈川釆女を乘せた駕籠が、秋田の空へと、三味線堀佐竹侯の上屋敷の表門を、燕のやうにとび出したのは、その日の夕刻でありました。

不思議な一品！

サテ、お話變つて、此方は松平安藝守、何しろ殿中であれだけ激しく罵られたのだから、あの時の權幕から見ても、修理太夫只ではおくまい、まかり間違つたら刄傷沙汰に及ぶかも知れぬと、翌日の御登城は用意周到、他の諸侯方も、何か間違ひがなければ良いがと、いづれも戒心して居りますから、何となく殿中に重くるしい空氣が漲つてをりましたが、どうした事か修理太夫、昨日、藝州侯に詰め寄つた氣勢は何處へやら、いと朗らかな顏を致して登城の上、又涼しい顏でサツサと御下城と云ふ具合、いや、人間なんて不思議なものだ。斯うなると諸侯方、

却つて拍子抜けして落膽と云ふ有様、

『何にしても昨日の今日だ、何か一騷動起るかと存じた所、どうも此れは可笑しな空合であるな。』

物騷な事を當にして面白がつて居たものでさうかと思ふと、

『佐竹家には健忘症にでもなられたのかな……此れから三味線堀の屋敷に參つて、昨日の經緯をお浚ひしてやらうか。』

などと餘計なお節介を考へる大名が現はれます。

『イヤ〱、此れが佐竹侯の手と申すもので御座るよ。今日は斯うして油斷を致させ、明日こそは藝州をバッサリ！』

所が、その翌日になつても相變らず佐竹侯は何處吹く風、其後幾度安藝守に顏を合せても同じ事です。サア、殿中の噂はまた格別蒼蠅くなりました。

『怪しからぬぞ。修理太夫は……何と云ふ腑甲斐ない奴ぢや！』

『誠に佐竹家は腰拔け武士、あれほどの恥辱を受けながら、手出しも出來ぬとは、藝州の申す通り武士の風上にも置けぬ奴ぢや。』

『いや、あの樣な者が申した秋田蕗、話半分にも及ばぬ代物であらうし……』

と、散々な嘲罵の嵐！　蔑視の雨！　その中に、五日、十日と日も經つて、人の噂も七十五日、何日か此の事も諸侯方の口の端から消え去つて、愈々、修理太夫お國入りの日も近づきました。そして、恒例のお暇乞ひの酒宴が三味線堀の上屋敷で催される事と相なり、佐竹侯からして二十七頭の大名に『近日、國入りにつき、お別れの一獻を差しあげたい』と云ふ使者が立ちました。

此の二十七頭とは毛利、鍋島、藤堂などと云ふ大大名方二十七名の總稱で、勿論、藝州廣島で四十二萬六千石松平安藝守樣もその一人、此の酒宴には萬障繰り合せて列席するのが大名方の義理となつてをりました。

愈々、當日――三味線堀佐竹侯の上屋敷に、二十七頭の諸大名が、行列美々しくお乘り込みに相成る。饗應のお座敷は、善を盡し美を窮めた大廣間、ズラリ、綺羅星の如く居流れた諸大名方に向つて、先づ、當主修理太夫の御挨拶があつてから、三汁十一菜七五三の御料理が、御各自にくばられます。餘興はお庭先に於ける若侍の武藝。宴半ばに致してお座敷に灯が入り、修理太夫の指揮で、おしき皿と云ふ、白高麗の皿を諸侯方にくばりました。が、サテ、白高麗のおしき皿はくばられましたものの、此れに如何なる珍味が盛られるだらうかと、山海の御馳走に飽きてゐられる大名方ながら、多少の好奇心をもつて相待

つ中に、威儀を正して末座から現はれたのは奈川釆女。此の日、特に中老の格式にて名前も奈川丈左衞門、前髪も綺麗に剃り落し見違へるばかり立派な侍姿になつて居ります。後に従ふ小姓が捧げる器から、一ツ〳〵しきい皿にお菜を取り分けてしまひまするると、遥かに末座に下つてピタリと兩手を突いての口上です。

『上々御一統様へ、畏れながら此れより御披露申しあげまする。手前は當家の家臣奈川丈左衞門と申しまする者、今日、不束ながらも御一統様に御献立萬端、御饗應つかまつりまするのが手前の役目に御座ります。――就きましては、只今、それに差上げましたる品、何卒、御賞味下さりまするなれば、丈左衞門、有難き仕合せにござりまする……』

と、音吐朗々と述べ終つて、そのまま丈左衞門は、疊に平伏いたしたのござい ますが、サテ一同、しき皿の上に盛られた一品をヂーツと眺めて、一様に不思議さうに小首を捻りましたけれど、何だか判り兼ねました。これは無理も御座いません。

忠節覺悟の白裝束

何れはおしき皿に出す御下物、多少は變つた品とは思つてゐたが、此れは意外、いや、奇妙不思議と申さうか、鴨のそぼろがかゝつてゐるだけは判りますが、厚さ一寸五分位で渉り四、五寸もあらうといふ變挺來の丸い一物、どう見た所が一向に見當がつきません。

毛利侯が、

『ハテ、此れは珍らしい品。自體、何でござらうな。』

『されば、不思議な筒切……丸太の甘煮ではござらぬかの……』

まさか、そんなものを出す筈はございません。一同、暫く考へてをりましたが、先づ最初に箸をおとりになつたのが仙臺の伊達侯、流石はお大名です。珍しいからと云つて、我々の樣に、ムシヤ〳〵嚙り出すなんて不調法はいたしません。箸で四ツに挾み切つて見ると誠に柔い。口に入れると、いゝほろ苦く、溶けるやうな味ひです。傍にゐた鍋島侯が、

『仙臺家、如何ですかな、味ひは。』

『サテ……何とも申し樣もない珍味。』
『甘うござるかな。それとも辛うござるかな。』
『甘からず、辛からず、ちよつとほろ苦い味があつて、舌に乘せればとろけるやうな柔かさ。愚考仕るに、熊の胃の砂糖漬ででもござらうか。』

此の殿樣なか〳〵洒落者でございます。その中に各自箸をお取りになりましたが、サテ、只、柔い、旨い、此れは珍しいと感心するばかりで、誰一人、その何であるかを食べ當てる者がございません。此の樣子を、末席にあつてヂーツと見つめてゐた處の奈川丈左衞門、頃合を見て膝を進ませまして、

『畏れながら御一統樣に申上げまする。只今、差しあげましたお下物、如何やうの品と御風味下し置かれましたるか、御伺ひ申上げまするると、訊ねまするると、伊達侯が、

『いや、結構なる珍品、いづれも感心いたしてをるが、頓と相判らぬ。丸太の甘煮だの、熊の胃の砂糖漬だのと申し居つてなハヽヽヽヽ。』

非道い大名もあるもので、自分で云つた事まで他人のせゐにしてをります。

誰も材料が判らぬと云ふ言葉を聞いた時に丈左衞門が、

『お言葉恐れ入り奉ります。お判りにならぬ物を差し上げたとあつては、上々方に却つて御無禮と存じまする故、一應御披露いたしまするが。』と一段と聲を強めて一座を見渡しながら、

『それなる品こそ、當家領分秋田名産の蕗の筒切り！』
『なツなんと、此れが蕗とな……』
『ハ、ツ……卽ち、蕗の莖を輪切りに致しましたる一品、手前主人、自慢の國産、御一統樣！　只今、正の儘の實物を御目にかけますに因つて、篤と御覽を願ひ上げまする。』

と、云つたと思ふと、後退りにツ、ツと緣先に進み出でて、サツと開いた白扇！　高らかに揭げると同時に、

『幕、除けツ。』の號令一下！——今まで宏壯な庭園の半を區切つて、張りめぐらされてゐた定紋染出しの幔幕が、その聲に應じてスル〳〵〳〵ツと引き除けられまするると、其處に現れたのは、その庭園の半ばを埋めた蕗の林で御座います。

『あツ、コレハ』
『おう！　見事ぢや。』

諸侯方の口を衝いて漏れた驚嘆の聲！　丈左衞門の瞳は火のやうに燃えてゐる。これこそ、小姓奈川釆女が主君大事、主家大切の一念に燃えて、晝夜兼行の決死の道中、百幾十里の山河を早駕籠を飛ばして、國表より運んで參つた秋田の蕗だ。三百本、五百本、いや、それ所であらうか千本餘！　しかも、大い

なる葉は直徑一間もありませうか、小さいのでもから傘位、蕗の莖は鎌子の如く、その莖は孟宗竹よりも尚ほ太い。

『御一統様！　これが秋田の名物蕗の正物、お疑ひが御座りますれば、憚りながら間近うお運びになつて御覽下さいますやう。些少の細工も施さぬ其身其儘の秋田蕗！　卒爾ながら本日の御土産として差し上げまする所存、御受納下さいますれば、恐悦至極にございまする……』

『ウム、見事ぢや。流石は音に聞く秋田蕗。』

『日本廣しと雖も、斯る名産は數あるまい。』

再び湧き起つた激賞の聲！　讃美の嵐！　此の中にあつて只一人、面を蒼白に變へて、膝に置いた拳をワナ／＼と震はせてゐた松平安藝守、剛氣の太守だけに此のまゝ默つてはをりません。キリ／＼と齒を食ひしばつたと思ひますと聲を强めて、

『文左衛門とか！　今日の饗應、安藝守辱く存ずるぞ。入國の酒宴に事よせ、諸侯方列座の前で、殿中批判の復讐を致すか、無禮であらうぞ。陪臣ながら武士ならば、其方何故武士らしう堂々と復讐せぬのぢや。』

『御前！』

『申すな！　佐竹殿に置いても又その通り、過日、殿中にての予の言葉を、無念と思はれなば、何故に直々に向うては參られぬ。秋田蕗の大いなるを見せて、窃かに嘲笑致されるなどとは、苟にも一國一城の主として、卑怯なる振舞、安藝、列席御免蒙る。御一同！　御免！』

血相變へて立ち上つた安藝守、だが、此のまゝ引き取られては、文左衛門が命をかけての役目が立たない。ツカ／＼ツと、その前に進み出でて、ハツと平伏致しました。

『御前！　暫く、御待ち下さりませ。陪臣の身をもちまして御言葉返すは御無禮ながら、文左衛門奴は兎も角、主人修理太夫を卑怯とはお情なきお言葉！——過日、殿中に於ての御前の御嘲弄、主人修理太夫の憤りは元より、翌日御出會ひ申さば只一討とまで御決心なされたなれど、情深き修理太夫には、家臣一統の嘆きを思召し、ならぬ堪忍の糸を結んでの御我慢……卑怯者よ、意氣地なしとの殿中の取沙汰も、家臣の爲めとヂツと堪へて、空吹く風と聞き流された御心中——これが、御前の仰せの通り、噓僞りを申されたなら餘儀ない事、眞を眞としての御物語に御座りまする。主人へかゝる疑ひの汚名を洗がずんば臣下としての路立たず。それには秋田蕗の正物を御一統様に御覽に入れるより道無しと存じ、國表よりして取りよせましたるこれなる蕗！』

『…………』

『お家の爲め主君の御爲めと國侍が、百里に餘る道中を、一枚の葉も傷めまじと心を配つて、夜の目も眠れぬ必死の辛苦！　その甲斐あつて今日只今、御一統樣の御一覽を仰ぎましたるこ

れなる秋田蕗！　鑵子の如き莖、孟宗竹の如き莖、傘ほどの葉と申せし主人の言葉に、露僞りなき事は、此れに、御見屆け下された事と存じまするが、諺にも山高きが故に尊からず。大きいばかりが自慢ではござりませぬ。その味ひも只今、御風味願ひましたる通り。御前！　改めてお伺ひ申上げまするが、これにても主人が殿中の物語りを、噓僞りと仰せなさりますか。』

『ウツウーム。』

『主人修理太夫を武士の風上にも置けぬ虚言を申す者と仰せ遊ばしまするか。』

『サア……それは。』

『畏れながら奈川丈左衞門、藝州の御前に此の儀についての確乎とした御返辭を承りたう存じまする。……過日、殿中に於ける御言葉を主人修理太夫の前にて、お取り捨て下さる樣、一重に願ひ上げ奉りまする……』

只一念、忠節の至心から迸る丈左衞門の熱火の如き辯舌、滿座

た。殿中で申せしは余の無作法ー
ーと、修理殿に詫びを申さば兎も角も、若し此の安藝守、飽くまで詫びぬとあれば如何いたすか。』

『…………』

『斬るか。主人に代つて安藝守に刄を向ける所存であらうな。』

『何條もちまして、左樣な事を……憚りながら丈左衛門、御前御一人の此御席におきまして、刄を向けるなどと云ふ、左樣な卑怯な振舞を致しませうや。丈左衛門は秋田武士に御座りまする。』

『ウム……然らば、安藝守も武士らしく、佐竹殿に過日の詫びを致さう。』

『へゝッ！』

『したが、丈左衛門、主家主君の爲めとは申せ。苟にも從四位上少將を受領致す予に對し、只今までの無禮な言動、此の儀は許す事相叶はぬぞ。主人の面目を立てたる上は、その後の成敗は覺悟であらうな？』

聲なく、水を打つた如くシーンと致して、百目蠟燭の灯のみ徒らに明るい。やがて、安藝守は更に聲を荒らげて、

『ウム、成程……秋田蕗の大いなる事、目前にいたして相判つ

『ハ、ッ……その儀、仰せまでもござりませぬ。』

『良い覺悟ぢや……』と小姓が守護する太刀を鷲掴みにしたる處の安藝守『佐竹殿！　丈左衞門の命は此方が貰うた。よもや御異存はござるまいな。』

『……陪臣の身を以つて御歴々に無禮の段々……憎くき奴……藝州殿、御……存分に……』

修理太夫の双眸に滲む涙の露！　憎き奴とは可愛い奴と同じ心だ。戰場ならば、敵の大將の首討ち取つたにも等しい殊勳の釆女！　褒め讃へたその上で、如何樣にも取り立ててやらうものを……斯程の手柄を立てながら、諸侯方の手前、良くやつてくれたの一言も得云はずに成敗させる修理太夫の苦しさ！　辛さ！　丈左衞門の心も同じだ。此れが今生の御永別！　役目を果して死ぬ身をば、露惜しとは思はぬが、主君の顏の見納めかと思へば、我知らず滲む不覺の涙。

『上……』

『丈左衞門……』

僅かに交はした一語に千萬無量の思ひを罩めましたが、然し悠揚として迫らず、進み出でたお庭先、靜かに裃の肩を脱ぎますると、下は覺悟の白裝束で御座います。

『ウーム……、良い覺悟ぢや。』

『藝州四十二萬石の御城主が、直々の御成敗、冥加至極にござりまする。』

泰然と首の座に直つたところの奈川丈左衞門、後に方つてスパーリ！　鞘走つたのは安藝守の秋水三尺。

『エイツ！』と一閃！　紫電空に閃めいたと同時に、血飛沫たてゝ丈左衞門の身體が、バッタリとのめるかと思ひの外、意外雪白の衣に一點の血の色も染つてゐません。

『丈左衞門！　成敗濟んだぞ。』

『えゝッ、何と仰せなさります。』

峰打ち！――思はず、兩手を突いて安藝守の面を見上げた丈左衞門。安藝守の面には、今までのけはしい色はなく、溫い微笑さへ口邊に浮べて、

『此れで良い……此れで良いのぢや。此の峰打ちで余の顏が立つた。丈左衞門！　安藝守は今ぞ改めて汝の主人修理殿に詫を申すぞ。』

『御前……』

『思へば、安藝守こそ卑しい心態であつた。……些細な事を根に持つて殿中での無禮の數々、しかも、僞りを申した秋田蕗は、此處にある通り見事なものぢや。安藝守は、穴へも入りたう思ふぞ、許しくれい。』

『…………』

『丈左衛門！ 白裝束を着ての健氣な覺悟、若年ながら良くそれほどの覺悟をいたした。いや、その覺悟がなうては、主人の恥辱は雪げぬわえ。』

『へゝツ……』

『修理殿。』

『…………』

『良い御家來を持たれてお仕合せな事で御座る、安藝、心からお羨しく存じ申すぞ。……思へば、拙者に丈左衛門ほどの家臣があらば、今夕、斯る思ひを致さずとも濟まうものを……いや、殿中の事あつてより二十餘日、思はぬ恥を持ち越さずとも濟まうものを……彼の日、屋敷に歸つての拙者が自慢話を、良くおやりなされたの、さぞお快よい事であつたらうのと、追從するものはあつても、拙者の無禮を諫める者とては一人も御座らなんだ……。諫言は苦いもの、苦きが故に貴きものぢや。安藝は恥しながら、他家の家臣にその尊い諫言をして貰ひ申した……』

『丈左衛門！ 此の後とも、主家に忠勤を抽ん出る事を忘れるな。此の一刀は今宵の褒美として、其方に取らせる。』

命を絕たれる刄は、今、その忠節を賞づる贈物として、丈左衛門に遣はされました。

その丈左衛門の姿を見凝める佐竹修理太夫の頰には、止めても止まらぬ涙が、瀧津瀨のやうに流れてゐたのでございます。

誇れ！ お國名物秋田蕗

一時は暗澹たる空氣に包まれたお國入り御暇乞ひの酒席も、斯くして再び明るく華やかな世界に立ち返りました。並みゐる諸大名方の丈左衛門に對する感激はまた格別、我も〳〵とお褒めの言葉を浴びせると同時に、それ〳〵の御褒美が、思ひ〳〵に下されます。

『丈左衛門！ 誠忠の志より出でた今夕の働き、余が家來共の鑑とも相成る。當座の褒美ぢや。』

と、お腰の印籠をお下げ渡しに相成るかと思へば、

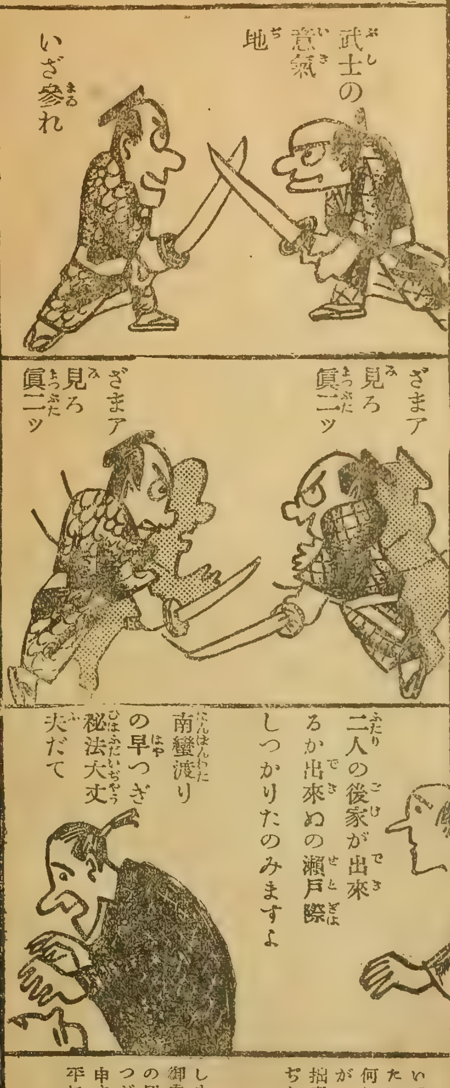
『何日までもその志を忘れずに、當家に忠節を盡せよ。』

と、見事な脇差を下される。あちらからもこちらからも丈左衛門！ 丈左衛門！ と大變な騷ぎ、忽ちの裡に丈左衛門の周圍には、御褒美の山が出來てしまひましたが、中には餘り同じ物では面白くない、何か變つた品物を、と云ふんで、お考へになつた大名が、

『丈左衛門、余は特に變つた褒美をつかはす。遠慮なく受け

い。』
『ハヽツ、難有き仕合せ……』
と、丈左衞門が恐る〳〵受け取ると、お椀の蓋！
『丈左衞門、定紋入りぢや。大事に致せ。』
非道い大名もあるもので、定紋入りの蓋も結構ですが、此れが佐竹家の定紋、後で結構なお椀の蓋が一つ足りないので御膳所で大騷ぎをしたと、物の本に出てをりますが、此れは當てにはなりません。サテ——冗談は兎に角といたしまして、若年の身で主君の恥辱を雪ぎ、立派に大役を果し終せた奈川釆女、二十萬五千石に疵一つつけなかつた殊勳は格別とあつて、一躍、千石の御加増にあづかり、名前もその奈川丈左衞門として中老格に取り立てられましたが、此の事が二十七頭の諸侯の口からそれ〳〵の御家中へは元より、他の諸大名の耳にも傳はり、評判は評判を生んで、忠臣奈川丈左衞門の名と共に名產秋田蕗の名も諸國に喧傳されました。此れが爲め秋田蕗の販路が大擴張、今日まで秋田と云へば、誰でも直ちにその名產の蕗を思ひ出すほど有名になると同時に、只今では秋田縣下隨一の重要物產として重きをなすに至りました。
　名產秋田蕗の由來と題する講談、餘りお長くなりますから、此の邊にて筆を擱く事といたしまする……

あわて醫者
中島菊夫



長生不老の原因となる
ホルモン腺の强健化

=神經衰弱・老衰・不眠症・精力減退=

=一般生殖器障害の療法は之に限る=

人間は貴賤貧富の別なく

長生きをしたいと思はぬ者はなく、老いたる者も『若返りたい』『精力を旺盛にしたい』と四六時中望んでゐられることゝ思ひます。

この人間通有の弱點につけ込んで、いかゞはしい『若返り藥』とか『ホルモン補給藥』と稱するものが澤山あらはれ、誇大な廣告をして盛んに吹聽しますが、多くは强精、健腦は二の次で重に催淫を目的とする極めて不親切なものであることは一度經驗して見ればすぐ解ります。斯樣な藥劑は、脊髓中にある生殖器の神經中樞神經を刺戟して性慾を一時的に昂進さゝる作用がありますから、何も知らない素人の方はさも効いた樣に考へますが、事實はその反對で、若返りや長生き所かかへつて自然に反則した危險な事であります。

人間でも又他の動物でも

精神の發達、肉體の發達のためには必要缺くことの出來ないのがホルモンです。このホルモンとは體內の樞要部分にあるホルモン腺から絶えず滲出する分泌液で、若しこの分泌が衰へるとすぐ腦力も神經も生殖作用もめつきり衰弱するといふ恐ろしい結果を招來するのであります。したがつてこの分泌力を旺盛にすれば、如何なる重症の腦神經衰弱も性的神經衰弱も根本から驅逐し、早老者、老衰者をも眞に若返らせ、血も肉も、精神も生々潑剌と青春化することができるのであります。斯樣な神秘的作用あるホルモンを發見してくれた恩人は英國の大生理學者スターリング氏であります。

若返り藥「精壯」は實に

このスターリング氏の學說に基き研究發見された最新藥で、服めばたゞちに體內各種ホルモン腺や一般神經の榮養となり、神經、ホルモン腺を强健化し分泌力を旺盛ならしむる作用あるもので、在來の特効藥と稱するものに多く見る一時的の刺戟、一時的の昂奮、一時的の鎭靜、或は下等動物の不純なホルモンの力を借りて一時的の補給を目的とする姑息な若返り藥とは雲泥の相違があります。『精壯』の應用範圍は實に廣いのですが、素人に最も分り易い症狀を申上げて見ますれば、頭が重くて痛む人、夢を見る人、首筋から後頭部がつり肩が凝る人、神經が過敏で氣がいら〳〵する人、熟睡出來ぬ人、精力が衰へ根氣なき人、記憶力、思考力のなき人、性慾が減退し快感が缺乏したり、又全く感じられない人、陰萎、早漏の人、老衰者などには實に理想的のものです。惱める方はまどはず、おくせず一時も早くこの『精壯』に御信賴下さい。

大瓶（三週間分）七圓、小瓶（一週間分）二圓五十錢で送料は內地十五錢、領土五十錢。東京本鄉駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）でお取次致します。

落語 思ひ詰めた男

桂文治

清水對岳坊畫

『何うした、一寸もやつて來ないと思つたら身體の工合が惡いさうだね。』

『あ、旦那ですか。何うも御親切さまに有難う御座います。けれど旦那、もう今度ばかりは不可ません。ウーン。』

『唸るなよ、みつともない。然し不可ないッて何が不可ないンだい。』

『何もかも不可ないンで――』

『何うかしたのかい。』

『何しろ目の先へチラ／＼、チラ／＼――』

『オイ／＼妙な聲を出すなよ。だがさう言へば大層髯ボウ／＼として、平生から餘り美男て方ぢやないけれども、とりわけ醜い面になつたナ。』

『何しろ病氣なんで……。愈々これが此の世のお暇乞ひで御座います。さらば、さらば。』

『心細い事を言ふなよ。確かりしなよ。』

『私は此の東京には身寄も親類も何もありません。死亡通知を出したつて來て呉れるものは一人もありません。ですから何うぞ、我が亡き後は線香の……』

『言ふ事が可怪しいな。確かりしなよ、冗談ぢやない。病は氣からといふ位だ。さう氣を落しちまつちや不可ねエ。少しは食慾があるかい。』

『それが全く駄目なんです。物がロクに咽喉を通りません。』

『そりや困つたな。』

『ですから昨日もつく／＼考へました。何うせ死ぬなら此の世の思ひ出に、平生好きな豆大福を、食へるだけ喰べて見ようと、お隣りの小母さんに頼んで、八十錢買つて來て貰つたんで。』

『大層買つたのだな。』

『さうして一生懸命喰べて見たんですけれ共、矢張り駄目です。たつた二ッ――』

『二つしか食へなかつたか。』

『イエ殘したんで――』

『食慾がありすぎらアな。丈夫な者だつてさうはくへねえ。だが醫者に見て貰つたか。』

『イ、エ。』
『藥は何を服んで居るんだ。』
『何にも服みません。』
『醫者にもかゝらずお藥も服まなきや癒らねエのは當然だ。然し一體何の病だ。』
『それが駄目なんで……』
『駄目といふ病氣はないよ。何といふ病氣なんだ。』
『アー草津よいこと、一度はおいで――ドッコイショ。』
『エ、吃驚した。何だつて突然に草津節なんか唄ふンだ。』
『そのお醫者さまでも、草津の湯でもといふ病氣なんで。』
『氣味の惡い聲を出すなよ。だが平生から親子のやうな間柄のお前と俺だ。俺に言へない事はなからう。何ういふ病氣だか言つて見ねエ。』
『平生から理窟つぽいといふ評判だが、なるほど旦那は今はの際まで理窟で攻め立てる』
『憐れつぽいことを云ふなよ。サア言つて見ろ〳〵。』

『よろしう御座います。では言ふことに致します。全く旦那には色々お世話になつて居ますから、全然言はないと言ふのは貴下に氣の毒だ。』……
『話が妙だな、えらく恩に着せるな、まあいゝや。思ひ切つて言つてしまひな。』
『言ひます。然し旦那、旦那は私の病氣を言つたら、屹度アハアハと笑ひます。』
『馬鹿な事を言ふなよ、世の中に人の病氣を聞いて笑ふ奴があるものか。聞いて氣の毒で泣くかも知れねエが、笑ふなんてそんな事は金輪際ねエ。』
『さうですか。では旦那屹度笑ひませんか。』
『笑はない。何なら怒る。』
『怒らなくつても好う御座います。然し何だか旦那の顔は、斯うしてつく〳〵見ると笑ひさうな顔だ。第一しまりがねエ。』
『ヤイ〳〵丈夫な者をつかまへて馬鹿にするない。大丈夫だ、決して笑はねエ。笑はねエから言つて見な。』
『さうですか。では思ひ切つて言ひますが、萬一旦那が一寸でも笑つたら私は旦那の咽喉笛へ食ひつきますよ。』
『生命懸けだな。ヨシ、笑はねエ。言ひなよ。』
『では愈々言ひますが、一寸表を締めて下さいな。』
『表は障子が閉つてるぜ。』
『障子ばかりぢや不可ません。戸をみんな締めて下さい。立聞でもされると物騒だ。』
『ヨシ〳〵。サア表は戸締りをしたよ。だから言ひな。』

『まだ臺所の窓が開いてます。』
『それぢや眞暗になつちまふぢやねエか。サア臺所の窓を閉めた。』
『ア、そこに猫が居る。』
『猫なんか居たつて構はねエぢやねエか。』
『猫は魔物ですから――』
『シッ〳〵、サア猫も追拂つた。もうそれこそ誰も居ねエ。』
『まだ不可ません。お前さんが居る。』
『何を言つてるんだナ。サア早く言へ〳〵。』
『では愈〻言ひますよ。覺悟をして下さいよ。』
『大變なことになつたなあ。』
『そも〳〵私の病氣は。』
『氣取つちや不可ねエ。何だい。』

『はづかしながら――』
『何うした。』
『戀病氣――』
『エ、? お前が――戀病氣? アハアハ。』
『ヤア笑つた。旦那、私ア咽喉笛へ食ひつく――』
『ア、待つた〳〵、待つて呉れ。イヤなるほどこりや俺が惡かつた。笑やしねエ。然し世の中に不思議な事があるものだナ。お前は酒は飲まず烟草は喫はず、女なんぞにや見向きもしねエ堅い人間なんだが、それに遠慮のねエところ面の醜い方ぢや大概な人間にや負けをとらねエお前だ。それが戀病氣とは妙だナ。へ、エ。』
『旦那、感心してるどころぢやありません。』
『感心もするよ。イヤ然しよく打明けて呉れた。ところでその相手は誰だね。』
『へエ。』
『だからよ、そのお前の戀病氣の相手は誰だといふンだ。大概な者なら一骨折つて私が媒介人の橋渡しをしてやらうぢやないか。』
『有難う存じます。けれどさう力をつけて下すつても、迚も駄目なンで――』
『よく駄目、駄目といふ男だな。然し最初からさう力を落して居ちやそれこそ駄目だ。まあ誰だか言つて見なよ。』
『言へません。これだけは勘辨して下さい。』
『何も讓る事はねエや。ヨシ〳〵、では俺の方から一つ當てゝ見よう。からッと、先づ此の近所ではお前が煩ふ程惚れる娘は――此の近所は娘が多いが……表の烟草屋のお富士ちやん、ありや去年婿が來てもう子供が出來ちまつたナ。では三味線屋のお糸ちやん、あれも近々婿が來るんださうだナ。すると豆腐屋のお豆ちやん――ありやまだ今年五ッだ。へテナ、誰かしらん。』
『實は、その、何で――では思ひ切つて白狀しますが……』
『言ひねエ〳〵、人間一人の生命に關はる事だ。一肌脫いでやる。一體誰だ。』
『實は表通りの吳服屋のお花さんで――』

『呉服屋のお花さん？ あの越前屋さんの娘かい。なるほど、取つて二十、越前小町と綽名のある評判の娘だ。容貌が好くつてヘイカラで、それで優しくつて利巧者だ。學校は女學校を卒業して居るし、緣談が雨の降るやうにあるといふ話だが――然しこりや何だな。先づ第一に向ふは此の土地でも指折の財產家だ。ところで此方は亦此の長屋の中でも指折の――貧乏人だ。』

『なるほど。』

『感心するにも當らねえ。第二に今も言ふ通り向ふは利巧で容貌が馬鹿に好い、ところがお前の方は――まア馬鹿ではねエが、容貌が馬鹿に……好くねエからな。』

『へエ。』

『だが何かい。一體まあ何ういふ機會でお前あのお孃さんに惚れたんだ。』

『へエ、私が見染めたのは……』

『ヤイ〳〵、もつと穩やかな事を言へやい。お前は見染めたいといふ柄ぢやねエぞ。だがまア好いや、ウンお前がその、見染めたのは？』

『實は去年の暮、然かも大晦日の日で御座います。正月締めようと思つてあすこへ辰公と一緒に褌を買ひに行つたンで。』

『呉服屋へかい。そりや氣が利かねエな。下帶なんかお前、何も越前屋へ行かなくつたつて、橫町の小切屋で澤山ぢやねエか。好い若エ者が二人も面を揃へて、大きな呉服屋へ六尺を買ひに行くなんて――』

『マアさうポン〳〵言はないで話を聞いて下さい。』

『ウン、さうか。で、何うした。』

『すると恰度店にあの娘が居ました。それから私が、濟みませんが晒布を六尺お吳ンなさい――と言つたら、へエと言つて小僧が立つた時、お花さんが――オヤ貴君は此の先の裏のお方で御座いますわね。よくお稼ぎなさるッて家で皆褒めて居りますよ……』

『利巧な娘だなア、ウンそれから。』

『だからあの定吉や、一尺ばかりおまけにしてお上げよ――ッて、小僧に言ひつけて七尺吳れました。』

『褌を一尺まけて貰つても仕樣がねエな。』

『けれど切つて使へば布巾になります。』

『そりやさうだが、へ、エ、それから何うした。』

『さうして私が歸る時ニッコリ笑ひましたが、途端に私は全身がフワ〳〵、フワ。』

『ウーム。』

『さてそれからと言ふものは寢ては夢、起きては現、まぼろしのウ――』

『浪花節をヤッちや不可ねエ。』

『火鉢の前へ坐ると鐵瓶がお花さんの顏に見

えます。寝ようとすれば枕が娘さんの顔に見えます。立たうとすれば時計が娘さんの顔に見えます。何から何までがみんなお花さんの顔に見えるんで。旦那のその藥罐頭だつてあの娘さんがその時結つて居た高島田があるやうに見えます。旦那のその長エ面も……』

『ヤイ〳〵止さねエか。いゝ、いち〳〵旦那、旦那つて俺の面のざんそを言ふない。』

『イエ全く何から何までがあの娘の顔に見えるんで。それからまた娘さんの顔を見に行かうと思つたんですが、相手が吳服屋なのでさうは買物も出來ず、仕方がないから態〻廻り道をしては幾度も前を通つたんですが、それきりお花さんは店へ顔を出しません。到頭落膽して、さてそれからと言ふものは――』

『浪花節は止せといふのに。然しなるほど、マアさう氣を落す事はねエやナ。目も口ほどに物を言ひ――ッて事がある。お前の顔を見てニッコリ笑つたといふンだから、滿更でもねエだらう。然しお前獨りでさうクヨ〳〵思つて居た所で先方へ通じるものぢやねエ。何とかして先方の心を探つたら好いぢやねエか。』

『へエ、ですから私も色々工夫しました。もツとも私一人の智慧ぢや迚も駄目ですから隣りの小母さんにも打明けて考へて貰ひました。』

『隣りの洗濯屋の婆さんか。あれはもう世の中の酸も甘いも知り盡した梅干婆だ。巧い工夫がついたらう。』

『婆さんの言ふには一押、二金三男といふ位だから男前なんぞは何うでも好い。一生懸命圖々しくおしなさい。お前さんは地が圖圖しいからもう一奮發すれば見込がある――』

『ヅケ〳〵した婆アだな。ウン、それから。』

『越前屋のお孃さんは私が出入して居る仕立屋さんへ裁縫のお稽古に通つて居るから、それを機會に何か着物を賴んで御覽なさい。瓦斯銘仙か何かを店で買つて、その反物の中へ想ひのたけを書いた手紙を入れて賴んで御覽なさい。先方でよろしう御座います。縫つて差し上げませうと言へば、勿論反物を開けて見て手紙も見た上の返事だから十中八九は此方のものだ――と斯う言ふンです。』

『巧いな。なるほど。さうしてお前賴んだのか。』

『羽織を賴みました。奮發して銘仙に甲斐絹の裏をつけて、一晩寝ずに考へて書いた手紙をその中へ入れて婆さんに持つて行つて貰ひました。』

『反物を突返して來たか。』

『イヽエ、不出來で御座いますが、それでよろしければ縫はして頂きます――といふ返事なんで――』

『〆めたナ。ではそれで好いぢやねエか。』

『ところがそれつきり羽織も出來て來なけれ

ば返事も來ないンです。』

『だがさう急いたつて仕樣がねエ。斯ういふ事は氣を長く持たなけりや駄目だ。』

『ヘエ、然し隣りの小母さんも餘り永いから催促して見ようツて、先刻仕立屋へ出掛けました。もうやがて歸つて來る時分で――』

『フンさうか。一刻千秋てエやつだナ――ヤア〳〵婆さんが歸つて來たぜ。オヤ風呂敷包を小脇に抱へて居る――』

『エツ、本當ですか。』

『オイ起き上つて駈け出しちや不可ねエ。』

『小母さん〳〵――何うした〳〵。』

『ヤーレ〳〵、熊さんお悦びよ。此の通り羽織は出來上つたよ。』

『有難エ〳〵。』

『さう押し頂いて居ねエで中をよく檢めて見ろ、屹度手紙があるから、振つて見な〳〵、パタリと落ちるだらう。』

『旦那、何も落ちて來ませんぜ。』

『そりや可怪しいナ。返事の手紙がなけりやならねエ筈だが――待て〳〵あの娘は利巧者だ。途中で落されでもしてはといふので、屹度そりや何だぜ、羽織の何處かに縫ひ込んであるに違エねぜ。よく方々探して見ねエ。』

『なるほど――オヤ〳〵此の襟先の所が一寸膨れてます。』

『それだ〳〵。オイ婆さん、鋏で一寸そこをほどいて見ねエ。』

『ヘイ――オヤ熊さん、旦那の言ふ通り襟先から斯んな物が出て來たよ。』

『オヤ旦那、斯んな紙包が出て來ました。』

『紙包？ 手紙ぢやねエのか、可怪しいナ。マア開けて見な。』

『ヤア〳〵中に一圓紙幣が一枚這入つて居ます。』

『一圓紙幣？ 愈々可怪しいナ。何とか書いてあるか、その紙包に。』

『ア、あります〳〵。』

『何と書いてある？』

『エーと……』

これで鏡をお買ひ遊ばせ――

（をはり）

豆ノート

○新聞紙をひろげ、それを對角線に右の上の角から左下の角に折ると其の折目の長さが約一米、知つておくと便利。

○障子の曳手に南天の葉を貼込むのは「難轉」即ち「難を轉ずる」の緣起。改まつた客間などにはせぬ事。

○室内の空氣は千分の一以上の炭酸瓦斯がたまると有害とされてゐる。冬は特に換氣に注意せねばならぬ。

ユーモア小説

虛實混線珍婚記

益田甫

川原くにを畫

1

『澤田さん。ちよいと。』

と背後から呼びかけられて、僕は振り返つた。タイピストの宮井和歌子孃である。

『何ですか?』

『お食事にいらつしやるんでせう。私、御一緒に行つちやいけない?』

『好いですとも。』

僕等の會社には、タイピスト、女事務員、受附の給仕などを加へると、かれこれ十五六人も職業婦人が働いてゐる。宮井孃はその中でも特に光彩を放つてゐた。瓜實顏にぱつちりとした瞳、そして洋裝のよく似合ふすらりとした姿、はき〴〵とした齒切れの好い言葉つき、實に感じの好いモダーン・ガールだ。

僕は何となく嬉しかつた。

『何處へ行きませう?』

『さうね。何處でも好いけど、あんまり會社の人達の行かない家へ行きませうよ。私、あなただけにお話しし度い事があるのよ。』

彼女はくす〳〵と笑つた。

僕はすつかり好い氣持になつてしまつて、彼女と肩を並べてビルディングを出た。

『ねえ澤田さん。私、あなたに折入つてお願ひがあるんだけど、聞いて下さる?』

『さア、どんな事です。僕に出來る事だつたら。』

『無論出來る事ですわ。あんたを男と見込んでお願ひするのよ。ねえ、助けて頂戴。』

『いつたい、どうしたと云ふんです?』

『笑つちやいやよ。』

と云ひ乍ら、彼女は又くす〳〵と笑ひ出した。

『笑つちやいやよつて、笑つてゐるのは僕ぢやない、君獨りで笑つてるんぢやないか。』

『だつて、をかしいんですもの。』

『何がそんなにをかしいんです?』

『ぢや、思ひ切つて云つちやふわ。あんた、私の旦那樣になつて下さらない?』

『えツ……?』

あんまり唐突な彼女の言葉に、僕はすつかりめんくらつてしまつた。すると彼女は、相變らずくす〳〵笑ひ乍ら僕を制する。

『いゝえ、本式に旦那樣になつて頂戴つて云ふんぢやないのよ。いくら私が圖々しくたつて、こんな事本氣で云ひ出せやしないわ。』

『さうだらうと思つた。あんまり出しぬけだつたので、僕、すつかりめんくらつてしまつた。又何かいたづらでも考へ出したんだな。』

『いゝえ、いたづらぢやないのよ。本氣なのよ。』

本氣でないと云つたかと思ふと、今度は又本氣だと云ふ。僕は何だかわけがわからなくなつて、ぽかんとしてしまつた。

『始めつからお話しするわね。さうしないとどうも話が混線しちやつていけないから。』

と彼女は急に眞顔になつて、事の次第を語り出した。

『實はね、澤田さん。二三日うちに私の伯母が田舍から上京して來るのよ。伯母と云つても、私の死んだお父さんの先妻の妹なんだから、血統は繼がつてゐないんですけど。その伯母さん、私、大嫌ひな奴なの。少しばかり小金を持つてるのを鼻にかけて、私を自分の息子のお嫁さんにしようと思つてるらしいのよ。ところがその息子と云ふのは、少し足りない田舍つぺぢやないの。誰がそんな奴のお嫁さんなんかになるもんですか。私、今迄にも再三それとなく斷わつてゐるんですけど、まだあきらめ切れないのね。で、とう〳〵我慢がしきれなくなつて、私を直接に說きつけに來るらしいのよ。それで、私、色々考へてみたんだけど、私がもういつの間にか結婚してしまつてゐる事にするのが、一番斷わり好いと思ふの。あんた、すみませんけど、伯母が來てゐる間だけで好いから、假りに私の旦那樣を氣取つて下さらないこと?』

『そ……そいつはむづかしいなア。』

『むづかしかないわよ。あんただつて何時かはお嫁さんをお貰ひになるでしよ。その時の稽古のつもりなら、何でもないぢやないの、大丈夫よ。私の方でうまく奧さん氣取つてあげるから、あんたはたゞ、うん〳〵とか、おいこらお前とか云つて、すましてゐりや好いぢやないの。ね、ね、私を助けて頂戴よ。』

『さうですねえ。しかし……』

僕は當惑して頭を搔いた。だが、考へてみると、決して惡い氣持ではない。たとへ假りにもせよ、美しい宮井孃を相手にして、夫婦氣取りができると云ふ事は、僕にとつて得難き光榮だ。

『ねえ、好いでせう。澤田さん。私、田舍者の伯母に、こんな立派な旦那樣を持つてるんですよつてところを、見せつけてやりたいのよ。ねえ、お願ひするわ。』

彼女は訴へるが如く、甘えるが如く、僕の横顔を覗き込んだ。

『さうですね。ひとつやつてみませうか。』

僕は幸福な情景を頭の中に浮べ乍ら、とう〳〵さう云つてしまつた。

『まア嬉しい。私、助かつたわ。』

と彼女はいきなり、僕の右腕を力一杯握りしめた。

2

僕等は晝の食事を攝り乍ら、彼女の伯母さんを瞞着する手段に就いて協議した。

その日は土曜日だつた。伯母さんはその翌日、日曜の朝の八時に東京驛に着く事になつてゐた。

『あんた、明日の朝寢坊をして遲刻するといけないから、今夜から私の家へ來て下さらない？ 私、今代々木の植木屋の離座敷を借りてるのよ。六疊と四疊半と二間で、私はその六疊の方だけ借りてるんですけど、好いあんばいに四疊半の方も今空いてるから、二間とも使へるのよ。』

と彼女は云ふ。

『さうですか。さうしても好いですね。』

と僕は胸を躍らせ乍ら答へた。

『あなたは奥さんがあるわけぢやないんだから、一晩や二晩位お泊りになつても、別に家庭爭議も起りやしないでしよ。』

『そりやさうです。その點は心配ないです。』

『ぢや伯母さんのゐる間、ずつと泊つていたゞけるわね。私、伯母さんを三越だの銀座だのに引張り廻して、うんと御馳走してやつて、私の旦那樣の豪勢なところを見せてやらうと思つてるのよ。あんたの事をとても偉い人に吹聽しても好いでしよ。』

『偉くされるのには苦情は云はないが、あんまり誇張されちや困るな。』

『大丈夫よ。相手が田舍つぺぢやないの。あんた、あんまり安つぽく頭を下げちやいけないわよ。』

『ぢや大いにふんぞり返つてゐる事にしませう。』

いつか時計が一時になつてゐたので、僕等はあわてゝレストランを出た。

會社に歸つて、再びデスクに向つたが、僕は何だかちつとも仕事が手につかなかつた。長火鉢の向ふ側に宮井孃を坐らせて、牛鍋を仲好くつつつく情景などが、ちら／＼と僕の目の前に浮んで來た。

『君々、澤田君。』

ふと栗本課長に呼びかけられて、僕は思はずはつとした。課長は何處かと卓上電話で話し乍ら、片手で僕を招いてゐるのだ。で、僕はあわてゝ席を立つて、課長のデスクの傍に行つた。

『君、明日の日曜は何も用事はないぢやらうな？』

と課長は送話器の口を片手でふさぎ乍ら問ひかける。

『は、その……僕……』

僕はぎよつとして口ごもつた。

『村松さんからの電話なんぢやよ。今日の夕方の汽車で箱根へ行かうと思ふが、君の都合はどうぢやらうと聞いとる。無論かまはんぢやらうな。』

『は、その……僕……折角ですが、少し風邪の氣味でぞく／＼しますので……』

『何？　風邪？　風邪位、箱根へ行つて溫泉につかれば、すぐ癒つちまふぢやらう。』

『はア、而し、その……何だか、肋膜にでもなるんぢやないかと云ふ豫感がしてならないんです。』

『さうか。それはいかんなア。では斷わるんかね？』

『はア、非常に殘念ですが……』

僕は虎口を脫した思ひで、ほつと胸を撫で下ろした。課長がその事を電話で答へてゐる間に、僕は匆々と自分の席に歸つて來た。

だが、その瞬間から、僕はすつかり憂鬱になつてしまつた。僕の描いてゐた幸福な幻想は、たちまちにして打ち碎かれてしまつたのだつた。

もう六十近い婆さんのくせに、白髮染をして薄化粧をして、狐の襟卷をでか／＼と首に巻きつけて歩く村松未亡人。贔負めに少なく見積つても、十八貫五百匁はあらうと思はれる威容の主の琴子孃。やがては彼女等を『お母樣』と呼び『妻』と呼ばなければならない運命が、嚴然と僕の前途に横たはつてゐるのを意識すると、好い加減うんざりしてしまふのだ。宮井孃とのいきさつが、久し振りに僕の氣持を朗らかにしてくれたのに、たちまちにして現實の悲哀が、胸いつぱいにひろがつて來た。

僕は泣き出し度いやうな氣持で、しよんぼりと物思ひに沈んでしまつた。すると、いつの間にか僕の背後に、課長が歩み寄つてゐた。

『澤田君。君に少し話し度い事があるんぢやが、一寸こつちへ來てくれ給へ。』

とん／＼と肩を叩かれて、僕は力無く椅子から立上つた。課長は先に立つて會議室の中にはいつて行く。で、僕も屠所にひかれる羊の如く、悄然とそのあとに

ついて行つた。

3

『君は近頃、さつぱり村松さんの家に行かんさうぢやね。』

課長は澁い顔をして僕を見守つた。

『はア、その……僕、此の頃、その……日曜毎に教會に行くものですから……』

出鱈目と云ふ奴は、なか／＼すら／＼と出ないものだ。

『教會に？　ふむ。それは好い心懸けぢや。村松さんがクリスチヤンぢやから、君もその方に通ひ出したと云ふわけぢやね。』

『はア、つまり、さう云ふわけで……』

『而し、たまには無理をしてでも訪ねんけりやいかんね。未亡人は心配して居られる。まさか、君、他の婦人と戀愛關係にでも陥ちとるんぢやなからうね？』

『は、ぜ……絶對に、そんな事は……』

『今迄も度々云ふ事ぢやが、結婚は一時の色戀ではない。人生の伴侶を定めるに、顔や姿を問題にするのは愚の骨頂ぢや。第一が心立て、第二が健康ぢや。その點、琴子孃は嚴格なクリスチヤンの令孃ぢやし、健康の方もあの通りぢやから心配はいらん。君は幸福者ぢやぞ。』

『はア、さうですか。』

『兎角近頃の青年は、外見の色香に迷つていかん。君が容姿などと云ふ些細な問題を意に介せず、敢然として琴子孃と婚約した事は、實に近世の美譚ぢやと思つとる。君は村松未亡人から、かなり親切を受けとるんぢやから、その恩を忘れちやいかんぞ。人間恩に感じざれば禽獸にも劣るぢやからな。』

『はア、さうですか。』

『さうぢやとも。僕も故人の村松君には、一方ならぬお世話になつとる。ぢやから君方の仲介の勞もとつたんぢや。今後とも

僕は君の爲に、大いに力になるつもりぢや。幸にして僕は君等の課長の位置にゐるんで、君の當社に於ける優遇方法などに關する鍵を握つとる。で、近々、君を大いに重用する案を私かに練つとるんぢやが、どうぢやね、それを機會に華燭の典を擧げては。』

『はア……』

『君ももう琴子孃の氣持などは、充分理解がついたぢやらう。琴子孃は大分君に參つとるやうぢやぞ。ハツ……』

海豹のやうな髯をゆすぶつて笑ふ課長を見ると、僕はもうたまらなくなつて來た。

『課長さん。僕、ひどく身體がぞく／＼して來ました。今日は早く歸らせて下さい。』

『そりやいかんな。どうも元氣がないやうぢや。早く歸つて休み給へ。今の問題はなるべく早く解決するやうにな。』

『はア……』

僕は未決監から保釋になつたやうな心地で、會議室から逃げ出した。

世の中に凡そ親切程恐ろしいものはない。中學時代に兩親を失つてしまつた僕は、孤兒の淋しさをまぎらせる爲に、親切にしてくれる村松家に屢〻足を向けたものだつた。故人になつた村松金十郎氏は、何でも僕の親父の世話でとん／＼拍子の出世をしたのださうだ。その恩返しの意味で、僕に親切にしてくれるのだと思つてゐたら、豈計らんや、今になつて考へてみると、その頃から賣れ殘りの十八貫五百匁孃のはけ口に、僕をあてはめる下心だつたらしい。

實を云ふと、僕もいけなかつたのだ。妹娘の良子孃が姉と違つてすつきりしてゐるので、僕は少なからず參つてゐた。で、未亡人の世話で今の會社に入ると間もなく、栗本課長に呼びつけられて、

『どうぢや、君、村松さんの令孃と結婚する氣はないかね？』

と問ひかけられた時、僕はてつきりそれを良子孃の事だと早合點してしまつたのだ。

『はア、有難うございます。是非どうか。』

と僕が膝をのり出すと、課長はにやりと笑つて云つた。

『人生の伴侶を定めるに、容姿などは些細な問題ぢやからな。』

僕はその一言にはつとして、

『あの、良子さんの事でせうね？』

と念を押してみると、

『いや、良子孃の方はもうきまつとる。』

と來た。その場合、琴子さんぢや困りますとも云ひ兼ねて、

そのまゝずる〳〵と十八貫五百匁がきまつてしまつたのだつた。何の事はない、うま〳〵と一杯喰はされてしまつたのだ。

4

青春の餘命幾何もない事を自覺した僕は、何だかひどく悲しくなつてしまつたので、會社を飛出ると銀座に廻つて、酒場に跳び込んだ。カクテール・グラスを五六本、テーブルの上に並べると、それでもいくらか陽氣な氣分になつて來た。

さうしてアパートに歸り着いたのは、宵の七時頃だつた。

『澤田さん。今し方御婦人のお客樣がありましたよ。お名前は伺ひませんでしたが、又來ると云つてお歸りになりました。』

と受附の男が聲をかけた。

御婦人のお客樣などは、まだ一度も僕のアパートに現れた事はない。が、來るとすれば琴子孃か宮井孃かどつちかだ。だが、琴子孃の方は、夕方の汽車で箱根へ行つてしまつた筈だから、宮井孃に違ひない。僕が早退けをしたので心配して、わざ〳〵立寄つてくれたのだらうと思ひ乍ら、僕は二階の部屋に歸つて行つた。

遲くも九時頃迄には彼女の家に行く約束になつてゐたので、僕は早速仕度にかゝつた。スーツケースを取り出して、丹前と普段着の和服と、それから田舍者に僕の偉さを證明する材料として、書棚から大英百科辭典を三册ばかりぬき出して、中に詰め込んだ。

時計を見ると、もうそろ〳〵八時に近い。で、スーツケースを下げて部屋を出ようとした途端、コツコツコツ……と扉をノツクする音が傳はつた。

『誰方？』

『あの……私。』

いけない。箱根に行つた筈の琴子孃だ。僕はすつかりめんくらつて、スーツケースをベッドの下に押し込んだ。

『はいつてもよろしうございます？』

『は、ちよ……一寸……』

僕は進退谷まつて、洋服のまゝベッドの中にもぐり込んだ。

『さア、ど……どうぞおはいり下さい。』

扉が開くと、扉口いつぱいに琴子孃の威容がふさがつてゐた。

『お加減は如何？』

と彼女は柄になく金屬性の發音を絞り出し乍ら、僕の枕許に歩み寄つた。

『はア、有難う。た……たいした事はないです。あなたは、箱根へ行かなかつたの？』

僕は如何にも苦しさうに、聲をふるはせ乍ら問ひ返した。

『明日に延しましたの。私、今夜御看病致しますわ。母が都合で徹夜をして、御介抱してあげろと申しましたのよ。』

『いや、それには及びません。すぐに快くなるんですから。』

『あら、洋服のまゝ寝ていらつしやるの？』

『えゝ、その、何ですよ。此處に歸つて來た時には、服を脱ぐのも苦しかつたんです。』

『まア、そんなに……、私、お手傳ひして脫がせてあげますわね。』

『いや、好いですよ。僕自分でやります。』

『あら、隨分赤い顔をしてゐるわね。』

『やつぱり、その……熱のせゐでせう。』

『でも、何だか、お酒臭いぢやありませんか。』

『あゝ、さう〳〵。會社から醫者に廻つて來たんですが、その醫者が親切な男で、卵酒をのませてくれたんです。熱には一番利くさうですね。』

『私、さつき一度來ましたのよ。さうしたらあなたまだ歸つていらつしやらないつて。』

『さうですつてね。その醫者の家で、二時間ばかり寝てゐたんですよ。失禮しました。』

『まア、隨分親切なお醫者樣ねえ。』

僕の脇の下を冷汗がしきりに流れてゐた。琴子孃の追擊はなかなか止みさうにない。

『お着換へになるのに、寝卷を出してあげますわ。何處にございますの？』

『いや、好いです〳〵。よごれてゐますから。僕あとで、自分で着換へますよ。』

『まア、よごれてゐるのでしたら、私、家へ持つて行つて、女中に洗はせますわ。』

『それに及びませんよ。あなたに持つて行つていたゞくなんて、勿體ないです。』

『あら、御遠慮なさるものぢやなくつてよ。』

『あゝ、僕、眠たくなつたです。』

僕はとう／＼悲鳴をあげた。

『おやすみなさいな。私、此處で聖書を讀み乍ら起きてゐますわ。』

『琴子さん。僕、此のまゝぐつすり眠れば、明日の朝はきつとよくなつてゐるんですよ。どうか御心配なくお歸り下さい。あなたに傍で起きてゐられちや、反つて氣がかりで熟睡ができません。あんまり恐縮ですから。』

『でも御病人を一人殘して歸れませんわ。』

彼女は梃子でも動きさうにない。

『いや、全く大丈夫です。馴れてますから平氣なんです。あなたの御親切は嬉しいですが、此のアパートは獨身者ばかりなので、あとがうるさいですよ。どうかお歸り下さい。そしてお母樣にも御心配なさらないやうに、よろしくお傳へ下さい。』

『さうですか。では……』

と彼女はやうやく殘り惜しげにおみこしを上げた。僕はほつとすると、思はずためいきを漏らしてしまつた。

だが、彼女はまだ未練らしく歸り兼ねてゐる。

『ねえ勇造さん。若し明日の朝、すつかりおよろしかつたら箱根へいらつしやる？』

『は、有難う。行かれるやうでしたら、僕の方から朝早くお電話をおかけします。電話がなかつたら、構はずにお先に行つて下さい。』

『さう。ぢや八時頃までに電話を下さいましね。お待ちしてゐますわよ。』

『承知しました。そのつもりでぐつすり眠ります。』

『では何れ明日。どうかお大切に。』

やつとの事で彼女の威容は消え失せた。

彼女の足音が廊下の端に消えるのをたしかめて起き上ると、僕はもうくた／＼に疲れ切つてゐた。もう三十分も頑張られたら、それこそ本當に病氣になつたかも知れない。

5

僕が宮井孃の家に馳けつけたのは、もうかれこれ十時頃だつた。

『まア、どうなすつたの？ あんまり遲いので心配しちまつたわよ。』

と顔いつぱいに明朗な笑ひを浮べて僕を迎へる宮井孃を見て、僕は思はず目を見張つてしまつた。いつもモダーンな洋裝しか見た事のない彼女が、大きな丸髷に結ひこんで、粹な縞のお召を着てゐるのだ。

『どう？ 似合つて？』

と彼女は媚態をつくつて見せる。新らしい鬢附け油の香がぷんと來る。

『素敵だ。やつぱり傳統的な美しさと云ふ奴も好いですねえ。』

僕は思はず嘆聲を漏らしてしまつた。それにつけても琴子孃とは何と云ふ相違だらう。僕は又しても憂鬱にならざるを得なかつた。

炬燵の中にさし向ひになると、彼女は美しい微笑を浮べて僕の顔を覗き込んだ。

『あんた、さつき課長さんに會議室へつれて行かれたわね？』

『えゝ、下らない用事なんですよ。』

『當てゝみませうか？ 縁談でせう？』

『えツ……？ いゝえ。』

僕はどきつとし乍ら、わざと何氣なく否定した。

『嘘々。かくしても駄目よ。課長さんが會議室につれ込むのは、縁談にきまつてるわよ。』

『ど……どうしてそんな事がわかるんです？』

『だつて、もう社内で何人被害者があるかわからないのよ。あの爺さんのは仲人道樂とでも云ふんでせうね。私達の間では高砂屋つて云ふ綽名で通つてる位なのよ。』

『へえ。あいつそんなに仲人が好きなんですかね？』

『好きだの何のつて、もう病膏盲に入つてるわ。私がこの會社に入つてからもう四年になるけれど、その間に何人あの人の手にかゝつてるでせう。しかもそれが、大概賣れ殘りのやうなのを押しつけられるんだからたまらないわ。』

『へえ。さうですか。』

『つい此の間、私達のお仲間の小島さんが會社をやめたでせう。あれも課長があんまりうるさく縁談を迫るんで、とう〳〵たまらなくなつて飛び出しちやつたのよ。何でも顔半分が白なまづになつた男を押しつけたんですつて。で、云ふ事が好いぢ

やないの。一生の伴侶を定めるのに、容貌などは些細な問題なんですつてさ。それだけならば好いけど、最後には、あゝ云ふ男と結婚してやる事は、一種の美譚だと云ふんですつて。つまり、人間は常に犠牲的精神を抱いてゐなけりやいけないんですつてさ。ハツ………笑はせるわね。』

『成程。うまい事を云ひますねえ。』

一々僕の頭にぴん／＼と響いて來る。憂欝は益々深刻の度を深めて行くばかりだ。

『あの課長さん、今年丁度六十なんですつてね。それで、還暦を迎へる迄に五十組の夫婦を纒め上げるのが理想なんですつて。何でもあと五六組でその數になるんで、今はラストヘヴイをかけてるらしいのよ。私なんかも狙はれやしないかと思つてびく／＼ものだわ。あんたも御要心なさい。あんまり近づくと危險だわよ。さう云ふ話になると、とても口がうまいんださうだから。』

『へえ。あきれましたなア。』

僕はまんまと課長の高砂屋道樂のラストヘヴイにかゝつてしまつたのを、はつきりと意識した。つく／＼自分のおめでたさ加減に腹が立つて來た。

そんな話に夜を更かして、僕等が隣同志の座敷に横になつたのは、もう三時近い眞夜中だつた。間もなく隣室から、宮井孃の安らかな寢息が漏れて來た。だが僕は、萬感交々到つて更に睡氣を催さない。口惜しさ情無さに交つて、丸髷姿の宮井孃と、安大福のやうな琴子孃とが、眼先にちら／＼と浮んで來る。

さうしてやうやくとろ／＼と眠入つたのは、もう曙のうすら明りが雨戸の隙間から忍び込む刻限だつた。

6

『さア、伯母さん。どうぞこちらへ……』

と云ふ聲にはつとして眼を醒ますと、もう枕許の障子に明々と陽が照つてゐる。

『あツ、寢過ごしたぞ。』と思つて時計を見ると、もう九時過ぎだつた。

『ねえ伯母さん。私達今、此の先の方に文化住宅を新築中なのよ。その間、こんな狹いところに我慢してゐますの。さう／＼、今すぐに主人を起して御紹介しますわね。』

陽氣にはしやぐ宮井孃の聲と共に、境の襖がさつと開いた。

『あなた。私もう東京驛へお迎へに行つて、伯母樣を御案内して來ましたのよ。さ、お起き遊ばせな。』

いとも甘つたるい聲で呼びかけて、彼女はつか／＼と僕

の枕許に馳け寄つた。僕の心臓は俄然、どき〳〵と波を打ち出した。

『ちよいと、痛快よ。伯母さんぷり〳〵してゐるわ。あんた威張り返つてゐて頂戴ね。』

と彼女は僕の耳許に口を寄せてさゝやく。肌の香がぷんと僕の嗅覺を襲つた。僕は前夜の憂欝も忘れて、思はずくすつと笑ひ乍らうなづいた。すると今度は、

『あなた、丹前が溫まつて居りますわ。』

と彼女は炬燵から丹前を取出して、背中にふわりとかけてくれる。好い氣持になつて溫かい丹前を着ると、緣先の洗面臺の前から、

『お顔を洗ふお湯をおとりしましたわ。』

益ゝ嬉しくなつて顔を洗ふと、ちやんと櫛を持つて待つてゐる。

『私がなでつけてあげますわね。』

奥座敷から伯母さんが、『えへん！』と聞えよがしの咳拂ひを飛ばしたので、僕は宮井孃と顔を見合はせて、ぐつと笑ひをこらへた。

『笑つちやだめよ。よくつて。』

と彼女に背中をつつつかれ乍ら、僕は先に立つて座敷の障子を開けた。と、伯母さんの意地悪さうな視線がぢろりと僕を見る。僕は波立つ心を制して悠然と座についた。

『いやア、これは〳〵……』

『始めまして。和歌子の伯母でございます。』

と伯母さんはあわてゝ蒲團を外づす。

『はア、さうですか。僕は、僕は……』

と云ひかけてさて何と名のつて

よいものか、そのうち合はせがしてなかつたので、僕はすつかりめんくらつてしまつた。すると宮井孃が、

『澤田勇造と申しますの。ねえ伯母さん。好い旦那様でしよ。私、誰にもかくして置いて、突然田舍に歸つてびつくりさせてあげるつもりだつたのよ。』

と云つたかと思ふと、いきなり上半身を僕の膝の上にもたせかけて、僕の顏をのぞき込んだ。

『ねえあなた。もうぢきあなたが重役におなりになつたらば、御一緒に田舍へ行く約束だつたのねえ。』

僕の額に脂汗が湧き上つた。

兎も角も無事に初對面の挨拶がすんで、朝のお膳を圍んだ。何時の間に買つて來たものか、飯茶碗も湯呑みも、二つ揃つた夫婦茶碗が並んでゐる。箸箱を開けると、象牙まがひの夫婦箸が仲好くころげ出す。到れり盡せりの用意には、流石の僕も目を見張つた。會社でタイプライターに向つてゐる時の彼女は何處へ行つたのか、實に素張らしいマダム振りだ。僕は胸の奥がむず／＼するやうな幸福感に、いつかずる／＼と引込まれてゐた。

『ねえあなた。今日は丁度日曜ですから、伯母さんを方々御案内して、うんと御馳走してあげませうよ。』

『うむ。よからう。』

『伯母さん。何處へ行きませうね。明治神宮から二重橋。それ

から日比谷を歩いて銀座に出て、松坂屋、三越、松屋。それから時間があつたら上野から淺草の方へも行つてみませう。お晝御飯は何がよくつて？　洋食はおいやでせう。鰻にしませうか。それとも三越あたりの食堂で、何でもお好きなものをお選びになる？』

『そんなにしていたゞいちやすまないね。』

むつつりとしてゐた伯母さんも、とう／＼煙に卷かれてしまつて、嬉しさうににやりと

笑ひ乍ら、僕の顏色を伺つた。

『いや、そんな事は何でもないです。』

とそこで僕も一寸反り返つて見せる必要があつた。

7

それから間もなく、僕等は伯母さんを案内して東京見物に出かけて行つた。僕と彼女とは常にぴつたりと肩すり寄せて、仲睦じい新婚振りを裝つて歩いた。

明治神宮から二重橋、日比谷から銀座に出る頃には、最初僕にかなり反感を抱いてゐた伯母さんも、すつかりうち解けてしまつて、僕等の行屆いた好意を感謝してゐた。

『私はこんな遊山をするつもりで來たのぢやなかつたのに、すつかり冥途の土産噺ができてしまひましたよ。』

などゝ恐縮がつてゐた。

『うまく行つたわよ。すつかり煙に卷いてしまつたわ。』

と一方から宮井孃がくす／＼笑ひかけた。

その間に挾まつて、僕は相當に苦しい思ひを

したものである。

銀座に出ると、先づ松屋につれて行つて、七階の食堂で晝食をとる事になつた。宮井嬢は遠慮してゐる伯母さんに、一番高價なお定食を御馳走する事にして、僕等は混雜した中をぬけて空席に座を占めた。無論僕と彼女とはぴつたり寄り添つて腰をかけた。

暫く誂へ物を待つてゐると、ふと僕の背後の方で、

『お母様。そんな奥の方へ行つちやだめよッ』

と云ふ聲がした。と同時に、僕等のテーブルの傍をすりぬけようとした一人の女が、踏み止つて振返つた。

『でも、入口の近くには空いたテーブルがないぢやないの。』

と答へる聲に、ふと何氣なく見上げた途端、僕は全身が氷のやうにふるへ上つた。

『あツ……』

狐の襟卷の中から、薄化粧をほどこした皺くちや婆さんの顔がのぞいてゐる。村松駒子未亡人だ。

僕はあわてて顔を伏せた。

『だけどそんな奥へ行つちや、あの人、みつからないといけないわよ。此處で好いぢやありませんか。』

と背後で琴子嬢の金切聲がする。どうやら彼女等は、僕等のすぐ背後のテーブルに割り込んだらしい。今の話の様子では、何處でどうして嗅ぎつけたのか、僕等が此處に來るのを感づいて、張り込みに來た樣にも思はれる。背中に火の倉を負つてゐる思ひで、僕は全く途方にくれてしまつた。

すると、宮井孃がちらつとその方を振り向いて、

『あら、若いくせに何て太つた女でせう。まるで蝦蟇蛙ね。一寸見て御覽なさいよ。』

と僕の耳許にさゝやきかける。

『わかつてますよ。ほ……僕の一寸知つてる女です。みつかると具合が惡いんだがなア。』

どき／＼と高まる胸の鼓動を制し乍ら、僕はさう云つてもぢもぢした。

そこへ誂へ物がやつて來る。伯母さんは押し戴かんばかりにして僕を見た。

『どうもすまんことでございます。あの……何と申し上げましたかね。お婿さんのお名前は？』

『いや、好いです／＼。』

と僕は思はず兩手を擧げて伯母さんを制した。『澤田さん』なんて不遠慮な聲を出されたら、それこそ大變だ。

僕は戰々兢々として鮪鮨をつまんではみたものゝ、砂利を嚙むやうな思ひだつた。彼女等が先に食堂を出てくれゝば好いが、僕等の方が先に出るやうな事になつたら、餘程巧く逃げ出さないとみつかつてしまふ。好いあんばいに伯母さんは、飯の一粒々々まで吟味し乍ら、ぼそり／＼とやつてゐるから、大分時間がかゝりさうだ。だが村松母娘組もどつしりとおみこしを据ゑて、がつちり頑張つて動かない。とう／＼僕等の方がお先にすんでしまつた。

『これから上野と淺草へつれてつてお貰ひ申さにやなりませんな。』

と伯母さんに催促に及ばれて、いよ／＼僕等は席を立つ事になつた。ちらつと横目で敵情を偵察すると、二人は一生懸命に入口の方を見張つてゐる。遠廻りをして彼女等の見張りを遁れるより他はない。で、僕は先に立つて、そつと柱の蔭から迂回した。ふと振返つて見ると、彼女等はまだ僕に氣がついてゐないらしい。僕はほつとして足を早めた。

やうやく食堂をぬけ出して、やれ安心と思つた時、階下から上つて來たエレヴエターが僕等の目の前に客を吐き出した。と、

『あらツ……』

宮井嬢がいきなり奇聲を發して、僕の腕に縋りついた。

『何です。ど……どうしたんです。』

僕もひやつとして前を見ると、栗本課長がつか〳〵と歩み寄つて來るではないか。

『おい君。澤田君。どどど……どうしたんぢや。僕は朝から君を探し廻つとるんぢやぞオ！』

僕はいきなり胸倉を摑まれて、ふるへ上つてしまつた。課長は益々目を怒らせて、

『やツ。宮井。君も一緒なんかツ？ ここここ……こりやどうぢや。けけけ……怪しからん。こら澤田。君は熱を出して寢とる筈ぢやのに、今朝琴子さんが見舞に行くと、貴様が藥ぬけの殼ぢやと云ふんで、病が重つて病院にでも入つたのではなからうかと、どれ程お二人が心配されたか知れん。箱根行を中止して貴様を探してゐられるんぢや。ばば馬鹿な。儂は朝から十二三軒も病院を尋ね廻つとるんぢや。さア來い。村松さん方が來て居られる筈ぢやから、そこへつれて行かにやならん。來給へ。』

課長はぐい〳〵と僕をつれて行かうとする。僕は一生懸命それに抵抗を試みた。すると宮井嬢が、横合ひから課長に喰つてかゝつた。

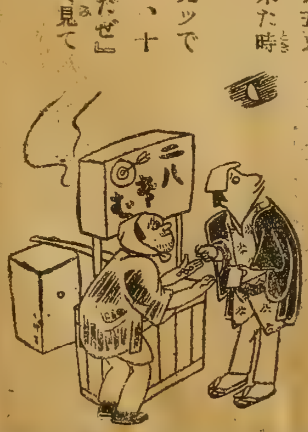
『課長さん。私と澤田さんとは、もうちやんと結婚してしまつ

たんですよ。餘計なおせつかひはよして下さい！』
『な…何？　けけけ……結婚？』
『えゝ、さうです。ねえあなた。』
宮井孃が僕の顏を覗き込んだ。もうどうする事もできない。
『そ……その通りです。』
僕は苦しまぎれの肯定をする。
『ちやんと伯母さんと云ふ證人がありますわよ。ねえ伯母さん。此の方私の旦那樣ねえ？』
と宮井孃は伯母さんを引張り出した。
『さうだとも。お前の立派な旦那樣ですがな。私が立派な證人ですよ。』
と伯母さんは語尾に力をこめて、課長の前に進み出た。課長は鳶に油揚をさらはれたやうに、ぽかんとして僕と宮井孃とを見較べてゐる。そして最後に、やうやく云つた苦しまぎれの一言。
『貴樣達はもう明日から出社に及ばん。』
僕も宮井孃も首を連ねて失職した。だが、その副産物として僕と彼女とは俄然固い固い結束を誓ひ合ふ事になつた。さうして僕と和歌子とは、『貧しい乍らも樂しいわが家』を營んで、今日に及んでゐる。
氣の毒だつたのは琴子孃だ。だがそれも、今では栗本課長の斡旋で、高砂屋道樂の第四十何組目かの實を結び、十八貫五百匁強の偉大なる若夫人となつてゐる。相手に選ばれたのは、僕と一緒に三角商事會社に入つた男で、少しぼんくらだがいてくれだけは堂々たるジエントルマンである。

（終）

二八そば（寸篇落語）

『おい、蕎麥屋さん、馬鹿に美味えなア、第一この器が氣が利いてゐらア、又明日の晩も來るぜ、所でいくらだい』『ヘイ有難う存じます、十六文で』『十六文、安いなア、サア拂ふから手を出しな、いゝかい、一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ』と勘定して來た時に鐘の音がボーン『蕎麥やさん、何時だい』『九ツですよ』『さうか、ほら、十　十一、十二、十三、十四、十五、十六だぜ』と一文得をした、これを傍で見てゐた男。



『巧え事をやりアがるな、俺も一つやつてやらう』と翌晩夜蕎麥を食つて『おい勘定だ』『ヘイ、十六文頂きます』『よし、一二三四五六七八』と來た時ボーン（鐘の音）『何時だい』『四ツでムいます』『さうか、五六七八九十――十六文』遂に四文損をした。

落語喜劇

浮かれ蛸

浮世亭多苦樓

吉岡鳥平畫

時代。江戸の頃。
場所。日本橋の呉服店福徳屋の裏座敷。
人物。福徳屋主人徳右衛門。丁稚鶴吉。同じく龜松。魚屋竹次郎。

舞臺は福徳屋の裏座敷。上手に佛壇が飾つてあり、續く下手は劃りが壁になつて居るが、其眞中所に表座敷へ通ふのれん口が開けてある。屋臺の前づらは奥庭で、其上手よき所に流し元のついた車井戸。上下の見切りは露地塀と露地門。總て裕福な呉服店の裏座敷の景。

幕明くと、丁稚鶴吉、龜松の二人が、庭掃除の竹箒と水撒きのバケツを提げて庭先に話して居る。

鶴吉。ねえ龜どん、凡そこゝのお家ぐらゐ變つたお店はないぜ。旦那を始め家中が芝居氣狂で、寄ると觸ると芝居の眞似だ。お蔭で俺ア飛んだ氣保養をすらア。

龜松。中でも旦那と來たら、普段はあんなに苦つ面だが、遣る段になると斷然凄えぜ。此間も頬つぺたに止つた蚊を叩き落した時の白が斯うだ。（と聲色掛りになり）へ天地の靈たる人間の、生血を吸ひ取る大毒蟲、手並の程を知つたるかッて

んで、ピシヤリと平手で潰したがネ、其後の文句が又大袈裟だ。〽ヤア〳〵家來共、それなる死骸を不淨門より取り捨ていヽだつとよ。

鶴。ウヘツ、蚊の死骸とは大形だな。所でと、そんな御主人を上に戴く我々だ。愈ゝ以て萬事を芝居掛りにやらなくちやお店の軒簾に關はる。そこでさし向き、此竹箒を持つて何ぞする芝居はないかなア。

龜。あるともサ鶴どん、芝居で武家屋敷の幕が開く時には、水撒き奴といつて、きつと尻端折の仲間が掃除してるぢやないか。

鶴。ウンさうだ〳〵。ではそいつを早速やらかさうか。

龜。よからう〳〵。（と咳拂ひして身づくろひ）〽ナンと鶴內。

鶴。（同じく身づくろひして）何ぢや、龜內。

龜。〽扱も下郎奉公は情ない。夏は薄布、

鶴。〽冬はどてらの一貫で、

龜。〽寒さを凌ぐ茶碗酒、

鶴。〽飲めども止らぬ胴顫ひ、

龜。〽辛い勤めも給金故、

鶴。〽兎も角掃除に、

二人。〽かゝらうかア。

二人共鯱こ張つて其邊を掃く。

鶴。〽掃けども〳〵舞ひ立つ埃、ハテ厄介かな何とせん。

龜。〽程よい所で怠惰つて、部屋に歸つて一休み。そんなら鶴內。

鶴。〽同役龜內、

龜。〽俺に隨いて、斯う來いやい。

箒を擔いで並び、ギクシヤクし乍ら露地口に入りかゝる。

德右衛門。（途端にのれん口から顏を出す）やいこれ、お前達は何處へ行くのだ？

鶴。ウワツ、これは旦那ですか。なにネ、お宅の庭には花道がござんせんから、餘儀なく露地へ引込みをやらかしますんで。

德　馬鹿づらめが。一寸眼を離すと直ぐ芝居の眞似をしやがる。お前等二人は一刻も用無しにはして置けぬ。サア鶴

吉はこゝに轉がつてる坊やの玩具箱を片つけろ。それから鶴松は、そのお佛壇のお掃除をしな。

二人。へーい。（と照れ乍ら座敷に戻る）

徳。馬鹿な眞似をする事はならんぞ。（と二人を睨めて引込む）

鶴。ちよツ、肝腎な所へ邪魔が入つた。（と玩具箱を引寄せ）ウワツ大變な玩具だな、でん〳〵太鼓に鬼の面、あツ、これは獨樂の紐だな。こんな紐を持つて何ぞする芝居はないかなア。む、ある〳〵。（と、其紐をのれん口へ抛つてキツと見得）へ八重に縺れしこの捕繩、解くか結ぶか今宵の中、ヤア〳〵此家の禿茶瓶、觀念ひろげて腕廻せツ。

徳。（いきなりのれんから頭を出し）やい〳〵、だ、誰が禿茶瓶だツ。

鶴。ウヘーツ、旦那そこに居たんですか？

徳。馬鹿野郎め、ぶん毆るぞ。（と睨めて又引つ込む）

鶴。イヒヽヽ、鶴どんやられたね。（と言ひ乍ら佛壇から位牌を一つ取出し）アレ、此位牌は妙にピカ〳〵光つて綺麗だが、斯ういふ位牌を持つて何ぞする芝居はないかなア。む、ある〳〵。浪人が宿屋の二階で、位牌を拜んで嘆く所があらア。（とキッとなり）へ貧乏院麥飯居士、ア、此御名を讀むにつけ、思ひぞ浮ぶ亡き父上、何時ぞやギャングが襲つた時、魂消て疝氣が逆上し、其儘伸びて非業の御最期、其砌りよりこの我は、賤しき丁稚に姿を變へ、ひそかにお店へ入込みしが、合點行かざる此家の親爺、いで禿頭をとつ摑まへ、藥罐か茶瓶か本性を、拳固で叩いて顯はしくれん。

徳。（又もによつきり軒簾から覗きこば、）馬鹿ツ、此家の親爺とは誰の事だツ。どうも實に呆れた奴だ。そんな眞似をしてないで、サッサと坊やのお守でもしろ。サア、（と、抱いた赤ん坊を突き出し）これを抱いてしつかりお守をしな。

鶴。へーい。

德。馬鹿な事をすると承知せんぞ。(と又引つ込む)

龜。(子供をあやし乍ら)ちよつ、贅澤な餓鬼だな此チビは。人に抱かせて自分はぐうぐう寝込んでるよ。所でと、こんな子供を抱いて何ぞする芝居はないかなア――む、ある／＼。奴が御主人の和子を懐に抱いて落ち延びて行く。芝居でやつたら大變な泣かせ所だ。あれを一番演つてやらう。〽ア、憂世ぢやなア。いつぞやお家の騒動にて、一家中は散々ばらばら。情なや賤しき下郎の懐を、百萬石の城とも思召し、いとすやすやと御寝なる心根、思へば哀れ痛ましやなア……。

鶴。(此時迄默つて玩具箱の片づけをやつてゐたが、耐らなくなつて起ち上る)龜どん、旨え／＼。それぢやアこれから、その和子を奪ひに來た惡者の役を俺が演るぜ。いゝかい。えツへへん。〽それなる奴、觀念さらせツ。(と、いきなり龜松の背後から打つてかゝる)

龜。合點だ。(と引つ外し)〽ハテ理不盡なり名乗りもあげず、騙し討とは卑怯未練、何處の誰だ、名を名乗れ。

鶴。〽吐くな奴、とこ呼え致さず、ハヤくたばれエ。

討つてかゝれば引つ外し、右に左に絡み合つてる中、トヾ龜松は思はず芝居に氣が入つて、抱いてる赤ん坊を庭へドサリと抛り出す。

赤ん坊。オギヤア／＼／＼。

德。(此泣聲に吃驚して飛び出す)ウワーツ、こ、こりや何をさらすのだ。大事な坊やを、に、庭に抛り投げるとは何事だツ。

龜。(ハツと氣づき)あツ、こりやしまつた。こいつはいけねえ。(慌てて庭へ飛降りて、赤ん坊を抱き上げ)寝んねんよう／＼。

德。くそ、今になつて寝んねんようもあるものか。アリヤ／＼／＼。(と氣づき)龜松、そ、それでは赤ん坊が逆さまぢやないか。

龜。えゝツ(と吃驚し)な、成る程、これは逆樣だ。〽モシ、逆さま(母さま)イのう……。

德。えい、馬鹿者め、この急場にもまだ芝居の眞似をしてやがる。實にどうも困つた奴だ。こいつは、お前等二人を一緒におく事は出來ん。サツサとお店の方へ行つて手傳ひでもしろ。

龜。濟みません旦那、もう／＼こんな眞似は致しませんから、勘辨して下さいまし。

言つてる所へ向ふ花道から、魚屋竹次郎、通稱魚竹が威勢よく飛込んで來る。此男も亦名代の芝居氣狂である。

魚竹。（どかりと盤臺を下して）やつとまかせのどつこいしよ（と直ぐ様聲色口調になり）ヤア〜〜旦つく。息せき飛込む急使の魚竹、何ぞ御用は無きや〜〜ッ。

德。コ、コレ止しとくれ。それでなくても家は役者揃ひで困つてるのだ。外から來たお前に迄芝居をされては遣りきれないよ。然し今日は、何があるんだ？

魚竹。へい、揃ひましたる魚の顔觸れ、先づ座頭が市川海老藏、續いて中村鯛之助、扨又お次ぎが坂東蛸藏。

德。八釜しい。巫山戲なさんな、魚を役者名で呼ぶ馬鹿があるものか。そんなは兎も角、その鯛と蛸を貰はう。蛸は生きてるから酢蛸にしたいが、ハテネ（と考へ）此蛸は妙に色變りの様だが、もし食つて中毒るやうな事はないかい？

魚竹　大丈夫金の脇差、よし又萬一あたつたにしろでゲスな、そん時は急いで黒豆を三粒お上んなさい。忽ちケロリと直つちまふ。蛸の中毒は黒豆で解消しやす。

德。解消？　いやに新しい言葉を使ひなさんな。だが成程、蛸にあたつたら黒豆を食へといふな。ぢやア蛸を貰ふから、あつちの、（と車井戸の方を指さし）流し板の上へ、這ひ出さぬ様に擂鉢をかぶせといて、取敢ず鯛を三枚におろしてお呉れ。

魚竹。おツと合點承知之助、（さらば蛸藏鯛之助、兩人共に白洲へ出ませーい。

德。よ、止しな、縁起でもない。

魚竹。うへゝゝ（笑ひ乍ら生蛸を擂鉢で伏せ、それから井戸の水を汲んで鯛の料理に取り掛る）うへツどうです、この臓物の色の鮮かなことは！　鮮血將に滴るが如し。かういふ生きのいゝ血を持つて、何ぞする芝居はねえかなア。む、ある〜〜。忠臣藏三段目勘平腹切りの場、腹を切つた勘平が、臓腑を摑んで血判する所、あそこはいゝ所だ。（と聲色になり）へいで御兩所、血判確に仕つた。（と勇込んで臓物を摑む拍子に、俎がそつくり返つて顔中魚の血だらけになる）ウワーッ、こゝこいつはいけねえ。ペツ〜〜ペツ。

泡を食つて井戸水で洗はうと、釣瓶に摑まる途端、キリ〜〜〜と車の綱が空廻りして、ポチヤンと釣瓶は井戸へ落ちる。

魚竹。（吃驚して片足を井桁に踏みかけたが、其儘キッと見得を切り）へアアラ、怪しや

なア。

鶴。（透さず後を受け）〽怪しやなア。

魚竹。〽只今これなる古井戸より、水氣盛んに立ち上るは、此身に取つて凶事なるか。

德。（思はず知らず釣込まれ）〽但しは吉事か、何にもせよ。

魚竹。龜。（同時に）〽怪しき此場の、有樣よなア。

德。ば、馬鹿ッ。コレ魚竹、お前がそんな事を遣り出すから、俺迄つい釣込まれちまつたぢやないか。阿呆らしい。アリヤリヤリヤ、見ろ/\。（と舞臺下手を指さし）そんな馬鹿をしてゐる間に、横丁の斑犬が盤臺の中から、鰤を啣へて持つてつたぢやないか。

魚竹。（吃驚し乍ら猶聲色）〽スリヤ、秘藏の鰤の一卷をば……

德。ちよッ、まだやつてやがる。

魚竹。〽ハテサテ無念口惜しや、とはいへ今の曲者め、やはか遠くは逃げ延びまじ、いで是よりは拙者が、後追つかけて、オヽ、さうだッ。（と、バタ/\になり一散に花道を入る）

鶴。アツ/\、あん斑犬め、追つかけると知つて猶と駈出した。こいつはいけない、

こいつは悪い。（と、次第に聲色口調になり）〽ウーム、魚竹一人は心許なし、此鶴吉も片時も早う、後追つかけて、さうぢやさうぢや。（と同じくバタ/\で一散に花道を駈け入る）

德。いやもう、揃ひも揃うて呆れ返つた奴許りぢや。それは扨置き、この儘にしといたんでは蛸も危い。仕方がない、俺が自分で酢蛸にしませう。コレ龜松、お前は此鯛を臺所に持つて行き、その足で直ぐ酢を買つて來なさい。

龜。へーい、畏りました。（急いで鯛を持つて裏に入る）

德。ヤレ/\飛んだ騷ぎをさせやがる。

ぶつ/\言ひ乍ら緣側に腰をかけ、勞れ休めの煙草を一服喫ひ出す。後暫く間。と其中、こはそも如何に、こは如何に、先刻から擂鉢に伏せてあつた蛸が、餘りの芝居騷ぎに自分も浮れ、次第々々に二本の脚で擂鉢を持ち上げ、トド深編笠を脫ぐ樣に、それを頭から外して斜かひに前へ下げ、ギックリ一つ、大見得を切る。

德。（フッと氣づき）?!（と眼を瞠つたまゝ魂消返る）

蛸。キューッ。（と口を尖らして息をつき、扨

續いて、二足三足這ひ始める)

德。(今は耐らず)く、曲者ツ！と起ち上り、ツ、ーッと寄つて蛸の後脚を摑み、トン／＼と二足後へ下ると共に、ギツクリこれも見得をきる。

蛸。……(と踏み耐へたが、ちよツ面倒だと言ふ思ひ入れで、いきなり一本の脚を肱形に曲げ、ウンと一つ、德右衞門の脾腹にアテ身を食はせる)

德。アツ、、、(と、其儘虚空を摑んで悶絶する)

蛸。(大まかに振返つて)へチツ、口程にもない脆い奴めが。(と氣を變へ)さはさり乍ら此場は危し。幸ひ人目のあらざる中、ちつとも早う故里の、千葉の濱邊へ逐電なさん。片時も急がん、さうぢや／＼。

と思ひ入れ宜しく、下座の囃子に合はせて、花道からノツシ／＼と退場する。入れ違ひに酢を買ひに行つた龜松が戻つて來る。

龜。旦那、只今戻りました。(と言ふ中、德右衞門の倒れてゐるのを見つけ)ぷーツ、こ、これは一大事だ。旦那が泡を吹いてござる。もし旦那様(と抱起し)どうしました？　旦那、旦那、旦那やーい。

德。(其呼び聲に我に歸り)おツ、さういふお前は龜松か。

龜。一體旦那、こ、この始末は？

德。へウーム龜松、遲かりしぞツ。

龜。アレツ、今芝居をなすつちやいけません。

德。何は兎もあれ龜松は、早く奧へ行つて、黑豆を三粒持つて來てくれ、早く／＼。

龜。えゝツ、黑豆を持つて來いつて？　さうして旦那、それを貴方はどうなさいます？

德。どうするものか。たつた今俺は蛸にあて(中毒)られたツ。

——幕——

恐ろしい腦溢血

近頃新聞に雜誌に、高血壓といふ言葉が著しく注目を惹き、名士の腦溢血がしきりに報道されてゐる。これは果して何を意味するであらうか。神經病専門の佐多博士が實地診療の體驗から現代人の生活を眺めて、高血壓、腦溢血の豫防法治療法を懇切に說いてゐるのが『神經病時代』です。健康の人も病弱者も是非御一讀下さい。

醫學博士佐多芳久先生著『神經病時代』

定價一圓五十錢送料十四錢　本社發行

—人情講談—

日本一の飯炊

大河内翠山
石井滴水畫

觀音さまのおまゐり

本郷一丁目の呉服屋花屋の娘のおいとは、今年十八の花の盛り、家が呉服屋だけに、言ふがまゝの扮裝をさせてゐる。中にもおいとの大好きなは、黄八丈に黑繻子の襟のかゝつた着物に、黑い縁を取つた、鹿の子絞りの帶をダラリと結んだ下町風、結綿は色の白い顏にしつくりと似合つて、繪から脱け出たやうな派手な姿は、町内の噂の種、往來でおいとの姿を見たほどの者は、立止まつて、見惚れないものはないといふくらゐに美くしい娘でありました。

『傳助どん、傳助どん。』下女のおまつは大きな聲で呼んだ。

傳『ウオーイ……』

まつ『何といふ返事をするんだよ、お嬢さんがお出掛けだよ、お供は私よりお前の方が宜いのだとさ、お前のやうなぼんやりが何所がいゝんだらうね。』

傳『アッハッハ、、、羨ましいか、乃公もお前のやうな尻の大きな女と歩くのは厭だけんど、お嬢様のお供なら、喜こんで行くだ。』

まつ『何だい、馬鹿のくせに、厭に色氣があるよ、早く支度をおしよ。』

傳『別に支度はねえ、乃公はこれで出掛けるだ、それとも白粉でも塗つて行くかね。』

まつ『馬鹿だねえ、お前のやうな顔へ白粉を塗つたらどうなるのさ。』

傳『炭團に雪が積つたやうで風情があるべえ。』

まつ『馬鹿におしでないよ。』

傳『アッハッハ、、、……イヨーお嬢様、いつの間にか來なすつたね。』

いと『お前達が喧嘩をしてゐるのがをかしいので、見てゐたんだよ、オホヽヽヽヽ。』

傳『さうかね、お嬢さんが見てゐると知つたら、もつとからかつてやるだつけ、惜しいことをした。』

まつ『あれだもの、憎らしいツちやありやアしない。』

いと『サア傳助や、おまつにからかつてゐないで、行かうよ。』

傳『ハイ……お嬢さん、今日はいつもより綺麗だね、お婿さんでも定まつたかね。』

いと『アラ厭な傳助……』チラツと上眼づかひに一寸にらんでオホヽヽと笑つた。その可愛らしいこと、美くしいこと、飯炊の傳助さん氣の拔けたやうに見惚れて居ります。

この傳助は三年前に、雪の中に倒れてゐたのを、主人の喜兵衛が助けてそのまゝ下男として使つてゐる男でした。まだ年は二十四、色は淺黒いが身の丈もすぐれてキリヽとした顔だち、飯炊きには勿體ないやうな、堂々たる風采――だが、何を聞いても『知らねえ。』の一點張り、おいとの供をしてゐても、ニヤニヤ笑ひながら歩いてゐる。たゞ人並勝れた力があつて、どんな亂暴者でも、此の傳助に鷲攫みにされたら、小雀のやうにすくんでしまふのが一つの取柄。それだけに花屋の主人も、安心をして妙齢の娘の供に附けて置くのでありました。

傳『お嬢様、何所へ行くだね。』

いと『觀音様へお参詣に行くんだよ。』

傳『あゝさうかね……お嬢樣、來年の春にはお婿さんが來るといふ話しだが本當かね、良いお婿さんが來るやうにと、觀音樣へお願ひ申すのかね、少しばかりのお賽錢ぢやア觀音樣も、ウムといはねえだよ。』

いと『餘計なことをいはないで、默つてお歩きよ。』

傳『アツハツハヽヽヽ。』

仁王門を出たところに、花暖簾を掛けた水茶屋が五六軒列んでゐる。その中の花家といふのが、自分の家と同じ暖簾名だといふのと、その花家に十九になるおさんといふ、婀娜ツぽいお俠な娘がゐる、それが何となくおいとと仲が好いので、いつも參詣の歸りには、此所へ寄つて茶を呑んで行くことにしてゐる。

いと『おさんさん今日は……』

さん『オヤお嬢さん、いらつしやい、今日はお參詣……』

いと『ハア……お參詣をして歸りに寄りますから……』

さん『ハイ、行つていらつしやい――傳助さん御苦勞さま。』

傳『イヨーおさんさん、相變らず綺麗だな、忙がしかつたら乃公が婿に來てやらうかね。』

さん『有難う、もう五十年も經つたらお願ひしますよ。』

傳『アツハツハヽヽヽ。』

おいとは觀音樣のお堂へ來て、お賽錢を上げて、ちよいと拜んで、鳩に豆をやつて、おさんの茶店の前へ來た。

と、そこへ黑羽二重の紋付の着物に白博多の帶、細身の大小を差した、芝居に出る定九郎のやうな五分月代の浪人者が、酒に醉つてゐるものと見えて、ひよろ〳〵しながらやつて來た。

浪『コレ〳〵茶をくれ……』ヂロツとおいとを見て『イヨー美くしいな……コレ〳〵女、茶は止して、酒を持つて來い酒を……』おさんは苦い顏をして、

さん『手前共にはお酒はございませぬ、茶店といふくらゐでございますから、お茶なら差上げます。』

浪『無禮な奴だ――此の美くしい娘は何所の娘だ。』

さん『何所のお方でもいゝぢやございませぬか、私共の大切なお得意のお嬢樣、失禮なことをしてはいけませぬよ。』

浪『何ツ、餘計なことを申すな、此んな美くしい娘の酌で飲んだら酒も旨からう、酒を飲むのだ、なければ買つて來い。』

さん『お生憎さま、お酒は一切お斷わりいたします。』

浪『つんけん〳〵申すな。』

おいとは怖くなつて來たから、ひよいと床几を立つた。

浪『コレ待てツ娘、……』グイと袖を摑んだ。

さん『アレツ、何をするんですよ失禮な……マア傳助さんはど

うしたんだらうね、こんな時に何所かへ行つてしまつてさ……お孃さん、構はず早くおいでなさいよ。』

おいとは青くなつて、袖を振切つて行かうとした。

浪『コレッ、待てといふのに待たぬか。』ひよろ〳〵と寄つて來て、おいとの手を取らうとした。

此の時うしろから、ヌーッと大きな手が出て、浪人者の襟髮をムンズと摑んだ者がある。

浪『コレ、何をする、誰だ、無禮な奴ッ……』

傳『誰でもねえ、飯炊だよ、何だつて乃公の御主人のお孃樣に馬鹿な眞似するだ。』

浪『何ッ、下郎のくせに無禮な奴、ぶッた斬るぞ。』

傳『斬るなら斬つて見ろ、ソレ此の通りだ。』

ズル〳〵ズルと釣し上げて、二三度振り廻した。

浪『コレ放せッ、放せと申すに……』

傳『放してやるが、これからのちも惡戯をすると、斯うしてやるぞ。』

ビユーッ、ビユーッと二度ばかり振つておいて、ひよいとはふつたからたまらない、はずみを食つて浪人者はコロ〳〵コロと、鳩が豆を食べてゐるまん中へ轉げて行つた。

傳助は又來たら撲り飛ばしてやらうと思つて拳骨をこしらへて待構へたが、浪人者はそれッきり向つて來る勇氣もなく、笑つて見てゐる群衆の中へ、こそ〳〵と逃込んでしまつた。おさんもおいともホッとした。

さん『マア傳助さん、お前さん強いねえ……ねえお孃樣……』

おいとは返事もしないで、ウットリと傳助の顏を見てゐた。

傳『アハヽヽヽ、サアお孃さん、歸るべえ。』

いと『おさんさん濟みませぬ、氣を附けて下さいよ。』

茶代を拂つておいとは、氣まり惡さうに、群衆の中を、雷門の方へ歸つて行く。

『美い女だなア。』

『あれが評判の本鄉小町といはれてゐる花屋の娘だ。』

『女も美いが、あの權助は強いなア。』

用のない米の値段を知らない奴は、後からゾロ〳〵尾いて行く。

婿えらみ

此の事があつてから花屋の主人は『娘の美くしさを自慢らしく、派手な扮裝をさしておくから、人の目に着いて、斯ういふ事をされるのだ、自分の娘の可愛さに現を拔かしてゐる内に、娘が疵物になつてしまつたら、取返しが附かない、早く婿を定

めてしまはう。』と、急に焦り出して、婿定めの話しを持出した。今までは降るやうな縁談を、まだ早い〳〵で通して來たのが、縁談を定めるとなると、堰止めた水を切つて落したやうに、ドツと申込者が押寄せて來る。その中で第一の信者は親類に當る湯島一丁目の古着屋近江屋勘兵衛の次男で、秀次郎といふ二十三になる男自慢、親や仲介人がまどろしく、當人が直接に來て、おいとを女房にくれなければ、死んでしまふとまでいつて、熱心に口說き立てゝゐる。併し數多い縁談の中で、此の秀次郎が男ツ振も好し、人間も利巧だし、親も財産があるし、これならばと、親父の喜兵衛は、秀次郎をおいとの婿にしてもと、氣が乘つて來た樣子でした。

『おいとや。』と呼んで喜兵衛は、おいとの部屋へ入つて來た。

いと『アラお父さん、何か御用……』

喜『何か御用ではないよ、お前の縁談、早く定めてしまはないと、うるさくつて〳〵困るよ。』

いと『だつて私……』

喜『又厭だといふのかい、さういつも厭だ〳〵とばかりいつてゐては困るよ――あの近江屋の秀次郎さん、あの人なら宜からうと思ふが、お前はどうだね――實は此の間中から、仲介人の交渉が待切れないで、自身に來て、是非お前を――お前の爲めなら命も要らないといふのだよ、アハヽヽヽ、どうだね。』

厭だとも何ともいはずにおいとは、羞かしさうに袖口をいぢくり廻してゐる。此の時、

『お嬢樣、玉が表へ出て、犬に追駈けられていけねえだ、受取つて下せえ。』といふ傳助の聲がして、障子をサラツと開けた。傳助が、首ツ玉を赤い紐で結んだ、綺麗な三毛の子猫を抱いて立つてゐた。

傳『ヤア旦那樣がお在になつたのかね、それは惡かつたね、知らねえものだから默つて開けて、旦那樣、御免なせえまし……サア玉公、お嬢樣の側へ行けよ。』

猫を放して傳助は、ちよつと會釋をして行かうとした。

いと『あゝ傳助や、ちよつと待つておくれ。』

傳『ハイ……何か用かねお嬢樣。』

いと『少しお前に訊きたいことがあるの――いまお父樣から、私の縁談に就て話しがあつたの。』

傳『ヤアそれはお目出度えことだ。』

いと『お前、あの近江屋さんの秀次郎さんを知つてゐるかえ。』

傳『ハイ、知つて居ります。』

いと『あの方を貰つたらとお父さんは仰しやるの、どうしたら宜からうね。』

傳『アハヽヽヽ私に相談かね、それは困つたね、私が貰ふのでねえ、お嬢さんが貰ふ婿だから、お嬢さんが定めたらようございませう、私のやうな飯炊が彼これ口を出す場合ぢやなかんべ

え――喃、旦那樣……』

喜『さうだとも、おいと、何も傳助にそんなことを訊くことはあるまい。』

いと『ですけれども――あの傳助や、お前どう思ふえ、お前の考へを訊きたいの。』

傳『アハヽヽヽ困つたね、私は遠慮のねえ人間だからね。』

いと『その遠慮のないところを訊きたいの。』

傳『遠慮なくいへば、あんな薄ツぺらな奴は駄目だ、男ツ振を自慢にして、薄化粧などをして、ジヤラ〳〵遊んでゐる奴に、家の爲になる奴はねえ、私が女なら蹴ツ飛してやるだよ。』

噛んで吐出すやうにいつて、スイと向ふへ行つてしまつた。

いと『アレマア傳助……』おいとは可愛らしい眼を睜つて傳助を後を見送つた。

喜『アハヽヽ、遠慮なしにも程がある、ひどいことをいふ奴だ……どうだねおいと、傳助の言ふことなどは氣にすることはない、お前の了簡一つだ、お前さへ宜ければ秀次郎に定めてしまはうと思ふが……』

いと『ハイ、どうでもお父樣の宜いやうに……』

おいとは別に自分の方は戀してゐるの、想つてゐるのといふことでなしに、秀次郎さんなら、色が白くつて、男が好い、あんな綺麗な人なら――といふ、若い娘らしい心持で、別に厭だとも思はなかつた。

喜『それではさう定めて置いて、話を進めよう、秀次郎さんなら、お前と一對のお雛樣みたやうな夫婦が出來上がるだらう、アハヽヽヽ。』

話は進んで、結婚の式は、來年の春として、明日結納の取交せをしようといふことになつて、まだ十月といふのに、花屋にはもう春が來たやうな喜びに滿ちて居ります。

無殘、大火傷

十一月に入つて寒い風が每日吹き續けてゐる。

ある夜の眞夜中頃、花屋の裏口から眞黒な煙が吹き出した、と見る間にパツと燃え上がつた。

『火事だ――、火事だーツ。』といふ聲は折からの靜寂を破つた。忽ち近所の人が駈着けて來て、消止めようとしたが、もう遲かつた。すつかり火の手が廻つて、花屋は四方火に包まれてしまつた。

ヂヤン〳〵、ヂヤン〳〵半鐘はけたゝましく亂打されてゐる。花屋では主人夫婦も、奉公人たちもみな、戶を蹴破つて逃げて來たが、娘のおいとの姿が見えない。

妻『あなた、娘がゐませぬよ。』

喜『あゝさうか、どうしたらう――おいと、おいとやーツ。』

主人は聲を限りに呼んだけれども返事がなかつた。パーツ、パツと煽る火は、其所に立つてゐる人の顔を赤く照してゐる。

喜『あゝおいとはどうしたらう、誰か行つて……あゝ番頭どんお前一つ家へ行つて見て來ておくれ、おいとが見えないよ。』

頭『見て來てくれと仰しやつても、家が燒けてゐるのですから……』

喜『中へ飛込んで見ておくれ。』

番『あの火の中へ飛込んだら死んでしまひます。』

喜『お前は燒死んでも宜いから、娘を見て來て……』

番『冗談言つちやいけませぬ。』

喜『あゝ困つたね――どなたか、娘は逃損なつて、あの火の中にゐるに違ひございませぬ、娘を助けて來てくれませぬかね、あゝおいとはどうしたらう。』

夫婦は狂人のやうになつて居ります。

そこへ傳助が、おいとを背負つて、火の中をくゞるやうにして遁れて來た。

傳『ヤア旦那樣か。』

喜『おゝ傳助か、おいとが見えないよ、おいとが――』

傳『お孃樣は私が助けて來ただ、背中にゐるのがお孃樣だ。』

喜『エ、ツ……おゝツ、これがおいとか、ヤア有難い、おいと――おいとや。』

傳『ヤア旦那樣、お孃樣は、大火傷をしてゐなさるから、手を附けちやアいけねえ――第一こんな所に立つてゐても仕樣がねえ、何所かへ逃げなきやならねえ、近江屋さんへ逃げて行くべえ。』

喜『あゝさうだつた、氣が附かなかつた。』

主人夫婦は、傳助の左右に、奉公人も附添つて湯島一丁目の近江屋勘兵衛の家へ引揚げた。

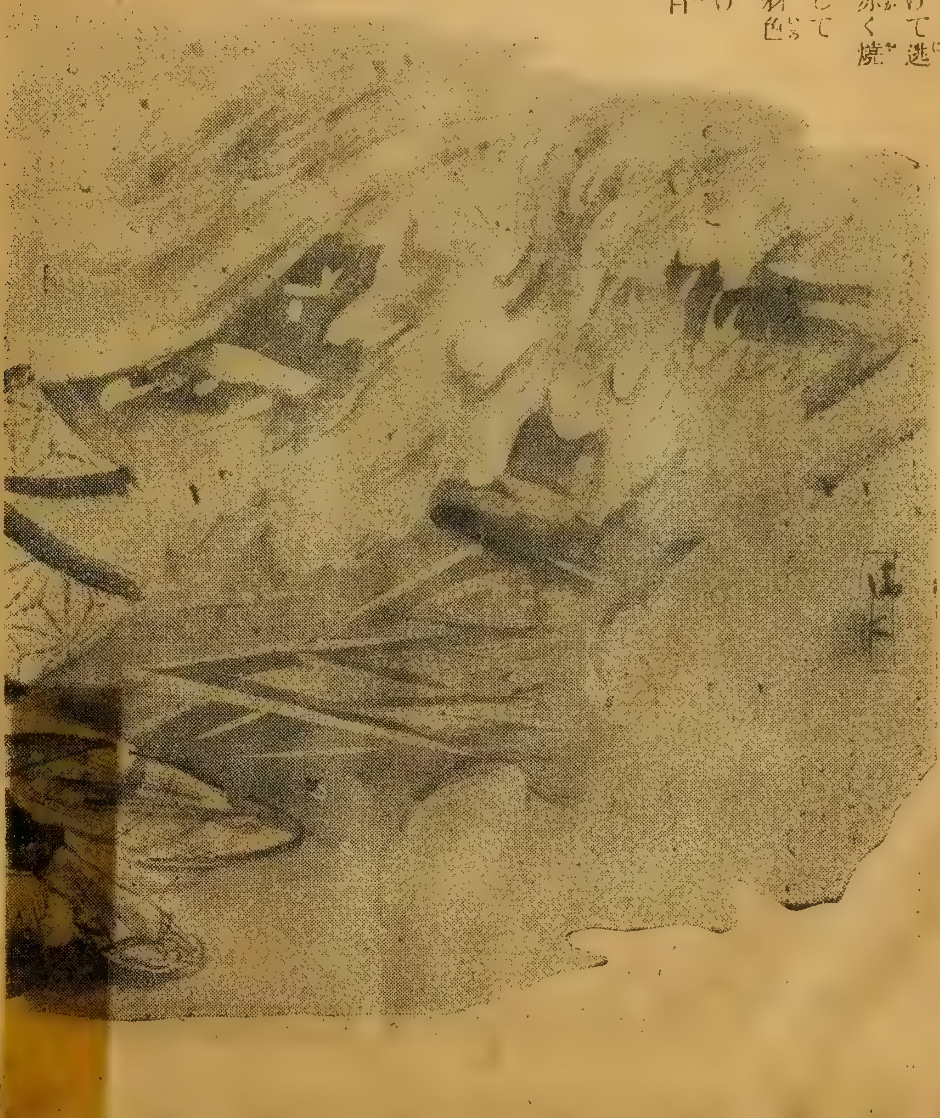
この火事は風のあつた割に燃擴がりもせず、近所の家を十三四軒燒いて消えたが、花屋の下女の疎忽から自火を出したといふことが分つた。店の呉服物は勿論、家財道具、土藏にあつた金箱まで、何一つとして持出す暇もなく灰に化してしまつた。以前に變る本當の無一物になつて、あはれ全盛を謳はれた花屋も、一家を擧げて近江屋の厄介になることになりました。

禮の拳骨

喜兵衛夫婦は、財産を失つたことよりは、一層の悲しみは娘の大火傷であつた。燒け落ちた梁の下になつて、既に燒け死なうとしてゐるところへ、飯炊の傳助が、濡莚をかぶつて飛込ん

で來て、夢中で背負つて火の中をくゞり拔けて逃げて來たのでありました。傳助の髮の毛も赤く燒けたゞれて、顏や手足に五六ケ所の火傷をしてゐるが、おいとは一層ひどかつた、烏の濡羽色のやうだといはれた漆黑の髮の毛も赤く燒け縮れ、美くしい顏も半面は燒け爛れて、二目と見られない傷で、僅かに蟲の息。近江屋でも格別の間柄だけに、醫者を招んだり、行屆いた世話もしてくれた。秀次郎も來春は自分の女房になる女のことですから、おいとの側に附ききりで、いろ／＼と世話をしてゐた。

處が醫者が下手なのか、傷が大きい爲めか、少しも火傷は癒らなかつた。以前の美くしさに變る、醜くしい顏を見る度に、秀次郎の態度は段々冷淡になつて來た。秀次郎ばかりではない、數萬の財產があつたればこそ、近江屋でも緣組を希望したのであつたが、其の財產も烏有に歸して、今は無一物、



おまけに娘は不具になるし、と思ふと一日々々と花家一家に對する扱ひが目に見えて冷淡になつて來ました。

ある日主人の喜兵衞は、奥へ行つて近江屋の主人と話をしてゐたと思ふと、眞青な顔をして、一間へ戻つて來た。妻のおぬひは、

『あなた、どんなお話しでございました。』

喜『出て行つてくれといふのだ——何日まで際限なく大勢世話をすることは出來ないから、大抵にして出て行つてくれといふのだ、火事が出ない前は隨分金を用立てたこともあるし、娘と縁組が纏つて、結納を取交せようといふまで話しが運んだのだから、どうかなるまで世話をしてくれても宜いと思ふが、それは此方の勝手、世話をする人の身になれば、大勢食潰しがゐては困るのだらう、何處かへ行きませう。』

ぬひ『でもあなた、娘は斯うしてひどい火傷で寢て居りますし、もう少し癒つたらどうでせう。』

喜『ナニ、明日にも今日にも出て行つて貰ひたいといふのだ。』

ぬひ『マア何といふひどい人達なんだらう。』

夫婦は口惜さうに齒をかんでゐる。

いと『阿母さん、昨日秀次郎さんが、もうお前のやうな化物とは夫婦になれない、破談にするから斷念めてくれろツて……』

ぬひ『えツ、化物だツて……マア可哀さうに、何といふ不人情な男だらう……』

喜『針の莚にゐるやうなものだ、こんな所にゐれば、おいとの傷も惡くなるとも快くならない、サア行きませう――傳助や、今聞く通りだ、行かうよ。』

後ろ向になつて話を聞いてゐた傳助は、ヌーツと立上がつた。

傳『旦那樣、ちよつと待つて貰ひてえ、ちよつと秀次郎に禮をして來るだから……』

喜『あんな不人情な奴に禮などをしないでも……』

傳『ナーニさうでねえ、禮をしねえと心持ちが惡い。』

拳を握つて、堂々と足を踏み鳴して、奥の方へ行つた、その樣子が只事でないので、喜兵衛は後から尾いて來て見ると、秀次郎は奥の座敷の緣側で、目白に餌をやつてゐた。傳助がその側へ飛鳥のやうに近寄つたかと思ふと、ポカーリ……物をもいはず秀次郎の横ツ面を力一ぱい毆り付けた。

秀『アーツ……傳助、何をするツ。』

傳『アツハツハヽヽヽ痛かつたか、コレツ秀次郎、よく聞けよ、まだ火事の出ねえ前は、ベタ〳〵した風をして、花屋へ毎日のやうに來やがつて、お孃さんのためなら命は要らねえの、夫婦になることが出來なければ、死ぬのといつて泣いたくせに、お孃樣があんな風になつたら、化物だなどといやアがつて、よくもそんな不人情なことをしやアがつた、今旦那樣もお孃さんも、皆んな出て行くだ、汝みたやうな奴には、默つて出て行つては勿體ねえから、禮をして行くだ、覺えて置けツ、もう一つ禮だツ。』ポカーリ……。

傳『これはお孃樣から、宜しくといふ禮だ。』ポカーリツ――。

一際力一ぱい毆り付けた。秀次郎は庭へ轉げ落ちて、聲も立て得ず、頭を押へて居ります。

傳『アツハツハヽヽヽ、こたへたか――サア近江屋の主人も禮をしてやるから、此所へ出て來い、遠慮しねえが宜い。』といひながら蠑螺のやうな拳骨を振廻してゐる。

禮をされては大變だから、誰一人そこへ出て來る者はない。

おそろしいことをすると思つたが喜兵衛夫婦は、溜飲が一度に下がるやうな心地がした。

傳『サア旦那、これで禮が濟んだ、行くべえ。』

悲惨な親子は、傳助に勵まされて近江屋を出ました。おいとは傳助の背に負ぶはれて――。

下谷山崎町（今の萬年町）の九尺二間の棟割長屋、見るもいぶせき茅屋は、花屋親子が、昨日に變る住居でありました、今は世話をした奉公人も、誰一人訪ねて來る者もない。

喜『傳助や、おちぶれて、袖に涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らるゝといふが、本當に人の心といふものは、さうしたものか、情けないものだなア。』

傳『ナーニ旦那樣、貴下の爲ならば、どんな事でもしますといふのは、どうかなつてゐる時の話しだ、落目になれば、世間からも、人からも捨てられものだと思へば腹は立たねえ、アッハッハヽヽヽ――併し心配することはございませぬ、私が働いて、お嬢さんの傷も癒し、食ふに困るやうなことはしねえから、安心をしてゐなさるが宜い。』

斯うなつても傳助には、少しも悲觀してゐる様子はない、いつも明るい顔をしてゐる。

『ドレ働いて來ようか。』

その翌日から傳助は、何所へか行つて、稼いで來ると見えて、晩には幾らかの錢を持つて歸つて來る、さうしてきッと内服薬と傷の薬とを買つて來ておいとに勸めてゐる。

斯うして毎日暮してゐる内に、傳助の親切が、身に沁み〴〵とこたへて來る、それに夫婦に取つて、嬉しいのは、おいとの傷が段々と癒つて、元の美くしさに復つて行くことでありました。

喜『傳助や、本當にお前のお蔭だ、この恩は忘れないよ。』

傳『アハヽヽヽ、あたりめえだよ、私は三年前に、雪の中に倒れて死んでしまふところを、旦那様に助けられたのだ、その恩返しができるかと思ふと、嬉しくつてならねえ。』といつておいとの顔を見て、

傳『お嬢さん、今日は少しは快いかね。』

いと『あゝ大變快いの、傷の痛みが大變快くなつたよ。』

傳『さうかね、ひどい目に逢つたなア、けれども早く癒つて、又、觀音様へお參詣に行きてえものだな、アッハッハヽヽ。』

いと『アラ、あんなことをいつて……』

おいとはニッコリと、傳助の顔を見上げた。この時ほどおいとには傳助が神々しく見えたことはなかつた。

十一月も過ぎて、十二月の中旬となつた。

喜『喃、傳助や、お前に相談があるのだが……』

傳『何でございます。』

喜『お前、娘の婿になつてやつて呉れまいか。』

傳『アッハッハ、、、、少しお嬢さんの身體が快くなつて來て、心配がなくなつたと思つて、そんな冗談をいふものでねえ、私みたやうなむくつけた男が、お嬢さんの婿なんて……』

喜『イヤ〳〵さうでない、これはと思つた秀次郎は、お前のいふ通り薄ッぺらな不人情者、長い間世話をした奉公人は歸つて來ず、私達の頼りにするのはお前ばかり、本當のことをいふと、娘も……笑つちやいけないよ、店のあつた時分から、お前を頼母しく思つてゐたのだとさ。』

いと『アレお父さん、そんなことを……』お糸は耳まで眞紅にしてゐる。

喜『宜いぢやアないか、本當のことなんだから……けれども馬鹿だ〳〵と人がいふし、お前もボンヤリしてゐたから、馬鹿でなかつたら一緒になりたいと、時々お前のことを想つてゐたのだとさ、惚れてゐたんだね――處が今度の火事で、お前に命を助けられ、其の上今日までのお前の親切、沁み〴〵と娘も感じたらしい、そしてあんな親切な人なら、命も要らないと、アッハ、、、、。どうだらうね、娘と夫婦になつてやつては下さるまいか、けれども娘はあの通りの火傷、昔の美くしい姿がないから……』

傳『ちよつと待つて下さい……』傳助は遮ぎつた。

傳『旦那樣、今言つたことは冗談ではあるまいね。』

喜『誰が冗談をいふものか、喃、おいと……』

おいとは床の上に起上がつて羞かしさうにもぢ〳〵してゐる。

傳『お嬢さま、今旦那樣が仰しやつたのは本當かね。』

いと『ハイ、私のやうな者でも……』

傳『さうかね、お嬢さんのことだから嘘ではあるまい、ようがす、何にもいはず、承知しました。』

喜『えッ、承知してくれたかい――あゝ有難う〳〵――おいとや喜こび、傳助が承知してくれたよ。』

いと『ハイ……』おいとは羞かしいやうな嬉しいやうな樣子で袖口をつまんでゐる。

傳『けれども今が今といふ譯には往きませぬ、その内に機會を見て目出度く事を定めるといふことにして……』

喜『あゝ尤もだ、さう話が定まつてゐれば、私達も安心だから……あゝ有難い、私は生れてこんな嬉しいことはないよ。』夫婦は手を取合はんばかりにして喜こんでゐる。

と、それから二三日して、傳助は出たまゝ夜遲くなつても歸

つて來なかつた。何か用があつて、何所かへ泊つたのだらうと思つてゐたが、翌日になつても、其の翌日になつても歸つて來ない。

『あゝそれぢやア、あゝはいつたものゝ、矢ツ張娘の顔があんなになつたので、嫌つて逃げてしまつたのだらう、口では立派なことをいつても、矢ツ張傳助も同じやうな考へだつたのか、情けないものだ——おいとや、傳助は逃げてしまつたよ。』

いと『……』

おいとの身を思ふにつけ、稼人が居なくなつた悲哀とに、夫婦はがツかりしてゐる、おいとは身を揉んで泣いてゐます。

日本一の婿

ある日のこと、喜兵衛の住居の表に、油單をかけた釣臺が下りた。先に立つたのは五十四五になる立派な武士、後に仲間二人。

山崎町のやうな貧民窟に取つては、掃溜へ鶴が下りたやうなものですから、忽ち聞傳へて近所の者がゾロ〳〵集つて來て『嫁入だ〳〵。』と騒いでゐる。

『御免——花屋喜兵衛殿のお宅は此方でござるか。』

障子を開けて喜兵衛が顏を出した。

喜『ハイ、花屋喜兵衛は手前にございまするが、貴下樣は……』武士の顔を怪訝さうに見てゐる。

『少々御主人に御目にかゝり、御話し申上げたい儀がござつて罷り越しました。』

喜『どういふ御用でございますか、兎に角むさくるしい所でお羞かしく存じますが、どうかお上がり遊ばして下さいまし。』

『御免……』武士は上へ上がつて四邊を見廻してゐる、綺麗な家だと思つたのでせう。その眼をおいとに移した。おいとは氣まり惡さうに床の上に起上がつて、輕く會釋をした。

『さて御主人でござるか、初めて御意を得ます、手前は神田橋外、お國は三州岡崎、本多中務太夫樣家來長谷川庄太夫と申す者……』

喜『ハイ……』

庄『若主人の申附けにより使として罷り越しました、御當家に長い間お世話になつた飯炊傳助儀は、眞本多家の御次男傳之丞樣にございます。』

喜『ひえーツ……』喜兵衛夫婦はあまりの意外に、反返るばかりに驚いた。おいとも眼を圓くしてゐる。

庄『三年以前、傳之丞樣には無斷御家出を遊ばされました、その仔細は色々混入つた事情がござつて、御家の御名譽のため申

上げ兼ねまするが、名も傳助と變へて、諸方を流浪して歩く內、雪の降る日、御當家御主人のお救ひをうけ、それ以來御當家に飯炊奉公、白痴のやうな風をしてをられたとのこと。――』といつて庄太夫は一息吐いた。

庄『然るに本多家御當主には御病氣重らせ、御臨終に一目傳之丞樣に會ひたいとの仰せ、吾々家臣共心痛をいたして、諸所方々尋ねる內、十日ほど以前、圖らず若殿に御目にかゝり、そのまゝお屋敷へ御案內申上げましたが、其爲に大殿御臨終にも間に合ひ、大殿には御安心になつて御病死、就ては御總領は御早世、傳之丞樣當然御家督に相成るのでございまするが、御妾腹の故を以て、傳之丞樣には、御家督をお嫌ひ遊ばし…… 尤もそ

れが御家出の原因であらせられるが、何と申上げても御承引なく、御親戚御協議の上、弟君が御家督に立つことに御決定遊ばされました。就ては傳之丞様仰せられるには、御當家のお娘御と夫婦になるお約束を遊ばされた由、これ〳〵の所に居るから、命の恩人、自分は飽までお娘御と夫婦になり、花屋の家を守立てる覺悟である。其儘戻らぬので、定めて心配をいたしてをるであらう、其方まゐつて其の由を傳へ、結納の取交せをいたしてまゐれとの仰せ、手前改めて御役目仰せ附けられ、結納の品數々持參いたして罷り越した、どうか目出度くお納めを願ひたうございます……コレ〳〵持參の品々、これへ……』

『ハーツ……』仲間達は人足と共に

數々の品を、住居の內へ運び込んだ。もう花屋夫婦もおいとも、意表の出來事に言葉も出ず、狐につまゝれたやうな顏をして呆氣に取られてゐる。

庄『就ては本多家は弟君に讓られた以上は、自分は花屋の婿となつて、商人になる心得ゆゑ、其の旨も親御に傳へ、尙ほ醫師は御典醫半井通仙院殿を差向けますれば、お娘御の傷の療養十分に遊ばされ、來春十五日、改めて婿入いたす。その上にて向後のことを萬々御相談申上げる。それまでの支度料として金千兩、本日持參いたしてございます。何卒御受取り下さるやう……』といつて庄太夫は恭しく白木の臺の上にのせた千兩箱を差出した。

馬鹿だといはれた飯炊が、お大名の次男、それでさへ思ひ設けぬことであるのに、自分達のために五萬石の本多家の家督を弟君に讓つて、こんな吹けば飛ぶやうな家へ養子に來てくれて支度の金も千兩――全く聞く每に夢ではあるまいかと、夫婦は只涙に咽んで禮をいふばかりであつた。言ひつけられただけの事を傳へて庄太夫は、祝辭を述べていそ〳〵と出て行つた。

喜『おいと……』いと『お父さん。』喜『おぬひ。』ぬひ『あなた』

喜『あゝ夢ぢやないかの……』

いと『お父さん、矢ツ張私の見込んだ傳助さんは……』

喜『あゝおいと、何にもいふな、お前の眼は高かつた、何といふ見上げた心立のお方だらう、五萬石の御家督を捨てゝ、こんな家へ來て下さるなんて、――おいと、お前は日本一の婿君を取つて、本當に仕合せ者……』

いと『お父さん、私は本當に嬉しくつて〳〵……』そこにあつた傳助の垢染みた絆天を取つて、犇と兩手で抱きしめた。

喜『アハヽヽヽ。』ぬひ『オホヽヽヽ。』

その翌月の十五日、傳之丞の傳助は、大勢の家來に送られてこの山崎町の貧乏長屋へ堂々と行列も美くしく婿入をした

以前の姿は何所へやら、威風四邊を拂ふ風采の傳助、おいとも今は半井通仙院の療治が効を奏して、髮の毛も延び、傷も癒り、以前に變らぬ美くしい姿となつてゐました。

傳『お父さん、お母さん。』喜『おゝッ傳助……ではない若殿樣。』傳『おいとさん。』

いと『あなたッ……』親子四人は犇と手を取合つた。

婚禮の式、高砂や此の浦船に帆を揚げて――仲人の謳ふ聲は狹い長屋中に手に取るやうにひゞいた。

それから間もなく本鄕に立派な吳服の店を開きましたが、その暖簾の名も大名花屋。永年大繁昌をいたしましたといふ『日本一の飯炊』と題する講談、これを以つて讀切といたします。

現代文壇を飾る
菊池寛先生の二大傑作

文壇切つての大家菊池寛先生傑作中の傑作『心の日月』と『仇討新八景』とは、氏近來の代表的力作で、現文壇に於ての現代小説と時代小説との兩大關と稱されてゐます。眞にこれ程一般讀者の喝采を博した小説は珍らしいと、各方面にセンセーションを捲き起して居ります。

『心の日月』は先生が『余の近作中第一位に置くべき會心の作』と誇負するもので、正に現代小説中の壓卷です。世にも稀れた美貌の處女が强ひられた結婚を嫌つて家出をし、心の愛人を慕うて、はる〴〵岡山から上京しはしたが、一寸した行き違ひからその愛人に相會ふ機會を失ひ、愛着と不安に驅られ乍らも、虛僞と欺瞞と黄金と愛慾の渦巻く大東京の中心に迷ひ込み、或は近代文化の象徴ともいふべき銀座裏のカフヱーに、或は丸ビルの女事務員に、また或る時にはデパートの賣子として、生活のために苦鬪を續け乍ら、迫り來る誘惑や襲ひかゝる迫害に絶えず脅かされつゝも、なほ且つ氣高くその汚れなき節操を死守するヒロイン麗子の悲壯なる姿は何人も涙なしには讀めない一巻の人生紅涙史です。

心の日月の麗子に扮した入江たか子

敵討[illegible]崎伸太郎に扮した嵐寛壽郎

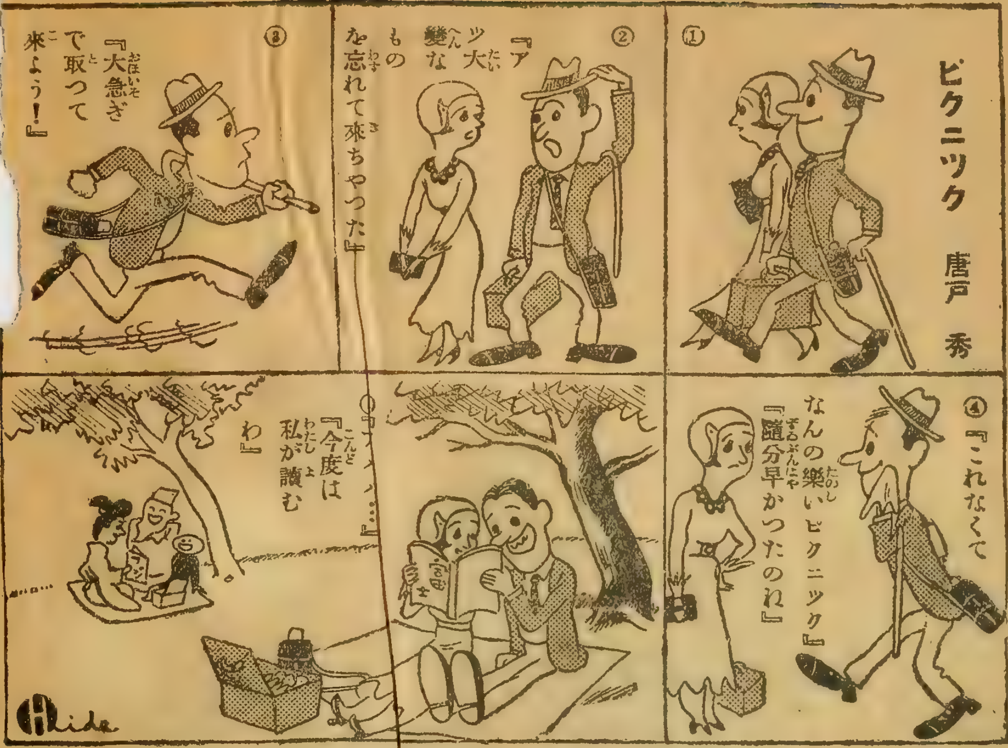
しかし絶望と恐怖と困惑と憂苦に悶え惱み焦躁しつゝ人の世の日蔭をさまよふた彼女にも、時には微笑ましい日があつた。爲めに彼女の心はあるときは太陽の如くまたあるときは月と冴ゆるのです。その心の明暗、心の晴曇を描寫する神技は、讀者をして驚嘆せしめずには措きません。苟も今日を語り東京を知らんとする者は何人も一讀すべき名著です。

『仇討新八景』は既に定評のある先生得意の史材小説です。日本武士道の華と謳はれてゐる仇討の種々相を描いて、討つ者討たるゝ者の言分に犀利な筆を揮ひ、單なる從來の仇討物とは異つた一歩進んだ心の姿を浮出させて、犇々と胸に迫り、感激嗟嘆せしめずには措かない。さきに一世を驚嘆せしめた『恩讐の彼方に』以後沈默十餘年の文壇絶讚の優秀篇です。

描くところの八篇、父子の仇討・主從の仇討、兄弟の仇討、姉妹の仇討・俠士あり、浪人あり、美男あり、美女あり、下郎あり遊俠あり、義と俠と、忠と孝と、戀と憎と、八景何れも腕鳴り胸躍く大場面を展開、眞に一粒選りの代表的仇討の白眉篇として劇に映畫に到る處熱狂的歡迎を受けてゐます。

『心の日月』定價一圓五十錢送料十二錢『仇討新八景』定價一圓二十錢送料十錢、何れも本社より發行、大賣行大好評!

9-1248



御注文の仕方

○本社發行の書籍雜誌は、お近くの書店でお求め下さい。若し品切で御手に入らぬ時、又は近くに書店のない方は、直接本社へ御注文下さい。

○本社への御注文は前金に限ります。

○御送金は振替貯金が一番安全で且送金代が安くすみます。振替貯金の用紙は郵便局にあります。その使ひ方も局でよく敎へてくれます。

○郵便爲替や郵便切手代用でも結構ですが、郵便切手代用の時は必ず一割增に願ひます。

○爲替や切手を封入した郵便物は、ぜひ書留郵便に願ひます。

○代金引替と集金郵便は一切扱ひません。

○御注文書には必ず雜誌なら雜誌名と何月號からといふ事をハッキリお書き下さい。

○御住所と御名前とはぜひ、楷書で願ひます。

○御注文は大日本雄辯會講談社營業部宛に願ひます。振替口座は東京三九三〇番です。

○代理部への御注文は大日本雄辯會講談社代理部宛に願ひます。代理部の振替口座は東京六六二九番です。

○本誌へ廣告掲載御希望の方は大日本雄辯會講談社廣告部宛御照會下されば、詳細御報知御相談に應じます。

定價表

（本號定價五十錢 送料三錢五厘）

	國內及滿洲支那（送料共）	諸外國（送料共）
一冊	金五拾參錢五厘	金七拾錢
三ケ月	金壹圓五拾錢	金貳圓壹錢
六ケ月	金貳圓九拾四錢	金參圓九拾六錢
一ケ年	金五圓七拾六錢	金七圓八拾錢

特大號で定價を上げた場合は、その增した分だけ右表の外に頂きます。

昭和八年四月三日印刷納本
昭和八年五月一日發行　第六卷第五號
毎月一回 一日發行
編輯人 林 公平
發行人 淸水彌一郎
東京市小石川區西古川町二十五番地
印刷所 中外印刷株式會社
發行所 大日本雄辯會講談社
東京市本鄕區駒込坂下町四十八番地
振替口座東京三九三〇番
電話 小石川 （代表）8080 （宿直用）8081 8082 8083 8084 （代表）8085 8086 8087 8088 8089 （代表）8090 8091 8092 8093 8094
元取次店 東京堂・東海堂・北隆館・大東館

禁複製
本誌に掲載せるものは、一切これを無斷にて掲載し、又は單行本に上梓し、或は脚色・上演・映畫・撮影その他複製行爲を爲す事を禁ず。

春は梅毒が一番猛威を振ひます

梅毒に惱む方々へ

キ、メで評判のベルツ丸を紹介す

神經衰弱にでも罹つた様に氣分勝れず、絶えず頭痛や頭重に苦しめられ、記憶力や思考力が減退して、一寸の仕事にも直ぐ疲れて永續きせず、時々ニキビの様な吹出物が出來て人知れず惱んで居る方々の多くは一度梅毒に侵されて治療はしたが全治せぬ方か、或は親の梅毒がそつくりそのまゝ子孫に遺傳した遺傳梅毒の方々であります。

從つて前述の様な症状をそのまゝに放つて置くと次第に病勢が惡化し、咽喉がたゞれたり、聲が嗄れたり、毛髪が抜けて薄くなつたり、胃腸を初め、心臓、肝臓、腎臓、眼、腦、脊髄等凡ゆる方面を侵され、遂に動脈硬化症の直接原因となつて腦溢血を起したり、呂律が廻らなくなつたり、歩行がよいよいになつたりして、往々精神性痴呆症となつて狂ひ死にする方も少なくありません。

梅毒の恐ろしいのは、これだけに止まらず何の罪もない子孫にまで其の害毒を及ぼし注意せぬと一家眷族悉くがこの病の爲めに惱まされ見るも悲惨な一生を終らねばなりません。

これ程恐ろしい梅毒も治療の方法さへよければ割合に治療し易いのですが何故多くの方々が梅毒の爲めに長年惱んで居るかと申しますと、初期に治し切らなかつた方や遺傳梅毒の方の梅毒菌スピロヘータは今迄の治療法に對し強い抵抗力が出來て居る爲め、同じ療法を繰返しても効果が薄いからであります。

この點で少しの心配もなく、全身驅梅法として申し分ないのは内服藥ベルツ丸であります。内服藥ベルツ丸は梅毒の治療に一番大切な血液と淋巴液を淨化し何の副作用も伴はないで恐ろしい毒素を大小便と共に體外へ排泄する珍らしい藥でありますから、長年惱んで居る梅毒、體毒、冷え毒、しつ毒、腦梅毒、遺傳梅毒、潜伏梅毒、梅毒性リウマチス、ニキビ吹出物等凡て梅毒性疾患に惱む方は腦や脊髄を侵されぬ内一刻も早くベルツ丸の服用をおすゝめ致します。

尚ベルツ丸服用後と雖も血液檢査をなさいます様切におすゝめ致します。

藥價は二十日分三圓、三十五日分五圓、七十五日分十圓、百六十日分二十圓、三百六十日分三十圓、送料内地十五錢、鮮臺四十七錢、代金引換の方は切手三十錢封入して東京市本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六一九番)へ御申込み下さい。

發賣元 東京市日本橋區蛎殻町三ノ四〇番地

鈴木日本製藥社

電話浪花百五・百六番
振替東京百五番

ニキビの様な吹出物にも御注意

FUJI
Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansha, Tokio, Japan.

大正五年九月五日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）昭和八年四月

(MADE IN JAPAN)

Date Due 9-12 4 8

JUN 1 -	AUG 2 9	NOV 2 5	
JUN 6 -	SEP - 4		
JUN 1 0	SEP - 7		
JUN 1 5	SEP 1 1		
JUN 2 0	SEP 1 3		
JUN 2 6	SEP 1 6		
JUN 2 8	SEP 1 8		
JUL - 3	SEP 2 5		
JUL - 8	SEP 3 0		
JUL 1 2	OCT - 5		
JUL 1 7	OCT 1 0		
JUL 2 2	OCT 1 6		
JUL 2 7	OCT 2 1		
JUL 3	OCT 2 4		
AUG 5	OCT 2 8		
AUG 9	OCT 3 1		
AUG 1 2	NOV - 7		
AUG 1 7	NOV 1 3		
AUG 2	NOV 2 0		

9-12
9-/24
SEP -
SEP 1
SEP 1 3
SEP 1
SEP
SEP
SEP 3
OCT -
OCT 1
OCT 1 6